レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

⑩

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

No. 10
1971. 10. 16
大月書店

レーニン10巻選集
第一〇巻（第一〇回配本）について

石田精一

この第一〇巻には、一九二〇年六月から一九二三年三月の最後の口述論文まで、三五篇のレーニンの著作、論文、演説、決議草案、手紙などがおさめられています。

この時期は、ソヴェト権力が干渉軍と白衛軍を撃破し、社会主義建設にうつった時期です。

当時のロシアは、経済的に発達がおくれていたうえ、帝国主義戦争と内戦、外国の軍事干渉のために極度に荒廃していました。ロシアの社会主義建設は、このような条件のもとで、しかも帝国主義諸国の包囲のなかですすめなければなりませんでした。ロシア共産党は、レーニンの指導のもとに、新経済政策（ネップ）という創造的な政策を実行して、社会主義建設を成功のうちにすすめました。

そして、社会主義建設の前進のなかで、一九二二年一二月には、ソヴェト国内に住む諸民族の団結により、ソヴェト社会主義共和国連邦が創設されました。

このような新しい情勢と困難な課題に直面して、ロシア共産党内には、レーニンの路線に反対する分派が生まれ、これらを克服して党の統一をまもることが、この時期の重要な課題になりました。

国際的には、第一次世界大戦直後の革命的高まりはしだいに退潮しましたが、植民地・従属国の民族解放闘争はひきつづき高まり、また資本主義世界は一九二〇年に経済恐慌におそわれ、各国で階級闘争が激化し、帝国主義諸国間の矛盾がつよまりました。

この時期のレーニンの著作は、こうした情勢を反映しています。

この巻の三五篇を大きく分けると、共産主義インタナショナルの活動にかんするもの、教育・文化・科学にかんするもの、労働組合の問題をめぐるトロツキー、ブハーリンなどの反対派の批判、新経済政策にかんするもの、一九二二年一二月以後の党文書と口述論文の五種類になります。

このうち、共産主義インタナショナル（コミンテルン）の活動にかんするものが数ではいちばん多く、一九二〇年の第二回大会から一九二二年の第四回大会までの期間にわたり一八篇にのぼっています。

一九一九年三月にひらかれた共産主義インタナショナルの第一回大会は、レーニンもいっているように、全世

界のプロレタリアートにむかって共産主義の基本的な思想をしめし、闘争を呼びかけた宣伝家の大会でした。

それ以後、一九二〇年七―八月の第二回大会までのあいだに、ヨーロッパとアメリカのすべての先進諸国に共産党あるいは共産主義グループが生まれました。

第二回大会では、共産主義インタナショナルの組織原則を明確にし、その任務と路線をきめることが課題になりました。それには、この大会の直前に書かれたレーニンの著作『共産主義内の「左翼主義」小児病』(一〇巻選集、第九巻、二五六ページ以下)が重要な役割を果たしました。

この大会でレーニンは、**『国際情勢と共産主義インタナショナルの基本的任務についての報告』**をおこない、第一次世界大戦と十月社会主義大革命後の国際政治・経済情勢の特徴を明らかにしました。

そのなかでレーニンは、この戦争の結果、従来の植民地・半植民地のほかに、ドイツのような先進国もふくめて、敗戦国の国民が、ヴェルサイユ条約によって、植民地的な従属状態におとしいれられたと同時に、どの戦勝国の内部でもいっそう鋭い矛盾が起こり、労働者はたえがたい状態におちいり、すべての資本主義的矛盾が前代未聞のはげしいものになったことについてくわしくのべています。

そして、このような情勢のなかでの革命的諸党の任務についてのべ、日和見主義とのたたかいの重要性と、反議会主義の形であらわれている「左翼主義」の潮流の誤りをただすことの必要を指摘しています。

この大会では、レーニンの執筆した原案にもとづき、二一条からなる**『共産主義インタナショナルへの加入条件』**が採択されました。

これは、新しい型の党の組織原則、共産主義インタナショナルの綱領的課題と戦術原則を明らかにし、改良主義と「中央派」の政策と完全に絶縁することを各国の共産党に義務づけています。

この共産主義インタナショナルへの加入条件は、各国で新しい型の党をつくり、強化していくための基礎になりました。

この大会ではまた、レーニンの書いた**『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案』**にもとづきテーゼが採択されましたが、この「小委員会の報告」もレーニンがおこないました。

そのなかでレーニンは、「われわれのテーゼのもっとも重要な、基本的な思想は……被抑圧民族と抑圧民族とを区別することである」といっています。これは、現在も、各国の革命の路線をきめるうえでの重要な原則とされているものです。

そして、「地主とブルジョアジーを打倒するための共同の革命的闘争のために、あらゆる民族、あらゆる国のプロレタリアートと勤労大衆をたがいに接近させることを、民族問題と植民地問題にかんするコミンテルンの主

眼点としなければならない」とのべ、すべての民族の同権の承認と、植民地・従属国の民族解放運動にたいする積極的な援助を各国の共産党に義務づけ、また、後進国における革命の課題についてのべています。

この大会では、やはりレーニンの原案にもとづく、『**農業問題についてのテーゼ**』が採択されました。これは、共産党に指導される工業プロレタリアートと勤労農民の同盟によってのみ、勤労農民を資本と地主制度の圧制から解放できるという立場にたち、資本主義国における農民を、農業プロレタリアート、半プロレタリア、小農、中農、大農の五つの階層に区分して、それぞれの性格を明らかにし、社会主義革命の勝利をめざす闘争の時期と、労働者階級が権力をにぎったあとの時期とにおける、農民の闘争にたいする共産党の方針をしめしています。

これは、帝国主義時代における初の農業綱領であり、農業・農民問題にたずさわる人びとにとって、現在も必須の貴重な歴史的文献になっています。

このほかレーニンは、この大会で、『**議会主義についての演説**』と『**イギリス労働党への加入についての演説**』をおこないました。

議会主義についての演説は、なお多くの大衆が、自分たちの利益が議会で代表されているものと信じている条件のもとで、選挙をボイコットし、議会闘争への参加に反対した「左翼主義」の誤りがこの大会でもあらわれたのにたいして、これを批判したものです。

この巻にのっている『**オーストリアの共産主義者への手紙**』は、オーストリア共産党が国会選挙のボイコットを決定したことに関連してレーニンが書いたもので、やはりこのような「左翼主義」の誤りを批判したものです。

『**イギリス労働党への加入についての演説**』は、イギリス共産党のイギリス労働党への加入の問題を、「共産党の戦術を原則的に基礎づける」問題としてとりあげています。

そのなかでレーニンは、イギリス労働党がイギリスの労働者階級の多数をその組織に包含している特殊性に留意するとともに、イギリス労働党を徹頭徹尾、ブルジョア政党であると規定しながら、その党内で労働党指導部の裏切りを公然と暴露できる条件があるかぎり、同党に加入しないことは誤りだとし、また共産主義者が労働党指導部を批判したために除名されるなら、そのことによってイギリスの労働者大衆を教育することができるとのべ、改良主義政党に加入する場合の原則的立場を明らかにしています。

共産主義インタナショナルの第二回大会から一年後に第三回大会がひらかれました。

第一回大会から第三回大会までの二年間に国際情勢に大きな変化がありました。

この二年間に各国共産党の組織的な力は大きく発展しましたが、広範な大衆の革命的な高揚はよわまり、他方、大ブルジョアジーは戦後の混乱から立ちなおりました。大

衆が一撃でその要求をかちとることができた時代は去りました。資本の攻勢がつよまり、新たな戦争の危険が起こってきました。

第三回大会では、こういう新しい情勢に合わせて、共産主義インタナショナルの戦術をたてることが中心の議題になりました。

この大会に、レーニンを団長とするロシア共産党代表団が提出した共産主義インタナショナルの戦術テーゼ草案は、きたるべき闘争への準備として、労働者階級の多数者の獲得、とくに労働組合内での多数者の獲得と労働者大衆の統一戦線を重視し、また公開状を出す戦術を高く評価したものでした。

これにたいして、「左翼主義」の連中は、「受動性から能動性への移行」などという左翼的空文句で攻勢的闘争の理論を展開し、労働者階級の多数者の獲得や公開状の戦術に反対しました。

レーニンの『**共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説**』は、ロシア共産党代表団の提出した戦術テーゼ原案を支持し、このような「左翼主義」を批判したものです。

またレーニンは、この大会の議題であった『**ロシア共産党の戦術についての報告**』をおこない、ソ連をめぐる国際情勢の特徴を明らかにしながら、農民の獲得と労働者階級の権力を強化するためにロシア共産党がとった戦術、また戦時共産主義から新経済政策への歴史的転換についてのべました。

大会は、ロシア共産党の政策と戦術を全員一致で承認し、ソヴェトの社会主義革命を支持するよう世界の労働者階級に呼びかけました。

さらに翌一九二二年一一－一二月に、共産主義インタナショナルの第四回大会がひらかれました。この大会には、同年七月に創立された日本共産党の代表がはじめて出席しました。

この大会では、共産主義インタナショナルの綱領の作成が主要な議題になっており、いくつかの草案が提出されていました。

ロシア共産党代表団のブハーリンは個人の名前で草案を提出しましたが、かれは過渡的あるいは部分的要求について理論的基礎づけをおこなうことに反対しました。この問題についてロシア共産党代表団ビューロー会議がひらかれ、レーニンの提案にもとづき、『**共産主義インタナショナルの綱領の問題にかんするコミンテルン第四回大会の決議案**』が作成されました。

それは、すべての綱領草案を研究し、綱領を仕上げること、過渡的または部分的要求の理論的基礎づけを綱領のなかでおこなうことなどを執行委員会に委託したものです。

第四回大会では、『**ロシア革命の五ヵ年と世界革命の展望**』というレーニンの報告がおこなわれました。そのなかでレーニンは、新経済政策がどのような意義をもち、

どのような結果をもたらしたかについて簡潔にのべました。

共産主義インタナショナルの活動にかんするものとして、この巻には、「第三インタナショナル（コミンテルン）と第二および第二半インタナショナルとの会議について」のレーニンの四つの手紙と『われわれは高い代価を払いすぎた』がおさめられています。これらは、統一戦線戦術についてのレーニンの見解を具体的にしめす重要なものです。

前にのべたように、一九二一年のコミンテルン第三回大会で、労働者大衆の統一戦線結成の重要性が強調されましたが、一九二二年二—三月にひらかれたコミンテルン執行委員会拡大総会は、労働者大衆の統一戦線を発展させるための三つのインタナショナルの会議について討議しました。ここに収録されているレーニンの四つの手紙は、病気のためにこの総会に出席できなかったレーニンが書き送ったものです。

それらのなかで、政治的意見の根本的な相違にもかかわらず、労働者の利益にとって身ぢかな実際問題について行動の統一が可能なこと、議論の多い問題はしばらくあとまわしにして、最も議論の余地のない問題をとりあげることなど、統一戦線にたいする基本的立場がしめされています。

『われわれは高い代価を払いすぎた』は、この三つのインタナショナルの会議に第三インタナショナルの代表として出席したブハーリン、ラデックなどが、重要な問題で第二および第二半インタナショナルの指導者たちに譲歩したことに関連して書かれたものです。

レーニンはこのなかで、この譲歩は「革命的プロレタリアートが反動的ブルジョアジーにあたえた政治的譲歩」であり、これとひきかえにかれらの側からなに一つ譲歩をかちとらなかったことは誤りであると指摘し、このことから教訓をくみとる必要をのべながら、それでも、このことから統一戦線戦術が誤りだという結論を引きだすことは正しくないといっています。これまで第三インタナショナルが近づくことができなかった第二および第二半インタナショナルの指導下の労働者に近づくためにどんな譲歩をすることも拒否して、そういう機会を失うことの誤りにくらべれば、ラデックやブハーリンなどの誤りは大きなものでない、とレーニンはいっています。第二および第二半インタナショナルの指導者たちがブルジョアジーの老練な代表であることを知っている労働者はまだほんの少数なのだから、共産主義者は狭い殻に閉じこもらず、多少の犠牲をはらってもこれらの労働者に近づき、その多数者を獲得することが重要だからです。

そしてレーニンは、第二および第二半インタナショナルの代表は、統一戦線によって、改良主義的戦術が正しく、革命的戦術が誤っていることを労働者に納得させたがっているが、われわれに統一戦線が必要なのはその反対のことを労働者に納得させたいからだといい、明白な

改良主義者との統一戦線にも積極的に努力しています。

教育、文化、科学にかんするものとしては、『青年同盟の任務』、『戦闘的唯物論の意義について』その他があります。

『青年同盟の任務』は、ロシア青年共産同盟第三回全ロシア大会でのレーニンの演説で、はじめ『プラウダ』に連載され、のちにパンフレットとして出版されましたが、二〇万部がたちまち売り切れ、青年たちはタイプライターで複製したり、手書きで写したりして読んだといわれます。その後もいろいろな出版社から、『なにをいかにまなぶべきか』、『青年へのイリイチの遺訓』などの表題をつけてこのパンフレットが出版され、外国語にも翻訳されて、ソ連だけでなく広く世界の青年のあいだで読まれています。

レーニンは、共産主義を建設するには、古い社会がわれわれにのこした知識や組織や施設の総和から、また古い社会がのこした人力と資材のたくわえをもちいて建設するほかなく、古い資本主義社会を改造し、共産主義社会をつくる新しい青年の学習も、古い社会がわれわれにのこした材料から出発しなければならないのであるから、どうしても青年の学習、組織、教育を、共産主義建設にふさわしいように根本的に改造しなければならない、といっています。

そしてレーニンは、共産主義をまなぶとはどういうことなのか、どのようにまなばなければならないかという問題を出し、マルクスの学説、プロレタリア文化の問題、諸事実の批判的吸収の重要性、共産主義的道徳の問題、その基準になるプロレタリアートの階級闘争の問題、小所有者的心理、習慣とのたたかいなどについてのべ、さいごに、具体的なわかりやすい例をひきながら青年共産同盟の任務についてのべています。

『プロレタリア文化について』は、一九二〇年一〇月の第一回全ロシア・プロレトクリト大会に関連して書かれたものです。

プロレトクリト（プロレタリア文化啓蒙団体同盟）は十月革命直前に結成された組織で、その指導部にはもとの「フペリョード派」とボグダーノフ哲学の支持者たちがおり、かれらは、ソヴェト権力、共産党、労働組合からのプロレトクリトの活動の独立性を主張し、「純粋」のプロレタリア文化創造をおこなうというボグダーノフ的計画を実行しようとしました。このような反マルクス主義的な傾向は、客観的にはプロレトクリトを共産党とソヴェト国家に対置させることになります。

レーニンはこうした傾向を見てとり、プロレトクリトが党とソヴェト国家に実際に従属することを要求し、この大会の共産党員代議員会議にたいし、この問題についての組織的決議を大会でおこなうように提案しました。このレーニンの原案は全員一致で採択されました。

しかし、大会のあとプロレトクリトの若干の指導者たちは、共産党中央委員会が芸術創造の分野における活動

家の自主性をおさえようとしているかのようにいい、この問題を次の党大会に訴えることを表明しました。それでこの問題はロシア共産党中央委員会総会に出され、総会は同年一一月一〇日、レーニンの草案にもとづいて、プロレトクリトの科学的啓蒙と政治教育の分野での活動は教育人民委員部および県国民教育部の活動と融合するが、芸術（音楽、演劇、造形芸術、文学）の分野での活動は今後も自治的なものであり、教育人民委員部諸機関の指導的役割は、ブルジョア的偏向との闘争のためのみに維持される、という根本思想をいっそう明確にしめした決議を採択しました。

『県および郡国民教育部政治教育委員全ロシア会議での演説』でレーニンは、ブルジョア社会における教育の「非政治性」あるいは「無政治性」という偽善を暴露し、軍事的方法におとらず、思想的方法、教育によるブルジョアジーとのたたかいの重要性を強調しています。そして、労働者に奉仕している数十万の教育者軍を教育し、かれらに党の思想をうえつけ、かれらが労働者大衆を自分のほうにひきつけ、それに共産主義の精神をふきこむようにすることの重要性を説き、このような教育者軍をどのようにして教育するかについてのべています。

つぎに、一九二一年三月八日の**『国際労働婦人デー』**は、婦人の解放の問題をとりあげ、ソヴェト革命は婦人の抑圧と不平等の根を断ち切ったが、婦人の真の解放のためには、さらに婦人を、台所仕事や総じて個別的な家庭経済におしつぶされている状態から解放する必要があることを明らかにしています。

『戦闘的唯物論の意義について』は、一九二二年三月の「マルクス主義の旗のもとに」第三号のために執筆したものです。

クルプスカヤの思い出によると、これはコルジンキノ村での短期間の休息の時期に準備されたもので、当時レーニンは、反宗教問題についての多数の著書やパンフレットを読み、また、ドレウスの「キリスト神話」やシンクレアの「宗教の収益性」について、あるいはロシアにおける反宗教宣伝の問題などについて、クルプスカヤと話し合ったということです。

この論文でレーニンは、党外の一貫した唯物論者や現代自然科学の代表者たちと共同して、自然科学の知識をひろめ、それを基礎にして幾千万の人民大衆、とりわけ農民と手工業者のあいだで興味のある適切な実例などで無神論の宣伝をおこない、これらの人びとが宗教的迷信から手を切るのをたすけることが重要であると強調しています。

またレーニンは、「しっかりした哲学的基礎がなければ、どんな自然科学、どんな唯物論も、ブルジョア思想の攻撃とブルジョア的世界観の復活とにたいする闘争をたたかいぬくことができない」といって、自然科学者が弁証法的唯物論者になる必要を説きました。

つぎに、労働組合の方針をめぐる論争ですが、これは、

一九二〇年一一月の第五回全ロシア労働組合会議が、戦時共産主義の時代の労働組合の活動方法を改めて、労働組合内で広く民主主義の原則をつらぬく方針を出したのにたいして、トロツキーがこれに反対し、労働組合のなかで命令と行政的処理の方法をいっそうつよめるように主張したことからはじまったものです。

この問題はロシア共産党中央委員会総会の討議にうつされ、トロツキーをふくむ小委員会がつくられ、問題は中央委員会内で討議し、大衆討議にかけないことがきめられました。

しかしトロツキーは、労働組合運動の活動家と第八回全ロシア・ソヴェト大会代議員との会議でこの問題について演説し、またパンフレットを出版しました。

レーニンは、このような討論は当面のさし迫った経済的任務の解決から全党の注意と力をそらさせると考えて、はじめは討論に反対でしたが、トロツキーが公然と反対派活動をはじめたので、断固たる反対に出ました。

この意見の不一致の本質は、「大衆に近づき、大衆をつかみ、大衆とむすびつく方法の問題について」でした。レーニンの『**労働組合について、現在の情勢について、トロツキーの誤りについて**』は、一九二〇年一二月末におこなった演説であり、『**ふたたび労働組合について、現在の情勢について、トロツキーとブハーリンの誤りについて**』は、さらに党内討論と分派闘争がはげしくなるなかで、一九二一年一月下旬にパンフレットとして出版されたものです。

これらのなかでレーニンは、トロツキーやブハーリンの行動の分派的性格を指摘すると同時に、労働組合は強制の組織でなくて教育の組織であり、社会主義経済建設のなかでの労働組合の主要な機能は、ソヴェト国家の計画作成機関や経済機関に参加し、労働生産性の向上や労働規律の強化のためにたたかうことであることを明らかにしました。また、労働組合の活動は、民主主義の原則を発展させ、組合員を教育し、組合員の積極性を発揮させるにあることを強調しました。こうしたレーニンの正しい方針に背馳するトロツキーの労働組合活動にかんする方針は、ロシアのプロレタリアートの政治支配を破滅にみちびく危険な内容をもっていました。経済的におくれたロシアでは、プロレタリアートは住民大衆の小部分にすぎず、ロシアにおけるプロレタリアートの政治支配は、プロレタリアートと住民大衆の多数をしめる農民との同盟――プロレタリアートと農民のなかで多数をしめる農村プロレタリアートと貧農に依拠する――によって維持されていました。トロツキーの誤った方針はプロレタリアートの分裂を招き、プロレタリアートの分裂は、こうした住民大衆のなかでのプロレタリアートの政治支配を孤立においやり、小ブルジョア的な奔流とむすびついてブルジョア的な政治体制の復活を招くにいたるからです。

レーニンは、ブハーリンの折衷主義の立場が、結局、

トロツキーの主張の擁護であることを指摘し、弁証法的論理学にまでふれてそれを批判しました。

この討論のなかで、ブハーリンの「緩衝派」のほか、アナルコ－サンディカリズム的主張をおこなった「労働者反対派」や、企業管理の中央集権制に反対する「民主主義的中央集権派」などの分派が生まれました。

討論のなかで、党の圧倒的多数はレーニンの主張を支持しました。一九二一年三月のロシア共産党第一〇回大会では、労働組合についての論争に決着をつけることと、党の統一が重要な議題になりました。

この大会でレーニンは、労働組合についての演説のほか、**『党の統一とアナルコ－サンディカリズム的偏向とについての報告』**をおこないました。

レーニンの提案にもとづいて採択された**『党の統一についての決議』**は、党をよわめ、その統一を破壊するすべての分派をただちに解散することを要求し、分派活動をおこなった共産党の中央委員を党から除名する権限を中央委員会にあたえました。

また大会は、レーニンの作成した**『わが党内のサンディカリズム的および無政府主義的偏向とについての決議』**を採択しました。そのなかで、「労働者反対派」の見解は小ブルジョア的・無政府主義的動揺のあらわれであると指摘し、アナルコ－サンディカリズム的思想の宣伝は、ロシア共産党に所属することと相いれないものであると大会がみとめることを明らかにしました。

このロシア共産党第一〇回大会では、また、戦時共産主義から新経済政策に移行することがきめられました。

レーニンは、第一〇回党大会直後から、**『食糧税について』**の執筆にとりかかり、五月はじめにそれをパンフレットとして出版しました。これは、新経済政策を理論的に基礎づけたもので、経済的におくれたロシアで社会主義建設を創造的にすすめていく道をしめした、まことにすばらしい天才的な労作です。

十月社会主義大革命後のロシアでは、干渉と内戦によって国の荒廃が極度に達しており、また平和の回復とともに、農民のあいだでは、戦時共産主義のもとでおこなわれた、余剰の食糧を全部農民からとりあげる食糧割当徴発制にたいする不満がひじょうにたかまっていました。それは、労働者階級と農民の同盟を危険にさらすものでした。

社会主義の建設をすすめるには、なによりもまず農民の状態を改善し、その生産力をたかめるための、即時の、断固たる非常措置が必要でした。なぜなら、労働者の状態を改善するには食糧と燃料が必要であり、それには農民の生産力をたかめることが緊急に必要だったからです。またこれこそが、労働者階級と農民の同盟を強化し、ソヴェト権力を強化する道でした。

農民の生産力をたかめるためには、内戦時代におこなった食糧割当徴発制を廃止することが先決でした。こうして食糧割当徴発制にかえて実行したのが食糧税です。

食糧税は、農民から余剰食糧の全部でなく、その一部だけをとりあげ、のこりは農民の処理にまかせる制度で、農民はのこった食糧を自由に販売できるようになりました。これによって農民の生産に刺激をあたえ、農業生産をたかめることによって農民の生産によって国有工業を復興し、発展させ、ひいてまた農業の社会主義的改造の基礎をつくることをめざしたのです。

しかし、食糧税の実施とともに、当然、商業の自由をみとめることになりました。これは資本主義への後退を意味しました。レーニンは、これを国家資本主義の軌道にみちびくことにより、社会主義へ近づく政策をとりました。

その一つの形態が利権事業です。それは、ソヴェト国家が資本家と契約を結び、国の所有する油田や鉱山や森林などを開発させるものです。これは、ソヴェト国家の統制のもとで資本主義的生産を発展させることであり、国有の大企業の生産力の急速な回復に役立つものでした。国家資本主義は、経済的におくれたロシアで、社会主義へすすむために避けられない媒介的な道だったことが明らかにされています。

『十月革命四周年によせて』と**『現在と社会主義の完全な勝利後とにおける金の意義について』**は、ともに十月革命四周年にあたって書いたもので、新経済政策という回り道の必要にふれています。

一九二二年一二月にレーニンの病気が悪化したあと、覚え書として書いた**『大会への手紙』**は、中央委員会の構成、スターリンとトロツキーの関係などについてのべています。また、**『民族の問題または「自治化」の問題によせて』**は、スターリン、ジェルジンスキー、オルジョニキッゼなどのグルジア問題での誤りに関連して、小民族にたいする「強大」民族の民族主義をきびしく批判したもので、レーニンはこの問題で論文を書く計画だったということです。

レーニンの口述論文**『協同組合について』**は、のちに、一九二四年五月のロシア共産党第一三回大会の「協同組合について」の決議と「農村における活動について」の決議の基礎になったもので、労働者階級の権力のもとでの協同組合の新しい意義と役割についてのべたものとして、重要な意義をもっています。

また、**『量よりも質を』**は、ロシアの文化のおくれと官僚主義、旧慣固守を指摘し、国家機関の改善についてのべており、前にあげた『大会への手紙』の第一部とともに、一九二三年四月のロシア共産党第一二回大会の組織問題についての決議の基礎になったものです。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第10巻

日 本 共 産 党 中 央 委 員 会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から、久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

＊　＊　＊

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』(第四版) および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号 (一) (二)……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』(全八冊) のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は 〔　〕 に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目　次

共産主義インタナショナル第二回大会のためのテーゼ

一　民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案

（共産主義インタナショナル(二)第二回大会のために）

コミンテルン第二回大会のために植民地問題と民族問題について次のテーゼ草案を同志諸君の討議にかけるにあたって、私は、すべての同志諸君、とくにこれらの非常に複雑な問題のいずれかについて具体的な知識をもっている同志諸君に、ごく簡単なかたちで（二、三ページ以内で）、とくに次の項目について、批評なり、修正なり、補足なり、具体的な説明なりをよせてくださるようお願いしたい。

オーストリアの経験
ポーランドのユダヤ人の経験とウクライナの経験
アルザス＝ロレーヌとベルギー
アイルランド
デンマーク＝ドイツ関係。イタリア＝フランス関係と
　イタリア＝スラヴ関係
バルカンの経験
東洋の諸民族
汎イスラム主義(三)との闘争
カフカーズにおける諸関係
バシキール共和国とタタール共和国
キルギジスタン
トゥルケスタン、その経験
アメリカの黒人
植民地
中国―朝鮮―日本

一九二〇年六月五日

エヌ・レーニン

一、ブルジョア民主主義は、その本性そのものからして、民族の平等をもふくめて平等一般の問題を、抽象的あるいは形式的に提起することを特徴としている。およそ人間の

人格は平等であるという口実で、ブルジョア民主主義は、有産者とプロレタリア、搾取者と被搾取者との形式的あるいは法律的な平等を宣言し、こうして被抑圧階級をひどくあざむいている。平等の観念そのものは、商品生産関係の反映であるが、ブルジョアジーはそれを、人間の人格は完全に平等であるという口実で階級の廃止に反対してたたかうための武器に変えている。だが、平等の要求のほんとうの意味は、階級の廃止の要求にほかならない。

二、ブルジョアジーのくびきの打倒をめざすプロレタリアートの闘争の意識的表現者である共産党は、ブルジョア民主主義とたたかいブルジョア民主主義の欺瞞と偽善を暴露するという自分の基本的任務にしたがって、民族問題でも、抽象的な原則、形式的な原則に重点をおくのでなく、次のことを主眼としなければならない。第一には、歴史的＝具体的な情勢、なによりも経済情勢を正確に考慮すること。第二には、被抑圧階級、勤労者、被搾取者の利益と、支配階級の利益を意味する全国民の利益という一般的な概念とをはっきり区別すること。第三には、ブルジョア民主主義的な欺瞞とはちがって、平等の権利をもたない被抑圧・従属民族と、完全な権利をもっている抑圧・搾取民族とを同様に明確に区別すること。このブルジョア民主主義的な欺瞞は、ごく少数の最も富裕な先進資本主義国が世界人口の圧倒的多数を植民地的および金融的に隷属させているという、金融資本と帝国主義の時代に固有な特質をあいまいにしているのである。

三、一九一四―一九一八年の帝国主義戦争は、悪名高い「西欧民主主義」諸国のヴェルサイユ条約が、ドイツのユンカーとカイザーのブレスト・リトフスク条約[三]よりもいっそう残忍かつ卑劣に弱小民族を圧迫していることを実地に示して、全世界のすべての民族と被抑圧階級のまえにブルジョア民主主義的な空文句のいつわりをとくにはっきりとあばきだした。国際連盟と協商国の戦後にとった全政策とは、この真実をさらに明瞭に、またあざやかにあばきだして、先進国のプロレタリアートのあいだでも、植民地・従属国の全勤労大衆のあいだでも、いたるところで革命闘争を強めており、資本主義のもとで諸民族の平和な共存と平等が可能であるように考える、小ブルジョア的な民族主義的幻想の崩壊を速めている。

四、以上に述べた基本的命題から、地主とブルジョアジーを打倒するための共同の革命闘争のために、あらゆる民族、あらゆる国のプロレタリアと勤労大衆をたがいに接近させることが、民族問題と植民地問題にかんするコミンテルンの全政策の重点とならなければならない、という結論がでてくる。なぜなら、このような相互接近だけが資本主

義にたいする勝利を保障するが、この勝利なしには民族的な圧制と権利の不平等をなくすことはできないからである。

五、世界の政治情勢は今やプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を日程にのぼせている。そして、世界政治のすべての事件は、不可避的に一つの中心点のまわりに集中されている。一方ではあらゆる国の先進的労働者のソヴェト運動を、他方では植民地と被抑圧民族の民族解放運動全体を不可避的に自分のまわりに結集しているソヴェト・ロシア共和国にたいする世界ブルジョアジーの闘争、これがその中心点である。これらの植民地や被抑圧民族は、ソヴェト権力が世界帝国主義に勝利する以外には、自分たちの救われる道がないことを、苦い経験をつうじて確信しつつある。

六、したがって、今日では、いろいろな民族の勤労者の相互接近を認めたり宣言したりするだけにとどまってはならず、すべての民族解放運動および植民地解放運動とソヴェト・ロシアとの最も緊密な同盟を実現する政策をとらなければならない。この同盟の形態は、それぞれの国のプロレタリアートのあいだの共産主義運動の発展の度合いや、遅れた国や遅れた民族の労働者農民のブルジョア民主主義的解放運動の発展の度合いにおうじてきめなければならない。

七、連邦制は、いろいろな民族の勤労者の完全な統一への過渡的な形態である。連邦制は、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国と他のソヴェト共和国（以前にはハンガリー、フィンランド、ラトヴィアの各共和国、現在ではアゼルバイジャン、ウクライナの各共和国）との関係においても、またロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の内部で、これまで独自の国家としての存在も自治ももったことのない諸民族（たとえば、一九一九年と一九二〇年に創設されたロシア社会主義連邦ソヴェト共和国内のバシキール自治共和国とタタール自治共和国）との関係においても、適切なものであることが、すでに実践によって明らかにされている。

八、この点でのコミンテルンの任務は、ソヴェト制度とソヴェト運動を基盤として成立するこれらの新しい連邦をいっそう発展させるとともに、それを研究し、経験によって検討することである。連邦制が完全な統一への過渡的な形態であることを認めて、次の諸点を念頭において、ますます緊密な連邦的同盟をめざさなければならない。それは、第一に、軍事的に比較にならないほど強力な全世界の帝国主義列強にとりかこまれたソヴェト諸共和国は、最も緊密に同盟しなければ、自己の存在を守りぬくことができないこと、第二に、これらのソヴェト共和国は緊密な経済的同盟を結ばなければならないこと、そうしなければ、帝国主義によって破壊された生産力を復興し、勤労者の福祉を保

障することは不可能なこと、第三に、すべての民族のプロレタリアートによって共通の計画にしたがって全一体として規制される単一の世界経済の創設にむかう傾向である。この傾向は、すでに資本主義のもとでもまったくはっきりと現われていたが、社会主義のもとでは、無条件にさらに発展をつづけ、完全な完成に達するにちがいない。

九、国家内部の諸関係の分野では、コミンテルンの民族政策は、ブルジョア民主主義者——彼らが公然とブルジョア民主主義者と自称しているか、あるいは第二インタナショナル(三)の社会主義者のように、社会主義者という名称にかくれているかにはかかわりなく——がしているように、たんに形式的に、純然たる宣言として、実際上なんの義務も負わせないような仕方で、諸民族の同権を承認するだけにとどまることはできない。

あらゆる資本主義国家で、その「民主主義的な」憲法にもかかわらず、諸民族の同権や少数民族の権利の保障がたえず侵犯されていることを、共産党は、その宣伝扇動全体をつうじて——議会の演壇からも、また議会外でも——うまずたゆまず暴露しなければならないだけではない。さらに、第一に、ソヴェト制度だけが、まずプロレタリアを、つぎに全勤労大衆を、ブルジョアジーとの闘争に団結させることによって、実際に諸民族の同権をあたえることができるということを、たえず説明する必要があり、第二には、従属民族、あるいは平等の権利をもたない民族のあいだの（たとえば、アイルランドで、アメリカの黒人のあいだで、等々）革命運動や植民地の革命運動に、すべての共産党が直接の援助をあたえる必要がある。

最後にあげた条件はとくに重要であって、これがなければ、従属民族や植民地の抑圧に反対する闘争も、これらの民族や植民地が国家として分離する権利の承認も、第二インタナショナルの諸党のあいだで見られるような、にせの看板に終わってしまう。

一〇、口さきで国際主義を認めながら、実際にはあらゆる宣伝、扇動、実践活動においてそれを小ブルジョア的な民族主義や平和主義にすりかえることは、第二インタナショナルの諸党のあいだだけでなく、このインタナショナルを脱退した諸党のあいだでもごくありふれた現象となっており、いま共産党と自称している諸党のあいだにさえめずらしくない。この病弊との、この最も根ぶかい小ブルジョア的な民族主義的偏見とのたたかいは、プロレタリアートの執権を一国的な執権（すなわち、一国に存在しているだけで、世界政治を規定することのできないもの）から国際的な執権（すなわち、すくなくともいくつかの先進国のプロレタリアートの執権で、世界政治全体

に決定的な影響をおよぼすことのできるもの）に転化させる任務が緊急になればなるほど、ますます重要になってくる。小ブルジョア民族主義は、国際主義とはたんに諸民族の同権を承認することにつきると言明して（このような承認がまったく口さきだけのものだということは別にしても）、民族的利己心をそのまま温存している。ところが、プロレタリア国際主義は、第一に、一国のプロレタリア闘争の利益を世界的な規模でのプロレタリア闘争の利益に従属させることを要求し、第二に、ブルジョアジーにたいして勝利をおさめつつある民族が、国際資本を打倒するために最大の民族的犠牲をはらう能力と覚悟をもつことを要求する。

したがって、すでに完全な資本主義国となっていて、真にプロレタリアートの前衛であるような労働者党をもっている国家では、国際主義の概念および政策の日和見主義的な歪曲や小ブルジョア平和主義的な歪曲とたたかうことが、第一の、最も重要な任務である。

一一、封建的諸関係、あるいは家父長制的および家父長制的＝農民的諸関係が優勢を占めている、遅れた国家や民族の場合には、とくに次のことを念頭におかなければならない。

第一に、すべての共産党は、これらの国のブルジョア民主主義的解放運動を援助しなければならない。最も積極的な援助をあたえる義務をだれよりも第一に負っているのは、後進民族を植民地的あるいは金融的に従属させている国の労働者である。

第二に、後進国で勢力をもっている聖職者、その他の中世的反動分子とたたかわなければならない。

第三に、汎イスラム運動やそれに類する潮流とたたかわなければならない。これらの潮流は、ヨーロッパやアメリカの帝国主義にたいする解放運動に結びつけて、カーン、地主、ムラー（三）、等々の地歩を強化することをめざしているのである。

第四に、地主にたいし、大土地所有にたいし、封建制のあらゆる現われあるいは遺物にたいする後進国の農民運動をとくに支持し、農民運動にできるだけ革命的な性格をあたえるようにつとめ、西欧の共産主義的プロレタリアートと、東洋、植民地、一般に後進国の革命的農民運動とのできるだけ緊密な同盟を実現しなければならない。とくに必要なことは、「勤労者ソヴェト」等々をつくって、資本主義以前の諸関係が支配している国々にソヴェト制度の基本原則を適用するために、全力をつくすことである。

第五に、後進国のブルジョア民主主義的な解放潮流を粉飾して共産主義的なものに見せかけることとは、断固としてたたかわなければならない。共産主義インタナショナル

は、植民地や後進国のブルジョア民主主義的な民族運動を支持しなければならないが、それはもっぱら、すべての後進国で将来のプロレタリア党、名まえだけでない、ほんとうの共産党の諸分子が結集され、彼らの独自の任務、すなわち自民族内部のブルジョア民主主義的運動とたたかうという任務を自覚するように教育されるということを、条件としてである。共産主義インタナショナルは、植民地や後進国のブルジョア民主主義派と一時的な同盟を結ばなければならないが、それと融合してはならず、プロレタリア運動がほんの萌芽的な形態にある場合でも、その自主性を絶対に保持しなければならない。

第六に、帝国主義列強が、政治的に独立した国家をつくるように見せかけて、そのじつ経済、金融、軍事の面で完全に自分に従属した国家をつくるというやり方で不断におこなっている欺瞞を、すべての国の勤労大衆、とくに後進国の最も広範な勤労大衆にうまずたゆまず説明し、暴露しなければならない。今日の国際情勢のもとでは、ソヴェト諸共和国の同盟をつくる以外には、従属民族や弱小民族が救われる道はない。

一二、帝国主義列強が植民地民族や弱小民族を長いあいだ抑圧してきたことは、被抑圧国の勤労大衆の心に、抑圧民族のプロレタリアートをもふくめて抑圧民族一般にたいする敵意ばかりでなく、彼らにたいする不信をも残している。一九一四—一九一九年に抑圧民族のプロレタリアートの公式の指導者の大多数が、「祖国擁護」という社会排外主義的な口実にかくれて、「自国」ブルジョアジーが植民地を抑圧し金融的従属国を略奪する「権利」を擁護して、卑劣にも社会主義を裏切ったことは、このまったく正当な不信を強めずにはおかなかった。他方では、国が遅れていればいるほど、その国では小規模な農業生産、家父長制、田舎根性がそれだけ有力であるが、それらのものは、小ブルジョア的な偏見のうちでも最も根ぶかい偏見、すなわち民族的利己心と民族的偏狭を、とくに強め、根づよいものとせずにはおかない。こういう偏見は、先進国の帝国主義と資本主義がなくなり、後進国の経済生活のすべての基礎が根本的に改造されたのちにはじめてなくなることができるのであるから、これらの偏見のなくなる過程は、非常にゆっくりしたものになるほかはない。ここからして、きわめて長いあいだ抑圧されてきた国や民族のあいだの民族感情の名ごりにたいしては、とくに慎重な、とくに注意ぶかい態度をとることが、すべての国の自覚した共産主義的プロレタリアートの義務となり、さらに、ここにあげた不信や偏見がいっそう早く克服されるように、ある程度譲歩におうじることも彼らの義務となる。全世界のあらゆる国と

民族のプロレタリアートが、ついでまた全勤労大衆が、同盟と統一をめざして自発的に努力するのでなければ、資本主義にたいする勝利の大業を成功裏になしとげることはできない。

一九二〇年七月一四日に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第一一号に発表
全集、第五版、第四一巻、一六一—一六八ページ所収
邦訳全集、第三一巻、一三五—一四一ページ所収

二　農業問題についてのテーゼ原案
（共産主義インタナショナル第二回大会のために(六)）

同志マルフレフスキーは、その論文(七)で、いまや黄色インタナショナルになりはてた第二インタナショナルが、農業問題にかんする革命的プロレタリアートの戦術を規定できなかったばかりか、この問題を正しく提起することさえできなかった理由を、みごとに解明している。それにつづいて、同志マルフレフスキーは、第三インタナショナルの共産主義的農業綱領の理論的原則を示している。

これらの原則にもとづいて、きたる一九二〇年七月一五日のコミンテルン大会の農業問題にかんする一般的決議をつくることができる（またつくらなければならない、と思われる）。

つぎに示すのは、そういう決議の原案である。

一、資本と地主的大土地所有との圧制から、また資本主義制度が維持されるかぎり不可避的にたえず繰りかえしてやってくる荒廃や帝国主義戦争から、農村の勤労大衆を解放することができるのは、共産党に指導される都市の工業プロレタリアートだけである。共産主義的プロレタリアートと同盟を結んで、地主（大土地所有者）とブルジョアジーのくびきの打倒をめざすプロレタリアートの革命闘争を献身的に支持する以外に、農村の勤労大衆が救われる道はない。

他方、工業労働者は、狭い同職組合的利益や、狭い職業的利益のなかに閉じこもって、自分の状態、ときにはかなりによい小市民的な状態の改善のために心をつかうだけにとどまって、自己満足におちいるなら、人類を資本の圧制と戦争から解放するという世界史的使命を果たすことはできない。「労働貴族」のいる多くの先進国はまさにこういう状態にある。これらの「労働貴族」は、第二インタナショナルの自称社会主義諸党の基盤となっており、実際には社会主義の最悪の敵、社会主義の裏切者、小市民的排外主

義者、労働運動内部のブルジョアジーの手先である。プロレタリアートは、すべての勤労被搾取者の前衛として、搾取者の打倒をめざす彼らの闘争の指導者として登場し、行動する場合にだけ、真に革命的な階級、真に社会主義的に行動する階級である。しかし、このことは、農村に階級闘争をもちこまないかぎり、農村の勤労大衆を都市プロレタリアートの共産党のまわりに団結させないかぎり、また後者が前者を教育しないかぎり、実行不可能である。

二、都市の労働者は、農村の勤労被搾取大衆を闘争に立たせるか、あるいはせめて自分の味方に引きよせるかしなければならないが、これらの大衆は、すべての資本主義国で次のような諸階級に分かれている。

第一は、農業プロレタリアート、賃金労働者（年雇い、季節雇い、日雇いの）である。彼らは、資本主義的農業企業に雇われて働くことによって、その生活手段を獲得している。この階級を、農村住民の他の群とは別個に、独自に組織し（政治的に、軍事的に、労働組合、協同組合、文化＝教育団体、その他に組織し）、彼らのあいだで宣伝扇動を強化し、彼らをソヴェト権力とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の味方に引きよせることが、すべての国の共産党の基本的任務である。

第二は、半プロレタリアまたは零細農、すなわち、生活手段のなかばを資本主義的な農業企業や工業企業での賃労働によって、あとのなかばをちっぽけな自作地または小作地——この土地は彼らの家族の必要とする食糧の一部分をあたえるだけである——で働くことによって、獲得している人々である。農村の勤労住民中のこの群は、どの資本主義国でもきわめて多数である。ところが、ブルジョアジーの代表者や、第二インタナショナルに属する黄色「社会主義者」たちは、いくぶんは意識的に労働者をだまし、いくぶんは因襲的な俗物的見解に盲従して、この群と全「農民」大衆一般とを混同し、この群の存在とその特別な地位とをあいまいにしている。ブルジョアが労働者を愚弄するこういう手口がどこよりも頻繁に見られるのは、ドイツとフランスであり、つぎにアメリカその他の国々である。共産党の活動が正しく組織されれば、この群は共産党の確実な味方になる。なぜなら、これらの半プロレタリアの状態は非常に苦しく、彼らがソヴェト権力とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）からうける利益は非常に大きく、しかもその利益はすぐに得られるものだからである。

第三は、小農、すなわち、他人の労働力を雇用しないでも自分の家族と経営との必要をみたせる程度の、さほど大きくない地所を所有権あるいは借地権にもとづいて保有している小農耕者である。この層は、層としてみれば、プロ

レタリアートの勝利によって無条件に得をする。というのは、プロレタリアートの勝利は彼らに、(a) 大土地所有者に支払う地代または収穫の刈分け分の免除（たとえば、フランスの métayers すなわち分益農、イタリアなどでも同様）、(b) 抵当債務の免除、(c) 大土地所有者の抑圧や、彼らへの従属の種々さまざまな形態からの解放（森林地とその利用など）、(d) 彼らの経営にたいするプロレタリア国家権力の即時の援助（プロレタリアートによって収奪された資本主義的大農場の農具や、ある程度まで建物を利用できること、資本主義のもとでは主として富農と中農に役だつ組織であった農村協同組合や農事組合が、プロレタリア国家権力の手によって、なによりもまず貧農、すなわちプロレタリア、半プロレタリアおよび小農に役だつ組織にただちに転化されること、など）、その他多くの利益を、すぐに、またあますところなくあたえるからである。

それと同時に、資本主義から共産主義への過渡期、つまりプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の時期には、この層、すくなくともその一部のあいだに、無制限な商業の自由や、私的所有権の行使の自由を求める方向への動揺が起こるのは避けられないということを、共産党ははっきりと認識しなければならない。なぜなら、この層は、すでに消費資料の販売者なので（もっとも、ささやかな規模のものではあるが）、投機や私有者的習慣によって腐敗させられているからである。しかし、プロレタリアートが確固とした政策をとり、勝利したプロレタリアートが大土地所有者や大農に断固として制裁をくわえさえすれば、この層の動揺はたいしたものとはなりえず、彼らがだいたいにおいてプロレタリア的変革に味方するという事実を変えうるものではないのである。

三、どの資本主義国でも、以上にあげた三つの群を合わせると、農村住民の大部分を占める。だから、プロレタリア的変革の成功は、都市だけでなく、農村でも完全に保障されている。これと反対の意見が広くひろまっているが、そういう見解が維持されているのは、第一には、ブルジョア科学や統計が系統的な欺瞞をおこなっているためでしかない。すなわち、ブルジョア科学や統計は、さきにあげた農村諸階級と、搾取者である地主および資本家とのあいだの深いみぞをも、一方の半プロレタリアおよび小農と、他方の大農とのあいだの深いみぞをも、きょくりょくあいまいにしているのである。第二に、そういう見解が維持されているのは、黄色第二インタナショナルの英雄たちや、帝国主義的な特権で堕落させられた先進諸国の「労働貴族」が、貧農のあいだで真にプロレタリア的＝革命的な宣伝・扇動・組織活動をおこなう能力がなく、またおこなう気も

ない、という事情のためである。日和見主義者がこれまでその全注意をむけてきたのは、また現にむけているのは、プロレタリアートによるブルジョア政府とブルジョアジーの革命的打倒ではなくて、大農と中農（彼らについては、次項を見よ）をもふくめたブルジョアジーとの理論的および実践的妥協策を案出することとである。第三に、こういう見解が維持されているのは、マルクス主義によって理論的に証明しつくされ、またロシアのプロレタリア革命の経験によって完全に確証された真理を、彼らが、偏見（これはあらゆるブルジョア民主主義的な、議会主義的な偏見と結びついている）と言ってよいほどのかたくなさでどうしても理解しようとしないためである。その真理とは、すなわち、さきにあげた三つの部類の農村住民はみな、聞いたこともないほどひどく打ちのめされ、ばらばらにされ、押えつけられていて、最も先進的な国をもふくめたあらゆる国で、半野蛮な生活条件がその運命となっているので、彼らは経済的、社会的、文化的に社会主義の勝利を利益としているにもかかわらず、革命的プロレタリアートが政治権力を獲得したあとでしか、プロレタリアートが大土地所有者と資本家に断固として制裁をくわえたあとでしか、また、自分たちには十分に力強い、しっかりした、組織的な指導者かつ擁護者がついていて、自分たちを援助し、指導し、正しい道を示してくれているのだということを、これらの打ちひしがれた人々が実地に見てとったあとでしか、彼らは革命的プロレタリアートを決定的に支持することができないということである。

四、経済学的な意味で「中農」というのは、同じく小さい地所ではあるが、第一に、資本主義のもとで、ふつう家族の生活をかろうじて維持するだけにとどまらないで、すくなくとも豊年には資本に転化することのできる若干の余剰を生じるような地所を、所有権または借地権にもとづいて保有しており、第二に、かなりしばしば（たとえば、二経営ないし三経営につき一経営の割合で）他人の労働力を雇用している小農耕者のことである。先進資本主義国の中農の具体的な例としては、ドイツの一九〇七年の〔職業〕調査における五ヘクタール以上一〇ヘクタール未満の農家群をあげることができる。この群の農家総数の約三分の一は、農業賃金労働者を雇っている。* フランスでは、特用作物の栽培、たとえば、ブドウ栽培が最も発達しているが、これはとくに多くの労働を土地に投下することを必要とするものであるから、フランスにおけるこの中農群は、おそらく、いくぶんもっと大がかりに他人の雇用労働力を利用していることであろう。

* 正確な数字は次のとおりである。五―一〇ヘクタールの農

家数は、六五万二七九八戸（総数五七三万六〇八二戸のうち）で、これらの農家は、家族従業者（Familienangehörige）二〇〇万三六三三人にたいして、各種の賃金労働者四八万七七〇四人を雇用している。オーストリアでは、一九〇二年の調査によると、この群には三八万三三三一戸の農家が属し、そのうち一二万六一三六戸が賃労働を使用している。その賃金労働者は、一四万六〇四四人、家族従業者は一二六万五五九六九人である。オーストリアの農家総数は二八五万六三四九戸である。

革命的プロレタリアートは、——少なくともきわめて近い将来と、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の時期の初めには——この層を味方に引きよせることを自分の任務とすることはできず、この層を中立化する任務、すなわち、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの闘争で中立の立場をとらせる任務に限らなければならない。この層が二つの勢力のあいだを動揺することは避けられないし、新しい時代の初期には、発展した資本主義国におけるこの層のおもな傾向は、ブルジョアジーに味方することであろう。なぜなら、そこでは所有者の世界観や気分が優勢だからである。つまり、彼らは、投機に、商業や所有の「自由」に、直接の利益をもち、賃労働と直接に対立しているからである。勝利したプロレタリアートは、地代や抵当を廃止して、彼らの状態を直接に改善してやるであろう。プロレタリア権力は、大多数の国では、けっして私的所有をただちに完全に廃止すべきではない。いずれにしても、プロレタリア権力は、小農にたいしても中農にたいしても、彼らがその地所をそのままもちつづけるばかりでなく、彼らがふつう借地している分だけそっくりその地所をふやす（地代の廃止）のを、保障するであろう。

この種の措置とブルジョアジーにたいする容赦ない闘争とを結びつければ、中立化政策の成功は完全に保障されるであろう。集団農業への移行を、プロレタリア権力はきわめて慎重に、徐々に、実例の力によっておこなうべきであって、中農にどんな強制もくわえてはならない。

五、大農（《Großbauern》）というのは、農業における資本主義的企業家であり、ふつう数名の賃金労働者を使って経営をおこなっている者であって、彼らが「農民」と結びついている点といえば、文化水準が高くない点、その生活慣習の点、自分の経営で自分で肉体労働をしている点だけである。彼らは、革命的プロレタリアートの直接の、また決定的な敵であるブルジョア諸層のなかでも、最も多人数の層である。この層とたたかって、農村住民の大多数を占める勤労被搾取者をこの搾取者の思想的・政治的影響等々から解放することこそ、農村における共産党の全活動

のうちで、おもな注意がむけられなければならない点である。

プロレタリアートが都市で勝利したあとで、この層がありとあらゆる反抗、サボタージュをおこない、直接の反革命的な武装行動をおこすことは、まったく避けられない。だから、革命的プロレタリアートは、この層をひとりのこらず武装解除し、工業における資本家を倒すのと並行して、この層がすこしでも反抗の気勢を示ししだい、断固たる、容赦ない、壊滅的な打撃をこれにくわえるために、必要な勢力の思想的および組織的準備をただちに始めなければならず、そのために農村プロレタリアートを武装させ、農村にソヴェトを組織しなければならない。このソヴェトには搾取者をいれてはならず、そこではプロレタリアと半プロレタリアに優勢が確保されなければならない。

しかし、大農の場合でさえ、これを収奪することは、勝利したプロレタリアートの当面の任務ではけっしてありえない。なぜなら、こういう経営を社会化するための物質的な、とくに技術的な条件が存在せず、ついで社会的な条件もまだ存在しないからである。場合によっては、たぶん例外として、彼らの地所のうち、小規模な小作に出してある部分、または周辺の小農住民にとくに必要な部分を没収することになろう。これらの小農住民には、また大農の農業機械の一部を一定の条件でただで利用させるべきである等等。通例、プロレタリア国家権力は、大農の土地はそのままにしておくべきであって、それを没収するのは、彼らが勤労被搾取者の権力に反抗するときに限らなければならない。ロシアのプロレタリア革命では、大農にたいする闘争は、多くの特殊条件のために複雑になり、ながびいたのであるが、それでもこの革命の経験が示したところでは、すこしでも反抗を試みてしたたかな懲らしめをうけるならば、この層は、プロレタリア国家からあたえられた課題を忠実に実行する能力をもっているのであって、働く者ならだれでも保護するが、寄生的な金持は容赦しないこの権力にたいして、きわめて徐々にではあるが、尊敬をいだきはじめるものである。

ロシアでブルジョアジーに勝利したプロレタリアートと大農との闘争を複雑にし、ながびかせた特殊な事情とは、おもに次のものにまとめられる。すなわち、ロシア革命が、一九一七年一〇月二五日(新暦一一月七日)の変革後に、地主にたいする全農民の「一般民主主義的な」闘争、すなわち、基本的にはブルジョア民主主義的な闘争の段階をとおったこと、つぎには都市プロレタリアートが文化の点でも、人数の点でも弱かったこと、最後に、地域がとほうもなく広大で、そのうえ交通手段が極端に悪かったこと

である。先進国ではこういう阻害的な条件がないのであるから、ヨーロッパやアメリカの革命的プロレタリアートは、われわれ以上に精力的に準備をととのえて、われわれよりもはるかに急速に、はるかに断固として、はるかにうまく大農の反抗にたいして完全な勝利をおさめ、どんなにわずかでも反抗する可能性を彼らから完全に奪いとらなければならない。このことはさしせまって必要である。なぜなら、このような完全な勝利、このうえなく完全な勝利がえられるまでは、農村のプロレタリア、半プロレタリア、小農の大衆は、プロレタリア国家権力を十分に安定したものと認めるようにはならないからである。

六、革命的プロレタリアートは、地主、大土地所有者のすべての土地を、ただちに、無条件に没収しなければならない。この人々は、資本主義諸国では、直接に、あるいはその借地農業者をつうじて、雇用労働力や周辺の小農を(しばしば中農の一部をも)系統的に搾取していて、肉体労働には全然参加していない。彼らの大部分は、封建領主(ロシア、ドイツ、ハンガリーの貴族、フランスの復活したセニョール、イギリスのロード、アメリカの旧奴隷所有者)の子孫か、それともとくに富裕になった大金融家か、あるいはこれら二つの部類の搾取者や寄生者の混合物かである。

共産党が、大土地所有者からの没収地にたいする補償を宣伝したり実行したりすることは、断じて許されない。なぜなら、ヨーロッパとアメリカの今日の条件のもとでは、それは、社会主義を裏切り、勤労被搾取大衆に新しい貢物を課することになるからである。戦争でいちばん被害をうけたのはこの大衆だが、戦争は、その一方で、百万長者の数をふやし、彼らを富ませたのである。

勝利したプロレタリアートが大土地所有者から没収した土地の経営方式の問題についていえば、ロシアでは、その経済的後進性のために、これらの土地はあらかた分割して農民に利用させたのであって、いわゆる「ソヴェト農場」として維持されたものは、比較的まれな例外にすぎなかった。この「ソヴェト農場」は、プロレタリア国家が自分の勘定で経営にあたるものであって、そこでは以前の賃金労働者は国家の委託で働く人間となり、また国家を統治するソヴェトの成員となるのである。共産主義インタナショナルは、先進資本主義国では、大農業企業はだいたいそのまま維持して、ロシアの「ソヴェト農場」の型にならって経営することが正しいと認める。

しかし、この原則を誇張したり、紋切り型にしてしまって、収奪された収奪者の土地の一部をその周辺の小農、ときには中農にただで譲渡することを絶対に許さないとした

ら、それははなはだしい誤りであろう。

第一に、この方策にたいする普通の異論は、大規模農業が技術的にすぐれていることを指摘するものであるが、この異論は、議論の余地のない理論的真理を最悪の日和見主義、革命にたいする裏切りとすりかえることに、しばしば帰着する。この革命を成功させるには、プロレタリアートは一時的な生産低下にひるんではならない。それは、ちょうど北アメリカの奴隷所有者の敵であるブルジョアジーが一八六三―一八六五年の南北戦争のために綿作が一時低下するのにひるまなかったのと同様である。ブルジョアにとっては生産のための生産が重要であるが、勤労被搾取住民にとってなによりも重要なことは、搾取者を倒し、働く者が資本家のためではなく、自分のために働くことのできる条件を確保することである。プロレタリアートの勝利を確保し、この勝利をゆるぎないものにすることこそ、プロレタリアートの第一の基本的任務である。ところで、プロレタリア権力は、中農を中立化し、小農の全部ではなくとも大多数の支持を確保しなければ、ゆるぎないものにはなりえないのである。

第二に、農業における大規模生産を向上させることはさておいて、それを維持するのにさえ、十分に発達した、革命的な自覚をもった、労働組合組織や政治組織というしっかりした学校を卒業した、農村プロレタリアが前提されるのである。こういう条件がまだないところ、あるいは自覚した、能力のある工業労働者にこの事業を適切な仕方でまかせることができないところでは、いそいで大規模農場の国家経営にとりかかろうと試みても、プロレタリア権力の威信をきずつけるおそれがあるだけであり、そういうところでは、「ソヴェト農場」をつくるさいにはとくに慎重に、しっかりと準備をととのえなければならない。

第三に、すべての資本主義国には、最も先進的な国にさえ、大土地所有者による周辺の小農の中世的な、半賦役的な搾取の遺物がまだ残っている。ドイツの Instleute〔長屋住農〕、フランスの métayers〔分益農〕、アメリカ合衆国の刈分け小作人（合衆国の南部では、黒人の大部分はまさに刈分け小作人として搾取されているが、これは黒人に限らず、ときには白人もそういう搾取をうけている）が、その例である。こういう場合には、プロレタリア国家は、小農が借りている土地をこの以前の小作農に渡して、ただで利用させるべきである。なぜなら、それ以外の経済的および技術的基礎は存在しないからであり、またそうした基礎を一挙につくりだすことはできないからである。

大農場の農具・家畜はかならず没収して、国家の所有としなければならない。ただし、その場合には、大きな国営

農場の必要をみたしたあとで、周辺の小農がプロレタリア国家のきめた条件にしたがって、ただでこの農具・家畜を利用できるようにすることが、必須の条件である。

　プロレタリア的変革の直後の時期には、大土地所有者の所有地をただちに没収するだけでなく、彼らを反革命の首領、全農村住民の無慈悲な抑圧者として、ひとりのこらず追放または拘禁することが無条件に必要であるが、プロレタリア権力が都市だけでなく、農村でも確立するにつれて、この階級のなかの、貴重な経験、知識、組織能力をもっている人材を利用して（ごく信頼できる労働者共産主義者の特別な監視のもとで）、社会主義的大規模農業をつくりだすことに、ぜひとも系統的に努力しなければならない。

　七、資本主義にたいする社会主義の勝利、社会主義の確立は、プロレタリア国家権力が搾取者のあらゆる反抗を最後的に鎮圧し、完全な安定性を確保し、搾取者を完全に服従させたあとで、大規模な集団的生産と最新の（経済全体の電化をもとにする）技術的基礎とにもとづいて全工業を改造した場合にだけ、確実なものと見なすことができる。こうなった場合にはじめて、都市は、農耕労働および農業労働一般の生産性を大いに高めるための物質的基礎をつくりだすような、根本的な技術的および社会的援助を、遅れた、分散した農村にあたえることができ、こうしてまた実例の力にもとづいて、小農耕者をうながして、小農耕者自身の利益のために、集団的な機械制大規模農業に移るようにしむけることができるのである。議論の余地のないこの理論的真理は、名目上はすべての社会主義者によって認められているが、実際には、黄色第二インタナショナル内に、またドイツやイギリスの「独立派」、フランスのロンゲ派の指導者などのあいだに支配している日和見主義によって歪曲されている。その歪曲は、比較的遠い、美しい、ばら色の未来に注意を移して、この未来にむかって困難をこえて具体的に移行し接近してゆく当面の任務から注意をそらす点にある。実際には、これは、ブルジョアジーとの妥協や「社会平和」を説教することに帰着する。つまり、いま戦争がいたるところで前代未聞の零落と窮乏を生みだしている状況のもとで、ほかならぬその戦争のおかげでひとにぎりの百万長者が前代未聞の富をたくわえ、前代未聞のあつかましさを示している状況のもとでたたかっているプロレタリアートを完全に裏切ることに帰着するのである。

　ほかならぬ農村で社会主義をめざして成功裏にたたかえるように実際になるためには、まず第一に、各国共産党は工業プロレタリアートのあいだに、ブルジョアジーを倒してプロレタリア権力を確立するためにはプロレタリアートが犠牲をはらわなければならず、またすすんで犠牲をはら

う心がまえをもたなければならないという自覚を養なわなければならない。なぜなら、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とは、プロレタリアートがすべての勤労被搾取大衆を組織し、みちびく能力をもつことを意味するとともに、また前衛がこの目的のために最大の犠牲をはらい、英雄主義を発揮する権力をもつことをも意味するからである。この闘争を成功させるには、第二に、労働者が勝利したおかげで、農村のいちばん搾取されている勤労大衆の状態が、搾取者の犠牲でただちに、大幅に改善されるようにしなければならない。なぜなら、そうしなければ、工業プロレタリアートにたいする農村の支持は保障されないし、またとくに、プロレタリアートは都市への食糧供給を確保できないからである。

　八、農業にしたがう勤労大衆は、資本主義によってとくにうちのめされ、ばらばらにされ、しばしば半中世的な隷属状態におかれていて、彼らを革命闘争のために組織し教育することは非常に困難なので、共産党が、農村のストライキ闘争にとくに注意をはらい、農業プロレタリアや半プロレタリアの大衆的なストライキをいっそう精力的に支持し、これを全面的に発展させることが必要である。一九〇五年と一九一七年のロシア革命の経験は、現在ドイツその他の先進国の経験によって確証され、拡大されているが、この経験が示しているところでは、大衆的ストライキ闘争の発展（一定の条件があれば、この闘争に農村の小農をも引きいれることができるし、また引きいれなければならない）だけが、農村の眠りをやぶり、農村の搾取されている大衆のあいだに階級意識と階級的組織をつくる必要があるという自覚とをめざめさせ、彼らと都市労働者との同盟がどんな意義をもっているかを、彼らにはっきりと、実地に示すことができる。

　農村のストライキ闘争に無関心な態度をとるばかりか、消費物資の生産が減るおそれがあるという理由でこの闘争に反対する（K・カウツキーのように）ことすらやりかねない社会主義者——こういう社会主義者は、黄色第二インタナショナルだけでなく、残念ながら、このインタナショナルを脱退したヨーロッパのとくに重要な三つの党内にもいる——を、共産主義インタナショナル大会は、裏切者、変節漢として糾弾する。共産主義者と労働者の指導者とはプロレタリアートの革命の発展とその勝利をなによりもたいせつに思っており、そのためにはどんなに苦しい犠牲をもしのぶことができるということが、実地に、行為によって証明されないかぎり、どんな綱領も、どんないかめしい声明も、なんの価値もない。なぜなら、そうしないかぎり、飢えや荒廃や新しい帝国主義戦争からの活路、救いはない

からである。

とくに指摘しておかなければならないが、古い社会主義の指導者や「労働貴族」の代表者たちは、急速に革命化しつつある労働者大衆のあいだで自分の威信をたもつために、現在しばしば口さきで共産主義に譲歩したり、名目上で共産主義の味方に移りさえしているが、彼らがはたしてプロレタリアートの大業に献身的かどうか、革命的意識や革命闘争が最も激しく発展し、土地所有者とブルジョアジー(大農、富農)の抵抗が最も激烈で、協調主義的社会主義者と革命的共産主義者との相違が最もはっきり現われるような、ほかならぬそういう仕事で責任のある職務につく能力がはたして彼らにあるかどうかを、ためさなければならない。

九、共産党は、農村に代表ソヴェト、まず第一に賃金労働者と半プロレタリアの代表ソヴェトをつくることにできるだけはやく着手できるよう、全力をつくさなければならない。ソヴェトは、大衆的なストライキ闘争と結びつき、最も抑圧されている階級と結びついてはじめて、その使命を果たすことができるし、また小農を自分の影響下におさめる(ついで、ソヴェトに引きいれる)ほど強固な足場を固めることができるのである。もし、これに反して、土地所有者や大農の圧迫がひどかったり、工業労働者やその組合から援助がえられなかったりしたため、ストライキ闘争がまだ発展しておらず、農業プロレタリアートの組織能力が弱い場合には、農村にソヴェトをつくるためには、たとえ小さなものでも共産党の細胞をつくり、扇動を強化して共産主義の諸要求をできるだけわかりやすく述べ、搾取や抑圧の顕著な実例にもとづいてそれらの要求を説明し、工業労働者の農村派遣を系統的に組織するなどの方法で、長期にわたって準備しなければならない。

一九二〇年六月はじめに執筆
一九二〇年七月二〇日に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第一二号に発表
全集、第五版、第四一巻、一六九―一八二ページ所収
邦訳全集、第三一巻、一四三―一五五ページ所収

三　共産主義インタナショナルへの加入条件(九)

共産主義インタナショナルの第一回創立大会(一〇)は、第三インタナショナルへの個々の党の加入を許すための厳密な条件を作成しなかった。第一回大会が招集されたときには、大多数の国々には、共産主義的な傾向やグループが存在し

ていただけであった。

共産主義インタナショナルの第二回世界大会は、それとは違った条件のもとでひらかれている。いまでは、大多数の国々に、すでに共産主義的な潮流や傾向だけではなく、共産主義的な党や組織が存在している。

まだ最近まで第二インタナショナルに所属していて、いまは第三インタナショナルへの加入を希望しているが、実際に共産主義的になっていない党やグループが、現在ますます頻繁に共産主義インタナショナルに加入を申しこんできている。第二インタナショナルは最後的に粉砕された。第二インタナショナルのまったくの絶望状態を見て、「中央派」の中間的な党やグループは、ますます強まりつつある共産主義インタナショナルにたよろうと試みている。だが、そうしながらも、彼らは、これまでどおりの日和見主義的政策または「中央派的」政策をつづけていけるような「自治」を維持したいと、望んでいる。共産主義インタナショナルは、ある程度まで流行になろうとしている。

「中央派」の一部の指導的グループが第三インタナショナルへの加入を希望していることは、共産主義インタナショナルが全世界の自覚した労働者の圧倒的多数の共感をかちえて、日ごとにますます強大な勢力になりつつあることを、間接に裏書きするものである。

ある種の事情のもとでは、第二インタナショナルのイデオロギーとまだ絶縁していない、ぐらついた中途半端なグループのために、共産主義インタナショナルが水ましされるという危険もありうる。

そのうえ、その党員の大多数が共産主義の見地に立っているいくつかの大きな党（イタリア、スウェーデン）にもいまなおかなり大きな改良主義的、および社会平和主義的な翼が残っている。彼らは、ふたたび頭をもたげてプロレタリア革命の積極的なサボタージュを始め、こうしてブルジョアジーと第二インタナショナルを助けるための機会をうかがっているにすぎない。

共産主義者はひとりとして、ハンガリー・ソヴェト共和国の教訓を忘れてはならない。ハンガリーの共産主義者が改良主義者と合同したことは、ハンガリーのプロレタリアートにとって高価についた。(二)

以上の理由で、第二回世界大会は、新しい諸党の加入を許すためのまったく厳密な条件をさだめ、またすでに共産主義インタナショナルに加入を許されている諸党にたいして、彼らに負わされている義務を示す必要があると考える。

共産主義インタナショナル第二回大会は、コミンテルンに所属するための条件は次のようなものであると決定する。

＊＊＊

一、日常の宣伝と扇動は、真に共産主義的な性格をおびていなければならない。党の手にあるすべての機関紙誌は、プロレタリア革命の大業に献身的なことを証拠だてた、信頼できる共産主義者によって編集されなければならない。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、棒暗記した流行の公式としてロにされるだけであってはならない。それは、われわれの出版物が日々に、系統的に指摘する生活上の諸事実から、普通の男女の労働者、兵士、農民の一人びとりにプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の必要性が明らかになるような仕方で、宣伝されなければならない。新聞紙上で、民衆集会で、労働組合で、協同組合で――第三インタナショナルの支持者がはいりこめるところならどこででも、ブルジョアジーだけでなく、その助手であるあらゆる色合いの改良主義者をも、系統的に、容赦なく糾弾することが必要である。

二、コミンテルンに所属することを希望するすべての組織は、労働運動のいくぶんでも責任ある部署（党組織、編集部、労働組合、議員団、協同組合、地方自治機関、等等）から、改良主義者や「中央派」の支持者を計画的に、系統的に放逐し、これを信頼できる共産主義者と入れかえる義務がある。はじめのうちは、「経験に富んだ」活動家を普通の労働者と交替させなければならないような場合がときに起こっても、とりこし苦労をするにはおよばない。

三、戒厳または特別法のために共産主義者がその全活動を合法的におこなうことのできないすべての国では、合法活動と非合法活動を結合することが、無条件に必要である。ヨーロッパとアメリカのほとんどすべての国で、階級闘争は内乱の局面にはいろうとしている。こういう条件のもとでは、共産主義者はブルジョア的合法性を信頼するわけにはいかない。共産主義者は、あらゆるところで平行的な非合法的機構をつくりだす義務がある。こういう機構は、決定的な瞬間に党が革命にたいする自分の責務を果たすのを助けるであろう。

四、軍隊内でねばりづよい、系統的な宣伝扇動をおこない、それぞれの部隊に共産党細胞をつくることが、必要である。共産主義者は、この活動をたいていは非合法的におこなわなければならないであろうが、こういう活動を放棄することは、革命的責務を裏切るのにひとしく、第三インタナショナルに所属することとあいいれないであろう。

五、農村で系統的、計画的な扇動をおこなわなければならない。労働者階級は、農村の雇農と貧農のたとえ一部なりと自分の味方につけ、またその他の農村住民の一部を中立化させずには、自分の勝利を固めるこ

とができない。現在の時期には、農村での共産主義的活動は、第一級の重要性をもつようになっている。この活動は、主として、農村との結びつきをもっている共産主義者である革命的な労働者共産主義者の手をかりて、おこなわれなければならない。この活動を拒否したり、信頼できない半改良主義者の手にそれをゆだねたりすることは、プロレタリア革命を放棄するのにひとしい。

六、第三インタナショナルに所属することを希望するすべての党は、あからさまな社会愛国主義だけでなく、さらに社会平和主義のいつわりと偽善をも暴露する義務がある。すなわち、資本主義を革命的に打倒しなければ、どんな国際仲裁裁判所も、どんな軍縮談義も、国際連盟のどんな「民主的」改組も、人類を新しい帝国主義戦争から救いはしないということを、労働者に系統的に証明する義務がある。

七、共産主義インタナショナルに所属することを希望する党は、改良主義や「中央派」の政策と完全に、絶対的に絶縁する必要があることを承認し、この絶縁を党員のあいだで最も広範囲に宣伝する義務がある。そうしないかぎり、一貫した共産主義的政策は不可能である。

共産主義インタナショナルは、この絶縁をできるだけ短い期間内に実行するよう、無条件に、最後通牒として要求する。たとえばトゥラーティ、モディリアーニその他のような、名うての改良主義者が、みずからを第三インタナショナルの成員と見なす権利をもつというようなことを、共産主義インタナショナルはがまんすることができない。そんなことになれば、第三インタナショナルは、死滅した第二インタナショナルに瓜二つのものになってしまうであろう。

八、植民地と被抑圧民族の問題では、その国のブルジョアジーがこういう植民地をもっていて、他民族を抑圧している国々の党が、とくに的確で明白な方針をとることが必要である。第三インタナショナルに所属することを希望するすべての党は、植民地における「自国」帝国主義者のたくらみを容赦なく暴露し、植民地におけるあらゆる解放運動を口さきでなく、実際に支持し、これらの植民地からの自国の帝国主義者の追放を要求し、自国の労働者の心のうちに、植民地や被抑圧民族の勤労住民にたいする真に兄弟のような感情をやしない、自国の軍隊内で、植民地民族のあらゆる抑圧に反対して系統的な扇動をおこなう義務がある。

九、共産主義インタナショナルに所属することを希望するすべての党は、労働組合、協同組合、その他の大衆的労働者組織の内部で、系統的に、ねばりづよく共産主義的活

動をおこなう義務がある。これらの組織内に共産党の細胞をつくらなければならない。細胞は、長期にわたる、ねばりづよい活動によって、労働組合を共産主義の大業の味方に獲得しなければならない。これらの細胞は、その日常活動の一歩ごとに、社会愛国主義者の裏切りや「中央派」の動揺を暴露する義務がある。これらの共産党細胞は、全体としての党に完全に従属していなければならない。

一〇、共産主義インタナショナルに所属する党は、黄色労働組合のアムステルダム・「インタナショナル」(三)とねばりづよくたたかう義務がある。党は、黄色アムステルダム・インタナショナルと絶縁する必要があることを、労働組合に組織された労働者のあいだでねばりづよく宣伝しなければならない。党は、いま生まれようとしている、共産主義インタナショナルに同調する赤色労働組合の国際的連合(三)を、あらゆる手段で支持しなければならない。

一一、第三インタナショナルに所属することを希望する党は、自党の議員団の人的構成を再検討し、信頼できない分子をそれから放逐し、これらの議員団を、口さきだけでなく実際に党中央委員会に従属させ、共産主義者の議員の一人びとりに、その全活動を真に革命的な宣伝と扇動の利益に従属させるように要求する義務がある。

一二、それとまったく同様に、定期および不定期の出版物と、すべての出版所は、その時点に党が全体として合法的であるか非合法的であるかにはかかわりなく、完全に党中央委員会に従属していなければならない。出版所が自治を悪用して、完全に党的と言えない政策を遂行することは、許されない。

一三、共産主義インタナショナルに所属する党は、民主主義的中央集権制の原則にもとづいて建設されなければならない。現在のような激しい内乱の時期には、党が最も中央集権制的に組織され、軍事的規律に近い鉄の規律が党内におこなわれ、党中央が、広範な全権をもった、全党員の信頼をえた、権能ある、権威ある機関である場合にだけ、共産党は自分の責務を果たすことができるであろう。

一四、共産主義者が合法的に活動しているすべての国々の共産党は、不可避的に党内にはいりこんでくる小ブルジョア分子を党から系統的に清掃するため、党組織の人的構成の定期的粛清（再登録）をおこなわなければならない。

一五、共産主義インタナショナルに所属することを希望するすべての党は、反革命勢力にたいするたたかいで各ソヴェト共和国を献身的に支持する義務がある。共産党は、労働者にソヴェト共和国の敵への軍需物資の輸送を拒否させるため、うまずたゆまず宣伝し、労働者共和国を圧殺するために派遣される軍隊内で、合法的または非合法的に宣

伝をおこなう、等々しなければならない。

一六、いまなお古い社会民主主義的綱領を残している諸党は、できるだけ短い期間内にその綱領を再検討して、自国の特殊な諸条件に適応しながらも、共産主義インタナショナルの諸決定の精神に立つ新しい共産主義的綱領を作成する義務がある。原則として、共産主義インタナショナルに所属する各党の綱領は、共産主義インタナショナルの定例大会またはその執行委員会の承認をえなければならない。ある党の綱領が共産主義インタナショナルの執行委員会によって承認されない場合には、その党は、共産主義インタナショナルの大会に上告する権利がある。

一七、共産主義インタナショナルの各大会のすべての決定と、その執行委員会の諸決定は、共産主義インタナショナルに所属するすべての党を拘束する。きわめて激しい内乱の情勢のなかで活動している共産主義インタナショナルは、第二インタナショナルにくらべて、はるかに中央集権的に建設されていなければならない。この場合、いうまでもないことであるが、共産主義インタナショナルとその執行委員会とは、それぞれの党がたたかい活動している条件がきわめて多種多様であることを考慮に入れて、全体を拘束する決定は、そういう決定が可能な問題にかぎっておこなうようにしなければならない。

一八、以上のすべてに関連して、共産主義インタナショナルに所属することを希望するすべての党は、党の名称を変更しなければならない。共産主義インタナショナルに所属することを希望する各党は、どこどこの国の共産党（第三共産主義インタナショナル支部）という名称をつけなければならない。党名の問題は、たんなる形式上の問題ではなくて、きわめて重要な政治問題である。共産主義インタナショナルは、ブルジョア世界全体と、黄色社会民主主義諸党の全部とにたいして、断固たる闘争を宣言したのだ。共産党と、労働者階級の旗を裏切った、古い、公認の「社会民主」党または「社会」党との区別が、普通の勤労者の一人ひとりにまったく明瞭であるようにしなければならない。

一九、共産主義インタナショナルに所属することを希望するすべての党は、共産主義インタナショナル第二回世界大会の議事が終了したのち、前述した義務を全党の名で公式に承認するため、できるだけ短い期間内に自党の臨時大会を招集しなければならない。

一九二〇年七月二〇日に執筆

一九二〇年七月二〇日に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第一二号に発表

全集、第五版、第四一巻、二〇四―二一一ページ所収
邦訳全集、第三一巻、一九九―二〇五ページ所収

四　共産主義インタナショナルへの加入条件の第二〇条

いま第三インタナショナルへの加入を希望しているが、今日までその従来の戦術を根本的に変更するにいたっていない党は、第三インタナショナルに加入するまえに、まず、その中央委員会およびすべての最も重要な党中央諸機関のメンバーの三分の二以上を、すでに共産主義インタナショナル第二回大会以前に公けにまた明瞭に第三インタナショナルへの加入に賛成を表明した同志たちが占めるように、配慮しなければならない。例外は、第三インタナショナル執行委員会の承認がある場合には許される。共産主義インタナショナル執行委員会は、第七条に名をあげた「中央派」の代表たちについても、例外を設ける権限をもつ。

一九二〇年七月に執筆
一九二〇年九月二八日に雑誌『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』第一三号に発表
全集、第五版、第四一巻、一五八ページ所収

邦訳全集、第三一巻、二〇六ページ所収

共産主義インタナショナル第二回大会

一九二〇年七月一九日―八月七日

一 国際情勢と共産主義インタナショナルの基本的任務についての報告

七月一九日

（盛大な喝采。全員起立して拍手する。演説者は口をひらこうとするが、拍手とあらゆる国のことばでの歓声がつづく。喝采は長いあいだつづく）同志諸君、共産主義インタナショナルの基本的任務の問題にかんするテーゼ(一四)は、すべての国のことばで発表されており、（とくにロシアの同志たちにとっては）それは実質上新しいものではない。なぜなら、それはかなりの程度まで、われわれの革命的経験のいくつかの基本的な特徴とわれわれの革命運動の教訓を、多くの西方諸国に、西ヨーロッパにおよぼしたものだからである。だから、私はこの報告では、私に割り当てられたテーマの前半、つまり国際情勢を、概略ではあっても、いくらかくわしく述べてみたい。

現在の国際情勢全体の基礎になっているのは、帝国主義の経済的諸関係である。二〇世紀全体をつうじて、資本主義のこの新しい、最高で最後の段階は完全にはっきりしてきた。資本が巨大な規模に達したことが、帝国主義の最も特徴的な、本質的特色であったことは、もちろん、諸君がみなご承知のところである。自由競争に代わって巨大な規模の独占が現われた。ときには、ごく少数の資本家が幾多の産業部門をその手に集中することができた。それらの部門は、連合体、カルテル、シンジケート、トラスト――しばしば国際的な性格をもつところの――の手に移った。こうして、幾多の産業部門が、金融の面で、所有権の面で、部分的には生産の面で、独占資本の手ににぎられた。しかもこれは、個々の国だけでなく、全世界にわたってそうなったのである。これを基礎として、ごく少数の巨大銀行、金融王、金融界の大立物の前代未聞の支配が発展し、彼らは最も自由な共和国をさえ事実上金融王国に転化してしま

った。戦前には、けっして革命的でない著述家たちがこのことを公然と認めていた。たとえばフランスのリジスがそれである。

さまざまな原料資源と生産手段が巨大資本家の手ににぎられたという意味ばかりでなく、植民地の一応の分割が完了したという意味でも、地球全体が分割されつくしたとき、ひとにぎりの資本家のこのような支配は完全な発展をとげた。四〇年ばかりまえには、六つの資本主義的大国に従属していた植民地の人口数は、二億五〇〇〇万をすこし上まわっていた。一九一四年の戦争のまえには、植民地の人口はすでに約六億にのぼっていたが、その当時すでに半植民地の状態であったペルシア、トルコ、中国のような国をくわえると、最も富んだ、最も文明的な、最も自由な国々から植民地的従属の手段で抑圧されていた人口数は、概数で一〇億となる。ところで、ご承知のように、植民地的従属は、直接の国家的・法律的従属のほかに、金融的・経済的従属の多くの関係をふくむものであり、多くの戦争を前提とする。もっとも、それらの戦争は、最新式の大量みな殺し兵器で武装したヨーロッパとアメリカの帝国主義軍隊が植民地諸国の武器をもたない無防備の住民をみな殺しにする屠殺にほかならないことがしばしばだったところから、戦争とは見なされなかった。

地球全体がこのように分割されたことから、資本主義的独占がこのように支配するにいたったことから、ごく少数の――一国あたり二つ、三つ、四つ、五つをこえない――巨大な銀行がこのように絶対的権力をもったことから、一九一四―一九一八年の最初の帝国主義戦争が生じることは避けられなかった。この戦争は全世界の再分割をめぐっておこなわれた。この戦争は、ごく少数の巨大国家グループのうち、イギリス・グループとドイツ・グループのどちらが全世界を略奪し、圧殺し、搾取する機会と権利を手に入れるかをめぐっておこなわれた。そしてご承知のように、戦争はこの問題をイギリス・グループに有利に解決した。だが、この戦争の結果、すべての資本主義的矛盾は、さらにはかりしれないほど激化している。戦争は、地球人口のうち約二億五〇〇〇万を、一挙に植民地にひとしい状態に投げこんだ。戦争は、人口約一億三〇〇〇万と見なすべきロシアや、すくなくとも合計一億二〇〇〇万の人口をもつオーストリア＝ハンガリー、ドイツ、ブルガリアを、このような状態に投げこんだ。この二億五〇〇〇万の人口の一部は、ドイツのように最もすすんだ、最も教育のゆきわたった、文化的で、技術の点で現代の進歩の水準をきわめた国に属する国々に住んでいる。戦争は、ヴェルサイユ条約によって先進諸国民に、彼らを植民地的従属、窮乏、飢え、

零落、無権利の状態におとしいれるような条件を押しつけた。なぜなら、これらの国民は、今後何世代も条約でしばりつけられ、どんな文明国民もまだ経験したことのないような生活条件のもとにおかれたからである。戦後に、一挙に一二億五〇〇〇万をくだらない人口が植民地的抑圧をこうむり、野獣のような資本主義の搾取をこうむっているということ、これが世界の状景である。この野獣のような資本主義は、かつてはその平和愛好心を誇ったものであり、また五〇年もまえには、つまり地球が分割しつくされておらず、独占が支配しておらず、資本主義が大がかりな軍事的衝突なしに、比較的平穏に発展できたあいだは、そのように誇る権利もいくらかもっていたのである。

この「平穏な」時代がすぎた今日、抑圧はとほうもなく激しいものとなった。いままでよりももっとひどい植民地的・軍事的抑圧への逆もどりが見られる。ヴェルサイユ条約は、ドイツをも、いくつかの敗戦国家をも、経済的生存が物質的に不可能であるような状態に、まったくの無権利と屈辱の状態に、おとしいれた。

これで利益をえた国は、どれくらいあるだろうか？　この質問に答えるためには、戦争でただひとり丸儲けをし、多くの負債をせおった国から、すべての国にたいする債権国へと完全に転身したアメリカ合衆国の人口が一億をこえないことを、思いださなければならない。ヨーロッパとアメリカ間の衝突の局外にとどまり、広大なアジア大陸を侵略して大儲けをした日本の人口は、五〇〇〇万である。この二国についでいちばん儲けたイギリスの人口は五〇〇〇万に近い。戦争中に富をふやしたごく少数の人口をもつ中立諸国をつけくわえると、概数で二億五〇〇〇万となる。

これが、帝国主義戦争後に生じた世界の状景の概略である。抑圧されている植民地――ペルシア、トルコ、中国のように生きながら切りさかれている国々、戦争に敗れて植民地の状態に投げこまれた国々に、一二億五〇〇〇万がいる。二億五〇〇〇万たらず――これが無事に従来のままの状態にとどまった国々の人口である。だが、これらの国はみな、アメリカへの経済的従属におちいっており、戦争中はみな軍事的に従属していた。なぜなら、戦争は全世界をまきこみ、どの一国にも、真に中立にとどまることを許さなかったからである。最後に、二億五〇〇〇万たらずの住民が、地球の分割で利益をえた――もちろんその上層だけ、資本家だけが――国に住んでいる。総計約一七億五〇〇〇万、これが地球の総人口である。世界のこの状景に注意していただきたい。なぜなら、革命にみちびいてゆく資本主義、帝国主義のすべての基本的な矛盾、同志議長が述べられた第二インタナショナルとの激烈をきわめた闘争をもた

らした労働運動内のすべての基本的な矛盾――すべてこれらの矛盾は、地球人口の配分に結びついているからである。

もちろん、こういう数字によっては、世界の経済的状景は大まかに、だいたいのところが示されるにすぎない。しかし、同志諸君、地球全体の人口のこのような配分の結果、金融資本の搾取、資本主義的独占体の搾取が何倍にも大きくなったことは当然である。

植民地国、敗戦国が従属状態におちいっているだけではない。どの戦勝国の内部にも、いっそう鋭い矛盾が発展し、すべての資本主義的矛盾が激しくなった。このことを、いくつかの実例で簡単に示してみよう。

国債をとってみたまえ。ヨーロッパの主要国家の負債が一九一四年から一九二〇年までにすくなくとも七倍にふえたことを、われわれは知っている。もう一つ、とくに大きな意義をもつようになった経済上の典拠をあげよう。それは、イギリスの外交官で、『平和の経済的帰結』という本の著者であるケインズである。彼は、自国政府の訓令をうけて、ヴェルサイユの講和交渉に参加し、それを純ブルジョア的な立場から観察し、問題を一歩一歩、くわしく研究し、経済学者として会議に参加した。彼は、革命家である共産主義者のどんな結論よりも力づよく、明瞭で、教訓に富む結論に達した。というのは、この結論をくだしているのは、かくれもないブルジョアで、ボリシェヴィズムの仮借ない反対者だからである。イギリスの俗物である彼は、このボリシェヴィズムのことを、なにか奇怪な、狂暴で、残忍なもののように想像しているのである。そのケインズは、ヴェルサイユ講和条約のためにヨーロッパと全世界が破産にむかってすすんでいる、という結論に達した。ケインズは辞職した。彼はその著書を政府の鼻さきにたたきつけてこう言った、君たちのやっていることは正気のさたではない、と。彼があげている数字を引用してみよう。それは、だいたい次のようである。

主要大国間の債務関係はどうなっているか？　ポンド貨を金ルーブリに換算し、一〇金ルーブリを一ポンドと計算しよう。そうすると、次のような結果となる。合衆国の資産は一九〇億ルーブリ、負債は零である。合衆国は戦前にはイギリスの債務国であった。同志レーヴィは、一九二〇年四月一四日、ドイツ共産党の最近の大会でおこなった報告のなかで、いま世界で自主的に行動している強国はイギリスとアメリカの二つだけになった、と述べているが、これは正しい。金融上で絶対に自主的な国は、アメリカだけになった。アメリカは戦前には債務国であったが、いまでは唯一の債権国である。世界の残りの国々はみな借金をせおっている。イギリスは資産が一七〇億ルーブリ、負債が

八〇億ルーブリという状態におちいった。同国はすでになかば債務国の状態におちいっている。おまけにイギリスの資産には、ロシアが借りている約六〇億ルーブリがはいっている。戦争中にロシアが調達した軍需物資がロシアの負債にいれられているのだ。最近クラーシンは、ロシア・ソヴェト政府の代表として、たまたま債務協定の件についてロイドージョージと会談したとき、もしイギリスの学者、政治家、イギリス政府の首脳たちが貸金の返済をあてにしているなら、それは奇妙な思いちがいだということを、彼らに明瞭に説明してやった。この思いちがいを、すでにイギリスの外交官ケインズがあばきだしていたのである。

もちろん、問題は、ロシアの革命政府が借金を払いたがらないという点だけにあるのではない。その点にはまったくない、と言ってもよいくらいである。どんな政府でも、これは支払うわけにいかないであろう。なぜなら、これらの負債は、すでに二〇倍もの金額を支払ってあるものにたいする高利貸の取立てだからである。ロシアの革命運動に全然共鳴などしていない、このほかならぬブルジョアのケインズさえ、「こういう負債を勘定にいれるわけにいかないのは、もちろんのことだ」と言っている。

フランスについては、ケインズは同国の資産三五億ルーブリ、負債一〇五億ルーブリというような数字をあげている！ しかも、これは、フランス人が自分で全世界の高利貸とよんだ国の話である。なぜなら、フランスの「貯蓄」は莫大であり、フランスの巨大な資本をつくりだした植民地略奪と金融的略奪のおかげで、同国は何十億という金額を、とくにロシアに貸し付けることができたからである。これらの借款からは莫大な収入がはいった。それにもかかわらず、また勝利したにもかかわらず、フランスは債務国の状態におちいった。

共産主義者の同志ブラウンが、その著書『だれが戦債を支払わなければならないか？』（ライプチヒ、一九二〇年）のなかであげている或るアメリカのブルジョア的資料は、国の資産にたいする負債の比率を次のように見積もっている。戦勝国のイギリスとフランスでは、負債は国の資産の総額の五〇％以上である。イタリアでは、この比率は六〇―七〇％であり、ロシアでは九〇％である。だが、諸君も知っておられるように、われわれにはこの負債は苦にならない。なぜなら、われわれはケインズの本が出るよりすこしまえに、彼のすばらしい忠告にしたがって――いっさいの負債を棒引きにしたからである。（さかんな拍手）

ただケインズは、この場合、俗物通有の奇妙な態度をさらけだしている。いっさいの負債を棒引きにするよう勧告しながら、彼は、どのみちロシアからはなにも取れないの

だから、もちろん、フランスはかえって得をするし、イギリスも、もちろん、たいして損はしない、と述べている。アメリカは相当に損をすることになるが、ケインズはアメリカの「高潔さ」をあてにしている！　この点で、われわれは、ケインズその他の小ブルジョア的平和主義者と意見がわかれる。われわれの考えでは、負債を棒引きにするためには、彼らはこれとは別のものを待つべきであって、資本家諸君の「高潔さ」をあてにするのでなく、なにか別な方向をめざしてはたらくべきである。

これらのごく簡単な数字を見ただけでも、帝国主義戦争が戦勝国にとっても耐えられない状態をつくりだしたことがわかる。賃金と物価騰貴の大きなひらきもこのことを示している。成長しつつある革命から全世界のブルジョア的秩序を擁護するための機関である最高経済委員会は、もちろん、労働者が資本の奴隷にとどまることを前提として、本年三月八日、秩序、勤労愛、倹約の呼びかけで結んでいる決議を採択した。連合国の機関、全世界の資本家の機関であるこの最高経済委員会は、次のような総括をおこなっている。

物価はアメリカ合衆国では平均して一二〇％高くなったのに、賃金の上昇は同国ではわずかに一〇〇％であった。イギリスでは物価は一七〇％、賃金は一三〇％、フランスでは物価は三〇〇％、賃金は二〇〇％、日本では物価は一三〇％、賃金は六〇％であった（これは、さきにあげた同志ブラウンの小冊子のなかの数字と、一九二〇年三月一〇日付の『タイムズ』紙にのった最高経済委員会の数字とをつきあわせたものである）。

このような情勢のもとで、労働者の憤りが高まり、革命的な気分と考えが増大し、自然発生的な大衆的ストライキが増大するのが避けられないことは、わかりきっている。なぜなら、労働者の状態が耐えられないものになっているからである。労働者は、資本家が戦争で法外に儲けながら、支出と負債を労働者に肩がわりさせていることを、経験で確信している。つい最近の電報は、アメリカがさらに五〇〇名の共産主義者をわがロシアに追放して「有害な扇動家」を厄介ばらいしたいと望んでいることを知らせてきた。

アメリカが五〇〇名でなく、まるまる五〇〇万名のロシア人、アメリカ人、日本人、フランス人の「扇動家」をわれわれのところへ追放しようと、事態は変わるものではない。なぜなら、彼らにはどうしようもない物価のこのひらきが元のままだからである。だが、それがどうしようもないのは、彼らのところでは私的所有が厳重なうえにも厳重に保護されており、それが「神聖」だからである。このことを忘れてはならない。なぜなら、搾取者の私的所有が破壊さ

れているのは、ロシアだけだからである。資本家には、物価のこのひらきはどうしようもないが、労働者は元のままの賃金では生きてゆくことができない。この災厄にたいしては、古い方法ではまったくどうしようもなく、個々のストライキや、議会闘争や、表決では、どうしようもない。なぜなら、「私的所有は神聖であり」、資本家が多くの債務を累積したため、全世界がひとにぎりの人間に隷属してしまっているからである。ところが、労働者の生活条件は、ますます耐えられないものになっている。搾取者の「私的所有」をなくすほかには、活路はないのである。

一九二〇年二月のわが『外務人民委員部通報』は、同志ラピンスキーの小冊子『イギリスと世界革命』からの貴重な抜粋をのせたが、ラピンスキーはこの小冊子のなかで、イギリスでは石炭の輸出価格が産業界の権威筋の予想よりも二倍高くなった、と述べている。

ランカシァでは、株価の値上がりは四〇〇%と見積もられるまでになった。銀行の収益は最低四〇—五〇%となっているが、さらに指摘しておかなければならないのは、どの銀行家も、銀行の収益を算定する場合、収益の大部分を、収益といわずに、賞与、ボーナスなどの名目で隠すというやり方で、秘密にしておくすべを心えていることである。だから、ここでも議論の余地のない経済的事実は、ほんのひとにぎりの人々の富が信じられないほどふえ、前代未聞の贅沢があらゆる限度をこえている一方、労働者階級の困窮がますますひどくなっていることを、示している。さらに、とくに指摘しなければならないのは、同志レーヴィがさきにあげた報告できわめてあざやかに強調している、もう一つの事情である。それは貨幣価値の変動である。貨幣価値は、公債、紙幣の発行などのために、どこでも低落した。さきにあげた同じブルジョア的な典拠、すなわち一九二〇年三月八日付の最高経済委員会の声明は、イギリスではドルにくらべて貨幣価値がほぼ三分の一低落し、フランスとイタリアでは低落は三分の二、ドイツでは九六%に達している、と計算している。

この事実は、世界資本主義経済の「仕組み」が完全に崩壊しつつあることを示している。資本主義のもとで原料の取得と生産物の販売を支えている貿易関係が、維持できなくなっているのである。まさに多くの国が一つの国に従属させられているという基盤のうえで貿易関係を維持することは、貨幣価値が変動したため不可能になっている。自国の生産物を売ることができず、原料を手に入れることもできないので、どんなに富んだ国も、どれひとつとして存続することができず、貿易をおこなうことができないのである。

こうして、あらゆる国を従属させた、最も富んだ国である当のアメリカが、買うことも売ることもできないという状態になっている。ヴェルサイユの交渉のあらゆる荒波にもまれてきた当のケインズが、資本主義を擁護しようという不屈の決意にみちているにもかかわらず、ボリシェヴィズムを激しく憎んでいるにもかかわらず、それが不可能だということを認めざるをえないのである。ついでに言えば、私は、どんな共産主義的な檄（げき）も、一般に革命的な檄も、その力づよさの点で、ケインズの著書のなかでウィルソンと実践上の「ウィルソン主義」を描いている箇所に匹敵できないと思っている。ウィルソンは、ケインズや第二(二五)インタナショナルの（さらには「第二半」インタナショナルさえもの）一連の英雄たちのような俗物や平和主義者の偶像であった。彼らはウィルソンの「一四ヵ条」(二六)をほめそやし、ウィルソン政策の「根源」について「学術」書さえ書き、ウィルソンが「社会平和」を救い、搾取される者と搾取する者とを和解させ、社会改良を実現するだろうと期待していた。ケインズは、ウィルソンがばかだということをまざまざと暴露したのであって、すべてこれらの幻想は、クレマンソー氏やロイド-ジョージ氏に代表される資本の実利的、功利的、商人的な政策にふれるやいなや、消しとんでしまったのである。労働者大衆は、ウィルソン政策の「根源」が坊主のばか話、小ブルジョア的な空文句、階級闘争のまったくの無理解でしかないことを、いまではその生活経験をつうじてますますはっきりと見てとっており、また博学な物知り連中は、もしそれを知りたいと思えば、ケインズの著書によってさえ知ることができる！

すべてこういうことから、二つの条件、二つの根本的な事情が生まれてくるのは、まったく避けられない当然のことである。一方では、大衆の困窮と零落が前代未聞に増大したが、これは、なによりも一二億五〇〇〇万の人々、すなわち地球の総人口の七〇%にあてはまる。これは、住民が法律上無権利な植民地国、従属国であり、金融的強盗に「委任統治権があたえられている」国である。そのうえ、敗戦国の奴隷状態は、ヴェルサイユ条約により、ロシアにかんする現存の秘密条約によって確認されている。もっとも、これらの秘密条約の実際の効力は、われわれが何十億かを借りていることが書いてある証書と同じくらいのものであるが。世界の歴史上はじめて、一二億五〇〇〇万の人間の略奪、奴隷状態、従属、貧困、飢えが、法律的に確認されたのである。

だが他方では、債権国となったどの国でも、労働者は耐えがたい状態におかれている。戦争は資本主義のあらゆる矛盾を、前代未聞に激化させた。この点に、深刻きわまる

革命的動揺が拡大してゆく源がある。なぜなら、戦時には、人々は軍律のもとにおかれ、死に追いやられるか、あるいはただちに軍事的制裁をこうむるおそれのもとにおかれていたからである。戦争の条件のもとでは、経済的現実を見ることは不可能であった。著作家も、詩人も、坊主も、いっさいの出版物も、戦争賛美のみを事としていた。戦争が終わったいま、暴露が始まっている。ドイツ帝国主義とそのブレストーリトフスク講和が暴露された。ヴェルサイユ講和が暴露された。このヴェルサイユ講和は帝国主義の勝利となるはずであったのに、その敗北となった。ついでながらケインズの例ではっきりするのは、辞職して自国政府の鼻さきにこの政府の罪状を明らかにした著書をたたきつけたケインズの歩いたこの道を、ヨーロッパとアメリカの小ブルジョアジー、インテリゲンツィア、いくらかでも知識があり読み書きできる者の何万人、何十万人が歩かざるをえなくなっていることである。「自由のための戦争」などという言い草がすべて徹頭徹尾欺瞞であったこと、その結果、富をえたのはごく少数の人間だけで、残りの者は零落して隷属状態におちいったことを、何万人、何十万人がさとるとき、彼らの意識にどういうことが起こるか、また今後起こるかを、ケインズは示したのである。自国の生活を救い、イギリス経済を救うために、イギリス人は、ドイツとロシアのあいだに自由な通商関係を再開させなければならないと、ブルジョアのケインズが言っているではないか！　どうすれば、そうさせることができるか？　ケインズが提案しているように、いっさいの負債を棒引きにすることによってである！　これは、博学な経済学者ケインズだけの考えではない！　何百万もの人々がこの考えにゆきつこうとしているし、またゆきつくであろう。負債を棒引きにするほかに活路はないと、ブルジョア経済学者たちが言うのを、何百万という人々が聞いているのだ。そこで、「ボリシェヴィキ」（負債を棒引きにした）「よ、呪われてあれ」、われわれはアメリカの「高潔さ」にうったえよう!!　というわけだ。私は、ボリシェヴィズムのために扇動をしてくれるこういう経済学者には、共産主義インタナショナルの大会の名で、感謝のあいさつを送ってしかるべきだと思う。

一方で、大衆の経済状態が耐えられないものになっており、他方で、ごく少数の全能の戦勝国のあいだに、ケインズが例をあげて説明しているような崩壊が始まり、強まっているとすれば、われわれは世界革命の二つの条件がまさに成熟しつつあるのを見ているわけである。

いまや全世界の状景は、まえよりもいくらか完全なかたちでわれわれのまえにある。耐えられない生存条件のもと

におかれた一二億五〇〇〇万の人々がこんなふうにひとにぎりの金持に従属していることが、いったいなにを意味するかを、われわれは知っている。他方では、自分たちは戦争をやめたし、今後はだれであろうと平和をやぶることは許さないと宣言した規約が国際連盟によって諸国民に提示されると、全世界の勤労大衆の最後の望みの綱であったこの規約が発効してみると、それはわれわれの最大の勝利になった。まだ規約が発効していなかったころには、ドイツのような国は特殊な条件に服させせないわけにはいかないが、規約ができれば、うまくいくから見ていたまえ、と言ってきかされた。ところが、規約が公表されると、ボリシェヴィズムの名うての反対者でさえ、それを否認せざるをえなかった！　規約が発効しはじめると、ごく少数の最も富裕な大国グループに、この「四巨頭」――クレマンソー、ロイドージョージ、オルランド、ウィルソン――に、新しい諸関係をつくりだす仕事がまかされたことがわかった！　規約の機構が運営されだしたとたんに、完全な崩壊となったのである！

われわれは、対ロシア戦争でこのことを見た。弱い、零落し、押しつぶされたロシア、この最も遅れた国が、すべての国をむこうにまわし、地球全体を支配している富裕な強国の同盟をむこうにまわして戦い、勝利者となっているのである。われわれはいくらかでも互角な兵力を対置することができなかったのに、勝利者となった。なぜか？　彼らのあいだに統一の影さえなかったからである。大国どうしが戦っていたからである。フランスは、ロシアがフランスに負債を支払うこと、ドイツを脅かす力となることを望んだ。イギリスはロシアの分割を望んだ。イギリスはバクーの石油を奪取し、ロシアの辺境諸国と条約を結ぼうと試みた。イギリスの公文書の一つに、約半年前の一九一九年一一月にモスクワとペトログラードの占領を盟約した国家を全部（その数は一四である）非常にきちょうめんに列挙している書物がある。イギリスはこれらの国家をあてにして自国の政策を打ちたて、それらの国に何百何千万という借款をあたえた。だが、いまではこうした思惑はみなご破算になり、借款はみな水の泡になってしまった。

これこそ、国際連盟のつくりだした情勢である。この規約が存続する一日一日が、ボリシェヴィズムのための最良の扇動である。なぜなら、資本主義的「秩序」の最も強力な支持者たちが、どの問題についても足をすくいあっていることを見せつけているからである。トルコ、ペルシア、メソポタミア、中国の分割をめぐって、日本、イギリス、アメリカ、フランスのあいだに猛烈ないがみあいが起こっている。これらの国のブルジョア新聞は、自分の「同僚」

がつい鼻のさきから獲物をかっさらってゆくのを見て、まったく気ちがいじみた攻撃と怒りくるった論難にみちみちている。このごく少数の最も富裕な国々のあいだでは、上層に完全な分裂が見られる。「先進的な」文明的な資本主義は、一二億五〇〇〇万の人々を奴隷としたいのだが、それではこの人々は生きてゆくことができない。しかも、これはなんといっても地球総人口の七〇%ではないか。ひとにぎりの最も富裕な大国、イギリス、アメリカ、日本（日本は東洋諸国、アジア諸国を略奪することができたが、他の国の支持がなければ、自主的な金融上、軍事上の力をまったくもたない）——この二つか三つの国は、経済関係をうまく調整することができずに、仲間である国際連盟加盟国の政策をぶちこわすことに、自国の政策の目標をおいている。ここから世界的危機が生まれてくる。そして危機のこれらの経済的根源こそ、共産主義インタナショナルがすばらしい成功をおさめている基本的な原因なのである。

同志諸君！　われわれはいまや、われわれの革命的活動の基礎である革命的危機の問題にたどりついた。ここでは、ひろく見られる二つの誤りをまず指摘しなければならない。一方では、ブルジョア経済学者たちは、この危機を、イギリス人の優雅な言いまわしにしたがって、たんなる「不穏」のように描いている。他方では、革命家たちは、ときとして、この危機には絶対に活路がないことを証明しようとつとめている。

これは誤りである。絶対に活路のない情勢というものはない。ブルジョアジーは、図にのって分別をなくした猛獣のようなふるまいをしている。彼らは、つぎつぎとばかなまねをして、情勢を激化させ、自分の破滅を速めている。これはみなほんとうである。だが、ブルジョアジーがある少数の被搾取者をなにかちっぽけな譲歩で眠りこませたり、被抑圧者や被搾取者のある部分のある運動または蜂起を鎮圧したりする可能性が絶対にないということを、「証明」することはできない。「絶対に」活路がないことをまえもって「証明」しようとするのは、空疎な衒学か、さもなければ概念やことばをもてあそぶことであろう。この問題やこれに類した問題のほんとうの「証明」となりうるのは、実践だけである。ブルジョア制度は全世界で最大の革命的危機にある。革命的諸党は、この危機を利用して革命を成功させ勝利させるに足る自覚、組織性、被搾取大衆との結びつき、決意、能力をもっていることを、いまやその実践によって「証明」しなければならない。

われわれが共産主義インタナショナルの本大会に集まったのも、おもにこの「証明」を準備するためである。第三インタナショナルへの加盟を望んでいる諸党のあい

だにまだどれほど日和見主義が支配しているか、一部の党の活動が、革命的危機を利用する準備を革命的階級にととのえさせるところまでまだどれほど遠いかを示す実例として、イギリス「独立労働党」の指導者、ラムゼイ・マクドナルドをあげよう。マクドナルドは、いまわれわれが論じているものとまさに同じ根本問題を取り扱った著書『議会と革命』のなかで、ほぼブルジョア平和主義者の精神で事態を描いている。彼は、革命的な危機があり、革命的な気分が成長しており、労働者大衆がソヴェト権力とプロレタリアートの執権に共鳴しており（注意したまえ、これはイギリスの話なのだ）、プロレタリアートの執権がイギリス・ブルジョアジーの現在の執権よりもよいものだということを認めている。

だが、マクドナルドは、いまなお骨の髄までのブルジョア的な平和主義者、協調主義者であり、階級を超越した政府を夢みる小ブルジョアである。マクドナルドはブルジョアジーのすべての嘘つき、詭弁家、衒学者と同じく、階級闘争を「記述上の事実」として認めているだけである。マクドナルドは、「民主主義的な」、いわば超階級的な政府をつくろうとしたロシアのケーレンスキーや、メンシェヴィキとエス・エルの経験、ハンガリー、ドイツ等々の同じような経験については沈黙をまもっている。マクドナルドは、「これ（つまり革命的危機、革命的動揺）がやがて過ぎさり、静まることを、われわれは知っている」ということばで、自分の党を眠りこませ、不幸にしてこのブルジョアを社会主義者と勘ちがいし、この俗物を指導者と勘ちがいしている労働者を眠りこませようとしている。戦争が危機を引きおこすのは避けられなかったが、戦争がすめば、すぐにではなくとも、「万事は静まるだろう」というのである！

しかも、第三インタナショナルへの加盟を希望している党の指導者である人が、こういうことを書いているのである。これは、フランス社会党やドイツ独立社会民主党の上層にもこれにおとらずしばしば見うけられること、つまり、革命的危機を革命的に利用するすべを知らないばかりでなく、利用する意志もないこと、言いかえれば、党と階級にプロレタリアートの執権のほんとうに革命的な準備をととのえさせるすべを知りもしなければ、そうする意志もないことを、まれにみるほど率直に、それだけにいっそう貴重な仕方で暴露するものである。

これこそ、いま第二インタナショナルから脱退しつつある非常に多くの党の基本的な疾患である。だからこそ、私がこの大会に提案したテーゼでは、私はなによりも、プロレタリアートの執権を準備する任務をできるだけ具体的かつ正確に規定することに、くわしくたずさわっているので

ある。

もう一つ例をあげよう。最近ボリシェヴィズム反対の新しい本が公けにされた。こういう種類の本は、現在、ヨーロッパとアメリカで非常にたくさん出ている。ボリシェヴィズム反対の本がたくさん出ればでるほど、大衆のあいだには、それだけ強く、また急速にボリシェヴィズムへの共鳴が高まってゆく。私が言っているのは、オットー・バウアーの著書『ボリシェヴィズムか社会民主主義か?』のことである。メンシェヴィズムがロシア革命で果たした恥さらしな役割のことは、あらゆる国の労働者に十分に理解されているが、そのメンシェヴィズムとはいったいどんなものかということが、この本でドイツ人にはっきり示されている。オットー・バウアーは自分がメンシェヴィズムに共鳴していることを隠しているものの、徹頭徹尾メンシェヴィキ的な小冊子を出したのである。しかし、現在、ヨーロッパとアメリカで必要なことは、メンシェヴィズムとはどんなものかについて、もっと正確な知識をひろめることである。なぜなら、メンシェヴィズムとは、ボリシェヴィズムに敵意をもつすべての自称社会主義的、社会民主主義的、等々の潮流の類概念だからである。メンシェヴィズムとはどんなものかについてヨーロッパのために書くのは、われわれロシア人には退屈なことであろう。オットー・バウアーは、これを彼の本で実際に示してくれた。われわれは、この本を出版し、また各国語に翻訳するブルジョア出版業者や日和見主義的出版業者に、まえもって感謝しておこう。バウアーの本は、共産主義の教科書の、風変わりではあるが有益な補足となるであろう。どれでもいいからオットー・バウアーの本のある一節、ある議論をとって、メンシェヴィズムとはどんなものか、ケーレンスキー、シャイデマンなどの友人である社会主義の裏切者どもの実践をもたらしている見解の根源がどこにあるかを示せ——これは、共産主義を習得したかどうかを確かめる「試験」に出せば、役に立つうまい問題になることであろう。この問題が解けないようなら、諸君はまだ共産主義者ではなく、まだ共産党にはいらないほうがよろしい。(拍手)

オットー・バウアーは世界日和見主義の見解の全核心を一句でみごとに言いあらわした。われわれは、この一句の褒美として、——われわれがウィーンで自由にふるまえるものなら——彼の生きているあいだに記念碑を立ててやるべきであろう。今日の民主主義国の階級闘争で強力を行使することは、「力の社会的な諸要因に強力をくわえる」ことだと、オットー・バウアーはご託宣になる。

おそらく、諸君にはこれは奇妙で、不可解に感じられることであろう? これこそ、マルクス主義をどんなものに

したか、最も革命的な理論をどんな卑俗なものに、搾取者擁護論にすることができるかの見本である。俗物根性のドイツ的変種がはじめて、「力の社会的な諸要因」とは数、組織性、生産と分配の過程における地位、行動性、教育である、といった「理論」を提供できるのである。農村の雇農と都市の労働者が地主と資本家に革命的強力を行使しても、それはけっしてプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）ではなく、けっして人民の搾取者と抑圧者にたいする強力ではない。それはけっしてそんなものではない。それは「力の社会的な諸要因に強力をくわえることとである」。

私の例はすこしおどけたものになったかもしれない。だが、今日の日和見主義の本性、それのボリシェヴィズムにたいする闘争はおどけたものになるのである。労働者階級を、この階級のうちの、ものを考えるすべての人々を、国際的メンシェヴィズム（マクドナルド、O・バウアー一派）とボリシェヴィズムとの闘争に引きいれること——これは、ヨーロッパとアメリカにとって最も有益な、最もさしせまった問題である。

ここでわれわれは、ヨーロッパでこのような潮流が強固なのはなぜなのか、なぜ西ヨーロッパではこの日和見主義がロシアよりも強いのか、という問題を出さなければならない。それは、先進諸国が、一〇億の被抑圧者の犠牲で生活していけるという事情によってみずからの文化をつくってきたし、また現につくっているからである。また、これらの国の資本家が、自国の労働者の略奪から利潤として手に入れられるであろうものよりずっと大きな額を手に入れているからである。

戦前には、最も富裕な三国、イギリス、フランス、ドイツは、ほかの収入を計算に入れず、資本の対外輸出からだけでも、年間八〇億から一〇〇億フランの収入をあげていると見られていた。

このかなりな金額のなかから、労働者の指導者や労働貴族への施し物のため、さまざまな買収のために、すくなくとも五億を投じることができるのは、もちろんである。万事は、要するに、買収に帰着する。買収の方法は、最大の中心地の文化を高めたり、教育機関をつくったり、協同組合の指導者や労働組合の指導者や議会の指導者のために何千もの役職を設けたり、かぎりなく多種多様である。だが、現代の文明的な資本主義的諸関係の存在するところではどこでも、買収がおこなわれている。これらの数十億の超過利潤こそ、労働運動内の日和見主義を支えている経済的基礎である。アメリカ、イギリス、フランスでは、日和見主義的指導者、労働者階級の上層、労働貴族ははるかに頑強である。彼らは共産主義運動にいっそう強く抵抗している。

だから、ヨーロッパとアメリカの労働者党からこの病気を取りのぞくのは、ロシアの場合よりも困難なことを、われわれは覚悟しなければならない。第三インタナショナルが創立されて以来、この病気をなおす面で非常に大きな成功がおさめられたが、まだ決定的な結末には達していないことを、われわれは知っている。全世界の労働者党やプロレタリアートの革命党からブルジョア的影響を取りのぞき、これらの党内の日和見主義者を取りのぞく仕事は、まだまだ完了するどころの話ではない。

具体的にどうやってこれを取りのぞくかについては、くわしくは論じるまい。それについては、発表されている私のテーゼに述べてある。ここでの私の任務は、この現象の深い経済的な根源を示すことである。この病気は長びいている。この病気の治療は、おそらく楽観論者が期待していたよりも長びいている。日和見主義はわれわれの主要な敵である。労働運動の上層の日和見主義は、プロレタリア社会主義ではなく、ブルジョア社会主義である。労働運動内の活動家で日和見主義的な傾向に属する者は、ブルジョアそのものを上まわるブルジョアジー擁護者であることは、実践的に証明されている。労働者の指導権が彼らの手になければ、ブルジョアジーはもちこたえることができないであろう。このことは、ロシアのケーレンスキー政府の歴史によって証明されているだけではない。それは、社会民主党政府をいただくドイツの民主的共和制によって証明され、自国のブルジョア政府にたいするアルベール・トマの態度によって証明されている。イギリスと合衆国における同様な経験も、これを証明している。ここにわれわれの主要な敵がおり、われわれはこの敵に勝利しなければならない。あらゆる党でこの闘争を最後まで遂行するという堅い決意をいだいて、われわれはこの大会を去らなければならない。これが主要な任務である。

この任務にくらべると、共産主義内の「左翼的な」潮流の誤りをただすことは、たやすい任務であろう。多くの国には反議会主義が見うけられる。この反議会主義は、小ブルジョアジーの出身者がもちこんできたものというより、むしろプロレタリアートの若干の先進部隊が、これまでの議会主義にたいする憎しみから、イギリスや、フランスや、イタリアや、すべての国の議会活動家の行状にたいする正当な、正しい、必然的な憎しみから、それを支持しているのである。共産主義インタナショナルから指針をだして、同志たちにロシアの経験と真のプロレタリア政党の意義をもっとよく、もっと深く知らせなければならない。この任務を解決することがわれわれの活動の内容となろう。そして、プロレタリア運動のこういう誤りとたたかい、こうい

う欠陥とたたかうことは、改良主義者という装いのもとに第二インタナショナルの古い諸党にはいりこんで、それらの党の全活動をプロレタリア的精神でなくブルジョア的精神に立って指導しているブルジョアジーとたたかうよりは、はるかにやりやすいことであろう。

同志諸君、終りにあたって、問題のなおひとつの側面にふれたいと思う。この席で同志議長は、本大会は世界大会の名に値すると述べた。とくにこの大会には植民地国や後進国の革命運動の代表者がすくなからずいる点からみて、彼の言うのは正しいと思う。これは微弱な土台にすぎないが、この土台がすえられたということが、重要である。先進資本主義国の革命的プロレタリアと、プロレタリアートが全然いないか、またはほとんどいない国の革命的大衆との、東洋の植民地国の被抑圧大衆との統合――この統合が本大会でおこなわれている。この統合を強固なものにすることは、われわれにかかっている――そして、われわれはこれをやりとげるだろう、と私は確信している。各国内部の搾取され抑圧されている労働者の革命的な強襲が、小ブルジョア分子の抵抗や労働貴族のごく少数の上層の影響にうちかって、これまで歴史のそとにあって歴史の客体としか見られていなかった何億という人々の革命的な強襲と結びつくとき、世界帝国主義は没落するにちがいない。

帝国主義戦争は革命の手助けをした。ブルジョアジーは、この帝国主義戦争に参加させるために、植民地から、後進国から、見捨てられていた地域から、兵士を引きぬいてきた。イギリスのブルジョアジーは、イギリスをドイツから守ることがインド農民の任務であると、インド出身の兵士に吹きこんだ。フランスのブルジョアジーは、フランスを守ることが黒人の任務であると、フランス植民地出身の兵士に吹きこんだ。これらの兵士は兵器の使用法を学んだ。これは、きわめて有益な技能である。われわれはこのことでブルジョアジーにふかく感謝してよいだろう――ロシアのすべての労働者と農民を代表し、とくにロシアの全赤軍を代表して感謝してよいだろう。帝国主義戦争は従属民族を世界史に引きいれた。いまわれわれの最も重要な任務のひとつは、非資本主義国のソヴェト運動を組織する最初の石をどうすえるかを熟考することである。そういう国でソヴェトは可能である。それは労働者ソヴェトとはならないであろう。それは農民ソヴェトあるいは勤労者ソヴェトとなるであろう。

それには多くの活動が必要であろう。誤りは避けられないであろうし、その途上で多くの困難にぶつかるであろう。第二回大会の基本的な任務は、いままで何億という人々のあいだに非組織的におこなわれてきた活動が、組織的に、

結束して、系統的におこなわれるようにするために、実践的な原則をつくりあげること、あるいはその大綱を示すことである。

共産主義インタナショナル第一回大会から一年あまりしかたっていないのに、いまわれわれは第二インタナショナルにたいして勝利者になっている。いまではソヴェトの思想は、文明諸国の労働者のあいだにだけひろまっているのではなく、彼らにだけ理解され、知られているのではない。すべての国の労働者は利口ぶった人々をあざわらっている。こういう人々のあいだには、社会主義者と自称して、体系屋のドイツ人が好んでつかっている表現によればソヴェト「体系」について、あるいはイギリスの「ギルド」社会主義者[三]がつかっている表現によればソヴェト「思想」について、学者ふうの、あるいは学者まがいの議論をしている者が少なくない。ソヴェト「体系」とソヴェト「思想」にかんするこういう議論は、しばしば労働者の目と頭にごみをつめこんでいる。だが、労働者はこの衒学的なごみを投げすてて、ソヴェトの提供した武器をとろうとしている。ソヴェトの役割と意義の理解は、いまでは東洋諸国にもひろがっている。

全東洋に、全アジアに、全植民地民族のあいだに、ソヴェト運動の土台がすえられている。

被搾取者は搾取者に反対して決起し、自分たちのソヴェトをつくらなければならないという命題は、たいして複雑なものではない。それは、われわれの経験のあとでは、ロシアにソヴェト共和国ができて二年半たったあとでは、第三インタナショナルの第一回大会があったあとでは、搾取者に抑圧されている全世界の何億という大衆に理解できるものになっている。いまロシアのわれわれが、国際帝国主義者よりも弱いために、しばしば妥協し、時機を待つことを余儀なくされているとしても、一二億五〇〇〇万の人々こそ、われわれがその利益を擁護している当の大衆なのだということを、われわれは知っている。いまのところ、われわれは妨害物、偏見、無学に妨げられているが、それらは時々刻々に過去のものになっており、先にいけばいくほど、われわれは地球総人口のこの七〇%を、勤労被搾取者のこの大衆を、ますます実際に代表し、擁護するようになってゆく。われわれは誇りをもって次のように言うことができる。——第一回大会では、われわれは実質上宣伝家にすぎなかった。われわれは全世界のプロレタリアートに基本的な思想を投げかけたにすぎなかった。われわれは闘争の呼びかけを投げかけたにすぎなかった。われわれは、この道を前進することのできる人々はどこにいるだろうか、と質問したにすぎなかった。いまわれわれは、どこにでも

先進的なプロレタリアートをもっている。なるほど、ときにはその組織がまずく、改組を必要としてはいるが、とにかくどこにいってもプロレタリア軍がいる。いま単一の軍隊を編成しようとしているわれわれを、わが国際的な同志諸君が助けてくれるならば、どんな欠陥もわれわれが自分たちの大業をなしとげるのを妨げはしないであろう。この大業は、世界プロレタリア革命の大業であり、世界ソヴェト共和国を創設する大業なのである。(長く、つづく拍手)

『プラウダ』、第一六二号、一九二〇年七月二四日
全集、第五版、第四一巻、二二五―二三五ページ所収
邦訳全集、第三一巻、二〇七―二一七ページ所収

二 民族・植民地問題委員会の報告(三)

七月二六日

同志諸君、私は、簡単なまえおきだけにとどめるが、あとで、わが委員会の書記であった同志マーリングが、われわれがテーゼにくわえた変更について、諸君にくわしく報告することになっている。彼のあとで、補足テーゼを定式化した同志ロイが発言するであろう。わが委員会は、最初のテーゼとその変更をも、補足テーゼをも、全員一致で採択した。こうして、われわれは、最も重要な問題のすべてについて完全な意見の一致に達することができた。これから、二、三の意見を簡単に述べよう。

第一に、われわれのテーゼの最も重要な、基本的な思想はなにか? それは、被抑圧民族と抑圧民族とを区別することである。第二インタナショナルやブルジョア民主主義派とは反対に、われわれはこの区別を強調する。プロレタリアートと共産主義インタナショナルにとって、帝国主義の時代にとくに重要なことは、具体的な経済的事実を確認し、あらゆる植民地・民族問題の解決にあたって、抽象的な命題からではなく、具体的現実の諸現象から出発することである。

帝国主義の特徴は、われわれの見ているように、げんざい全世界が多数の被抑圧民族と、莫大な富と強大な軍事力をもっている、ほんの少数の抑圧民族とに分裂していることである。一〇億人以上、おそらくは一二億五〇〇〇万人にのぼる圧倒的多数者が、すなわち地球の総人口を一七億五〇〇〇万人としてその約七〇%が、被抑圧民族に属しており、彼らは、直接の植民地的従属のもとにあるか、あるいは、たとえば、ペルシア、トルコ、中国のような半植民地国家であるか、それともまた帝国主義的大国の軍隊に征服されて、講和条約によってその大国に強く従属している

かである。民族を抑圧民族と被抑圧民族とに区別し、区分するというこの考え方が、すべてのテーゼの条項を、私の署名つきで発表されまえに印刷された最初のテーゼばかりでなく、同志ロイのテーゼの条項をもつらぬいている。同志ロイのテーゼは、主として、イギリスに抑圧されているインドその他のアジアの大民族の地位の立場から執筆されている。そして、この点に、このテーゼがわれわれにとって最も重要な意義がある。

われわれのテーゼの第二の指導的な思想は、帝国主義戦争後の今日の世界情勢のもとでは、諸民族の相互関係、諸国家の世界体系全体は、ソヴェト運動とソヴェト・ロシアを先頭とするソヴェト諸国家にたいして帝国主義的民族の一小グループがおこなっている闘争によって規定されているということである。このことを見のがすならば、どんな民族問題あるいは植民地問題も――たとえそれが世界の最もへんぴな片隅の問題であろうとも――、正しく提起することはできないであろう。文明国であると後進国であるとを問わず、共産党は、この見地から出発するときにはじめて、政治問題を正しく提起し、解決することができる。

第三に、私は、後進国のブルジョア民主主義運動の問題をとくに強調したいと思う。いくらか意見の相違が起こったのは、ほかでもないこの問題である。共産主義インタナショナルと共産党は後進国のブルジョア民主主義運動を支持しなければならないと述べることが、原則的、理論的に正しいかどうかについて、われわれは論争した。この討論の結果、われわれは、「ブルジョア民主主義」運動と言わずに民族解放運動と言おうという決定に、全員一致で達した。後進国の住民の大多数はブルジョア的＝資本主義的関係の代表者である農民からなっているので、どんな民族運動もブルジョア民主主義運動でしかありえないということは、すこしも疑う余地がない。このような国におよそプロレタリア党が出現しうるとしても、そのプロレタリア党は、農民運動と一定の関係をもたずに、また農民運動を実際に支持せずに、これらの後進国で共産主義的戦術と共産主義的政策を実行できるなどと考えたなら、それはユートピアであろう。だがここで、次のような異論がもちだされた。もしわれわれがブルジョア民主主義運動と言うなら、改良主義運動と革命運動の区別がいっさい抹殺されてしまうだろう。ところが、この区別は、最近後進国や植民地国で非常にはっきりと現われてきている。というのは、帝国主義的ブルジョアジーが全力をあげて被抑圧民族のあいだにも改良主義運動を植えつけようとつとめているからである。搾取する国のブルジョアジーと植民地国のブルジョアジーのあいだに、ある種の接近が起こった。だから、被抑圧諸

国のブルジョアジーが民族運動を支持するが、それと同時に、帝国主義的ブルジョアジーと協調して、すなわち彼らと協力して、あらゆる革命運動や革命的階級とたたかう場合が非常に多い。おそらく、大多数の場合がそうだとさえ言えるであろう。委員会では、このことが反駁の余地のないほど証明された。そこで、われわれは、改良主義運動と革命運動のこの違いを考慮にいれ、ほとんどどこでも「ブルジョア民主主義」という言いまわしを「民族革命」という言いまわしに代えることが、唯一の正しいやり方だと考えたのである。このおきかえの意味は次のようなものである。すなわち、共産主義者としてわれわれは、植民地諸国のブルジョア的解放運動がほんとうに革命的である場合にかぎって、われわれが農民と広範な被搾取大衆を革命的精神で教育し組織するのをこの運動の代表者が妨げない場合にかぎって、この運動を支持しなければならないし、また支持するであろう。もしこうした条件が存在しないなら、共産主義者は、これらの国で改良主義的ブルジョアジーとたたかわなければならない。第二インタナショナルの英雄たちも、この改良主義的ブルジョアジーに属している。改良主義党は、植民地諸国にもすでに存在している。その代表者たちは、ときには社会民主主義者や社会主義者と自称している。前述の改良主義運動と革命運動の区別は、いまではテーゼ全体にわたってつけられている。その結果、われわれの見地はいまやはるかに正確に定式化されたと思う。

つぎに、もうひとつ農民ソヴェトについて意見を述べてみたい。かつてツァーリズムに属していた植民地、トゥルケスタンその他のような後進国でのロシア人共産主義者の実践活動は、資本主義以前の諸条件にどのようにして共産主義的な戦術と政策を適用するかという問題を、われわれに提起した。というのは、これらの国ではまだ資本主義以前の関係が支配しており、したがってそこでは純粋なプロレタリア運動は問題になりえないということが、これらの国の最も重要な特徴だからである。これらの国には、工業プロレタリアートはほとんどいない。それにもかかわらず、われわれはそこでも指導者の役割を引き受けなければならない。われわれの活動が示しているように、これらの国では今後も非常に大きな困難を克服しなければならない。しかし、そうした困難にもかかわらず、プロレタリアートがほとんどいないところでも、大衆のあいだに自主的な政治的思考と自主的な政治活動への意欲をめざめさせることができるということも、やはりわれわれの活動の実践的結果が示している。この活動は、われわれにとっては、西ヨーロッパ諸国の同志の場合よりもいっそう困難であった。なぜなら、ロシアのプロレタリアー

トは国家活動で手いっぱいになっているからである。半封建的従属のもとにある農民が、ソヴェト組織という考えをりっぱに会得し、それを実際に実現することができるのは、まったく明白である。また、商業資本に搾取されているばかりでなく、封建領主や封建制にもとづく国家によっても搾取されている被抑圧大衆が、彼らの条件のもとでも、この武器、この種の組織を適用する能力をもっていることも、同様にはっきりしている。ソヴェト組織という考えは、単純なものであって、プロレタリア的関係に適用できるばかりでなく、農民の封建的および半封建的関係にも適用できるものである。この分野でのわれわれの経験は、いまのところまだたいして大きなものではないが、植民地諸国の何人かの代表者が参加した委員会での討論は、共産主義インタナショナルのテーゼに次のことを示す必要があることを、まったく反駁の余地のないほどに証明した。それは、農民ソヴェト、被搾取者のソヴェトは、資本主義国ばかりでなく、資本主義以前の諸関係が存在する国々にとっても有用な手段であるということ、農民ソヴェト、勤労者ソヴェトという考えを、いたるところで、どこででも、後進国でも植民地でも宣伝することが、共産党や、すすんで共産党をつくろうとする分子の無条件の義務だということである。彼らは、事情が許しさえすればどこででも、勤労人民ソヴェトをつくるようただちにやってみなければならない。

ここでは、われわれのまえに、実践活動のきわめて興味ぶかい、重要な分野がひらけている。いまのところまだ、この面でのわれわれの全経験はとりたてて大きなものではないが、しだいに、ますます多くの資料がわれわれのところに蓄積されるであろう。先進国のプロレタリアートは、遅れた勤労大衆を助けることができるし、また助けなければならないということ、ソヴェト諸共和国の勝利したプロレタリアートがこれらの大衆に手をさしのべ、彼らを支持することができるようになれば、後進国は現在の発展段階をぬけだせるということには、争う余地はまったくない。

この問題について、委員会では、私の署名したテーゼに関連してだけでなく、より多く同志ロイのテーゼに関連して、かなり活発な討論がおこなわれた。同志ロイは、この席で彼のテーゼを擁護するであろうが、それには若干の修正が全員一致で採択された。

問題は次のようなかたちで出されていた。いま解放の途上にあり、戦後の今日、その内部に進歩的な運動が認められる後進諸民族にとって、国民経済発展の資本主義的段階が避けられないという主張を、正しいものと認めることができるか、と。われわれは、この問題に、いな、と答えた。勝利した革命的プロレタリアートがこれらの民族のあいだ

で系統的な宣伝をおこない、ソヴェト諸政府がそのもっているあらゆる手段を用いてこれらの民族を援助するかぎり、後進民族にとって資本主義的発展段階が避けられないという考えは、まちがいである。われわれは、あらゆる植民地と後進国で、独自の闘士要員、党組織をつくらなければならないだけではなく、また農民ソヴェトを組織するための宣伝をただちにおこなって、資本主義以前の諸条件に農民ソヴェトを適応させるようにつとめなければならないだけでもない。さらに共産主義インタナショナルは、先進国のプロレタリアートの援助によって後進国はソヴェト制度へ移り、特定の発展局面を経て、資本主義的発展段階をとおらずに、共産主義に移ることができるという命題を確立し、その理論的基礎を示さなければならない。

そのためにはどんな手段が必要かを、まえもって示すことはできない。実地の経験がそれをわれわれに教えてくれるであろう。しかし、ソヴェトの思想が、最もへんぴな地域の諸民族のあいだでもすべての勤労大衆に身近なものであること、この組織すなわちソヴェトを、資本主義以前の社会制度の諸条件に適応させなければならないこと、共産党が全世界でただちにこの方向で活動を始めなければならないことは、はっきりしている。

さらに私は、共産党が自国だけでなく植民地国でも革命的活動をおこない、とくに自国の植民地民族を隷属させておくために搾取民族が利用している軍隊のあいだで革命的活動をおこなうことの意義を指摘したい。

イギリス社会党[二九]の同志クウェルチが、われわれの委員会でこのことについて述べた。彼は、隷属した民族がイギリスの支配に反抗して立ち上がるのを助ける者があれば、イギリスの普通の労働者はそれを反逆と見なすであろう、と言った。たしかに、ジンゴイズム[三〇]と排外主義の気分をもっているイギリスとアメリカの労働貴族は、社会主義にとって最大の危険をあらわしており、第二インタナショナルの最も強力な支柱であって、ここでわれわれは、このブルジョア・インタナショナルに属している指導者と労働者の最大の裏切りに直面するのである。第二インタナショナルでも、植民地問題は討議された。バーゼル宣言[三一]も、これについてまったくはっきり述べている。第二インタナショナルの諸党は革命的に行動すると約束したけれども、それらの党には真に革命的な活動は見られないし、搾取されている従属民族が抑圧民族に反抗して立ち上がるのを援助している場合も見られない。これは、第二インタナショナルを脱退して、第三インタナショナルへの加入を望んでいる党の大多数にあっても、同様だと思う。われわれは、このことを万人の前で公言しなければならない。これを反駁するこ

とは不可能である。反駁しようとする者があるかどうか、拝見しよう。

われわれの決議の基礎になっているのは、以上のような考えである。この決議はたしかに長すぎるが、とにかく役に立つであろうし、民族・植民地問題でほんとうに革命的な活動を発展させ組織する助けとなるであろうと、私は信じている。これこそ、われわれの主要な任務なのである。

『共産主義インタナショナル第二回大会通報』第六号、一九二〇年八月七日
全集、第五版、第四一巻、二四一―二四七ページ所収
邦訳全集、第三一巻、二三三―二三八ページ所収

三　議会主義についての演説

八月二日

同志ボルディガは、どうやら、ここでイタリアのマルクス主義者の見地を擁護するつもりだったらしい。だが、それにもかかわらず、彼は、ここで他のマルクス主義者たちが議会活動に賛成してあげた論拠のどれひとつにも答えなかった。

同志ボルディガは、歴史的経験が人為的につくられるものでないことを認めた。ついさきほど彼は、闘争を他の一分野に移さなければならないと、われわれに言った。いったい彼は、どんな革命的危機も議会の危機をともなったことを、知らないのだろうか？　なるほど、彼は、闘争を他の一分野に、すなわちソヴェトに移さなければならないと言った。しかし、ソヴェトを人為的につくりだすわけにいかないのは、ボルディガ自身が認めたことなのだ。ロシアの実例は、ソヴェトを組織することができるのは革命の時期か、それとも革命の直前かであることを、証明している。ケーレンスキーの時期にさえ、ソヴェト（すなわちメンシェヴィキ的ソヴェト）は、けっしてプロレタリア権力を構成できないような仕方で組織されていた。議会は歴史的発展の産物であって、われわれがブルジョア議会を解散できるほど強くないあいだは、この歴史的産物を実生活から抹殺することはできない。ブルジョア議会の議員であってはじめて、当面の歴史的事件から出発して、ブルジョア社会や議会制度とたたかうことができるのだ。ブルジョアジーが闘争に用いているのとまさに同じ手段を、プロレタリアートもまた――もちろん、まったく違った目的に――用いなければならない。諸君は、そんなことはない、と主張することはできない。諸君がこれに異論をとなえたいのなら、まさにそうすることで、諸君は世界のすべての革命は事件の経験を抹殺しなければならなくなる。

労働組合も日和見主義的で、危険であると、君は言った。だが、君はその一方で、労働組合は労働者組織であるから、これは例外としなければならない、と言った。だが、それが正しいのは、ある程度までのことにすぎない。労働組合にも、ごく遅れた分子がいる。プロレタリア化した小ブルジョアジーの一部分、遅れた労働者、小農――すべてこれらの分子は、自分たちの利益が議会で代表されるものとほんとうに思っている。これにたいしては、議会内の活動によってたたかって、事実にもとづいて大衆に真実を示さなければならない。遅れた大衆には理論はききめがない。彼らに必要なのは経験である。

こういうことはロシアでも見られた。憲法制定議会によってはなにも達成できないことを遅れた労働者に証明するために、われわれは、プロレタリアートが勝利したあとで、憲法制定議会〔三〕を招集しなければならなかった。われわれは、ソヴェトの経験と憲法制定議会の経験との比較のために、両者を具体的に対置し、ソヴェトがただ一つの活路であることを遅れた労働者に示さなければならなかった。

革命的サンディカリスト〔三〕である同志スーヒも同じ理論を擁護したが、彼には論理はなかった。彼は、自分はマルクス主義者ではないと言った。だから、これは当然である。しかし、同志ボルディガよ、君が自分はマルクス主義者だと主張するからには、君にはもっと多くの論理を要求しなければならない。どうすれば議会を粉砕できるかを、君は知らなければならない。君がすべての国で武装蜂起によってこれをやりとげることができるなら、それは大いにけっこうである。君も知っているように、われわれはロシアで、理論上ばかりでなく、実践のうえでも、ブルジョア議会を破壊するという意志を証明した。しかし、これはかなり長期の準備がなければ不可能なことであり、大多数の国では一撃で議会を破壊することはまだ不可能であるという事実を、君は見おとした。われわれは、議会を破壊するために議会内でたたかわざるをえなかった。君は、現在の社会のすべての階級の政治方針を規定している諸条件のかわりに、君の革命的意志をもちだしている。そこで君は、われわれがロシアのブルジョア議会を破壊するためには、われわれが勝利したのちにさえ、まず憲法制定議会を招集しなければならなかったことを忘れるのである。「たしかに、ロシア革命は西ヨーロッパの諸条件には適合しない実例である」と、君は言った。しかし、そのことをわれわれに証明するために、君は、もっともと思わせるような論拠をなにひとつあげなかった。われわれは、ブルジョア民主主義の時期をとおってきた。憲法制定議会の選挙のための扇動をおこなわざるをえなかったときに、われわれは、この時期

を急速にとおりすぎたのである。そして、その後、労働者階級がすでに権力を奪取できるようになったときでも、農民はまだブルジョア議会の必要を信じていた。

これらの遅れた分子を考慮にいれて、われわれは選挙を告示しなければならなかったし、また全般的な困窮のどん底にあった時期に選出されたこの憲法制定議会が被搾取階級の願望と要求を表現していないことを、実例によって、事実によって大衆に示さなければならなかった。そうしたことで、ソヴェト権力とブルジョア権力との衝突が、われわれ労働者階級の前衛にばかりでなく、農民の大多数にも、下級職員、小ブルジョアジー等々にも、まったく明瞭になった。どの資本主義国にも労働者階級の遅れた分子が存在しているが、彼らは議会を人民の真の代表者であると確信しており、そこで不潔な手段が用いられていることを知らない。議会はブルジョアジーが人民をだますためにつかう道具であると、君は言う。しかし、この論拠は君にむけられなければならない。それは君のテーゼにむけられているのだ。君は、ブルジョアジーにだまされた、ほんとうに遅れた大衆に、どうやって議会の真の性格をあばいて見せるのか？　議会にはいらず、議会外にいて、どうやってあれこれの政党のあれこれの議会掛引や立場を暴露するのか？もし君がマルクス主義者なら、君は、資本主義社会における諸階級の相互関係と諸政党の相互関係とがたがいに緊密に結びついていることを、認めなければならない。繰りかえして言うが、君が議員でないなら、また議会活動を拒否するなら、すべてこうしたことをどうやって示すのか？労働者階級、農民、下級職員の広範な大衆は、自身の経験によって納得する以外にはどんな論拠によっても説得できないことを、ロシア革命の歴史ははっきりと示した。

議会闘争に参加すれば、多くの時間が浪費されるだろうということが、ここで言われた。あらゆる階級が議会と同じ程度に参加しているなんらかの機関を、思いうかべることができるであろうか？　そうした機関を人為的につくりだすわけにはいかない。あらゆる階級が議会闘争に参加するのは、諸階級の利害と衝突が議会に反映しているからである。一度に資本主義をくつがえすために、いたるところで一挙に決定的なゼネラル・ストライキを組織することが可能であるなら、さまざまな国にとっくに革命が起こっているであろう。だが、事実を考慮にいれなければならず、そして議会は階級闘争の舞台である。同志ボルディガと彼の見地に立っている人々は、大衆に真実を語るべきである。ドイツは、議会内の共産党議員団が可能だということの最良の実例である。だから、自分たちはあまりにも弱体なため、強固な組織をもつ党をつくることができないのだと、

諸君は率直に大衆に語るべきであろう。これこそ、語るべき真実であろう。だが、こういう自分の弱体を大衆に告白すれば、彼らは諸君の支持者とはならないで、諸君の反対者、議会主義の支持者になるであろう。

「労働者の同志諸君、われわれは弱体なので、代議士を党に服従させることのできるほど規律のある党をつくることができない」と諸君が言うなら、労働者は諸君を見捨てるであろう。なぜなら、彼らは、「こんな無力な連中といっしょに、どうしてプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を打ち立てることができよう?」と自問自答するであろうから。

プロレタリアートが勝利したその日に、インテリゲンツィア、中間階級、小ブルジョアジーが共産主義的になると考えるなら、諸君ははなはだ素朴である。

もし諸君がそういう幻想をもたないなら、諸君は今日すでにプロレタリアートに、彼ら自身の方針を実行する準備をさせなければならない。国家活動のどの分野にも、この準則からの例外は見いだされないであろう。革命の翌日には、共産主義者と自称する日和見主義的な弁護士や、共産党の規律をもプロレタリア国家の規律をも認めない小ブルジョアが、いたるところに見られるであろう。全党員を党の規律に服従させるほんとうに規律のある党をつくる準備を労働者にさせないなら、諸君は、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を準備することはけっしてできないであろう。きわめて多くの新しい共産党の弱体がそれらの党に議会活動を否定させているのだということを、諸君が認めようとしないのは、以上の理由によるものだと、私は考える。真に革命的な労働者の圧倒的多数はわれわれのあとにしたがって、諸君の反議会主義的テーゼに反対を表明するであろうと、私は確信している。

全文は、一九二一年に単行本『共産主義インタナショナル第二回大会速記録』、ペトログラード、一九二一年、にはじめて発表
全集、第五版、第四一巻、二五五—二五九ページ所収
邦訳全集、第三一巻、二四六—二五〇ページ所収

四　イギリス労働党への加入についての演説(三)

八月六日

同志諸君、同志ギャラチャーは、同志マクレインその他のイギリスの同志たちが演説、新聞、雑誌のなかですでに何千回も繰りかえした文句を、われわれがここで百回目、千回目に聞かされるのは遺憾だということばで、その演説を始めた。私は、これを遺憾とするにはあたらないと思う。

古いインタナショナルの方法は、このような問題の解決を関係国の個々の党にまかせることであった。それは根本的にまちがっていた。われわれがあれこれの党内の諸条件を十分正確に知っていないということは、大いにありうることであるが、ここで問題になっているのは共産党の戦術を原則的に基礎づけることである。これはきわめて重要である。われわれは、第三インタナショナルを代表して、ここで共産主義的な見地をはっきり述べなければならない。

まずはじめに、同志マクレインがおかしている、とうてい同意するわけにいかない小さな誤りを指摘しておきたい。彼は、労働党を労働組合運動の政治組織とよんでいる。ついで彼は、もう一度それを繰りかえして、労働党は「労働組合運動の政治的表現である」と言っている。私は、イギリス社会党の新聞でこれと同じ意見を何回も読んだ。これは正しくない。このことが、イギリスの革命的な労働者の、ある程度まったく正当な反対を呼びおこしている原因の一部である。じっさい、「労働組合運動の政治組織」あるいは、この運動の「政治的表現」という概念は、まちがっている。もちろん、労働党員の大多数は労働者である。しかし、党がほんとうに労働者政党であるかないかは、党が労働者からなりたっているかどうかによってきまるばかりでなく、だれが党を指導しているか、党の行動と政治戦術との内容がどんなものかということによってもきまるのである。このあとのことだけが、われわれの見ているものがプロレタリアートのほんとうの政党かどうかをきめるのである。このただひとつ正しい見地からみれば、労働党は、徹頭徹尾、ブルジョア政党である。というのは、同党は、労働者からなりたってはいるが、同党を指導しているのは反動家――まったくブルジョアジーの精神に立って行動している最悪の反動家――だからである。これは、イギリスのノスケやシャイデマン一味の助けをかりて労働者を系統的にだますために存在しているブルジョアジーの組織である。

しかし、ここにもうひとつの見地、同志シルヴィア・パンクハーストと同志ギャラチャーが擁護した見地、この問題にかんする彼らの意見を表現している見地がある。ギャラチャーと彼の多くの同志の演説の内容はなんであったか？　彼らはわれわれにこう言っている。われわれは大衆と十分に結びついていないが、イギリス社会党をみるがよい、同党と大衆との結びつきはこれまでのところもっと悪いし、同党はたいへん弱い党だ、と。同志ギャラチャーは、彼と彼の同志たちがスコットランドのグラスゴーで革命運動をほんとうにすばらしく組織したこと、彼らが戦時中きわめてみごとな戦術的掛引をやったこと、小ブルジョア的

平和主義者のラムゼイ・マクドナルドとスノーデンがグラスゴーにやってきたとき、たくみにこの二人に支持をあたえ、この支持をつうじて大規模な大衆的反戦運動を組織したことについて、ここでわれわれに話してくれた。

われわれの目的は、同志ギャラチャーと彼の同志たちの代表する、このすぐれた新しい革命運動を、真に共産主義的な、すなわちマルクス主義的な戦術をもった共産党にもちこむことである。ここに現在のわれわれの任務がある。一方では、イギリス社会党はあまりにも弱く、大衆のあいだで適当に扇動することができない。他方では、ここで同志ギャラチャーによってまことにりっぱに代表されている若い革命的分子がおり、彼らは大衆と結びついているとはいえ、政党ではなく、その意味ではイギリス社会党よりもさらに弱く、自分の政治活動を組織する能力をまったくもたない。このような事情のもとでは、われわれは正しい戦術についてのわれわれの意見をまったく率直に述べなければならない。同志ギャラチャーがイギリス社会党について、同党は「どうしようもないほど改良主義的（hopelessly reformist）」だと言ったのは、疑いもなく誇張である。しかし、われわれがここで採択したすべての決議の一般的な趣旨と内容がまったく明確に示していることは、われわれがイギリス社会党の戦術をこの精神に則して変更するよう要求しているのだということ、ギャラチャーの同志たちにとってのただ一つの正しい戦術は、ここで採択された決議の趣旨で共産党の戦術を建てなおすために猶予なく共産党に入党することだということである。諸君がグラスゴーで大衆的な人民集会を組織できるほど多くの支持者をもっているのなら、一万人以上を党にいれるのも、諸君にとってたやすいことであろう。三―四日まえにロンドンでひらかれたイギリス社会党の大会は、党名を共産党とあらため、議会選挙参加と労働党加入にかんする条項を綱領にいれた。この会議には、一万人の党員が代表されていた。だから、スコットランドの同志にとっては、大衆のあいだで活動する技術をりっぱに身につけている一万人以上の革命的労働者を「イギリス共産党」に引きいれ、それによって、もっとたくみな扇動の精神で、もっと革命的な行動の精神で、イギリス社会党の古い戦術を変更するのは、まったくたやすいことであろう。同志シルヴィア・パンクハーストは、イギリスには「左翼」が必要だと、委員会で何回も指摘した。もちろん私は、まったくそのとおりだが、ただ塩を利かせすぎて「左翼主義」にしてしまわないように、と答えた。さらに彼女は「われわれは最良の先駆者であるけれども、いまのところ少々騒々しい（noisy）」と言った。私は、これを悪い意味にはまったくとらず、よい意味――彼らは

革命的扇動をするりっぱな能力をもっているという意味にとっている。われわれはそれを尊重しているし、また尊重しなければならない。われわれはそのことをわれわれのすべての決議のなかで表明した。なぜなら、われわれがつねに強調しているように、党がほんとうに大衆と結びついている場合、そして骨の髄までくさった古い指導者と、すなわち右翼の排外主義的指導者とも、ドイツの独立派の右翼のように中間的な立場をとっている指導者ともたたかう場合にはじめて、その党を労働者党と認めることができるのである。われわれは、すべての決議のなかでこのことを一〇回以上も主張し、繰りかえし述べた。これは、われわれが古い党を大衆ともっと密接に結びつける方向で改造するよう要求しているということにほかならない。

シルヴィア・パンクハーストはさらにこう質問した。「共産党が第二インタナショナルに加入している他の政党に加入することは、許されるであろうか？」と。そして彼女は、許しえないことだ、と答えた。イギリス労働党がきわめて特異な事情のもとにあることを、われわれは念頭におかなければならない。これはきわめて独特な党である。もっと正確にいえば、それはけっして普通の意味の党ではない。労働党は、現在約四〇〇万人を数えるすべての労働組合組織の組合員たちからなりたっており、同党に所属するすべての政党に十分な自由をあたえている。こうして、労働党にはイギリス労働者の膨大な大衆がはいっており、彼らは、悪質なブルジョア分子、シャイデマン、ノスケや彼らに類した紳士諸君よりもっと悪質な裏切り社会主義者の言いなりになっている。しかしそれと同時に、労働党は、イギリス社会党が労働党に所属し、独自の機関紙をもつのを許しており、その機関紙の紙上では、同じ労働党員が自由に、率直に、党指導者は裏切り社会主義者だと声明することができるのである。同志マクレインは、イギリス社会党のこのような声明を正確に引用した。私もまた、イギリス社会党の機関紙『コール』[三]で、労働党の指導者を社会愛国主義者、裏切り社会主義者とよんでいる記事を読んだことを、証言することができる。これは、労働党に所属している党が古い指導者を鋭く批判することができるばかりでなく、彼らについて公然と、正確にありのままのことを述べ、彼らを裏切り社会主義者とよぶことができることを、意味している。これは、膨大な労働者大衆を統合していて、まるで政党のように見える党が、それにもかかわらずその党員に完全な自由をあたえざるをえないという、きわめて独特な状態である。労働党大会でイギリスのシャイデマン派が、第三インタナショナル加入の問題を公然と提起せざるをえなくなり、同党のすべての地方組織や支部がこの問

題を討議せざるをえなかったことを、同志マクレインがここで指摘した。こういう条件のもとで同党に加入しないことは、誤りであろう。

同志パンクハーストは私との私的な会談で、「私たちが真の革命家になり、そして労働党にはいるなら、これらの紳士は私たちを除名するでしょう」と言った。しかし、それは、すこしも悪いことではないではないか。労働党が批判の十分な自由をあたえるかぎり、加入に賛成すると、われわれの決議には述べてある。この点では、われわれはどこまでも首尾一貫している。同志マクレインはさらに強調した。いまイギリスには独特な情勢が存在していて、そこではある政党が、四〇〇万の成員を擁しブルジョア的指導者に指導されたなかば労働組合でなかば政党といった特異な一労働者組織と結びついても、自分でそうありたいと望めば、革命的な労働者党のままでいることができるのだ、と。このような情勢があるのに、最良の革命的分子がこの党内にとどまるためにきょくりょくつとめないならば、それは最大の誤りであろう。トマス氏その他の諸君から裏切り社会主義者とよばれている連中が諸君を除名するというなら、そうさせるがよい。それは、イギリスの労働者大衆にすばらしい作用をおよぼすであろう。

同志たちは、イギリスの労働貴族が他のどの国よりも強力だということを強調している。じっさい、そうである。労働貴族は、イギリスでは、一〇年ではなく一〇〇年の過去をもっているではないか。イギリスでは、ブルジョアジーははるかに大きな経験――民主主義的経験――をもっていて、労働者を買収し、労働者のあいだに大きな層をつくりだすことができた。イギリスでは、この層は他の国々よりは大きいが、それでも広範な労働者大衆にくらべれば、それほど大きいものではない。この層は、徹頭徹尾、ブルジョア的な偏見にみちており、一定のブルジョア的な改良主義政策を遂行している。たとえばアイルランドには、恐るべきテロルによってアイルランド人を抑圧している二〇万のイギリス兵が見られる。イギリスの社会主義者は、これらのイギリス兵のあいだで革命的宣伝をやっていない。われわれの決議には、イギリスの労働者と兵士のあいだでほんとうに革命的な宣伝をするイギリスの政党だけを、共産主義インタナショナルの一員と認めると、はっきり述べてある。ここでも、委員会でも、これにたいする反論は出なかったことを、私は強調する。

同志ギャラチャーと同志シルヴィア・パンクハーストは、このことを否定することはできない。彼らは、イギリス社会党が労働党内にとどまりながら、労働党のしかじかの指導者は裏切者だと書くだけの自由をもっていることを、反

駁することはできない。これらの古い指導者がブルジョアジーの利益を代表しており、労働運動内の手先であるというのは、まったく正しい。共産主義者がこのような自由をもっているときには、彼らは――もし彼らに、ロシア革命の経験ばかりでなく（というのは、われわれが出席しているのはロシア大会ではなく、国際大会であるから）、すべての国の革命家の経験をも考慮にいれる気持があれば――労働党にはいる義務がある。同志ギャラチャーは、この場合われわれはイギリス社会党の影響のもとにあるのだ、と皮肉をいった。いや、われわれは、すべての国のすべての革命の経験にもとづいて、こう確信しているのである。われわれは、このことを大衆に語らなければならないと思っている。イギリス共産党は労働者の裏切者――彼らは、イギリスでは他の国々よりもはるかに有力である――を暴露し批判するのに必要な自由を保持しなければならない。これは、たやすく理解できることである。労働党加入に賛成を表明するのは、とりもなおさず、イギリス労働者の最良の分子をつきはなすことだという同志ギャラチャーの主張は、まちがいである。われわれはこのことを経験によってためさなければならない。大会で採択されるわれわれのすべての決議と決定は、イギリスのすべての革命的な社会主義新聞に掲載されるであろうし、地方のすべての組織と支部がそれを討議する機会をもつものと、われわれは確信している。われわれがすべての国の労働者階級の革命的戦術の代表者であり、われわれの目的は古い改良主義や日和見主義とたたかうことであるということを、われわれの決議の全内容が明瞭なうえにも明瞭に語っている。諸事件は、われわれの戦術が古い改良主義をほんとうに克服するだろうことを示している。そうなれば、労働者階級のすぐれた革命的分子、イギリスでは発展が緩慢に、おそらく他国よりもっと緩慢にすすんでいることに不満をいだいている革命的分子はみな、われわれのほうへやってくるであろう。発展が、緩慢におこなわれているのは、イギリスのブルジョアジーが労働貴族のためによりよい条件をつくり、それによってイギリスの革命運動を遅らせる可能性をもっているからである。だから、イギリスの同志たちは、彼らがみごとにやっているように（同志ギャラチャーはそれを証明した）、大衆の革命化のためにつとめるばかりでなく、同時に、労働者階級の真の政党をつくりだすためにもつとめなければならない。ここで発言した同志ギャラチャーも、シルヴィア・パンクハーストも、二人ともまだ革命的共産党にはいっていない。職場世話役(六)〔Shop Stewards〕のようなすばらしいプロレタリア組織が、いまでも政党に所属していない。諸君が政治的な組織をつくるならば、われわ

れの戦術が、最近数十年間の政治的発展の正しい理解にもとづいていること、真に革命的な党は、それが革命的階級のすべての最良の分子を吸収し、また反動的な指導者たちが姿をあらわすいたるところでこれとたたかうためにあらゆる可能性を利用するときにはじめて、つくりだすことができるということが、おわかりになるであろう。

イギリス共産党が労働党の内部で革命的に行動することから始めるならば、また、この党をヘンダソン氏らが除名せざるをえなくなるならば、それは、イギリスの共産主義運動と革命的労働運動の大きな勝利となるであろう。

全文は、一九二一年に単行本『共産主義インタナショナル第二回大会速記録』、ペトログラード、一九二一年、にはじめて発表
全集、第五版、第四一巻、二六〇—二六七ページ所収
邦訳全集、第三一巻、二五一—二五七ページ所収

オーストリアの共産主義者への手紙(三)

オーストリア共産党は、ブルジョア民主主義議会の選挙をボイコットすることをきめた。最近終了した共産主義インタナショナル第二回大会は、ブルジョア議会の選挙やこれらの議会そのものに共産主義者が参加することを正しい戦術と認めた。

オーストリア共産党代表の報告から判断して、同党が共産主義インタナショナルの決定を一党の決定に優先させるであろうことを、私は疑わない。また、オーストリア共産党のボイコット主義的決定と一致しない決定を共産主義インタナショナルがおこなったことで、オーストリアの社会民主主義者、すなわちブルジョアジーの側に寝がえった社会主義の裏切者がせせらわらうだろうということも、ほとんど疑いをいれない。だが、シャイデマンやノスケの一味、

アルベール・トマやゴンパーズの一味の戦友であるオーストリアの社会民主主義者のような諸君のせせらわらいには、自覚した労働者は、もちろん、なんの注意もはらわないだろう。ブルジョアジーにたいするレンナー氏らのおついしょうぶりは十分に暴露されており、すべての国で第二インタナショナル、すなわち黄色インタナショナルの英雄たちにたいする労働者の激昂がますます高まり、ひろまっている。

オーストリアの社会民主主義者諸氏は、ブルジョア議会でも、彼らのあらゆる「活動」舞台でも、彼ら自身の新聞の紙上でさえ、事実上資本家階級にまったく従属していて、無定見に動揺する能しかない小ブルジョア民主主義者としてふるまっている。われわれ共産主義者がブルジョア議会にはいるのは、労働者と勤労者の欺瞞をこととし骨の髄まで腐っている資本主義的機関のこの演壇からも、この欺瞞を暴露するためである。

ブルジョア議会への参加に反対してオーストリアの共産主義者がもちだしている一つの議論は、いくらか注意ぶかく検討する値うちがある。その議論とは次のようなものである。

「議会は、共産主義者にとっては扇動の演壇としての意義しかもたない。オーストリアのわれわれは、扇動の演壇として労働者代表ソヴェトをもっている。だから、われわれはブルジョア議会の選挙に参加することを拒否する。ドイツには、まじめに問題にできるような労働者代表ソヴェトはない。だから、ドイツの共産主義者は別の戦術をとっているのである。」

この議論は正しくないと、私は考える。われわれにまだブルジョア議会を解散するだけの力がないあいだは、われわれは、議会の外からも、内からも、議会に反対して活動しなければならない。ブルジョアジーが労働者を欺瞞するのにつかうこのブルジョア民主主義的道具を、いくぶんでも多数の勤労者が――プロレタリアだけでなく、さらに半プロレタリアと小農民が――まだ信頼しているあいだは、われわれは、遅れた労働者層、とくに非プロレタリア的な勤労大衆が最も重要で最も権威ある演壇と見なしているほかならぬこの演壇から、この欺瞞を説明しなければならない。

われわれ共産主義者にまだ国家権力を奪取するだけの力がなく、また、ブルジョアジーに反対して勤労者だけでおこなう勤労者自身のソヴェトの選挙を施行するだけの力がないあいだは、ブルジョアジーがまだ国家権力を自由にしており、さまざまな住民階級に選挙を呼びかけているあいだは、われわれには、プロレタリアだけでなく、すべての

勤労者のあいだでも扇動するために、選挙に参加する義務がある。ブルジョア議会で人々が労働者をだまし、金融詐欺やあらゆる種類の買収（ブルジョアジーが著作家、議員、弁護士、等々にたいしてやっている特別に「洗練された」形態の買収が、ブルジョア議会におけるほど広範におこなわれているところは、どこにもない）を「民主主義」についての空文句で包みかくしているあいだは、人民の意志を表明すると称しながら、そのじつ金持による人民の欺瞞をおおいかくしているほかならぬこの機関の内部で、たえまなく欺瞞を暴露し、レンナー一派が労働者に敵対して資本家の側に寝がえりをうった一つひとつの事例を暴露することが、われわれ共産主義者の義務である。ブルジョア諸政党や諸分派の関係は、ほかならぬ議会でこそ、どこよりも頻繁に明るみにだされ、ブルジョア社会のすべての階級の相互関係を反映する。だから、われわれ共産主義者は、ほかならぬブルジョア議会で、またその内部から、諸階級と諸政党との関係についての真実や、雇農と地主との、貧農と富農との、職員、小経営主、等々と大資本との関係についての真実を、人民に説明しなければならない。

プロレタリアートは、資本のあらゆる卑劣な、手のこんだたくらみを理解できるようになるために、そして、小ブルジョア大衆に、非プロレタリア的勤労大衆に、影響をおよぼすことができるようになるために、すべてこれらのことを知らなければならない。この「学問」を身につけずには、プロレタリアートはプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の諸任務を首尾よく解決することができない。なぜなら、そのときになってもブルジョアジーは、農民を愚弄し、職員を買収し、おどしつけ、自分の利己的な、けがらわしい渇望を、「民主主義」についての空文句でおおいかくすという政策を、自分の新しい立場（打倒された階級の立場）から、違った形態で、違った活動舞台でつづけるだろうからである。

いや、オーストリアの共産主義者は、レンナーやその同類のようなブルジョアジーの従僕のせせらわらいにおどかされはしないだろう。オーストリアの共産主義者は、公然と、率直に、国際的なプロレタリア的規律を承認することを恐れないだろう。われわれが、革命的プロレタリアートの国際的規律に服従し、さまざまな国の労働者の経験を考慮に入れ、彼らの知識、彼らの意志を尊重しながら、このようにして世界共産主義をめざす労働者の階級闘争の統一を実際に（レンナー、フリードリヒ・アードラー、オットー・バウアーらのように、口さきでではなく）実現しながら、自己の解放をめざす労働者の闘争の大きな諸問題を解決しつつあることを、われわれは誇りとしている。

エヌ・レーニン

一九二〇年八月一五日

ドイツ語で一九二〇年八月三一日に、新聞『ローテ・ファーネ』、ウィーン、第三九六号に発表
全集、第五版、第四一巻、二六八―二七三ページ所収
邦訳全集、第三一巻、二六一―二六四ページ所収

青年同盟の任務

（ロシア共産青年同盟第三回全ロシア大会[三八]での演説）

一九二〇年一〇月二日

（レーニンは大会の盛大な喝采でむかえられる）同志諸君、きょうは、共産青年同盟の基本的任務はどういうものか、またそれに関連して、一般に社会主義共和国の青年組織はどういうものであるべきかについて、話し合ってみたいと思う。

ある意味では青年こそ共産主義社会をつくりだす真の任務をになっていると言えるので、それだけ、この問題には立ち入って論じなければならない。というのは、資本主義社会で育てられた働き手の世代に解決できる任務は、せいぜい、搾取のうえに建てられた古い資本主義的生活様式の基礎を廃止することは、明らかだからである。

この世代に解決できるのは、せいぜい、プロレタリアートと勤労諸階級が権力をその手ににぎって、しっかりした土台をつくりだすのを助けるような社会構造をつくりだす任務であろう。この土台のうえに建設をおこなうことは、すでに新しい条件のもとで、人々のあいだに搾取関係のない環境のもとで、仕事を始める世代だけがやれることである。

さて、このような見地から青年の任務の問題をとりあげるなら、私は、一般に青年の、とりわけ共産青年同盟その他のあらゆる組織のこの任務は、一言で言いあらわせる、と言わなければならない。その任務とは、学ぶ、ということである。

もちろん、これは「一言」にすぎない。これではまだ、なにを、どう学ぶかという主要な、最も肝心な問題に答えていない。ところで、この場合に肝心なことは、古い資本主義社会が改造されるとともに、共産主義社会をつくる新しい世代の学習、教育、陶冶も、これまでのようなやり方でやるわけにはいかなくなるということである。青年の学習、教育、陶冶は、古い社会がわれわれに残した材料から出発しなければならない。われわれが共産主義を建設するには、古い社会がわれわれに残した知識や組織や施設の総和から、また古い社会がわれわれに残した人力と資材のたくわえを用いて建設するほかはない。青年の学習、組織、教育を根本的に改造してはじめて、われわれは、若い世代の努力の成果として、古い社会に似ない社会、すなわち共産主義社会の創設をなしとげることができるであろう。だから、なにをわれわれは教えなければならないか、また青年が真に共産主義的青年の名をはずかしめないためにはなにを学ばなければならないか、さらに、われわれが始めた仕事を青年がきずきおえ、完成できるようにするには、彼らをどう訓練するか、という問題をくわしく論じる必要がある。

青年同盟と、一般に共産主義に移ることを望んでいるすべての青年は、共産主義を学ばなければならない、という答えが、おそらく最初にでてくる最も自然な答えである、と言わなければならない。

だが、「共産主義を学ぶ」ということの答えは、一般的すぎる。共産主義を学びとるためには、いったいなにがわれわれに必要なのか？　共産主義の知識をえるためには、われわれは一般的知識の総和のうちからなにを取りださなければならないか？　この点でわれわれは幾多の危険にさらされている。共産主義を学ぶという任務の立て方を誤ったり、あるいはこの任務をあまり一面的に理解したりすると、さっそくこういう危険がたえず現われてくる。

ちょっとみると、共産主義を学ぶということは、共産主

義の教科書、小冊子、著作に述べてある知識の総和を習いおぼえることである、という考えがうかんでくるのは当然である。しかし、共産主義の学習をこういうふうに規定するのは、ぞんざいすぎ、不十分すぎる。共産主義の研究ということが、共産主義の著作や本や小冊子に述べてあることを習いおぼえることにすぎないとすれば、容易すぎるほど容易に共産主義的な経文読みや自慢屋ができあがるおそれがあり、それはわれわれにたえず害悪と損失をもたらすだろう。なぜなら、そういう人たちは、共産主義の本や小冊子に述べてあることを習いおぼえ、読みあさりはしても、その知識全体を統一する能力がなく、共産主義が真に要求するようなやり方で行動することができないだろうからである。

古い資本主義社会がわれわれに残した悪弊と不幸のなかで最も大きなものの一つは、本と生活の実際とがまったく分離していることである。なぜなら、万事を非常にりっぱに記述している本はいろいろあったが、たいていの場合、それらの本は、資本主義社会をいつわった姿で描いてみせる、最も忌まわしい、おためごかしのうそだったからである。

だから、共産主義について本に述べてあることを本のうえで習いおぼえるだけでは、非常なまちがいであろう。いまわれわれの演説や論文は、以前に共産主義について述べられたことを、そのまま繰りかえしているわけではない。なぜなら、われわれの演説や論文は、日常の各方面にわたる活動に関連しているからである。活動もせず、闘争もしないのでは、共産主義の小冊子や著作からえた本のうえでの共産主義の知識は、三文の値うちもない。なぜなら、それは、古くからある理論と実践の分離、古いブルジョア社会の最も忌まわしい特徴であるあの古くからの分離を存続させるであろうから。

また、もしわれわれが共産主義のスローガンだけを習いおぼえるようになれば、いっそう危険なことになろう。もしわれわれが、この危険をいちはやく理解せず、この危険を取りのぞくことにわれわれの全活動をむけないなら、こういう共産主義の教育をうけて共産主義者と自称する五〇万ないし一〇〇万の人々、若い青年男女の存在は、共産主義の事業に大きな損失をあたえるだけであろう。

ここで次の問題が起こってくる。すなわち、共産主義の教育をほどこすには、われわれはこれらすべてをどのように結びつけるべきか、古い学校、古い科学のなかからわれわれはなにを取りいれなければならないか？　古い学校は、全面的な教養をもった人間をつくることを意図し、科学一般を教える、と宣言していた。われわれは、これが徹頭徹

尾うそであったことを知っている。なぜなら、社会全体が諸階級への、搾取者と被抑圧者とへの、人々の分裂のうえにきずかれ、そのうえに維持されていたからである。古い学校はすべてまったく階級的精神にみちみちていたから、それがブルジョアジーの子弟だけに知識をあたえていたのは当然であった。この学校の一語一語が、ブルジョアジーに有利に偽造されていた。これらの学校では、労働者と農民の若い世代は、教育されていたというより、むしろこのほかならぬブルジョアジーの役に立つように仕込まれていたのである。彼らは、ブルジョアジーに利潤をもたらすことができ、しかもブルジョアジーの安穏と徒食を脅かさないような、ブルジョアジーに好都合な召使となるように教育された。だから、われわれは、古い学校を否認するとともに、われわれが真の共産主義教育を達成するために必要とするものだけをそこから取りいれることを、自分の任務としたのである。

ここで、われわれがたえず耳にしている、古い学校にたいする叱責、非難について述べる番となった。この叱責、非難は、しばしばまったくまちがった解釈を生んでいる。古い学校は、詰め込み学問の学校であり、軍隊式訓練の学校であり、棒暗記の学校であった、と言われている。これは正しい。だが、古い学校のなかで悪いものとわれわれに有益なものとを区別できなければならないし、古い学校のなかから、共産主義に必要なものを選びだすことができなければならない。

古い学校は詰め込み学問の学校であった。それは、不必要な、無用な、死んだ知識をたくさん習いおぼえることを人々に強制した。これらの知識は、人々の頭をくだらないことでいっぱいにし、若い世代を型にはまった役人に変えた。しかし、もし諸君が、人間の知識のたくわえたものを学びとらないでも共産主義者になれるという結論を引きだそうとするなら、たいへんなまちがいであろう。共産主義そのものが知識の総和の結果であるのに、この知識の総和を学びとらなくとも、共産主義のスローガン、共産主義科学の結論を習いおぼえるだけで十分だと考えるなら、誤りである。共産主義が人間知識の総和のなかから現われたことを示す見本は、マルクス主義である。

諸君は、共産主義理論、共産主義科学が主としてマルクスによってつくりだされたこと、このマルクス主義の学説は、一九世紀のただひとりの――たとえ天才であるにせよ――社会主義者の所産ではなくなったこと、この学説が全世界の幾百千万のプロレタリアの学説となり、彼らはこの学説を資本主義に反対する自分たちの闘争に応用していることを、読んだり聞いたりしたであろう。そして、マルク

スの学説が最も革命的な階級の幾百千万人の心をつかむことができたのはなぜか、という質問を諸君がだすなら、諸君の受けとる答えはただ一つ、次のものであろう。そうなったのは、マルクスが、資本主義のもとで獲得された人間知識のしっかりした土台に立脚していたからである、と。マルクスは、人間社会の発展法則を研究して、資本主義の発展が共産主義にみちびくのは避けられないことを理解した。そして、肝心なことは、彼が、彼以前の科学があたえたすべての成果を完全にわがものとし、その助けによって、この資本主義社会の最も精密な、最も詳細な、最も深い研究にもとづいて、はじめて右の点を証明したということである。彼は、人間社会がつくりだしたすべてのものを批判的につくりかえ、ただ一つの点も見のがさなかった。人間の思考がつくりだしたすべてのものをつくりかえ、これを労働運動によって点検して批判をくわえ、ブルジョア的な枠に制限されたりブルジョア的な偏見にしばられたりしている人々の引きだせなかった結論を引きだした。

これは、たとえばプロレタリア文化について論じるさいに、われわれが念頭におかなければならないことである。人類の全発展によってつくりだされた文化について正確な知識をもち、それをつくりかえることによってはじめて、プロレタリア文化を建設できるということを、はっきりと理解しないかぎり、われわれはこの任務を解決することはできない。プロレタリア文化は、どこからとも知れず飛びだしてきたものではなく、プロレタリア文化の専門家と自称する人々が頭で考えだしたものでもない。そういうことは、みなまったくのたわごとである。プロレタリア文化は、人類が資本主義社会、地主社会、官僚社会の圧制のもとでつくりあげた知識のたくわえを合法則的に発展させたものでなければならない。これらの大小の道はみな、プロレタリア文化につうじたし、現在もつうじているし、またこれからもひきつづきつうじるであろう。それはちょうど、マルクスのつくりかえた経済学が、人類社会はどこに到達するはずであるかをわれわれに示し、階級闘争への、プロレタリア革命の開始への移行を指摘したのと同様である。

古い学校は棒暗記の学校であったという攻撃を、青年のあいだでも、また新しい教育の一部の擁護者のあいだでも、あまりにも頻繁に耳にするとき、われわれは彼らにむかって、古い学校にあったよいものを取りいれなければならない、と言う。古い学校は若人の記憶力に法外な量の知識の負担を負わせ、その知識も十中の九までは無用で、残りの十分の一もゆがめられていたが、そういうものをわれわれは古い学校から取りいれてはならない。しかし、だからといって、共産主義的な結論だけにとどまっていてよい、共

産主義のスローガンだけを暗記すればよい、ということにはならない。これでは共産主義はつくりだせないであろう。人類がつくりだしたすべての豊富な知識で自分の学識をゆたかにするときにはじめて、共産主義者となれるのである。

われわれにには棒暗記は必要でないが、基本的な諸事実にかんする知識によって学習者各人の学識を向上させ完全なものにすることが必要である。なぜなら、えられた知識のすべてが彼の意識のなかで消化されなければ、共産主義はからっぽなものになり、中味のない看板になり、共産主義者はたんなるほら吹きになってしまうからである。諸君は、これらの知識をただ習得するというだけでなく、それに批判的な態度をとり、無用ながらくたを頭に結め込むのでなく、現代の教養ある人間として欠かしえないあらゆる事実についての知識で自分の頭をゆたかにするようなやり方で、それを習得しなければならない。もし共産主義者が、きわめて真剣な、きわめて困難な仕事を大量に果たさず、ぜひとも批判的に取り扱わなければならない諸事実を分析もしないで、習いおぼえたできあいの結論にもとづいて、共産主義について大ぶろしきをひろげようなどと思いつくなら、そういう共産主義者はまことに困りものであろう。このような浅薄なやり方は断然有害であろう。もし私が、自分があまりものを知らないことを知っていれば、私はもっと多くのことを知るようにつとめるであろう。しかし、ある人が、自分は共産主義者だから、しっかりしたことを知る必要など自分にはない、と言うとすれば、その人は共産主義者らしいものにはけっしてならないだろう。

古い学校は資本家に必要な召使をつくりあげてきた。古い学校は科学者を、資本家に都合のよいことを書いたり話したりすることを本分とする人間に仕立ててきた。だから、われわれは、この古い学校を取りのぞかなければならないのだ。しかし、古い学校を取りのぞかなければならないからといって、破壊しなければならないからといって、古い学校から、人類がたくわえてきた、人々に必要なものをすべて取りいれてはならないということになるだろうか？資本主義に必要だったものと共産主義に必要なものとを区別する能力をもってはならない、ということになるだろうか？

ブルジョア社会で大多数者の意志に反しておこなわれてきた古い軍隊式訓練を、われわれは、労働者と農民の自覚した規律とおきかえる。労働者と農民は、古い社会にたいする憎悪と、この闘争のために勢力を統合し組織する決意、能力、覚悟とを結びつけ、こうして、広大な国の全土にばらばらになり細分し分散している幾百万幾億という人々の意志を、単一の意志につくりあげつつある。こういう単一

の意志がなければ、われわれはかならず打ち破られてしまうだろう。労働者と農民のこの結束がなく、この自覚した規律がなければ、われわれの大業は見込みのないものとなる。これがなければ、われわれは全世界の資本家や地主に勝利することはできないだろう。われわれは土台を固めることさえできないだろう。まして、この土台のうえに新しい共産主義社会を建設することなどは、思いもよらない。さらに、古い学校を否認し、この古い学校にたいしてまったく正当で、必要な憎悪をいだき、古い学校を破壊しようという覚悟を尊重しながらも、われわれは、古い詰め込み学問、古い棒暗記、古い軍隊式訓練を人間の知識の総和を取りいれる能力とおきかえなければならない。そしてその取りいれ方は、諸君の共産主義が棒暗記したものではなく、諸君自身が考えぬいたものであり、現代の教育の見地からみて避けられない結論であるというようなやり方でなければならない。

共産主義を学びとるという任務をわれわれが論じるさい、基本的任務は以上のように立てなければならない。

諸君にこの点を説明し、同時に、どう学ぶかという問題に近づくために、実例をあげよう。諸君のだれもが知っているように、われわれは、軍事的任務、共和国防衛の任務につづいて、いまや経済的任務に当面している。工業と農業とを復興せずには共産主義社会を建設できないこと、しかもそれを古いやり方とは違ったやり方で復興しなければならないことを、われわれは知っている。それらは、科学の最新の成果にしたがってきずかれた、現代的な基礎のうえに復興されなければならない。ご存じのように、この基礎とは電力であって、全国の電化、工業と農業の全部門の電化がおこなわれるときに、この任務を諸君が学びとるときにはじめて、諸君は、古い世代には建設できない共産主義社会を自分のために建設することができよう。諸君が当面しているのは、全国の経済的復興の任務、すなわち現代の科学・技術に立脚し、電気に立脚する現代の技術的基礎のうえに、農業をも工業をも改造し復興することである。諸君がよくご存じのように、電化には文盲の人は役に立たないし、また読み書きができるだけでもまだ足りない。この場合、電気とはなにかということを理解するだけでは足りない。工業にも農業にも、さらに工業と農業の個々の部門にも、電気を技術的に応用する方法を知らなければならない。われわれは、これを自分で学びとらなければならない。これを勤労青年層全体に教えこまなければならない。これこそ、すべての自覚した共産主義者の当面する任務であり、自分を共産主義者であると考え、自分は共産青年同盟にはいったときに、党が共産主義を建設するのを助け、

若い世代全体が共産主義社会をつくりだすのを助ける任務を引き受けたのだと、はっきりと自覚しているすべての若人の当面する任務である。現代の教養を基礎としてはじめて共産主義社会をつくりだすことができるのであって、もし彼らがこの教養をもたないなら、共産主義はたんなる願望をでないであろうということを、彼らは理解しなければならない。

まえの世代の任務は、ブルジョアジーを倒すことに帰着した。その当時、主要な任務は、ブルジョアジーを批判し、大衆のあいだにブルジョアジーにたいする憎悪をよびさまし、階級意識を発達させ、味方の勢力を結集する能力をもつことであった。新しい世代の当面する任務はもっと複雑である。諸君は自分たちの全勢力を統合して、資本家の攻撃から労働者と農民の権力を守らなければならないだけではない。これは、やらなければならないことである。このことを諸君はりっぱに理解していたし、共産主義者はこのことをはっきりと認識している。しかし、これだけでは不十分である。諸君は共産主義社会を建設しなければならない。仕事の前半は多くの点でなしとげられた。古いものは当然破壊されるべきものであったし、そのように破壊されており、当然廃墟となるべきものであったし、そのように廃墟になっている。地盤の掃除はすんだ。この地盤のうえに若い共産主義的世代が共産主義社会を建設しなければならない。諸君が当面しているのは建設の任務である。そして、現代の知識をすべて身につけ、共産主義を、できあいの棒暗記した公式、助言、処方箋、訓令、綱領から、諸君の当面の仕事を一つにまとめる生きた力に変え、共産主義を諸君の実践活動の指針に変えることができてはじめて、諸君はこの任務を解決することができるのである。

これこそ、若い世代全体の陶冶、教育、向上という事業で、諸君が指針としなければならない任務である。青年男女の一人ひとりが共産主義社会の建設者とならなければならないが、その幾百万の建設者のなかで、諸君は第一の建設者とならなければならない。労農青年の全大衆をこの共産主義の建設に引きいれなければ、諸君は共産主義社会を建設することができないであろう。

ここで私はおのずから、われわれは共産主義をどのように教えなければならないか、われわれの方法の特質はなにか、という問題に近づく。

ここでは、私はなによりもまず、共産主義的道徳の問題について論じよう。

諸君は自分を共産主義者に育てあげなければならない。青年同盟の任務は、これらの青年が学び、みずからを組織し、結束し、闘争しながら、彼ら自身と彼らを指導者と目

しているすべての人々とを育てあげるように、共産主義者を育てあげるように、同盟の実践活動を組織することである。今日の青年の教育、陶冶、学習の仕事はすべて、青年の心に共産主義的道徳を育てあげることでなければならない。

しかし、共産主義的道徳というものがあるのか？　共産主義的倫理というものがあるのか？　もちろん、ある。われわれには自分の道徳がないというふうに、考えている者がしばしばある。そして、ブルジョアジーは、われわれ共産主義者があらゆる道徳を否定するといって、非難することがきわめて多い。これは、概念をすりかえ、労働者と農民に目つぶしをくわせる方法である。

われわれは、どういう意味で道徳を否定し、倫理を否定するのか？

われわれが否定するのは、ブルジョアジーが説いてきたような意味の倫理である。ブルジョアジーは、この倫理を神の掟から引きだしてきた。われわれは、この点については、もちろん、次のように言う。われわれは神を信じない。そして、神の名で聖職者が語り、地主が語り、ブルジョアジーが語ってきたのは、自分たちの搾取者としての利益をはかるためであったことを、よく知っている、と。あるいはまた、彼らはこの道徳を、倫理の掟から、神の掟から引きだすかわりに、観念論的な、あるいはなかば観念論的な文句から引きだしたが、この文句もいつでも、けっきょく、神の掟と大差ないものだったのである。

このような超人間的、超階級的な概念から引きだされた倫理を、われわれはすべて否定する。われわれは言う——それは欺瞞である。それは、地主と資本家の利益のために労働者と農民をぺてんにかけ、たぶらかすものである。

われわれは言う——われわれの倫理はまったくプロレタリアートの階級闘争の利益に従属している。われわれの倫理は、プロレタリアートの階級闘争の利益から引きだされるものである。

古い社会は、労働者と農民全体にたいする地主と資本家の抑圧にもとづいていた。われわれはこれを破壊しなければならなかった。彼らを投げ倒さなければならなかった。だが、そのためには団結をつくりだす必要があった。神様はこのような団結をつくりだしてはくれない。

このような団結をもたらすことができたのは、工場だけであり、教育をうけた、長い眠りから醒めたプロレタリアートだけであった。この階級が形成されたときにはじめて、われわれが現在見ているもの、すなわち、最も弱い国の一つでプロレタリア革命を勝利させた、あの大衆運動が始まったのである。このプロレタリア革命は、三年ものあいだ全世界のブルジョアジーの攻撃をもちこたえている。そし

て、われわれは、全世界をつうじてプロレタリア革命が成長しているのを見ている。いまではわれわれは、経験にもとづいて次のように言う。細分し、分散した農民を自分に従わせ、搾取者のあらゆる攻撃をもちこたえた、あのような結集された力をつくりだすことができたのは、プロレタリアートだけであった、と。この階級だけが、勤労大衆を助けて団結させ、結束させ、共産主義社会を最後的に守りぬき、最後的に打ちかため、それを最後的に建設することができる。

だからこそ、われわれは、人間社会のそとからとってきた倫理はわれわれにとっては存在しない、それは欺瞞である、と言うのである。われわれにとっては、倫理は、プロレタリアートの階級闘争の利益に従属する。

ところで、この階級闘争とはどういうものか？　それは、ツァーリを倒し、資本家を倒し、資本家階級をなくすことである。

では、いったい階級とはなにか？　これは、社会の一部の者が他の一部の者の労働をわがものにするのを可能にするものである。社会の一部の者がすべての土地をわがものにしているときには、地主の階級と農民の階級とがある。社会の一部の者が工場をもち、株式や資本をもっていて、他の一部の者がこれらの工場で働いているときには、資本家の階級とプロレタリアの階級とがある。

ツァーリを追いだすのは、むずかしいことではなかった。——それには数日を要しただけである。地主を追いだすのは、さほどむずかしいことではなかった。——これは数ヵ月でやりとげることができた。資本家を追いだすのも、たいしてむずかしいことではない。しかし、階級をなくすのは、これらとはくらべものにならないほどむずかしいことである。労働者と農民への区分は、まだ残っている。もし農民が自分の地所に腰をすえて、余分の穀物、すなわち彼自身にも彼の家畜にも必要でない穀物をわがものとしているのに、ほかの人々はみな穀物をもっていないとすれば、その農民はすでに搾取者に変わっているのである。彼の手もとに残る穀物が多ければ多いほど、彼にはますます有利であり、ほかの者が飢えようとかまわない、「ほかの者が飢えれば飢えるほど、おれはそれだけ高くこの穀物を売るのだ」というわけである。すべての人が、一つの共通な計画にしたがって、共同の土地で、共同の工場で、共同のきまりによって働くようにしなければならない。これはたやすくできることだろうか？　ここでは、ツァーリや地主や資本家を追いだすほどたやすく解決できないことを、諸君は知っている。それには、プロレタリアートが農民の一部を再教育し、教えなおして、勤労農民である人々を味方に

引きよせ、こうして他人の困窮をたねに金儲けをしている金持の農民の反抗を一掃しなければならない。つまり、われわれがツァーリを倒し地主と資本家を追いだしても、プロレタリアートの闘争の任務はまだ終わらないのであって、われわれがプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とよんでいる制度の任務は、まさにここにある。

階級闘争はいまなおつづいている。それはただその形態を変えただけである。それは、昔の搾取者が復帰できないようにし、ばらばらの無知な農民大衆を一つの同盟に団結させるための、プロレタリアートの階級闘争である。階級闘争はいまなおつづいている。そして、われわれの任務はすべての利害をこの闘争に従属させることである。そこで、われわれは自分の共産主義的倫理をこの任務に従属させる。われわれは言う――倫理とは古い搾取社会の破壊に役だち、また新しい共産主義者の社会をつくりだしつつあるプロレタリアートのまわりにすべての勤労者を団結させることに役だつものである。

共産主義的倫理とは、あらゆる搾取に対抗し、あらゆる小所有に対抗して、勤労者を団結させるこの闘争に役だつものである。というのは、小所有は、全社会の労働によってつくりだされたものを一個人の手に渡すからである。土地はわが国では共有財産と見なされている。

ところで、もし私がこの共有財産のある一片をとって自分のものとし、そこで私の必要とする量の二倍もの穀物をつくり、余分の穀物で投機をやるとしたらどうだろう？ 飢えた人が多ければ多いほど高い値段が支払われると、胸算用するとしたら、どうだろう？ それでも私は共産主義者としてふるまうことになるだろうか？ ならない。搾取者として、所有者としてふるまうことになる。これとはたたかわなければならない。もしこういうことをほうっておくなら、万事は逆転し、資本家の権力、ブルジョアジーの権力へあともどりするであろう。これは、これまでの革命でたびたび起こったことである。資本家とブルジョアジーの権力をふたたび復活させないためには、小商人的なやり口を許してはならず、個々人がほかの人々の犠牲で金儲けをすることのないようにしなければならず、勤労者はプロレタリアートと結束して、共産主義社会をつくらなければならない。共産青年同盟と共産主義青年組織との基本的任務のおもな特質は、まさにこの点にある。

古い社会は、自分がほかの者から奪うか、それともほかの者が自分から奪うか、自分がほかの者のために働くか、それともほかの者が自分のために働くか、奴隷所有者となるか、それとも奴隷となるかという原則のうえに立てられていた。だから、この社会で育った人々が、いわば母乳と

いっしょに、奴隷所有者か、それとも奴隷か、それともまた小所有者、下級職員、下級役人、インテリゲンツィア——一言でいえば、自分の取り分にしか心をつかわず、他人のことなど知ったことでないとする人間——か、という心理、習慣、観念を吸収するのは、当然である。

私がこの地所で経営をやっているかぎり、他人のことなど知ったことではない。他人が飢えるならかえってけっこうなことで、それだけ高く自分の穀物が売れる。また、私が医者、技師、教師、職員の地位をもっているかぎり、他人のことなど知ったことではない。権力者のすることをとやかく言わず、彼の気にいるようにすれば、おそらく、私は自分の地位をたもてるだろうし、それどころかまんまとブルジョアに成り上がることができるかもしれない、と。こういう心理やこういう気分を、共産主義者はもってはならない。われわれは自力で自分を守りぬき、新しい社会をつくりだすことができるということを、労働者と農民が証明したとき、そのときこそ、新しい共産主義的教育、搾取者にたいする闘争による教育が、プロレタリアートと同盟し、利己主義者や小所有者に反対し、自分は自分の儲けをえるために努力しているので、ほかのことなどすこしも知ったことではない、というようなことを口にする心理と習慣に反対する教育が、始まったのである。

これが、若い青年層は共産主義をどう学ぶべきか、という問題にたいする答えである。

その学習、教育、陶冶の一歩一歩を、古い搾取社会にたいするプロレタリアと勤労者のたえまない闘争に結びつけてこそ、彼らははじめて共産主義を学ぶことができる。人人がわれわれにむかって倫理を論じるとき、われわれはこう言う——共産主義者にとって全倫理は、この団結、連帯の規律と搾取者にたいする自覚した大衆闘争ということに尽きる、われわれは永遠の倫理を信じないし、倫理についてのあらゆるつくり話の欺瞞を暴露する、倫理は、人間社会がいっそう高く向上するのを助け、それを労働の搾取から解放する役に立つものである、と。

これを実現するには、ブルジョアジーとの規律ある必死の闘争の環境のもとで、自覚した人間に変わりはじめた青年の世代が必要である。彼らはこの闘争のなかで、真の共産主義者を育てあげる。彼らはその学習、陶冶、教育の一歩一歩をこの闘争に従属させ、結びつけなければならない。共産主義的青年の教育は、彼らにあらゆる種類のあまったるい言辞や、倫理の規則を提供することであってはならない。教育はそういう点にはない。自分の父母がどんなに地主や資本家の圧制のもとで暮らしてきたかを人々が知ったとき、搾取者にたいする闘争を始めるものにふりかかった

苦難を自分で味わったとき、たたかいとった成果を守るためにこの闘争をつづけることがどれほど多くの犠牲を要したか、地主や資本家がどんなに狂暴な敵であるかを知ったとき、――これらの人々は、そういう環境のもとで教育されて共産主義者になるのである。共産主義的倫理の基礎にあるものは、共産主義を強化し完成するための闘争である。これがまた、共産主義的教育、陶冶、学習の基礎でもある。これが、共産主義をどう学ぶかという問題にたいする答えである。

もし学習、教育、陶冶が学校のなかだけに閉じこめられ、激しい生活から切り離されたものであるなら、われわれはそれを信用しないであろう。労働者と農民が依然として地主や資本家に抑圧されているかぎり、学校が依然として地主や資本家の手中にあるかぎり、青年の世代は盲目であり、無知である。だが、われわれの学校は、青年に知識の基本をあたえ、自力で共産主義的な見解をつくりあげる能力をあたえ、彼らを教養ある人間に仕立てあげなければならない。われわれの学校は、人々がそこで学んでいるあいだに、搾取者からの解放をめざす闘争の参加者に彼らを仕立てあげなければならない。共産青年同盟は、その学習、教育、陶冶の一歩一歩を搾取にたいするすべての勤労者の共同闘争への参加と結びつけるときにだけ、共産主義的な若い世代の同盟という名称をはずかしめないことになる。なぜなら、諸君がよく知っているように、ロシアだけが唯一の労働者共和国で、その他の全世界には古いブルジョア制度が存続しているあいだは、われわれは彼らよりも弱く、いつでも新しい攻撃の危険にさらされているからであり、われわれが結束と一致協同の精神を学びとってこそ、われわれは今後の闘争に勝利し、強くなって、真に不敗なものとなるだろうからである。このように、共産主義者であるということは、青年層全体を組織し、統合し、この闘争のなかで教育と規律の手本を示すことである。そうすれば、諸君は、共産主義社会という建物の建設に着手し、それを最後までやりとげることができるであろう。

この点を諸君にもっとわかりやすくするために、一つの例をあげよう。われわれはみずから共産主義者(コムニスト)と称している。コムニストとはなにか？　コムニストというのはラテン語からでたことばである。コムニスとは、共同の、という意味である。共産主義社会というのは、あらゆるものが――土地も工場も――共同であり、労働も共同であるという意味である。これが共産主義の意味である。

各人が別々の地所で自分の経営をやっているとしたら、労働は共同でありえようか？　共同の労働はいきなりつくりだせるものではない。そういうことは不可能である。こ

れは、天から降ってくるものではない。これは労働によってかちとり、苦しんで生みだし、つくりださなければならないものである。これは闘争の過程でつくりだされる。ここでは古い書物は役に立たない。書物などを信じるものはだれもいないだろう。ここで役に立つのは自分自身の生活体験である。コルチャックとデニーキン[二七]がシベリアと南部からやってきたとき、農民は彼らに味方した。ボリシェヴィズムは農民の気にいらなかった。ボリシェヴィキは公定価格で穀物を取りあげるからである。しかし、農民がシベリアとウクライナでコルチャックとデニーキンの権力を体験したとき、農民は、自分らに選択の余地はないことを知った。資本家の側につくか――そうすれば、資本家のために地主の奴隷に売り渡される――、それとも労働者のあとについてゆくかのどちらかであった。労働者はなるほど桃源境を約束しはしない。諸君に鉄の規律と苦しい闘争のなかでのがんばりとを要求するが、しかし諸君を資本家と地主の奴隷制のなかから連れだしてくれる。無知な農民さえ、自分自身の経験にもとづいてそれを理解し、見てとったとき、彼らは苦しい学校を卒業して、共産主義の自覚した味方になった。共産青年同盟は、こういう経験を自分の全活動の基礎にしなければならない。

私は、われわれはなにを学ぶべきか、われわれは古い学校と古い科学からなにを取りいれなければならないか、という問題に答えた。それをどう学ぶべきか、という問題にも答えてみよう。学校での活動の一歩一歩、教育、陶冶、学習の一歩一歩を、搾取者にたいするすべての勤労者の闘争と切り離しえないように結びつけることによってのみ、それを学ぶのである。

私は、共産主義のこの教育がどのようにすすめられなければならないかを、あれこれの青年組織の活動の経験からとった若干の例で、諸君にはっきりと説明しよう。みんなが文盲の一掃を論じている。諸君も知っているように、文盲の国に共産主義社会を建設することはできない。ソヴェト権力が命令したり、党が一定のスローガンをあたえたり、最良の活動家の一部をこの仕事に投じるだけでは不十分である。このためには、若い世代自身がこの仕事にとりかかることが必要である。青年同盟にはいっている若人、青年男女が、これはわれわれの仕事だ、われわれは文盲を一掃するため、われわれ青年層のあいだから文盲をなくすため手をつないで農村に行こう、と語ること――ここに共産主義がある。われわれは、青年の自主活動をこの仕事にふりむけるために努力している。諸君も知っているように、ロシアを無知文盲の国から教育ある国にすぐさま変えることはできない。しかし、青年同盟がこの仕事にとりかかり、

全青年がすべての人のために働くなら、四〇万の青年男女を結合している同盟は、共産青年同盟の名に値するものとなる。さらに、あれこれの知識を習得して、自力では文盲の暗やみからぬけでられない青年を援助することが、同盟の任務である。青年同盟員であるということは、自分の活動、自分の力を共同の事業にささげるように仕事をすすめることである。これこそ、共産主義的教育である。このような活動のなかではじめて、青年男女は真の共産主義者に変わってゆくのである。彼らがこの活動で実地の成功をおさめることができる場合にはじめて、彼らは共産主義者になるのである。

郊外の野菜畑での労働を例にとってみたまえ。これも仕事のひとつではないか？　これは共産青年同盟の任務のひとつである。人々は飢えている。工場には飢えがある。飢えをまぬかれるためには野菜畑を発展させなければならないが、農業は旧式なやり方でいとなまれている。そこで、もっと自覚した分子がこの仕事にとりかかることが必要になっている。そうすれば、野菜畑はふえ、その面積はひろがり、成績は改善されることが、わかるだろう。共産青年同盟はこの仕事に積極的に参加しなければならない。各同盟あるいは同盟の各細胞は、この仕事を自分の仕事と考えなければならない。

共産青年同盟は突撃隊となり、あらゆる活動に援助をあたえ、そのイニシアチブ、創意を発揮しなければならない。同盟は、どんな労働者も、同盟員の説く学説はたぶん理解できないにせよ、また、おそらくその学説をすぐには信じないにせよ、同盟員の現実の活動に照らし、彼らの行動に照らして、これは真に自分たちに正しい道を示してくれる人々だということを見てとるようなものでなければならない。

もし共産青年同盟があらゆる分野でこのようにその活動を組織することができないなら、それは、同盟が古いブルジョア的な道に迷いこみつつあることを意味する。われわれの教育は、共産主義の学説からでてくる任務を勤労者が解決するのを助けるため、搾取者に反対する勤労者の闘争と結びつけられなければならない。

同盟員はひまな時間のすべてを、野菜畑を改良したり、どこかの工場で青年の学習を組織する、等々のために用いなければならない。われわれは、ロシアが貧しい、みすぼらしい国から豊かな国に変わることを望んでいる。そして、共産青年同盟はその陶冶、その学習、その教育を、労働者や農民の労働と結びつけるべきであって、自分の学校に閉じこもったり、共産主義の本や小冊子を読むだけにとどまってはならない。労働者や農民とともに労働してはじめて、

真の共産主義者になれるのである。青年同盟にはいっている者はだれでも読み書きができ、そのうえ労働もできるということを、すべての人が認めるようにしなければならない。われわれの古い学校から古い軍隊式訓練を追いだして、それを自覚した規律とおきかえたこと、青年がこぞって土曜労働に参加していること、彼らが郊外のどの畑をも利用して住民を助けていることを、すべての人が見てとるとき、人民は労働にたいする以前の考え方を変えるであろう。

農村や自分の居住地で——小さい例をとるなら——清潔の確保や食糧の配給のような仕事への協力を組織することは、共産青年同盟の任務である。古い資本主義社会では、これはどういうふうにやられたか？　だれもが自分だけのために働いており、そこに老人や病人がいはしないか、家事全体が女の負担になっていて、そのために女は抑圧され奴隷化された状態にありはしないか、と調べるものはだれもいなかった。だれがこれとたたかうべきか？　青年同盟である。同盟はこう言わなければならない。われわれはこれをやりかえよう。われわれは青年隊を組織しよう。青年隊は、組織的に各家庭をまわって、清潔の確保や食糧の配給を助けよう。働き手を正しく配置し、労働が組織だった労働でなければならないことを示しながら、全社会の利益のために組織だった仕方で行動しよう、と。

いま五〇歳ぐらいの人に代表される世代は、共産主義社会を見ることは望めない。それまでにこの世代は、死にたえてしまうであろう。しかし、いま一五歳の世代は、共産主義社会を見もしようし、自分でこの社会を建設もするだろう。彼らは、自分たちの生活の全課題がこの社会の建設にあることを知らなければならない。古い社会では、労働は個々の家族によっていとなまれ、人民大衆を抑圧していた地主と資本家以外には、労働を結合するものはだれもいなかった。われわれは、労働者や農民の一人びとりが、私は自由な労働の大軍の一部であり、地主や資本家がいなくても私は自分の生活を自分で建設することができ、共産主義制度を確立することができる、と自分のことを考えるような仕方で、どれほどきたならしい、苦しい労働であろうと、あらゆる労働[三]を組織しなければならない。共産青年同盟は、すべての青年を自覚した、規律ある労働のなかで教育しなければならない。このようにしてこそわれわれは、現在提起されている課題が解決されることを期待できるのである。技術の最新の成果を窮乏したわが国土の役に立てることができるように国を電化するまでには、一〇年以上の年月がかかると予想しなければならない。そこで、現在一五歳で、一〇—二〇年ののちには共産主義社会に生活するはずの世代は、どの村でもどの都市でも、青年が毎日、

共同労働のあれこれの課題を――たとえ、ごくちっぽけな課題であっても、ごく簡単な課題であっても――実地に解決してゆくような仕方で、その学習のいっさいの課題を立てなければならない。このことがそれぞれの村でおこなわれるにつれて、共産主義競争が発展するにつれて、青年が自分の労働を結合する能力をもっていることを立証するにつれて、共産主義建設の成功は確実なものとなるだろう。自分の一歩一歩をこの建設の成功の見地から考察してこそ、また団結し自覚した勤労者になるためにわれわれは全力をつくしたかどうかと自問してこそ、共産青年同盟は、五〇万の同盟員を一つの労働軍に結合し、世人の敬意をその一身に集めることをなしとげるであろう。(鳴りひびく拍手)

『プラウダ』第二二一、二二二、二二三号、一九二〇年一〇月五、六、七日
全集、第五版、第四一巻、二九八―三一八ページ所収
邦訳全集、第三一巻、二七九―二九七ページ所収

プロレタリア文化について[三二]

『イズヴェスチヤ』[三三]一〇月八日号から明らかなように、同志ルナチャルスキーは、プロレトクリトの大会で、われわれがきのう彼と打ち合わせたこととまったく逆のことをしゃべった。

大至急、決議案(プロレトクリト大会の)を起草し、中央委員会に承認させ、これをプロレトクリトのこの会期内に採択させるようにする必要がある。プロレトクリト大会はきょう終わるのだから、きょう中央委員会の名で、教育人民委員部の参与会とプロレトクリト大会との両方でそれを通過させなければならない。

決議案

一　ソヴェト労農共和国では、啓蒙活動全体のやり方は、

一般に政治的啓蒙の分野でも、とくに芸術の分野でも、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の目的を首尾よく実現するための、すなわちブルジョアジーを打倒し、階級を廃絶し、人間による人間のいっさいの搾取を一掃するための、プロレタリアートの階級闘争の精神につらぬかれていなければならない。

二　だから、プロレタリアートは、自分の前衛である共産党をつうじても、一般にあらゆる種類のプロレタリア組織のすべてをつうじても、国民啓蒙の全事業に、最も積極的に、最も主導的に参加しなければならない。

三『共産党宣言』が現われてからこのかた、現代史のすべての経験、とくに半世紀以上におよぶ世界各国のプロレタリアートの革命的闘争は、マルクス主義の世界観だけが革命的プロレタリアートの利害、見解、文化の正しい表現であることを、論争の余地なく証明した。

四　マルクス主義は、ブルジョア時代のきわめて貴重な成果をけっして拒否せず、反対に、人類の思想と文化の二〇〇〇年以上におよぶ発展における価値あるもののすべてを摂取し加工したからこそ、革命的プロレタリアートのイデオロギーとして世界史的意義をもつようになったのである。あらゆる搾取に反対するプロレタリアートの最後の闘争であるプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の実際の経験にはげまされながら、今後も右の基礎のうえに、それと同じ方向でおこなわれる活動だけが、真のプロレタリア文化の発展と認められる。

五　この原則的見地にしっかりと立って、全ロシア・プロレトクリト大会は、自分の独特の文化を考えだしたり、自分の孤立した組織に閉じこもったり、教育人民委員部とプロレトクリトとの活動分野を区別したり、あるいは、教育人民委員部の施設の内部でプロレトクリトの「自治」を打ち立てようとしたり、等々の試みをすべて、理論的に誤った、実践的に有害なものとして、断固として排撃する。反対に、大会は、自己を教育人民委員部の施設網の補助機関と見なし、ソヴェト権力（とくに教育人民委員部）とロシア共産党の一般的指導のもとに、プロレタリア執権（ディクタツーラ）の諸任務の一部である自己の任務を遂行することを、プロレトクリトの全組織の無条件の義務とする。

＊＊＊

同志ルナチャルスキーは、彼の真意がゆがめられたのだ、と言っている。だが、それだからなおさら、決議がぜひとも必要なのである。

一九二〇年一〇月八日に執筆

県および郡国民教育部政治教育委員全ロシア会議[三三]での演説

一九二〇年一一月三日

一九二六年に雑誌『クラースナヤ・ノーヴィ』第三号にはじめて発表
全集、第五版、第四一巻、三三六―三三七ページ所収
邦訳全集、第三一巻、三一五―三一六ページ所収

同志諸君、一部は共産党中央委員会と人民委員会議で政治教育本部の組織の問題について述べられ、一部は人民委員会議に提出された草案をきっかけにして私の心にうかんだいくつかの考えを、ここで伝えさせていただきたい。この草案は、きのう基本的には採択されたが、細目の点については今後さらに討議されるであろう。

私個人として、ただ一つあえて述べておきたいことは、諸君の機関の名称を変えることに、はじめ私がきわめて否定的な態度をとっていたことである。私の考えでは、教育人民委員部の任務は、人々がみずから学び、また他人を教えるのを助けることである。私は、ソヴェト機関での自分の経験にもとづいて、いろいろな名称をつけることを子ど

ものいたずらとして扱う習慣がついた。名称などというものはどれも一種のいたずらだからである。だが、いまでは、政治教育本部という新しい名称はすでに承認されている。

これは決定ずみの問題であるから、諸君は、私の意見を個人的な意見にすぎないと考えていただきたい。もしこの場合、問題が名まえの変更だけのことでないなら、それはかえって歓迎してよいことであろう。

もしわれわれが文化教育活動に新しい活動家を参加させることに成功するなら、これはもうたんに新しい名称をつけただけのことではないし、そうなれば、新しい事業や新しい機関が発足するたびにレッテルをはろうとする「ソヴェト的」弱点は、大目にみてもよいであろう。うまくいけば、われわれは、これまでなしとげたものよりもなにか多くのものを達成するであろう。

同志諸君をうながして、われわれとともに共同の文化教育活動に参加するようにしむけるにちがいない最も主要な動機、それは、教育をわれわれの政治と結びつける問題である。名称は、必要とあれば、なにかを見こしたものにしてよいのである。なぜなら、われわれは、われわれの教育活動全体について教育の非政治性という古い見地に立つことはできず、教育活動を政治と無関係のものにすることはできないからである。

このような考えは、ブルジョア社会で支配してきたし、いまも支配している。教育の「非政治性」あるいは「無政治性」という言い方は、ブルジョアジーの偽善である。これは、その九九%が教会の支配や私的所有等々によって打ちひしがれている大衆をあざむくことにほかならない。いまなおブルジョア的な諸国の全部を支配しているブルジョアジーは、まさにこの大衆欺瞞をこととしている。

そこで、ブルジョア諸国で或る機構が重要なものであればあるほど、その機構が資本とその政治から自由であることはそれだけ少なくなる。

すべてのブルジョア国家では、政治機構と教育との結びつきはきわめて強固である。もっとも、ブルジョア社会はそのことを率直に認めることができないのであるが。他方では、この社会は、教会をつうじて、私的所有の制度全体をつうじて、大衆にはたらきかけている。

われわれの基本的任務は、とりわけ、ブルジョアの「真理」に自己の真理を対置し、それを承認させることである。

ブルジョア社会からプロレタリアートの政治への移行は、非常に困難な移行である。ブルジョアジーがその宣伝扇動の全機構をあげて倦まずたゆまずわれわれを中傷しているだけに、なおさらそうである。ブルジョアジーは、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）のさらに一層重要な役割、その教育

的任務――プロレタリアートが住民の少数しか占めていないロシアではとくに重要なこの任務――をあいまいにしようとして、全力をつくしている。ところが、ロシアでは、この任務を第一位に押しださなければならない。大衆に社会主義建設の準備をととのえさせる必要がわれわれにはあるからである。もし、プロレタリアートが、ブルジョアジーにたいする闘争のなかで、高い自覚や、厳正な規律や、深い献身的態度をやしなわないならば、すなわち、その古くからの敵にたいするプロレタリアートの完全な勝利のためにかかげなければならない課題の総体をやりとげないならば、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）は問題になりえないであろう。

われわれは、勤労大衆に社会主義社会のための準備ができているかのようにいうユートピア主義の見地に立つものではない。われわれは、それが事実でないこと、社会主義のための準備をつくりだすのは大工業、ストライキ闘争、政治的組織性だけであることを、労働者社会主義の全歴史の正確な資料にもとづいて知っている。勝利をおさめ、社会主義的変革をなしとげるためには、プロレタリアートは、連帯行動をとる能力、搾取者打倒の事業を果たす能力をもっていなければならない。そして、いまわれわれは、プロレタリアートがすべての必要な能力をもつようになったのを、そして、自分の権力をたたかいとるさいにそれらの能力を行動に移したのを見ている。

教育活動家にとっては、また闘争の前衛としての共産党にとっては、古い制度から遺産としてわれわれに残された古い習慣、古い習性、大衆のなかに徹底的にしみこんでいる所有者的な習性と習慣を克服するために、勤労者の教育と陶冶を助けることが基本的な任務とならなければならない。社会主義的変革全体のこの基本的任務は、党中央委員会と人民委員会議の注意をきわめてしばしばうばった部分的な問題の審議にあたっても、絶対におろそかにされてはならない。政治教育本部の仕組みをどうするか、それと個個の機関とをどのように結合するか、それを、中央の諸機関はもとより、地方の諸機関ともどのように結びつけるか――この問いには、すでに大きな経験をもち、このことを専門的に研究していて、私よりもこの問題に精通している同志たちが答えてくれるであろう。私としてはただ、この問題の原則的側面の若干の基本点を強調しておきたいと思う。われわれは、問題を公然と提起し、旧来のすべてのうそに反して、教育は政治と結びつけられざるをえないことを、公然と認めなければならない。

われわれは、われわれの何層倍も強い世界ブルジョアジーとたたかう歴史的時期に生きている。このようなたたかいの時期には、われわれは革命的建設を守らなければなら

ないし、軍事的方法によってだけでなく、それ以上に思想的方法によっても、教育によっても、ブルジョアジーとたたかわなければならないが、それは、労働者階級が政治的自由のための闘争のなかで何十年もの長いあいだにやしなってきた習慣、習性、信念が、これらの習慣、習性、思想の総体が、全勤労者を教育する道具となるようにするためである。ところで、まさにどのように教育するかという問題を解決する任務は、プロレタリアートにかかっている。世界の例外なくすべての資本主義国にいまますます波及しつつあるプロレタリアートの闘争のそとに立ち、国際政治全体の局外に立つことはできないし、そういうことは許されない、という自覚をやしなわなければならない。ソヴェト・ロシアに対抗して世界の強大な資本主義国のすべてが連合していること――ここに現在の国際政治の真の基礎がある。そして、資本主義諸国の何億という勤労者の運命がこれにかかっていることを、認めなければならない。ひとにぎりの資本主義諸国に従属していないような地方は、現在世界に存在していないではないか。こうして、情勢は次のようなかたちをとろうとしている。すなわち、革命と戦争の局外にとどまっていて、ブルジョアジーの大衆欺瞞に気づかず、ブルジョアジーが意識的にこれらの大衆を無知の状態に放置しているのがわからない、あの無知な人々のように、現在の闘争の局外に立ち、それによって完全な無自覚を証明するか、それともプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のための闘争に立ち上がるか、そのどちらかだ、と。

われわれは、プロレタリアートのこの闘争について、まったく公然と語っている。各人は、こちらの、われわれの味方になるか、それともあちら側の味方になるか、どちらかにしなければならない。どちらの側にもつくまいとする試みはみな、破綻と恥さらしに終わる。

われわれは、ユデーニチ一派、コルチャック一派、ペトリューラ一派、マフノ一派、等々といった、ケーレンスキー体制の無数の残りかす、エス・エル、社会民主主義派の残りかすを観察し、ロシアのさまざまな地方における反革命の多種多様な形態と色合いを見てきたので、自分たちはすでに他のだれよりもはるかに鍛えられていると言うことができる。だが、西ヨーロッパを一瞥すると、われわれは、わが国で起こったのとちょうど同じことがそこで繰りかえされ、わが国の歴史が繰りかえされているのを見る。ほとんどどこでも、ブルジョアジーとならんで、ケーレンスキー体制の要素が見られる。幾多の国、とくにドイツに、そういう要素が支配している。どこでも同じことが見うけられる。すなわち、なにか中間的な立場はありえないこと、白色独裁（ディクタツーラ）（西ヨーロッパのすべての国のブルジョアジーは、

われわれにたいして武装しながら、白色独裁を準備中である）か、それともプロレタリアートの執権か、というはっきりした意識が見うけられるのである。われわれはこのことを非常に痛切に、深刻に経験したので、私はロシアの共産主義者について長たらしく論じるにはおよばない。ここからでてくる結論はただ一つである。しかも、その結論は政治教育本部に関連したあらゆる論議や構想の重要な基礎とならなければならない。なによりもまず、この機関の活動では、共産党の政治の優位が公然と承認されなければならない。われわれはそれ以外の形態を知らないし、どの国もこれ以外の形態をまだつくりだしていない。党が自分の階級の利益にこたえている度合いはさまざまでありうる。党はあれこれの変化または是正をこうむっている。だが、われわれはまだこれ以上によい形態を知らない。三年のあいだ世界帝国主義の襲撃をもちこたえてきたソヴェト・ロシアにおける全闘争は、党が、プロレタリアートを助けて、教育者、組織者、指導者としてのその役割、すなわち資本主義を崩壊させるのに必要不可欠な役割を果たさせることを、意識的に自分の任務としていることと結びついている。勤労大衆、農民および労働者の大衆は、共産主義建設のために、インテリゲンツィアの古い習性を打破し、自分を再教育しなければならない。そうしなければ、建設の事業にとりかかることはできない。われわれのすべての経験は、この事業がきわめて重大なものであることを示している。だから、党の主導的役割の承認を、われわれの念頭におかなければならない。われわれは、活動の問題、組織建設の問題の討議にあたって、このことを見おとすことはできない。どうやってそれを実現するかについては、まだいろいろ論じなければならないし、党中央委員会でも人民委員会議でもこれについて論じなければならないであろう。きのう可決された布告は、政治教育本部にかんしては基礎となるものであった。しかし、この布告は、人民委員会議ではまだいっさいの手続きをすませてはいない。近いうちに、この布告は公布されるであろう。そして、その最終の正文では、党にたいする関係について直接に述べたことばがそこにないことを、諸君は知られるだろう。

だが、われわれは、ソヴェト共和国の法制上および実際上の組織全体が次のような基礎のうえに打ち立てられていることを知り、またおぼえていなければならない。すなわち、プロレタリアートと結びついた共産主義分子が、このプロレタリアートに自分の精神を浸透させ、彼らを自分に服従させ、われわれが非常に長いあいだその克服に努力してきたブルジョア的欺瞞からプロレタリアートを解放する ことができるように、党は一つの原則にしたがって、すべ

てを是正し、指定し、建設しているということである。教育人民委員部は長い闘争を経てきた。教師の組織は、長いあいだ社会主義的変革とたたかってきた。これらの教師のあいだには、ブルジョア的偏見がとくに根づよかった。ここでは、直接のサボタージュのかたちでも、頑迷なブルジョア的偏見のかたちでも、長いあいだ闘争がおこなわれた。そこで、われわれは、共産主義の地歩を、徐々に、一歩一歩たたかいとらなければならない。校外教育のために活動し、大衆のこうした教育と啓蒙の任務を果たす政治教育本部がとくにはっきりと当面している課題は、この膨大な機構——すなわち、いま労働者に奉仕している五〇万の教育者軍を党の指導と結合し、自分に従わせ、彼らに自分の精神を浸透させ、彼らを自分の創意の火で燃えたたせることである。教育活動家、教師たちは、ブルジョア的な偏見と習慣、プロレタリアートにたいする敵意を教えこまれている。彼らはプロレタリアートとはまったく結びついていなかった。いまやわれわれは、教育者の新しい軍隊を養成しなければならない。この新しい軍隊は、党や党の思想と緊密に結びつかなければならない。これに党の精神を浸透させなければならない。この新しい軍隊は、労働者大衆を自分のほうに引きつけ、彼らに共産主義の精神を浸透させ、彼らをして共産主義者がしている仕事に関心をいだかせなければならない。

古い習慣、習性、思想と手を切らなければならないのだから、ここでは政治教育本部とその活動家は、なににもまして念頭におくべききわめて重大な任務に当面している。じっさい、ここではわれわれは、大多数が昔かたぎの教師たちを、どうやって党員、共産主義者と結びつけるかという難問に当面している。この問題は非常にむずかしいものである。だから、われわれはそれについて深く考えてみなければならない。

各種各様の人々をどうやって組織的に結びつけるかを検討してみよう。共産党が指導権をもたなければならないことは、われわれには原則的に疑問の余地はない。だから、政治的教化、政治教育の目的は、うそや偏見にうちかつ能力をもった真の共産主義者を育てあげることであり、勤労大衆が古い制度に勝利し、資本家のいない、搾取者のいない、地主のいない国家を建設するのを援助することである。ところで、どうやればそうすることができるか？　それは、教師がブルジョアジーから受けついだ知識の総和を、人々が身につけるときにはじめて、可能である。こうしなければ、共産主義のあらゆる技術的達成は不可能であろうし、それについてのあらゆる夢想は空疎なものであろう。政治と結びついて、またとくにわれわれに有益な政治、すなわ

ち共産主義に必要な政治と結びついて活動する習慣をもたないこれらの活動家を、どうやって結合するかという問題が、ここに現われてくる。すでに述べたように、これは非常にむずかしい任務である。われわれはこの問題を中央委員会でも討議したが、この問題を討議するにあたっては、経験の教えるところを考慮するようつとめた。そして、私がいま演説している本日の大会のような大会、諸君の会議のような会議は、この点で大きな意義をもつであろうと、われわれは思っている。各党委員会は、以前にはそれぞれの宣伝家を、特定のグループ、特定の組織の人間と見ていたが、いまではそれを新たに見なおさなければならない。各人は、統治する党、国家全体を指導し、ブルジョア制度にたいするソヴェト・ロシアの世界的な闘争を指導する党に所属している。彼は、たたかう階級の代表者であり、膨大な国家機構を支配しておりまた支配しなければならない党の代表者である。地下活動の学校をりっぱに卒業し、闘争で試練をうけ、鍛えられた非常に多くの共産主義者が、自分が扇動・宣伝家から、扇動家たちの指導者に、巨大な政治組織の指導者になるというこの転換、この推移を、理解したがらず、また理解することができないでいる。この場合、彼がなにかそれにおうじた名称で、おそらく、耳こそばゆい、たとえば国民学校教育長などという名称でよばれるかどうかは、それほど重要なことではない。重要なのは、彼が教師大衆を指導する能力をもっていることである。

数十万の教師大衆は、仕事を推進し、思想をめざめさせ、まだ大衆のあいだに残っている偏見とたたかうべき機構である、と言わなければならない。教師大衆は、資本主義文化の遺産を受けついでおり、その欠陥が彼らにこびりついているが、こういう欠陥があるあいだは、彼らは共産主義的な教師とはなりえない。しかし、それでも、これらの教師を政治教育活動の働き手の隊列にくわえることはさしつかえない。なぜなら、これらの教師には知識があるが、この知識がなければ、われわれは自分の目的をとげることができないからである。

われわれは、何十万もの必要な人々を共産主義的教育に奉仕させなければならない。これは、戦線で解決ずみの任務であり、旧軍隊の何十万の将兵を受けいれたわが赤軍で解決ずみの任務である。彼らは、長い過程、再教育の過程を経て赤軍と融合したのであるが、彼らはそれを、結局は、ほかならぬ彼らの勝利によって証明したのである。わが文化教育活動でも、われわれはこの模範にしたがわなければならない。なるほど、この活動はあまりはなやかなものではないが、なおいっそう重要である。どの扇動家、宣伝家も、われわれに必要である。彼は、厳密に党の精神で活動

する場合に、しかし、党活動だけにかぎらないで、何十万の教育家を指導し、彼らをして古いブルジョア的偏見を打破することに関心をいだかせ、われわれのやっている仕事に彼らを参加させ、われわれの活動がとほうもなく巨大なものであるという意識を彼らに植えつけることが、自分の任務だということを心にとどめている場合に、その任務を果たすのである。そして、この活動に移ってはじめて、われわれは、資本主義によって押しつぶされ、資本主義がわれわれから遠ざけたこの大衆を、正しい道に連れだすことができる。

まさにこれが、学校のそとで活動している扇動家、宣伝家の一人ひとりが解決をめざさなければならない任務である。彼は、これらの任務を見失ってはならない。この任務を解決するにあたっては、幾多の実践的な困難にぶつかる。そして、諸君は、共産主義の事業を助けて、党グループの代表者となり指導者となるだけでなく、労働者階級の手にある国家権力の代表者となり指導者とならなければならない。

われわれの任務は、資本家のあらゆる反抗、軍事的反抗や政治的反抗だけでなく、最も深刻で最も強力な思想的反抗をも、克服することである。わが教育活動家の任務は、大衆をこのようにつくりかえることである。われわれは、大衆が共産主義の教育と知識に関心をいだき、それに心をひかれていることを見ているが、このことこそ、われわれがこの分野でも勝利者となることの保障である。もっとも、おそらく戦線におけるほど早急にではなく、おそらく大きな困難や、ときには敗北をともなうであろうが、結局はわれわれが勝利者となるであろう。

私は、しめくくりとして、なお一つだけ言っておきたいことがある。政治教育本部ということばは、あるいは誤って理解されているかもしれない。ここで政治的という概念にふれているかぎりで、ここでは政治が最も肝心なものである。

だが、政治をどう理解すべきであろうか？　もし政治を古い意味に理解するなら、はなはだしい、重大な誤りにおちいるおそれがある。政治とは、諸階級のあいだの闘争である。政治とは、解放をめざして全世界のブルジョアジーとたたかうプロレタリアートの諸関係である。しかし、われわれの闘争では、事柄の二つの側面がきわだっている。一つは、ブルジョア制度の遺産を破壊する任務、全ブルジョアジーが繰りかえしおこなっているソヴェト権力覆滅の企てを打ち砕く任務である。これまでは、この任務がなによりもわれわれの注意をひき、もう一つの任務――建設の任務――に移るのを妨げていた。ブルジョア的世界観の考

える政治は、いわば経済から切り離されていた。ブルジョアジーは言った。農民よ、生きていけるように働け、労働者よ、生きてゆくのに必要なすべてのものを市場で手に入れるために働け、だが、経済政策を運営するのは君たちの主人だ、と。ところが、これはそうではない。政治は人民の仕事、プロレタリアートの仕事でなければならない。まさにここでわれわれは、われわれが自分の活動時間の一〇分の九までブルジョアジーとの闘争に没頭していることを強調しなければならない。ヴランゲリにたいする勝利のことをわれわれはきのう読んだし、諸君はきょうか、おそらくあすは読むであろうが、この勝利は、一つの闘争段階が終わろうとしていること、われわれが西欧の多くの国との講和をたたかいとったこと、そして軍事戦線での勝利の一つひとつが、国内闘争にたずさわり、国家建設の政治にたずさわれるようにわれわれの手を自由にしていることを、示している。白衛軍にたいする勝利にわれわれを近づける一歩一歩は、闘争の重点をしだいに経済政策に移しつつある。古い型の宣伝は、共産主義とはなにかを語り、その実例を示すというやり方である。だが、この古い宣伝はなんの役にも立たない。なぜなら、社会主義をどう建設するかを、実地に示さなければならないからである。すべての宣伝が経済建設の政治的経験のうえに打ち立てられなければならない。これは、われわれの最も主要な任務である。これを古い意味に解しようと企てる者は、立ちおくれた人となり、労働者農民大衆むけの宣伝活動をすることはできないであろう。いま、われわれの主要な政治は、一プードでもよけいに穀物を集め、一プードでもよけいに石炭を送りだし、これらの穀物と石炭をどのように利用するのがいちばんよいかを解決して、飢えている者をなくすために、国家を経済的に建設することでなければならない。これこそわれわれの政治である。そして、すべての扇動とすべての宣伝は、このうえに打ち立てなければならない。ことばはなるたけ少なくすべきである。諸君は、ことばで勤労者を満足させることはできないからである。戦争の状態が、ブルジョアジーとの闘争、ヴランゲリとの闘争、白衛軍との闘争を重点としないでもよいようになりさえすれば、われわれは経済政策のほうへ向きをかえるであろう。そうなった場合にこそ、扇動と宣伝はますます高まってゆく巨大な役割を演じることになろう。

扇動家の一人ひとりが、国家の指導者となり、経済建設の事業におけるすべての農民と労働者の指導者となるべきである。共産主義者となるためには、知ることが必要であり、これこれの小冊子、これこれの本を読む必要があると、彼は語らなければならない。われわれは、このようにして

経済を向上させ、それをいっそう堅実な、いっそう社会的なものにし、生産を増強し、穀物問題を改善し、生産物をいっそう適正に分配し、採炭量をふやし、資本主義と資本主義的精神なしに、工業を復興させるであろう。

共産主義とはどういうものか？　共産主義のあらゆる宣伝は、国家建設の実際的指導に帰着するようにおこなわれなければならない。共産主義は、労働者大衆自身の問題として彼らに近づきやすいものにならなければならない。この仕事のすすめ方はまずく、おびただしい誤りをともなっている。われわれはそれを隠すものではない。だが、労働者農民は、たとえわずかな、とぼしい援助ではあっても、われわれの援助のもとに、自分でわれわれの機構をつくりあげ、整備しなければならない。われわれの機構は、われわれにとってもはや綱領、理論、課題ではなくなっている。われわれにとっては、これは今日の実際的な建設の問題である。われわれがこのたたかいでわれわれの敵からどんなに手いたい敗北をこうむることがあっても、そのかわり、われわれはこれらの敗北に学び、完全な勝利をおさめるであろう。いまやわれわれは、一つひとつの敗北から教訓を汲みとらなければならない。われわれは、なしとげた仕事の実例によって労働者と農民を教えなければならないことを、覚えていなければならない。われわれは、将来それが繰りかえされるのを避けるために、われわれのところでうまくいっていない点を指摘しなければならない。

この建設を何回も繰りかえしながら、この建設の実例によって、われわれは、つたない共産主義者の上役を真の建設者に――なによりもわれわれの経済の真の建設者に、仕立てあげるようにするであろう。われわれは、必要なことはみななしとげるであろうし、旧制度からわれわれに残された一挙に投げすてることのできない障害をすべて克服するであろう。大衆を再教育しなければならないが、大衆を再教育することができるのは、扇動と宣伝だけであり、大衆をまず最初に、共同の経済生活の建設に引きいれなければならない。このことが、それぞれの扇動家、宣伝家の活動上の主要なもの、基本的なものとなるべきである。そして、扇動家、宣伝家がこのことを身につけるならば、彼の活動の成功は確実なものになるであろう。（さかんな拍手）

『政治教育委員全ロシア会議（一九二〇年一一月一―八日）通報』、モスクワ
全集、第五版、第四一巻、三九八―四〇八ページ所収
邦訳全集、第三一巻、三六五―三七六ページ所収

労働組合について、現在の情勢について、同志トロツキーの誤りについて

第八回全ロシア・ソヴェト大会、全ロシア労働組合中央評議会およびモスクワ県労働組合評議会のロシア共産党（ボ）グループ合同会議での演説(三)

一九二〇年一二月三〇日

同志諸君、まずはじめに、私は、議事手続に違反している点をおわびしなければならない。というのは、討論に参加するためには、当然に報告や副報告や討論を聞かなければならなかったはずだからである。残念なことに、私はたいへん身体の調子が悪くて、そうすることができなかった。だが、きのう私は、印刷されたおもな文書に目をとおして、自分の意見をまとめることができた。もちろん、いまお話しした手続違反の点は、諸君に不便をおかけすることであろう。私は、ほかの諸君がなにを言ったのか知らないので、同じことを繰りかえして言ったり、答えなければならないことを答えずにしまうかもしれない。だが、私としてはほかにどうしようもなかったのである。

私がおもな資料としたのは、『労働組合の役割と任務について』という同志トロツキーの小冊子である。私は、この小冊子を、同志トロツキーが中央委員会で提案したテーゼと対照しながら注意ぶかく読んでみて、そこにじつに多くの理論上の誤りやひどいまちがいが集中的に現われていることに、驚いている。この問題についての大がかりな党内討論を始めようというのに、考えぬいたうえにも考えぬいたものを提出しないで、どうしてこんな不手際なしろものをつくることができたのだろうか？　私の見るところで根源的、根本的な理論上の誤りをふくんでいると思えるおもな点を、簡単にあげてみよう。

労働組合は、歴史的に必然的だというだけでなく、歴史的にそれなしにはやっていけない工業プロレタリアートの組織であって、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の条件のもとでは、工業プロレタリアートのほとんど全員を包括する。これが考慮すべき最も基本的な点であるが、同志トロツキーはいつもこのことを忘れ、このことから出発せず、このことを

評価しない。そもそも彼が提起している「労働組合の役割と任務」というテーマは、広大なテーマではないか。

以上述べたことだけからしても、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を実現するうえで、労働組合の役割がつねにきわめて重要だということがわかる。だが、この役割はいったいどういうものなのか？　これは、最も基本的な理論問題の一つであるが、この問題の検討に移るとして、私は、われわれがここに見るのはきわめて独特な役割だという結論に達する。一方では、工業労働者の全員を包括し、組織の隊列に引きいれる労働組合は、権力をもった、支配し統治する階級、執権(ディクタツーラ)を実現している階級、国家的強制を行使している階級の組織である。しかし、労働組合は国家組織ではない。強制の組織ではない。それは教育組織であり、引きよせ訓練する組織である。それは学校であり、管理の学校、経営の学校、共産主義の学校である。それは、まったくなみはずれた学校である。というのは、われわれがここで取り扱うのは、教師と生徒ではなくて、資本主義から残されたもの。残らざるをえなかったものと、プロレタリアートの革命的先進部隊、いわばその革命的前衛が自分たちのあいだから押しだしてくるものとの、ある種の、きわめて独特な組合せだからである。そこで、こうした真実を考慮にいれずに労働組合の役割を論じるなら、かならずいろいろな誤りをおかすことになる。

プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の体系のなかでそれが占める地位からみれば、労働組合は、こう言ってよければ、党と国家権力との中間に位置するものである。社会主義への過渡にあたっては、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)なしにはやっていけないが、この執権(ディクタツーラ)は、工業労働者の全員を包括する組織によっては実現できない。なぜか？　それについては、政党一般の役割について述べたコミンテルン第二回大会のテーゼ(六)を参照するのがよいであろう。いまは、この点に立ちいって論じるのはやめにしよう。党がプロレタリアートの前衛をいわばみずからのうちに吸収し、そしてこの前衛がプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を実現するというかたちになっている。また、労働組合のような土台がなければ、執権(ディクタツーラ)を実現することは不可能であり、国家機能を遂行することは不可能である。しかし、この機能を実現するには、やはり新しい型の特別な機関の一系列、つまりソヴェト機構にたよらなければならない。実践的な結論の面からみて、この状態の独特な点はどこにあるのか？　それは、労働組合が前衛と大衆との**結びつき**をつくりだすという点に、労働組合が大衆、つまりわが国を資本主義から共産主義へとみちびいてゆく能力をもつただ一つの階級の大衆を、日常活動によって説得するという点にある。一

方からみれば以上のとおりである。他方からみれば、労働組合は国家権力の「貯水池」である。資本主義から共産主義への過渡期における労働組合とは、まさにこういうものである。資本主義によって大規模生産の訓練をうけたただ一つの階級、小所有者の利害とは無縁なただ一つの階級が指導的な地位を占めなければ、この移行はまったく実現できない。しかし、プロレタリアートの全員を包括する組織によってプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を実現することは、不可能である。なぜなら、最も遅れた資本主義国の一つであったわが国だけでなく、他のどんな資本主義国でも、プロレタリアートはいまなおはなはだしくばらばらで、ひどく圧迫され、あちこちで（すなわち、個々の国の帝国主義によって）買収されてしまっているので、プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の全員を包括する組織が直接にプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を実現することとは、不可能だからである。執権（ディクタトゥーラ）を実現できるのは、階級の革命的エネルギーをみずからのうちに吸収した前衛だけである。こういうわけで、ここにはいわば一系列の歯車がある。プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の基礎そのもの、資本主義から共産主義への過渡の本質そのものが、こういう仕組みになっているのである。このことだけから見ても、同志トロツキーがその第一のテーゼで「思想的混乱」を指摘し、とくに、ほかならぬ労働組合の危機を語っているのは、根本的な点でなにか原則的な誤りがあることがわかる。危機を語るなら、まず政治情勢を分析してから、はじめてそれを語ることができるのだ。「思想的混乱」は、ほかならぬトロツキーその人にあるのであって、それというのも、まさに資本主義から共産主義への過渡の見地からみた労働組合の役割という基本問題で、彼が、ここにあるものはいくつかの歯車からなる複雑な体系であり、単純な体系などはありえないのだということ、なぜなら、全員ひとりのこらず組織されたプロレタリアートの手でプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を実現することは不可能だからだ、ということを見おとし、考慮にいれなかったからである。前衛から先進的階級の大衆に達し、この階級から勤労大衆に達する若干の「伝導装置」がなければ、執権（ディクタトゥーラ）を実現することはできない。ロシアでは、この大衆とは農民大衆である。他の諸国にはこのような大衆はいないが、しかし、どんな先進国にも、非プロレタリア的な大衆、でなくとも純プロレタリア的でない大衆が存在する。このことだけからしても、実際に思想的混乱が起こるのである。ただ、トロツキーがこの思想的混乱のことで他の人々を責めているのは、まったくの見当ちがいである。

労働組合の生産上の役割の問題をとってみるなら、私は、トロツキーがこの問題をいつも「原則的に」論じ、「一般

原則」を論じていることが、彼の根本的なまちがいだと考える。そのテーゼ全体をつうじて、彼は「一般原則」の立場から論じている。この点で、問題の立て方そのものが根本的にまちがっている。労働組合の生産上[37]の役割については、第九回党大会が十分に、十二分に論じたということは、いまは言わないことにしよう。また、トロツキー自身が、ロゾフスキーとトムスキーのまったく明瞭な言明を彼自身のテーゼのなかで引用していることも、言わないことにしよう。ロゾフスキーとトムスキーは、トロツキーにとって、ドイツ人の言う「お身代りの笞打たれ役」、つまり、彼の論戦のけいこ台の役をつとめさせられている。そこには、原則的な意見の相違はなにもなく、この目的のためにトムスキーとロゾフスキーを選んだのは、見当ちがいである。というのは、彼らが書いたことを、トロツキー自身が引用しているくらいだからである。ここでは、どんなに熱心にさがしても、重大な原則的な意見の相違は、なにも見つからないだろう。だいたい、同志トロツキーがいまごろ問題を「原則的に」提起して、党とソヴェト権力をあとに引きもどしているということが、たいへんな誤り、原則的な誤りなのである。ありがたいことに、われわれはすでに原則から実践活動に、実務的な活動に移っている。スモーリヌイ[38]では、われわれは原則についておしゃべりをした。しかも、疑いもなく、必要以上におしゃべりした。それから三年たったいまでは、生産の問題のすべての点について、この問題の幾多の構成要素について、法令が出されている。だがこれらの法令は――なんとあわれな存在だろう、これらの法令は――署名はされるが、そのあとではわれわれ自身それを忘れてしまい、われわれ自身それを実行しないのだ。それから原則論が思いつかれ、原則的な意見の相違なるものが思いつかれる。のちほど私は、労働組合の生産上の役割の問題に関係したある布告について述べるつもりであるが、それは、白状しなければならないが、私をふくめてみなが忘れてしまった布告なのである。

ほんとうに存在する意見の不一致は、私が右にあげたものを別にすれば、一般原則の問題とはなんの関係もない。そして、右にあげた私と同志トロツキーとのあいだの「意見の相違」を、私は指摘しないわけにはいかなかったが、それは、同志トロツキーが「労働組合の役割と任務」という広範なテーマをとりあげたさい、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の問題の核心そのものに関連した一連の誤りをおかした、と私は確信するからである。だが、この点を別にすれば、われわれには協力一致の活動がぜひとも必要なのに、どうしてわれわれは実際にそういう協力一致の活動をやれないのかという疑問が生まれる。それは、大衆に近づき、大衆

を把握し、大衆と結びつく方法の問題について、意見の相違があるためである。これが肝心の点である。そして、まさにこの点に、資本主義のもとでつくりだされ、資本主義から共産主義へ移行するのになくてはならず、もっと遠い将来については疑問符づきの機関としての労働組合の特異性がある。労働組合の存続が疑問となるのは、遠い将来のことである。それについては、われわれの孫たちが論じるだろう。だが、いまの問題は、どうやって大衆に近づき、大衆を把握し、大衆と結びつくか、どうやって活動（プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を実現するための活動）の複雑な伝導装置を整備するかということである。私が活動の複雑な伝導装置と言うとき、ソヴェト機構をさしているのでないことに、ご注意ねがいたい。その方面でわれわれが今後どんな複雑な伝導装置をもつかということは、まったく別の事柄である。さしあたって私は、資本主義社会の諸階級間の関係について、抽象的に、原則的に述べているだけである。資本主義社会にはプロレタリアートがおり、非プロレタリア的な勤労大衆がおり、小ブルジョアジーがおり、ブルジョアジーがいる。この見地だけから見ても、たとえソヴェト権力の機構内に官僚主義がなくとも、資本主義によってつくりだされた状況のために、伝導装置はきわめて複雑なものになっているのである。そして、労働組合の「任務」はどういう点で困難なのかという問題を提出するときに、なによりもまず考えなければならないのは、このことである。繰りかえして言うが、真の意見の不一致は、同志トロツキーが見ているところにはけっしてなく、どうやって大衆を把握するかという問題、大衆に近づき、大衆と結びつく問題にある。じっさい、もしわれわれが自分自身の実践、自分の経験を、たとえ小さな範囲ででもくわしく、綿密に研究していたなら、われわれは、同志トロツキーのこの小冊子をみたしている何百という無用な「意見の相違」や原則的な誤りを避けられただろう、と言わなければならない。たとえば、この小冊子の多くのテーゼは、「ソヴェト組合主義（トレードユニオニズム）」との論戦にあてられている。ほかに心配事がないので、新しいおばけを発明したというわけだ！　ところで、そのおばけはいったいだれなのか？　同志リャザーノフなのだ。私は、同志リャザーノフを二〇年以上もまえから知っている。諸君は、私ほど古くから彼を知ってはいないが、彼の仕事のことは私におとらずよく知っている。諸君もよくご承知のように、彼にはいろいろと長所はあるが、スローガンを評価することは、彼の長所の一つではない。ところが、同志リャザーノフがたまたま口にしたあまり適切でない表現をつかまえて、テーゼのなかで「ソヴェト組合主義」のように描きだそうというのだ！　いったい、これは

まじめなやり方だろうか？　もしそうだとすれば、わが国には、「ソヴェト組合主義」や、「ソヴェト講和締結反対主義」や、そのほか、なにやかやがあるということになろう。どんな問題であれ、それについて、ソヴェト何々「主義」をでっちあげられないものはないのである。（リャザーノフ「ソヴェト反ブレスト主義。」）そうだ、そのとおりだ。「ソヴェト反ブレスト主義」だってもだ。

ところが、こういうふまじめなことをやりながら、同志トロツキーは、すぐその場で、自分でも誤りをおかしている。彼によれば、労働者国家では、労働者階級の物質的および精神的利益を擁護するのは労働組合の役割ではないということになる。これはまちがいである。同志トロツキーは「労働者国家」をうんぬんしている。失礼だが、それは抽象である。われわれが一九一七年に労働者国家について書いたのは、当然のことであった。だが、いまわれわれにむかって、「ブルジョアジーがいないのに、国家が労働者の国家なのに、いったいなんのために、まただれから労働者階級を擁護するのか」と言う者があるとすれば、それは明らかな誤りである。すっかり労働者国家というわけではないのだ。まさにそれが問題なのである。まさにこの点に、同志トロツキーの基本的な誤りの一つがある。いまでは、われわれは一般原則から実務的な討議に、法令に、移っている。ところが、われわれが実際的な、実務的な仕事にとりかかるのをやめさせて、あとに引きもどそうとする人間がいるのだ。そんなことをしてはならない。わが国の国家は、実際には、労働者国家ではなくて、労働者農民国家である。これが第一の点である。そして、このことから非常にたくさんのことがでてくる（ブハーリン「どんな国家だって？　労働者農民国家だって？」）私のうしろで同志ブハーリンが、「どんな国家だって？　労働者農民国家だって？」と叫んでいるが、これには答えないことにする。だれでも気がむいた者は、ついさきごろ閉会したソヴェト大会(三〇)を思い出すがよい。すでにそれが答えとなるだろう(三一)。

だが、それだけではない。わが党の綱領――これは、『共産主義のＡＢＣ』の筆者(三二)がたいへんよく知っている文献であるが――、すでにこの綱領から、わが国の国家が官僚主義的にゆがめられた労働者国家だということがわかる。われわれは、こういう悲しむべき――なんと言ったらいいか？――レッテルとでもいうべきものを、この国家に貼らなければならなかった。まさにこれが過渡の現実なのである。ところで、実際にこんなふうになっている国家で、労働組合が擁護すべきものはなにもないというのか、また全員ひとりのこらず組織されているプロレタリアートの物質

的・精神的利益を擁護するのに、労働組合なしにやっていけるというのか？――それは、理論的にまったくまちがった議論である。それは、われわれを抽象の国に、あるいはわれわれが一五年か二〇年後に到達するであろう理想の国に、連れてゆくものである。だが、私にはそれだけの期間にさえそこまで到達できるという確信がない。他方、われわれの目前の現実は、われわれにはよくわかっている。ただし、これは、われわれが自己陶酔におちいらず、インテリゲンツィア的なむだ話や抽象的な議論にふけらず、ときには「理論」のように思えても実際には誤りであり過渡期の特殊性のまちがった評価であるような議論にふけらないとしての話であるが。われわれの今日の国家は、全員ひとりのこらず組織されているプロレタリアートがみずからを擁護しなければならず、そして労働者を彼ら自身の国家から擁護するため、また労働者の手でわれわれの国家を擁護するために、われわれがこれらの労働者組織を利用しなければならないような状態にあるのだ。このどちらの場合にも、擁護は、われわれの国家の方策と、われわれとわが労働組合との協定、「一体化」とを、独特な仕方で組み合わせることによって実現される。

　この一体化については、あとでたちかえって述べなければならないだろう。だが、この用語だけから見ても、ここで「ソヴェト組合主義」という敵をでっちあげるのは誤りだということがわかる。というのは、「一体化」という概念は、これからはじめて一体化させなければならない、あい異なる事物が現存していることを、意味しているからである。「一体化」という概念には、全員ひとりのこらず組織されているプロレタリアートの物質的・精神的利益を国家権力から擁護するために、この国家権力の方策を利用する能力をもたなければならないということが、ふくまれている。われわれがもはや一体化の過程になく、一体となりおおせ、融合しきったときには、われわれは大会に集まるだろう。そこでは、原則的な「意見の相違」や、抽象的＝理論的な考察ではなくて、実地の経験が実務的に討議されるであろう。同志トロツキーにとって組合「官僚」の役をつとめさせられている同志トムスキーや同志ロゾフスキー――この論争で、だれの側に官僚主義的傾向があるかは、のちほど述べることにしよう――との原則的な意見の相違を見いだそうとする試みも、やはり失敗である。われわれがよく知っているように、同志リャザーノフには、ときおりスローガンを、しかも原則的といってよいようなスローガンを、ぜひともひねりださないでは気がすまないという、ちょっとした弱点があるにしても、同志トムスキーには、ほかにどんなに多くの罪があっても、この罪だけはないこ

とを、われわれはよく知っている。だから、ここで（同志トロッキーがやっているように）、同志トムスキーとの原則的な戦闘を開始するのはまったく度はずれたことだと思われる。これには、私はまったく驚いている。われわれが分派的、理論的、その他ありとあらゆる意見の相違のことで、多くの罪をおかした——だが、もちろん、なにかしら役に立つこともやった——時期があった。それ以後、われわれは成長したことと思っていた。もはや、原則的な意見の相違を考えだしたり、誇張したりすることをやめて、実務的な仕事に移ってよいころである。トムスキーは理論家肌だとか、トムスキーが理論家としての名声をねらっているとかいう話を、私は聞いたことがない。これは彼の欠陥かもしれないが、それは別問題である。だが、労働組合運動とともに活動してきたトムスキーがこの複雑な過渡を反映しないではいられないこと——それが意識的か無意識的かということは、別の問題である。私は、彼がつねに意識的にそれを反映しているとは言わない——、自分の立場にこの複雑な過渡を反映しないではいられないこと、また大衆がなんとなくぐあいがわるいと感じながら、どこがぐあいがわるいのか自分でわからないときには、トムスキーもやはりどこがぐあいがわるいのかわからないということ（拍手、笑声）、そのさい彼がわめきたてるということは、彼の功績であって欠陥ではないと、私は主張する。私は、トムスキーには部分的な理論上の誤りはたくさん見つかるだろうと、まったく確信している。そして、われわれみながテーブルにすわって、よく考えて決議やテーゼを書く段になれば、その誤りを訂正するだろう。それとも、訂正しようとしないかもしれない。なぜなら、生産活動は、瑣末きわまる理論上の意見の相違を訂正するよりも、もっと興味ぶかいからである。

つぎに、「生産民主主義」の問題に移ろう。これは、いわばブハーリンのためにやるのである。人間にはだれでも小さな弱点があり、大人物にも小さな弱点があること、してブハーリンも例外でないことを、われわれはよく知っている。なにか気どった文句が見つかると、ブハーリンはすぐにそれにとびつかずにはいられない。一二月七日の中央委員会総会では、彼は、ほとんど情熱をこめて、生産民主主義についての決議案を書いた。だが、この「生産民主主義」について熟考すれば熟考するほど、これが理論上の誤りだということがますますはっきりわかり、よく考えぬかれたものでないことがはっきりわかってくる。そこには、ごたごたしたもののほかは、なにもない。そしてわれわれは、この例をとって、すくなくとも党の一集会で、もう一度次のように言わなければならない。「同志エヌ・イ・ブ

ハーリンよ、気どった文句はもうすこし減らしたまえ。そうすることが、君にとっても、理論にとっても、共和国にとっても、有益である」と。（拍手）生産はつねに必要である。民主主義は、もっぱら政治の分野に属するカテゴリーの一つである。演説や論文のなかでこのことばをつかうことに反対するわけにはいかない。論文では、ある一つの相互関係をとりだして、それをあざやかに表現すれば、それで十分である。だが、君がこのことばをテーゼに変えてしまい、このことばを、「賛成者」と不賛成者をそれぞれ結集するスローガンに仕立てあげようとするとき、またトロッキーがやっているように、党は「二つの傾向のどちらかを選ばなければ」ならないと言うとき、このことばはまったく奇妙に聞こえる。はたして党は「選ば」なければならないかどうか、また、党が「選ば」なければならないような立場におかれたのはいったいだれの罪か、ということについては、別に述べることにしよう。すでにこういうことになった以上、われわれはこう言わなければならない。「いずれにせよ、『生産民主主義』というような、混乱以外になにもふくまない、理論上まちがったスローガンは、なるべく選ばないようにしたまえ」と。トロッキーも、ブハーリンも、二人ともこの用語をはっきりと理論的に考えぬかず、混乱におちいってしまった。「生産民主主義」ということばは、彼らを熱中させていた思想のまったく範囲外にある事物を思いうかべさせる。彼らが強調したかったのは、生産にもっと注意を集中するということであった。論文や演説のなかで強調するのなら、それはそれでいい。だが、それをテーゼにし、党がどちらかを選ばなければならないということになれば、私はこう言う。それとは反対のほうを選びたまえ。なぜなら、それは混乱しているから、と。生産はつねに必要であるが、民主主義はかならずしもそうではない。生産民主主義ということばは、根本的にまちがった一連の考えを生みだす。われわれが単独責任制を説いたときから、まだあまり月日はたっていない。ごたごたしたものをもちこんで、いったいいつ民主主義が必要で、いつ単純責任制が必要で、いつ独裁が必要なのか、人人がまごついてしまうような危険をつくりだしてはならない。独裁も、断じて放棄してはならないのである。うしろでブハーリンが、「まったくそのとおり」とうなっているのが、私に聞こえる。（笑声、拍手）

　さきへすすもう。われわれは、九月以来、重点主義から均等主義への移行を論じており、中央委員会の確認を経た全党協議会の決議[四]のなかで、そのことを述べている。これはむずかしい問題である。なぜなら、均等主義と重点主義とは、なんらかの仕方で結合されなければならないが、こ

の二つの概念はたがいに排除するものだからである。だが、それでもわれわれは、すこしばかりマルクス主義を学んできたし、どのように、またどんなときに対立物を結合することができるか、そして結合しなければならないかを、学んできた。それに、肝心なことは、三年半にわたるわが革命のなかで、われわれが幾度も実際に対立物を結合してきたことである。

　この問題にたいしては、きわめて慎重に、よく考えて取り組む必要があることは、明瞭である。われわれは、七人組や八人組や同志ブハーリンの高名な「緩衝グループ」(三)が生まれた、あの悲しむべき二つの中央委員会総会*ですでにこれらの原則問題について論じ、すでにそこで、重点主義から均等主義へ移るのは容易でないことを確認したではないか。そこで、われわれは、九月協議会のこの決定を遂行するために、すこしばかり努力しなければならない。この二つの対立した概念を結合するのにも、不協和音が生じるような仕方で結合することもできれば、協和音が生じるような仕方で結合することもできるではないか。重点主義とは、すべての必要な生産部門のうちである一つの生産部門を、それが最も緊要だという理由で優先させることである。いったいどういう点で優先させるのか？　どの程度まで優先させてさしつかえないのか？　これはむずかしい問題である。私は、こう言わなければならない。それを解決するには、勤勉だけでは十分でない。ここでは、英雄的な人間であるだけでも十分でない、と。英雄的な人間は、多くのすばらしい資質をもってはいても、適所にあってこそその能力を発揮できるのである。ここでは、きわめて独特な問題に取り組む能力をもたなければならない。そこで、重点主義と均等主義の問題を提起するなら、なによりも第一に思慮ぶかい態度をもってこれにあたらなければならないが、同志トロツキーの著作には、まさにこういう態度が認められない。トロツキーが彼の最初のテーゼの書きかえに長いあいだたずさわればたずさわるほど、彼にはまちがった命題がますます多くなってくる。彼の最終のテーゼには、次のように書かれている。

　「……勤労者の**消費**の分野、すなわち彼らの個人的生活条件の分野では、均等主義の方針をとる必要がある。**生産**の分野では、今後長いあいだ、重点主義の原則がわ

＊　これは、一九二〇年の中央委員会一一月総会と一二月総会をさす。一九二〇年一一月一三日付の『プラウダ』第二五五号および一九二〇年一二月一四日付の第二八一号所載の、両総会で採択された決議のテキスト、また一九二〇年一二月二〇日付の『ロシア共産党中央委員会通報』第二六号の記事を見よ。

れわれにとって決定的なものであろう。」……（トロツキーの小冊子の三一ページ、第四一テーゼ）
　これは、理論上まったく混乱している。これは、まったくまちがっている。重点主義とは優先待遇をあたえることであるが、消費をともなわない優先待遇は無である。もし私のうける優先待遇というのが、八分の一ポンドのパンしかもらえないようなものであれば、私は、そんな優先待遇はうやうやしく願いさげにしよう。重点主義における優先待遇とは、消費において優先待遇をあたえることである。そうでないような重点主義は夢想であり、霞のようなものであるが、われわれはとにかく唯物論者である。労働者も唯物論者である。もし重点主義だと言うのなら、パンも、衣類も、肉ももらいたい、と言う。われわれが国防会議〔註〕で具体的な機会にこれらの問題を何百回となく討論したさい、われわれは、このことをもっぱらこういうふうに理解したし、いまでもそう理解している。そういうとき、ある者は靴を手に入れようとして、「私のほうが重点的だ」と言い、また他の者は、「私に靴をくれたまえ。そうしなければ、君たちの重点的な労働者はもちこたえられないし、君たちの重点主義はおしまいになるだろう」と言ったものである。
　そこで、テーゼでは、均等主義と重点主義の問題が根本的にまちがって提起されているということになる。それればかりか、実践的に点検ずみのもの、獲得ずみのものから後退しているということになる。そんなことをしてはならない。そういうやり方をしたのでは、よい結果が生まれるはずがない。
　つぎに、「一体化」の問題をとってみよう。現在では、「一体化」についてはしばらく沈黙を守ることが、いちばん正しいやり方であろう。言葉は銀で、沈黙は金である。なぜか？　なぜなら、われわれはすでに実際に一体化にたずさわっているからである。わが国では、大きな県国民経済会議で、最高国民経済会議〔註〕や交通人民委員部、等々の大きな部で、実際に一体化を実施していないようなものは一つもない。だが、その結果は完全にうまくいっているだろうか？　まさにそこに難点がある。一体化がどのようにおこなわれたか、それによってなにが達成されたかについて、実地の経験を研究したまえ。あれこれの機関で一体化の実施のために出された布告の数は非常に多いし、数えあげることもできないほどである。だが、それからどういう結果が生まれたか、これこれの工業部門のこれこれの一体化がなにをもたらしたか、県労働組合評議会のこれこれのメンバーが県国民経済会議のこれこれのポストを占めたとき、それからどういう結果が生まれたか、彼は何ヵ月間この一体化を実行したか、等々を実際に研究すること――われわ

れ自身の実地の経験を実務的に研究することを、われわれはまだ実行できずにいる。われわれにやれたことは、一体化についての原則的な意見の相違をでっちあげ、しかもそのさい誤りをおかすことであった。こういうことにかけては、われわれは大家である。だが、われわれ自身の経験を研究し、それを点検するということになると――それはわれわれの得手ではない。わが国のソヴェト大会で、農業振興法をあれこれの仕方で適用する見地から各農業地区を研究する分科会のほかに、一体化を研究する分科会、サラトフ県の製粉業、ペトログラードの冶金工業、ドンバスの炭鉱業、等々における一体化の結果を研究する分科会が設けられ、それらの分科会が山のような資料を集めて、「われわれはこれこれのことを研究した」と述べるようになったら、私は言おう。「そうだ、われわれは実務にたずさわりはじめた。われわれは成長して幼年期をぬけだした！」と。ところが、われわれが一体化に三年も費やしたあとで、一体化についての原則的な意見の相違をでっちあげているという「テーゼ」をふるまわれるということ、これ以上に悲しむべき、まちがったことが、いったいありうるだろうか？われわれは一体化の道にすすんだ。そして、われわれがこの道にすすんだのが正しかったことを、私は疑わないが、しかしわれわれはまだ自分の経験の結果をちゃんと研究していない。だから、一体化の問題についてのただ一つ賢明な戦術は、沈黙を守ることなのだ。

実地の経験を研究することが必要である。私は、実地の一体化についての指示をふくむいろいろな法令や決定に署名してきたが、実践はどんな理論よりも百倍も重要である。だから、もし「『一体化』について話し合おうではないか」という者があるなら、私は、「われわれがやってきたことを研究しようではないか」と答えよう。われわれが多くの誤りをおかしたことは、疑う余地がない。われわれの法令の大部分も、まったく同様に、変更を要するものであるかもしれない。私はそれに同意する。私は法令にはすこしの未練ももっていない。だが、それなら、これこれのところを書きかえる、という実際的な提案を出してほしい。それが実務的な問題の立て方というものであろう。それならば、非生産的な仕事ではないであろう。それならば、官僚的な空想計画にみちびくこともないだろう。トロツキーの小冊子の第六篇「実践的結論」をとってみると、その実践的結論がまさにそういう罪をおかしているのである。なぜなら、そこには、全ロシア労働組合中央評議会と最高国民経済会議幹部会では、メンバーの三分の一ないし半分が両機関を兼務すべきであり、また参与会では、メンバーの半分ないし三分の二がそうすべきだなどと、述べているからである。

なぜそうなのか？ なんということなしに、ただそうなのである。「大ざっぱな見当で」そうきめただけである。なるほど、われわれの法令では、同様な比率がしばしばまさに「大ざっぱな見当で」きめられている。だが、なぜ法令ではこれはやむをえないことなのか？ 私は、法令ならなんでも擁護しようという人間ではなく、法令をその実体以上によく見せかけようとも思わない。法令では、全員の半分とか、三分の一とかいう慣習的な割合が大ざっぱな見当できめられることが、しょっちゅうである。法令がこういうふうのことを述べているときには、それは次のような意味である。試験的にそうしてみたまえ。あとで、われわれは諸君の「試験」の結果をしらべよう。あとで、われわれはどんな結果になったかを検討しよう。検討がすんだら、われわれはさらに前進しよう。われわれはいま一体化を実施しているが、だんだんにうまくやるようになるだろう。なぜなら、われわれは、ますます実際的に、実務的になってゆくからだ、と。

だが、私はどうやら「生産宣伝」の問題を論じはじめたようだ。どうしようもないのだ！ 労働組合の生産上の役割について話すとなれば、この問題にふれないわけにはいかない。

そこで、この生産宣伝の問題に移ることにしよう。これもやはり実務的な問題である。そこで、われわれはこれを実務的な仕方で提起している。生産宣伝をおこなうための国家機関(三六)は存在している。それはすでにつくりだされている。それらの機関が悪いかよいか、私は知らない。それらの機関を点検する必要がある。だが、この問題について「テーゼ」を書く必要はまったくない。

労働組合の生産上の役割を全体的に述べるときには、民主主義の問題では、普通の民主主義以外にはなにも必要ではない。「生産民主主義」というような小ざかしいものはまちがっており、なんの役にも立たないであろう。これが第一の点である。第二は、生産宣伝である。すでに機関がつくりだされている。トロツキーのテーゼは、生産宣伝について論じている。それはむだごとである。なぜなら、この場合、「テーゼ」などはもう古くさいからである。この機関がよいか悪いか、いまのところわれわれは知っていない。実際に点検してみて、それから言うことにしよう。研究し、アンケートを出そうではないか。大会で一〇人ずつの分科会を一〇個つくると仮定しよう。「君は生産宣伝に従事したか？ どんなふうにやったか、そして結果はどうだったか？」われわれはそれを研究してから、とくにすばらしい成績をあげた者には褒美をあたえるし、失敗した試みはとりやめることにしよう。われわれにはすでに実地の

経験がある。それは不十分で、ささやかなものだが、とにかく経験がある。ところが、この経験から「原則的なテーゼ」へと、われわれを引きもどそうとする人間がいるのだ。これは、「組合主義」どころか、むしろ「反動的な」運動である。

それから、第三は、報奨である。現物の報奨をあたえること、ここにこそ、労働組合の生産上の役割があり、任務がある。これはすでに始められている。この仕事は進捗している。このために五〇万プードの穀物が提供されている。そして、一七万プードはすでに交付ずみである。交付がうまくなされているか、適正になされているかどうか、私は知らない。人民委員会議では、分配がうまくなされておらず、報奨物資をあたえるかわりに賃金の割増しがおこなわれていると、指摘された。労働組合活動家も、労働人民委員部の活動家も、そう指摘している。われわれは、問題を調査する委員会を任命したが、まだ調査はなされていない。一七万プードのパンが交付されたが、それは、経営活動家としての英雄主義、勤勉、才能、献身を、つまりトロツキーがほめたたえている資質を発揮した人々に褒美をあたえるような仕方で、交付されなければならない。だが、いま肝心なことは、テーゼのなかでほめたたえることではなく、パンや肉をあたえることである。たとえば、ある部類の労働者から肉を取りあげて、それを報奨として他の「重点的な」労働者にあたえるほうがよくはあるまいか？　こういう重点主義をわれわれは拒否しない。こういう重点主義は必要である。われわれが重点主義を適用した実地の経験を、綿密に研究しようではないか。

つぎに、第四は、規律裁判所[四]である。われわれが規律裁判所をもっていなければ、労働組合の生産上の役割も、「生産民主主義」も、――こう言っても、同志ブハーリンは気を悪くしないように――まったくのナンセンスである。ところが、諸君のテーゼにはこれがはいっていない。こういうわけで、トロツキーのテーゼと、ブハーリンの立場についていえば、原則的にも、理論的にも、実践的にも、結論はただ一つである。つまり、こんなものはごめんこうむりたい！ということである。

そして、諸君の問題の提起の仕方はマルクス主義的でないと、ひとりごとを言うとき、私はいよいよ右のように結論せざるをえないのである。このテーゼには理論的な誤りがたくさんあるというにとどまらない。「労働組合の役割と任務」の評価の取りあげ方がなぜマルクス主義的でないかといえば、これほど広範なテーゼに取り組むのに、現在の情勢の特殊性をその政治的側面から深く考えることなしに取り組んではならないからである。私と同志ブハーリン

が、労働組合にかんするロシア共産党第九回大会の決議のなかで、政治は経済の最も集中的な表現である、と書いた[四八]のには、それだけの理由があった。

現在の政治情勢を分析するならば、われわれは目下過渡期中の過渡期に際会していると言えよう。プロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)全体が一つの過渡期であるが、いまは、新しい過渡期がいわば山のようにかさなりあっている。軍隊の復員、終戦、以前のものよりもずっと長期の平和的な息つぎが可能になったこと、軍事戦線から労働戦線へのいっそう永続的な移行が可能になったこと。このことだけからでも、このためだけでも、プロレタリアートの階級と農民階級との関係が変化しつつある。どう変化しつつあるか？　この問題は注意ぶかく調べなければならない。だが、諸君のテーゼからはそれはでてこない。まだ調べが終わらないうちは、われわれは待つことができなければならない。人民は疲れきっている。いくつかの重点生産のために使うはずであった多くの食糧予備は、すでに使いはたされてしまった。プロレタリアートと農民との関係は変化しつつある。戦争による疲弊ははなはだしい。需要はふえたが、生産はふえていないか、あるいは十分にふえていない。他方では、すでに第八回ソヴェト大会での報告のなかで、私は、われわれが強制を正しく、効果的に適用したのは、はじめに説得によってその基盤をつくることができた場合であったという事情を指摘しておいた[四九]。トロツキーとブハーリンは、この最も重要な考えを絶対的に考慮にいれなかった、と言わなければならない。

われわれは、すべての新しい生産課題にたいして、説得によって十分に広範で堅固な基盤をつくっただろうか？　いや、われわれは、それをようやく始めたばかりである。われわれはまだ大衆を引きいれていない。だが、大衆は、これらの新しい課題に一挙に移ってゆくことができるだろうか？　できはしない。なぜなら、たとえば、地主のヴランゲリを打倒すべきかどうか、そのための犠牲を惜しむべきかどうかというような問題ならば、もはや特別の宣伝を必要としないが、労働組合の生産上の役割の問題ということになると、もしそれが「原則」問題や、「ソヴェト組合主義」についての議論や、そういったふうのくだらないものをさしているのでなく、この問題の実務的な側面をさしているのであれば、われわれはようやく問題を究明しはじめたばかりであり、生産宣伝機関をようやくつくったばかりだからである。われわれはまだ経験をもっていない。われわれは現物報奨を実施したが、まだその経験をもっていない。われわれは規律裁判所をつくったが、まだその結果を知っていない。だが、政治的見地からみれば、ほかなら

ぬ大衆を訓練することが、最も重要である。われわれはこの問題をこの側面から準備し、研究し、熟考し、吟味しただろうか？　けっしてそうではない。この点に、根本的な、最も深い、危険な政治的誤りがある。なぜなら、ここでは、ほかのどんな問題にもまして、「七度測って一度裁て」という準則にしたがって行動しなければならないのに、一度も寸法を測らずに裁断にとりかかっているからである。「党は二つの傾向のどちらかを選ばなければならない」と言うが、まだ一度も測らなかったばかりか、「生産民主主義」という誤ったスローガンまでひねりだしているのである。

とくに、官僚主義が大衆の目にはっきり見えるかたちで現われており、そしてわれわれが官僚主義の問題を日程にのぼせた、そういう政治情勢のもとで、このスローガンがどういう意義をもつかを、理解しなければならない。同志トロツキーは、テーゼのなかで、労働者民主主義の問題について大会がしなければならないことは、「全員一致でこれを記録にとどめることだけだ」と言っている。これはまちがっている。記録にとどめるだけでは不十分だ。記録にとどめるということは、十分に吟味され、測られたものを確認することを意味しているが、生産民主主義の問題は、まだけっして徹底的に吟味されておらず、試験されておらず、点検されていない。「生産民主主義」というスローガンを出したなら、大衆がそれをいったいどう解釈するか、考えてみたまえ。

「われわれ一般の人間、大衆は、革新が必要だ、是正が必要だ、官僚主義者を放逐することが必要だ、と言う。ところが、君たちは、生産に従事せよだの、生産の成果について民主主義を発揮せよだのと、口先でごまかしている。だが、私は、こんな官僚主義的な構成のものでない、これとは違った構成の、企業管理部や中央管理機関などのもとで生産に従事したいのだ」と。諸君は、大衆に発言させ、学びとらせ、考えぬかせるようにしむけなかった。諸君は、党に新しい経験を獲得させなかった。しかも諸君は、はやくもあせって、ゆきすぎをやり、理論上誤った定式をつくっているのだ。そして、熱心すぎる執行者たちが、この誤りをさらにどれほど強めるだろうか？　政治的指導者は、自分の指導の仕方について責任を負うだけではなく、また彼に指導される人々の行為についても、責任を負う。政治的指導者がこの行為を知らないこともときにはあるし、またそれを望まない場合も少なくないが、それでもその責任は彼にかかるのである。

つぎに、中央委員会の一一月（一一月九日）総会と一二月（一二月七日）総会との問題に移ろう。この二つの総会では、これらすべての誤りは、もはや論理的分析や、前提

や、理論的考察にではなくて、行動に現われた。その結果、中央委員会ではごたごたが起こり、手のつけられない騒ぎになった。こういうことは、革命期のわが党の歴史上はじめてのことである。これは危険なことである。主要点は、中央委員会が二つに割れたこと、ブハーリン、プレオブラジェンスキー、セレブリャコーフの「緩衝」グループが生まれたことであったが、このグループは、だれよりも多くの害をもたらし、問題をもつれさせた。

グラヴポリトプーチ[30]とツェクトラン[31]にからまるいきさつを思いおこしてみたまえ。一九二〇年四月のロシア共産党第九回大会の決議には、「臨時の」機関としてグラヴポリトプーチをつくるが、「できるだけ短期間に」正常な状態に移らなければならない、と述べてある。九月〔の決議〕には「正常な状態に移れ」と書かれている。* 一一月（一一月九日）には総会がひらかれ、トロツキーが彼のテーゼ、組合主義についての彼の考察を提出している。生産宣伝についての彼の個々の文句がどんなにりっぱであっても、われわれはこう言わなければならなかった。それはすべてまったくの見当ちがいであり、的はずれであり、一歩後退であり、いま中央委員会はそんなものにかまっているわけにはいかない、と。ブハーリンは、「あれはたいへんよい」と言う。あるいはたいへんよいかもしれないが、問題に答えたものではない。激しい討論のあとで、「組合内部でプロレタリア民主主義の方法を強化し発展させること」を、ツェクトランは「すでに」みずから「日程にのぼせている」と、懇切な、同志的な形式で述べた決議が、一〇対四で採択された。そこには、ツェクトランは「他の労働組合連合と同一の権利をもって全ロシア労働組合中央評議会に加盟し、同評議会の一般的活動に活発に参加」しなければならない、と述べられている。[32]

*『ロシア共産党中央委員会通報』第二六号、第二ページ、中央委員会九月総会決議、第三項をみよ。

「さらに、中央委員会は次のように考える。運輸諸組合の状態が困難であったため、その活動を援助し整備するための臨時の手段として、グラヴポリトプーチとポリトヴォード[33]が設置されたが、現在では状態はいちじるしく改善されている。そこで、いまやこれらの諸組織を組合の機関――組合機構に適応し、それに解消してゆく機関――として組合に吸収するための活動を開始することができるし、また開始しなければならない。」

中央委員会のこの決議の基本的な思想は、どういうものか？ それははっきりしている。「ツェクトランの同志諸君！ 大会と中央委員会の諸決定を形式的に遂行するだけでなく、実質的にも遂行して、諸君の活動によってすべての組合を援助せよ。そして、官僚主義や、優先待遇や、お

れたちのほうが君たちよりもすぐれており、君たちよりも富んでおり、より多くの援助を受けているといったうぬぼれを、跡かたもなく取りのぞけ」と。

このあとで、われわれは実務的な仕事に移った。委員会(三)がつくられ、その構成が発表された。トロッキーは委員会から脱退し、それをぶちこわし、仕事をしようとしない。なぜか？　理由としてあげられているのは、たった一つである。ルトヴィーノフがしばしば反対派遊びにふけるから、というのだ。たしかに、オシンスキーも同じようなことをやる。率直に言って、これは不愉快な遊びである。だが、これがはたして理由となるだろうか？　オシンスキーは作付カンパニアをりっぱに遂行した。彼の「反対カンパニア」にもかかわらず、われわれは彼と協力して活動しなければならなかった。だが、委員会をぶちこわすというようなやり方は、官僚主義的であり、非ソヴェト的であり、非社会主義的であり、誤っており、政治的に有害である。「反対派」のうちの健全な分子と不健全な分子を区別しなければならないときに、こういうやり方をすることは、たいへんまちがっており、政治的に有害である。オシンスキーが「反対カンパニア」をやるときには、私は「これは有害なカンパニアだ」と彼に言う。だが、彼が作付カンパニアをやるときには、われわれはそれに惚れこむ。私は、ルトヴィーノフが「反対カンパニア」をやるという誤りをおかしたことを、けっして否定するものではないし、イシチェンコやシリャプニコフについても同様だが、このことを理由にして委員会をぶちこわしてはならない。

ところで、この委員会はなにを意味していたか？　それは、空疎な意見の相違についてのインテリゲンツィア的なむだ話から、実務的な仕事に移ることを意味していた。生産宣伝、報奨、規律裁判所――まさにこれらこそ論ずべき問題であったし、委員会がその活動の対象とすべきものであった。ところが、「緩衝グループ」の首領である同志ブハーリン、プレオブラジェンスキー、セレブリャコーフは、中央委員会が二つに割れた危険な状態を見て、緩衝器をつくることにとりかかった。その緩衝器たるや、それを言いあらわす議会ふうの表現を見いだすのに苦しむようなしろものである。もし私に、同志ブハーリンのようにうまく漫画を描く腕まえがあったら、私は、灯油バケツを持ち、その灯油を火のなかにそそいでいる人間の姿に同志ブハーリンを描き、その下に「緩衝灯油」という題を書きつけただろう。同志ブハーリンは、なにかをなしとげたいと望んだ。彼の願望がまったく誠実なものであり、また「緩衝的な」ものであったことは、疑う余地がない。だが、そこからできたものは緩衝器ではなくて、彼が政治情勢を考慮にい

れず、おまけに理論上の誤りをおかしたということであった。

すべてこういう論争を広範な討論にかける必要があっただろうか？　そういうつまらぬ仕事にたずさわる必要があったろうか？　党大会をまえにしてわれわれの必要とする何週間かを、こんなことに費やす必要があったろうか？　この期間に、われわれは、報奨や、規律裁判所や、一体化の問題を究明し、研究することができただろう。まさにこれらの問題を、中央委員会付属の委員会で実務的に解決できただろう。もし同志ブハーリンの望みが、緩衝器をつくることにあって、世間で言う「とまどいした」人間の立場におちいることにないなら、彼は、同志トロツキーは委員会にとどまるべきだ、と言い、主張すべきであった。もし彼がそう言い、そうしていたなら、われわれは実務的な道にすすんでいただろう。そうすれば、われわれはその委員会で、単独責任制とは実際にどんなものか、民主主義とはどんなものか、上から任命された役員とはどんなものかなどということを、検討したことだろう。

さきへすすもう。一二月（一二月七日の総会）には、すでに水運従業員との決裂が起こっていて、それが紛争を激しくした。その結果、中央委員会では、われわれの七票にたいして、反対派はすでに八票を集めた。同志ブハーリンは、「調停」をおこない、「緩衝器」をはたらかせようとつとめて、大急ぎで一二月総会の決議の「理論的」な部分を執筆したが、もちろん、委員会がぶちこわされたあとでは、そんなことをしてもなんにもならなかった。

グラヴポリトプーチとツェクトランの誤りはどこにあったか？　この二つの機関が強制を行使したということにあるのでは、けっしてない。反対に、これはこれらの機関の功績であった。二つの機関の誤りは、それらが、ロシア共産党第九回大会の要請にしたがって、適時に、紛争をおこさずに、正常な組合活動に移ってゆくことができず、しかるべきやり方で労働組合に適応することができず、労働組合と平等の立場に立ってこれを援助することができなかったという点にある。貴重な軍事的経験はある。英雄主義、勤勉、等々がそれである。軍人のうちの最悪の分子の経験には、悪いものがある。官僚主義、うぬぼれがそれである。トロツキーのテーゼは、そうと意識せずに、心ならずも、軍事的経験の最良のものを支持せずに、その最悪のものを支持するものであった。政治的指導者は、自分の政策について責任を負うだけでなく、彼に指導される人々の行為についても責任を負うということを、忘れてはならない。

私が諸君にお話ししたい最後のこと、私がきのうそのことで自分で自分をばか者だとののしらなければならなかっ

たことは、同志ルズタークのテーゼを見おとしたことである。ルズタークは、声高に、感銘ぶかく、雄弁に話すことができないという欠点をもっている。そこで、つい気づかずに、見おとしてしまうのである。きのう私は、会議に出席することができなかったので、手もちの資料に目をとおして、そのなかに、一九二〇年一一月二日から六日までひらかれた第五回労働組合全ロシア会議[35]のために出版された刷り物のリーフレットを見つけた。このリーフレットの表題は、『労働組合の生産上の任務』となっている。このリーフレットの全文を諸君に読みあげることにしよう。これは長いものではない。

第五回労働組合全ロシア会議のために
労働組合の生産上の任務
(同志ルズタークの報告テーゼ)

(一)　十月革命の直後には、労働組合は、労働者統制を実施するとともに、生産を組織し管理する仕事を引き受けることができ、また引き受けなければならなかったほとんど唯一の機関であった。ソヴェト権力が成立した初期には、国民経済管理の国家機構はまだ整備されていなかったが、企業主や高級技術者のサボタージュは、労働者階級の前に、工業を維持し、国の全経済機構の正常な機能を回復するという任務をするどく提起した。

(二)　最高国民経済会議の活動の次の時期に、私的企業を一掃し、私的企業の国家管理を組織することが最高国民経済会議の活動のかなりの部分を占めたところには、労働組合は、経済管理の国家機関と並行して、またそれと共同して、この活動を遂行した。

国家機関が弱かったことは、このような並行制を説明するものであっただけでなく、それを正当とするものでもあった。歴史的には、この並行制は、労働組合と経済管理機関とのあいだに完全な接触がつくりだされていたという事実によって、正当とされていた。

(三)　国家経済機関が管理にあたったこと、これらの機関がしだいに生産および管理の機構を掌握したこと、この機構の各部分の活動がたがいに調整されたこと——これらすべての結果、工業管理の仕事と生産計画作成との重点は、これらの国家経済機関に移った。それにともない、中央管理機関や工場管理部の参事会の形成に参加することが、生産を組織する分野での労働組合の活動となった。

(四)　現在、われわれは、ソヴェト共和国の経済機関と労働組合とのあいだに最も緊密な結びつきを打ち立て

る問題にふたたび当面している。というのは、すべての労働単位を適切な仕方で利用し、生産者の全大衆を生産過程に意識的に参加させることが、ぜひとも必要になっているからであり、また経済管理の国家機構がしだいに大きくなり、複雑になって、生産そのものにくらべて不釣合いなほど膨大な官僚機構になったため、労働組合は、経済機関に代表者を出すことによってだけでなく、組織全体として直接に生産の組織化に参加することをせまられているからである。

(五) 最高国民経済会議は、現存の物質的生産要素(原料、燃料、機械の状態、等々)から出発して、一般的生産計画の策定に取り組むが、労働組合は、生産課題のために労働を組織し、労働を適切な仕方で利用するという見地から、この問題に取り組まなければならない。だから、生産および労働の物質的資源の利用を最も適切な仕方で結合するために、一般的生産計画は、その各部分についても、全体としても、かならず労働組合の参加のもとに作成されなければならない。

(六) ほんとうの労働規律を実施し、労働放棄と効果的にたたかう等々のことは、生産参加者の全大衆がこれらの任務の実現に意識的に参加する場合にだけ可能なことである。これは、官僚主義的な方法や、上からの命令によって達成されるものではない。そのためには、生産参加者の一人ひとりが、自分の遂行する生産上の任務の必要性と合目的性を理解することが必要であり、生産参加者の一人ひとりが、上からあたえられた課題の遂行に参加するだけでなく、生産分野での技術上および組織上のあらゆる欠陥の是正に、意識的に参加することが必要である。

この分野での労働組合の任務はきわめて大きい。労働組合は、技術手段の誤った利用や不満足な行政活動のために起こる労働力利用上のあらゆる欠陥に注意し、それを考慮するように、それぞれの職場、それぞれの工場にいる自分の組合員に教えなければならない。事務渋滞、だらしなさ、官僚主義と断固としてたたかうために、個個の企業と生産部門の経験の総体が利用されなければならない。

(七) これらの生産上の任務の重要性を特別に強調するために、当面の特定の活動のなかで、これらの任務にたいして特定の位置を組織的にあたえなければならない。第三回全ロシア大会の決定にしたがって各労働組合のもとに組織されている経済部は、[三] その活動を発展させながら、しだいに、労働組合活動全体の性格を解明し、規定しなければならない。たとえば、全生産が勤労者自身の

必要をみたすことを目的としている今日の社会的条件のもとでは、賃金率と報奨給付は、生産計画の遂行の度合いときわめて密接に結びつけなければならず、それに依存させなければならない。現物による報奨給付と部分的な現物賃金とは、しだいに、労働生産性の高さにおうじた労働者への生活物資供給制度に変わってゆかなければならない。

（八）労働組合の活動のこのような組織は、一方では、並行的な機関（政治部、その他）の存在に終止符を打ち、他方では、大衆と経済管理機関との密接な結びつきを復活させるにちがいない。

（九）第三回大会以後、労働組合は、一方では戦時の条件のため、他方ではそれ自体組織的に弱く、また経済機関の指導活動や実践活動から切り離されていたため、国民経済の建設に参加する面での計画を大規模に実現することができなかった。

（一〇）このことに関連して、労働組合は、次のことを当面の実践的任務としなければならない。（a）生産および管理の諸問題の決定に最も積極的に参加すること。（b）関係経済諸機関と共同して、権能ある管理機関を組織する仕事に直接に参加すること。（c）管理のさまざまな型が生産におよぼす影響を綿密に検討すること。（d）経済計画および生産計画の作成と決定にかならず参加すること。（e）経済的任務の緊要度におうじて労働を組織すること。（f）生産扇動と宣伝を大がかりに組織すること。

（一一）各労働組合および組合諸組織のもとに付設される経済部は、労働組合が生産の組織化に計画的に参加するための、敏速に機能する強力な槓杆に、実際にならなければならない。

（一二）労働者に生活物資を計画的に供給する仕事では、労働組合は、あらゆる配給機関に実地に、実務的に参加し、それを監督し、中央および県の労働者生活物資供給委員会の活動に特別の注意をはらうことによって、食糧人民委員部の中央・地方の配給機関に組合の影響をおよぼさなければならない。

（一三）各中央管理機関、等々の偏狭な官庁縄張り主義のために、いわゆる「重点主義」はすでにひどく無秩序なものになっているので、労働組合は、どこでも、いたるところで、経済における重点主義をほんとうに実施するように主張し、各生産部門の重要性や国内に現存する物質的資源におうじて、緊要度決定の現行の方式を改訂しなければならない。

（一四）いわゆる模範企業群にとくに注意を集中して、

権能ある管理部の設置、労働規律の確立、組合組織の活動によって、これらの模範企業群をほんとうの模範企業にしなければならない。

（一五） 労働を組織する面では、労働組合は、賃金率関係の諸方策を一つの整然たる体系にまとめ、出来高ノルマを全面的に改訂するほか、労働放棄の個々の諸形態（ずる休み、遅刻、等々）とのたたかい全体を、しっかりと自分の手ににぎらなければならない。これまでしかるべき注意がはらわれていない規律裁判所は、プロレタリア的労働規律の違反にたいするほんとうの闘争手段に変えられなければならない。

（一六） 以上に列挙した諸任務の遂行は、生産宣伝の実際計画の作成や、労働者の経済状態を改善する多くの措置の立案とあわせて、経済部に委任しなければならない。このため、国家の経済機関の活動と関連した経済建設の実際的諸問題を討議するための特別の全ロシア経済部会議を、最近のうちに招集することを、全ロシア労働組合中央評議会の経済部に委任しなければならない。

私がなぜ自分をののしらなければならなかったかという理由は、いまでは諸君もおわかりであろうと思う。これこそ政綱というものである。この政綱は、同志トロツキーがなんども考えぬいたすえに書いたものよりも、また同志ブハーリンが全然考えずに書いたもの（一二月七日の総会の決議）よりも、百倍もりっぱである。労働組合運動で長年活動した経験をもたないわれわれ中央委員はみな、同志ルズタークから学ばなければならないし、同志トロツキーも、同志ブハーリンも、彼から学ぶべきであろう。労働組合はこの政綱を採択した。

われわれはみな規律裁判所のことを忘れていたが、現物報奨や規律裁判所をぬきにした「生産民主主義」は、まったくのむだ話である。

ルズタークのテーゼと、トロツキーが中央委員会に提出したテーゼとをくらべてみよう。第五テーゼの終りに、次のように書かれている。

「……労働組合の改組に、すなわち、なによりもまずまさにこの視角からの指導要員の選抜に、いますぐ着手しなければならない。……」

これこそ、真の官僚主義である！ トロツキーとクレスチンスキーが労働組合の「指導要員」を選抜するだろう、というのだ！

もう一度言う。これこそツェクトランの誤りを説明するものである。ツェクトランの誤りは、それが圧力を行使した点にあるのではない。そのことは、ツェクトランの功績

である。誤りは、ツェクトランがすべての労働組合の共通の任務に取り組むことができなかったこと、同志規律裁判所をいっそう正しく、迅速に、有効に活用することに、自分でも移ってゆくことができず、またすべての労働組合を助けてそれに移らせることもできなかった点にある。同志ルズタークのテーゼで規律裁判所について述べているところを読んだとき、私は、きっとこれについての法令がすでに出されているにちがいない、と思った。そして、実際に、法令が出されていた。一九一九年一一月一四日に公布された『労働者同志規律裁判所令』（法規集、第五三七号）がそれである。

これらの裁判所では、最も重要な役割は労働組合にかかっている。これらの裁判所がよいものかどうか、どの程度有効に活動しているか、つねに活動しているかどうか、私は知らない。もしわれわれが自分自身の実地の経験を研究するならば、それは、同志トロツキーや同志ブハーリンが書いたどの文章よりも、百万倍も有益であろう。

これでおしまいにしよう。この問題について現在われわれが知っていること全部を総括してみて、私は、これらの意見の相違を広範な党内討論や党大会にかけたのは、ひどい誤りであった、と言わなければならない。政治的にみて、これは誤りである。委員会で、ただ委員会においてだけ、われわれは実務的な討議をおこなうことができたであろうし、前進することができたであろう。ところが、いまわれわれは後退しており、今後なお数週間も、実務的に任務に取り組むかわりに、抽象的な理論的命題へ後退することであろう。私についていえば、これにはまったくうんざりしている。病気にかかわりなく、こんなことから遠ざかることができれば、たいへんうれしいと思う。私は、どこでもいいから逃げだしたい気持である。

まとめよう。トロツキーとブハーリンのテーゼには、理論上の誤りがたくさんある。原則的に正しくない点がいくつもある。政治的には、問題の取りあげ方全体がまったく不手際だ。同志トロツキーの「テーゼ」は、政治的に有害なしろものである。彼の政策は、結局、労働組合を官僚主義的に引きまわす政策である。私は、わが党の大会がこの政策を非難し、しりぞけるものと、確信している。（さかんな、長い拍手）

一九二一年にペトログラードで単行の小冊子として発表
全集、第五版、第四二巻、二〇二―二二六ページ所収
邦訳全集、第三二巻、三―三〇ページ所収

ふたたび労働組合について、現在の情勢について、同志トロツキーと同志ブハーリンの誤りについて[五八]

大会のまえぶれとして、すなわちロシア共産党第一〇回大会への代議員の選挙をまえにして、またさしせまった選挙と関連して、党内討論と分派闘争が激しくなった。最初の分派的発言、すなわち「多数の責任ある活動家」を代表した同志トロツキーの「政綱小冊子」（『労働組合の役割と任務』、序文の日付は一九二〇年一二月二五日）の発表につづいて、ロシア共産党ペトログラード組織が辛辣な（このさきを読めば、それが辛辣だったのはむりもないことが、読者にわかるだろう）発言[五九]（『ペトログラーツカヤ・プラウダ』[六〇]一九二一年一月六日号に発表され、ついで党中央機関紙であるモスクワの『プラウダ』[六一]一九二一年一月一三日号に発表された『党へのアピール』）をおこなった。ついで、モスクワ委員会が（『プラウダ』同日号で）ペトログラード組織に反論した。それから、大規模な、きわめて責任ある党会議、すなわち第八回ソヴェト大会のロシア共産党グループ会議で一九二〇年一二月三〇日におこなわれた討論の速記録が、全ロシア労働組合中央評議会のロシア共産党グループ事務局によって出版された。この速記録の表題は、『生産における労働組合の役割について』となっている（序文の日付は一九二一年一月六日である）。もちろん、以上にあげたものはまだけっして討論資料のすべてではない。しかし、論争問題を討議する党会議は、すでにほとんどいたるところでひらかれている。一九二〇年一二月三〇日に私は、当時私が言ったように、「議事手続に違反する」条件で、つまり、討論に参加もできず、まえに発言した弁士の演説も、あとから発言した弁士の演説も聞くことができないという条件で、演説しなければならなかった[六二]。そこで、いまここで、違反した手続を埋め合わせて、もっと「手続にかなった仕方で」自分の意見を述べてみよう。

党にとっての分派的発言の危険性

同志トロツキーの小冊子『労働組合の役割と任務』は、

分派的な発言であろうか？　この種の発言には、その内容とは別に、なにか党にとって危険なものがあるだろうか？　この問題をとくに黙殺したがっているのは、（いうまでもなく、同志トロツキーは別格として）モスクワ委員会のメンバー——ピーテルの同志たちを分派的だと見ている当の人たち——と同志ブハーリンである。だが、その同志ブハーリンも、一九二〇年一二月三〇日に「緩衝分派」を代表して演説したさい、次のように声明することを余儀なくされたのである。

「……列車が転覆しそうな傾きがいくぶんあるときには、緩衝器もそんなに悪いものではない。」（一九二〇年一二月三〇日の討論速記録、四五ページ）

してみると、転覆しそうな傾きがいくぶんあるのだ。それだのに、自覚した党員でありながら、その傾きがまさにどこに、どういう点に、どのように起こっているのか、という問題に無関心でいるような者が考えられるだろうか？

トロツキーの小冊子は次のような声明で始まっている。「この小冊子は集団的労作の成果である」、その起草には「多数の責任ある活動家」、とくに労働組合の指導者（全ロシア労働組合中央評議会幹部会員、金属労働組合中央委員、ツェクトランのメンバー、その他）が参加している、これは「政綱小冊子」である、と。そして、第四テーゼの終りにはこう書いてある。「きたるべき党大会は、労働組合運動の分野に現われた二つの傾向のどちらかを選ばなければならないだろう」（傍点はトロツキー）と。

これが一中央委員による分派の結成でないというなら、これが「いくぶん転覆しそうな傾き」でないというなら、「分派的」とか、党の「転覆しそうな傾き」とかいうロシア語は、いったいほかにどんな意味をもっているのか？？同志ブハーリンなり、彼と同意見者のだれなりに、説明してもらおうではないか。自分で「緩衝器になる」ことを希望しながら、このような「転覆しそうな傾き」に目をつぶる人々のこの盲目ぶり以上にはなはだしい盲目ぶりを、想像できるだろうか？

考えてもみたまえ。二度の中央委員会総会（一一月九日と一二月七日）で、同志トロツキーのテーゼ原案と彼が擁護する党の労働組合政策全体を、前例のないほどくわしく、長時間、熱心に審議したあとで、中央委員の一人が、一九名の中央委員のうちでただひとり、中央委員会の外部に自分のグループを寄せ集めて、このグループの「集団的」「労作」を「政綱」として発表し、「二つの傾向のどちらかを選ぶ」よう、党大会に提案するのである!!　ブハーリンがすでに一一月九日に「緩衝派」として登場していたにもかかわらず、このように同志トロツキーが一九二〇年一二

月二五日に、ちょうど二つの傾向が、ただ二つの傾向だけがあると宣言したことは、最も悪質で有害な分派活動の助手としてのブハーリン・グループの真の役割をまざまざと暴露するものであるが、このことは問題にしないことにしよう。これは、ことのついでにふれたまでである。しかし、私は、党員のだれにでもこう質問しよう。こんなふうに、労働組合運動の分野に現われた二つの傾向のどちらかを「選べ」としゃにむにせまり、せっつくとは、そののぼせあがりぶりたるや驚くべきものではないだろうか？　プロレタリア執権（ディクタトゥーラ）が成立して三年になるのに、こんなふうに労働組合運動の分野に現われた二つの傾向の問題の決定を「せっつく」ことのできる党員がひとりでもいるとすれば、肩をすくめるよりほか仕方がないではないか？

それればかりではない、この小冊子にたっぷり仕込んである分派的攻撃を読んでみたまえ。まず第一のテーゼで、「ずっと以前に党が原則的に一掃した組合主義の立場に逆もどりしている「若干の労働組合運動の活動家」をおどかして「手をふりあげ」ているのが見られる（どうやら、一九名の中央委員のうち、ひとりだけが党を代表しているらしい）。第八のテーゼでは、「労働組合活動家の指導層の同職組合的保守主義」が大げさに非難されている（「指導層」に注意を集中しているこのまったくの官僚主義的な態度に留意されたい！）。第一一テーゼの書きだしには、「大多数の労働組合活動家」はロシア共産党第九回大会の決議を「形式的に、すなわち口さきで認めている」だけだという、驚くほど気のきいた、証明力のある、実務的な……できるだけ丁重に表現するにはどう言ったらいいか？……「示唆」がある。

ここにおいでになるのは、大多数の労働組合活動家（!!）が党の決定を口さきで認めているだけだという判定をくだす、権威ある裁判官の方々なのだ！

第一二テーゼにはこうある。

「……多くの労働組合活動家は、ますます激しく、非妥協的に、一体化の見とおしに反対している。……そういう労働組合活動家としては、同志トムスキーと同志ロゾフスキーがいる。それだけではない。新しい任務や方法を受けつけない多くの労働組合活動家は、自分たちのあいだに、同職団体的閉鎖性の気風、当該の経済分野に引きいれられてくる新しい活動家を敵視する気風をつちかっており、こうして、労働組合に組織された労働者のあいだに事実上同職組合精神の遺物を温存している。」

読者は、これらの議論を注意ぶかく読みかえし、よく考えられたい。そこにある「珠玉」の言の豊富さは驚くばかりである。第一に、この発言を、その分派精神の見地から

評価してみたまえ！　もしトムスキーが政綱を発表して、トロツキーと「多くの」軍事活動家のことを、官僚主義の気風をつちかっているとか、野蛮性の遺物を温存しているなどと言って非難したとすれば、トロツキーはどう言い、どうふるまうだろうか、想像してみたまえ。ここに辛辣さも分派精神も見ない――いや、まったく気がつかない、全然気がつかない――ブハーリン、プレオブラジェンスキー、セレブリャコーフその他の「役割」、これがピーテルの同志の発言にくらべて何倍も分派的であることを見ない彼らの「役割」は、いったいどんなものなのか？

第二に、多くの労働組合活動家は「自分たちのあいだに……気風をつちかっている」という、問題のこの取りあげ方をよく研究してみたまえ。……この取りあげ方は、骨の髄まで官僚主義的である。よろしいか、問題はもっぱら、トムスキーとロゾフスキーが「自分たちのあいだに」どんな「気風」をつちかっているかにあって、けっして、大衆の、何百万の人々の発展水準と生活条件にはないというわけだ。

第三に、同志トロツキーは、彼や「緩衝的な」ブハーリン一派が、あれほど用心ぶかく回避し、あいまいにしている論争全体の本質を、ここで、うっかり口にだしてしまった。

論争全体の本質と闘争の根源は、多くの労働組合活動家が新しい任務と方法を受けつけず、自分たちのあいだに新しい活動家を敵視する気風をつちかっていることにあるのか？

それとも、労働組合に組織された労働者大衆が、新しい活動家のうちで、官僚主義の無用で有害なゆきすぎを是正しようとしない者に正当にも抗議し、彼らをほうりだそうという決意を当然にも表明していることにあるのか？

論争の本質は、だれかが「新しい任務と方法」を理解しようとしないことにあるのか？

それとも、だれかが、官僚主義の若干の無用で有害なゆきすぎを擁護し、それを新しい任務と方法についてのおしゃべりでおおいかくそうと、つたない試みをしていることにあるのか？

読者は論争全体のこの本質を記憶にとどめていただきたい。

形式的民主主義と革命的合目的性

同志トロツキーは、「集団的労作の成果」であるそのテーゼのなかで、次のように書いている。「労働者民主主義は偶像を知らない。」「それは、革命的合目的性を知ってい

るだけである。」(第二三テーゼ)

同志トロツキーのこれらのテーゼは運が悪かった。そのなかの正しい命題は、新しくないばかりか、トロツキーにとって不利なものである。また、そのなかの新しい命題は、まったくの誤りである。

私は、同志トロツキーの正しい命題を右に抜書きしておいた。それらの命題は、第二三テーゼでふれられている問題（グラヴポリトプーチの問題）においてだけでなく、その他の問題においても、彼に不利なものである。

形式的な民主主義からいえば、トロツキーは、中央委員会全体に反対してであろうと、分派的な政綱をだす権利があった。これは、争う余地のないことである。この形式的な権利を、中央委員会が一九二〇年一二月二四日付の討論の自由についての決議で確認したことも、争いえない事実である。緩衝派のブハーリンは、この形式的な権利を、トロツキーには認めるが、ピーテルの組織には認めない。なぜ認めないかといえば、それはたぶん、ブハーリンが一九二〇年一二月三〇日に「労働者民主主義という神聖なスローガン」（速記録、四五ページ）ということまで口にだしたからなのだろう。……

では、革命的合目的性のほうはどうか？

「ツェクトラン」分派や「緩衝」分派の分派的なうぬぼれで目がくらんでいない、健全な判断力としっかりした記憶力をもっている正気の人間で、トロツキーほどの権威ある指導者が労働組合問題についておこなったこのような発言を革命的に合目的的なものだと認めるような者が、ひとりでもいるだろうか？

トロツキーは、実際には「新しい任務と方法」をまったくまちがった仕方で示したのであるが（それについては後述）、かりに彼がその反対にそれをきわめて正しく示したとしてさえ、問題をこんなふうに取りあげたというだけでも、トロツキーが自分自身にも、党にも、労働組合運動にも、何百万人の労働組合員の教育にも、共和国にも、害をもたらしたということを、否定できるだろうか？？

善良なブハーリンとそのグループが「緩衝派」と自称しているのは、たぶん、この名称がどんな義務を負わせるかについてはなにも考えまいと、固く決心したからなのだろう。

労働組合運動における分裂の政治的危険性

大きな意見の相違が、往々にして、きわめて小さな――はじめのうちはとるにたりないとさえ思われるような――

不一致から生じてくることは、だれでも知っている。だれもが一生のうちに何十回となく受けるような、ほんのかすり傷や爪あとでさえ、もしその傷が化膿しはじめるなら、もし破傷風になるなら、きわめて危険な、ないしはもんくなしに命とりの病気に変わることもあるのは、だれでも知っている。これと同じことが、あらゆる争いに、まったく個人的な争いにさえ、しばしば起こる。政治でも、同じことがしばしば起こる。

どんな意見の不一致も、とるにたりない小さなものでも、もしそれが分裂に発展する可能性があるなら、しかも、政治の建物全体をゆすぶり倒壊させせかねないような、——同志ブハーリンの比喩をかりれば——列車を転覆させかねないような、まさにそういう種類の分裂に発展する可能性があるなら、政治的に危険なものになりかねない。

プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)のもとにある国では、特にその国でプロレタリアートが人口のわずかな少数しか占めていない場合には、プロレタリアート内部の分裂、あるいはプロレタリア党とプロレタリア大衆との分裂は、もはや危険だというだけでなく、きわめて危険であることは、明らかである。そして、労働組合運動(これは、私が一九二〇年一二月三〇日の演説で力をこめて強調するようつとめたことであるが、ほとんどひとりのこらず全員が労働組合に組織されたプロレタリアートの運動である)[三]の分裂は、まさにプロレタリアートの大衆の分裂である。

だからこそ、一九二〇年一一月二―六日の第五回労働組合全ロシア会議で「もめごとが始まった」(もめごとが始まったのは、まさにこの会議においてであった)とき、この会議のすぐあとで……いや、私はまちがえた、この会議のさいちゅうに、いつになく興奮した同志トムスキーが政治局にやってきて、この会議で同志トロツキーが労働組合を「ゆすぶる」話をしたこと、彼トムスキーがそれに論駁をくわえたことを話しはじめ、きわめて冷静な同志ルズタークがそれを完全に裏書きしたとき、——こうしたことが起こったとき、私は、すぐさま内心で、論争の本質はまさに政策(すなわち、労働組合にたいする党の政策)にあり、この論争では、同志トムスキーに反対して「ゆすぶり」政策をもちだした同志トロツキーのほうが根本的にまちがっているのだと、きっぱり判断した。なぜなら、「ゆすぶり」政策は、たとえそれが「新しい任務と方法」(トロツキーの第一二テーゼ)によって部分的に正当化されるとしてさえ、現在の時機、現在の情勢のもとでは、分裂の危険をはらんでいるので、まったく許すことができない政策だからである。

いまでは、同志トロツキーには、彼が「上からのゆすぶ

り」政策を主張したように言うのは「まったくの戯画化」(『プラウダ』一九二一年一月一五日付、第九号所載、エリ・トロツキー『ペトログラードの同志たちにたいする回答』)だと思えるのである。だが、「ゆすぶり」ということばが真の「翼あることば〔名文句〕」であるのは、第五回労働組合全ロシア会議で同志トロツキーがそれをしゃべってから、このことばがすでに党内でも労働組合内でもいわば「飛びまわった」という意味でだけそうなのではない。いな、残念ながら、それは、はるかに深い意味でいまなお適切なのである。すなわち、まさにこの一語が、最も簡潔なかたちで、政綱小冊子『労働組合の役割と任務』の全精神、全傾向を言いあらわしているのである。同志トロツキーのこの政綱小冊子全体は、はじめから終りまで、徹頭徹尾、ほかならぬ「上からのゆすぶり」政策の精神でつらぬかれている。同志トムスキーや「多くの労働組合活動家」をつかまえて、「自分たちのあいだに新しい活動家を敵視する気風をつちかっている」と言って非難している点を思いおこせば、十分である!

しかし、第五回労働組合全ロシア会議(一九二〇年一一月二―六日)では、まだ分裂の危険をはらむ雰囲気がようやくかもしだされかけただけであったが、一九二〇年一二月はじめには、ツェクトランの分裂が事実となった。

この出来事は、われわれの論争の政治的本質を評価するうえで、基本的な、主要な、根本的なものである。そして、同志トロツキーと同志ブハーリンが、この場合黙っていればなんとかなるだろうと考えても、むだである。この場合、沈黙は「緩衝器になる」どころか、かえってこれを燃えあがらせる。なぜなら、この問題は、実生活によって日程にのぼされただけでなく、また同志トロツキーによってその政綱小冊子のなかで強調されてもいるからである。なぜなら、ほかならぬこの小冊子が、私が引用したいろいろな箇所で、とくに第一二テーゼで、なんども次のように問題をだしているからである。すなわち、「多くの労働組合活動家が自分たちのあいだに新しい活動家を敵視する気風をつちかっている」点に問題の本質があるのか、それとも、たとえばツェクトランに現われているような官僚主義の若干の無用で有害なゆきすぎからみて、大衆の「敵視」が正当だという点に問題の本質があるのか、と。

同志ジノヴィエフは、一九二〇年一二月三〇日のその最初の演説で、この問題を単刀直入に提起して、分裂に立ちいたらせたのは「同志トロツキーの節度のない支持者たち」だと言ったが、これは十分根拠のあることである。同志ブハーリンが同志ジノヴィエフの演説を、「中味のないおしゃべり」だと言って非難したのは、たぶん、このため

でもあろうか？　しかし、いまでは、一九二〇年一二月三〇日の討論の速記録を読んだ党員ならだれでも、この非難があたらないことを納得するだろうし、また正確な事実をあげ、正確な事実に立脚しているのはほかならぬ同志ジノヴィエフであって、どんな事実もあげずにただインテリ的な「おしゃべり」が幅をきかせているのは、ほかならぬトロツキーとブハーリンの演説であることがわかるであろう。

同志ジノヴィエフが、「ツェクトランは粘土の足で立っている、それはすでに三つの部分に分裂した」と言ったとき、同志ソスノフスキーは、次のような野次で彼の演説の腰を折った。

「だが、それをけしかけたのは、君だ」と（速記録、一五ページ）。

この非難は重大である。もしそれが証明されるなら、たとえ一つの労働組合の分裂であろうと、その分裂をけしかけた犯人は、もちろん、ロシア共産党中央委員会にも、党そのものにも、わが共和国の労働組合にも、席を占められないはずである。しあわせなことに、この重大な非難を軽軽しくもちだした同志は、論戦のさいの軽はずみな「熱中」の手本を、残念ながらすでになんども示した人物である。同志ソスノフスキーは、たとえば生産宣伝の分野での自分のりっぱな論文にさえ、しばしば「一匙の苦汁」をつぎこんで、生産宣伝そのもののプラスをすっかり帳消しにしてまだおつりがくるようなことをやってのけるのだった。激烈きわまる闘争のさいにさえ、自分の攻撃に毒をふくませることがだれよりもへたな、しあわせな生まれつきの人間もいれば（たとえばブハーリンのように）、自分の攻撃に毒をふくませることがあまりにも頻繁な、それほどしあわせでない生まれつきの人間もいる。同志ソスノフスキーはこの点で自戒し、また彼の友だちにも、彼の言動をいましめてくれるように頼んでおくことが、有益であろう。

だが、――こう言う人もあろう――たとえ軽々しい、まずい、明らかに「分派的な」やり方でなされたにせよ、とにかく非難が出されたのだ。もし問題が重大なものなら、真実を語らずにおくよりも、たとえまずいやり方であろうと、真実を語ったほうがよい、と。

問題は、疑いもなく、重大である。なぜなら、繰りかえして言うが、全論争の核心は、世人の考えている以上に、まさにこの点にあるからである。さいわいにわれわれは、同志ソスノフスキーが提起した問題にたいして本質にふれた回答をあたえるだけの、十分に説得的で、十分に客観的な材料をもっている。

第一に、速記録の同じページに、同志ジノヴィエフの声明がでている。彼は、同志ソスノフスキーに「それは違

う！」と答えただけでなく、決定的な事実を正確にあげた。同志ジノヴィエフはこう指摘した。すなわち、同志トロツキーが（私からつけくわえて言えば、明らかに分派的な熱中のあまり）もちだそうと試みた非難は、同志ソスノフスキーがもちだした非難とはけっして同じものではなく、同志トロツキーは、彼ジノヴィエフが九月のロシア共産党全国協議会での彼の演説によって分裂を促進した、あるいは分裂を引きおこした、と言って同志ジノヴィエフを非難したのであった、と（ついでに指摘しておくが、九月のジノヴィエフ演説は、中央委員会によっても、党によっても実質上承認され、だれもそれに正式に抗議したことは一度もないのだから、すでにこの理由だけでも、この非難はなりたたないのである）。

そして、同志ジノヴィエフは次のように答えた。「この問題」（ツェクトラン内の官僚主義の若干の無用で有害なゆきすぎの問題）「が、私の」（すなわち、ジノヴィエフの）「どの演説よりもずっとまえに、また全国協議会よりもずっとまえに、シベリアでも、ヴォルガでも、北部でも、南部でも、論議されていた」ことは、同志ルズタークが中央委員会の会議で各種の議事録を手にもって証明したところである、と。

これは、まったく明瞭で、正確な、事実にもとづいた声明である。同志ジノヴィエフは、ロシア共産党の数千名の責任ある党員の前でおこなった彼の最初の演説のなかで、この声明をおこなったのであった。しかも、ジノヴィエフのこの演説のあとで二度発言した同志トロツキーも、同じくジノヴィエフのこの演説のあとで発言した同志ブハーリンも、ジノヴィエフの事実にもとづいた指摘を反駁しなかったのである。

第二に、同志ソスノフスキーの非難をいっそう正確かつ公式に反駁しているものは、水運従業員中の共産党員とツェクトランの会議の共産党グループとのあいだの紛争問題について、一九二〇年一二月七日に採択されたロシア共産党中央委員会総会の決議であって、これも同じ速記録にのっている。この決議のツェクトランに関係した部分は、次のように述べている。

「ツェクトランと水運従業員との紛争に関連して、中央委員会は次のように決定した。（一）合同したツェクトランのなかに水運従業員部をつくること。（二）二月に鉄道従業員および水運従業員の大会を招集し、そこで新しいツェクトランの正規な選挙をおこなうこと。（三）それまでは、旧来の構成のツェクトランにひきつづきその職務をゆだねること。（四）グラヴポリトヴォードとグラヴポリトプーチをただちに廃止し、両者の人員と資

産の全部を正常な民主主義の原則にもとづく労働組合組織に移すこと。」

これを見れば、読者は、ここでは水運従業員にたいする非難などは問題になっていないばかりか、反対に、すべての本質的な点で彼らの正しさが認められていることが、おわかりであろう。ところで、一九二一年一月一四日の共同政綱(四)(『労働組合の役割と任務について』)、中央委員と労働組合問題委員会のメンバーとからなる一グループから、中央委員会に提出されたロシア共産党第一〇回大会のための決定草案。中央委員としてではなく、労働組合問題委員会の一員としてこの政綱に署名したのは、ロゾフスキーである。そのほかの署名者は、トムスキー、カリーニン、ルズターク、ジノヴィエフ、スターリン、レーニン、カーメネフ、ペトロフスキー、アルチョーム＝セルゲーエフである)に署名した中央委員で、この決議に賛成投票した者は、(カーメネフを除けば)一人もいなかったのである。

この決議は、前記の中央委員たちの反対、すなわちわれわれのグループの反対を押しきって、可決されたのであった。われわれが反対したのは、一時的にもせよ旧ツェクトランを残しておくことに反対投票したかったからである。そして、われわれのグループの勝利が避けられないのを見て、トロツキーは、やむをえず、ブハーリンの決議案に賛成投票せざるをえなかった。そうしなければ、われわれの決議案が可決されてしまうからである。一一月にはトロツキーを支持していた同志ルィコフは、一二月には、水運従業員とツェクトランとの紛争を審理するための労働組合問題委員会の活動に参加して、水運従業員の言い分が正しいことを納得した。

要約しよう。中央委員会の一二月総会(一二月七日)における多数派は、同志トロツキー、ブハーリン、プレオブラジェンスキー、セレブリャコーフその他から、すなわち、ツェクトランにたいして不利な偏見をいだいているなどという疑いをだれからもかけられる気づかいのないような中央委員たちからなっていた。しかも、この多数派が、彼らのとおした決議の本質からすれば、水運従業員ではなくツェクトランを非難したのであって、ただツェクトランをただちに更迭することを拒否しただけである。だから、ソスノフスキーの非難がなりたたないことは、証明ずみなのである。

はっきりしないところが残らないように、さらにもう一つの点にふれなければならない。私が幾度も述べた「官僚主義の若干の無用で有害なゆきすぎ」とは、いったいどんなことだったのか？　この非難は、事実無根または誇張ではなかったのか、またないのか？

これへの回答も、やはり同志ジノヴィエフが、一九二〇年一二月三〇日の彼の最初の演説のなかであたえている。しかも、その回答は、申し分のないほど正確なものであった。同志ジノヴィエフは、水運についての同志ゾフの印刷された命令（一九二〇年五月三日付）のうちから、「委員会ざたは今後なくなる」と声明している箇所(六三)を抜粋して引用した。同志ジノヴィエフは、正当にも、これは根本的な誤りである、と言った。これこそ、官僚主義と「任命方式」の無用で有害なゆきすぎの典型である。そのさい、同志ジノヴィエフはすぐつけくわえて、任命された役員のうちには、同志ゾフよりも「はるかに試練を経ていない、経験の乏しい同志たち」がいる、とことわった。私は中央委員会で、ゾフはきわめて貴重な活動家であるという評価を聞いている。そして、私が国防会議で観察したところは、この評価をまったく裏書きするものである。だれも、このような同志たちの権威を傷つけたり、彼らを「贖罪の山羊」に仕立てようなどと思っている者はいない（同志トロツキーは、その報告の二五ページで、なんの根拠らしいものもたずに、そういう疑いをかけているが）。「任命された役員」の権威を傷つけるのは、彼らの誤りをただす人々ではなくて、彼らが誤りをおかしているときにさえ、彼らを擁護しようと思いたつような連中である。

こういうわけで、労働組合運動の分裂の危険が、頭のなかで考えだしたものではなくて、現実の危険であったことがわかる。また、意見の相違の誇張なしの本質がまさになんにあったかも、はっきりする。すなわち、その本質は、官僚主義と任命方式の若干の無用で有害なゆきすぎを擁護したり、正当化するのでなく、それを是正するための闘争にある。ただそれだけである。

原則的な意見の相違について

しかし、もし根本的な、深刻な、原則的な意見の相違があるなら、――と、われわれにむかって言う人があるかもしれない――どんなに辛辣な、分派的な発言をしても、正当なのではないだろうか？　もし新しい、まだ理解されていないことを言う必要があるなら、ときには分裂することさえも、正当なのではないだろうか？　と。

もちろん、正当である。……もし、その意見の相違がほんとうにきわめて深刻なものならば、もし、党もしくは労働者階級の政策のまちがった方向を是正するのに、別の方法がまったくないならば。

だが、困ったことには、そんな意見の相違はないのである。同志トロツキーは、そういう意見の相違を示そうと努

力したが、できなかった。そして、彼の小冊子が出る（一二月二五日に）まえには、われわれは条件的あるいは宥和的に語ることができた（「まだ認識されていない、新しい任務があるとしてさえ、意見の相違があるとしてさえ、問題をこんなふうに取りあげてはならない」というふうに）――またそうすべきであった――が、この小冊子が出たあとでは、同志トロツキーの所説のうちで新しいものは本質的にまちがっている、と言わなければならなかった。

このことは、同志トロツキーのテーゼと、第五回労働組合全ロシア会議（一一月二―六日）によって採択されたルズタークのテーゼとを比較してみれば、いちばんはっきりする。私は、一二月三〇日の演説のなかと、一月二一日の『プラウダ』紙上とに、後者を引用しておいた。[六〇] このテーゼは、トロツキーのテーゼより正確でもあり、完全でもある。トロツキーのテーゼがルズタークのテーゼと違っている点は、トロツキーがまちがっている点である。

はじめに、同志ブハーリンが一二月七日の中央委員会の決議に大いそぎで挿入した、悪名高い「生産民主主義」を取りあげよう。もし、このぎこちない、インテリくさい、わざとらしい（「気どった」）用語が、演説や論文のなかでつかわれたのだったら、もちろん、この用語に文句をつけるのは、滑稽なことだろう。だが、トロツキーとブハーリンその人が、彼らの「政綱」と労働組合が採択したルズタークのテーゼとを区別する、ほかならぬこの用語を自分たちのテーゼのなかで強く主張するという滑稽な立場に、自分で身をおいたのである。

この用語は、理論的にまちがっている。あらゆる民主主義は、一般にあらゆる政治的上部構造（階級の廃止が完了せず、無階級社会がつくられないうちは、不可避のもの）と同様に、結局は生産に奉仕し、結局はその社会の生産関係によって規定される。だから、他のあらゆる民主主義から「生産民主主義」を区別することは、なんの意味もない。それは混乱であり、むだ話である。これが第一。

第二に、当のブハーリンが、自分で書いた一二月七日の中央委員会総会の決議でこの用語をどう説明しているか、ごらん願いたい。ブハーリンは、そこにこう書いている。「だから、労働者民主主義の方法は、生産民主主義の方法でなければならない。それは、こういう意味である」――これに注意されたい、「それは、こういう意味である」だと！ ブハーリンは、特別な説明を必要とするような、むずかしい用語で、大衆への呼びかけを始めるのだ。私の考えでは、民主主義の見地からすれば、これは非民主的である。大衆のためには、特別な説明を必要とするような新しい用語をつかわずに書かなければならない。「生産」の見

地からすれば、これは有害である。なぜなら、不必要な用語の説明に時間を空費させるから――「それは、こういう意味である。あらゆる選挙、候補者の推薦、彼らへの支持などは、政治的な確固さの見地だけからではなく、さらに経営能力、行政経歴、組織者としての素質、勤労大衆の物質的・精神的利益にたいする実地にためしずみの心づかいの見地からも、おこなわれなければならないということ、これである。」

この議論は、明らかにこじつけで、誤っている。民主主義は、「選挙、候補者の推薦、彼らへの支持、等々」だけを意味するものではない。一方ではこうである。他方では、あらゆる選挙が政治的な確固さと経営能力の見地からおこなわれなければならないなどということはない。トロツキーの考えに反して、幾百万人の組織では、あるパーセンテージの代理人、官僚もまた必要である（今後まだ長い年月のあいだ、よい官僚なしにはやっていけないだろう）。しかし、われわれは、「代理人」民主主義や「官僚」民主主義などをうんぬんしはしない。

第三に、選出代表、組織者、行政官、等々だけを見るのは正しくない。これらは、なんといっても、傑出した少数の人々である。普通の人々、大衆を見なければならない。ルズタークのテーゼでは、このことが、もっと簡潔に、もっとわかりやすく言いあらわされているばかりでなく、理論的にもより正しく言いあらわされている（第六テーゼ）。

「……生産参加者の一人ひとりが、自分の遂行する生産上の任務の必要性と合目的性を理解することが必要であり、生産参加者の一人ひとりが、上からあたえられた課題の遂行に参加するだけでなく、生産分野での技術上および組織上のあらゆる欠陥の是正に、意識的に参加することが必要である。」

第四に、「生産民主主義」とは、曲解されるおそれのある用語である。それは、独裁（ディクタツーラ）や個人責任制の否定の意味に理解されるかもしれない。それは、普通の民主主義の実行を延期するのだとか、もしくはそれを実行しない逃げ口上だとかいうふうに、解釈されるかもしれない。この解釈はどちらも有害であるが、それを避けようとすれば、特別の、長々しい注釈なしにはすまない。

ルズタークのテーゼにおける同じ思想の簡単明瞭な叙述は、より正しくもあるし、こうした不都合をすべて避けてもいる。そして、トロツキーは、『プラウダ』一月一一日号所載の彼の論文『生産民主主義』のなかで、これらの誤りや不都合があることを否定していないばかりか（彼はこの問題をまったく避けており、自分のテーゼとルズタークのテーゼとを比較していない）、かえって、自分の用語の

不都合と誤りを、間接に、つまり、この用語とならべて「軍事的民主主義」ということばをあげることによって、確認している。さいわいにも、私が記憶するかぎり、われわれは、こういう用語をめぐって分派的な論争をおこすようなことは、かつてやったことがない。

「生産的雰囲気」というトロツキーの用語は、もっとまずい。ジノヴィエフがそれを嘲笑したのは正当である。トロツキーは非常に立腹して、次のように反論した。「われわれのあいだには、軍事的雰囲気があった。……いまや、労働者大衆のあいだに、その表面だけでなくその深層に、生産的雰囲気がつくりだされなければならない。すなわち、われわれが以前に戦線にそそいだのと同じ緊張、実務的な関心、注意が、生産にそそがれなければならない。……」まさに肝心なことは、「労働者大衆、彼らの深層」にたいしては、ルズタークのテーゼのような調子で話さなければならず、ひとをまごつかせたり、苦笑させたりする「生産的雰囲気」といったたぐいの用語をつかって話してはならないということである。同志トロツキーは、「生産的雰囲気」という表現で、実質上、生産宣伝という概念が言いあらわしているのと同じ思想を言いあらわしているのである。だが、ほかならぬ労働者大衆のためには、その深層のためには、このような表現を避けるようにして、生産宣伝をやらなければならない。この表現は、大衆のなかでの生産宣伝をどのようにやってはならないかということの格好な見本である。

政治と経済、弁証法と折衷主義

こんな初歩的な、イロハの問題をあらためて提起しなければならないとは、奇妙なことである。残念なことに、トロツキーとブハーリンが、そうしないわけにはいかないようにしているのである。このふたりは、私が問題を「すりかえている」と言って、すなわち、彼らは問題を「経済的に」取りあげているのに、私は「政治的に」取りあげていると言って、私を非難している。ブハーリンにいたっては、これを自分のテーゼに織りこんで、みずからは両論争者の「上に立とう」とさえ試みた。自分はこの両者を結合するのだと言って。

これはひどい理論的誤りである。政治は経済の集中的表現である――と私は自分の演説で繰りかえして言った。なぜそうしたかというと、すでにそのまえから、私が問題を「政治的に」取りあげているという、理屈にあわない、マルクス主義者のことばとしてはまったく許しえないこの非難が、私の耳にはいっていたからである。政治は経済にたい

して優位を占めざるをえない。これ以外の考え方は、マルクス主義のイロハを忘れることを意味する。

もしかすると、私の政治的評価がまちがっているのだろうか？　それならそう言って、それを証明してくれたまえ。だが、政治的な取りあげ方も、「経済的」な取りあげ方も、同等の値うちがあるとか、「そのどちらを」とってもよいとかと語ること（もしくは、間接的にでも、そういう考えを容認すること）は、マルクス主義のイロハを忘れることを意味する。

いいかえれば、政治的な取りあげ方とは、次のようなものである。すなわち、ソヴェト権力、労働組合にたいして誤った態度をとるならば、ソヴェト権力、プロレタリアートの執権は破滅するであろう、ということである（もし党の誤りのために党と労働組合とが分裂すれば、ロシアのような農民国では、きっとソヴェト権力は転覆するであろう）。この考えを本質的に点検すること、すなわち、こういう取りあげ方が正しいか正しくないかを検討し、究明し、決定することはできる（また、そうしなくてはならない）。だが、「私は君たちの政治的な取りあげ方を『尊重する』が、『しかし』それはたんなる政治的な取りあげ方であり、われわれはまた、それを『経済的にも』取りあげる必要がある」と語ることは、「しかじかの行動をとれば破滅するという君たちの考えを私は『尊重する』が、しかし、腹いっぱい食べてよい衣服を着るほうが、飢えて裸でいるよりもよいということも、考えにいれたまえ」と言うのにひとしい。

ブハーリンは、政治的な取りあげ方と経済的な取りあげ方の結合を主張することによって、理論的に折衷主義におちいってしまった。

トロツキーとブハーリンは、「私たちは、これこのとおり生産の増大に心をくばっているのに、君たちは形式的民主主義のことしか気にかけない」というふうに、問題を言いあらわしている。こういう言いあらわし方はまちがっている。なぜなら、問題は、もっぱら次のように立てられている（また、マルクス主義の立場からすれば、そうしか立てることができない）からである。すなわち、この階級は、問題を正しく政治的に取りあげずには、自分の支配を維持できず、したがって、自分の生産上の任務をも解決できないであろう、と。

もっと具体的に言おう。ジノヴィエフは言う。「君たちは、労働組合を分裂させて、政治的な誤りをおかしている。また、生産の増大については、私はすでに一九二〇年一月に、浴場の建設を例にひいて、話したり書いたりした」と。トロツキーはこう答える。「考えてもみたまえ（二九ページ）。浴場を例にひいて小冊子を書くなんて、いったいな

にごとだ。それに、労働組合はなにをなすべきかについては、君たちは『一言も』、『ただの一言も』（一二二ページ）述べていないではないか」と。

これはまちがっている。駄じゃれで恐縮だが、浴場の例は、一〇の「生産的雰囲気」にいくつもの「生産民主主義」をおまけにつけただけの値うちがある。浴場の例は、労働組合はなにをなすべきかを、明瞭に、簡単に、ほかならぬ大衆に、ほかならぬ「深層」に語ってきかせている。ところが、「生産的雰囲気」とか「生産民主主義」とかは、労働者大衆の目をくもらせ、彼らの理解を困難にするごみである。

同志トロツキーはまた、「労働組合機構とよばれる槓杆(てこ)がどんな役割を演じているか、また演じなければならないか」について、「レーニンは一言も語らなかった」（六六ページ）と言って、私のことも非難した。

失礼だが、同志トロツキー。私は、ルズタークのテーゼ全文を読みあげ、それに同意を表明することで、君のテーゼ全文と、君の報告または副報告と結語の全部を合わせたよりも、もっと多く、もっと十分に、もっと正確に、もっと簡潔に、もっと明瞭に、それについて語ったのである。なぜなら、繰りかえして言うが、現物報奨と同志規律裁判所とは、経営に熟達し、工業を管理し、労働組合の生産上の役割を高める点で、「生産民主主義」とか、「一体化」などといった、まったく抽象的な（したがってまた空虚な）ことばの百倍もの意義があるからである。

「生産的」見地を強調するのだ（トロツキー）とか、一面的な政治的な取りあげ方を克服して、この取りあげ方と経済的な取りあげ方とを結合するのだ（ブハーリン）とかいう口実で、彼らがわれわれに提供したものは、次のようなものである。

（一）マルクス主義の忘却――これは、政治と経済の関係についての、理論的にまちがった、折衷主義的な規定に現われている。

（二）トロツキーの政綱小冊子全体をつらぬいている政治的誤り――これは、ゆすぶり政策に現われている――の擁護または隠蔽。だが、この誤りは、それをさとらず、是正しなければ、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の倒壊にみちびくのである。

（三）純然たる生産・経済問題、どのようにして生産を増大させるかという問題の分野での一歩後退。すなわち、具体的な、実際的な、緊要な、生きいきとした諸任務（生産宣伝を展開せよ、現物報奨をうまく分配することを学べ、同志規律裁判所というかたちでの強制をもっと正しく適用することを学べ）を提起したルズタークの実務的なテーゼから、いちばん実務的で実際的なものを忘れた、抽象的で、

非実際的で、「空疎で」、理論的にまちがった、インテリふうの定式にまとめられた、一般的なテーゼへの、一歩後退。

政治と経済の問題では、一方のジノヴィエフと私、他方のトロツキーとブハーリンの関係は、実際には、まさに右のようになっている。

だから、私は、同志トロツキーが一二月三〇日に発表した、私にたいする次の反論を読んだとき、失笑を禁じえなかったのである。すなわち、「同志レーニンは、第八回ソヴェト大会でのわが国の情勢についての報告の結語で、われわれは政治をもっと少なくし、経済にもっと多くたずさわる必要があると語ったのに、労働組合問題については、彼は問題の政治的側面に重点をおいた」（六五ページ）と。同志トロツキーには、この文句が「きわめて適切な」ように思えたのである。実際には、この文句は、きわめて救いがたい概念の混乱、真にはてしない「思想的混乱」を表現しているのである。もちろん、私は、われわれが政治にもっと少なく、経済にもっと多くたずさわるように、という願いをいつも表明してきたし、いまでも表明しており、将来も表明するであろう。しかし、こういう願いがみたされるためには、政治的危険と政治的誤りがなくなっていなければならないことは、理解しにくいことではない。同志トロツキーがおかし、そして同志ブハーリンが深め、さらに輪をかけた政治的誤りは、わが党を経済的任務から、「生産」活動から引き離して、残念なことに、これらの誤りの是正に、サンディカリズム的傾向（プロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の倒壊にみちびくところの）との論争に、労働組合運動にたいする誤った態度（ソヴェト権力の倒壊にみちびくところの）との論争に、われわれの時間を空費させ、サラトフの製粉労働者、ドンバスの炭鉱労働者、ペトログラードの金属労働者、等々のうちのだれが、一一月二一六日の第五回労働組合全ロシア会議で採択されたルズタークのテーゼにもとづいて、よりよく、より効果的に現物報奨をあたえ、裁判を組織し、一体化を実現してきたかという実務的、実際的な「経済的」論争ではなしに、一般的な「テーゼ」についての論争に、われわれの時間を空費させているのである。

「広範な討論」の効用という問題を取りあげてみたまえ。ここでもまた、政治的誤りがわれわれを経済的任務から引き離していることが、わかるであろう。私は、いわゆる「広範な」討論には反対であった。そして、実務的討論の場となるはずであった労働組合問題委員会を同志トロツキーがぶちこわしたのは、誤り、政治的誤りであると考えてきたし、いまでもそう考えている。私は、ブハーリンを先頭とする緩衝グループが緩衝器の任務を理解しなかった

（彼らはここでも弁証法を折衷主義とすりかえた）のは、このグループの政治的誤りであると考えている。彼らは、ほかならぬ「緩衝」の見地からこそ、広範な討論に猛反対をとなえて、討論を労働組合問題委員会に移すよう、きょくりょく主張すべきだったのである。それがどうなったか、ごらん願いたい。

一二月三〇日にブハーリンは、次のようなことまで口にした。「われわれは、労働者民主主義という新しい、神聖なスローガンを提出した。労働者民主主義とは、どんな問題でも、狭い合議機関で、小さな会合で、なにか自分たちだけの閉鎖的な団体で審議せずに、あらゆる問題を広範な会合にかけるということである。そこで、本日の会合のような大きな会合に労働組合の役割の問題をかけることによって、われわれは、一歩後退するどころか、前進するのだと、私は主張する」（四五ページ）。ところが、この御本人がジノヴィエフのことを、無内容なおしゃべりをやり、民主主義を誇張した、と言って非難したのだ！　これは、まったく無内容なおしゃべりであり、「ばか話」である。形式的民主主義が革命的合目的性に従属させられなければならないことを、まったく理解しない議論である！

トロツキーにしても、五十歩百歩である。彼は次のように非難している。「レーニンは、ぜがひでも、問題の本質にかかわる討論をやめさせ、ぶちこわしたいと思っている。」（六五ページ）彼はこう声明する。「なぜ私は委員会にはいらなかったか、それについては、私は中央委員会ではっきり言った。私が、他のすべての同志たち同様に、これらの問題を党出版物で全面的に提起することを許されるまでは、私は、これらの問題の密室内での審議からは、したがってまた委員会の活動からは、どんな利益も期待しない、と。」（六九ページ）

結果はどうか？　トロツキーが一二月二五日に「広範な討論」を始めてからまだひと月とたっていないが、責任ある党活動家で、この討論に嫌気がささず、その無益さ（控えめに言って）を悟らなかったような人は、おそらく一〇〇人に一人も見つかるまい。なぜなら、トロツキーは、委員会でのまさに実務的な経済的審議を「密室内での」審議だとののしって、用語や、まずいテーゼについての論争に党の時間を空費させたからである。この委員会は、生きた事業から、およそ「生産的雰囲気」といった死んだスコラ学へ後退するのでなく、実地の経験に学んで、真の「生産」活動で前進するために、実地の経験の研究と点検を自分の任務とするはずだったのである。

悪名高い「一体化」を取りあげてみたまえ。私は一二月[六七]三〇日に、この問題については沈黙を守るように忠告した。

なぜなら、われわれは自分自身の実地の経験を研究していなかったが、この条件なしには、一体化についての論争は無内容なおしゃべりに堕し、党の勢力をむだに経済活動から引き離す結果になるのは、避けられないからである。国民経済会議のメンバーの三分の一ないし二分の一、または二分の一ないし三分の二を労働組合の代表で構成するように提案している、トロツキーのこの点にかんするテーゼを、私は官僚的な空想計画と名づけた。

このことで私にひどく憤慨したのは、ブハーリンである。速記録の四九ページに書いてあるところによると、彼は、「人々が会合して、ある件について論じているときに、啞のふりをしてはいけない」（上記のページには、文字どおりこう印刷されてある！）ということを、くわしく、微にいり細をうがって私に論証してくれた。トロツキーも憤慨して、こう絶叫した。

「私は諸君に、同志レーニンがしかじかの日にこれを官僚主義とよんだことを、各自手帳に書きとめておくよう、お願いする。だが、私はあえて予言しておく。数ヵ月後には、全ロシア労働組合中央評議会と最高国民経済会議、金属労働組合中央委員会と金属部、等々のメンバーの三分の一ないし二分の一を、両機関兼務の働き手で構成するという考えが、参考にもされ、指針にもされるようになるであろう。……」（六八ページ）

私はこれを読んでから、一体化問題についてありあわせる印刷された報告を送ってくれるように、同志ミリューチン（最高国民経済会議副議長）に頼んだ。私は、すこしずつでも、われわれの実地の経験の研究を始めることにしようと、心のなかで考えているのである。というのは、いたずらに、材料ももたず、事実ぬきで、「全党的会話」（四七ページにあるブハーリンの表現、このことばは、たぶん、有名な「ゆすぶり」にもおとらない「名文句」となるだろう）にふけり、でまかせに意見の相違やら、定義やら、「生産民主主義」やらをでっちあげることは、がまんのならないほど退屈だからである。

同志ミリューチンは私に、『第八回全ロシア・ソヴェト大会にたいする最高国民経済会議の報告』（モスクワ、一九二〇年、序文は一九二〇年一二月一九日付）のほか、数冊の本を送ってくれた。この本の一四ページに、管理機関への労働者の参加の度合いを示す表がのっている。この表をここに引用しよう（それは一部の県国民経済会議と企業をふくんでいるだけである）〔次ページの表〕。

だから、労働者の参加は、いまでもすでに平均して六一・六％に達しているのである。つまり、半分よりは三分の二のほうに近い！　同志トロツキーがテーゼのなかでこ

管理機構	総数	そのうち労働者		専門家		職員その他	
			%		%		%
最高国民経済会議および県国民経済会議幹部会	187	107	57.2	22	11.8	58	31.0
各局，各部，各中央管理機関の参与会	140	72	51.4	31	22.2	37	26.4
合議制および個人責任制の工場管理部	1143	726	63.5	398	34.8	19	1.7
合計	1470	905	61.6	451	30.7	114	7.7

の点について書いたことが官僚的な空想計画の性格をもっていることは、すでに、ここで証明されている。「三分の一ないし二分の一」とか「二分の一ないし三分の二」とかについてしゃべったり、論争したり、政綱を書いたりするのは、すべてまったく空虚な「全党的会話」であり、人力と資力と注意と時間を生産活動から引き離すことであり、真剣な内容を欠いたたんなる政治談義である。これに反し、経験に富んだ人々がはいっていて、事実を研究もせずにテーゼを書くことを肯じない委員会ならば、経験の点検にたずさわることによって、事業に利益をもたらすことができるであろう。たとえば、二〇名ほど（一〇〇〇名の「両機関兼務の働き手」のうちから）の人々にアンケートを出し、彼らのもっている印象と結論を客観的な統計資料と比較照合し、経験からえられたこれこれの結果に照らしてみて、いますぐ同じ方向に前進すべきか、それとも方向、方法、取り扱い方をいくらか変更すべきか、それもまさにどう変更すべきか、あるいはまた、事業の利益のためには、立ちどまってさらになんども経験を点検し、ことによるとあれこれの点をやりかえるべきであろうか、などについての、将来のための実務的、実践的な指示をつくりあげるように試みることが、それである。

　同志諸君（私にもすこしばかり「生産宣伝」をやらせてほしい！）、真の「経営指導者」ならば知っていることだが、資本家とトラストの組織者は、最も先進的な国々においてさえ、その事業に完全に適当した管理制度をつくりだし、上級・下級の管理人員を選抜するなどのためには、長年のあいだ、しばしば一〇年以上ものあいだ、自分（と他人）の実地の経験を研究し、点検し、すでに始めたことを訂正し、やりかえ、あともどりをし、なんども訂正してきたのである。全文明世界にわたって、幾世紀もの経験と習慣によってその経済活動をおこなってきた資本主義のもとでさえ、こういうふうであった。ところが、われわれは新しい基盤のうえで建設しているのであって、ここでは、

資本主義から遺産として受けついだ習慣を再教育によってつくりかえる、きわめて長期にわたる、ねばりづよい、辛抱づよい仕事が必要である。これらの習慣のつくりかえは、ごく徐々にしかやれないことである。この問題を、トロツキーがやっているように取りあげることは、根本からまちがっている。彼は一二月三〇日の演説で次のように叫んだ。「わが国の労働者のあいだに、党や労働組合の活動家のあいだに、生産教育がおこなわれているだろうか？　イエスか、ノーか？　私は、ノーと答える」（二九ページ）と。この種の問題をこういうふうに取りあげることは滑稽である。まるで、ある師団に防寒長靴が十分にあるかどうか、イエスかノーか、と聞くようなやり方だ。

一〇年後にも、われわれはきっと、党と労働組合のすべての活動家のあいだに十分な生産教育がないと言わざるをえないであろう。それは、一〇年後にも、党、労働組合、軍官庁の活動家のあいだに十分な軍事教育がないであろうのと同じである。しかし、わが国では、およそ一〇〇〇人の労働者、労働組合員と労働組合代表が管理に参加し、企業や、中央管理機関や、もっと上級の機関を運営していることによって、生産教育の端緒はすでにきずかれている。「生産教育」の根本原則、われわれ自身、すなわち古い非合法活動家と職業的ジャーナリストの教育の根本原則は、「七度測って、一度裁て」という準則に従って、われわれ自身の実地の経験をきわめて注意ぶかく、きわめてくわしく研究することに、われわれ自身とりかかり、また他の人人にもとりかかるよう教えることにある。この一〇〇〇人がなしとげたことをねばりづよく、ゆっくりと、慎重に、実務的に、事務的に点検し、彼らの活動をさらにいっそう慎重に、事務的に是正し、ある方法、ある管理制度、ある釣合い、ある要員選抜、等々の利益が十分に証明されたのちに、はじめて前進すること。これこそ、「生産教育」の根本的な、主要な、無条件の準則である。ところが、まさにこの準則を、同志トロツキーは、そのテーゼ全体によって、その問題の取りあげ方全体によって、やぶっているのである。その誤りによって党の注意と力を実務的な「生産」活動から引き離して、空虚で無内容な口争いにそらせているのが、まさに同志トロツキーのテーゼ全体、政綱小冊子全体なのである。

弁証法と折衷主義、「学校」と「機構」

理論的才能と、あらゆる問題について理論的根源をつきとめようとする関心とは、同志ブハーリンがもちあわせている数多くの、きわめて貴重な資質の一つである。これは、

非常に貴重な資質である。なぜなら、誤りをおかした人が意識的に受けいれている特定の諸命題から出発して、その誤りの理論的根源をつきとめなければ、政治的誤りをもふくめて、どんな誤りも十分に理解することはできないからである。

同志ブハーリンは、問題を理論的にきわめようとする彼のこの志向にしたがって、一二月三〇日——それ以前ではないにしても——の討論以後は、論争をまさに右の分野に移している。

一二月三〇日に、同志ブハーリンはこう言った。

「この政治的契機も、この経済的契機も、いずれも捨てさるわけにはいかないということ、このことを私は絶対に必要と考えており、『緩衝分派』もしくはそのイデオロギーとよばれているものの理論的本質もここにある。そして、このことは、私にはまったく争う余地のないことと思われる。……」（四七ページ）

ここで同志ブハーリンがおかしている誤りの理論的本質は、彼が、政治と経済の弁証法的相互関係（マルクス主義がわれわれに教えているところの）を折衷主義にすりかえていることにある。「それも、これも」、「一方では、他方では」——これがブハーリンの理論的立場である。これこそ、折衷主義である。弁証法が要求しているのは、相互関係をその具体的な発展において全面的に考慮にいれることであって、あるものから一片を、他のものから一片をとりだすことではない。このことを、私はすでに政治と経済の例で示しておいた。

このことは、「緩衝器」の例でも、同じように明白である。もし、党という列車が下り坂を走っていって転覆しそうなときには、緩衝器は有益であり、必要である。これは争う余地がない。だが、ブハーリンは、ジノヴィエフから一片を、トロツキーから一片をとってきて、「緩衝」の任務を折衷主義的に提起した。ブハーリンは、「緩衝主義者」として、一方の人または他方の人、一方の人々または他方の人々が、どこで、いつ、どういう点で誤りをおかしているか、それは理論上の誤りか、それとも政治的な不手際の誤りか、分派活動の誤りか、それとも大げさに言う誤りか、などという点を、自主的に見きわめ、そういう誤りの一つひとつを全力をあげて攻撃すべきであった。だが、ブハーリンは、こういう「緩衝器」としての自分の任務を理解しなかった。その明瞭な証明の一つは次の事実である。

ツェクトラン（鉄道および水運従業員労働組合中央委員会）のペトログラード・ビューローの共産党グループは、トロツキーに同調していて、「基本的問題、すなわち労働組合の生産上の役割についての同志トロツキーの立場と同

志ブハーリンの立場は、同じ一つの見解の変種である」と考える、と率直に声明している組織であるが、この組織が、一九二一年一月三日のペトログラードにおける同志ブハーリンの副報告を小冊子にして、ペトログラードで出版した(エヌ・ブハーリン『労働組合の任務について』、ペトログラード、一九二一年)。この副報告には、次のように書いてある。

「最初、同志トロツキーは、労働組合の指導部員を更迭し、適当な同志を選抜しなければならない、などというふうに、その見解を定式化していた。もっと以前には、彼は『ゆすぶり』の見地にさえ立っていた。しかし、いまでは彼はこの『ゆすぶり』の見地を放棄しているのだから、それを同志トロツキーにたいする反駁の論拠としてもちだすことは、まったくばかげている。」(五ページ)

この叙述にふくまれている多数の事実上の不正確さについてくわしく論じることは、やめよう(「ゆすぶり」ということばは、一一月二—六日の第五回労働組合全ロシア会議でトロツキーが使用したものである。「指導要員の選抜」についてトロツキーが語ったのは、彼が一一月八日に中央委員会に提出したテーゼの第五項においてであった。ついでながら、このテーゼは、トロツキー支持者のだれかによって、活版のリーフレットとして出版された。一二月二五日付のトロツキーの小冊子『労働組合の役割と任務』は、全体として、私がすでにまえのほうで示したものと同じ考え方、同じ精神にみちみちている。その「放棄」が、いったいどこに、またどういう点に現われたのか、まったくわからない)。だが、私がここで問題にするのは、別のテーマである。もし「緩衝派」が折衷主義的であれば、彼らは一方の誤りを見のがして、他方の誤りを指摘する。すなわち、全ロシアの何千人のロシア共産党活動家の前でなされた、モスクワにおける一九二〇年一二月三〇日の誤りについては沈黙を守り、ピーテルにおける一九二一年一月三日の誤りを語る。もし「緩衝派」が弁証法的であれば、彼らは、双方の側に、もしくはすべての当事者の側に彼が見いだす誤りの一つひとつを、全力をあげて攻撃する。ところが、ブハーリンは、そういうことはやらない。彼は、トロツキーの小冊子を、ゆすぶり政策の見地から検討してみようとさえしていない。彼は、それについては、ただ沈黙を守っているだけである。緩衝器がこんなふうなやり方でその役割を果たすのを見て、みなが笑っているのは、不思議ではない。

さらにブハーリンの同じペトログラード演説の七ページには、こう言っている。

「同志トロッキーの誤りは、彼が共産主義の学校という契機を十分に擁護していない点にある。」

一二月三〇日の討論では、ブハーリンは次のように論じている。

「同志ジノヴィエフは、労働組合は共産主義の学校である、と言ったが、トロッキーは、これは生産管理の行政的・技術的機構である、と言った。私には、前者あるいは後者が正しくないということを証明するような論理的根拠は、まったく思いあたらない。この命題は二つながら正しく、これらの両命題の結合が正しいのである。」(四八ページ)

ブハーリンと彼の「グループ」もしくは「分派」の第六テーゼにも、同じ思想が述べられている。すなわち、「……それ（労働組合）は、一方では共産主義の学校である。……他方では、それは、経済機構、一般に国家権力機構の構成部分であり、――しかも、ますますそうなってゆく。……」（『プラウダ』一月一六日）

同志ブハーリンの基本的な理論上の誤り、マルクス主義的弁証法の折衷主義（さまざまな「流行の」反動的哲学体系の作成者たちのあいだでとくにひろまっている）によるすりかえは、まさにこの点にある。

同志ブハーリンは、「論理的」根拠をうんぬんしている。彼の立論のすべては、彼がここでは、弁証法的論理学もしくはマルクス主義的論理学ではなく、形式論理学もしくはスコラ的論理学の見地に――おそらく自覚しないで――立っていることを示している。このことを説明するために、同志ブハーリン自身がとったごく単純な例から始めよう。一二月三〇日の討論で、彼は次のように言った。

「同志諸君、諸君の多くは、ここでおこなわれている論争から、およそ次のような印象を受けたことであろう。ふたりの人がやってきて、演壇の上にあるコップはいったいなんなのかと、おたがいに尋ねあうとする。ひとりは言う。『これはガラスの円筒である。そうでないという者は犬にでも食われろ』と。他のひとりはこう言う。『コップは飲むための道具である。そうでないという者は犬にでも食われろ』と。」（四六ページ）

ごらんのとおり、ブハーリンは、この例によって一面性の弊害を私にわかりやすく説明しようとしたのである。私はこの説明をありがたく受けいれて、私の謝意を行為によって証明するために、弁証法と異なる折衷主義とはどういうものかということを、わかりやすく説明することで答えよう。

コップは、ガラスの円筒でもあり、また飲むための道具でもあることは、争う余地がない。しかし、コップはこれ

ら二つの性質もしくは資質もしくは側面をもつだけでなく、それ以外にも、無限に多くの性質、資質、側面、残りの全世界との相互関係および「媒介」をもっている。コップは重量をもつ物体であって、投げつける道具となりうる。コップは文鎮にもなるし、つかまえた蝶の入れ場所にもなる。コップは、飲む役に立つかどうか、ガラスで出来ているかどうか、円筒形かそれとも完全な円筒形でないかにはまったく関係なく、美術的な彫刻や画のある品物として価値をもつこともありうる、その他、等々。

さらに、いま私が、飲むための道具としてコップを必要とするなら、それが完全な円筒形かどうか、それがほんとうにガラス製かどうかを知ることは、私にとってまったくどうでもいいことである。そのかわり、底にひび割れがないこと、このコップを使うときにくちびるを傷つけたりしないこと、などがたいせつである。ところが、もし私が、飲むためでなく、どんなガラスの円筒でもまにあうような用途のためにコップを必要とするなら、底にひび割れのあるコップでも、あるいはまったく底のないものでも、私にはいっこうさしつかえない、等々。

学校で教えるのは形式論理学に限られている(学校の低学年では、——いくらかの訂正をほどこしたうえで——それに限らなければならない)が、この形式論理学は、最も普通なもの、あるいは最も頻繁に目に映るものをたよりとして、形式的規定を採用し、それだけにとどめる。この場合、二つないしそれ以上の異なった規定をとって、それらを(ガラスの円筒と、飲むための道具とを)まったく偶然に結合すると、対象のさまざまな側面を示すだけの折衷的な規定がえられる。

弁証法的論理学は、われわれがもっとさきへすすむことを要求する。対象をほんとうに知るためには、そのすべての側面、すべての連関と「媒介」を把握し、研究しなければならない。われわれはこのことを完全になしとげることはけっしてないだろうが、全面性の要求は、われわれが誤りや硬化におちいるのを防いでくれる。これが第一。第二に、弁証法的論理学は、対象をその発展、「自己運動」(ヘーゲルがしばしば言っているように)、変化において取りあげるように要求する。このことは、コップについてはすぐには明らかにならない。だが、コップとて不変のままではない。とくにコップの用途、その使い方、その周囲の世界との連関は変化する。第三に、対象の完全な「定義」には、真理の基準としても、対象と人間に必要な事柄との連関の実践的規定者としても、人間の実践全体がふくまれなければならない。第四に、弁証法的論理学は、故プレハーノフがヘーゲルにならってこのんで言ったように、「抽象

的真理というものはない、真理はつねに具体的である」ことを教えている（ついでに、ここで若い党員のために次の点を注意しておくのが適当だろうと思う。プレハーノフの哲学にかんする著作のすべてを研究する——まさに研究する——ことなしには、自覚ある、真の共産主義者になることはできない。なぜなら、これは、すべての国際的マルクス主義文献のうちで最良のものだからである）*。

* ついでながら、次のことを希望しないわけにはいかない。第一に、いま刊行中のプレハーノフ著作集のうち、哲学論文をみなぬきだして特別の一巻もしくは数巻にまとめ、それにごく詳細な索引その他をつけること。なぜなら、それは、共産主義の必読教科書のシリーズに入れなければならないからである。第二に、私の考えでは、労働者国家は、哲学教授たちがプレハーノフによるマルクス主義哲学の解説を知り、この知識を学生に伝える能力をもつよう、彼らに要求すべきである。でも、こうしたことはみな、きっと、「宣伝」から「行政的処理」に後退することとなのであろう。

いうまでもなく、弁証法的論理学の概念は以上につきるわけではない。しかし、さしあたっては、これで十分である。そこで、コップから、労働組合とトロツキーの政綱へ移ってもよいだろう。

ブハーリンは、次のように言い、またそのテーゼに書いている。「一方では学校であり、他方では機構である。」トロツキーの誤りは、彼が「学校という契機を十分に擁護していない」点にあり、……ジノヴィエフの誤りは、機構という「契機」についての不十分さにある、と。

なぜ、このブハーリンの立論は、死んだ、無内容な折衷主義なのか？　なぜなら、ブハーリンにあっては、自主的に、自分自身の立場から、当面の論争の歴史全体を分析しようとする試み（マルクス主義、すなわち弁証法的論理学はそれを無条件に要求しているのだが）も、また当面の時期、当面の具体的事情のもとでの問題の取りあげ方全体、問題提起全体——あるいは、そう言いたければ、問題提起の全方向と言ってもよい——を分析しようとする試みも、跡かたもないからである。ブハーリンには、そうしようと試みた形跡さえない！　彼は、ほんのすこしの具体的研究もせずに、まったくの抽象的概念を用いて問題を取りあげ、ジノヴィエフから一片、トロツキーから一片をとってくる。これこそ、折衷主義である。

もっと明瞭に説明するために、一例をとろう。私は、中国南部の蜂起者や革命家については、まったくなにも知らない（私が何年もまえに読んだ孫逸仙の二、三の論文と、数冊の本と、新聞論説のほかには）。そこに蜂起が起こっている以上、おそらく、蜂起は最も激烈な、全民族をとらえた階級闘争の産物であると論じる中国人第一号と、蜂起

は技術であると論じる中国人第二号とのあいだの論争もあるだろう。「一方では……、他方では……」というブハーリンのテーゼ式のテーゼなら、私はそれ以上なにも知らないでも書くことができる。一方は技術の「契機」を十分に考慮しなかった、他方は「激化の契機」を十分に考慮しなかった等々、と。それは、死んだ、無内容な折衷主義となるだろう。なぜなら、当面の論争、当面の問題、その問題の当面の取りあげ方、等々の具体的研究がないからである。

労働組合は、一つの側面からみれば、学校である。第二の側面からみれば、機構である。第三の側面からみれば、勤労者の組織である。第四の側面からみれば、ほとんど工業労働者だけの組織である。第五の側面からみれば、産業別の組織である。* その他、等々。なぜ、この問題もしくは対象の第三、第四、第五等々の「側面」を考察しないで、最初の二つの「側面」だけを考察しなければならないのか、ということについては、ブハーリンにはどんな論証、どんな自主的な分析の跡かたもない。だからこそ、ブハーリン・グループのテーゼも、徹頭徹尾、折衷主義的な空語なのである。ブハーリンは、「学校」と「機構」との相互関係の問題全体を、根本的にまちがったやり方で、折衷主義的に提起しているのである。

* ついでながら、この点でもトロツキーは誤っている。彼は、産業別組合とは産業を掌握すべき組合の意味だと考えている。これは正しくない。産業別組合とは、産業別に労働者を組織する組合の意味である。これは、技術と文化の（ロシアおよび全世界における）現在の水準のもとでは避けられないものである。

この問題を正しく提起するためには、空虚な抽象から具体的な論争に、すなわち当面の論争に移らなければならない。論争が第五回労働組合全ロシア会議で取りあげられたようにでも、あるいはまたトロツキーがその一二月二五日の政綱小冊子でそれをみずから提起し方向づけたようにでも、すきなようにこの論争を考察してみたまえ。——そうすれば、トロツキーの取りあげ方全体、彼の方向全体がまちがっていることがわかるであろう。「ソヴェト組合主義」というテーマを提起するときでも、生産宣伝一般について語るときでも、また「一体化」の問題、労働組合を生産管理に参加させる問題をトロツキーがやっているような仕方で提起するときでも、労働組合を学校として取りあげなければならず、また取りあげることができるということを、彼は理解しなかった。そして、この最後の問題では、トロツキーがその政綱小冊子全体をつうじてそれを提起した仕方では、労働組合が行政的・技術的生産管理の学校であることを理解していない点に誤りがある。「一方では学校、

他方では別のあるもの」というのではなくて、当面の論争では、トロツキーの当面の問題提起では、労働組合はあらゆる側面からみて学校である。団結の学校、連帯の学校、自分たちの利益擁護の学校、経営の学校、管理の学校である。同志ブハーリンは、同志トロツキーのこの根本的な誤りを理解し訂正するかわりに、「一方では、他方では」という滑稽な小訂正をおこなった。

問題をさらに具体的に取りあげてみよう。生産管理「機構」として、今日の労働組合がどんなものかを、一瞥してみよう。われわれは、不完全な資料によっても、約九〇〇人の労働者、労働組合員と労働組合代表が生産を管理しているのを見た。この人数がふえたとしよう。お望みなら、一〇倍も、一〇〇倍もふえたとしよう。諸君に一歩をゆずり、また諸君の根本的な誤りを説明するために、近い将来にこのような、ありそうにもない速さで「前進」がおこなわれるとさえ、仮定しよう。そうしてもやはり、直接の管理者の割合は、六〇〇万人という労働組合員の総数にくらべれば、とるにたりないほどわずかなものである。トロツキーがやっているように、すべての注意を「指導層」に集中するのは、九八・五%（6,000,000－90,000＝5,910,000＝総数の98.5%）が学びつつあり、また今後長いあいだ学ばなければならないことを考慮にいれずに、労働組合の生産上の役割だの、生産管理だのについて語るのは、根本的な誤りをおかすことだということが、ここからいっそう明らかになる。管理および学校ではなくて、管理の学校なのだ。

同志トロツキーは、一二月三〇日にジノヴィエフを論難して、後者が「任命方式」を、すなわち任命をおこなう中央委員会の権利と義務を、否認しているという、まったく根も葉もない、まちがった非難をくわえたさいに、次のような興味ある対置をうっかり口にだしてしまった。

彼はこう言った。「……ジノヴィエフは、ここには扇動の材料があるだけでなく、また行政的に解決すべき問題もあることを忘れて、あらゆる実践的・実務的問題をあまりにも宣伝的に取りあげている。」（二七ページ）

私は、この問題の行政的な取りあげ方がどんなものでありうるかを、すぐあとでくわしく説明しよう。だが、同志トロツキーの根本的な誤りは、まさに彼が、自分でその政綱小冊子で提起した諸問題を行政官として取りあげた（もっと正確にいえば、それにとびついた）点にあるのだ。ところが、これらの問題を、彼はもっぱら宣伝者としてのみ取りあげることができたし、また取りあげるべきだったのである。

じっさい、トロツキーのよい点はどこにあるか？　彼の

テーゼではなく、彼の演説――とくに彼が、労働組合活動家のうちの「保守的」翼とかいうものとのまずい論戦を忘れている場合の――のなかで疑いもなくよいもの、有益なものは、生産宣伝である。労働組合問題委員会での実務的な「経済」活動や、全ロシア生産宣伝ビューローの参加者、働き手としての演説や文筆活動では、同志トロツキーは、疑いもなく少なからぬ利益を事業にもたらしたことであろう（また疑いもなくもたらすであろう）。誤っているのは「政綱テーゼ」である。このテーゼをつらぬいているものは、労働組合組織内の「危機」や、労働組合内の「二つの傾向」や、ロシア共産党綱領の解釈や、「ソヴェト組合主義」や、「生産教育」や、「一体化」にたいする行政官ふうの取りあげ方である。私はいま、トロツキーの「政綱」の主要なテーマをのこらず列挙した。そして現在、トロツキーのもちあわせている資料をもってすれば、まさにこのようなテーマの正しい取りあげ方は、もっぱら宣伝的な取りあげ方でしかありえない。

国家とは強制の領域である。とくにプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の時代に強制をやめるのは、狂気のさたであろう。問題の「行政的処理」と行政的な取りあげ方とは、ここでは必須なものである。党とは、プロレタリアートの直接に統治する前衛である。それは指導者である。ここでは、強制ではなくて、党からの除名こそが、はたらきかけの特有の手段であり、前衛を粛清し、鍛錬する手段である。労働組合は、国家権力の貯水池、共産主義の学校、経営の学校である。この分野に特有なものは、主要なものは、管理ではなくて、「中央の」（および、もちろん、地方の）「国家行政と、国民経済および広範な勤労大衆との」「結びつき」（わが党綱領の経済の部の労働組合をあつかった第五項に言っているように）である。

この問題の提起全体の誤り、このような相互関係の無理解が、トロツキーの政綱小冊子全体をつらぬいている。

かりにトロツキーが、別の側面からこの問題全体を取りあげて、この大評判の「一体化」の問題を彼の政綱のほかの諸テーマと関連させて検討したと、仮定したまえ。かりに彼の小冊子が、「一体化」の事例、最高国民経済会議における工業管理の職務と労働組合の選挙による職務との兼務の事例、労働組合員や労働組合運動の常任活動家がそれを兼ねている事例九〇〇のうち、たとえば九〇をくわしく調査するという課題に、そっくりあてられていたと仮定したまえ。これらの九〇[六]の事例が、抽出統計調査資料とならべて、労農監督部やそれぞれの人民委員部の監査官や指導員の報告とならべて分析されたと、すなわち、これらの事例が行政官庁の資料にもとづいて分析され、活動の総括や

結果、生産上の成功、等々の見地から分析されたと、仮定したまえ。問題のこのような取りあげ方は、正しい行政的な取りあげ方であったろうし、その場合には、「ゆすぶり」の方針、つまりだれを更迭するか、だれを転任させるか、だれを任命するか、いますぐどんな要求を「指導層」に課するかに注意をむけることは、まったく正当であったろう。ブハーリンが、ツェクトランのメンバーによって刊行された一月三日のペトログラード演説で、トロツキーは以前には「ゆすぶり」の見地に立っていたが、いまではそれを放棄した、と言うとき、彼はここでも、実践的には滑稽で、理論的にはマルクス主義者としてまったく許しがたい折衷主義におちいっているのである。ブハーリンは、問題を具体的に取りあげることができないので（あるいは、取りあげたくないので）、それを抽象的に考察している。われわれ、党中央委員会と全党が行政をおこなっているあいだは、すなわち国家を統治しているあいだは、われわれは、「ゆすぶり」を、つまり、更迭、転任、任命、罷免等々を、けっしてやめないし、またやめることもできない。ところが、トロツキーの政綱小冊子では、そのような資料はまったく取りあげられていないし、「実践的、実務的な問題」はまったく提起されていない。ジノヴィエフとトロツキーが論争したのは、われわれがブハーリンと論争しているのは、また全党が論争しているのは、「実践的、実務的な問題」についてではなくて、「労働組合運動の分野に現われた諸傾向」（トロツキーの第四テーゼの結び）の問題についてなのである。

この問題は、本質上、政治的な問題である。いうまでもなく、最も人道的な感情と意図にみちているブハーリンが望んでいるように、トロツキーの誤りを折衷主義的な小訂正や補足によって是正するということは、問題――この具体的な「問題」――の本質そのものからして不可能である。

ここでは、解決は一つしか、ただ一つしかありえない。

「労働組合運動の分野に現われた諸傾向」、諸階級の相互関係、政治と経済の相互関係、国家、党、労働組合の――「学校」および機構としての――特有の役割などの政治問題を正しく解決すること。これが第一である。

第二は、正しい政治的解決にもとづいて、長期にわたる、系統的な、ねばりづよい、辛抱づよい、多面的な生産宣伝を繰りかえしおこなうこと――もっと正しくいえば、つづけること――、一国家機関の名で、その指導のもとに、全国的規模でそれをつづけることである。

第三は、「実践的、実務的な諸問題」を、「諸傾向」についての論争――それは当然に「全党的な会話」と広範な討論の領分に属する――と混同することなく、これらの問題

を実務的に、実務的な委員会で提起し、証人の審問、報告や統計の研究をおこない、これらすべてを基礎として——かならずこれらすべてを基礎として、かならずこれらのことを条件として——、かならずそれぞれのソヴェト機関もしくは党機関、あるいはまたこれら両機関の決定にもとづいて、「ゆすぶる」ことである。

ところが、トロツキーとブハーリンのところでえられたものは、政治的に誤った取りあげ方、伝導連結や、伝導ベルトの中断、みだりに「行政的処理」にとびつき、とびかかるやり方、空まわり、こうしたもののごたまぜである。誤りの「理論的」根源は——ブハーリンが例の「コップ」の話で理論的根源の問題を提起したからには——、明白である。ブハーリンの理論的——この場合は、認識論的——誤りは、弁証法を折衷主義にすりかえたことにある。ブハーリンは、問題を折衷主義的に提起することによって、まったく混乱してしまい、ついにはサンディカリズムふうのことまで口にするにいたった。トロツキーの誤りは、一面性、熱中、誇張、強情である。コップは飲むための道具なのだが、そのコップには底がないというのが、トロツキーの政綱である。

結び

あと残っていることは、黙過すると誤解のもとになりそうな二、三の点に、簡単にふれておくことだけである。

同志トロツキーは、その「政綱」の第六テーゼに、ロシア共産党綱領の経済の部の、労働組合を扱った第五項を転記した。その二ページあとの第八テーゼで、同志トロツキーは次のように言明している。

「……労働組合は、階級的経済闘争という、その存立の旧来の基礎を失った一方」……——(これはまちがいである、これは性急な誇張である、労働組合は、階級的経済闘争という基礎を失いはしたが、ソヴェト機構の官僚主義的歪曲との闘争という意味での、ソヴェト機構には利用できない方法と手段によって勤労大衆の物質的・精神的利益を保護する等々の意味での、非階級的「経済闘争」という基礎は、けっして失わなかったし、残念ながら、今後なお長年のあいだ失うことはできないだろう)、……——「一連の条件のために、労働組合は、プロレタリア革命が労働組合に提起した新しい任務、わが党綱領によって生産を組織することとして定式化されている任務を解決するのに必要な勢力を自己の隊列内に集め、そのために必要な方法をつく

りあげることに、まだ成功していない。」(傍点はトロツキーのもの、九ページ、第八テーゼ)

これは、またしても性急な誇張であって、大きな誤りの萌芽をふくんでいる。綱領は、「生産を組織すること」というような定式化をあたえていないし、労働組合にそのような任務を負わせてもいない。わが党綱領の一つひとつの思想、一つひとつの命題を、それらの命題が綱領のテキストに出てくる順序にしたがって、一歩一歩しらべてみよう。

(一)「社会化された工業の組織機構」(あらゆる機構ではない)「は、まず第一に」(もっぱらではない)「労働組合をよりどころとしなければならない。」(二)「労働組合は、同職組合的な偏狭さをますます脱却しなければならず」(どのようにして脱却するのか? 党の指導のもとに、プロレタリアートが教育その他のあらゆる手段で非プロレタリア勤労大衆にたいしてはたらきかける過程で、脱却するのである)、「また、当該産業部門の勤労者の大多数者を包括し、またしだいにひとりのこらずその全員を包括する巨大な産業別団体とならなければならない。……」

これは、党綱領のうちで労働組合を扱った節の最初の部分である。ごらんのとおり、この部分は、すぐさま、将来のための非常に「きびしい」「条件」、非常に長期の活動を必要とする「条件」を提起している。だが、そのさきにはまさにこう書いてある。

「……ソヴェト共和国の法律と確立した慣行とにもとづいて、すでに地方および中央のすべての工業管理機関の参加者……」(ごらんのとおり、きわめて用心ぶかいことばをつかっている、参加者としか言っていない)「……になっている労働組合は、単一の経済的全体としての全国民経済の管理をあますところなく実際に自分の手に集中するまでにならなければならない。……」(注意されたい。個々の工業諸部門でもなく、工業だけでもなく、全国民経済、しかも単一の経済的全体としての全国民経済の管理を、実際に集中するまでにならなければならないのだ。経済的条件としてのこの条件が実際に実現されたと見なすことができるのは、人口と国民経済とに占める小生産者の割合が、工業でも農業でも半分以下になってからのことである。)……「このようにして」(つまり、まえに示したすべての条件をしだいに実現するという「ようにして」)……「中央の国家行政、国民経済および広範な勤労大衆のあいだの不可分の結びつきを保障することによって、労働組合は、後者」……(すなわち大衆、つまり人口の多数者)……「を直接の経済運営の仕事に最も広範な規模で引きいれなければならない。労働組合が経済の運営に参加し、広範な大衆をそれに引きいれることは、同時に、ソヴェト権力の経済機構

の官僚主義化とたたかう主要な手段でもあり、生産の結果を真に人民の統制のもとにおくことを可能にする。」

このように、最後にあげた句には、またもや「経済の運営への参加」という、きわめて用心ぶかいことばが出てくる。またもや、官僚主義とたたかう主要な(だが、唯一のではない)手段として、広範な大衆を引きいれよという指示がある。そして、結びには、このうえなく用心ぶかい指示があたえられている。――「人民の」、すなわち、けっしてプロレタリアだけではなく、労働者・農民の「統制」のもとにおくことを「可能にする」と。

以上のすべてを、わが党綱領が労働組合の任務を「生産を組織すること」として定式化したというふうにまとめるのは、明らかにまちがっている。そして、この誤りを固執し、それを政綱テーゼに取りいれるなら、それからは、反共主義的・サンディカリズム的偏向以外にはなにもえられない。

ついでながら、同志トロツキーはそのテーゼに、「最近の時期に、われわれは党綱領にかかげた目標に近づくどころか、かえってそれから遠ざかった」(七ページ、第六テーゼ)と書いている。これは根も葉もないことであり、私は、まちがっていると思う。トロツキーが討論でやったように、労働組合「自身」がこのような事実を認めたということを引合いにだすだけでは、その証明にはならない。それは、党にとって最終審ではない。そもそもこれは、大量の事実の最も真剣な、客観的な研究によってのみ証明できることである。これが第一。だが、第二には、たとえこれが証明されたとしてさえ、なぜ遠ざかったか、という問題は、まだ解決されないままに残るだろう。それは、トロツキーが考えているように、「多くの労働組合活動家が」「新しい任務と方法を受けつけない」ためであるか、それとも、「われわれが」、官僚主義の若干の無用で有害なゆきすぎを阻止し是正するのに「必要な勢力を自己の隊列内に集め、それに必要な方法をつくりあげることに、まだ成功していない」ためであるか、どちらかである。

これに関連して、同志ブハーリンが一二月三〇日にわれわれにくわえた(そして、トロッキーがきのう、すなわち一月二四日に、第二回鉱山労働者大会共産党グループにおけるわれわれの討論で繰りかえした)非難、すなわち「第九回党大会がきめた方針を否認した」(一二月三〇日の討論報告、四六ページ)という非難にふれることが、適当であろう。彼はこう言った。レーニンは第九回大会で労働の軍事化を擁護し、民主主義を楯にとることを嘲笑したが、いまではそれを「否認した」、と。一二月三〇日の結語で同志トロツキーは、この非難にいわば特別の胡椒をふりか

けて、こう言った。「レーニンは、労働組合内に……生じているという反対派的気分をもった同志たちの結集が……生じているという事実を考慮にいれている」（六五ページ）、レーニンは「外交的観点から」（六九ページ）この問題を取りあげている、「党内の諸グループのあいだをたくみに泳ぎまわっている」（七〇ページ）うんぬん、と。同志トロツキーがおこなった問題のこのような説明は、もちろん、同志トロツキーにとっては非常に気持ちのよいものだが、私にとっては気持ちのよいどころの話ではない。しかし、事実を見てみよう。

一二月三〇日の同じ討論で、トロツキーとクレスチンスキーは、「すでに七月（一九二〇年）に同志プレオブラジェンスキーが、わが国の労働者組織の内部生活の点でわれわれは新しい軌道に移らなければならない、という問題を中央委員会に提起した」（二五ページ）という事実を確認している。八月には、同志ジノヴィエフが、官僚主義にたいする闘争と民主主義の拡大とにかんする中央委員会の書簡の草案を書き、そして中央委員会がそれを承認している。九月に、この問題が党協議会に提出され、同協議会の決定は中央委員会によって確認された。一二月に、官僚主義との闘争の問題が、第八回ソヴェト大会に提出された。つまり、全中央委員会、全党、労農共和国全体が、官僚主義とそれにたいする闘争の問題を日程にのぼせる必要があると認めたのである。ここから、ロシア共産党第九回大会〔の方針〕を「否認した」という結論がでてくるだろうか？　でてこない。そこには、どんな否認もない。労働の軍事化、等々についての決定は、争う余地のないものであって、これらの決定に異議をとなえた連中が民主主義を楯にとるのを私が嘲笑したことを、私は撤回する必要をすこしも感じない。ここからでてくる結論は、ただ次のものである。われわれは労働者組織内の民主主義を拡張するであろうが、それを物神化することはけっしてしないであろう、――われわれは、官僚主義との闘争の問題に深い注意をはらうであろう、――われわれは、だれがそれを指摘したかにかかわらず、官僚主義のあらゆる無用で有害なゆきすぎを、とくに慎重に是正するであろう、と。

最後に、もう一つ、重点主義と均等主義という小さい問題について一言しよう。一二月三〇日の討論で私はこう言った。この点についての同志トロツキーの第四一テーゼの定式化は理論的に正しくない、なぜなら、彼によれば、消費では均等主義、生産では重点主義をとることになるからである、と。重点主義とは優先待遇をあたえることであるが、消費をともなわない優先待遇は無である、と私は答えた。同志トロツキーは、このことで私が「はなはだしい健忘症ぶり」を発揮し、そのうえ「おどしつけ」をやってい

るといって、私を非難している（六七、六八ページ）。――ただいぶかしいのは、たくみに泳ぎまわるだとか、外交的だ、などという非難がぬけていることである。彼、トロツキーは私の均等主義的方針に譲歩したのに、私はトロツキーに攻撃をくわえている、というわけだ。

じっさい、党の諸問題に興味をもつ読者のためには、正確な党の記録文書がある。一一月の中央委員会総会の決議の第四項と、トロツキーの政綱小冊子の第四一テーゼとがそれである。私がどんなに「健忘症」でも、同志トロツキーがどんなに物おぼえがよくても、第四一テーゼが一一月九日の中央委員会決議にない理論的誤りをふくんでいることは、あくまでも事実である。この決議は次のように言っている。「中央委員会は、経済計画の遂行における重点主義の原則を保持することを必要と認めるとともに、最近の（すなわち、九月の）全国協議会の決定と完全に一致して、全体としての労働組合組織をたえず強化しながら、労働者のさまざまなグループおよびそれぞれの労働組合の状態の均等化へ、しだいに、だが着実に移ってゆく必要があると考える」と。これがツェクトランに鋒先をむけたものだということは明らかであって、この決議の正確な意味を曲解することは、まったく不可能である。つまり、重点主義を廃止しようとしているのではないのだ。緊要度の高い（経済計画の遂行において）企業、労働組合、トラスト、官庁は、ひきつづき優先させられている。しかし、それと同時に、「同志レーニン」が主張したのではなくて、党協議会と中央委員会、すなわち全党が承認した「均等主義的方針」は、しだいに、だが着実に均等化に移れ、とはっきり要求している。ツェクトランがこの一一月の中央委員会決議を実行しなかったことは、一二月の中央委員会決定（トロツキーやブハーリンによって通過させられた）からみても明らかである。この一二月決定は、かさねて「正常な民主主義の諸原則」に言及している。第四一テーゼの理論的誤りは、そこでは、消費面では均等主義、生産面では重点主義、と言っている点にある。これは経済学的に不条理である。なぜなら、それは消費と生産とを分離させることだからである。私は、そんなことはなにも言わなかったし、また言うはずもなかった。ある工場が不要なら――閉鎖すべきである。絶対に必要でない工場はみな閉鎖すべきである。絶対に必要なもののなかでは――緊要度の高いものを優先させるべきである。たとえば、運輸を優先させるべきである。これは争う余地のないことである。だが、この優先待遇が法外なものにならないようにするため、またツェクトランでそれが法外なものになったことを考慮して、党の（レーニンの、ではない）指令は、均等化へ、しだいに、だが着

実に移れ、と言っているのである。正確な、そして理論的に正しい決定をくだした一一月総会のあとで、トロツキーが、「二つの傾向」についての分派的な小冊子を出し、第四一テーゼで経済学的にまちがっている独自の定式化を提案しているとすれば、彼は自分を責めるべきである。

きょう一月二五日は、同志トロツキーが分派的な発言をしてからちょうどひと月になる。形式からみて不適当で、本質からみて誤っているこの発言によって、党が、実務的、実践的、経済的、生産的な活動から引き離されたこと、政治的、理論的な誤りを是正するためにそれから引き離されたことは、いまではすでにきわめてはっきりしている。けれども古い諺が、「とりえのない悪はない」と言っているのも、理由のないことではない。

うわさによれば、党中央委員会内部の意見の相違について、とほうもないことが言いふらされたようである。反対派のまわりにはメンシェヴィキとエス・エルが寄りあつまったが（そして、疑いもなく、いまでも寄りあつまっている）、彼らはうわさをひろげ、前例のない悪意にみちた仕方でこれを伝え、根も葉もない作り話をでっちあげて、あらゆる方法で中傷し、けがらわしい解釈をくだし、紛争を激化させ、党の活動をだいなしにしようとしている。これこそ、小ブルジョア民主主義者のメンシェヴィキとエス・エルをふくめて、ブルジョアジーの政治的な常套手段である。彼らは、ボリシェヴィキにたいする激しい敵意を燃やしており、またしごく明瞭な理由によって燃やさざるをえないのである。あらゆる自覚した党員は、このブルジョアジーの政治的な常套手段をよく知っており、それがどれだけの値うちのものかを知っている。

中央委員会内に意見の相違が起こったため、党に訴えなければならなくなった。討論は、これらの意見の相違の本質と度合いを明瞭に示した。うわさと中傷には終止符が打たれた。党は、新しい（十月変革以後われわれがそれを忘れていたという意味で新しい）病気、分派活動との闘争のなかで学び、かつ鍛えられている。それは本質上古い病気であって、おそらく、何年かのあいだはその再発は避けられないであろう。しかし、いまでは、この病気はもっと速く、もっと容易に治療できるし、また治療しなければならない。

党は、意見の相違を誇張しないことを学んでいる。ここで、同志トムスキーにたいする同志トロツキーの正しい批評を繰りかえすのが適当であろう。「同志トムスキーと最も激しい論戦をおこなっていたさなかでも、私はいつも次

のように言ってきた。同志トムスキーがもっているような経験と権威をもった人々だけが、労働組合内でのわれわれの指導者になれるということは、私にはまったく明白である、と。私は第五回労働組合会議のグループでそう言ったし、数日まえ、ジーミン劇場でもそう言った。党内の思想闘争は相互に排除しあうことを意味せず、相互にはたらきかけあうことを意味する、と。」（一二月三〇日の討論の報告、三四ページ）[32] 党がこの正しい考えを同志トロツキーにも適用することは、いうまでもない。

討論のさいに、とくに同志シリャプニコフとそのグループ、いわゆる「労働者反対派」[33]のあいだにサンディカリズム的偏向が現われた。これは、党からの、共産主義からのはっきりした偏向であるから、この偏向をとくに重視しなければならない。それについてとくに話し合わなければならないし、このような見解の誤り、このような誤りの危険性を宣伝し、説明することに、とくに注意をはらわなければならない。「必任候補者」（管理機関への労働組合の候補者）というサンディカリズム的な文句さえ口にだすまでになった同志ブハーリンは、きょうの『プラウダ』で、はなはだまずい、明らかにまちがった仕方で自己弁護をやっている。自分は党の役割については別の条項で述べているではないか、とこう言うのだ！　あたりまえのことだ！　そうでなかったら、これは党を脱退したことになるだろう。そうでなかったら、これは、是正すべくまた容易に是正できる誤りに、もはやとどまらないであろう。「必任候補者」について語りながら、すぐその場で、それは党にとって必任なのではないとつけくわえないなら、サンディカリズム的偏向である。そういうことは、共産主義とはあいいれないし、ロシア共産党綱領とはあいいれない。もし「党にとって必任なのではない」とつけくわえるとすれば、実際には現状にくらべてすこしも変更がないのに、非党員労働者を、彼らの権利がいくらか拡張されるかのような錯覚でだますことになる。同志ブハーリンが自分の共産主義からの偏向、理論的に明らかにまちがっており政治的に欺瞞的な偏向の弁護を固執すればするほど、その強情の結果はますますみじめなものになるだろう。しかし、弁護できないものを弁護しても、うまくはいかないだろう。党は、非党員労働者の権利の拡張に、なんでも反対しているわけではない。けれども、そのさいにどういう方法をとってよいか、またどういう方法をとってならないかは、ほんのすこし考えればわかることである。

第二回全ロシア鉱山労働者大会共産党グループの討論では、シリャプニコフの政綱は、この組合でとくに権威のある同志キセリョーフがそれを擁護したにもかかわらず、敗

北した。われわれの政綱には一三七票、シリャプニコフの政綱には六二票、トロツキーの政綱には八票が投ぜられた。サンディカリズム的偏向は、治療されなければならないし、また治療されるであろう。

この一ヵ月のあいだに、党がこの討論に反応し、圧倒的多数で同志トロツキーの誤った方針をしりぞけたことは、すでにピーテルでも、モスクワでも、一連の地方都市でも、明らかになっている。「上層部」と「周辺部」に、委員会や機関に、動揺があったことは疑いないとしても、一般党員大衆、労働者党員大衆は、まさにその圧倒的多数は、この誤った方針に反対の意見を表明したのである。

一月二三日にモスクワ市のザモスクヴォレーチエ地区でひらかれた討論会で、同志トロツキーが自分の政綱を撤回して、新しい政綱にもとづいてブハーリン・グループと合同する、という声明をおこなったことを、同志カーメネフが私に知らせてくれた。残念ながら、同志トロツキーは、鉱山労働者大会の共産党グループで私に反対して発言したのに、このことについては、私は彼から一月二三日にも、一月二四日にも、ひと言も聞かなかった。同志トロツキーの意図と政綱がまたしても変わったのか、それとも、この件にはなにかほかの事情があるのか、私にはわからない。しかし、いずれにせよ、同志トロツキーが一月二三日にそう声明したことは、党が、その全勢力を動員するひまさえなく、わずかにピーテル、モスクワのほか、少数の地方中心地の見解を表明することができただけなのに、それでも同志トロツキーの誤りを即座に、確実に、断固として、急速に、しっかりと訂正したことを示している。

党の敵どもが勝利を祝ったのは、むだであった。彼らは、ときとして避けることのできない党内の意見の相違を利用して、党に損害をあたえ、ロシアにおけるプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）に損害をあたえることはできなかったし、また今後もできないであろう。

一九二一年一月二五日

一九二一年一月二五日および二六日にモスクワ労働者・農民・赤軍代表ソヴェト出版部刊行の単行の小冊子として発表
全集、第五版、第四二巻、二六四—三〇四ページ所収
邦訳全集、第三二巻、六三—一〇七ページ所収

国際労働婦人デー

ボリシェヴィズムとロシア十月革命における主要で基本的な点は、まさに資本主義のもとでいちばんひどく抑圧されていた人々を、政治に引きいれたことである。君主制のもとでも、ブルジョア民主主義的共和制のもとでも、彼らは資本家によって抑えつけられ、だまされ、略奪されてきた。土地や工場の私的所有が維持されていたあいだは、資本家によるこの抑圧、この欺瞞、人民の労働のこの略奪は、避けられなかった。

ボリシェヴィズムの本質、ソヴェト権力の本質は、ブルジョア民主主義のうそと偽善を暴露し、土地や工場の私的所有を廃止して、国家権力全体を勤労被搾取大衆の手に集める点にある。彼ら自身が、これらの大衆が、政治、すなわち新しい社会の建設の仕事を自分自身の手ににぎっている。これは困難な仕事である。大衆は資本主義に打ちのめされ、おしひしがれている。だが、これ以外には、賃金奴隷制、資本家の奴隷制をまぬかれる道はないし、またありえない。

だが、婦人を政治に引きいれずには、大衆を政治に引きいれることはできない。なぜなら、人類のなかばを占める婦人は、資本主義のもとでは二重に抑圧されているからである。労農婦人は、資本に抑圧されているうえに、どんなに民主的なブルジョア共和国でも、第一に、いまなお完全な権利をもっていない。というのは、法律が彼女に男子との平等をあたえていないからである。第二に——これが肝心な点であるが——、彼らはいまなお「家内奴隷制」のもとにあり、「家内奴隷」となっていて、このうえなくこまごました、いやしい、苦しい、人を愚鈍にする台所仕事や、総じて個々別々の家庭の家事に押しつぶされている。

ボリシェヴィキ革命、ソヴェト革命は、世界のどの党、どの革命もあえてしたことのないほど深く、婦人の抑圧と不平等の根を断ち切った。わがソヴェト・ロシアには、婦人と男子の法律上の不平等は、跡かたも残っていない。婚姻法や家族法におけるとくにけがらわしい、卑劣な、偽善的な不平等、子供との関係における不平等は、ソヴェト権力によって完全に一掃されている。

これは、婦人解放への第一歩にすぎない。だが、どのブ

ルジョア共和国も、どんなに民主的な共和国も、この第一歩を踏みだす勇気のあったものはなかった。「神聖な私有財産」を恐れて、あえてそうする勇気がなかったのである。

第二の、そして主要な一歩は、土地や工場の私的所有の廃止である。これによって、これによってはじめて、婦人を完全に、真に解放する道、小規模の個々別々の家事から大規模な社会化された家事に移ることによって婦人を解放する道がひらける。

この移行は困難である。なぜなら、ここで問題になっているのは、最も根ぶかい、慣習的な、こりかたまった、硬化した「秩序」（ほんとうをいえば、無法と蛮行であって、「秩序」ではない）だからである。だが、この移行は始まっており、仕事は動きだしている。われわれは新しい道に足を踏みいれている。

国際労働婦人デーには、世界のあらゆる国で、婦人労働者の数かぎりない集会で、未曾有に困難な事業、だが偉大な、世界的に偉大な、真の解放事業に着手したソヴェト・ロシアにたいするあいさつが、響きわたるであろう。狂暴な、しばしば残虐なブルジョア反動をまえにして、元気をなくすなという、励ましの呼びかけが響きわたるであろう。ブルジョア国家が「自由」であり、「民主的」であればあるほど、資本家のギャングは、労働者革命にたいしてますます猛威をふるい、残虐にふるまうであろう。その実例は、北アメリカ合衆国の民主的共和制である。だが、労働者の大多数はすでに目ざめている。帝国主義戦争は、アメリカでも、ヨーロッパでも、遅れたアジアでも、まどろみ、なかば眠り、沈滞していた大衆を最後的に呼びさました。

世界のすべての地点で氷は打ち砕かれた。

帝国主義のくびきからの諸国民の解放、資本のくびきからの男女労働者の解放は、抑えようのない力で前進している。この事業は、幾千万、幾億の男女の労働者農民を前進させた。だからこそ、資本のくびきから労働を解放することの事業は、全世界で勝利するであろう。

一九二一年三月四日

一九二一年三月八日に新聞『プラウダ』第五一号付録に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四二巻、三六八―三七〇ページ所収
邦訳全集、第三二巻、一六八―一七〇ページ所収

ロシア共産党（ボ）第一〇回大会(七二)

一九二一年三月八―一六日

一　党の統一についてのロシア共産党第一〇回大会の決議原案

一　本大会は、幾多の事情から国内の小ブルジョア的住民のあいだに動揺が強まっている現在、党の隊列の統一と団結をはかり、党員相互の完全な信頼を固め、さらにプロレタリアートの前衛の意志の統一を実際に具現した真に協力一致した活動を確保することがとくに必要であることに、全党員の注意を喚起する。

二　ところが、党内には、労働組合についての全党的な討論がおこなわれるまえにさえ、分派活動、すなわち、独自の政綱をもち、ある程度まで閉鎖的であろうとし、自己のグループ的な規律をつくりだそうとつとめるいくつかのグループの発生の、若干の徴候が現われた。分派活動のこうした徴候は、たとえば、モスクワのある党会議(七三)（一九二〇年一一月）とハリコフの党会議で、いわゆる「労働者反対派」にも、またいくぶんはいわゆる「民主主義的中央集権派(七四)」にも見うけられた。

すべての自覚した労働者が、どんなものであれ分派は有害であり、許しえないということを、はっきり悟る必要がある。分派は、たとえ個々のグループに属する者がどれほど党の統一を守ろうと望んでいても、実際には協力一致した活動をかならず弱めることになり、政府党内にもぐりこんでいる党の敵が分裂を深め、それを反革命のために利用しようと繰りかえしさかんに努力する結果をもたらす。

およそ厳格に首尾一貫した共産主義的方針からの偏向がすべてプロレタリアートの敵に利用されることは、クロンシタット(七五)の暴動の実例によって、このうえなく明瞭に示された。この暴動の時には、世界のすべての国のブルジョア反革命派や白衛派は、ロシアのプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を倒すことさえできるなら、ソヴェト体制というスローガンをすら受けいれる用意があることを、すぐに明らかにしたし、またエス・エル、および一般にブルジョア反革命派

は、クロンシタットで、ソヴェト権力のためにロシアのソヴェト政府に反対して蜂起するのだというスローガンを利用した。このような事実は、ロシアにおけるプロレタリア革命の城塞を弱め、打ち倒すためなら、白衛派は、共産主義者や最左翼の共産主義者にさえ変装しようとつとめるし、また変装できることを、十分に証明している。クロンシタットの暴動の直前にペトログラードでまかれたメンシェヴィキのビラも同じように、メンシェヴィキが、口さきでは暴動の反対者でソヴェト権力——ただし、いわゆる改善を少々くわえたソヴェト権力——の味方のように見せかけながら、実際には、クロンシタットの暴徒、エス・エルや白衛派をそそのかし支持するために、ロシア共産党内部の意見の相違や分派形成の若干の萌芽を利用したことを示している。

三　この問題についての宣伝は、次のようなものでなければならない。すなわち、一方では、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）が成功するための基本的条件として、党の統一をはかり、プロレタリアートの前衛の意志統一を実現する見地から、分派の害悪と危険をくわしく説明することであり、他方では、ソヴェト権力の敵の最近の戦術上の手口の特徴を説明することである。これらの敵は、公然たる白衛派の旗をかかげた反革命では見込みがないことを悟って、いまや、ロシア共産党内部の意見の相違につけこみ、ソヴェト権力の承認に外見上最も近く見える政治的潮流に権力を引き渡すことによって、なんとか反革命を推しすすめようと、全力をかたむけている。

宣伝はまた、これまでの諸革命の経験を説明しなければならない。それらの革命では、反革命派は、革命的執権（ディクタツーラ）を動揺させてこれを打倒し、こうして反革命派の、資本家と地主のきたるべき完全な勝利に道をひらくために、最左翼の革命党にたいする反対党中でこの革命党に最も近いものを支持したのであった。

四　分派との実践上の闘争では、党の各組織は、どのような分派行動も許さないよう、きわめて厳重に監視することが必要である。党の欠陥の批判は無条件に必要であるが、この批判は次のようになされなければならない。すなわち、すべての実践的な提案は、できるだけ明確なかたちで、あれこれと引きのばすことなく、すぐさま、党の地方および中央の指導機関の審議と決定にかける。そのうえ、およそ批判をおこなう者は、批判の形式については、党が敵の包囲のもとにある状態を考慮にいれなければならず、また批判の内容については、ソヴェトおよび党の活動に自分で直接参加して、党または個々の党員の誤りがどう訂正されるかを実践のなかで確かめなければならない。およそ党の一

般方針の分析、あるいは党の実践上の経験の評価、党の諸決定の実行の点検、誤りを是正する方法の研究、等々は、いかなる場合にも、なんらかの「政綱」その他にもとづいて形成されるいろいろなグループの事前審議に付することなく、もっぱら直接に全党員の審議にかけられなければならない。このために、大会は、『討論報』や特別の論集をいっそう規則的に発行して、批判が問題の本質に即しておこなわれ、プロレタリアートの階級敵を助けるおそれのあるような形式をけっしてとることのないように、たえず努力すべきことを命じる。

五　大会は、サンディカリズムと無政府主義とへの偏向――それの検討には特別の決議[六]があてられている――を原則的に拒否し、またあらゆる分派活動を完全に一掃することを中央委員会に委任する。同時に、たとえば、いわゆる「労働者反対派」がとくに注目した諸問題、すなわち、信頼のおけない非プロレタリア分子の党からの粛清、官僚主義との闘争、民主主義と労働者の自主活動の発展、等々の問題についての実務的な提案は、どんなものであれ最も注意ぶかくこれを研究し、実践活動でそれをためさなければならないと声明する。党員は、われわれが幾多のさまざまな障害に面しているために、これらの問題について必要な方策のすべてを実現してはいないこと、非実務的、分派的な自称批判を容赦なく拒否しながらも、党は、各種の新しいやり方をためしつつ、あらゆる手段を用いて、官僚主義を克服し、民主主義と自主活動を拡大し、党内潜入分子を摘発し暴露し追放する等々のために、うまずたゆまずたたかいつづけるであろうことを、知らなければならない。

六　したがって、大会は、あれこれの政綱にもとづいてつくられたいろいろなグループ（たとえば「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」等々）は、ここに例外なくすべて解散されたことを宣言し、かつそれらをただちに解散すべきことを命じる。この大会決定の不履行は、無条件かつ即座に党からの除名をともなうべきものとする。

七　党内およびソヴェト活動全体に厳格な規律を打ち立て、あらゆる分派活動を排除して、最大限の統一をなしとげるために、大会は、規律に違反したり分派活動を復活または容認する行為があったりした場合には、党からの除名をふくむあらゆる党処罰の措置をとり、中央委員については中央委員候補への格下げ、さらに非常措置として党からの除名をもおこなう全権を、中央委員会にあたえる。中央委員、中央委員候補および統制委員にたいしてそのような非常措置をとるには、中央委員候補および統制委員の全員を参加させた中央委員会総会の開催を条件としなければならない。党の最も責任ある指導者たちのこのような総会が、

三分の二の多数決で、中央委員の中央委員候補への格下げまたは党からの除名を必要と認めた場合には、そのような措置はただちに実行されなければならない。（七七）

一九二三年に雑誌『プロジェクトル』第一一号にはじめて発表
全集、第五版、第四三巻、八九―九二ページ所収
邦訳全集、第三二巻、二五二―二五五ページ所収

二　わが党内のサンディカリズム的および無政府主義的偏向についてのロシア共産党第一〇回大会の決議原案

一　この数ヵ月のあいだに、党の隊列には、サンディカリズム的および無政府主義的な偏向が明瞭に現われた。このことは、思想闘争のために、また党の粛清と健全化のために、断固たる措置をとることを要求している。

二　前記の偏向は、一部は、かつてのメンシェヴィキ、ならびに共産主義的世界観をまだ十分に身につけていない労働者や農民が、党の隊列にはいってきたことによるものであるが、主としては、この偏向は、プロレタリアートおよびロシア共産党にたいする小ブルジョア的要素（スチヒーヤ）〔自然発生性〕（七八）の影響によるものである。わが国ではこの小ブルジョア的要素がきわめて強く、とりわけ、不作と極度に荒廃的な戦争の結果、大衆の状態がはなはだしく悪化し、また何百万という軍隊の復員によって、正規の生計の道をすぐには見つけることのできない何十万何百万の農民と労働者が街頭に投げだされている時期には、この自然発生性が無政府主義への動揺を生みだすことは避けられない。

三　この偏向の、理論的に最も完成された、そして最もはっきりしたかたちをとった現われ（異文――この偏向の、理論的に最も完成された……現われの一つ）は、いわゆる「労働者反対派」のテーゼその他の文書である。このことを十分に示しているのは、たとえば、このグループの次のテーゼである。すなわち、「国民経済の管理を組織することは、産業別労働組合に統合された生産者の全ロシア大会の権限に属する。これらの組合は、共和国の国民経済全体を管理する中央機関を選出する」と。

これや、これに類する無数の言明の基礎にある思想は、理論的に根本からまちがっており、マルクス主義および共産主義とも、すべての半プロレタリア革命および現在のプロレタリア革命の実践的経験の総体とも、完全に絶縁するものである。

第一に、「生産者」という概念は、プロレタリアと、半

プロレタリアや小商品生産者とをひとまとめにしたものであって、したがって、階級闘争の基本的概念から、また諸階級を正確に区別するという基本的要求から、根本的に逸脱するものである。

第二に、党外大衆をあてこんだり、右に引用したテーゼに現われているように、彼らに媚を呈したりすることも、前者におとらず根本的にマルクス主義から逸脱するものである。

マルクス主義の教えるところ――この教えは、プロレタリアートの政党の役割についてのコミンテルン第二回(一九二〇年)大会の決定のなかで、共産主義インタナショナル全体によって正式に確認されているばかりでなく、わが国の革命によって実践的にも確証されている――によれば、労働者階級の政党すなわち共産党だけが、プロレタリアートおよび全勤労大衆の前衛を統合し、教育し、組織することができ、そしてその前衛だけが、勤労大衆の避けられない小ブルジョア的動揺や、プロレタリアートのあいだの同職組合的な偏狭さあるいは同職組合的偏見の不可避的な伝統やその再発を阻止し、プロレタリアート全体の統合された活動全体を指導する能力、すなわち、プロレタリアートを政治的に指導し、またプロレタリアートをつうじて全勤労大衆を指導する能力をもっているのである。これなしには、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)は実現できない。

党外のプロレタリアートにたいする共産党の役割、ついでこの二要因と全勤労大衆との関係で共産党の果たす役割を、まちがって理解することは、理論的に共産主義から根本的に逸脱することであり、サンディカリズムと無政府主義への偏向である。そして、「労働者反対派」のすべての見解をつらぬいているのは、この偏向である。

四　ロシア共産党第一〇回大会は、労働組合の役割を論じているロシア共産党綱領の経済的部分の第五項をよりどころとして自分の誤った見解を擁護しようとする前記のグループやその他の人々の試みも、これまたすべて根本的にまちがっていると考える、と声明する。この条項は、「労働組合は、単一の経済的全体としての全国民経済の管理をあますところなく実際に自分の手に集中するまでにならなければならない」と言い、そして労働組合は、「このようにして中央の国家行政、国民経済および広範な勤労大衆のあいだの不可分な結びつきを保障し」、広範な勤労大衆を「直接の経済運営の仕事に」「引きいれる」、と言っているのである。

ロシア共産党の綱領は、その同じ条項で、労働組合がそうする「までにならなければならない」状態の前提条件は、「労働組合が同職組合的な偏狭さをますます脱却し」、勤労

者の大多数者を、「またしだいにひとりのこらずその全員を」労働組合に包括してゆく過程である、と言っている。

最後に、ロシア共産党の綱領は、この同じ条項で、労働組合が「ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の法律と確立した慣行とにもとづいて、すでに地方および中央のすべての工業管理機関の参加者」になっていることを、強調している。

サンディカリストや無政府主義者は、まさにこの、管理に参加した実地の経験を考慮することをせず、また達成された成功や是正された誤りに厳密におうじてこの経験をさらに発展させることもせずに、経済管理の諸機関を「選出する」「もろもろの〔産業別〕生産者大会ないし単一の〔全ロシア〕生産者大会」というスローガンをあからさまにかかげている。プロレタリアートの労働組合を指導し教育し組織する党の役割も、なかば小市民的およびまったく小ブルジョア的な勤労大衆を指導し教育し組織するこのプロレタリアートの役割も、こうしてまったく回避され、排除されている。そして、ソヴェト権力によってすでに始められた新しい経済諸形態の建設の実際の仕事をつづけ、是正してゆくのではなくて、小ブルジョア的、無政府主義的にこの仕事を破壊するのである。こうした破壊は、ブルジョア的反革命の勝利をもたらすことにしかなりえない。

五　ロシア共産党大会は、前記のグループやそれに類似したグループや人々の見解には、理論上の誤りや、ソヴェト権力によって始められた経済建設の実地の経験にたいする根本的にまちがった態度のほかに、なお非常に大きい政治的な誤りと、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の在立そのものをおびやかす直接の政治的危険がふくまれていることを認める。

ロシアのような国では、小ブルジョア的要素の非常な優勢と、戦争の結果避けられない零落や貧困化や疫病や不作や、さらに欠乏と人民の災厄の極度の激化とが、小ブルジョア的および半プロレタリア的な大衆の気分のなかに、とくに激しい動揺の現われを生みだす。この動揺は、ときにはこれらの大衆とプロレタリアートとの同盟を強める方向にゆれ、ときにはブルジョア的復古の方向にゆれる。そして一八世紀、一九世紀および二〇世紀のすべての革命の全経験が完全に明瞭に、また説得的に示しているように、こうした動揺の結果は、――プロレタリアートの革命的前衛の統一や力や影響がすこしでも弱まる場合には――資本家と地主の権力と所有の復活でしかありえないのである。

したがって、「労働者反対派」やそれに類する分子の見解は、理論上正しくないばかりでなく、実践的にも、小ブルジョア的および無政府主義的なぐらつきの現われであっ

て、共産党の首尾一貫した指導方針を実践的に弱め、プロレタリア革命の階級敵を実践的に助けるものである。
六　以上の理由によって、ロシア共産党大会は、サンディカリズム的および無政府主義的偏向の現われである前記の思想を断固として拒否し、
第一に、これらの思想とのたゆみない、系統的な思想闘争が必要であると認める。
第二に、大会は、これらの思想の宣伝はロシア共産党に所属することとあいいれないものと認める。
大会は、党中央委員会に、大会のこれらの決定をきわめて厳格に実行することを委任するとともに、特別の出版物、論集、等々に、前記のすべての問題について党員諸君がきわめて詳細にわたって意見を交換するための場所を設けることができるし、また設けなければならない、と指示する。

一九二三年に全集（初版）、第一八巻第一部にはじめて発表
全集、第五版、第四三巻、九三—九七ページ所収
邦訳全集、第三二巻、二五六—二六〇ページ所収

三　党の統一とアナルコ—サンディカリズム的偏向とについての報告

三月一六日

同志諸君、この問題について多くを論じる必要はないと思われる。というのは、いま党大会の名で、すなわち全党の名で公式の言明をおこなわなければならない主題には、すでにこの大会全体がすべての問題に関連してふれてきたからである。『統一について』の決議案についていえば、この決議案のかなりの部分は、政治情勢の特徴づけを内容としている。もちろん、諸君はみな、お手もとにくばったこの決議案の印刷したテキストを読まれたであろう。非常措置——中央委員、同候補、中央統制委員の全員を参加させた会議で三分の二の多数の賛成がえられることを条件として、中央委員を中央委員会から除名する権限——をとりいれた第七項は、公表を予定したものではない。すべての色合いの代表たちが発言した特別会議で、この措置は幾度も討議された。同志諸君、この条項を適用する必要は起こらないものと思う。だが、いまわれわれが、かなり急激な転換をまえにして、内部の疎隔の状態を跡かたもないようになくしたいと望んでいる新しい情勢のもとでは、この条

項は必要である。

サンディカリズム的および無政府主義的偏向についての決議案に移ろう。ここでわれわれが取り扱っているのは、大会日程の第四項でふれられている問題である。決議案全体の眼目は、若干の潮流または思想上の偏向にたいするわれわれの態度をきめることにある。われわれが「偏向」と言っているのは、ここでは、最後的にはっきりした形をとったもの、絶対的なもの、完全に確定的なものはまだなにも見られず、党として評価をあたえずにおくわけにはいかない政治的傾向の端緒が見られるだけであることを、それによって強調するためである。たぶん諸君の全員のお手もとにあると思われるサンディカリズム的および無政府主義的偏向についての決議案の第三項には、明らかに、誤植がある（いろいろな発言からわかるように、この誤植にはお気づきのようであるが）。正しくは、こうなければならないのである。「……示しているのは、たとえば、このグループ」――つまり「労働者反対派」――「の次のテーゼである。すなわち、『国民経済の管理を組織することは、産業別労働組合に統合された生産者の全ロシア大会の権限に属する。これらの組合は、共和国の国民経済全体を管理する中央機関を選出する』(五九)と。」われわれはこの大会で、特別会議でも、また大会の公開の本会議でも、すでに何度もこの条項について述べた。エンゲルスに生産者の協同団体について論じた箇所(六〇)があることをよりどころとしてこの条項を擁護することは、けっしてできないということは、われわれがすでに明らかにしたところだと思われる。なぜなら、エンゲルスが述べているのは階級のない共産主義社会についてであることは、まったく明瞭であって、問題の箇所を厳密に参照してみればわかることだからである。これは、われわれのだれにとっても争う余地のないことである。社会に階級がなくなれば、社会には働き手である生産者しか残らないであろうし、労働者も農民もなくなるであろう。またわれわれは、マルクスとエンゲルスのすべての著作からして、階級がまだある時期と階級がもうなくなった時期とを、彼らが峻別していることを、よく知っている。マルクスとエンゲルスは、共産主義になる以前に階級が消滅するというような考えや言説や仮定を、容赦なく嘲笑して、共産主義だけが階級を廃絶する、と言ったのである。

われわれは、この階級の廃絶という問題をわれわれが最初に実践的に提起し、そして農民国に現在労働者階級と農民という二つの基本的な階級が残っているという状態に到達した。しかし、この二つの階級とならんで、資本主義の残存物と遺物の多くのグループが存在する。

わが党の綱領は、われわれが第一歩をすすめつつあるこ

と、まだ多くの過渡段階があるであろうことを、明確に述べている。だが、当面の場合に反対派があたえているような理論的規定をあたえるのは正しくないことを、われわれは、われわれのソヴェト活動の実践と革命の全歴史とをつうじて、たえずまざまざと見てきた。わが国には階級が残っており、今後まだ長いあいだ残るであろうこと、農民人口が優勢な国では、階級はかならず長期にわたって、長年のあいだ残るであろうことを、われわれはよく知っている。大工業が農業を自分に従属させるだけの資材をつくりだせるまでに、この大工業を整備するのに必要な最小限の期間は、一〇年と計算されている。これは、前例のないほど有利な技術的条件がある場合に、最小限必要な期間である。ところが、われわれが前例のないほど不利な条件のもとにあることを、われわれは知っている。われわれは、近代的大工業にもとづいてロシアを建設する計画をもっている。これは、科学者によって作成された電化計画である。この計画では、いくぶんでも正常に近い条件を基礎として前提した場合に、一〇年を最小限の期限とさだめている。だが、そういう条件が存在しないことは、われわれはよく知っている。つまり、一〇年はわれわれにとってこのうえなく短い期間だということになる。これは、わざわざ言うまでもないことである。ここで、われわれは問題の核心にたどりつく。プロレタリアートに敵意をもつ諸階級がまだ残っているような状態がありうるのだ。だから、われわれは、エンゲルスが語っているものを、いますぐ実際につくりだすことはできない。まずプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）がやってきて、そのあとで無階級社会がくるであろう。

マルクスとエンゲルスは、階級の差異を忘れて生産者や、人民や、勤労者一般を論じる人々と、仮借なくたたかった。マルクスとエンゲルスの諸著作をいくぶんでも知っている者は、生産者や、人民や、勤労者一般を論じる人々への嘲笑がそれらの著作のすべてをつらぬいていることを、忘れることはできない。勤労者一般とか、働く者一般とかは存在しないのであって、存在するのは、生産手段を所有し、その心理全体、生活習慣全体が資本主義的で、それ以外ではありえない小経営主か、それとも、まったくちがった心理をもつ賃金労働者、資本家と敵対し、対立し、それとたたかっている賃金労働者かである。

われわれが、三年にわたる闘争を経て、プロレタリアートの政治権力を行使する面で経験をつんだあとで、諸階級の相互関係にどんなに大きな困難があるかを知っているときに、階級がまだ残っており、わが国の生活のあらゆる裂け目に、ソヴェト諸機関の内部に、ブルジョアジーの残存分子がまだ見られるときに、この問題を取りあげたのだと

すれば、こういう条件のもとで、いま読みあげたような命題をふくむ政綱がわれわれのあいだに生まれたことは、明らかな、明瞭なサンディカリズム的＝無政府主義的偏向を示すものである。これは法外なことばではなく、よく考えぬかれたことばである。偏向はまだ完成された潮流ではない。偏向は、訂正することのできるものである。いくらか道を迷ったか、あるいは迷いかけているのだが、まだ是正することができるのである。私の見るところでは、これが、「偏向」というロシア語のあらわす意味である。それは、ここにはまだ決定的なものはなにもなく、事柄は容易に訂正できるのだということを、強調している。このことばは、警告を発し、問題を完全なかたちで、原則的に提起しようとする願望を示している。もしだれかが、この考えをもっと十分に言いあらわすロシア語を見つけるというなら、どうかそうしてくれたまえ。われわれは、ことばのことで争いを始めたりはしないだろうと、私は信じている。「労働者」反対派が非常にたくさんにもちあわせているこれと同様な多くの思想のあとを追いまわさずにすむように、われわれは、基本的なテーゼとして、このテーゼを、その本質について検討してみよう。そうした多くの思想を検討することは、われわれの文筆家と、さらにこの潮流の指導者たちとにまかせよう。というのは、決議案の終りでわれわれは、特別の出版物や論集に、前記のすべての問題について党員諸君がもっと詳細にわたって意見を交換するための場所を設けることができるし、また設けなければならないと、わざわざことわっているからである。いまわれわれには、この問題を引きのばす余裕はない。われわれは、非常な困難のなかでたたかっている党である。われわれは自分にこう言わなければならない。統一をしっかりとしたものにするには、明確な偏向は断罪されなければならない、と。偏向が現われた以上は、それを摘発し、非難することが必要である。だが、くわしい討論が必要だというなら、どうぞご自由に。われわれのあいだには、すべての文献をくわしく引用してくれる人々が見つかるだろうし、また、もし必要であり適当であるなら、われわれはこの問題を国際的な規模でも提起しよう。なぜなら、諸君はいまコミンテルン代表者の報告を聞いたところであるが、革命的国際労働運動の隊列内にある種の左翼主義的偏向があることを、諸君はみな知っているからである。われわれがいま問題にしている偏向は、ドイツ共産主義労働者党[二]内の無政府主義的偏向と同じものである。この党にたいする闘争は、コミンテルンのこのまえの大会で明瞭に現われた。同大会でこの偏向を評価するのにつかわれたことばは、しばしば「偏向」ということばよりもきついものであった。これでおわかり

のように、これは国際的な問題である。だから、もうこれ以上討論するな、もう打ち切ろう、という意味でこれをかたづけることは、正しくないであろう。だが、理論的討論と、党の政治方針、政治闘争とは、別の問題である。われわれは討論クラブではない。われわれは、論集や特別の出版物を発行することはもちろんできるし、また発行もするであろうが、しかし、われわれは、なによりもまず、きわめて困難な条件のもとでたたかわなければならないのであって、したがって一つに団結しなければならない。もしこういうときに、「生産者の全ロシア大会」を組織せよ、というような提案が、政治討論のなかに、政治闘争のなかに割りこんでくるようなら、われわれは協力一致し、結束してすすむことができない。これは、われわれが今後数年について自分で規定した政策ではない。これは、党の協力一致の活動をぶちこわす政策であって、この政策は、理論的にまちがっているというにとどまらない。この政策がまちがっているのは、それが諸階級の関係——これは、根本的な、基本的な問題であって、それなしにはマルクス主義もなく、これについてはコミンテルン第二回大会が決議を採択している(三)——をまちがって規定しているからである。ロシアの現在の経済情勢のもとでは避けられない小ブルジョア的な動揺に、無党派的な要素(スチヒーヤ)が屈服しているのが、現在の情勢である。内部の危険は、ある点ではデニーキンやユデーニチの危険よりも大きいことを、われわれは記憶にとどめなければならない。そして、形式上の団結だけでなく、はるかに根ぶかい団結を発揮しなければならない。だが、そういう団結をつくりだすためには、われわれはこういう決議なしにはやっていけないのである。

つぎに、私は、決議案の第四項は非常に重要であると考えている。この条項は、われわれの綱領の解釈、正式の解釈、すなわち起草者による解釈をあたえている。大会がこの綱領の起草者であり、したがって、大会がその解釈をあたえて、動揺を終わらせ、ときとしてわが党の綱領をたねになされているトリックを、終わらせなければならないのである。つまり、綱領が労働組合について言っていることは、だれかがそう解したがっているとおりのものだ、といったトリックである。諸君は、同志リャザーノフがこの演壇からこの綱領に批判をくわえるのを聞かれた——この批判者が、理論的探求をやってくれたことに感謝しよう！諸君は、同志シリャプニコフが批判をくわえるのを聞かれた。これにふれずにすますわけにはいかない。この決議案には、われわれがいままさに必要としていることが言われていると、私には思われる。党の最高の機関であり、綱領を承認する大会の名において、われわれはこの綱領をまさ

にこういうふうに理解すると、言わなければならない。繰りかえしていうが、理論的論争はこれで打ち切られるのではない。綱領改正の提案を出すことはできる。これを禁止しようと提案した者はいない。この綱領はどこといって変えるところのないすばらしいものだとは、われわれは考えていない。だが、いまのところ正式の提案が出されていないから、われわれはこの問題の検討に時間をさかなかったのである。この綱領を注意ぶかく読むと、われわれはそこに次のような表現を見いだす。「労働組合は、……実際に……集中するまでにならなければならない。」「実際に集中するまでにならなければならない」――このことばを強調しなければならない。また、そのまえのほうにはこう書かれている。「労働組合は、法律にもとづいて、地方および中央のすべての生産管理機関の参加者になっている」と。資本主義的生産の場合には、世界のすべての先進国の援助のもとにこれを建設するのに数十年を要したことを、われわれは知っている。労働者が少数者でしかない国、へとへとに疲れはて血を流しているプロレタリア前衛と、大多数をなす農民とがいる国で、このうえなく困窮し窮乏している時期に、われわれがこんなにも速やかにこの過程を終わることができるなどと考えるとは、まったく子どもっぽいことではなかろうか?! われわれはまだ基本の土台石さえすえておらず、この生産管理を労働組合の参加のもとでどうおこなうかを、経験にもとづいてやっときめはじめたばかりである。われわれは、主要な障害が窮乏であることを知っている。われわれが大衆を引きいれようとしていないというのはまちがいである。それどころか、労働者大衆のうちで、いくぶんでもめだった才能、すこしでもすぐれた能力をもっている者はだれでも、われわれから最も真剣な援助をうけている。必要なことはただ、事態がいささかでも緩和することなのである。われわれに必要なのは、すくなくとも一、二年間飢えが緩和されることである。歴史の観点からみれば、これはわずかな期間であるが、われわれの現状ではたいへんな期間である。一、二年間飢えが緩和され、工場をうごかせるように一、二年間燃料が規則的に供給されれば、われわれは労働者階級からいまの百倍もの援助をうけるようになり、彼らのなかから、現在われわれがもっているよりはるかに多くの人材が輩出するであろう。このことについては、だれも疑わないし、また疑うこともできない。いまわれわれがこの援助をうけていないのは、われわれがそれを望まないからではない。われわれはみな、それをうけるためにできるだけの努力をしている。政府、労働組合、党中央委員会が、たった一つでもそのための機会をのがしたと、指摘できる者はだれもいないであろう。

だが、われわれは、困窮が絶体絶命のものであること、いたるところに飢えと貧困があり、それがしばしば消極的態度を生んでいることを、知っている。弊害や困苦をあからさまにそうよぶのを、恐れないようにしよう。これらのものこそ、大衆のエネルギーにブレーキをかけているのである。工場管理部が六〇％まで労働者からなっていることを、われわれが統計によって知っているという事情のもとで、「労働組合は実際に集中するまでにならなければならない」うんぬんという綱領のことばを、シリャプニコフ式に解釈しようと試みることは、絶対に許されない。

綱領の正式の解釈は、われわれが必要な戦術上の結束および統一と必要な討論の自由とを結合することを可能にするであろう。このことも、決議案の終りに強調されている。決議案の趣旨は、結局、どういうものか？　第六項を読んでみよう。

「以上の理由によって、ロシア共産党大会は、サンディカリズム的および無政府主義的偏向の現われである前記の思想を断固として拒否し、第一に、これらの思想とのたゆみない、系統的な思想闘争が必要であると認める。第二に、大会は、これらの思想の宣伝はロシア共産党に所属することとあいいれないものと認める。第三に、これらの思想の宣伝はロシア共産党に所属することとあいいれないものと認める。

大会は、党中央委員会に、大会のこれらの決定をきわめて厳格に実行することを委任するとともに、特別の出版物、論集、等々に、前記のすべての問題について党員諸君がきわめて詳細にわたって意見を交換するための場所を設けることができるし、また設けなければならない、と指示する。」

諸君には——諸君はみな、なんらかのかたちの扇動家、宣伝家である——、たたかう政党の内部での思想の宣伝と、特別の小冊子や論集のなかでの意見の交換との区別がわからないだろうか？　私は、この決議案を理解しようと望む者にならだれにでも、この区別がわかるであろうと、確信している。そして、われわれは、この偏向の代表者を中央委員会に受けいれるのであるが、これらの代表者が中央委員会内で、党大会の決定にたいして、あらゆる自覚した規律ある党員と同じ態度をとるものと、われわれは信じている。またわれわれは、特別の事態をつくりださないでも、彼らの援助によって中央委員会内でこの区別をつけることができるだろうと信じている。党内にいまおこなわれているものはなんなのか——たたかう政党の内部での思想の宣伝なのか、それとも、特別の出版物や論集での意見の交換なのか、それをわれわれは検討しよう。エンゲルスからの

引用をこまごまと調べることに興味をもっている者は、どうぞそうしてくれたまえ！　理論家はいろいろいるし、彼らは、つねに党に有益な忠言をあたえてくれるであろう。これは必要なことである。われわれは大きな論集を二、三冊出版しよう。これは有益で、絶対に必要なことである。だが、これが思想の宣伝らしく、政綱の闘争らしく見えるであろうか？　これらを混同することができようか？　われわれの政治情勢を理解しようと望む者なら、だれひとりこれを混同しはしないであろう。

われわれの政治活動にブレーキをかけてはならない。困難な時期にはとくにそうである。だが、科学的探求は捨てないように。一例をあげれば、もし同志シリャプニコフが、まだ非合法状態にあった時代の彼の革命闘争の経験をまとめて最近出版した本につけくわえて、これから数ヵ月間の余暇に、「生産者」の概念を分析した第二巻を出すというなら、どうぞご自由に！　だが、この決議は、われわれにとって道しるべとなるであろう。われわれは最も広範な、最も自由な討論を開始した。「労働者反対派」の政綱は、党中央機関紙の紙上で二五万部も印刷された。われわれは、この政綱をすべての面から、あらゆる仕方で評価した。われわれはこの政綱をもとにして選挙をおこない、最後に、われわれは大会に集まった。そして、大会は政治的討論を総括して、次のように言う。偏向がはっきりと現われた。隠れん坊遊びをするのはやめよう。偏向は偏向であり、それは訂正されなければならないと、率直に言おう。それを訂正しよう。そして、討論は、理論的討論としておこなおう、と。

以上の理由で、私は、この二つの決議案をともに採択して、党の統一を強化し、党の集会はなにをたずさわるべきであるか、そしてあれこれの理論問題を研究することで党を援助しようと望む個人、マルクス主義者、共産主義者は、余暇になにに自由にたずさわるべきかを、正しく規定するようにという提案を繰りかえしておこない、また支持するのである。（拍手）

『プラウダ』第六八号、一九二一年三月三〇日
全集、第五版、第四三巻、九八―一〇六ページ所収
邦訳全集、第三二巻、二六一―二六九ページ所収

食糧税について

（新政策の意義とその諸条件）[注]

はしがきに代えて

食糧税の問題は、現在、とくに多くの注意と論議と論争とを呼びおこしている。それはまったく当然である。というのは、それは、いまの諸条件のもとでは、実際に、主要な政治問題の一つだからである。

論議は、すこしごたごたしたものになっている。きわめてはっきりした理由によって、われわれ全部がこの誤りをおかしている。それだけに、「焦眉の」側面からではなく、一般原則的な側面からこの問題を取り扱ってみる試みは、いっそう有益であろう。言いかえれば、われわれが今日の政策の一定の実践上の諸方策のひな型を素描しているその画面の、一般的、根本的な背景を一瞥しようというのである。

このような試みをするために、私は、『今日の主要な任務——「左翼的」幼稚さと小ブルジョア性について』[注]という私の小冊子から、長い引用をさせていただこう。この小冊子は、一九一八年にペトログラード労農兵代表ソヴェトの出版所から発行されたものであり、第一には、ブレスト講和にかんする一九一八年三月一一日付の新聞論説を、第二には、一九一八年五月五日付の当時の左翼共産主義者のグループとの論争をふくんでいる。この論争は、今日では必要ではない。だから、それははぶくことにする。そして「国家資本主義」と、資本主義から社会主義への過渡にあるわれわれの現在の経済の基本的な諸要素とについての考察に属する箇所だけを、残しておくことにする。

次にかかげるものが、当時私の書いたことである。

ロシアの現在の経済について
（一九一八年の小冊子から）

「……国家資本主義はわがソヴェト共和国の現状に比すれば一歩前進であろう。かりに半年後にわが国に国家資本主義が打ち立てられるなら、それはたいへんな成功だろう

し、一年後にはわが国に社会主義が最終的に確立され、不敗のものとなることを最も確実に保障するものであろう。

だれかが、この私のことばを聞いてどれほど高尚な怒りにみちてとびのくか……、私には想像できる。なんだって？ ソヴェト社会主義共和国で国家資本主義への移行が一歩前進だって？……これは社会主義にたいする裏切りじゃないか？

まさにこの点をややくわしく論じる必要がある。

第一に、社会主義ソヴェト共和国と名のる権利と根拠をわれわれにあたえている資本主義から社会主義への過渡とは、いったいどんなものかを、検討しなければならない。

第二に、わが国における社会主義の主要な敵である小ブルジョア的な経済的諸条件と小ブルジョア的要素〔自然発生性〕とを見ない人々の誤りをあばきださなければならない。

第三に、経済的にブルジョア国家と違ったものとしてのソヴェト国家の意味を、よく理解しなければならない。

この三つの事情をそれぞれ調べてみよう。

ロシア経済の問題と取り組んだ人で、ロシア経済の過渡的性格を否定した者はまだないようである。『社会主義ソヴェト共和国』という表現は社会主義への移行を実現しようとするソヴェト権力の決意を意味するのであって、いまの経済秩序を社会主義的だと認めたわけではけっしてないということを、否定した共産主義者もいないようである。

ところで、過渡ということばはなにを意味するのか？

それは、経済について用いた場合、現在の体制のなかには資本主義の要素、小部分、小片もあれば、社会主義の要素、小部分、小片もある、ということを意味しないだろうか？ それはそのとおりだ、とだれしも認めるだろう。しかし、それを認めていても、現にロシアに存在するさまざまな社会経済制度（ウクラード）の諸要素はいったいどんなものかということについて、だれもが思索をめぐらしているわけではない。だが、およそ問題の核心はここにあるのだ。

それらの要素を列挙してみよう。

（一）家父長制的な、すなわち多分に現物経済的な農民経済。

（二）小商品生産（穀物を売る農民の多数者がこれにはいる）。

（三）私経営的資本主義。

（四）国家資本主義。

（五）社会主義。

ロシアは非常に広大で、多様性に富んでいるだけに、社会経済制度のこれらの相異なる型のすべてが国内でたがいに絡みあっている。事態の特異性はまさにここにある。

では、どの要素が優勢か？　わかりきったことで、小農民的な国では小ブルジョア的要素が優勢であり、またそうならざるをえない。農耕者の多数者、しかも大多数者は、小商品生産者である。わが国では国家資本主義の外被（穀物の専売制、統制下にある企業家と商人、ブルジョア的協同組合員）を、あちこちで投機者が突き破っており、投機の主たる対象になっているのは穀物である。

主たる闘争は、まさにこの分野で展開されている。『国家資本主義』というような経済的カテゴリーを示す用語を用いて言えば、この闘争はだれとだれのあいだでおこなわれているのか？　さきに列挙した順序の（四）と（五）のあいだでか？　もちろん、そうではない。ここで社会主義とたたかっているのは国家資本主義ではなく、小ブルジョアジー・プラス私経営的資本主義がいっしょに、一つに組んで、国家資本主義とも社会主義ともたたかっているのである。小ブルジョアジーは、国家資本主義的なものであろうと、国家社会主義的なものであろうと、ともかくあらゆる国家的な介入、記録、統制にたいして反抗する。これは、まったく争いがたい現実の事実であって、この点を理解しないところに幾多の経済上の誤りの根源がある。投機者、暴利商人、専売制の破壊者――これがわれわれの主たる『内』敵、ソヴェト権力の経済施策の敵である。一二五年前、最も熱烈で最も純真な革命家であったフランスの小ブルジョアが、個々の、少数の『選ばれた者』を処刑し、激烈な熱弁をふるうことで投機者に打ち勝とうとしたのはまだ許せたが、いま左派エス・エルなどという連中が純然たる口舌の徒としてこの問題にのぞんでいるのにたいしては、自覚した革命家ならだれしも嫌悪か反感をもよおすだけである。投機の経済的基礎が、ルーシ〔ロシアの古名〕の地で異例に幅広い層をなしている小所有者層と、小ブルジョアの一人びとりをその手先としている私経営的資本主義であることを[注]、われわれはよく知っている。この小ブルジョア的ヒュドラの幾百万の触手がここかしこで個々の労働者層をとらえていること、国家独占でなしに投機が、わが国の社会経済生活のあらゆる気孔に食いこんでいることを、われわれは知っている。

この点を見ない者は、その見る目をもたないところに、彼らが小ブルジョア的偏見のとりこになっていることをさらけだしているのである。……

小ブルジョアは、戦時中に『正当な手段で』、またとくに不正手段を用いてためこんだ、何千ルーブリかの小金の貯えをもっている。これが、投機と私経営的資本主義の基礎として技術的な経済的型である。貨幣は、社会的な富を手にいれるための証書であって、幾百万の小所有者層は、

この証書をしっかりにぎって、『国家』の目からそれを隠しており、どんな社会主義も共産主義も信用せず、プロレタリアの嵐が吹きやむのを『じっと待っている』のである。われわれがこの小ブルジョアをわれわれの統制と記録に服させるか（貧民すなわち住民の多数者あるいは半プロレタリアを、自覚したプロレタリア前衛のまわりに組織化するなら、われわれはそれをやりとげることができる）、それとも、まさにこの小所有者層を基礎として生まれてくるナポレオンやカヴェニャクの徒が革命を打ち倒したように、小ブルジョアが必然的、不可避的にわれわれの労働者権力を打ち倒すか、どちらかである。問題はこんなふうに立てられているのだ。問題はこうでしかない。……

何千ループリかをためこんでいる小ブルジョアは国家資本主義の敵であり、彼はこの何千ループリを、貧民の利益に反し、いっさいの全国家的統制にさからって、ぜひ自分のために運用しようと思っているのだが、この何千ループリかの集まったものが、われわれの社会主義建設をぶちこわす何百億ループリという投機の土台をなしているのである。かりに、一定数の労働者が何日かかかって一〇〇〇という数字であらわすことのできる価値額をつくりだしているとしよう。さらに、小投機やあらゆるたぐいの着服の結果、また小所有者がソヴェトの布告やソヴェトの命令をくぐりぬける結果、この額のうち二〇〇がわれわれの手から失われていると仮定しよう。自覚した労働者ならだれでもこう言うだろう。もし一〇〇〇のうち三〇〇を出して、それで秩序と組織がよくなるものなら、二〇〇どころか三〇〇でもよろこんで出そう。なぜなら、秩序と組織がきちんとしたものになり、小所有者があらゆる国家独占をぶちこわすのが最終的に粉砕されるなら、ソヴェト権力のもとでこの『貢物』をあとでたとえば一〇〇に減らし、五〇に減らすことは、いともたやすい仕事だろうから、と。

この数字の例は、記述をわかりやすくするためにわざと思いきり単純化してあるのだが、この簡単な数字の例によっても、国家資本主義と社会主義との現状での相互関係が明らかになる。国家の権力は労働者の手中にある。労働者は、一〇〇〇全部を『取る』完全な法的可能性をもっている。つまり、社会主義的な用途のためでなければ、一カペイカも出さないでいい。権力が実際に労働者の手に渡ったことに基礎をおくこの法的可能性は、社会主義の一要素である。だが、小所有者的要素と私経営的資本主義的要素は、いろんな道すじによってこの法状態を破壊し、投機をもちこみ、ソヴェトの布告の実施を阻害している。かりに（私は、明確に示すために、わざとああいう数字の例をあげたのだが）われわれがいまよりもっと多く支払うとしても、

国家資本主義は巨大な一歩前進であろう。というのは、『授業料』を払うだけの値うちがあるからであり、それは労働者のためになるからであり、無秩序、荒廃、放埒を克服することがなによりも重要だからであり、小所有者的無政府性の存続は、(もしわれわれがそれを克服しなければ)無条件にわれわれを滅ぼす最大の、最も恐るべき危険であるが、国家資本主義にもっと多くの貢物を払っても、それはわれわれを滅ぼさないどころか、最も確実な道をとおってわれわれを社会主義へとみちびいてくれるだろうからである。労働者階級が、小所有者的無政府性に抗してどのようにして国家秩序を守りぬくべきか、国家資本主義の基礎のうえにどのようにして大規模な、全国家的な生産組織をととのえるかを習得したならば、そのとき彼らは、——こんな言い方をして恐縮だが——全部の切り札を手にすることになり、社会主義の確立が保障されるだろう。

国家資本主義は、わが国の現在の経済にくらべて比較にならぬほど経済的に高度なものである。これが第一。

第二に、国家資本主義には、ソヴェト権力にとって恐ろしいものはなにもふくまれていない。ソヴェト国家は労働者と貧民の権力が保障されている国家だからである。……

***

問題をもっとはっきりさせるために、まず国家資本主義の最も具体的な例をあげよう。その例がどんなものだか、だれでも知っている。それはドイツである。そこには、ユンカー的=ブルジョア的帝国主義に支配された現代の大規模資本主義的技術と計画的組織化との『最新の達成』がある。傍点を付したことばをとりのぞいて、軍事的、ユンカー的、ブルジョア的、帝国主義的な国家というところを、同じく国家ではあるが、違った社会的型の国家、違った階級的内容をもつ国家であるソヴェト国家すなわちプロレタリア国家と言いかえれば、社会主義を成立させる条件の全部がそろうことになる。

最新科学の最新の達成のうえにきずかれた大規模資本主義的技術がなく、幾千万という人々に生産物の生産と分配の単一の基準をきわめて厳格に守らせる計画的な国家的組織がなければ、社会主義は考えられない。そのことを、われわれマルクス主義者はいつも言ってきたし、こんなことさえわかっていない人々(無政府主義者と左派エス・エルの過半数)とは、話し合いに寸秒の時をついやす値うちもない。

それとともに、国家におけるプロレタリアートの支配権なしには、社会主義は考えられない。これまたイロハである。そして歴史は(歴史が、なめらかに、平穏に、やすや

すと、簡単に『十全な』社会主義をあたえてくれるだろうと期待したのは、おそらく第一級の鈍物たるメンシェヴィキ以外にはだれもいない）、独特なすすみ方をして、一九一八年にはすでに、国際帝国主義という一つの殻にはいった将来の二羽のひよっこさながらに、社会主義を二つに分けた両半分を、すぐ隣りあわせに生みだした。ドイツとロシアは、一九一八年には、前者は社会主義の経済的、生産的、社会経済的条件の、後者はその政治的条件の、最も明瞭な物的実現をあらわしていた。

ドイツのプロレタリア革命が勝利すれば、たちどころに、きわめて容易に、いっさいの帝国主義の殻をぶちやぶるだろう（残念ながら、この殻は最良質の鋼でできているために、どんなひよっこの努力をもってしても破れない）し、きっとなんの困難もなく、あるいはごくわずかな困難にあうだけで、世界社会主義の勝利を実現することであろう——もちろん、この『困難さ』の尺度には、俗物仲間の尺度ではなく、世界史的な尺度をとっての話だが。

ドイツで革命がまだ『うぶ声をあげる』のに手間どるならば、われわれの任務は、ドイツ人の国家資本主義を学ぶことであり、全力をあげてそれを摂取することである。そして野蛮なルーシへの西欧文物の摂取を速めるためには、執権者的なやり方をとるのをはばかってはならず、野蛮とたたかうのに野蛮な闘争手段の使用をためらってはならない。無政府主義者や左派エス・エルのなかには（私は、中央執行委員会でのカレーリンやゲーの演説をふと思いだしたのだが）、ドイツ帝国主義から『学ぶ』などとはわれわれ革命家にふさわしくないといった、カレーリン式の議論をやりかねない連中がいるが、一つだけ言っておかねばならない。そういう連中の言うことを真にうけるような革命は、たよりなく滅びるだろう（それもまったく身から出たさびだ）、と。

ロシアでは、いままさに小ブルジョア的資本主義が幅をきかしており、そこからは、大規模国家資本主義へゆくにも社会主義へゆくにも、同じ一つの道を通り、同じ一つの中間駅、いわゆる『生産物の生産と分配にたいする全人民的な記録と統制』を経由する道を通るのである。この点を理解しない者は、許しがたい経済上の誤りをおかすものであって、それは、現実の事実を知らず、現にあるものが見えず、真実を直視することができないためか、それとも、『資本主義』と『社会主義』とを抽象的に対置するだけで、いまわが国でこの移行がおこなわれている具体的な諸形態と諸段階を深くきわめようとしないためか、どちらかである。

ついでに言っておくと、これは、『ノーヴァヤ・ジーズ

ニ』や『フペリョード』[六]の陣営に属する人々のうちいちばんましな連中をさえ混迷におとしいれたのとまったく同じ理論的な誤りである。彼らのうちでもいちばん程度の低い連中や中くらいの連中は、頭がにぶく無定見なために、ブルジョアジーにおどしつけられて、ブルジョアジーの尻にくっついている。いちばんましな連中にしても、社会主義の教師たちが資本主義から社会主義への過渡のまる一時期について語ったのは、漫然と語ったわけではなく、また彼らが新しい社会の『長い生みの苦しみ』[七]を強調したのは、ゆえあってのことだということが、わかっていない。なおまた、この新しい社会というのもこれまた抽象であって、なんらかの社会主義国家をつくりだそうとする、さまざまな、不完全な、具体的試行をいくつも積みかさねたうえでなければ、この抽象が実際に具現されることはありえないのである。

国家資本主義にも社会主義にも共通するもの（全人民的な記録と統制）を経由するのでなければ、ロシアの現在の経済状態からさきにすすむわけにいかないだけに、『国家資本主義の方向への進化』ということでひとをおどかし、自分もおびえるのは、理論的にまったくの愚行である。それはまさに、思考を『進化』の現実の道からわき『方向へ』そらすことであり、この道を理解しないことである。そして、実践のうえでは、それは小所有者的資本主義へ引きもどすのと同じことである。

私が国家資本主義に『高い』評価をあたえるのは、けっしていまに限ったことではなく、ボリシェヴィキが権力をにぎるまえにもそうであったことを読者にのみこんでもらうために、一九一七年九月に書いた私の小冊子『さしせまる破局、それとどうたたかうか』から次の文章を引用しておきたい。

『……試みに、ユンカー＝資本家国家のかわりに、地主＝資本家国家のかわりに、革命的民主主義国家、すなわちあらゆる特権を革命的に破壊する国家、最も完全な民主主義を革命的に実現することを恐れない国家をもってきたまえ。そうすれば、ほんとうに革命的民主主義的な国家のもとでは、国家独占資本主義は、不可避的に、必然的に、社会主義への一歩、いな数歩を意味することがわかるだろう。

……なぜなら、社会主義は、国家資本主義的独占からさらに一歩をすすめたものにほかならないからである。

……国家独占資本主義は、社会主義のきわめて完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義とよばれる一段とのあいだにはどんな中間の段もないような歴史の階段の一段である。』（二七および二八ページ）[八]

注意されたいのは、これはケーレンスキーの時代に書い

たもので、ここで論じているのはプロレタリアートの執権のことでもなければ、社会主義国家のことでもなく、『革命的民主主義的な』国家のことだという点である。われわれがこの政治的一段をさらに高いところにのぼってゆけばゆくほど、ソヴェトのように社会主義とプロレタリアートの執権とをより完全に具現してゆけばゆくほど、われわれは『国家資本主義』を恐れなくてもよいようになることは、明らかではあるまいか？　物質的、経済的、生産的な意味では、われわれはまだ社会主義の『入口』にさえいないことは、明らかではあるまいか？　また、われわれがまだ到達していないこの『入口』を通らないでは、社会主義の扉の内側にはいれないことも、明らかではあるまいか？

＊＊＊

さらに、次の事情も、きわめて教訓に富んでいる。

われわれが中央執行委員会で同志ブハーリンと論争したとき、彼はなかでも次のような意見を述べた。専門家に高い給与をあたえる問題では『われわれ』（われわれとは、明らかに『左翼共産主義者』のこと）は『レーニンよりも右だ』、なぜなら、一定の条件のもとでは『この一味をそっくり買い取ること』（すなわち、資本家一味を買い取ること、つまり、ブルジョアジーから土地、工場、その他の生産手段を買い取ること）が労働者階級にとって最も適当である、というマルクスのことばを頭におけば、そこには原則からの逸脱はなにも見られないからである、と。(六二)

これはきわめて興味ぶかい意見である。……

ほんとうに、マルクスの思想をよく考えてみたまえ。

問題にされているのは、前世紀の七〇年代のイギリスのことであり、独占前の資本主義の最盛期のことであり、当時軍部と官僚制が最も小さかった国のことであり、当時労働者がブルジョアジーを『買い取る』という意味で社会主義が『平和的に』勝利する可能性が最も多かった国のことであった。そこでマルクスは、一定の条件のもとでは労働者はブルジョアジーを買い取ることをけっしてこばむものではない、と言ったのである。マルクスは、変革の形態、やり方、方法について自分の手を——また社会主義革命の将来の活動家の手を——縛ることをしなかった。そのときになればどれほど多くの新しい問題が生じてくるか、変革の過程で情勢全体がどれほど変化するものか、変革の過程で情勢がどれほど頻繁に、激しく変化するものか、よくわきまえていたからである。

ところで、プロレタリアートが権力をにぎったのちの、搾取者の軍事的抵抗とサボタージュによる抵抗を鎮圧したのちのソヴェト・ロシアではどうかといえば——もし半世

紀前にイギリスが平和的に社会主義に移りはじめたとしたら、当時のイギリスにおそらく生じたであろうような型の条件が、若干生じていることは、明らかではあるまいか？　もし当時イギリスで資本家の労働者への服従が保障されえたとしたら、それは次のような事情によるものであったろう。（一）農民がいなかったため、住民のなかで労働者、プロレタリアが完全に優勢であったこと（七〇年代のイギリスには、農業労働者のあいだで社会主義が非常に急速に成功することを期待させるにたる徴候があった）、（二）プロレタリアートの労働組合へのすばらしい組織率（この点でイギリスは当時世界一の国であった）、（三）数世紀にわたる政治的自由の発展によって訓練されたプロレタリアートの比較的に高い文化水準、（四）みごとに組織されたイギリスの資本家――当時彼らは世界中のどの国よりもよく組織された資本家であった（いまでは、この点で首位はドイツに移っている）――が、政治や経済の問題を妥協によって解決する長いあいだの習慣。このような事情があったために、当時、イギリスの資本家が平和的に労働者に服従することがありうるという考えが、生まれることができたのである。

わが国では、そうした服従は、現在、一定の根本的な前提条件（一〇月に勝利をおさめ、一〇月から二月までのあいだに資本家の軍事的抵抗とサボタージュによる抵抗を鎮圧したこと）によって保障されている。わが国では、住民のなかで労働者、プロレタリアが完全に優勢ではなく、高度の組織性ももっていないかわりに、急速に没落した貧農がプロレタリアを支持したことが勝利の原因となった。最後に、わが国には高い文化水準もなければ、妥協の習慣もない。これらの具体的条件をよく考えるならば、いまではわれわれは、どんな『国家資本主義』にも応じようとせず、どんな妥協も考えようとせず、依然として投機、貧民の買収などでソヴェトの施策を挫折させようとしている、非文化的な資本家を容赦なく処断するやり方と、『国家資本主義』を受けいれ、それを実行することができ、何千万という人々への生産物の供給を現実に掌握している巨大企業の賢明で経験に富む組織者としてプロレタリアートの役に立つ、文化的な資本家と妥協し、あるいはこれを買い取るというやり方とが併用されるようにすることができるし、またしなければならないということが、明らかになる。

ブハーリンは、すぐれた教養を身につけたマルクス主義経済学者である。だから、彼は、マルクスが、まさに社会主義への移行を容易にするために巨大規模の生産の組織を保存することがたいせつなこと、そして、もし（例外として。イギリスはその当時は例外であった）資本家を平和的

に服従させ、買い取りを条件に文化的、組織的に社会主義に移らせるような事情が生じたならば、資本家にたっぷり支払って、彼らを買い取るという考えも十分容認できることを、労働者に教えたのはあくまでも正しかった、ということを思いだした。

しかしブハーリンは、ロシアにおける現情勢の具体的特異性を深く考えなかったために、誤りにおちいった。――現情勢はまさに例外的であって、現在では、われわれロシアのプロレタリアートは、われわれの政治制度の点では、労働者の政治権力の強さでは、どんなイギリスよりも、どんなドイツよりもすすんでいるが、同時に、秩序整然たる国家資本主義の組織の点では、文化の高さでは、社会主義を物質的に、生産面で『導入する』準備の程度では、西ヨーロッパ諸国家のうちの最も遅れたものよりも遅れているが、こういう特異な状態からして、現在まさに特異な『買い取り』の必要性が生じてくることは、明らかではないか？　それは、ソヴェト権力のもとで勤務し、大規模および巨大規模の『国家的』生産を整備する仕事をちゃんと手伝う用意のある、最も文化的な、最も才能のある、組織者として最も有能な資本家にたいして、労働者が提案すべき『買い取り』である。このような特異な状態にあって、われわれが、それぞれそれなりに小ブルジョア的な二種類の誤りを避けるために努力しなければならないことは、明らかではないか？　一方で、われわれの経済的な『力』と政治的な力の不整合が認められる以上、『したがって』権力をにぎるべきではなかったのだと公言するのは、救いがたい誤りであろう。そういう議論をやるのは、『整合』はいつまでたっても生まれないこと、自然の発展においても社会の発展においても整合というものはありえないこと、多くの試みを――その一つひとつをとってみれば、一面的であろうし、一定の不整合という欠陥をもつであろうが、――積みかさねることによってのみ、万国のプロレタリアの革命的協力から勝利に輝く社会主義が生まれてくることを忘れている『箱のなかの男』[(二)]である。

他方、『めざましい』革命に熱中はするが、困難きわまる移行をもよく考慮にいれた、堅忍不抜な、熟考された、周到な革命的活動をすることのできないがなり屋や口舌の徒を勝手にふるまわせておくのも、明らかな誤りであろう。

幸いにして、革命的諸政党の発展の歴史、これら諸党とのボリシェヴィズムの闘争の歴史は、はっきりした輪郭をもったいくつかの典型を遺産としてわれわれに残している。そのうち左派エス・エル無政府主義者は、くだらない革命家の典型の十分明瞭な例証である。彼らはいま『ボリシェヴィキ右派』の『協調主義』反対を叫んでいる――ヒステ

リックに、口角泡をとばして、大声に叫んでいる。しかし彼らは、『協調主義』はどこが悪かったのか、それが歴史と革命の進行によって当然の断罪をうけたのはなにゆえか、考えるすべを知らないのだ。

ケーレンスキー時代の協調主義は、帝国主義的ブルジョアジーに権力を引き渡した。ところで、権力の問題はあらゆる革命の根本問題である。一九一七年一〇—一一月における一部のボリシェヴィキの協調主義は、プロレタリアートが権力をにぎることを恐れたか、でなければ、左派エス・エルのような『たよりない同伴者』とだけでなく、チェルノーフ派、メンシェヴィキのような敵、——憲法制定議会の解散や、ボガエフスキー一味の容赦ない粉砕や、ソヴェト諸制度の完全実施や、各種の没収というような基本問題で、かならずわれわれを妨害したであろう連中——とも、平等に権力を分かち合うことを望んだのである。

いまや権力は、『たよりない同伴者』さえ参加させずに、一つの党、プロレタリアートの党の手に掌握され、維持され、強化されている。権力を分有したり、ブルジョアジーにたいするプロレタリア執権を放棄したりすることなど問題になっておらず、いな問題になりえないいま、協調主義をうんぬんするのは、それこそオウムのように、おぼえこんだがわけはわからないことばを繰りかえすというものである。われわれが国を統治することができ、また統治しなければならない状態に立ちいたったいま、われわれが資本主義によって教育された者のうち最も文化的な分子を、金を惜しまずわれわれの側に引きよせ、彼らを小所有者的崩壊を克服する仕事につけようと努力しているのを『協調主義』とよぶのは、社会主義建設の経済的任務についておよそ考えるすべてを知らないというものである。……」

食糧税について、商業の自由について、利権事業について

ここに引用した一九一八年の考察では、期間について幾多の誤りがある。期間は、そのころ予想されていたよりは長いことがわかった。それは驚くにはあたらない。しかし、わが経済の基本的な諸要素は依然として同じである。「貧農」（プロレタリアと半プロレタリア）は、非常に多くの場合、中農になった。そのために、小所有者的、小ブルジョア的な「要素〔自然発生性〕」が強まった。しかし、一九一八—一九二〇年の内戦は、国の荒廃を極度に強め、その生産力の復興を遅らせ、ほかならぬプロレタリアートをだれよりも疲弊させた。かててくわえて、一九二〇年の不作、飼料不足、家畜の斃死が、運輸と工業との復興をさら

にひどく遅らせた。そしてこのことは、たとえば、われわれのおもな燃料である薪（たきぎ）を農民の馬で輸送するのに影響したのである。

要するに、一九二一年の春ごろの政治情勢は、次のようになっていた。すなわち、農民の状態を改善し、この階級の生産力を高めるための、即時の、最も断固とした、最も緊急な措置が、一刻の猶予も許さないほど必要になっていたのである。

なぜ、労働者の状態ではなく、農民の状態と言うのか？

それは、労働者の状態を改善するためには食糧と燃料とが必要だからである。現在、——全国家経済の見地からみて——最大の「支障」はまさにここからきている。農民の状態を改善し、その生産力を高めるほかには、穀物の生産と収穫、燃料の買付と供給を増加させることはできない。農民から始めなければならない。このことを理解しない者、また農民をこのように重視するのはプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の「放棄」か、あるいは放棄に類することだと考えたがる者は、まったく問題をよく考えない者であり、空文句にふける者である。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）とは、プロレタリアートが政治を指導することである。指導階級、支配階級としてのプロレタリアートは、まず第一に、最も緊急な、最も「焦眉な」任務を解決するように、政治をみちびくことができなければならない。農民経済の生産力をすぐに高めることのできる諸方策こそ、現在最も緊急なものである。この道によってはじめて、労働者の状態の改善も、労働者と農民の同盟の強化も、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の強化も、これを達成することができるのである。この道によらずに、労働者の状態をよくしたいと望むようなプロレタリア、あるいはプロレタリアートの代表者は、実際には白衛派や資本家の助力者になることになろう。というのは、この道をとおらずにすすむことは、労働者の同職組合的利害を階級的利害より優先させることを意味し、労働者階級全体の利害、労働者階級の執権（ディクタツーラ）の利害、地主と資本家に対抗する労働者と農民の同盟の利害、資本のくびきから労働を解放するための闘争における労働者の指導的役割を、労働者の当面の、一時的、部分的な利益の犠牲にすることを意味しているからである。

そこで、農民の生産力を高めるための、即時の真剣な方策が、まず第一に必要である。

このことは、食糧政策の大きな変更なしには、実行できない。割当徴発を食糧税におきかえたのは、そのような変更であった。それは、すくなくとも地方的な経済的取引の範囲内で納税後の商業の自由をともなうものである。

割当徴発を食糧税におきかえることの本質はどこにある

か？

この点については、まちがった考えが非常にひろまっている。そのまちがいの大部分は、移行の本質を深くきわめないことから、また現在の移行がどこからどこへいくものかを自問してみないことから、生じている。まるで共産主義一般からブルジョア制度一般への移行というものがあるかのように考えているのだ。この誤りにたいしては、一九一八年五月に述べたことを、ぜひとも指摘しなければならない。

食糧税は、極度の窮乏と荒廃と戦争とによって余儀なくされた独特な「戦時共産主義」から、正規の社会主義的な生産物交換に移行する形態の一つである。そして、この生産物交換それ自体は、住民のなかで小農民層が優勢を占めていることから生じる諸特質をそなえた社会主義から、共産主義へ移行する形態の一つである。

独特な「戦時共産主義」は、われわれが農民から余剰全部を、ときにはまた、余剰どころか農民に必要な食糧の一部分までも、事実上取りあげた点、軍隊と労働者給養の必要をみたすために取りあげた点にある。その大部分は、紙幣と引換えに借りあげたのである。荒廃した小農民的な国では、そうするほかに、われわれは地主と資本家に勝利することはできなかったのだ。そして、われわれが勝利した（世界の最強の国々がわが国の搾取者たちを支援したにもかかわらず）という事実は、労働者と農民が自分たちの解放のための闘争ではどのような英雄主義の奇跡をおこなうことができるかを、示しているだけではない。この事実はまた、メンシェヴィキやエス・エルやカウツキー一派が、この「戦時共産主義」をわれわれの罪過としたのは、実際にはブルジョアジーの召使の役割を果たすものであったことを示している。戦時共産主義はわれわれの功績とすべきものである。

だが、この功績のほんとうの度合を知っておくことも、それにおとらず必要である。「戦時共産主義」は、戦争と荒廃とによってやむなくされたものである。それは、プロレタリアートの経済的任務におうじた政策ではなかったし、またありえなかった。それは一時的な方策であった。小農民的な国で自分の執権（ディクタツーラ）を実現しつつあるプロレタリアートの正しい政策は、穀物と農民の必要とする工業製品との交換である。このような食糧政策だけがプロレタリアートの任務におうじたものであり、それだけが、社会主義の基礎を固めることができ、社会主義の完全な勝利をもたらすことができるのである。

食糧税はそうした政策への過渡である。われわれはいまなおひどく零落しており、戦争（この戦争はきのうまであ

ったし、また資本家どもの強欲と悪意のためにあすにも燃えあがるかもしれないのだが）の重圧によってひどく抑えつけられているために、われわれに必要な穀物全部と引換えに工業製品を農民にあたえることはできない。それを知っているので、われわれは食糧税を実施するのである。すなわち、必要な（軍隊と労働者にとって）最小限の穀物を税として取り、残りを工業製品と交換しようというのである。

この場合、なお次のことを忘れてはならない。窮乏と荒廃とが非常にひどいために、われわれは、大規模な国営の社会主義的工場生産を一挙に復興することはできない。そのためには、大工業の中心地に穀物と燃料とを大量に貯蔵することが必要であり、磨損した機械を新しい機械に取りかえることなどが必要である。これも一挙にやれないということを、われわれは経験にもとづいて確信した。われわれはまた、荒廃的な帝国主義戦争のあとでは、どんなに富裕な、進んだ国でも、あるかなり長期の年月がたってからでないと、このような任務を解決できないことを知っている。つまり、機械もいらず、また原料や燃料や食糧の国家による大量貯蔵も必要のない小工業——農民経済にすぐさまある程度の援助をあたえることができ、農民経済の生産力を高めることのできる小工業の復興を、ある程度まで援助することが必要なのである。

そこからどういうことが生じるか？

そこから生じるのは、ある程度の（地方的なものにすぎないとはいえ）商業の自由にもとづいて、小ブルジョアジーと資本主義とが復活することである。これは疑いないことである。これに目をふさぐのは、滑稽である。

そこで疑問が生じる。これは必要か？　これを正当とすることができるか？　これは危険ではないか？　と。

この種の疑問はたくさんだされている。大多数の場合、このような疑問は、これをもちだす人の素朴さ（おだやかに言えば）を暴露するだけである。

私が一九一八年五月に、わが国の経済のなかにある各種の社会経済制度の諸要素（諸構成部分）をどのように規定したかを、一見していただきたい。家父長制的な、すなわちなかば野蛮な経済制度から、社会主義的経済制度にいたるまでのこの、五つの経済制度全部のこの五つの段階（または構成部分）がすべて現存していることについて、反駁できる者はだれもいないであろう。小農民的な国においては、小農民的な「制度（ウクラード）」すなわち、なかば家父長制的でなかば小ブルジョア的な「制度」が優勢なことは、自明のことである。交換がある以上、小経営の発展は、小ブルジョア的な発展であり、資本主義的な発展である。これは、

争う余地のない真理であり、そのうえ、日常の経験と普通人の観察によってさえ確証されている経済学のイロハの真理である。

社会主義的プロレタリアートは、このような経済的現実に直面して、いったいどのような政策を実行できるだろうか？　小農民には、穀物や原料と交換に、社会主義的大工業の生産物のうちから彼らが必要とするすべてのものをあたえるべきか？　これは最も望ましく、最も「正しい」政策であろう。われわれはまたそれを始めた。だが、われわれはすべての生産物をあたえることはできない。それはとうていできないし、またそんなに早くはできないであろう、――すくなくとも、全国電化事業の第一期でも完了するまでは、できないであろう。では、どうしたらよいか？　私的な、非国家的な交換の発展、つまり商業の発展、すなわち資本主義の発展――この発展は何百万という小生産者が存在するときには避けられない――をいっさい禁止し、まったく閉ざすように試みるか。そのような政策はばかげたことであり、それを試みようとする党の自殺となるであろう。ばかげたことと言うのは、この政策が経済的に不可能だからであり、自殺というのは、このような政策を試みる党はかならず破滅するからである。共産主義者のうちのある者は、ほかならぬそのような政策にはまりこんで、「思考とことばと行為」のうえであやまちを犯したが、そのあやまちを隠しだてするにはおよばない。われわれはこのような誤りを是正するように努力しよう。このような誤りは、かならず是正しなければならない。さもなければ、まったくまずいことになるであろう。

それとも、（あと残っている可能な、そしてただ一つ合理的な政策として）資本主義の発展を禁止したり閉ざしたりなどしようとはしないで、これを国家資本主義の軌道にみちびくようにつとめるか。これは経済的に可能なことである。というのは、国家資本主義は、自由な商業の、一般に資本主義の、諸要素があるところにはどこにでも――形態と程度の差はあっても――存在するからである。

ソヴェト国家、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を、国家資本主義と組み合わせ、結びつけ、両立させることは、可能であろうか？

もちろん、可能である。私が一九一八年五月に証明したのは、このことであった。私は、このことを一九一八年五月に証明しておいたつもりである。私は、なおそのうえに、当時私は、国家資本主義が小所有者的な（小家父長制的でもあり、また小ブルジョア的でもある）要素にくらべて一歩前進であることを証明しておいた。現在の政治的・経済的環境のもとでは、かならず国家資本主義と小ブルジョア的生

産とを比較しなければならないのに、国家資本主義を社会主義とだけ対置したり、比較したりすることで、多くの誤りがおかされている。

理論的にも実践的にも、全問題は、資本主義の不可避的な（ある程度まで、またある期間は）発展をまさにどのようにして国家資本主義の軌道にむけるか、そのためにどのような諸条件をつくりだすべきか、近い将来においてどのようにして国家資本主義が社会主義に転化するのをどのようにして保障するか、その正しい方法を発見するにある。

この問題の解決に取り組むためには、まず第一に、わがソヴェト体制の内部での、わがソヴェト国家の枠内での国家資本主義は、実際にはどのようなものになるか、またどのようなものでありうるかを、できるだけはっきりと思いうかべてみなければならない。

ソヴェト権力が資本主義の発展を国家資本主義の軌道にむける仕方、国家資本主義を「植えつける」方法の最も簡単な事例または実例は、利権事業である。いまでは、利権事業が必要だということには、われわれのあいだでみなの意見が一致している。だが、利権事業の意義はなにかということについては、みなが深く考えているわけではない。社会経済制度とそれらの相互関係という見地からみた場合、ソヴェト体制のもとでの利権事業とはどういうものであろうか？　それは、ソヴェト権力、すなわちプロレタリア国家権力が、小所有者的な（家父長制的な、また小ブルジョア的な）要素に対抗して、国家資本主義と結ぶ契約であり、ブロックであり、同盟である。利権契約者は資本家である。彼は資本主義的に、利潤のために事業をおこなう。彼は、普通以上の特別利潤をえるために、あるいは、ほかの方法で手に入れることが不可能であるかきわめて困難であるような原料をえるために、プロレタリア権力との契約に同意する。ソヴェト権力は、生産力が発展するとか、即時または最短期間内に生産物の量が増大するとかいうかたちで、利益をえる。われわれは、これこれの油田や鉱山や森林を一〇〇もっているとする。われわれはそれをすべて開発することはできない——機械とか食糧とか輸送が不足している。同じ原因のために、他の地区の開発もうまくいっていない。大企業の利用がまずく、また不十分なために、小所有者的な自然発生性のありとあらゆる現われが強まっている。近傍の（つぎにすべての）農民経済の弱体化、その生産力の破壊、ソヴェト権力にたいする農民の信頼の低下、窃取、大量の小規模な（最も危険な）投機、等々がそれである。国家資本主義を利権事業というかたちで「植えつける」ことによって、ソヴェト権力は、小規模生産にたいして大規模生産を、遅れた生産にたいして進んだ生産を、手

による生産にたいして機械による生産を強め、自分の手中にある大工業の生産物の量（割戻し分）を増大させ、小ブルジョア的、無政府的な経済関係に対抗して、国家によって規制される経済関係を強めるのである。利権政策は、適度に、慎重に実施されるならば、われわれが急速に（ある程度、いくらか）生産の状態や労働者農民の状態を改善するのに、疑いもなく、助けとなるであろう――もちろん、それは、数千万プードというきわめて貴重な生産物を資本家に引き渡すという、ある程度の犠牲をはらってのことではあるが。利権事業をわれわれに有利にし、危険でなくするような方策と条件をきめることは、力関係にかかっており、闘争によって決定される。というのは、利権事業もまた闘争の一種であり、別の形態での階級闘争の継続であって、けっして階級闘争を階級平和に代えることではないからである。闘争方法は、実践がこれを示してくれるであろう。

利権事業というかたちでの国家資本主義は、ソヴェト体制内部の国家資本主義の他の諸形態にくらべると、おそらく最も簡単な、はっきりした、明瞭な、輪郭の明確なものであろう。われわれはこの場合には、最も文化的、先進的な西ヨーロッパ資本主義との、まったく正式な文書契約をもっているのである。われわれは、自分の利得と損失を、自分の権利と義務を正確に知っており、利権をあたえる期限を正確に知っており、契約に期限前の買戻しの条件を知っている場合には、期限前の買戻し権をさだめてある。われわれは、世界資本主義に一定の「貢納」を支払い、あれこれの点で資本主義に「身代金を払って自分を請けもどし」、それによってソヴェト権力の地位を固め、われわれの経済運営の諸条件を改善するための一定の方策を即時手に入れる。利権事業にかんする任務の困難は、利権契約を結ぶにあたってあらゆることを熟慮し、考量すること、ついでその履行を監視するすべを知ることにつきる。この点で疑いもなく困難はあるし、またはじめのうちは、おそらくこの点であやまちが避けられないであろう。しかし、これらの困難は、社会革命のその他の任務にくらべるならば、またとくに国家資本主義を発展させ、許容し、植えつけるその他の諸形態にくらべるならば、最も小さなものである。

食糧税の実施に関連してすべての党活動家とソヴェト活動家に課せられる最も重要な任務は、「利権」政策（すなわち「利権的」国家資本主義に類似した政策）の原理、原則、基礎を、資本主義の他の諸形態、すなわち自由な商業や、地方的交易等々にも適用する能力をもつことである。

協同組合をとってみよう。食糧税にかんする布告に付随して、協同組合にかんする条令の改正と、協同組合の「自由」と権利のある程度の拡張とがすぐさま必要となったが、

それは理由のないことではない。協同組合も、同じく国家資本主義の一種ではあるが、しかし、ほかのものほど単純ではなく、その輪郭はそれほどはっきりしておらず、いっそうこみいっており、したがって、実践上では、わが権力をいっそう多くの困難に当面させている。小商品生産者の協同組合（ここで問題にしているのは、労働者の協同組合ではなく、小農民的な国で優勢を占めており、典型的である小商品生産者の協同組合である）は、不可避的に、小ブルジョア的、資本主義的な諸関係を生みだし、それらの発展をうながし、小資本家たちを前面に押しだし、彼らに最大の利益をあたえている。小経営主が優勢であり、交換の可能性と、さらにその必然性とがある以上、これ以外でありようがない。ロシアの現在の諸条件のもとでは、協同組合の自由と権利は、資本主義の自由と権利を意味している。この明白な真理に目を閉じるのは、ばかげたことか、罪悪であろう。

しかし、「協同組合的」資本主義は、私経営的資本主義とは違って、ソヴェト権力のもとでは国家資本主義の一変種であり、またそのようなものとして、現在のところ、われわれにとって――もちろん、ある程度まででではあるが――有利であり、有益である。食糧税が残りの（税金のかたちで徴収されない）余剰を販売する自由を意味するものであるかぎり、資本主義のこの発展――というのは、販売の自由、商業の自由は資本主義の発展であるから――を協同組合的資本主義の軌道にむけるように努力をはらうことが、われわれにとって必要である。協同組合的資本主義は、記録、統制、監督、国家（この場合はソヴェト国家）と資本家間の契約関係を容易にするという点で、国家資本主義に似ている。協同組合は、商業形態としては私的商業よりも有利であり有益であるが、それは、いま述べた理由によるだけでなく、また数百万の住民を、ついでまたひとりのこらず全住民を統合し組織することを容易にするからでもある。そして、この事情は、それ自体、国家資本主義から社会主義への今後の移行という見地からみて巨大なプラスである。

国家資本主義の形態としての、利権事業と協同組合をくらべてみよう。利権事業は機械制大工業に基礎をおいているが、協同組合は小規模な手工業に、部分的には家父長制的な工業にさえ、基礎をおいている。利権事業は、それぞれの利権契約においては、一人の資本家または一つの会社、一つのシンジケート、一つのカルテル、一つのトラストと関係する。協同組合は、数万の、数百万さえもの小経営主を包含している。利権事業では、正確な契約を結び、正確な期限をきめることが可能であり、またそれが前提されさ

えする。協同組合では、十分に正確な契約を結ぶことも、十分に正確な期限をきめることもできない。協同組合法を廃止することは、利権契約を破棄するよりも、ずっとやさしいが、契約の破棄は、一挙に、そのまま、すぐに、資本家との経済的同盟あるいは経済的「同棲」の事実上の諸関係の断絶を意味する。ところが、協同組合法をいくら廃止しても、また一般にどのような法律も、ソヴェト権力と小資本家との事実上の「同棲」を一挙に断絶するものでないばかりか、一般に事実上の経済諸関係を断絶することもできないのである。利権契約者を「見張る」ことはやさしいが、協同組合員を見張ることはむずかしい。利権事業から社会主義への移行は、大生産の一つの形態から別の形態への移行である。小経営主の協同組合から社会主義への移行は、小規模生産から大規模生産への移行である。つまり、この移行はいっそう複雑ではあるが、そのかわりに、それが成功する場合には、いっそう広範な住民大衆を包含することができるし、古い、社会主義以前の諸関係の、それどころか資本主義以前の諸関係の、あらゆる「新規なもの」に抵抗するという点で最も頑強な諸関係さえもの、いっそう深く張った、いっそう強い根を引きぬくことができるのである。利権政策は、それが成功した場合には、少数の模範的な——われわれの企業にくらべて——、現代の先進的資本主義と同じ水準に立つ大企業を、われわれにあたえてくれるであろう。数十年たてば、これらの企業は完全にわれわれの手に移るであろう。協同組合政策は、それが成功した場合には、小経営を振興し、またそれが自発的な統合という原則にもとづいて大規模生産に移行する——その期間は不定であるが——のを容易にする。

　第三の種類の国家資本主義をとってみよう、国家は資本家を商人として引きよせて、国家の生産物の販売と、小生産者の生産物の買入れとにたいして、彼に一定の手数料を支払う。第四の種類は、国家が、国家に属する施設、油田、森林、土地等々を、資本家である企業家に賃貸するものであって、この場合の賃貸契約は、なによりも利権契約に似ている。国家資本主義のこの最後の二つの種類については、われわれのあいだでは、全然論じられておらず、全然考えられておらず、また全然気づかれていない。しかし、そうなっているのは、われわれが強くて賢いからではなくて、われわれが弱くて愚かだからである。われわれは「卑俗な真理」を直視することを恐れており、また「われわれの心をそそる錯覚[二]」に、あまりにもしばしばおちいっている。われわれはたえず、「われわれ」は資本主義から社会主義に移行しつつあるのだ、という議論におちいりがちであり、この「われわれ」とはいったいだれのことかを、正確に、

はっきりと考えてみるのを忘れている。これをはっきりと考えるのを忘れないために、私が一九一八年五月五日の論文のなかであげたわが国の経済のうちのすべての――かならず例外なくすべての――構成部分、すなわちさまざまな社会経済制度全体の一覧表を念頭におくことが必要である。「われわれ」プロレタリアートの前衛、先進部隊は、直接に社会主義に移行しつつある。しかし、先進部隊は全プロレタリアートの小部隊にすぎないものであり、プロレタリアートは、これまた、全住民大衆の小部分にすぎないのである。そこで、「われわれ」が社会主義へのわれわれの直接的移行という任務を首尾よく解決するためには、資本主義以前の諸関係から社会主義に移行するのにどのような媒介的な道、やり方、手段、補助策が必要であるかを、理解しなければならない。ここに核心がある。

ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の地図を見たまえ。ヴォログダから北方へ、ロストフ－ナ－ドヌーとサラトフから南東方へ、またオレンブルグとオムスクから南方へ、さらにトムスクから北方へ、何十という大きな文化国家がおさまることもできるほどの果てしない広漠たる土地がひろがっている。ところが、これらすべての土地には、家父長制や、なかばの野蛮状態や、まったくほんとうの野蛮状態がおこなわれている。だが、農民の住んでいるそれ以外の全ロシアの僻地ではどうか？　いたるところで何十ヴェルスターという田舎道が――もっと正確にいえば、何十ヴェルスターという無道路状態が――村を鉄道から、すなわち文化、資本主義、大工業、大都市との物質的な結びつきから、切り離している。これらの地方のいたるところに、同じように家父長制や、オブローモフ的生活や、なかば野蛮な状態が優勢ではなかろうか？

ロシアで優勢を占めているこの状態から、社会主義への直接の移行を実現することなど、考えられるであろうか？しかり、ある程度までは考えられる。しかし、それは、膨大ないま完成した科学的労作のおかげで現在われわれが正確に知っている一つの条件がある場合だけである。この条件とは電化である。もしわれわれは、それをどこに、またどうやって建設できるか、また建設しなければならないかを、いまでは知っている）、もしわれわれがこれらの発電所から電力を一つひとつの村に送るならば、もし電動機その他の機械を十分に手に入れるならば、そのときには、家父長制から社会主義への過渡段階、媒介環は必要でないか、ほとんど必要でないであろう。だが、われわれは、この「一つの」条件が、その第一期の工事をするだけにも、すくなくとも一〇年を必要とすることを、よく知っている。そし

て、この期間を短縮することは、イギリス、ドイツ、アメリカのような国々でプロレタリア革命が勝利した場合にだけ可能なのである。

ここ数年のあいだは、家父長制、小規模生産から社会主義への移行を容易にすることのできる媒介環について考えることを解しなければならない。「われわれ」は、いまなお「資本主義は悪であり、社会主義は善である」という議論にしばしばおちいりがちである。だが、この議論は正しくない。というのは、それは現在の社会主義経済諸制度の総体を忘れて、そのうちの二つだけを取りだしているからである。

資本主義は社会主義にくらべては悪である。資本主義は中世にくらべては、小規模生産にくらべては、小生産者の分散状態と結びついた官僚主義にくらべては、善である。小規模生産から社会主義への直接の移行を実現する力がわれわれにまだないかぎり、そのかぎりでは、小規模生産と交換との自然発生的な産物として、資本主義はある程度まで不可避であり、またそのかぎりでは、われわれは資本主義を、小規模生産と社会主義のあいだの媒介環として、生産力を高める手段、道、やり方、方法として、利用しなければならない（とくに、これを国家資本主義の軌道にむけることによって）。

官僚主義の問題をとって、経済的な側面からこれを一見してみたまえ。一九一八年五月五日には、官僚主義はまだわれわれの視野にはいっていなかった。十月革命の半年後には、われわれが古い官僚機構を上から下までぶちこわしてから半年たったころには、われわれはまだこの悪を感じていなかった。

さらに一年たった。一九一九年三月一八―二三日のロシア共産党第八回大会[64]では、新しい党綱領が採択されたが、この綱領では、この悪を認めることを恐れず、これをあばきだし、暴露し、断罪し、この悪とたたかうための思想と意見とエネルギーと行動を呼びおこすことを望んで、われわれは率直に、「ソヴェト体制内部における官僚主義の部分的復活」と述べている。

さらに二年たった。官僚主義の問題を審議した（一九二〇年一二月）第八回ソヴェト大会ののち、官僚主義の分析と最も密接に関連のあった論争に結末をつけたロシア共産党第一〇回大会（一九二一年三月）ののち、一九二一年の春には、われわれはこの悪がさらにいっそう明らかになり、さらにいっそうはっきりとし、さらにいっそう恐ろしいものとなって、われわれの前に現われるのを見た。官僚主義の経済的根源はなにか？　この根源は、主として二とおりある。一方では、発達したブルジョアジーは、まさに労働

者（と部分的には農民）の革命運動に対抗して、官僚機構を、まず第一に軍事機構、つぎには裁判所等々の機構を必要とする。われわれには、そうしたものはない、われわれの裁判所は、ブルジョアジーにたいする階級的裁判所である。われわれの軍隊は、ブルジョアジーにたいする階級的軍隊である。官僚主義は軍隊のなかにあるのではなく、これに奉仕する機関のなかにある。わが国には、官僚主義のいま一つの経済的根源がある。すなわち、小生産者の分散した、ばらばらな状態、その窮乏、非文化性、道路の欠如、文盲、農業と工業との交易の欠如、両者の結びつきと相互作用との欠如がそれである。これは、大半が内戦の結果である。われわれが封鎖され、四方から包囲され、全世界から、のちには穀物の豊かな南部地帯からも、シベリアからも、石炭からも切断されていたときには、われわれは工業を復興することができなかった。われわれは「戦時共産主義」に尻ごみしてはならなかった。思いきった極端な措置を恐れてはならなかった。すなわち、われわれは、なかば飢えた生活にも、またなかば飢えたどころでない、もっと悪い生活にも耐え、前代未聞の荒廃と交易の欠如とにもかかわらず、ぜがひでも労農権力を守らねばならなかった。エス・エルやメンシェヴィキ（彼らの多くはおびえ、おじけたために、ブルジョアジーに事実上追随した）がおじけたからといって、われわれはおじけはしなかった。だが、封鎖された国、包囲された要塞において勝利の条件であったものが、最後の白衛軍がロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の領土から最後的に駆逐された一九二一年春になると、今度はその否定的な面を明るみにだした。包囲された要塞では、あらゆる交易を「締めだす」ことができるし、またそうしなければならない。大衆の特別の英雄精神によって、三年間それに耐えることができた。しかし、そののち、小生産者の零落はますます強まり、大工業の復興はさらにのびのびになり、遅れてしまった。「包囲」の遺産として、小生産者のばらばらで打ちのめされた状態の上部構造として、官僚主義がその姿を完全に明るみにだしてきた。

いっそう毅然としてこの悪とたたかうためには、何度も何度もはじめからやりなおすためには、恐れることなく、この悪を認めることができなければならない。われわれの建設のあらゆる分野で、仕上げのこしの箇所をなおし、任務に取り組むさまざまな道を選びながら、なおそのうえにも何度も繰りかえしてはじめからやりなおさなければならない。大工業の復興が遅れることが明らかになり、工業と農業との交易の「締めだし」が耐えがたいものとなっていることが明らかになった。だから、もっと手近なものに、小工業の復興につとめなければならない。この面から事態

を改善して、戦争と封鎖とのためになかば破壊された建築物のこの側面を下から支えなければならない。資本主義を恐れないで、ぜひともあらゆる手をつくして交易を発展させなければならない。というのは、わが国では、資本主義にはめられた枠は（経済では地主と資本家の収奪によって、政治では労農権力によって）十分に狭く、十分に「適度」なものだからである。これが食糧税の基本的な思想であり、これがその経済的意義である。

党活動家もソヴェト活動家もすべて、たとえ「小さな」手段によってでも、小規模であっても、農民経済をすぐにも振興するという見地から、また周辺の小工業を発展させることによって農民経済を助けるという見地から、経済建設の事業で、できるかぎり現地の――すなわち県の、それよりは郡の、それよりは郷や村の――イニシアティヴをつくりだし、呼びおこすように、あらゆる努力、あらゆる注意をはらわなければならない。全国家的な単一経済計画は、まさにこのことが注意と配慮との中心となり、「重点」作業の中心となることを要求している。最も広く最も深い「基礎」になによりも近いこの箇所で達成されたある程度の改善は、大工業のいっそう力づよい、いっそう上首尾な復興へ、最短期間で移ることを可能にするであろう。

これまでのところ、食糧活動家は、割当徴発を一〇〇%集めよという一つの基本的な指令しか、知らなかった。いまや別の指令がだされている。税を最短期間に一〇〇%集め、それから、大小工業の生産物と交換に、さらに一〇〇%集めよというのが、それである。税を七五%集め、さらに七五%（次の一〇〇のうちの）を大小工業の生産物と交換に集める者は、税を一〇〇%と、交換によって五五%（次の一〇〇のうちの）を集める者よりは、国家にとってより有益な仕事をしたことになるであろう。食糧活動家の任務は複雑になっている。一方では、これは財政的な任務である。できるだけ早く、できるだけ合理的に、税を集めよ。他方では、これは一般経済的な任務である。農業と工業との交易が増大し強化するように、協同組合をみちびき、小工業に援助をあたえ、現地のイニシアティヴと創意を発展させるようにつとめよ。われわれはまだこのことを非常にまずくしかやれない。その証拠は官僚主義である。この点ではまだ多くのことを資本家から学びとることができるし、また学びとらなければならないということを、われわれは認めるのを恐れてはならない。県別に、郡別に、郷別に、村別に、実際の経験の総和をくらべてみよう。あるところでは、私的資本家や小資本家がなにがしのことを達成した。彼らの利潤はほぼしかじかのものである。それは、われわれが「授業料として」支払った貢納であり、報酬で

ある。授業料を支払うことは、その学習がちゃんとなされれば、惜しくはない。その隣りのところでは、協同組合の方法によってなにがしかのことを達成した。協同組合の利潤はしかじかである。第三のところでは、純国営的な、純共産主義的な方法で、なにがしのことを達成した（この第三の場合は、いまのところ、まれな例外であろう）。

任務は次のようでなければならない。すなわち、各地方の経済上の中心機関、執行委員会付属の各県経済会議(⁂)は、第一義的な仕事として、食糧税を支払ったあとに残る余剰について、「交易」のさまざまな実験や方式をただちに組織することである。数ヵ月ののちには、比較しあって研究できるだけの、実践的な成果をもっていなければならない。現地産の塩または移入塩、あまり重要ではないがやはり農民には必要かつ有用な若干の生産物をその土地の原料からつくる手工業、「青い石炭」（小規模の地方的な水力を電化に利用すること）、その他等々――すべてこれらのものが、ぜがひでも工業と農業の「交易」を活気づけるために、利用されなければならない。この分野で最大の成果をおさめる者は、たとえ私経営的資本主義という方法によっていようとも、たとえ協同組合によらなくても、また、この資本主義を直接に国家資本主義に転化しなくても――共産主義の純潔について「考え」、国家資本主義や協同組合のために法規や規則や指令は書くが、実際に交易を推しすすめない人にくらべて、全ロシア的な社会主義建設の事業にいっそう大きな利益をもたらすであろう。

私経営的資本主義が社会主義の助力者としての役割を果たすというのは、逆説のように思われるかもしれない。

しかし、それはけっして逆説ではなくて、経済的にはまったく論争の余地のない事実である。運輸がとくに荒廃した状態にある小農民的な国が、戦争と封鎖から抜けだし、運輸と大工業をその手におさめたプロレタリアートによって政治的に指導されているのが現状であるかぎり、これらの前提からまったく不可避的にでてくる結論は、次のことである。すなわち、第一には、現在は、地方的交易が第一級の重要性をもっているということであり、第二には、私経営的資本主義（国家資本主義についてはいうまでもない）をつうじて社会主義を促進する可能性があるということである。

ことばについての論争は、できるだけ少なくしよう。われわれは、この点で、すでにこれまでに、法外に多くの過失をおかしている。実際の経験はできるだけ多様にし、その研究はすこしでも多くしよう。どんなに小規模なものでも、現地の仕事を模範的に組織することが、中央の国家的

な仕事の多くの部門よりも、いっそう大きな国家的意義をもつような状況も、よくあるものである。わが国でも、まさに現在、一般に農民経済についての、とくに産物の余剰と工業製品との交換についての状況が、まさにそのようなものである。たとえ一つの郷についてであろうと、この面で仕事を模範的に組織することは、しかじかの人民委員部の中央の機構の「模範的な」改善よりもいっそう大きな全国家的意義をもっている。というのは、わが国では、中央の機構は、すでに三年半のあいだにすっかりつくりあげられて、ある種の有害な不活発さを呈するようになっているからである。われわれは、これを大きく、かつ急速に改善することはできない。それをどうやって改善したらよいかも、われわれにはわかっていない。それをいっそう根本的に改善し、新鮮な勢力を新しく注入し、官僚主義とうまく闘争し、有害な不活発さを克服するための援助は、現地から、下部から、小さな「全一体」を——まさに「全一体」を、すなわち、一経営、一経済部門、一企業ではなくて、たとえ小さな地方であっても、そこでの全経済諸関係の総和、全経済取引の総和を——模範的に組織することから、生まれてこなければならない。

われわれのうちで、中央の仕事にとどまる運命を負わされている者は、たとえささやかな、いますぐ力のおよぶ範囲であっても、機構の改善と、この機構から官僚主義を一掃する仕事を、やりつづけるだろう。だが、この点でのおもな援助は、地方から生まれており、また生まれてくるであろう。わが国では一般に——私が概観できるかぎりでは——中央よりも地方のほうが、事情はよい。それは当然である。というのは、官僚主義の弊害は、当然に、中央に集中されているからである。モスクワは、この点で悪いほうの都市であり、一般に共和国で最悪の「地方」たらざるをえない。地方では、平均からの偏差は両方の方向に見られる。悪いほうへの偏差は、よいほうへの偏差よりもまれである。悪いほうへの偏差とは、共産主義者に取りいった旧官吏、地主、ブルジョア、その他の悪党の悪行であって、これらの悪党は、ときとして、農民にたいして忌まわしい乱暴や無礼や侮辱をはたらいている。この場合には、その場での裁判と無条件的な銃殺という、テロル的粛清が必要である。マルトフやチェルノーフの一派や、彼らに類する党外の俗物どもには、胸をたたいて叫ばせておくがよい。「主よ、ありがたいことには、私は『彼ら』には似ていません。私は『テロル』を認めたことがなく、また認めていません」と。このばか者たちは「テロルを認めない」。なぜなら、彼らは労働者や農民を愚弄する仕事で白衛派の下僕的助手の役割を果たすほうを選んだからである。エス・

エルやメンシェヴィキは「テロルを認めない」。なぜなら、彼らは、「社会主義」という旗をかかげて大衆を白衛派のテロルのもとにみちびく役割を果たしているからである。これは、ロシアのケーレンスキー支配とコルニーロフ反乱(注)が、シベリアでコルチャック支配が、グルジアでメンシェヴィズムが、証明したところである。これは、第二インタナショナルと「第二半インタナショナル」の英雄諸君が、フィンランド、ハンガリー、オーストリア、ドイツ、イタリア、イギリス、その他で証明したところである。白衛派のテロルの下僕的助手たちには、自分はあらゆるテロルを否定するのだと、自賛させておくがよい。われわれは、きびしい、だが疑いのない真理について語ろう。すなわち、一九一四—一九一八年の帝国主義戦争のあとで、前代未聞の危機や、古い結びつきの崩壊や、階級闘争の激化を経験している国——世界中のすべての国がそうだが——では、偽善者や空文句屋の言うのとは反対に、テロルなしにはすまされない。アメリカ型、イギリス（アイルランド）型、イタリア（ファシスト）型、ドイツ型、ハンガリー型、その他の型の白衛派的・ブルジョア的テロルか、それとも赤色のプロレタリア的テロルかである。中間や「第三のもの」はないし、またありえない。

よいほうへの偏差とは、官僚主義との有効な闘争とか、労働者と農民の欲求にたいするこのうえなく注意ぶかい態度とか、きわめて細心な心づかいによる経済の高揚とか、労働生産性の向上とか、農業と工業との地方的交易の発展とかである。よいほうへのこれらの偏差は、悪いほうへの偏差よりも多いとはいえ、やはりまれである。しかしながら、それはあるにはある。内戦と窮乏によって鍛えられた、新しい、若い、新鮮な共産主義的勢力の養成は、地方のいたるところですすんでいる。われわれは、これらの勢力を下から上へ、系統的に、たゆみなく引きあげる努力を、まだまだきわめて不十分にしかやっていない。これをいっそう広範に、またいっそう根気づよくやることは、可能であり、また必要である。若干の活動家を中央の仕事からはずして地方の仕事につけることはできるし、またそうしなければならない。彼らは、郡や郷の指導者として、そこであらゆる経済活動全体を模範的に組織することによって、莫大な利益をもたらすであろうし、中央でのほかの職務よりもいっそう重要な全国家的な仕事を果たすであろう。というのは、仕事の模範的な組織は、活動家の苗床となるであろうし、比較的たやすくならわれる模倣の手本となるであろうからである。そして、われわれは、模範的な手本の「模倣」がいたるところにひろまってゆくように、またそれがかならずおこなわれるように、中央から援助すること

ができるであろう。

農業と工業との「交易」を、つまり、食糧税を支払ったあとの余剰と、小工業、主としてクスターリ工業との「交易」を発展させる仕事は、その本質上、自主的な、練達した、賢明な現地のイニシアティヴを要求している。だから、郡と郷で仕事を模範的に組織することは、全国家的見地からみて、現在のところ、まったく異常な重要性をもっているのである。軍事では、たとえば、最近のポーランド戦争では、われわれは官僚的職階制から逸脱することを恐れず、共和国革命軍事会議議員の「階級を下げ」、彼らをより低い地位に移すこと（中央での高い職務はそのままにしておいて）を恐れなかった。現在、全ロシア中央執行委員会のある委員たちとか、また参与会のある人々とか、その他の高い地位の同志たちを、郡や、それどころか郷の仕事に移していけないことがどうしてあろうか？　われわれは、実際のところ、こういうことで「まごつく」ほど「官僚化」してはいないはずである。そしてわれわれのあいだには、よろこんでそれに応じる何十人もの中央の活動家がいることだろう。共和国全体の経済建設事業は、これによって非常に得をするであろうし、また模範的な郷、または模範的な郡は、大きい役割を果たすだけでなく、まったく、決定的、歴史的な役割を果たすであろう。

ついでにいえば、小さくはあるが、しかもなお重要性のある事情として、投機との闘争の問題の原則的な提起に変更をくわえる必要があることを、指摘しなければならない。国家統制を回避しようとしない「正規の」商業を、われわれは支持しなければならない。これを発展させることは、われわれにとって有利である。だが、投機を経済学的な意味に解するならば、投機を「正規の」商業と区別することはできない。商業の自由は資本主義であり、資本主義は投機である。——これに目をふさぐことは笑うべきことである。

それではどうすればよいのか？　投機を罰しないと宣言すべきであろうか？

そうではない。投機にかんするすべての法律を再検討し、改正して、どのような窃取も、また直接であろうと間接であろうと、公然であろうと非公然であろうと、国家的な統制、監督、記録の回避はすべて罰すべきものと宣言する（そして実際にこれをこれまでの三倍もの厳格さで追及する）ことが必要である。このように問題を提起することによってこそ（すでに人民委員会議ではこの仕事が始められた。すなわち、投機にかんする法律の改正の仕事を始めるように、人民委員会議はすでに指示した）、われわれは、ある程度まで不可避的で、われわれに必要な資本主義の発

展を、国家資本主義の軌道にむけることをなしとげるであろう。

政治的な総括と結論

あと私に残っていることは、以上に略説した経済との関連で、政治情勢がどのようになっており、またどのように変化したかに、簡単にでもふれておくことである。

一九二一年におけるわが経済の基本的な特徴が、一九一八年のときと同じであることは、すでに述べた。一九二一年の春は、——おもに不作と家畜の斃死とのために——そうでなくてさえ戦争と封鎖との結果としてきわめて苦しかった農民の状態を、極度に悪化させた。一般的にいって、小生産者の「本性」そのものとなっている政治的動揺は、このような悪化の結果であった。この動揺の最も顕著な現われが、クロンシタットの暴動であった。

クロンシタット事件で最も特徴的なことは、まさに小ブルジョア的要素の動揺である。十分にきまった形をとったもの、はっきりしたもの、明確なものは、非常に少なかった。「自由」、「商業の自由」、「農奴状態からの脱却」、「ボリシェヴィキのいないソヴェト」、またはソヴェトの改選、あるいは「党の執権（ディクタツーラ）」からの解放、その他等々の、ぼんやりしたスローガンがあった。メンシェヴィキもエス・エルも、クロンシタットの運動は「自分たちのものだ」と宣言している。ヴィクトル・チェルノーフがクロンシタットに急使を派遣した。すると、クロンシタットでは、この急使の提議にもとづいて、クロンシタットの指導者のひとりであるメンシェヴィキのヴァリクが「憲法制定議会」に賛成の票を投じた。すべての白衛派が、一瞬のうちに、いわば無電のような速さで、「クロンシタットのために」動員された。クロンシタットにいた白衛派の軍事専門家——コズロフスキーだけでなく、多くの専門家——が、オラーニエンバウム〔ロモノーソフ〕上陸計画を作成した。この計画は、動揺しているメンシェヴィキやエス・エルや無党派の大衆をおじけづかさせた。在外白衛派の五〇種以上のロシア語新聞は、ものすごい勢いで「クロンシタット支持」のカンパニアを展開した。大銀行、金融資本の全勢力が、クロンシタット援助のために醵（きょ）金を始めた。ブルジョアジーと地主の賢明な指導者であるカデットのミリュコーフは、憲法制定議会をいそぐにはあたらないこと、ボリシェヴィキさえぬきにすればソヴェト権力に賛成することができるし、またしなければならないことを、ばか者のヴィクトル・チェルノーフに直接に（またクロンシタットとの結びつきのためにペテルブルグの監獄につながれているメ

ソンシェヴィキのダンとロシコーフには間接に）辛抱づよく説明した。

　もちろん、小ブルジョア的な空文句の英雄チェルノーフや、「マルクス主義」をまねた小市民的改良主義の騎士マルトフのような、うぬぼれたばか者よりも利口であることは、むずかしいことではない。だが、じつのところ、要点は、ミリュコーフが個人としてより利口だということではなくて、大ブルジョアジーの政党指導者が、その階級的立場のゆえに、小ブルジョアジーの指導者チェルノーフやマルトフのような連中よりもいっそうはっきりと、問題の階級的本質と政治的な相互関係を見ており、いっそうよく理解しているという点にある。というのは、ブルジョアジーは真に階級的な勢力であって、この勢力は資本主義のもとでは、君主制下にあろうと、このうえなく民主的な共和制下にあろうと、不可避的に支配するし、また全世界のブルジョアジーの援助を不可避的にうけるからである。ところが、小ブルジョアジー、すなわち、第二インタナショナルと「第二半」インタナショナルのすべての英雄たちは、その経済的本質からして、階級的無力の表現でしかありえない――そこから、動揺や、空文句や、たよりなさが生まれてくるのである。一七八九年には、小ブルジョアはまだ大革命家でありえた。一八四八年には、彼らは滑稽で、みじめであった。一九一七―一九二一年には、彼らは反動の忌まわしい助手であり、その直接の従僕であって、彼らの名がチェルノーフやマルトフであろうが、あるいはカウツキー、マクドナルド、その他なんであろうが、彼らの真の役割からいえば、同じことである。

　マルトフは、彼のベルリンの雑誌[九]で、クロンシタットがメンシェヴィキのスローガンを実行しただけでなく、また白衛派や資本家や地主に全然奉仕しないような反ボリシェヴィキ運動も可能だということを証明したように言っているが、それは、まさにうぬぼれた小市民的ナルキッソス[一〇]の見本である。ほんものの白衛派がこぞってクロンシタットの連中にあいさつを送り、銀行をつうじてクロンシタット援助基金を集めたという事実には、あっさり目を閉じよう、というわけだ！　チェルノーフやマルトフのような連中にくらべて、ミリュコーフは正しい。というのは、彼は真の白衛派の勢力の、資本家と地主の勢力の、真の戦術を洩らしているからである。すなわち、ボリシェヴィキを打倒しさえすれば、権力の移動を実現しさえすれば、だれであろうと、たとえ無政府主義者であろうと支持しよう、どんなソヴェト権力でもよいから支持しよう！　右へであろうと左へであろうと、メンシェヴィキにであろうと無政府主義者にであろうと、どちらでもよい、ただボリシェヴィキか

ら権力が移動しさえすればよいのだ。あとは――「われわれ」ミリュコーフたちが、「われわれ」資本家と地主たちが、「自分で」やろう。無政府主義者や、チェルノーフとかマルトフとかいう連中は、われわれがたたきだそう、ちょうどシベリアでチェルノーフやマイスキーを、ハンガリーでハンガリーのチェルノーフやマルトフ一味を、ドイツでカウツキーを、ウィーンでフリードリヒ・アードラー一派を、たたきだしたように、と。こういう小市民的ナルキッソスども――メンシェヴィキ、エス・エル、無党派分子――を、真に実務的なブルジョアジーは、あらゆる革命で、あらゆる国で、何十回となく、何百人もたばにして、愚弄し、追いはらったのである。このことは歴史によって証明されている。このことは事実によって確かめられている。ナルキッソスどもはおしゃべりをするであろう。だが、ミリュコーフ一派や白衛派は行動するであろう。

「ボリシェヴィキから権力が移動しさえすれば、やや右へであろうとやや左へであろうと、どちらでもよい、あとはぞうさないことだ」と。――この点で、ミリュコーフはまったく正しい。これは、あらゆる国々の、中世以来数世紀にわたる近世史のあらゆる時代の革命の全歴史によって確認された階級的真理である。分散した小生産者である農民を経済的に、また政治的に統一するのは、ブルジョアジーか（資本主義のもとでは、あらゆる国で、近代のすべての革命でいつでもそうであったが、今後も資本主義のもとではいつでもそうであろう）、それともプロレタリアートか（近代史のいくつかの最も偉大な革命が最高の発展をとげたさいに、きわめて短い期間、萌芽的なかたちでそうであったが、一九一七―一九二一年のロシアでは、いっそう発展したかたちでそうであった）、そのどちらかである。「第三」の道や、「第三の勢力」についておしゃべりしたり、空想したりすることのできるのは、うぬぼれたナルキッソスどもだけである。

このうえない艱難辛苦のあげく、必死の闘争のなかで、ボリシェヴィキは、統治する能力のあるプロレタリアートの前衛を育てあげ、またプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）をつくりだして、それを守りとおした。そしてロシアにおける諸階級の力関係は、四年間の経験と実践とによる点検を経て、このうえなく明らかになった。すなわち、唯一の革命的階級の鋼鉄のような、鍛えあげられた前衛と、動揺する小ブルジョア的要素と、国外に隠れて全世界のブルジョアジーの支持をうけているミリュコーフ一味、資本家、地主とが、それである。問題は、明らかなうえにも明らかである。あらゆる「権力の移動」を利用している者、また利用することができる者は、この後者だけである。

さきに引用した一九一八年の小冊子では、このことについて率直に次のように述べている。「主要な敵」は「小ブルジョア的要素〔自然発生性〕である。「われわれがこの小ブルジョアをわれわれの統制と記録に服させるか、それとも、まさにこの小所有者層を基盤として生まれてくるナポレオンやカヴェニャクの徒が革命を打ち倒したように、小ブルジョアが必然的、不可避的にわれわれの労働者権力を打ち倒すか、どちらかである。問題はこんなふうに立てられているのだ。問題はこうでしかない。」[101]（一九一八年五月五日の小冊子から。前出参照）。

われわれの強みは、現存するすべての階級勢力――ロシアのそれも、また国際的なそれも――の評価が完全に明瞭で、冷静になされていることであり、つぎに、そこから生じることであるが、闘争における鉄のエネルギー、不屈、果断、献身である。われわれの敵は多いけれども、彼らは分裂しているか、さもなければ自分がなにを望んでいるのかを知らない（すべての小ブルジョア、すべてのマルトフやチェルノーフのような連中、すべての無党派分子、すべての無政府主義者がそうである）。ところが、われわれは、直接には自分たちのあいだで団結しており、間接には万国のプロレタリアと団結しており、自分がなにを望んでいるのかを知っている。だから、われわれは世界的規模で不敗である。そうは言っても、個々のプロレタリア革命がときおり敗北することがまったくありえないわけではない。

小ブルジョア的要素が自然発生性とよばれるのは、それだけの理由のあることである。というのは、これは、ほんとうに最も無定形な、漠然とした、無自覚な或るものだからである。小ブルジョアジーのナルキッソスたちは、「普通選挙」が資本主義のもとで小生産者の本性をなくしてしまうものと思っているが、実際には、それは、ブルジョアジーが、教会や出版や教育や警察や軍部や、また何千というかたちの経済的抑圧の助力によって、分散した小生産者を自分に従属させるのを助ける。零落、窮乏、生活の苦しさが動揺を引きおこして、きょうはブルジョアジーの味方をさせ、あすはプロレタリアートの味方をさせる。動揺にもちこたえ、それに対抗することができるのは、鍛えられたプロレタリアートの前衛だけである。

一九二一年春の事件は、エス・エルとメンシェヴィキの役割をいま一度示した。彼らは、動揺する小ブルジョア的要素がボリシェヴィキから遠ざかって、資本主義や地主に有利な「権力の移動」をおこなうのを援助している。メンシェヴィキとエス・エルは、今度は「無党派分子」に変装することを学んだ。このことは十分に証明されている。いまでもこのことがわからず、またわれわれはばかにされて

はならないということが理解できないのは、それこそぼか者だけである。非党員会議は物神ではない。まだ手つかずの大衆、政治のそとにいる数百万の勤労者層に近づくことができれば、このような会議は貴重である。だが、「無党派分子」に変装したメンシェヴィキやエス・エルに演壇をあたえるものならば、有害である。こういう連中は、暴動を助け、白衛派を助けているのである。メンシェヴィキやエス・エル――公然の者も、無党派分子に変装した者も――の席は、監獄のなかに（または白衛派といっしょに外国の雑誌のなかに）あって（われわれはよろこんでマルトフを外国へ放してやった）、非党員会議のなかにはない。大衆の気分を確かめ、彼らに近づく別の方法を見いだすことができるし、また見いださなければならない。社会主義遊び、憲法制定議会遊び、非党員会議遊びをしたい者は、外国に行くがよい。どうぞ、あちらへ、マルトフのところへ行ってください。そして「民主主義」のすばらしさを味わってください。このすばらしさがどんなものであるか、どうぞヴランゲリ閣下の兵士たちにくわしく尋ねてくださ い。しかし、われわれは、「会議」で「反対派」遊びなどしているひまはない。われわれは全世界のブルジョアジーに取りまかれているが、彼らは「自分の身内の者」を復帰させ、地主とブルジョアジーを復活させようと、たえずすきをうかがっている。われわれは、メンシェヴィキとエス・エルを、公然の者も、「無党派分子」に変装した者も、同じように監獄に入れよう。

われわれは、政治にふれたことのない勤労大衆と、あらゆる方法で――メンシェヴィキやエス・エルに自由な活動の場をあたえ、ミリュコーフにとって有利な動揺をかもしだす自由な場をあたえるような方法を除いて――いっそう密接な結びつきをつくるであろう。われわれは、何百人何千人という無党派の人々を、大衆のなかの、普通の労働者農民のなかのほんとうの無党派の人々を、ソヴェト活動に、なによりもまず経済活動に、とくに熱心に登用するであろう。ミリュコーフにとって非常に有利なメンシェヴィキやエス・エルの指令をカンニング・ペーパーを使って読みあげるために無党派分子に「変装した」ような者を、登用するのではない。われわれのところでは、何百、何千人という無党派の人々が活動している。そしてそのうちの何十人かは、最も重要な責任ある地位にある。彼らの活動をもっと点検しなければならない。何千という普通の勤労者をもっと登用して、新たに点検し、彼らを何百人となく、系統的に、不断に試験し、経験による点検にもとづいて彼らをより高い地位に引きあげねばならない。

わが国の共産主義者は、これまでのところ、まだ管理と

いう自分の真の任務をほとんど理解できずにいる。その任務とは、懸命に努力しながら成功せず、二〇もの仕事に手をつけながらただの一つもやりおおせないというやり方で、「万事」を「自分で」やろうと努力することではなくて、何十、何百人という助力者の仕事を点検し、彼らの仕事の点検を下から、すなわち真の大衆の手でおこない、仕事を方向づけ、知識のある者（専門家）や大経営を切り盛りした経験のある者（資本家）から学ぶことである。軍事専門家の一〇分の九までは機会さえあれば裏切りかねないとはいえ、賢明な共産主義者は、この軍事専門家から学ぶことを恐れない。賢明な共産主義者は、資本家（それが利権契約者である大資本家であろうと、委託販売商人であろうと、協同組合員である小資本家その他であろうと、同じである）が軍事専門家よりもましではないにしても、彼らから学ぶのを恐れない。赤軍では、裏切者の軍事専門家をとっつかまえ、誠実で良心的な人々を選びだし、全体として数千、数万人の軍事専門家を利用することを学んだのであった。われわれは、技師や教師についても同じようにすることを（独特なかたちで）学びつつある――赤軍の場合よりはずっとまずい仕方ででではあるが（赤軍の場合には、デニーキンやコルチャックがせっせとわれわれを駆りたてて、もっと速やかに、もっと熱心に、もっと分別をもって学ぶようにしむけたのである）。委託販売商人についても、協同組合員であ家のために働いている買集人についても、国る資本家についても、利権契約者である企業家その他についても、同じようにすることを（これまた独特なかたちで）学ぶであろう。

労働者農民の大衆は、彼らの状態をすぐさま改善することを必要としている。われわれは、無党派の人々をふくめた新しい勢力を有益な仕事につけて、この改善を達成しよう。食糧税や、これと結びついた多くの方策が、これを助けてくれるであろう。われわれは、これによって、小生産者の不可避的な動揺の経済的な根源を切りとるであろう。だが、ミリュコーフにだけ有利な政治的動揺とは、われわれは容赦なく闘争するであろう。動揺している者は多い。われわれは少ない。動揺している者は分裂している。われわれは団結している。動揺している者は、経済的に独立していない。プロレタリアートは経済的に独立している。動揺している者は、自分がなにを望んでいるのかを知っていない。なにかやりたい気はあるのだが、ミリュコーフが許してくれないのだ。しかし、われわれは自分がなにを望んでいるのかを知っている。

それだからこそ、われわれは勝利するだろう。

結び

総括しよう。

食糧税は、戦時共産主義から正規の社会主義的な生産物交換への過渡である。

一九二〇年の不作によって激化された極度の荒廃は、大工業を急速に復興することが不可能なために、この移行を緊急に必要としている。

そこで、まず第一に、農民の状態を改善することである。その手段は食糧税であり、農業と工業との交易の発展であり、小工業の発展である。

交易は、商業の自由であり、資本主義である。それは、小生産者の分散性とたたかい、またある程度までは官僚主義ともたたかうのを助ける度合におうじて、われわれにとって有利である。その度合をきめるのは、実践であり、経験である。プロレタリアートが、権力をその手に固くにぎっており、運輸と大工業をその手に固くにぎっているかぎり、ここにはプロレタリア権力にとって恐ろしいものはなにもない。

投機との闘争を、窃取との闘争に、国家的な監督や記録や統制の回避との闘争に、変えなければならない。このような統制によってわれわれは、ある程度不可避的な、またわれわれにとって必要な資本主義を、国家資本主義の軌道にむけるであろう。

農業と工業との交易を奨励する仕事で、現地のイニシアティヴ、創意、自立性を全面的に、あらゆる手段で、ぜがひでも発展させなければならない。この点についての実地の経験を研究しなければならない。そして、その経験をできるだけ多様なものにしなければならない。

農民農業に役だち、その振興を助ける小工業に援助をあたえなければならない。ある程度まで、国家の原料を分けあたえることによってでも、これに援助をあたえなければならない。原料をねかせておくことは、なによりも犯罪的なことである。

商人も、協同組合員である小資本家も、資本家もふくめて、すべてのブルジョア専門家から「学ぶ」ことを、共産主義者は恐れてはならない。形式はちがっていても、実質上は、われわれが軍事専門家から学び習得したのと同じように、彼らから学ばなければならない。「学習」の結果は、もっぱら実地の経験によって点検しなければならない。——ブルジョア専門家と組んでやったときよりもいっそうよくやりたまえ、なんとかして、農業の振興、工業の振興、農業と工業との交易の発展を達成したまえ。「授業料」を

支払うのにけちけちするな。学習がちゃんとおこなわれさえすれば、高い授業料を支払っても惜しくはない。

あらゆる手段で勤労大衆を援助し、彼らに接近し、彼らのなかから数百、数千人の非党員の活動家を、経済活動に登用せよ。実際には当世流行のクロンシタット式無党派という服装に着がえたメンシェヴィキやエス・エルにほかならない「無党派」分子は、用心のために監獄に入れておくか、あるいは純粋民主主義のあらゆる美点を自由に味わわせるために、チェルノーフやミリュコーフやグルジアのメンシェヴィキと自由に意見を交換させるために、ベルリンのマルトフのところへ送りこまなければならない。

一九二一年四月二一日

一九二一年五月にモスクワで国立出版所発行の単行の小冊子として発行
全集、第五版、第四三巻、二〇五—二四五ページ所収
邦訳全集、第三二巻、三五四—三九五ページ所収

共産主義インタナショナル第三回大会（一〇一）

一九二一年六月二二日―七月一二日

一　共産主義インタナショナル第三回大会でのロシア共産党の戦術についての報告要綱

一　ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の国際的地位

現在、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の国際的地位は、ある種の均衡を特徴としている。この均衡はきわめて不安定なものではあるが、それでもやはり、世界政治の特異な情勢をつくりだした。

この特異性は次の点にある。一方では、国際ブルジョアジーは、ソヴェト・ロシアにたいする気違いじみた憎しみと敵意にみちており、ソヴェト・ロシアの息の根をとめるために、いつなんどきでもそれに襲いかかろうと用意をととのえている。他方では、当時ソヴェト権力はいまよりも弱く、またロシアの地主と資本家はロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の領土内に幾多の軍隊をもっていたにもかかわらず、国際ブルジョアジーに数億フランも使わせた軍事干渉の試みはすべて、完全な失敗に終わった。すべての資本主義国で、ソヴェト・ロシアとの戦争にたいする反対が非常に強まって、プロレタリアートの革命運動を育て、小ブルジョア的民主主義派のきわめて広範な大衆をまきこんでいる。さまざまな帝国主義国の利害の対立は、日ごとにますます深刻に激化してきたし、いまも激化しつつある。東洋の幾億の被抑圧民族のあいだでは、革命運動がめざましい勢いで成長している。これらすべての条件の結果、国際帝国主義は、ソヴェト・ロシアよりはるかに強大であるにもかかわらず、ソヴェト・ロシアの息の根をとめる力がなく、一時ソヴェト・ロシアを承認するか、なかば承認するかして、それと通商条約を結ばないわけにはいかなくなった。

きわめてふたしかで、きわめて不安定なものではあるが、

それでも社会主義共和国が資本主義的包囲のなかで——もちろん、短い期間であるが——生存していけるような均衡が生じた。

二 国際的規模での階級勢力の相互関係

このような事態にもとづいて、国際的規模での階級勢力の相互関係は次のようになっている。

ソヴェト・ロシアにたいして公然たる戦争をおこなう可能性を失った国際ブルジョアジーは、諸般の状況がこの戦争の再開を可能とする時機をうかがって、待機している。先進資本主義諸国のプロレタリアートは、すでにどこでも自分の前衛である共産党を出現させた。これらの共産党は、それぞれの国のプロレタリアートの多数者の獲得をめざしてたゆみなくすすみながら、古い労働組合官僚や、帝国主義的特権によって腐敗させられたアメリカやヨーロッパの労働者階級の上層の影響を打ち破りながら、成長している。

資本主義諸国の小ブルジョア民主主義派——その先進的部分は、第二インタナショナルと第二半インタナショナルによって代表されている——は、工業および商業の労働者や職員の多数者ないしかなり大きな部分がひきつづきその影響のもとにあるため、現在では資本主義の主要な支柱となっている。彼らは、革命が起これば、帝国主義の特権によってつくりだされた自分の比較的に安楽な小市民的生活を失いはしないかと気づかっている。しかし、深まってゆく経済恐慌はどこでも広範な大衆の状態を悪化させており、この事情は、資本主義が存続するかぎり新しい帝国主義戦争が避けられないことがますます明白になっていることとあいまって、前記の支柱をますます激しくぐらつかせている。

地球人口の大多数を占める植民地・半植民地諸国の勤労大衆は、すでに二〇世紀の初頭から、とくにロシア、トルコ、ペルシア、中国の革命によって、政治生活にめざめさせられている。一九一四—一九一八年の帝国主義戦争とロシアのソヴェト権力とは、これらの大衆を、世界政治と帝国主義の革命的破壊とにおける積極的な要因に、最後的に変えつつある。もっとも、第二および第二半インタナショナルの指導者をもふくめた、ヨーロッパとアメリカの教養ある俗物たちは、いまなお頑強にこのことを認めようとしない。イギリス領インドはこれらの国々の先頭に立っている。一方では、同国の工業および鉄道プロレタリアートが有力となればなるほど、他方では、イギリス人のテロルがますます残忍となって、大量虐殺（アムリツァル[103]）や、公

衆の面前での笞刑などの手段にますます頻繁にうったえればうったえるほど、インドの革命は、それだけ急速に成長してゆく。

三　ロシア国内の階級勢力の相互関係

ソヴェト・ロシアの国内政治情勢を規定しているものは、世界史上はじめてのことであるが、この国には何年にもわたって二つの階級しか存在していないという事情である。すなわち、きわめて日が浅いがそれでもやはり近代的な機械制大工業によって数十年のあいだ訓練されてきたプロレタリアートと、人口の大多数を占める小農民とがそれである。

ロシアでは、大土地所有者と資本家は消滅したわけではないが、完全に収奪されて、階級としては政治的にまったく粉砕され、その残存分子はソヴェト権力の国家職員のなかに身を隠してしまった。彼らは、国外に亡命者として階級的組織を維持している。これらの亡命者は、おそらく一五〇万人から二〇〇万人にのぼっており、あらゆるブルジョア政党や「社会主義的」（すなわち、小ブルジョア的）政党の日刊新聞合計五〇種以上と、軍隊の残片とをもち、国際ブルジョアジーと多くの結びつきをもっている。これらの亡命者は、全力をあげ、あらゆる手段をつくして、ソヴェト権力を破壊し、ロシアに資本主義を復活させるためにはたらいている。

四　ロシアにおけるプロレタリアートと農民

ロシアのこういう国内情勢のもとで、支配階級としてのロシアのプロレタリアートの現在における主要な任務は、農民を指導するため、農民と強固な同盟を結ぶため、多くの漸進的な過渡段階を経て大規模な社会化された機械化農業に移行してゆくために必要な措置を、正しく決定し、実現してゆくことである。わが国の後進性のために、そのうえ七年にわたる帝国主義戦争と内戦によって国土が極度に荒廃させられているために、ロシアではこの任務はとくに困難である。だが、そういう特殊性を別にしても、この任務は、すべての資本主義国――たぶん、イギリスただ一国を例外として――がやがて当面するであろう社会主義建設の最も困難な任務の一つである。しかし、そのイギリスについても、同国では小借地農業者の階級がとくに少数であるとはいえ、そのかわり、イギリスに「属する」植民地に住む数億の人々の事実上の奴隷状態の結果、イギリスでは労働者や職員のうちで小ブルジョア的生活をおくるもののパーセントが異常に高いことを忘れてはならない。

だから、単一の過程としての世界プロレタリア革命の発展の見地からすれば、ロシアがいま際会している時期の意義は、自分の手に国家権力をにぎったプロレタリアートの小ブルジョア大衆にたいする政策が、実地にためされ、点検されるという点にある。

五　ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国におけるプロレタリアートと農民の軍事的同盟

ソヴェト・ロシアにおけるプロレタリアートと農民の正しい相互関係の基礎は、一九一七―一九二一年の時期につくりだされた。この時期に、全世界のブルジョアジーと、さらに小ブルジョア民主主義派のすべての政党（エス・エルとメンシェヴィキ）とに支持された資本家と地主の侵攻が、ソヴェト権力を守るためのプロレタリアートと農民の軍事的同盟をつくりだし、打ちかため、それを確固たるものとしたのである。内戦は階級闘争の最も鋭い形態であって、この闘争が鋭くなればなるほど、その闘争の炎のなかで、あらゆる小ブルジョア的な幻想や偏見がますます急速に燃えつきてゆき、農民を救いうるものはプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）だけであり、エス・エルやメンシェヴィキは事実上地主や資本家の召使にすぎないことを、実践そのものが、農民の最も遅れた層にさえますますはっきりと示すようになる。

だが、プロレタリアートと農民の軍事的同盟が彼らの強固な同盟の最初の形態であった――またそうでないわけにはいかなかった――としても、もしこの同盟は、この両階級のあいだに一定の経済的同盟がなかったら、数週間とはつづかなかったであろう。農民は労働者国家から土地の全部を受け取り、この国家の手で地主や富農から保護してもらった。他方、労働者は、大工業が復興するまで、農民から食糧を借りうけた。

六　プロレタリアートと農民の正しい経済的相互関係への移行

運輸と大工業が完全に復興されて、プロレタリアートが農民や農民経営の改善に必要なあらゆる生産物を食糧と引換えに農民にあたえることができるようになったときにはじめて、小農民とプロレタリアートの同盟は、社会主義の見地からみて完全に正常な、安定したものとなることができる。国が非常に荒廃していたので、そういう状態を一挙に達成することは、まったく不可能であった。十分に組織されていない国家にとって、割当徴発制は、地主にたいする前代未聞の困難なたたかいにもちこたえるのに、最も実

行しやすい措置であった。一九二〇年の不作と飼料不足とは、そうでなくても苦しい農民の困窮をとくに激しいものにし、そのため、ただちに食糧税に移行することが無条件に必要になった。
適度の食糧税は、農民の状態の大幅な改善をただちにもたらすとともに、農民に作付面積の拡大と農耕の改善とにたいする関心をいだかせる。
食糧税は、農民の余剰穀物全部を徴発することから、工業と農業のあいだの正規の社会主義的な生産物交換に移ってゆく過渡である。

七　ソヴェト権力が資本主義や利権事業を許すことの意義とその条件

食糧税は、当然のこととして、税を支払ったあとに残った余剰を、農民が自由に処分できることを意味する。国家がこの余剰の全部と引換えに農民に社会主義的工場の生産物を供給することができないかぎりは、余剰を売買する自由が資本主義の発展の自由を意味することは避けられない。
しかし、右に述べた限界内では、このことは、運輸と大工業がプロレタリアートの手中に残されているかぎり、社会主義にとってすこしも恐ろしいことではない。それどころか、極度に荒廃した、遅れた小農民国では、プロレタリア国家の統制と規制のもとでの資本主義（すなわち、この意味での「国家」資本主義）の発展は、農民農業の即時の振興を速めることができるという点で、有益でもあり、必要でもある（もちろん、ある程度までにすぎないが）。このことは利権事業にいっそうよくあてはまる。ソヴェト大工業の復興を速める可能性をわれわれにあたえてくれる追加の設備や機械を外国の資本家から手に入れるために、労働者国家は、国有化をすこしも解除することなく、特定の鉱山、林区、油田その他を外国資本家に貸し付けるのである。
きわめて貴重な生産物の分けまえというかたちで利権契約者になされる支払いは、疑いもなく、労働者国家が世界ブルジョアジーにおさめる貢物である。われわれは、このことをすこしもあいまいにするものではないが、それとともに、それがわが国の大工業の復興と労働者農民の状態の大幅な改善とを促進さえするなら、こういう貢物をおさめることはわれわれに有利なことを、はっきり理解しなければならない。

八　われわれの食糧政策の成功

一九一七―一九二一年におけるソヴェト・ロシアの食糧

政策は、疑いもなく、きわめて粗雑で、不完全なものであって、ゆきすぎも多かった。それを実施するさいにいろいろな誤りがおかされた。しかし、全体としてみれば、それはこのような条件のもとで可能な唯一の政策であった。そして、この政策はその歴史的課題を果たした。すなわち、荒廃し遅れた国のプロレタリア執権を救ったのである。この政策がしだいに改善されてきたことは、争う余地のない事実である。われわれが完全に権力をにぎった第一年度（一九一八年八月一日―一九一九年八月一日）に、国家は一億一〇〇〇万プードの穀物を集めたが、第二年度には二億二〇〇〇万プード、第三年度には二億八五〇〇万プードあまりも集めた。われわれがすでに実地の経験をつんでいる現在では、われわれは、四億プード（食糧税の総量は二億四〇〇〇万プード）を集めるという課題をとりあげており、またそれだけ集められるものと期待している。労働者国家は、十分な食糧フォンドの実際の所有者である場合にはじめて、経済的にしっかりと自立し、徐々にではあっても着実に大工業を復興させ、正常な財政制度をつくりだすことができる。

九　社会主義の物質的基礎とロシアの電化計画

社会主義の唯一の物質的基礎になることができるのは、農業をも改造できる機械制大工業である。しかし、この一般的命題にとどまっていてはならない。それを具体化することが必要である。最新の技術の水準をみたし、農業を改造できる大工業とは、全国の電化である。われわれは、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国のそういう電化計画を作成する科学的な仕事をやりとげなければならなかった、そして、われわれはこの仕事をなしとげた。この仕事は、二〇〇人以上のロシアの最もすぐれた科学者、技師、農学者が参加して完成され、一冊の大部の書物として印刷に付され、一九二〇年一二月の第八回全ロシア・ソヴェト大会で大体において承認された。いまではすでに全ロシア電気技術者大会(102)の招集が準備されており、この大会は一九二一年八月にひらかれて、この仕事を詳細に検討することになっている。そのうえで、この仕事は最後的に国家の確認をうけるであろう。第一期の電化工事は一〇年を予定しており、約三億七〇〇〇万労働日を必要とするであろう。

一九一八年にはわが国に八つの発電所（出力四七五七キロワット）が新しく建設されたが、一九一九年にはこの数

字は三六（出力一六四八キロワット）にふえ、一九二〇年には一〇〇（出力八六九九キロワット）にふえた。

この端緒がわが広大な国としてどんなにつつましいものであろうと、ともかく端緒はつけられたし、仕事は始められて、だんだん順調にすすんでいる。帝国主義戦争を経たあとでは、ドイツで捕虜になっていた一〇〇万人が現代の先進国技術を知ったあとでは、苦しいがひとをきたえる内戦を三年にわたって経験してきたあとでは、ロシアの農民はもはや昔の農民ではない。小農耕者大衆を資本への奴隷制からぬけださせ、社会主義へみちびいてゆくことのできるのは、ただ一つプロレタリアートの指導だけだということを、農民は一月ごとにますますはっきりと、ますます明瞭に理解するようになっている。

一〇　資本の同盟者としての「純粋民主主義派」、第二および第二半インタナショナル、エス・エルおよびメンシェヴィキの役割

プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、階級闘争の停止を意味するものではなく、新しい形態で、また新しい用具でそれをつづけることを意味する。階級が残っているあいだは、一国で転覆されたブルジョアジーが国際的な規模で社会主義にたいする攻撃を一〇倍にも強化しているあいだは、この執権（ディクタツーラ）は必要である。小農耕者の階級は、過渡期には多くの動揺を経験しないわけにはいかない。過渡期にともなう困難や、ブルジョアジーの影響がときおりこの大衆の気分のなかに動揺をひきおこすことは、避けられない。プロレタリアートは、その生存の基礎である機械制大工業が破壊されたために弱められ、ある程度階級からの脱落を生んではいるが、これらの動揺にさからってもちこたえ、資本のくびきからの労働の解放という自分の事業を最後まで遂行するという、きわめて困難な、最も偉大な歴史的任務が、このプロレタリアートに負わされている。

小ブルジョア民主主義諸党、すなわち第二および第二半インタナショナルの諸党の政策は、小ブルジョアジーの動揺の政治的現われである。ロシアでは、エス・エル（「社会革命党」）とメンシェヴィキの諸党がそれである。これらの党は、現在、国外にその本部や新聞をもっていて、事実上ブルジョア的反革命派全体とブロックを結び、忠実に彼らの御用をつとめている。

ロシアの大ブルジョアジーの賢明な指導者たちと、その先頭に立つ「カデット」党（「立憲民主党」）の指導者ミリュコーフとは、小ブルジョア民主主義派、すなわちエス・エルとメンシェヴィキのこうした役割を、まったくはっき

りと、正確に、あからさまに、評価した。メンシェヴィキとエス・エルと白衛派が力を合わせておこしたクロンシタットの反乱のさい、ミリュコーフは「ボリシェヴィキぬきのソヴェト」というスローガンに賛成した。こういう考えを展開して、彼は、エス・エルとメンシェヴィキに「名誉と地位を」(『プラウダ』一九二一年、第六四号、パリの『ポスレードニエ・ノーヴォスチ』(102)から引用)と書いた。なぜなら、ボリシェヴィキから権力を最初に移動させる任務は彼らにかかっているからだ、というのである。小ブルジョア民主主義派が権力を維持する能力がなく、つねにブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)のおおいの役、ブルジョアジーの全能権力にみちびく踏み台の役をつとめるにすぎないことは、すべての革命が示していることであって、大ブルジョアジーの指導者であるミリュコーフは、この教訓を正しく汲みとっているのである。

ロシアのプロレタリア革命は、一七八九―一七九四年と、一八四八―一八四九年とのこの経験をかさねて確認し、またフリードリヒ・エンゲルスの次のことばを確認している。エンゲルスは、ベーベルにあてた一八八四年一二月一一日の手紙で、次のように書いているのである。

……「革命の時機には、純粋民主主義派が、……ブルジョア経済全体の、また封建経済さえもの最後の頼みの綱として』、一時的に重要性をもつようになることがある。……たとえば一八四八年三月から九月まで、封建的=官僚的な大衆は、革命的大衆を抑えつけておくために、こぞって自由主義者の尻(しり)おしをした。……とにかく、危機の当日とその翌日とにおけるわれわれの唯一の敵は、純粋民主主義派のまわりに集まる反動派全体であって、このことを見のがしてはならないと、私は考える」(103)(ロシア語では、一九二一年六月九日付の『コムニスチーチェスキー・トルード』(104)、一九二一年、第三六〇号所載の同志ヴェ・アドラツキーの論文『マルクスとエンゲルスの民主主義論』のなかにはいっている。ドイツ語では単行本、フリードリヒ・エンゲルス著『政治的遺言』、ベルリン、一九二〇年、「国際青年文庫」第一二冊、一九ページにのっている)。

エヌ・レーニン

モスクワ、クレムリ、一九二二年六月一三日

一九二二年にモスクワでコミンテルン出版部発行の単行の小冊子としてはじめて発表
全集、第五版、第四四巻、三―一二ページ所収
邦訳全集、第三三巻、四八一―四九〇ページ所収

二　共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説

七月一日

同志諸君、たいへん残念なことに、私は自己防衛に限らなければならない。(笑声) たいへん残念なことに、と私が言うのは、同志テラチーニの演説を聞き、三つの代表団(二〇八)から提出された修正提案を読んだあとでは、私は、攻勢に出たい気持が大いに起こっているからである。なぜなら、テラチーニとこれらの三つの代表団が主張した見解にたいしては、ほんとうのところ、攻勢行動をとる必要があるからである。もし、こういう誤りにたいして、こういう「左翼的」愚論にたいして、大会が断固として攻勢に出ないなら、全運動は破滅するほかはないであろう。これは私の深い確信である。だが、われわれは、組織された、規律あるマルクス主義者である。われわれは、個々の同志に反対して演説するだけで事たれりとするわけにはいかない。われわれロシア人は、こういう左翼的空文句には、もう胸のわるくなるほどうんざりしている。われわれは組織の人間である。われわれの計画をつくりあげるさいには、われわれは、組織的に行動し、正しい方向を見いだすようにつとめなければならない。もちろん、われわれのテーゼが一つの妥協だということは、だれにも秘密ではない。だが、なぜそうであってはならないのか？　すでに三回目の大会を開催中で、明確な基礎命題を仕上げずみの共産主義者のあいだでは、ある種の条件のもとでは妥協が必要である。ロシア代表団から提出されたわれわれのテーゼは、きわめて綿密に研究され準備されたもので、長いあいだ熟考しさまざまな代表団と協議した結果であった。それは、共産主義インタナショナルの基本方針の確立を目的としており、われわれがほんとうの中央派を正式に非難したばかりか、党から除名したあとの現在では、とくに必要なものである。これが事実である。私はこのテーゼの擁護にあたらなければならない。いまテラチーニが登場して、中央派にたいするわれわれの闘争をつづけなければならないと言い、ついでこの闘争をどういうふうにやるつもりかを語るとき、私は次のように言う。——もし、これらの修正提案が一定の方向を示そうとしているのであれば、その方向に反対して仮借なくたたかう必要がある、と。なぜなら、そうしなければ、共産主義はなくなり、共産主義インタナショナルもなくなるだろうからである。ドイツ共産主義労働者党がこの修正提案に署名していないのが、不思議なくらいである。(笑声) なぜなら、テラチーニが主張していること、またこ

れらの修正案が言っていることを、まあ聞きたまえ。それは、こういうふうに始まっている。「第一ページ、第一欄、第一九行、『……多数者』ということばは削除すべきである」と。多数者だと！　これははなはだ危険だ、というわけだ！（笑声）つづけてそのあとにこう書いてある、「原則」〔一究〕ということばを「目的」ということばに代えるべきである、と。原則と目的――これは二つの違ったものである。目的についてなら、無政府主義者でもわれわれに同意することだろう。搾取や階級区別の廃止には、彼らも賛成だからである。

私の生涯に会って話し合ったことのある無政府主義者はたくさんはいないが、それでもかなりの数の無政府主義者に会った。私は、目的についてはときには彼らと了解をつけることができたが、原理についてはけっして了解をつけられなかった。原理は目的ではなく、綱領でもなく、戦術でもなく、理論でもない。戦術と理論、これは原理ではない。原理の点で、われわれと無政府主義者との違いはどこにあるか？　共産主義の原理は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を樹立すること、過渡期に国家的強制を行使することにある。これが共産主義の原理である。だが、これはその目的ではない。だから、このような提案をした同志諸君は、誤りをおかしたのである。

第二に、そこにはこう言っている。「『多数者』ということばを削除すべきである」と。このくだりの全文を読んでみたまえ。

「共産主義インタナショナル第三回大会は、多くの国で客観的情勢が革命的に激化した条件のもとで、また多くの共産主義的大衆党が組織されたが、どこでもそれらの党が労働者階級の真の革命闘争のなかでこの階級の多数者にたいする実際の指導権をにぎるにいたっていない条件のもとで、戦術問題の再検討にあたっている。」

この箇所で「多数者」ということばを削除しようというのである。もしわれわれがこんな簡単な事柄でさえ了解をとげることができないのなら、いったいどうしたらいっしょに活動して、プロレタリアートを勝利にみちびくことができるのか、私にはわからない。そんなふうでは、原理の問題でもわれわれが合意に達することができないのは、不思議ではない。すでに労働者階級の多数者をにぎっている党があるなら、教えてもらいたいものである。テラチーニは、なにか実例をあげようとは思いつかなかった。それに、そんな実例はどこにもないのである。

こういうわけで、「原理」ということばを「目的」ということばに代え、「多数者」ということばを削除せよ、というのだ。ありがたいしあわせだ！　われわれはこれには

応じないことにする。ドイツの党、最良の党の一つであるこの党でさえ、労働者階級の多数者を味方につけてはいない。これは事実である。われわれは、きわめて重大な闘争に直面しているが、この真実を語ることを恐れない。ところが、ここに三つの代表団があって、うそをつくことから始めたがっている。というのは、もし大会が「多数者」ということばを削除するなら、とりもなおさず、大会はうそをつきたがっているのだということを示すことになるからである。これはまったく明らかである。

つぎに、こういう修正提案が出されている。「第四ページ、第一欄、第一〇行、『公開状等々』[一〇]ということばは削除すべきである。」私は、これと同じ思想を述べた演説をきょうすでに一度聞いている。だが、そこではこの思想はまったく当然であった。それは、ドイツ共産主義労働者党の党員、同志ヘンペルの演説であった。「『公開状』は日和見主義の行為であった」と、彼は言った。私がはなはだ遺憾とし、心から恥ずかしいと思っていることであるが、私はこういう見解をこれまでにも私的な会話で耳にしたことがある。だが、大会で、あんなに長時間討論したあとで、『公開状』は日和見主義的だと公言するとは、恥ずかしいことである、恥さらしである！　ところが、ここに三つの代表団を代表して同志テラチーニが登場し、『公開状』ということばを削除したいと言うのである。そんなら、なんのためにドイツ共産主義労働者党とたたかうのか？　『公開状』は、模範的な政治的方策である。われわれのテーゼはそう言っている。そして、われわれはこのことを無条件に主張しなければならない。『公開状』は、労働者階級の多数者を引きよせる実践的方策の最初の行為として、模範的なものである。ヨーロッパで——そこではプロレタリアのほとんど全部が組織されているのだ——われわれが労働者階級の多数者を獲得しなければならないことがわからないような人間は、共産主義運動には無縁の人であり、三年にわたる大革命のあいだにまだこのことを学びとらなかったとすれば、彼は今後ともけっして学びとることはないであろう。

ロシアでは党は非常に小さかったのに諸君は勝利したではないか、とテラチーニは言う。チェコスロヴァキアについてテーゼが述べていることに、[一一]テラチーニは不満なのである。この箇所については二七の修正提案が出ている。それらの修正提案を批判しようと思えば、私は、何人かの演説者がやったように、三時間以上もしゃべらなければならないであろう。……チェコスロヴァキア共産党は三〇万人から四〇万人の党員を擁している、多数者を獲得し、不敗の勢力をつくりだし、ひきつづき新しい労働者大衆を獲得

することが必要であると、この会議で言われた。そこでテラチーニは、さっそく攻撃の準備をする。彼は言う。——もしすでに四〇万人もの労働者が党にいるなら、それ以上の党員がなんで必要なのか？　削除したまえ！（笑声）彼は、「大衆」ということばを恐れ、それを駆逐したがっているのである。同志テラチーニはロシア革命をあまりよく理解していない。

われわれはロシアでは小さな党であったが、それ以外に全国の労働者・農民代表ソヴェトの多数者を味方にもっていた。（「そのとおり！」という声）諸君のところにこんなふうのものがあるだろうか？　われわれは軍隊の半数近くを味方につけていたが、この軍隊には当時すくなくとも一〇〇〇万人はいた。いったい諸君は軍隊の多数者を味方としているだろうか？　もしそういう国があるなら、教えてもらいたい！　同志テラチーニのこういう見解になお三つの代表団が同意しているとすれば、インタナショナルでは万事うまくいっているわけではないということになる！　それなら、われわれはこう言わなければならない。「とまれ！　徹底的にたたかおう！　でなければ、共産主義インタナショナルは滅びてしまう」と。

私は防御の立場をとっているとはいえ（笑声）、自分のもちあわせている経験にもとづいてこう言わなければならない。私の演説の目的と原理は、わが党の代表団の提案した決議とテーゼを擁護することである。もちろん、その一字も変えてはならないなどと言えば、ペダンティズムになるだろう。私は、これまでたくさんの決議を読んできたが、その一行一行にすばらしい修正をくわえようと思えばそうできることを、よく知っている。だが、それはペダンティズムというものであろう。いま、それにもかかわらず私が、政治的には一字も変えるわけにいかないと言明するとすれば、それは、これらの修正提案が、私の見るところでは、まったく明確な政治的性格をおびているからである。それらの提案が、共産主義インタナショナルにとって有害で危険な道にみちびくからである。この理由で、私も、われわれみなも、ロシア代表団も、このテーゼの一字も変えるわけにいかないと、主張せざるをえないのである。われわれは、自党の右翼分子を非難しただけでなく、彼らを追放した。しかし、テラチーニのように、右派との闘争をスポーツに仕立てあげるものがあれば、われわれはこう言わなければならない、「もうやめたまえ！　そうでないと、危険があまりに重大になる！」と。

テラチーニは攻勢的闘争の理論[三]を擁護した。評判の修正提案は、この点について二—三ページもの長さの定式を提議している。われわれはそれを読むにはおよばない。そこ

になにが書かれているかを、われわれは知っている。そこでなにを言っているかは、テラチーニがまったく明瞭に述べた。彼は、「受動性から能動性への移行」やら、「ダイナミックな傾向」やら、攻勢理論を擁護した。われわれロシア人は、中央派に反対してたたかった政治的経験を、すでに十分にもっている。すでに一五年以前に、われわれはわが国の日和見主義者や中央派とたたかい、またメンシェヴィキとたたかった。そしてわれわれは、メンシェヴィキにたいしてだけでなく、半無政府主義者にたいしても勝利をおさめた。

もしわれわれがそうしていなかったなら、われわれは、三年半はおろか、三週間半も権力を自分の手に維持できなかったであろうし、この地で共産主義者の大会をひらくこともできなかったであろう。「ダイナミックな傾向」とか「受動性から能動性への移行」とかは、みな空文句であって、かつて左派エス・エルがわれわれに反対してもちだした文句である。いま彼らは刑務所にいて、そこで「共産主義の目的」を擁護し、「受動性から能動性への移行」について思索している。（笑声）この修正提案のしているような仕方で議論することは許されない。なぜなら、そこにはマルクス主義もなければ、政治的経験もなく、論証もないからである。いったいわれわれは、われわれのテーゼのなかで革命的攻勢の一般理論を展開したであろうか？　ラデックなりわれわれのうちのだれかなりが、そんなばかげたことをやったであろうか？　われわれが論じたのは、まったく特定の国にかんする、まったく特定の時期についての、攻勢理論についてであった。

われわれは、まだ第一次革命以前には、革命党が攻勢に出なければならないことに疑いをもった人物がいたことを示す事例を、メンシェヴィキにたいするわれわれの闘争のうちからあげることができる。わが国の社会民主主義者――そのころには、われわれはみなこう名のっていた――のうちのだれかがそういう疑いを表明すると、われわれは彼とたたかって、こう言ったものであった。君は日和見主義者だ、君は、マルクス主義をも、革命党の弁証法をも、なにひとつ理解していない、と。そもそも革命的攻勢が許されるかどうかなどという論争を、党がやれるであろうか？　わが国では、そういう実例を見つけるためには一五年ほどさかのぼらなければならない。もし攻勢理論に異論をとなえるような中央派または偽装した中央派がいるなら、そういう人間はすぐさま除名しなければならない。この問題で論争が起こるなどということはありえないことである。だが、共産主義インタナショナルが生まれてもう三年にもなるいま、われわれがまだ「ダイナミックな傾向」とか

「受動性から能動性への移行」とかについて論争しているのは、恥ずかしいことであり、恥さらしである。

　われわれといっしょにこのテーゼを作成した同志ラデックとわれわれのあいだでは、この問題についてはどんな論争もない。真の攻勢の準備もせずにおいて、ドイツで革命的攻勢の理論についての議論を始めたのは、おそらく、かならずしも正しいことではなかったであろう。それでも、三月の決起は、その指導者たちの誤りにもかかわらず、大きな一歩前進である[一二]。そういう誤りがあったのは、たいしたことではない。何十万人もの労働者が英雄的にたたかったのだ。ドイツ共産主義労働者党がどんなに勇敢にブルジョアジーとたたかったにせよ、われわれは、同志ラデックがヘルツについて論じたロシア語の一論文のなかで言ったのと同じことを、言わなければならない。たとえ無政府主義者であろうと、だれかがブルジョアジーと英雄的にたたかうとすれば、それは、もちろんりっぱなことである。だが、何十万もの人々が裏切り社会主義者やブルジョアジーの卑劣な挑発とたたかうとすれば、それこそ真の一歩前進である、と。

　自分の誤りに批判的な態度をとることは、非常に重要である。われわれはこのことから始めた。もし、何十万もの人々が参加した闘争のあとで、だれかがこの闘争に反対して、レーヴィのようなふるまい[一三]をするなら、そういう人間は除名しなければならない。そして、これが実際になされたことである。だが、われわれはこのことから教訓を引きださなければならない。はたしてわれわれは、攻勢の準備をしたであろうか？（ラデック「われわれは防御の準備さえしなかった。」）そうだ、攻勢は新聞論説のなかで論じられたにすぎなかった。一九二一年のドイツにおける三月の決起にこの理論を適用したのは、誤りであった。われわれはそれを認めなければならない。だが、一般的に言って、革命的攻勢の理論はけっしてまちがってはいない。

　われわれはロシアで勝利をおさめた。しかも、きわめて容易に勝利をおさめた。それは、帝国主義戦争のあいだにわが国の革命の準備をすすめておいたからである。これが第一の条件である。わが国では、一〇〇〇万人の労働者と農民が武装していたし、ぜひとも即時の講和、というのがわれわれのスローガンであった。われわれが勝利したのは、きわめて広範な農民大衆が大地主に反対して革命的な気分をもっていたからである。第二および第二半インタナショナルの支持者である社会革命党は、一九一七年一一月には大きな農民党であった。彼らは革命的手段を要求していた。だが、正真正銘の第二および第二半インタナショナルの英雄らしく、彼らは革命的に行動するだけの勇気をもたなか

った。一九一七年八月と九月にわれわれは言った。「理論上ではわれわれはこれまでどおりエス・エルとたたかうが、実践上では彼らの綱領を受けいれる用意がある。というのは、われわれだけがこの綱領を実現できるからである」と。われわれは言ったとおりに行動した。農民はわれわれが勝利したあとの一九一七年一一月にもわれわれに反対の気分をもっていて、憲法制定議会に社会革命党を多数派として送りこんだのだが、その農民を、われわれは獲得した。私が誤って予想し予言していたように、数日間にではなかったが、とにかく数週間のうちに獲得した。この違いは大きなものではない。ヨーロッパで、数週間のうちに農民の多数者を味方につけることができるような国があるなら、教えてほしい。ひょっとすると、イタリアがそうなのだろうか？（笑声）君たちの国には小さな党しかなかったのに、君たちはロシアで勝利したではないか、と言う人があれば、それは、その人がロシア革命を理解しなかったこと、革命をどう準備すべきかをまったく理解していないことを、証明するにすぎない。

われわれの第一歩は、われわれがだれと話し合うべきかを、またそれに完全な信頼をよせてよいかを知るために、真の共産党をつくることであった。第一回大会と第二回大会のスローガンは、「中央派を倒せ！」であった。もしわれわれが全線にわたって、全世界で、中央派および半中央派――それは、われわれがロシアでメンシェヴィキとよんでいる連中だが――と手を切らないなら、われわれには共産主義のイロハさえ理解できないのだということになる。われわれの第一の任務は、真の革命党をつくり、メンシェヴィキと絶縁することである。だが、これは予備校にすぎない。いまわれわれはすでに第三回大会をひらいている。ところが、同志テラチーニはあいかわらず、予備校の任務は中央派と半中央派を放逐し、追いつめ、暴露することであると、繰りかえして言う。なんともありがたいことだ！この仕事にわれわれはすでに十分取り組んできた。すでに第二回大会で、われわれは、中央派はわれわれの敵である、と言った。だが、前進しなければならないではないか。第二段階は、みずからを党に組織したあとで、革命を準備することを学びとることであろう。多くの国々でわれわれは、どうやって指導権をにぎるかということさえ、学びとっていない。われわれがロシアで勝利したのは、労働者階級の明白な多数者がわれわれに味方したからではなく（一九一七年の選挙では、労働者の圧倒的多数がメンシェヴィキに反対して、われわれに投票した）、また、われわれが権力を奪い取った直後に、軍隊の半数がわれわれの味方に変わり、また農民大衆の一〇分の九が数週間のうちにわれわれ

の味方に変わったからである。われわれが勝利したのは、われわれが自分の農業綱領ではなく、エス・エルの農業綱領を採択して、実際にそれを実現したからである。われわれの勝利は、まさにわれわれがエス・エルの綱領を実現した点にあったのだ。だからこそ、この勝利はあんなにも容易だったのである。諸君の西欧で、こんなふうの幻想をもつことができるだろうか？　それはばかげている！　同志テラチーニや、修正提案に署名した諸君はみな、具体的な経済的諸条件を比較してみたまえ！　多数者がこんなにも急速にわれわれの味方になったにもかかわらず、勝利したのちにわれわれが当面した困難は、きわめて大きかった。それでもわれわれは切りぬけてきたが、それは、われわれが自分の目的を忘れなかったばかりでなく、自分の原理も忘れなかったからであり、また、原理については口をつぐんで、目的やら、「ダイナミックな傾向」やら、「受動性から能動性への移行」やらについて論じていた連中を、わが党内にとどめておかなかったからである。もしかすると、われわれがそういう諸君を刑務所にいれる道をとったという理由で、われわれを非難する人があるかもしれない。だが、こうしなければ執権(ディクタツーラ)は不可能なのである。われわれは執権(ディクタツーラ)を準備しなければならない。だが、このような空文句やこのような修正提案に反対して闘うことこそが、その準備なのである。（笑声）われわれのテーゼは、いたるところで大衆について述べている。だが、同志諸君、大衆とはなにかということを理解しなければならない。ドイツ共産主義労働者党や左翼の同志諸君は、このことばを濫用しすぎる。だが、同志テラチーニも、この修正提案に署名した諸君もみな、やはり「大衆」ということばでなにを理解すべきかを知ってはいないのである。

私は、もう長すぎるくらいしゃべっている。そこで、「大衆」という概念について数言述べるだけにとどめたい。「大衆」の概念は、闘争の性格の変化におうじて変化するものである。闘争の初期には、真の革命的労働者が数千人もいれば、大衆と言ってよかった。もし党が自党の党員以外の者をも闘争に引きいれることができれば、党が非党員をもゆりおこすことができれば、それはすでに大衆獲得の始まりである。わが国の諸革命のあいだには、数千人の労働者でもすでに大衆をあらわしていた場合もあった。われわれの運動の歴史上、メンシェヴィキにたいするわれわれの闘争の歴史上には、一都市で数千人の労働者がうごいたというだけで、運動の大衆性を明瞭にするのに十分であった実例が、たくさん見いだされるであろう。もし、ふだん俗物ふうな暮らしをしており、みじめな生活をおくっていて、これまで政治のことなどなに一つ聞いたこともない数

千人の党外の労働者が、革命的に行動しはじめるとすれば、そこにいるのは大衆である。運動がひろまり、強まってゆけば、それはしだいに真の革命に移行する。われわれはこのことを、一九〇五年と一九一七年の三つの革命のさいに見た。そして、諸君もまた今後このことを確信するおりがあるであろう。革命がすでに十分に準備されたときには、「大衆」の概念は違ったものになる。数千人の労働者では、もはや大衆とは言えなくなる。このことばは、ある違ったものを意味するようになりはじめる。大衆の概念は変わって、大衆といえば多数者をさすようになる。しかも、たんに労働者の多数者だけでなく、すべての被搾取者の多数者をさすようになる。これ以外の理解は革命家には許されない。このことばにこれ以外の意味をもたせるなら、理解できないものとなる。小さな党でも、たとえばイギリスやアメリカの党でも、政治的発展行程をよく研究して、党外の大衆の生活や習慣を熟知していれば、有利な瞬間には革命運動を呼びおこすことができる（同志[二三]ラデックは、そのよい例として、鉱山労働者のストライキをあげた）。もしこのような党が、こういう瞬間に自分のスローガンを提出して、何百万人の労働者を党についてこさせることができるなら、そこに見られるものは大衆運動である。ごく小さな党でも、革命を始め、それを勝利に終わらせることが可能だということを、私は無条件に否定するものではない。だが、どういう方法で大衆を味方に獲得すべきかを知らなければならない。このためには、革命を根本的に準備することが必要である。ところが、そこへ同志諸君がやってきて、「広大な」大衆獲得の要求をただちに放棄せよ、と言いだすのである。このような同志たちにたいしては、闘争を宣言しなければならない。根本的な準備をせずには、諸君はただの一国ででも勝利をおさめることはできないであろう。大衆を率いてすすむには、ごく小さい党でも十分である。ある瞬間には、大きな組織は必要ではない。

だが、勝利するためには大衆の共感をえなければならない。かならずしもつねに絶対多数が必要だというわけではない。だが、勝利するためには、権力を維持するためには、労働者階級――ここでは、「労働者階級」という用語を、西ヨーロッパ的な意味で、すなわち工業プロレタリアートの意味でつかっている――の多数者にとどまらず、農村の被搾取勤労住民の多数者をも獲得しなければならない。諸君はこういうことを考えたことがあるだろうか？　テラチーニの演説のなかにこういう考えの片鱗でも見つかるだろうか？　そこでは、「ダイナミックな傾向」とか「受動性から能動性への移行」とかについて述べているだけである。彼は、ひとことでも食糧問題にふれているであろうか？

ところが、われわれがある程度ロシアで見てきたように、労働者は多くの苦難に耐え、飢えをしのぶことができるとはいえ、やはり食物を要求する。だから、われわれは、労働者階級の多数者だけでなく、農村の勤労被搾取住民の多数者をも、味方に獲得しなければならない。諸君はそのための準備をととのえたであろうか？　ほとんどどこでもととのえてはいない。

そこで、私は繰りかえして言おう。私は、われわれのテーゼを無条件に擁護しなければならないし、これを擁護することを自分の義務と考える。われわれは、中央派を非難しただけでなく、彼らを党から追放しもした。いまやわれわれは向きを変えて、同じように危険であると思われるもう一方の側に反対しなければならない。われわれは、だれも侮辱されたと感じないように、同志諸君にたいしてはできるだけ丁重に真実を語らなければならない（そして、われわれのテーゼは、ていねいに、また慇懃に、それを語っている）。その真実とは、われわれはいま、中央派退治よりも重要な、別の問題に当面しているということである。この中央派退治の問題は、もう十分である。われわれはそれにはすでにいくぶんあきあきしている。それのかわりに、同志諸君は、真の革命的闘争をおこなうことを学びとらなければならないであろう。ドイツの労働者はすでにこのことに着手している。同国では、何十万ものプロレタリアが英雄的にたたかった。この闘争に反対する者はみな、すぐさま除名しなければならない。だが、それがすんだなら、空談義にふけるべきではなく、闘争をよりよく組織するにはどうすべきかを、ただちに学びはじめなければならない。おかした誤りにもとづいて学びはじめなければならない。われわれは、敵の前で、われわれの誤りを隠してはならない。それを恐れる者は革命家ではない。その反対に、われわれが労働者に、「いかにも、われわれは誤りをおかした」と率直に言明するなら、そのことは、今後それらの誤りが繰りかえされないだろうということ、そしてわれわれはもっとうまく時機を選ぶ能力をもつようになるだろうということを意味するのである。もし、闘争そのもののあいだに、勤労者の多数者が——労働者の多数者だけでなく、すべての搾取され抑圧されている者の多数者が——われわれの味方となるなら、そのときにはわれわれは実際に勝利するであろう。（鳴りやまない、盛大な拍手）

一九二一年七月八日に『共産主義インタナショナル第三回世界大会通報』第一一号にはじめて発表
全集、第五版、第四四巻、二三一—二三三ページ所収
邦訳全集、第三二巻、四九八—五〇九ページ所収

十月革命四周年によせて

一〇月二五日（一一月七日）の四周年がやってくる。この偉大な日がわれわれから遠くなればなるほど、ロシアのプロレタリア革命の意義はいっそう明らかになり、われわれは、われわれの活動の実地の経験全体についても、いっそう深く考えるようになる。

ごく簡単に——だから、もちろん、けっして十分にでもなく、正確にでもないが——要約すれば、この意義とこの経験は、次のように述べることができよう。

ロシアの革命の直接、当面の任務は、ブルジョア民主主義的任務であった。すなわち、中世の遺物をくつがえし、徹底的に取りのぞき、この野蛮、この汚辱、わが国のあらゆる文化とあらゆる進歩にたいするこの最大の障害物を、ロシアから一掃することであった。

そして、人民大衆への影響、人民の奥ふかくまでおよぼした影響の見地からすれば、われわれが、一二五年以上まえのフランス大革命よりも、はるかにきっぱりと、急速に、大胆に、首尾よく、広く、深くこの清掃をやりとげたことを、われわれは当然に誇ってよいのである。

無政府主義者も、小ブルジョア民主主義者（すなわち、この国際的な社会的タイプをロシアで代表しているメンシェヴィキとエス・エル）も、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命（すなわち、プロレタリア革命）の関係の問題については、わけのわからぬよまいごとを信じられないほどたくさん言ってきたし、いまも言っている。この点でわれわれがマルクス主義を正しく理解したこと、以前の諸革命の経験を正しく評価したことは、この四年間に完全に確証された。われわれは、ブルジョア民主主義革命を、だれもやらなかったほど徹底的に遂行した。われわれは、社会主義革命がブルジョア民主主義革命から万里の長城で隔てられていないことを知っており、またわれわれが（けっきょく）どれだけ前進できるか、この広大で高貴な任務のどれだけの部分を果たすことができるか、われわれの勝利のどれだけの部分が確保されるかは、闘争だけが決定することを知っているので、十分な自覚をもって、しっかりと、たゆみなく社会主義革命にむかって前進している。その成りゆきは、時が示すであろう。だが、いまでもすでにわれわれ

われは、社会を社会主義的に改造するうえで――荒廃し、疲弊した後進国としては――非常に多くのことがなしとげられたのを、見ている。

だが、われわれの革命のブルジョア民主主義的内容について話のしめくくりをつけよう。これがなにを意味するかは、マルクス主義者にはわかっていなければならない。説明のために、具体的な例をとってみよう。

革命のブルジョア民主主義的内容とは、国の社会諸関係(秩序、諸制度)から中世的制度、農奴制、封建制度を一掃することを意味する。

一九一七年ごろのロシアで、農奴制の最も主要な現われ、遺物、残存物であったのは、なにか? 君主制、身分制、土地所有と土地用益、婦人の地位、宗教、そして諸民族の抑圧である。どれでもよい、これらの「アウゲイアスの畜舎」[二七]の一つをとってみたまえ――ついでに言えば、それらは、あらゆる先進国家が、一二五年もまえに、二五〇年以上もまえに(イギリスでは一六四九年に)彼らのブルジョア民主主義革命を遂行したさいに、かなりの程度まで清掃しのこしたものである――、そうすれば、われわれがそういうものをきれいさっぱり一掃したことが、わかるであろう。一九一七年一〇月二五日(一一月七日)から憲法制定議会の解散(一九一八年一月五日)までの一〇週間ほどのあいだにわれわれがこの分野でなしとげたことは、ブルジョア民主主義者、自由主義者(カデット)、小ブルジョア民主主義者(メンシェヴィキとエス・エル)が彼らの権力が存立した八ヵ月間にやったことよりも、千倍も多いのである。

これらの臆病者、おしゃべり、うぬぼれたナルキッソスや小ハムレットどもは、おもちゃの剣をふりまわしたが、――君主制さえ絶滅しなかった! われわれは、これまでだれもやったことがないほど徹底的に、君主制のごみをはたきだした。われわれは、身分制という年ふりた建物を、石一つ、煉瓦一つ残さずに破壊した(イギリス、フランス、ドイツのような最も先進的な国々でさえ、いまなお身分制の痕跡はぬぐいさられていないのだ!)。身分制の最も深い根、すなわち、土地所有における封建制度と農奴制の残存物を、われわれは根こそぎ引きぬいた。十月大革命の土地改革から、「けっきょく」どういう結果が生まれるかについて、「論争することもできよう」(外国には、こういう論争にふけっている文筆家たち、カデット、メンシェヴィキ、エス・エルがいくらでもいる)。だが、われわれは、いまそういう論争で暇つぶしをする気持はない。というのは、われわれは、この論争や、それに関連した多くの論争を、すべて闘争によって解決するからである。だが、小ブルジョア民主主義者が農奴制の伝統を守る地主たちと八ヵ

月も「協調していた」一方で、われわれが数週間でこれらの地主をも彼らのあらゆる伝統をもロシアの土地からすっかり一掃したという事実は、反論を許さないものである。

宗教でも、婦人の無権利でも、非ロシア民族の抑圧と権利の不平等でも、そのどれなりととってみたまえ。これらはすべてブルジョア民主主義革命の問題である。小ブルジョア民主主義派の俗物どもは、八ヵ月もこれについておしゃべりした。世界の最も先進的な国々のうちにも、これらの問題をブルジョア民主主義的な方向で徹底的に解決した国は一つもない。わが国では、これらの問題は、十月革命の立法によって徹底的に解決されている。われわれは、宗教と真剣にたたかってきたし、いまもたたかっている。われわれは、すべての非ロシア民族に彼ら自身の共和国または自治州をあたえた。婦人の無権利や、男女の権利の不平等というような、いやしい、けがらわしい、卑劣な事柄は、わがロシアには存在しない。しかも、これらの農奴制や中世的制度のけしからぬ遺物は、現在、貪欲なブルジョアジーや、愚かなおびえたブルジョアジーによって、一つの例外もなく地球上のすべての国で再興されつつあるのだ。

これらすべては、ブルジョア民主主義革命の内容をなすものである。一五〇年まえ、二五〇年まえには、この革命(一つの共通な型のそれぞれの民族的変種を問題にすれば、これらの革命)の先進的指導者たちは、人類を中世的特権や、婦人の不平等や、あれこれの宗教(あるいは「宗教思想」、「宗教信仰」一般)にたいする国家的特典や、諸民族の不平等から解放すると言って、人民に約束した。約束はしたが、実行しなかった。実行することができなかったのである。なぜなら、——「神聖な私的所有」にたいする「尊敬心」がそれを妨げたからである。わが国のプロレタリア革命には、幾重にも呪われたこの中世的制度や、この「神聖な私的所有」にたいする、この呪われた「尊敬心」はなかった。

しかし、ブルジョア民主主義革命の獲得物をロシアの人民の手に確保するためには、われわれはさらに前進しなければならなかったし、実際にさらに前進した。われわれは、ブルジョア民主主義革命の諸問題を、われわれの主要な、ほんとうの仕事、プロレタリア革命の仕事、社会主義的な仕事の「副産物」として、通りすがりに、ことのついでに、解決した。改良は革命的な階級闘争の副産物である、とわれわれはつねに言ってきた。ブルジョア民主主義的な改革は、プロレタリア革命すなわち社会主義革命の副産物である——こうわれわれは言ってきたし、行為によってそれを証明した。ついでにいえば、カウツキー、ヒルファディング、マルトフ、チェルノーフ、ヒルキット、ロンゲ、マク

ドナルド、トゥラーティの一味や、「第二半」マルクス主義のその他の英雄たちはみな、ブルジョア民主主義革命とプロレタリア社会主義革命とのこのような相互関係を理解することができなかった。前者は後者に成長転化する。後者はことのついでに前者の諸問題を解決する。後者は前者の事業を打ちかためる。後者がどれだけ前者をこえて成長できるかは、闘争が、闘争だけがこれを決定する。

ソヴェト制度は、このように一方の革命が他方の革命に成長転化するということの、まさに明瞭な確証ないし現われの一つである。ソヴェト制度は、労働者農民のための民主主義の極致であると同時に、ブルジョア民主主義との絶縁、民主主義の新しい世界史的な型の成立、すなわちプロレタリア民主主義ないしプロレタリアートの執権の成立を意味する。

われわれのソヴェト制度の建設にあたってわれわれがおかした失敗や誤りのことで、死滅しつつあるブルジョアジーやその尻にくっついている小ブルジョア民主主義派の犬や豚どもが、呪いや、悪罵や、嘲笑をわれわれに雨あられと浴びせるなら、そうさせておくがよい。われわれが実際に失敗や誤りをたくさんおかしたこと、いまもたくさんおかしていることを、われわれは瞬時も忘れない。かつてなかった型の国家組織をつくりだすという、こういう新しい、世界史上で新しい仕事をするのに、どうして失敗や誤りなしにすませられよう！　われわれは、自分の失敗や誤りを是正するために、またソヴェトの諸原則を実生活に適用するという、完成にはまだほど遠いわれわれの仕事を改善するために、うまずたゆまずたたかうであろう。だが、ソヴェト国家の建設を開始し、それによって世界史の新しい時代、新しい階級の支配する時代を開始するという幸運をわれわれが担ったことを、われわれは当然に誇ってよいし、また誇りとしている。この新しい階級は、どの資本主義国でも抑圧されていながら、どこでも新しい生活をめざし、ブルジョアジーにたいする勝利をめざし、プロレタリアートの執権をめざして、人類を資本のくびきから、帝国主義戦争から解放する目標にむかって、すすんでいるのである。

帝国主義戦争の問題、いま全世界で支配的になっている金融資本の国際政治――新しい帝国主義戦争を不可避的に生みだし、ひとにぎりの「先進的」大国による遅れた弱小諸民族の民族的抑圧、略奪、強奪、絞殺を不可避的に、かつてないほどに激化させている政治――の問題は、一九一四年以来、地球上のすべての国の政治全体の中軸的問題となった。これは、何千万という人々の生死の問題である。これは、われわれの目前でブルジョアジーが準備しており、われわれの目前で資本主義から成長しつつある次の帝国主

義戦争で二〇〇〇万人が殺されるかどうか（一九一四―一九一八年の戦争と、その補足としての、いまなお終わっていないいくつかの「小」戦争とで、一〇〇〇万人が殺されたのにたいして）の問題であり、この避けられない（資本主義が存続するかぎり）きたるべき戦争で六〇〇〇万人がかたわになるかどうか（一九一四―一九一八年には三〇〇〇万人がかたわになったのにたいして）の問題である。この問題でも、わが十月革命は世界史の新しい時代をひらいた。エス・エル、メンシェヴィキという姿をとった、また全世界の小ブルジョア的な自称「社会主義的」民主主義派という姿をとったブルジョアジーの召使や取りまき連中は、「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」というスローガンをばかにしていた。だが、このスローガンが唯一の真理であることがわかった。――なるほど不愉快な、荒っぽい、むきだしの、残酷な真理ではあるが、しかし、無数のいとも洗練された排外主義的および平和主義的な欺瞞のなかで、真理であることがわかった。これらの欺瞞はくずれさりつつある。ブレスト講和は暴露されている。ブレスト講和よりさらに悪いヴェルサイユ講和の意義と結果は、日ごとにますます容赦なく暴露されている。そして、きのうの戦争の原因を考え、またせまりくるあすの戦争のことを考える幾百万幾千万の人々の心に、恐ろしい真理が、ますますはっきりと、ますます明確に、ますます避けようもなくうかびあがってくる。その真理とは、ボリシェヴィキ的闘争とボリシェヴィキ的革命によらなければ、帝国主義戦争とそれを不可避的に生みだす帝国主義的平和（もしわが国に旧正字法がおこなわれていたら、私はここでその両方の意味で「ミール」という語を二つ書くところだが）[一七]から（世界）ぬけだすことはできず、この地獄からぬけだすことはできない、ということである。

ブルジョアジーや平和主義者、将軍や小市民、資本家や俗物、信心ぶかいキリスト教信者の全員、第二インタナショナルおよび第二半インタナショナルの騎士たちの全員が、この革命を怒りくるってののしるなら、そうさせておくがよい。彼らがどんな怨みごと、中傷、うそを浴びせようと、数百年数千年来はじめて、奴隷所有者どうしの戦争にたいする回答として、奴隷たちが、獲物の分配をめぐる奴隷所有者どうしのこの戦争を、すべての民族の奴隷所有者にたいするすべての民族の奴隷の戦争に転化しよう、というスローガンを公然と宣言したという世界史的事実は、抹殺することができないであろう。

このスローガンは、数百年数千年来はじめて、漠然とした、無力な期待から、明瞭な、明確な政治綱領に転化し、プロレタリアートに指導される幾百万の被抑圧者の効果的

な闘争に転化し、プロレタリアートの最初の勝利に、戦争を絶滅する事業、さまざまな民族のブルジョアジー——和睦するにも、戦争するにも、資本の奴隷の負担で、賃金労働者の負担で、農民の負担で、勤労者の負担でそれをやるあのブルジョアジー——の同盟に対抗して万国の労働者の同盟をつくる事業の最初の勝利に転化した。

この最初の勝利は、まだ最後の勝利ではない。またそれは、わが十月革命が未曽有の苦難と困難をつうじて、前代未聞の苦悩を代償として、われわれの側の幾多の重大な失敗や誤りを代償としてかちとったものである。世界中で最も強大な、最も先進的な国々の帝国主義戦争にたいして、遅れた一国民が、どうして失敗もせず誤りもおかさずに、勝利をおさめることができよう！　われわれは、自分の誤りを認めることを恐れないし、その誤りを是正するにはどうすればよいかを学ぶために、それを冷静に見つめよう。だが、事実はあくまで事実である。奴隷所有者どうしの戦争には、ありとあらゆる奴隷所有者に反対する奴隷の革命で「こたえる」という約束は、数百年数千年来はじめて、あますところなく果たされたし、——また、あらゆる困難にもかかわらず果たされつつあるということ、これがその事実である。

われわれはこの事業を始めた。いつ、どれだけの期間ののちに、どの民族のプロレタリアがこの事業を最後までやりとげるか、——それは肝心な問題ではない。肝心なことは、氷が砕かれ、道がひらかれ、進路が示されたということである。

アメリカにたいして日本を、日本にたいしてアメリカを、イギリスにたいしてフランスを、などというふうに「祖国を防衛している」すべての国々の資本家諸君、諸君の偽善を今後もつづけるがよい！　第二インタナショナルおよび第二半インタナショナルの騎士諸君、さらに全世界のすべての平和主義的小市民と俗物の諸君、帝国主義戦争に反対する闘争の手段の問題を、新しい「バーゼル宣言」（一九一二年のバーゼル宣言の手本にならった）を書くことで「かたづける」やり方を、今後もつづけたまえ！　最初のボリシェヴィキ革命は、地球上の最初の一億人を帝国主義戦争から、帝国主義世界から救いだした。つぎにつづく諸革命は、こういう戦争から、こういう世界から、全人類を救いだすであろう。

われわれの最後の事業——しかも、最も重要でもあれば、最も困難でもあり、また最も未完成でもある事業、それは経済建設であり、封建制度の破壊された建物と資本主義のなかば破壊された建物とのあとに、社会主義の新しい建物の経済的土台をすえることである。この最も重要で困難な

事業で、われわれはいちばん多くの失敗といちばん多くの誤りをおかした。このような世界的に新しい事業を開始しながら、失敗もせず、誤りもおかさないことがどうしてありえようか！　だが、われわれはそれを開始した。われわれはそれをつづけている。まさに現在われわれは、われわれの「新経済政策」によってわれわれの幾多の誤りを是正しつつある。こういう誤りをおかさずに小農民的な国に社会主義の建物をひきつづき建設してゆくにはどうすべきかを、われわれは学びつつある。

困難は限りなく大きい。しかし、われわれは、限りなく大きい困難とたたかうことに慣れている。われわれの敵がわれわれに、「石頭」だとか「むりおし政治」の代表者だとかのあだ名をつけたのも、理由のないことではない。だが、われわれはまた革命に必要な別の技術をも学びとった——すくなくとも、ある程度まで学びとった。すなわち、変化した客観的諸条件を考慮にいれて、自分の戦術をすばやく急転換し、これまでの道が当面の時期には不適当で不可能だとわかれば、われわれの目的に達するための別の道を選ぶ柔軟性、手腕がそれである。

われわれは、熱情の波に乗って、はじめは一般的な政治的熱情を、ついで軍事的な熱情を人民のあいだに呼びおこしたが、同じように大きな（一般的な政治的任務とも、また軍事的任務とも同じくらい大きな）経済的任務をも、直接にこの熱情にもとづいて実現できるだろうと、あてにしていた。われわれは、小農民的な国で、プロレタリア国家の直接の命令によって、生産物の国家的生産と国家的分配を共産主義的に組織できるだろうと、あてにしていた——というよりも、よく思案せずにそう予想していた、と言ったほうが正しいかもしれない。実生活は、われわれが誤っていたことを示した。一連の過渡的な段階が必要だったのである。すなわち、共産主義への移行を準備する——長年の努力によって準備する——ためには、国家資本主義と社会主義が必要であった。直接に熱情をもとにするのでなく、大革命が生んだ熱情にたよりながらも、個人的利益に、個人的関心に、経済計算に立脚して、小農民的な国で国家資本主義を経て社会主義にいたる堅固な橋をまずはじめに建設することに努力したまえ、そうしなければ、諸君は共産主義に近づけないであろう。そうしなければ、諸君は幾百幾千万の人々を共産主義にみちびくことはできないであろう。実生活はわれわれにこう教えた。革命発展の客観的な歩みが、われわれにこう教えたのである。

こうしてわれわれは、この三、四年のあいだに急転換をおこなう（急転換が必要なときに）すべをいくらか学びとったので、いまや新しい転換、「新経済政策」を、熱心に、

注意ぶかく、根気よく（もっとも、まだまだ熱心さも足りなければ、注意も足りず、根気も足りないが）学びはじめた。プロレタリア国家は、慎重な、勤勉な、敏腕な「経営者」に、きちょうめんな卸売商人にならなければならない。――そうしなければ、プロレタリア国家は、小農民的な国を経済的にひとり立ちさせることはできない。いまは、資本主義的な（まださしあたっては資本主義的な）西ヨーロッパとならんで生活している現在の条件のもとでは、共産主義に移行する別の道はない。卸売商人は、共産主義とは天と地ほどかけはなれた経済的タイプのように思われる。だが、これは、生きた生活のなかで小農民経済から国家資本主義を経て社会主義にみちびく、まさにそういう矛盾の一つである。個人的関心は生産を高める。われわれに必要なことは、なによりもまず、ぜがひでも生産を増大させることである。卸売商業は、幾百万という小農民に関心をいだかせることにより、彼らを結びつけることによって、彼らを経済的に統合し、彼らを次の段階へ、すなわち、生産そのもののなかでの結びつきと統合のさまざまな形態へみちびく。われわれは、すでにわれわれの経済政策の必要な改造を開始した。われわれは、この分野ですでにいくらかの成果――なるほどささやかな、部分的な成果ではあるが、それでもやはり疑いのない成果――をおさめている。われわれは、この新しい「学問」の分野ですでに予備学級を終わろうとしている。しっかりと、ねばりづよく学びながら、実地の経験によって自分の一歩一歩を点検しながら、すでに始めたことを何度でもやりなおすのを、自分の誤りを訂正するのを恐れず、誤りの意義を注意ぶかく見きわめながら、われわれは次の学級へもすすんでゆこう。世界経済と世界政治の諸事情は、この「課程」を、われわれの望んでいたよりもはるかに長い、はるかに困難なものにしたけれども、われわれはその全「課程」を修了しよう。なにがなんでも、過渡期の苦悩、困苦、飢え、荒廃がどんなに苦しくても、われわれは勇気を失うことなく、最後の勝利をえるまで自分の事業を推しすすめてゆこう。

一九二一年一〇月一四日

『プラウダ』第二三四号、一九二一年一〇月一八日
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四四巻、一四四―一五二ページ所収
邦訳全集、第三三巻、三七―四六ページ所収

現在と社会主義の完全な勝利後とにおける金の意義について

大革命の記念日を祝ういちばんよい方法――それは、革命の未解決の諸任務に注意を集中することである。革命がまだ解決していない根本的な諸任務がある場合には、そしてそれらの任務を解決するためにはなにか新しいもの（これまでに革命がなしとげたものの見地からみて）を習得する必要がある場合には、革命をこのようなやり方で祝うことが、とくに適切であり、また必要である。

現在われわれの革命にとって新しいものは、経済建設の根本的な諸問題で「改良主義的な」、漸進的な、用心ぶかく回り道をするような行動方法をとる必要があることである。この「新方針」は、理論的にも実践的にも、多くの疑問、当惑、疑念を引きおこしている。

理論的な問題はこうである。一連のこのうえなく革命的な行動のあとで、しかも革命全体としては全般的な勝利の歩みをすすめているときに、きわめて「改良主義的な」行動に移るというのは、いったいどう説明したらよいのか？ここには、「陣地の明け渡し」とか、「破綻の告白」とか、なにかそういったものがあるのではないのか？と。もちろん、半封建型の反動派からメンシェヴィキや第二インタナショナルのその他の騎士にいたるまでの敵は、そのとおり、と言っている。なにごとにつけても、なんのいわれもなしにそんなふうのことをわめきたてればこそ、彼らは敵なのである。この問題で封建派からメンシェヴィキにいたるまでのすべての党派が涙ぐましいほど一致していることは、これらすべての党派がプロレタリア革命に対抗して実際に「一個の反動的集団」となっていること（ついでに言っておけば、エンゲルスが一八七五年と一八八四年にベーベルにあてた手紙のなかで予言したように）[二〇]を、あらためて証明するものにほかならない。

だが、味方のあいだにも、いくらかの……「当惑」が見られる。

大工業を復興しよう、そして、大工業と小農民的農業とのあいだの直接の生産物交換を軌道にのせて、農業の社会化を助けよう、大工業を復興させるために、割当徴発の方

法で一定量の食糧と原料を農民から借りうけよう。――われわれが一九二一年春まで三年以上も遂行してきた計画(ないし方法、方式)は、こういうものであった。これは、古い社会経済制度を新しい社会経済制度と交替させるために、古い社会経済制度をまっこうから、完全に打ち砕くという意味で、任務にたいする革命的な取り組み方であった。

一九二一年の春以後、こういう取り組み方、計画、方法、行動方式のかわりに、われわれはまったく別の、改良主義的な型の取り組み方、等々をとりいれつつある(すでに「とりいれた」わけではなく、いまなお「とりいれつつある」にすぎず、しかもそのことをわれわれは十分にさとっていない)。すなわち、古い社会経済制度、商業、小経営、小企業、資本主義を打ち砕くのでなく、商業、小企業、資本主義を活気づけながら、それらが活気づく限度でのみ、慎重に、漸次にそれらを掌握するか、あるいはそれらを国家規制に服させる可能性を手にいれるようにすること、これである。

これは、任務にたいするまったく別の取り組み方である。以前の革命的な取り組み方にくらべると、これは改良主義的な取り組み方である(革命とは、古いものを根本的に、根底から打ち砕くような改造のことで、なるべく打ち砕かないようにつとめながら、慎重に、ゆっくりと、漸次にそれをつくりかえてゆく改造ではない)。

そこで、こういう問題が生まれる。もし、諸君が革命的なやり方をためしてみて、その失敗を認め、改良主義的なやり方に移ったとすれば、それは、諸君が革命全体を誤りだと言明していることを証明するものではないのか? それは、およそ革命から始めるべきではなかったので、改良から始め、改良にとどまるべきだったことを、証明するものではないのか?

メンシェヴィキやその同類は、こういう結論を引きだしている。しかし、こういう結論は、政治にかけて「海千山千」のしたたか者の詭弁、まったくのぺてんか、でなければ、ほんとうの試練を「経ていない」者の幼稚な言い草か、どちらかである。真の革命家にとっていちばん大きな危険――おそらく、唯一の危険とさえ言えよう――は、革命性を誇張することであり、革命的なやり方を適切に、首尾よく適用するための限度と条件を忘れることである。真の革命家たちが、「革命」という語を大文字で書き、「革命」をほとんど神的なものに祭りあげ、有頂天になって、どういう時機に、どういう情勢のもとで、どういう行動分野で革命的に行動することを解しなければならないか、そして、どういう時機に、どういう情勢のもとで、どういう行動分

野で改良主義的な行動に移ることを解しなければならないかを、きわめて沈着に、冷静に考慮し、秤にかけ、点検する能力を失いはじめると、彼らはおもにこのために大しくじりをしでかしたのであった。真の革命家たちは、彼らが冷静さを失って、「勝利にかがやく偉大な世界」革命は、どんな事情のもとでも、あらゆる行動分野で、ありとあらゆる任務を、かならず革命的な仕方で解決できるし、また解決しなければならないかのように思いつく場合にはじめて破滅する（彼らの事業の外面的な敗北という意味ででではなく、その内面的な破綻という意味で）であろうし、またそういう場合にはまちがいなく破滅するであろう。

こういうことを「思いつく」者は破滅する。なぜなら、彼は、根本問題で愚かなことを思いついたのだが、激しい戦争（革命は最も激しい戦争である）のさいには、愚かさにたいする懲罰は敗北だからである。

「勝利にかがやく偉大な世界」革命は、もっぱら革命的なやり方のみを適用でき、また適用しなければならないという結論は、どこからでてくるのか？　そういう結論はどこからもでてこない。それはまったく、無条件にまちがっている。それがまちがっていることは、マルクス主義の基盤からそれないかぎり、純理論的な諸命題にもとづいて、おのずから明らかである。それがまちがっていることは、またわが国の革命の経験によっても確証されている。理論的にみれば――革命のさいにも、他のどんなときとも同じに、数々の愚行が演じられる、とエンゲルスは言った[二七]が、これはほんとうのことである。どういう任務が、どういうときに革命的なやり方で解決できるのか、そしてどういう任務がそういうやり方では解決できないのかを、できるだけ冷静に考慮して、なるべく愚行を演じないように、またしでかした愚行はなるべく早くあらためるようにつとめなければならない。われわれ自身の経験からみれば――ブレスト講和は、まったく非革命的な、改良主義的な、あるいは改良主義よりももっと悪くさえある行動の見本であった。なぜなら、これは後退行動であったが、改良主義的行動は、通例、ゆっくりと、慎重に、漸次に前進するものであって、後退しはしないからである。それでも、ブレスト講和を締結したときにわれわれのとった戦術が正しかったことは、いまでは、このテーマについてこれ以上ことばを費やすにおよばないほど証明ずみのことであり、だれにも明らかで、一般に承認されている。

完全になしとげられたのは、われわれの革命のブルジョア民主主義的な仕事だけである。そしてわれわれは、まったく正当にそれを誇りとしてよい。この革命のプロレタリア的あるいは社会主義的な仕事は、おもに三種類のものに

帰着する。(一) 帝国主義的世界戦争から革命的にぬけだすこと。資本主義的強盗の二つの世界的グループの屠殺を暴露し、挫折させること。この仕事は、われわれとしては、完全になしとげた。しかし、これを全面的になしとげることができるのは、一連の先進国における革命だけであろう。(二) プロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)の実現形態であるソヴェト制度をつくりだすこと。世界的な急転換がおこなわれた。ブルジョア民主主義的議会制度の時代は終わった。世界史の新しい一章が、プロレタリア執権(ディクタトゥーラ)の時代が始まった。ソヴェト制度とプロレタリア執権(ディクタトゥーラ)のあらゆる形態は、一連の国々によってのみつくりあげられ、仕上げられるであろう。わが国では、この分野で仕上げられていないものが、まだじつに、じつに多い。このことを見ないのは、許しえないことであろう。われわれは、まだ一度ならず仕上げ、つくりかえ、はじめからやりなおさなければならないであろう。生産力と文化を発展させるうえで、われわれが一段階前進し上昇するのに成功するごとに、それにともなってわがソヴェト制度を仕上げ、つくりかえていかなければならない。しかし、われわれは、経済や文化の面では、非常に低い水準にある。今後多くのものがつくりかえられなければならない。そのことに「まごつく」のは、愚かさの骨頂であろう(愚かさよりもっと悪くないにしても)。

(三) 社会主義制度の基礎の経済的建設。この分野では、最も主要なもの、最も根本的なものが、まだなしとげられていない。だが、これこそ、われわれの最も本来的な——原則的な見地からしても、実際的な見地からしても、現在のロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の見地からしても、国際的な見地からしても、最も本来的な——仕事なのである。

最も主要なものが基本的になしとげられていない以上、全注意がこれにむけられなければならない。ここでの困難は、移行の形態にある。

私は、一九一八年四月に『ソヴェト権力の当面の任務』のなかにこう書いた——「ただ一般に革命家であったり、社会主義の支持者であったり、共産主義者であったりするだけでは、十分でない。その時どきの特殊な時点で、鎖の特殊な一環を見いだすこと、すなわち鎖全体をにぎって次の環への移行を確実に準備するために全力をあげてつかむ必要のある環を、見つけだすことができなければならない。そのさい、諸事件の歴史的連鎖においていろいろな環がならぶ順序、それらの形、それらのつながり方、それら相互の相違は、鍛冶屋がつくる普通の鎖の場合のように簡単なものでも、あどけないものでもない」[一三]と。

現在、ここで問題になっている活動分野でそういう一環であるのは、正しい国家的規制(方向づけ)のもとで国内

商業を活気づけることである、商業——これこそ、われわれプロレタリア国家権力、われわれ指導的共産党が、諸事件の歴史的連鎖のなかで、一九二一—一九二三年のわが社会主義建設の過渡的諸形態のなかで、「全力をあげてつかまなければならない」一環である。いまわれわれがこの一環を十分しっかりと「つかむ」ならば、われわれはごく間ぢかい将来に、鎖全体をにぎることができるだろう。また、そうしなければ、われわれは鎖全体をにぎることができず、社会主義的な社会経済諸関係の土台をつくりだすことができないのである。

これは奇妙なことのように思われる。共産主義と商業?! これは、まったく結びつかない、つじつまの合わない、かけはなれた事柄のようである。だが、経済学的によく考えてみれば、この二つは、共産主義と小農民的・家父長制的農業とがかけはなれている以上にかけはなれているわけではない。

われわれが世界的規模で勝利したあかつきには、われわれは世界のいくつかの巨大都市の街なかに金で共同便所をつくることになろうと、私は思っている。これは、一九一四—一九一八年の「偉大な解放」戦争、つまり、ブレスト講和とヴェルサイユ講和のどちらがいっそう悪いかという大問題を解決するための戦争で、金をめぐって一〇〇〇万人が殺され、三〇〇〇万人がかたわにされたことを忘れておらず、また同じ金をめぐって、一九二五年ごろか一九二八年ごろかに、日本とアメリカのあいだの戦争か、イギリスとアメリカのあいだの戦争か、なにかそういうたぐいの戦争で、まちがいなく二〇〇〇万人が殺され、六〇〇〇万人がかたわにされようとしていることを忘れていない世代のための、最も「公正な」実物教育的な金の利用法であろう。

だが、いま述べた金の利用法がどんなに「公正で」、どんなに有益で、どんなに人道的であっても、われわれはやはり次のように言うだろう。そこまでたどりつくためには、一九一七—一九二一年にわれわれがやったのと同じくらい力をふりしぼって、同じくらい首尾よく、ただはるかに広い活動分野で、もう一〇年か二〇年働かなければならない、と。いまのところは、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国では金をたいせつにして、これをなるべく高く売り、これでなるべく安く商品を買わなければならない。狼といっしょに暮らすなら、狼のように吠えよ。しかし、狼をのこらず撲滅する——分別のある人間社会ではそうすべきであるが——ということについては、「戦いの門出に自慢するな、戦いのあとで自慢せよ」というロシアの賢明なことわざを守ろう。……

もし……もし、もし、幾千万という小農民とならんで、電線網をはりめぐらしたすばらしい機械制大工業がないとすれば、すなわち、その技術能力の点でも、その組織上の「上部構造」とさまざまな随伴現象の点でも、小農民に最上の製品を以前よりも大量に、速く、安く供給する能力をもった工業がないとすれば、これらの小農民と大工業とのあいだに可能なただ一つの経済的結びつきは、商業である。世界的規模では、この「もし」はすでに実現されている。この条件はすでに現存している。しかし、単独で、しかも最も遅れた資本主義国の一つでありながら、工業と農業との新しい結びつきを一挙に、直接に実現し、実行に移し、実地に組織しようと試みたその国は、この任務を「強襲」によって果たすことができなかった。そこで、いまや一連のゆっくりした、漸進的な、慎重な「攻囲」行動によって、それを果たさなければならないのである。

商業をにぎり、これを方向づけ、これに一定の枠をはめることは、プロレタリア国家権力にできることである。ささやかな、ごくささやかな一例をあげよう。ドンバスでは、なかばは国有の大炭鉱で労働生産性が向上したおかげで、またなかばは小規模な炭鉱を農民に賃貸ししたおかげで、わずかながら、まだごくわずかながら、疑いもなく、経済が活気づきはじめた。こうして、プロレタリア国家権力は、少量の(先進国の目からみればみすぼらしいほどわずかだが、われわれの貧しさからすれば、それでもかなりの量の)追加の石炭を、たとえば一〇〇%の原価で手にいれて、これを個々の国家機関に一二〇%で売り、個々の私人に一四〇%で売っている(ついでに注意しておくが、この数字は私がまったく勝手に選んだものである。というのは第一に、私は正確な数字を知らないからであり、第二には、たとえ知っていたとしても、いまは公表しないだろうからである)。これで見ると、われわれは、きわめてささやかな規模でではあるが、工業と農業とのあいだの交易をにぎり、卸売商業をにぎり、次のような任務をもやりこなしはじめているようである。その任務とは、現存の小規模な、遅れた工業、あるいは大規模だが弱体化し荒廃した工業をしっかりと掌握し、現在の経済的基礎のうえで商業を活気づけ、平均の、普通の農民(ところで、彼らこそ大量的な分子であり、大衆の代表者であり、自然発生性の担い手である)に経済の活気づきを感じとらせ、これを利用して、大工業復興の仕事をもっと系統的に、またねばりづよく、もっと広範に、もっとうまくやってゆくことである。

「感情的社会主義」や、商業の理屈ぬきの蔑視をもちまえとする、旧ロシア的な、なかば旦那ふう、なかば百姓ふうの家父長制的な気分に、屈しないようにしよう。農民と

プロレタリアートの結びつきを強化するためには、荒廃し疲弊した国で国民経済をただちに活気づかせるためには、工業を振興するためには、たとえば電化のような、将来のもっと広範で遠大な方策をやりやすくするためには、必要とあれば、ありとあらゆる経済上の過渡的形態を利用することが許されるし、また利用することができなければならない。

改良と革命の関係は、マルクス主義だけが正確にまた正しく規定している。そのさいマルクスは、この関係を一つの側面からしか、すなわち、プロレタリアートが、たとえ一国だけであれ最初の、多少とも強固な、多少とも長期的な勝利をおさめるより以前の情勢のもとでしか、見ることができなかった。このような情勢のもとでは、改良はプロレタリアートの革命的階級闘争の副産物であるということが、正しい関係の基礎であった。この関係は、資本主義世界全体にとって、プロレタリアートの革命的戦術の基礎であり、イロハであるが、第二インタナショナルの金で身売りした指導者たちや、第二半インタナショナルのなかば学者ぶり、なかば気どった騎士たちは、このイロハをゆがめ、あいまいにしている。たとえ一国だけであれプロレタリアートが勝利したあとでは、改良と革命の関係のなかに新しいものが現われる。原則的には問題はもとのままだが、形態のうえでは変化が生じる。この変化は、マルクス自身は予見できなかったものであるが、それを認識することができるのは、マルクス主義の哲学と政治学とにもとづいてのみである。なぜ、われわれはブレストの退却を正しく実行できたのか？　なぜなら、われわれは退却するゆとりのあるほど、遠くまで前進していたからである。われわれは、一九一七年一〇月二五日からブレスト講和までの数週間に、目まぐるしいほどの速さでソヴェト国家を建設し、革命的な方法で帝国主義戦争からぬけだし、ブルジョア民主主義革命をなしとげたので、大がかりな後退運動（ブレスト講和）をおこなってさえ、なお「息つぎ」を利用し、コルチャック、デニーキン、ユデーニチ、ピルスツキー、ヴランゲリに向かって勝利のうちに前進するだけの陣地が、われわれには十二分に残っていたのである。

プロレタリアートが勝利するよりまえには、改良は革命的な階級闘争の副産物である。勝利したあとでは、改良は（国際的規模ではやはり「副産物」であるが）、勝利をおさめた国にとっては、なおそのほかに、最大限に力をふりしぼったあとで、あれこれの移行を革命的に遂行するのに力の足りないことが明白である場合には、必要で正当な息つぎともなるのである。勝利は、退却をやむなくされる場合にさえもちこたえる——物質的にも、精神的にももちこた

える――ことのできるだけの「力の予備」をあたえてくれる。物質的にもちこたえること――それは、敵がわれわれを徹底的に粉砕することができないだけの、十分な力の優勢をたもつことである。精神的にもちこたえること――それは、士気の沮喪や、組織の解体を許さず、事態の冷静な評価をたもち、勇気と確固不抜の精神を失わず、たとえはるか後方まで退却するにしても節度を失わず、適当なときに退却をやゝて、ふたたび攻勢に移ることができるように退却することである。

われわれは国家資本主義まで退却した。だが、われわれは節度をたもって退却した。いまは商業の国家的規制へ退却しつゝある。だが、われわれは節度をたもって退却するであろう。この退却の終りが見えるという、あまり遠くない将来にこの退却をやめる可能性が見えてくるという徴候が、すでに存在する。われわれがこの必要な退却を、いっそう自覚して、いっそう一致協力して、いっそう偏見をもたずにおこなえばおこなうほど、それだけ早く退却をやめることができるであろうし、その後のわれわれの勝利の前進は、それだけ確実で、速やかで、広範なものになるであろう。

一九二一年一一月五日

『プラウダ』第二五一号、一九二一年一一月六―七日
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四四巻、二二一―二二九ページ所収
邦訳全集、第三三巻、九九―一〇七ページ所収

三つのインタナショナルの会議にかんする資料(三)

一　エヌ・イ・ブハーリンおよびゲ・イェ・ジノヴィエフへの手紙

同志ブハーリンおよびジノヴィエフへ

いちばん弁舌の立つ連中のうちで、まさにだれだれが第二および第二半インタナショナルとの会議でコミンテルンを代表するのか、まえもって考えておかなければならない。この会議でとるべき戦術戦略の基本的な諸問題も、やはりまえもって考えておかなければならない。

会議で討議すべき議題のリストをまえもって考えておいて、かならず会議に参加した各当事者の合意にもとづいて、それを作成するようにしなければならない。われわれとしては、三当事者のそれぞれが出版物でおこなった公式の言明のなかで議論の余地のないこととして承認されている事項の範囲内で、労働者大衆の実践的な共同行動に直接に関係のある問題だけを、このリストにふくめるようにしなければならない。統一戦線をつくるにはこういう問題だけに限る必要があるという理由を、われわれはくわしく説明しなければならない。黄色派の諸君が、政治的な論争問題、たとえばメンシェヴィキにたいする態度、グルジアの問題などをもちだしてきたら、われわれは次のような戦術をとらなければならない。(一)議題のリストは、参加する三当事者全部の一致した決定にもとづいてのみ作成できる、と声明すること。(二)われわれは、もっぱら労働者大衆の行動の統一を主眼として自分の議題のリストをつくったので、こういう統一は、根本的な政治的な意見の相違がある場合でさえただちに達成できるはずだ、と声明すること。(三)われわれは、メンシェヴィキにたいする態度の問題でも、グルジアの問題でも、第二インタナショナルや第二半インタナショナルが提案するその他のどんな問題でも議題とすることに完全に同意するが、ただしそれは、次の諸問題を議題とすることに彼らが同意する場合に限られる、と声明

すること。すなわち、(一)バーゼル宣言にたいして第二および第二半インタナショナルがとった背教者的な態度の問題、(二)この同じ諸党が、彼らの支持するブルジョア諸政府をつうじてルクセンブルク、リープクネヒトその他のドイツの共産主義者の殺害の共犯者になっている問題、(三)第二および第二半インタナショナルの支持しているブルジョア諸党が植民地の革命家を殺害していることにたいしても、これらの党が同じような態度をとっている問題、その他等々である。われわれは、これらや、それと同様な問題のリストをあらかじめ準備しておかなければならず、またこの種のいくつかの最も重要な問題については、テーゼや報告者をあらかじめ準備しておかなければならない。

　われわれが第二インタナショナルと第二半インタナショナルを、反革命的な世界ブルジョアジーとのブロックの不徹底で動揺的な参加者にすぎないものと見ていること、われわれが統一戦線についての会議に出るのは、大衆の当面の行動の可能な実践的統一を達成するためだし、また第二および第二半インタナショナルの立場全体の政治的誤りを暴露するためなのだが、これは、後者(第二および第二半インタナショナル)が大衆の当面の行動の実践的統一をはかるために、またわれわれの立場の誤りを政治的に暴露するためにこの会議に出てくるのとまったく同じだということと、このことを公式に声明する機会を、われわれは見つけなければならない。

レーニン

一九二二年二月一日に電話で口述
一九五九年に『レーニンスキー・ズボールニク』第三六巻にはじめて発表
全集、第五版、第四四巻、三七七―三七八ページ所収
邦訳全集、第四二巻、五四二―五四三ページ所収

二　三つのインタナショナルの会議への参加の件についてのコミンテルン執行委員会第一回拡大総会[三]の決議案にたいする意見をふくむロシア共産党(ボ)中央委員会政治局員への手紙

同志モロトフへ
(政治局員のために)

計画中の世界のすべての労働者党の会議にコミンテルンが参加する問題について、ジノヴィエフから送ってきた決議案に次の変更をくわえるよう提案する。「根本的な政治

的な意見の相違があるにもかかわらずただちに達成できる労働者大衆の行動の統一」という語句につづく文章を、「労働者大衆は行動の統一を要求している」という語句のところまで削除する。あとにあげた語句で始まる文章を次のように書きかえる。「自覚した労働者は、これらの政治的な意見の相違をよく理解しているが、それにもかかわらず、大多数の労働者とともに、最も猶予ならない、労働者の利益にとって身近な、実際的問題についての行動の統一を望み、また要求している。今日では、誠実な人間ならだれにも、この点についてどんな疑いもありえない」うんぬん。

私の第二の修正提案は、「議論のある問題はみな議事日程から除き、議論の余地のない問題を取りあげる」という語句で始まる文章を、次のように変更し、補足することにある。「そして、最も議論の多い問題はしばらくあとまわしにして、最も議論の余地のない問題を取りあげながらも、会議に参加する両当事者、あるいはむしろ三つの国際連合体は、いうまでもなく、それぞれに自分の見解の終局の勝利を期待するであろう。」

私のいちばんおもな修正提案は、第二および第二半インタナショナルの指導者たちを世界ブルジョアジーの助手とよんでいる一節を削除することにある。こういう言い方は、相手を「まぬけ」よばわりするようなものである。われわれが別の箇所で千度も罵倒しており、これからも罵倒するであろう卑劣漢たちを、いま一度余分に罵倒する満足のために、巨大な重要性をもつ実践的事業をぶちこわす危険をおかすのは、まったく分別を欠いたやり方である。統一戦線戦術はわれわれが第二および第二半インタナショナルの指導者たちを打倒する助けになるのだということがわからなかった人たちが、いまなお拡大執行委員会会議にいるとすれば、そういう連中のために、平易な講義や講演をもっとふやさなければなるまい。たぶん、彼らむけにとくべつ平易な小冊子を書いて、たとえばフランス人がまだマルクス主義的戦術をのみこんでいないとすれば、フランス語でそれを出版する必要があろう。最後に、あすになればその小児病がなおるにきまっている数人の政治的幼児のために、重要な実践的事業をだいなしにする危険をおかすよりは、この決議を全員一致ではなく多数決で採択するほうがましである（反対して投票した連中には、あとで特別の、詳細で平易な処世教育をほどこすことにしよう）。

レーニン

一九二二年二月二三日に電話で口述
一九六四年に『レーニン全集』第五版、第四四巻にはじめて発表
同書、四〇四―四〇五ページ所収

邦訳全集、第四二巻、二五三―二五四ページ所収

三　三つのインタナショナルの会議へのコミンテルン代表団にたいする共産主義インタナショナル執行委員会の指令草案にかんする提案をふくむロシア共産党(ボ)中央委員会政治局員への手紙(一三)

ジノヴィエフ
スターリン
カーメネフその他の政治局員へ

次のように提案する。

一一ページ(第二部)(メンシェヴィキにたいする態度の変更について)を削除する。

いまは、たとえ条件的にでもこれを口にしてはならない。私の考えでは、この指令はつぎのように変更すべきだと思う。

(AA) もし諸君が、最も議論の多い問題、つまり、第二および第二半インタナショナルにたいする第三インタナショナルの敵意をいちばんかきたてるような問題を提出したいのなら、われわれは次のことを条件としてそれに同意する。

(a) 議題のリストについてのわれわれとの合意。

(b) ……および、第三インタナショナルの権利を論じるうえでのきわめて詳細な規則についての合意。この権利は詳細なうえにも詳細に保護すること、等々。

(BB) われわれとしては、労働者大衆の部分的だが、共同の行動を実現するよう試みることが目的だと考えるので、最も議論の余地のない問題だけを提出するように提案する。

もし彼らがAAを受けいれるなら、われわれは次の問題をふくめよう。第二および第二半インタナショナルについてのわれわれの一般的評価、彼らにたいするわれわれの非難の総体、その他、その他。

つぎに、三月二五日、つまり予備会議では、われわれの目的、**すなわち**三つのインタナショナルをみな(第二をも第二半をも)全体会議にさそいこむという目的を達する望みがまだ失われないあいだは、われわれの代表はつとめて自制的にふるまわなければならない。

会議の構成のことで、いきなり打ち切ってはならない。

総じて、絶対にがまんのならない、**とてつもない**卑劣さが

ないかぎり、モスクワと相談せずに打ち切ってはならない。

ハハハ

レーニン

一九二二年三月一四日または一五日に執筆

一九五九年に『レーニンスキー・ズボールニク』第三六巻に発表

全集、第五版、第四五巻、四一一―四一二ページ所収

邦訳全集、第四二巻、五六三―五六四ページ所収

四　三つのインタナショナルの会議(三〇)の終了にさいしてのコミンテルン執行委員会の決定草案にたいする意見と提案

ゲ・イェ・ジノヴィエフへの手紙

一

第一項については、私は次の補足を提案する。――とくに詳細に次の諸点を説明すること。(一) わが国のメンシェヴィキおよびエス・エルと、ソヴェト権力に反対する地主・ブルジョアジーの共同戦線との実際上の結びつき。このために、サーヴィンコフの小冊子『ボリシェヴィキとの闘争』(ワルシャワ、一九二〇年) や、さらにストー・イヴァノーヴィチの『ロシア社会民主党の凋落』に、とくに注意をうながすこと。というのは、ほかの多くの文書によってももちろんわかっていることなのだが、メンシェヴィキとエス・エルの右翼がおもてむき全党の名称のかげに隠れながら、実際にはまったく独自に行動していることが、これらの小冊子では、とくに明瞭にあばきだされているからである。(二) わが国のメンシェヴィキおよびエス・エルと第二および第二半インタナショナルの指導者とが同類だということを説明し、またオットー・バウアーの最近の小冊子(三一)――事実上、資本主義との対決をまえにして臆病風に吹かれて退却を提案し、説教しているもの――の特別の有害さを示すことに、とくに注意をはらうこと。このような説教は、戦時に前線で臆病風に吹かれて逃走を説いた者と同じように扱うほかはない。

第二項は同意。

第三項について。

この点は、私には疑問がある。なぜなら、全員一致制を厳密に要求した決定(三二)があるので、われわれは誤りをおかすことはなかろうと思われるし、また、ベルリン会議で承認された条項(ソヴェト・ロシアの擁護等々)を説明した諸問題についての共同アピールは、たいへんわれわれの役に立つだろうと考えるからである。というのは、将来われわ

れの反対者がどんなに混乱しているかを暴露するのに、それらのアピールを繰りかえし利用することになるだろうから。

第四項について。無条件に賛成。

第五項について。異議なし。

第六項について。

この項目の意味が私にははっきりしない。というのは、ベルリン協定は、採択された決定の公式正文を受け取りしだい、ただちに批准すべきだと、私は考えるからである。あるいは、もっとよいのは、たぶん、われわれの批准するテキストは『プラウダ』四月九日号に公表されたとおりのものだ、という但し書をつけて、いますぐ批准することであろう。

特別の急使によって、ベルリン会議の議事録全文をできるだけ早く取りよせ、その議事録に三つのインタナショナル全部の正式の代表の署名があるかどうかを点検するよう、とくにお願いしたい。

レーニン

二

同志ジノヴィエフへ！

けさわれわれが意見を交換した、あのコミンテルン執行委員会決定の項目に、なお次のものをつけくわえるべきであろう。

今後、第二および第二半インタナショナルの政策の批判の性格をいくらか変えなければならない。すなわち、この批判を（とくに第二インタナショナルや第二半インタナショナルを支持している労働者が出席した集会や、そういう労働者むけの特別のリーフレットや論文では）もっと説明的なものにし、激しいことばでこれらの労働者をおびえさせることなく、特別に忍耐づよく、懇切に批判し、彼らの代表がベルリンで採択したスローガン（たとえば、資本との闘争、八時間労働日、ソヴェト・ロシアの擁護、飢饉難民の救援）と、改良主義的政策全体とが相いれないように矛盾していることを、説明しなければならない。

たぶん、この決定を印刷に付するまえに、第二インタナショナルや第二半インタナショナルがベルリン決定を批准したかどうかを、確かめるべきであろう。

レーニン

一九二二年四月一一日に電話で口述
一九五九年に『レーニンスキー・ズボールニク』第三六巻にはじめて発表
全集、第五版、第四五巻、一四九—一五一ページ所収
邦訳全集、第四二巻、五七八—五八一ページ所収

戦闘的唯物論の意義について（三七）

雑誌『マルクス主義の旗のもとに』の一般的な任務については、すでに同志トロツキーが第一―二号で肝心なことはのこらず述べており、しかもりっぱに述べている。私は、第一―二号の巻頭言のなかで同誌の編集部がかかげている活動の内容と綱領をもっとくわしく規定するような、若干の問題に立ちいってみたい。

この巻頭言には、雑誌『マルクス主義の旗のもとに』のまわりに集まった人々は、かならずしもみな共産主義者ではないが、すべて首尾一貫した唯物論者である、と述べられている。私は、共産主義者と非共産主義者とのこのような同盟は、無条件に必要であり、この雑誌の任務を正しく規定するものだと思う。革命家だけの手で革命をなしとげることができるように考えるのは、共産主義者が（また一般に大革命の発端を首尾よくなしとげた革命家が）おかす誤りのうちで最大の、最も危険な誤りの一つである。そうではなく、革命家は真に生命力のある先進的な階級の前衛の役割を果たしうるだけだということを理解し、これを実行に移す能力をもつことが、あらゆる真剣な革命的活動の成功のために必要である。前衛が前衛の任務を果たせるのは、自分の指導する大衆から離れずに、真に全大衆を率いてすすむことができる場合にかぎられる。種々さまざまな活動分野で非共産主義者と同盟を結ばずには、共産主義建設に成功をおさめることなど、まったく問題にならない。

これは、雑誌『マルクス主義の旗のもとに』が取り組んだ、唯物論とマルクス主義とを擁護する仕事にもあてはまる。幸いなことに、ロシアの先進的社会思想の主要な諸流派には、しっかりした唯物論的伝統がある。ゲ・ヴェ・プレハーノフは言うまでもなく、チェルヌィシェフスキーの名をあげるだけでも十分である（三八）。今日のナロードニキ（人民社会党、エス・エル、その他）は、しばしば流行の反動的哲学学説のあとを追ってチェルヌィシェフスキーから後退し、ヨーロッパ科学の「最新の成果」と称する見かけだおしのものにひっかかり、この見かけだおしのもののかげに、ブルジョアジーやブルジョアジーの先入見やブルジョア的反動性への忠勤のあれこれの変種がひそんでいるのを、見わけることができなかった。

とにかく、わがロシアには、非共産主義者の陣営に属する唯物論者がまだいるし――疑いもなく、これからも長いあいだいることだろう。だから、哲学的反動や、いわゆる「教養ある社会」の哲学的先入見との闘争にあたって、首尾一貫した戦闘的唯物論の支持者のすべてを共同活動に引きいれることは、われわれの無条件の義務である。老ディーツゲン――ろくなものも書かないくせにうぬぼれ屋の文筆家である彼の息子と混同してはならない――が、現代社会の哲学教授はたいていは事実上「学位をもった坊主主義の従僕」にほかならない、と言ったのは、ブルジョア諸国に広くおこなわれていてそれらの国の学者や評論家のあいだで注目を集めている哲学的諸流派についてのマルクス主義の基本的な見地を、正しく、的確に、明瞭に表現したものであった。

自分を進歩的だと考えるのが好きなわがロシアのインテリゲンツィア――もっとも、この点では、他のあらゆる国にいる彼らの朋輩も同じであるが――は、ディーツゲンのことばに示された評価の方向に問題を移すことが、あまりお好きでない。しかし、彼らがこれを好かないのは、真実が彼らの耳に痛いからである。国家の面で、つぎには一般経済の面で、さらに日常生活やその他あらゆる面で、現代の教養ある人々が支配的ブルジョアジーに従属していることをすこしでも考えてみれば、それだけでもディーツゲンの鋭い特徴づけが絶対に正しいことを理解するのに十分である。ブルジョアジーの階級的利害や階級的地位、あらゆる形態の宗教にたいする彼らの支持と、流行の哲学的諸流派の思想的内容とのあいだの結びつきを理解するには、たとえばラジウムの発見に結びついた流派から、現在アインシュタインにしがみつこうとつとめている流派にいたるまで、ヨーロッパ諸国に頻繁に出現している流行の哲学的流派の大多数を思いだすだけで十分である。

以上に述べたことからわかるように、戦闘的唯物論の機関誌になろうとする雑誌は、第一には、現代の「学位をもった坊主主義の従僕」を、彼らが公認の科学の代表者として登場しているか、それとも「民主主義的左派または社会主義思想」の評論家と自称する自由論客として登場しているかにかかわりなく、たゆみなく暴露し追求するという意味で、戦闘的な機関誌でなければならない。

第二に、このような雑誌は、戦闘的無神論の機関誌でなければならない。わが国には、この活動を担当する官庁が、すくなくとも国家機関がある。しかし、この活動は、どうやら、わが国のまさしくロシア的な官僚主義（たとえソヴェト官僚主義であるにせよ）の一般的条件に圧迫されて、きわめて不活発に、きわめて不満足なやり方でおこなわれ

ているようである。だから、戦闘的唯物論の機関誌になることを任務とする雑誌としては、関係国家機関の活動を補い、この活動を是正し活気づけるように、無神論の宣伝と闘争をうまずたゆまずおこなうことが、きわめてたいせつである。すべての国語で書かれた関係文献全体を注意ぶかく調べ、この分野のいくぶんでも価値のある労作はすべて翻訳するか、要約なりと紹介するようにしなければならない。

ずっと以前にエンゲルスは、一八世紀末の戦闘的無神論の文献を翻訳して人民のあいだに大量にひろめるよう、現代プロレタリアートの指導者たちに勧めたことがあった[三九]。恥ずかしいことであるが、われわれはまだそれをやっていない（これは、革命期に権力を獲得することは、この権力を正しく利用する能力をもつことよりもずっとたやすいことを示す多くの証明の一つである）。このわれわれの不活発さ、無活動、無能力は、しばしばあらゆる種類の「仰々しい」理由で弁明されている。たとえば、一八世紀の古い無神論的文献は古くさくなった、非科学的だ、素朴だ、などというぐあいである。衒学でなければ、マルクス主義の完全な無理解をつつみかくしている、このような博学ぶった詭弁ほど悪いものはない。たしかに、一八世紀の革命家の無神論的著作のなかには、非科学的なことも素朴なこともすくなからず見いだされるであろう。しかし、それらの著作を刊行する者が、それを要約したり、短いあとがきをつけて、一八世紀末以後に人類が宗教の科学的批判の面でなしとげた進歩を指摘したり、この問題に関係した最近の著作をあげたりなどするのを禁じる者は、だれもいないのである。現代社会全体によって無知、無学、偏見の運命を負わされている幾千万の人民大衆（とりわけ、農民と手工業者の大衆）が、純マルクス主義的な啓蒙の直線コースだけを通ってこの無知からぬけだすことができるなどと考えるのは、マルクス主義者としておかしうる最大の誤りであり、最悪の誤りであろう。これらの大衆に種々さまざまな無神論の宣伝材料をあたえ、種々さまざまな生活分野からとってきた事実を知らせ、いろいろな仕方で彼らに近づいて、種々さまざまな方面から、また種々さまざまな方法で彼らの関心を呼びおこし、彼らを宗教的な眠りから呼びさまし、ゆりおこす、等々しなければならない。

支配する坊主主義を機知ゆたかに公然と攻撃している一八世紀の古い無神論者の軽妙な、生きいきとした、才能ゆたかな評論は、退屈で、無味乾燥で、適切な実例の例証などめったにあげていない、マルクス主義の受け売りにくらべて、しばしば、人々を宗教的な眠りから呼びさますのにはるかに適していることがわかるだろう。こういうマルク

ス主義の受け売りは、われわれの文献のなかで優勢であり(なにもぼろを隠すにはあたらない)、マルクス主義を歪曲していることもしばしばである。わが国では、マルクスとエンゲルスのいくぶんでも大きな著作は、みな翻訳されている。わが国で、古い無神論や古い唯物論が、マルクスとエンゲルスのくわえた訂正によって補足されずに終わりはしないかなどと心配するのは、まったく根拠のないことである。なにより重要なことは――マルクス主義者を気どりながら実際にはマルクス主義をかたわにしているわが国の共産主義者が、いちばんよく忘れているのは、まさにこのことであるが――、まだまったく遅れた大衆に、宗教問題にたいする意識的態度と宗教の意識的批判にたいする関心とをいだかせる能力をもつことである。

他方では、現代の科学的宗教批判の代表者たちを見るがよい。教養あるブルジョアジーのこれらの代表者は、宗教的偏見にたいする彼らの論駁の「補足」として、自分がブルジョアジーの思想的奴隷であり「学位をもった坊主主義の従僕」であることをたちまち暴露するような議論を述べたてている。

実例を二つあげよう。エル・ユ・ヴィッペル教授は、一九一八年に『キリスト教の起原』(「ファロス」出版所、モスクワ)という小著を出版した。この筆者は、近代科学の主要な成果を紹介しながら、政治団体としての教会の武器となっている偏見や欺瞞とたたかわないばかりか、これらの問題を回避しているばかりか、自分は観念論と唯物論の両「極端」を超越するのだという、まったく滑稽で、きわめて反動的な主張をおこなっている。これは、世界中で、勤労者からしぼりとった利潤から数億ルーブリをさいて宗教支持に使っている支配的ブルジョアジーに忠勤をはげむことである。

有名なドイツの学者、アルトゥル・ドレフスは、その著書『キリスト神話』のなかで、宗教的な偏見や伝説を反駁し、キリストなどという人間はまったく生存していなかったことを証明しながら、その本の末尾で宗教賛成の意見を述べている。もっとも、その宗教は、装いを新たにした、きれいにつくろった技巧をこらしたもので、「日ごとにますます強まりつつある自然主義的潮流」(ドイツ語第四版、一九一〇年、二三八ページ)に対抗できるような宗教なのだが。これこそ、露骨な、意識的な反動家であって、搾取者どもが古い腐敗しきった宗教的偏見を、新式の、いっそう醜悪で卑劣な偏見ととりかえるのを、公然と助けるものである。

こう言っても、ドレフスを翻訳してはならないという意味ではない。それは、共産主義者とすべての首尾一貫した

唯物論者とは、ブルジョアジーの進歩的部分との同盟をある程度実現しながらも、彼らが反動におちいるときには毅然としてこれを暴露しなければならないという意味なのである。それは、一八世紀、すなわちブルジョアジーが革命的であった時代のブルジョアジーの代表者たちとの同盟を避けることは、マルクス主義と唯物論とを裏切ることになるだろう、という意味なのである。なぜなら、なんらかのかたちで、なんらかの程度で、ドレフスのような人々と「同盟」を結ぶことは、支配的な宗教的非開化主義者とたたかうさいのわれわれの義務だからである。

雑誌『マルクス主義の旗のもとに』は、戦闘的唯物論の機関誌となろうとするのであるから、無神論の宣伝や、これに関係した文献の概観や、この分野でのわれわれの国家活動の大きな欠陥の是正に、多くの紙面をさかなければならない。とくに重要なのは、現代のブルジョアジーの階級的利益や階級的諸組織と、宗教施設や宗教的宣伝の諸団体との結びつきを示す具体的な事実や対比をたくさんふくむ本や小冊子を利用することである[一四]。

アメリカ合衆国に関係した資料はみな非常に重要である。この国では、宗教と資本との公式の、お役所式の国家的な結びつきは、それほどはっきり現われてはいない。だがそのかわりに、いわゆる「現代民主主義」（メンシェヴィキやエス・エルが、いくぶんは無政府主義者等々も、あのように愚かしくあがめまつっているところの）とは、ブルジョアジーに有利な事柄を説教する自由にほかならないということが、それだけいっそうはっきりする。ところで、ブルジョアジーにとっては、最も反動的な思想や、宗教や、非開化主義や、搾取者の弁護などを説教することが、有利なのである。

戦闘的唯物論の機関誌となろうとする雑誌が、わが国の読書界に無神論的文献の概観を提供して、しかじかの著作がどういう読者層にどういう点で適しているかを指摘し、またどういう著作がわが国で出版されているか（出版されていると見なしてよいのは、ある程度良い翻訳の場合にかぎられる。だが、そういう翻訳はあまり多くない）、また今後出版する必要があるかを示すように希望したい。

共産党に属さない首尾一貫した唯物論者との同盟のほかに、戦闘的唯物論の果たさなければならない活動にとって、いっそう重要と言わないまでも、それにおとらず重要なものは、近代自然科学の代表者で、唯物論に好意をよせ、いわゆる「教養ある社会」に広くひろまり流行になっている観念論や懐疑論への哲学的よろめきに反対して、唯物論を

擁護し主張することを恐れない人々との同盟である。

雑誌『マルクス主義の旗のもとに』の第一―二号にのったアインシュタインの相対性理論についてのア・チミリャーゼフの論文からみて、同誌がこの第二の同盟の実現にも成功することを期待してよい。この同盟には、もっと多くの注意をはらわなければならない。近代自然科学が際会している急激な転換そのものからして、大小の反動的な哲学学派や流派がたえず生みだされていることを記憶にとどめなければならない。だから、自然科学の分野での最近の革命によって提起されている諸問題を追求し、哲学雑誌の誌上でこの仕事に自然科学者を参加させることは、それを解決せずには戦闘的唯物論がけっして戦闘的にもなりえなければ唯物論にもなりえない任務である。アインシュタイン自身は、チミリャーゼフによれば、唯物論の原理に積極的な攻撃をくわえているわけではけっしてないのだが、このアインシュタインの理論に、すでにすべての国のきわめて多くのブルジョア・インテリゲンツィアがしがみついていることを、チミリャーゼフは同誌の第一号でことわらなければならなかった。だが、これは、アインシュタインひとりにかぎったことではなく、一九世紀末以降の自然科学の大改革者たちの、大多数とは言わないまでも、多くの者にあてはまることである。

このような現象に無自覚的な態度をとるまいと思えば、われわれは、しっかりした哲学的基礎づけがなければ、どんな自然科学、どんな唯物論も、ブルジョア思想の攻撃やブルジョア的世界観の復活にたいする闘争をたたかいぬくことができないということを、理解しなければならない。この闘争をたたかいぬき、それを完全な勝利までやりとおすためには、自然科学者は、近代的唯物論者となり、マルクスに代表される唯物論の意識的信奉者にならなければならない。すなわち、弁証法的唯物論者にならなければならない。この目的を達するためには、雑誌『マルクス主義の旗のもとに』の寄稿家たちは、唯物論的見地からするヘーゲル弁証法の系統的研究――すなわち、マルクスが彼の『資本論』や、彼の歴史的著作や政治的著作のなかで実際に適用した、しかもみごとに適用したあの弁証法の研究――を組織しなければならない。マルクスの適用はまことにみごとなものであったから、現在、東洋(日本、インド、中国)で新しい諸階級が――すなわち、地球人口の大部分を占め、これまでその歴史的無活動と歴史的な眠りとによってヨーロッパの多くの先進国家における停滞と腐朽の条件となってきた幾億の人々が、生命と闘争に目ざめてゆくその一日一日、新しい諸国民と新しい諸階級が生活に目ざめてゆくその一日一日が、マルクス主義の正しさをますま

す確証しているほどである。

たしかに、ヘーゲル弁証法のこのような研究、このような解釈、このような宣伝の仕事は、きわめて困難なものであって、この点での最初の経験は、疑いもなく、誤りをともなうであろう。しかし、誤りをおかさないのは、なにもしない者だけである。マルクスが唯物論的に理解されたヘーゲルの弁証法を適用したやり方を基礎として、われわれは、この弁証法をあらゆる側面から仕上げ、ヘーゲルの主要著作の抜粋を雑誌に発表し、それを唯物論的に解釈し、マルクスが弁証法を適用した手本や、さらに経済的諸関係や政治的諸関係の分野で、近代史、とくに現代の帝国主義戦争と革命がはなはだ大量に提供している弁証法の手本によって、これに注解をくわえることができるし、またそうしなければならない。私の考えでは、雑誌『マルクス主義の旗のもとに』の編集者や寄稿家のグループは、一種の「ヘーゲル弁証法の唯物論的同好者協会」とならなければならない。現代の自然科学者は、唯物論的に解釈されたヘーゲルの弁証法のなかに、自然科学の革命によって提起されている哲学的諸問題への幾多の解答を見いだすであろう（もし彼らがさがしもとめることを知り、またわれわれが彼らを助けることができるようになるなら）。他方、ブルジョア的流行へのインテリゲンツィア的拝跪者たちは、これらの問題で反動へ「迷いこんでゆく」のである。

このような任務をみずからとりあげ、それを系統的に果たしていかなければ、唯物論は、戦闘的唯物論となることができない。それは、シチェドリーンの言い回しを借りていえば、戦いをいどむ者というより、戦いをいどまれる者にとどまるだろう。[三] このようにしないかぎり、大自然科学者たちも、その哲学的結論や概括ではたよりなさを暴露する場合が、これまでより少なくはならないであろう。なぜなら、自然科学はきわめて急速に進歩しており、あらゆる分野で深刻な革命的転換の時期にあるので、自然科学は哲学的結論なしにはけっしてやっていけないからである。

終わりにあたって実例を一つあげよう。これは、哲学の分野にかんするものではないが、ともかくも雑誌『マルクス主義の旗のもとに』がやはり注意をはらおうとしている社会問題の分野に関係するものである。

これは、現代のえせ科学が、事実上、最も粗雑な、最も忌まわしい反動的見解の伝達者となっている実例の一つである。

最近、私は、「ロシア技術協会」[三] の第一一部から刊行されている雑誌『エコノミスト』第一号（一九二二年）の送付をうけた。私にこの雑誌を送ってよこした若い共産党員は、（おそらくこの雑誌の内容を調べる暇がなかったのだ

ろうが）軽率にもこの雑誌について非常に同情的な批評をしたのであった。実際には、この雑誌は、どれだけ意識的かは知らないが、現代の農奴制支持者たちの機関誌である。もちろん、彼らは、科学性とか民主主義などというマントで身をおおってはいるが。

この雑誌に、ペ・ア・ソローキン氏とかいう人が、「戦争の影響について」の「社会学的」研究と称する膨大な論文をのせている。この博学な論文には、筆者や彼の数多くの外国の教師や同僚の「社会学的」労作からの博学な引用がたくさんある。つぎにかかげるのが彼の博学ぶりである。八三ページにこう書かれている。

「今日ペトログラードで成立する婚姻件数一万について、離婚の数は九二・二件にあたる。とほうもない数字である。そのうえ、離婚一〇〇件について五一・一件は、婚姻期間が一年にみたず、その一一％は一ヵ月未満、二二％は二ヵ月未満、四一％は三—六ヵ月未満であって、わずか二六％だけが六ヵ月をこえるものであった。これらの数字が語るところは、現代の合法的婚姻は、実質上婚姻外の性関係を隠蔽し、『色ごと』の愛好者に『合法的に』その肉欲を満足させる可能性をあたえる形式だということである。」（『エコノミスト』第一号、八三ページ）

この紳士も、この雑誌を発行し、それにこのような議論をのせているロシア技術協会も、自分を民主主義の味方だと考えていること、そして、もし他人から彼らの実際にあるがままの名まえでよばれるなら、すなわち農奴制支持者、反動家、「学位をもった坊主主義の従僕」とよばれるなら、最大の侮辱と考えるだろうことは、疑いをいれない。

婚姻や離婚や私生児についてのブルジョア諸国の立法や、さらにこの方面での実情をすこしでも調べたなら、この問題に関心をもつ人にはだれにでも、現代のブルジョア民主主義が、すべての最も民主的なブルジョア共和国においてさえ、この点では婦人や私生児にたいしてまさに農奴主的な態度をとっていることがわかるだろう。

だからといって、メンシェヴィキやエス・エルや一部の無政府主義者、また西欧でこれにあたる諸党のすべてが、民主主義や、ボリシェヴィキの民主主義侵害についてやかましく叫びつづける妨げにならないのは、もちろんである。実際には、ボリシェヴィキの革命こそ、婚姻や離婚や私生児の地位というような問題にかんして、唯一の首尾一貫した民主主義革命なのである。ところで、これは、あらゆる国で住民の過半数の利益に最も直接にふれる問題である。ボリシェヴィキの革命のまえにも、民主主義的ブルジョア革命と自称する革命はたくさんあったけれども、このボリシェヴィキの革命だけがはじめて、前記の点で、反動と農

奴制にたいしても、また支配する有産階級のありきたりの偽善にたいしても、断固たる闘争をおこなったのである。

もし一万件の婚姻にたいする九二件の離婚がソローキン氏にはとほうもない数字に思えるとすれば、この筆者は、そんな修道院がこの世に存在するとはだれも信じないほど世間から隔離されたどこかの修道院で暮らし、そこで育ってきたのか、でなければ、この筆者が反動とブルジョアジーのお気にいるように真実をまげているのか、どちらかだと推定するほかはない。ブルジョア諸国の社会的条件にいくらかでも通じている人ならだれでも、事実上の離婚（もちろん、教会や法律の承認をうけない）の実数はどこでもこれよりずっと多いことを知っている。この方面でロシアが他の国々と違っているただ一つの点は、ロシアの法律が、偽善や、婦人とその子どもの無権利状態を神聖化しないで、あらゆる偽善とあらゆる無権利とにたいする系統的なたたかいを、国家権力の名において公然と布告していることである。

マルクス主義的雑誌は、このような現代の「教養ある」農奴制支持者ともたたかわなければならないであろう。おそらく、彼らのすくなからぬ部分は、わが国庫の金さえ受け取って、青年教育の国家公務に従事していることだろう。もっとも、彼らがこういう目的に不適当なことは、ちょうど名うての女たらしが若人の教育施設の監督者の役割に不適当なのと同じであるが。

ロシアの労働者階級は、権力を奪取することはできたが、この権力の用い方をまだ学びとっていない。というのは、もしそうでなかったなら、彼らは、このような教師や学術協会員をとっくの昔にうやうやしくブルジョア「民主主義」の諸国に送りつけていたろうからである。そここそ、このような農奴制支持者にうってつけの居場所である。

学ぶ気があれば、学びとるであろう。

一九二二年三月一二日

『マルクス主義の旗のもとに』第三号、一九二二年三月
署名——エヌ・レーニン
全集、第五版、第四五巻、二三一—二三三ページ所収
邦訳全集、第三三巻、二二七—二三七ページ所収

われわれは高い代価を払いすぎた

かなり多数の出席者のある労働者集会でブルジョアジーから委任をうけた連中が彼らの宣伝をやっている会場へ、共産主義者の代表がはいらなければならないと仮定したまえ。さらに、この会場にはいるのに、高い入場料をブルジョアジーがわれわれに要求すると仮定したまえ。もしこの入場料がまえからきまっていないとすれば、われわれがわが党の財政に負担をかけないため値段の掛合いをやらなければならないことは、もちろんである。もしわれわれがこの会場にはいるのに高すぎる入場料を払ったとすれば、疑いもなく、われわれは誤りをおかしたことになる。しかし、——すくなくとも、われわれが値段の掛合いをうまくやることを学びとっていないあいだは——これまで改良主義者、すなわちブルジョアジーの最も忠実な味方にいわば完全に「支配されてきた」労働者に話しかける機会を放棄するよりは、高い入場料でも払ったほうがよい。

この比喩は、きょうの『プラウダ』で、三つのインタナショナルの代表のあいだにどういう条件で協定が結ばれたかを知らせたベルリン電報を読んだときに、私の頭にうかんだものである。

わがほうの代表が次の二つの条件に同意したのは正しくなかったと、私は確信する。すなわち、第一は、ソヴェト権力は四七名の社会革命党員の裁判[註]で死刑を適用しないという条件、第二は、ソヴェト権力は、三つのインタナショナルのそれぞれの代表が裁判に立会うのを許可するという条件である。

この二つの条件は、革命的プロレタリアートが反動的ブルジョアジーにあたえた政治的譲歩にほかならない。もしこのような規定の正しさを疑う者があるとすれば、そういう人の政治的素朴さを明らかにするためには、彼に次のような質問を提出するだけでよい。すなわち、蜂起をおこした罪に問われたアイルランドの労働者の裁判、またはつい最近蜂起をおこした罪に問われた南アフリカの労働者の裁判[註]に、三つのインタナショナルのそれぞれの代表が立会うことに、イギリス政府その他の現存の政府がはたして同意するであろうか？　これらの場合や、それと同じような場

合に、イギリス政府その他の政府は、彼らの政治上の敵に死刑を適用しないという約束をあたえることに、同意するであろうか？　こういう質問についてちょっと考えてみるだけで、次の簡単な真実、すなわち、われわれは全世界にわたる反動的ブルジョアジーと革命的プロレタリアートとの闘争を目撃しているのだという真実を、理解するのに十分である。いまの場合は、この闘争の一方の側を代表するコミンテルンが、他方の側——反動的ブルジョアジーに、政治的な譲歩をしているのである。というのは、エス・エルが事実上、ときにはまた正式にも、国際的な反動的ブルジョアジー全体との統一戦線をつくって行動し、共産主義者を狙撃し、共産主義者にたいする蜂起を組織したのだということは、世界じゅうだれ知らぬ者のない（明白な真実を隠したがっている者以外は）ことだからである。

そこで問題となるのは、それと引換えに、国際ブルジョアジーはわれわれにどのような譲歩をしたか、ということである。これにたいする回答は、一つしかありえない。すなわち、彼らはわれわれにどのような譲歩もしなかった、ということである。

階級闘争のこの簡単明瞭な真実をあいまいにする議論だけが、労働者や勤労大衆の目をくらます議論だけが、この明白な真実をあいまいにしようなどと試みることができるのである。三つのインタナショナルの代表がベルリンで調印した協定によって、われわれはすでに国際ブルジョアジーに二つの政治的譲歩をおこなった。だが、それと引換えにわれわれは彼らからなんの譲歩もうけなかった。

第二および第二半インタナショナルの代表たちは、プロレタリアートから第二半インタナショナルへの政治的譲歩をもぎとる脅喝者の役割を演じながら、しかも、国際ブルジョアジーに革命的プロレタリアートへのなんらかの政治的譲歩をさせることを、いや、させるよう試みることとさえ、きっぱりと拒否したのである。なるほど、この争う余地のない政治的事実は、老練なブルジョア的外交家たちによってあいまいにされたが（ブルジョアジーは何世紀ものあいだ、自分の階級の代表者たちに、たくみな外交家となることを教えてきた）、しかし、事実をあいまいにしようと試みたところで、事実そのものがすこしでも変わるわけではない。第二および第二半インタナショナルのあれこれの代表が、ブルジョアジーと直接に結びついていたか、それとも間接に結びついていたかは、この場合、まったくどうでもよい問題である。われわれは彼らを、直接の結びつきをもっているかどで非難しているのではない。そこに直接の結びつきがあったか、それともかなりこみいった間接の結びつきがあったかは、この件にまったく関係がないことである。

この件に関係があるのは、コミンテルンが第二および第二半インタナショナルの代表の圧力をうけて国際ブルジョアジーに政治的に譲歩し、しかもそれと引換えに、われわれのほうではなに一つ譲歩をうけなかったということだけである。

ここからどういう結論がでてくるか？

結論は、なによりもまず、共産主義インタナショナルを代表した同志ラデック、ブハーリンその他がまちがった行動をとったということである。

つぎに、そうだとすると、ここから、われわれは彼らの調印した協定を破棄すべきだ、という結論がでてくるであろうか？　そうではない。そういう結論は正しくないであろうし、われわれは調印された協定をやぶるべきではないと、私は考える。われわれの引きだすべき結論は今回は、ブルジョア外交家のほうがわれわれの外交家よりも巧妙であったということ、そしてこのつぎには――入場料がまえもってきまっていない場合には――われわれはもっと巧妙に値段の掛合いをやり、掛引しなければならないということだけである。もし国際ブルジョアジーのほうでも、引換えにソヴェト・ロシアにたいして、または資本主義とたたかっている国際プロレタリアートの他の諸部隊にたいして、多少とも見合った譲歩をするのでなければ、われわれは国際ブルジョアジーに政治的な譲歩をしない（これらの譲歩が、どんな仲介者によってどんなに巧妙につつみかくされていようと）ということを、自分の規則としなければならない。

統一戦線戦術に反対していたイタリアの共産主義者と、一部のフランスの共産主義者やサンディカリストは、以上の考察から、統一戦線戦術は誤りである、という結論を引きだすかもしれない。この結論は、明らかに正しくないであろう。もし共産主義者の代表が、これまで改良主義者に完全に「支配されてきた」労働者に、たとえわずかでも話しかけるいくらかの機会がえられるような会場にはいるために、高すぎる料金を払ったとすれば、このつぎの機会には、この誤りを訂正するように努力しなければならない。しかし、どんな条件も拒否すること、かなりに堅固に防衛された、閉鎖的なこの会場にはいるためにどんな入場料を払うのも拒否することは、比較にならないほどいっそう大きな誤りであろう。同志ラデック、ブハーリンその他の誤りは大きなものではない。ことに、このことからわれわれのこうむる最も大きな危険といっても、せいぜい、ソヴェト・ロシアの敵どもが、ベルリン会議の結果にはげまされて、個々の人物にたいして二、三の暗殺を企て、ひょっとすると成功するかもしれないということなのだから、なおさらそうである。というのは、いまでは敵は、機会があれ

ば共産主義者を射撃しても大丈夫だということ、共産主義者が自分たちを射殺するのを、ベルリン会議式の会議が妨げてくれるだろうということを、あらかじめ知っているからである。

しかし、とにかく、われわれは、閉ざされた会場にいくらかの割れ目をうがった。とにかく同志ラデックは、第二インタナショナルがデモンストレーションのスローガンのなかにヴェルサイユ条約廃棄のスローガンを取りいれるのを拒否したことを、たとえ一部の労働者にもせよ、労働者の前で暴露することができた。イタリアの共産主義者と一部のフランスの共産主義者やサンディカリストの最大の誤りは、彼らが、自分のすでにもっている知識だけに満足している点にある。彼らは、第二および第二半インタナショナルの代表者や、さらにパウル・レーヴィ、セラーティ等等の諸君がブルジョアジーのきわめて老練な代表であり、その影響の伝達者であることを、自分たちがよく知っているということで、満足している。しかし、これをほんとうにはっきりと知り、その意義をほんとうに理解しているような人々、労働者は、イタリアでも、イギリスでも、アメリカでも、フランスでも、疑いもなく少数者である。共産主義者は、自分の狭い殻に閉じこもることなく、少々の犠牲にためらわずに、あらゆる新しい困難な事業の初期には避けられない誤りを恐れることなく、ブルジョアジーの代表が労働者にはたらきかけている閉ざされた会場にはいりこむように行動することを、学びとらなければならない。これを理解しようとせず、これを学びとろうとしない共産主義者は、労働者のあいだで多数者を獲得できるという望みはないし、すくなくとも、彼らは、このような多数者を獲得する仕事を困難にし、遅らせる。だが、こういうことは、共産主義者には、また労働者革命のあらゆる真の支持者には、まったく許しえないことである。

彼らの外交家を代表とするブルジョアジーは、またしても共産主義インタナショナルの代表よりも老練であった。これが、ベルリン会議の教訓である。この教訓を、われわれは忘れないであろう。この教訓から、われわれはあらゆる必要な結論を引きだすであろう。第二および第二半インタナショナルの代表にとって統一戦線が必要なのは、われわれに度はずれの譲歩をさせてわれわれを弱めようと望んでいるからである。彼らは、入場料を全然払わずにわれわれ共産主義者の会場にはいりこみたいと願っており、改良主義的戦術が正しく革命的戦術が誤っているということを統一戦線戦術によって労働者に納得させたいと願っている。われわれに統一戦線が必要なのは、われわれがその反対のことを労働者に納得させたいと願っているからである。わ

われわれは、わが共産主義代表のおかした誤りについて、それをおかした当人の責任、それをおかした党の責任を問いはするが、これらの誤りの手本に学び、今後それが繰りかえされるのを防ぐであろう。しかし、どんな場合でも、われわれは、わが共産主義者の誤りを、全世界にわたって資本の攻撃をうけているプロレタリアートの大衆のせいにすることはないであろう。これらの大衆が資本とたたかうのを援助するために、彼らが国際経済全体と国際政治全体における二つの戦線の「巧妙なしくみ」を理解するのを助けるために、われわれは統一戦線戦術を採用したのであり、またそれを最後まで遂行するであろう。

一九二二年四月九日

一九二二年四月九日に電話で口述
『プラウダ』第八一号、一九二二年四月一一日
署名――レーニン
全集、第五版、第四五巻、一四〇―一四四ページ所収
邦訳全集、第三三巻、三四〇―三四五ページ所収

共産主義インタナショナル第四回大会[三三]

一九二二年一一月五日――一二月五日

一　ロシア革命の五ヵ年と世界革命の展望

一一月一三日、コミンテルン第四回大会での報告

(同志レーニンが姿をあらわすと、さかんな、鳴りやまない拍手と喝采で全会場がわきかえる。全員起立して「インタナショナル」を歌う) 同志諸君！　私は、演説者の名簿には主報告者としてのっているが、長わずらいのあとで、大きな報告をすることができないのは、おわかりのことと

思う。私にできることは、最も重要な問題の序論を述べることだけである。私のテーマはごく限られたものとなろう。「ロシア革命の五ヵ年と世界革命の展望」というテーマは、およそひとりの演説者が一回の演説で論じつくすには、範囲が広すぎ、大きすぎるテーマである。そこで、私はこのテーマの小さな一部分、すなわち「新経済政策」の問題だけを取りあげることにする。私は、現在では最も重要なこの問題——いま私はそれに取り組んでいるので、すくなくとも私にとっては最も重要な問題——を諸君に知ってもらうために、わざとこの小さな部分だけを取りあげる。

そこで、われわれがどういうふうに新経済政策を始めたか、この政策によってどんな成果をあげたかを述べよう。私がこの問題だけに限るなら、おそらく、この問題を概観し、それについての一般的な概念をあたえることができるであろう。

まずはじめに、われわれがどのようにして新経済政策にたどりついたかを述べるとすれば、私が一九一八年に書いた一論文を引用しなければならない。一九一八年のはじめに、私は短い論戦のなかで、国家資本主義にたいしてわれわれはどんな立場をとるべきかという問題にふれたことがあった。そのとき、私は次のように書いた。

「国家資本主義は、わがソヴェト共和国の現状（すなわち当時の状態）に比すれば一歩前進であろう。かりに半年後にわが国に国家資本主義が打ち立てられるなら、それはたいへんな成功だろうし、一年後にはわが国に社会主義が最終的に確立され、不敗なものとなることを最も確実に保障するものであろう。」[三]

これは、もちろん、われわれがいまよりも少々愚かであったとはいえ、このような問題を検討することができないほど愚かではなかった当時に言ったことである。

このように、私は一九一八年に、ソヴェト共和国の当時の経済状態からすれば国家資本主義は一歩前進である、という意見をもっていた。これは非常に奇妙に、おそらくばかばかしくさえ聞こえるだろう。なぜなら、すでにその当時でも、わが共和国は社会主義共和国であったからである。当時われわれは、社会主義的な措置と名づけるほかはないいろいろな新しい経済的措置を、毎日のように大急ぎで——たぶん、必要以上に急いで——とっていた。それでも、その当時私は、ソヴェト共和国の当時の経済状態にくらべると国家資本主義は一歩前進である、と考えていた。私はさらに、単純にロシアの経済体制の諸要素を数えあげるというやり方で、この考えを明らかにしようとした。私の考えでは、これらの要素は次のようなものであった。「（一）家父長制的な、すなわち最も原始的な形態の農業、（二）

小商品生産（穀物を売る農民の多数者がこれにはいる）、（三）私経営的資本主義、（四）国家資本主義、（五）社会主義。」すべてこれらの経済的要素が、その当時のロシアに現われていた。当時私は、これらの要素がどのような相互関係にあるのか、非社会主義的な要素の一つ、すなわち国家資本主義を社会主義よりも高く評価すべきではないかどうかを解明することを、課題とした。繰りかえしていうが、みずから社会主義共和国と称している共和国で、非社会主義的な要素が社会主義よりも高く評価され、それよりも上位にあると認められるのは、だれにも奇妙に思われることであろう。しかし、われわれがロシアの経済体制を、けっして同質的なもの、高度に発達したものと見ないで、ロシアには家父長制的な農業すなわち農業の最も原始的な形態と、社会主義的形態とが並存していることを十分に自覚していたことを、諸君が思いだすならば、問題は明らかになる。国家資本主義は、こういう情勢のもとでは、どんな役割を果たすことができるであろうか？

これらの要素のうちのどれが優勢であるか、と私はさらに自問してみた。小ブルジョア的な環境では小ブルジョア的な要素が支配的であることは、はっきりしている。その当時、私は小ブルジョア的な要素が優勢であることを認めていたし、そうしか考えようがなかった。その当時私が自問した問題は、——これは、いまの問題には関係のない特殊な論戦のなかでのことであった——国家資本主義にどんな態度をとるかということであった。そして私はこう自答した——国家資本主義は、社会主義的な形態ではないとはいえ、われわれにとってもロシアにとっても、いまの形態よりは好ましい形態であろう、と。これは、なにを意味しているか？　これは、われわれがすでに社会主義革命を遂行したとはいえ、社会主義経済の芽ばえをも、その端緒をも、過大評価していなかったことを意味している。反対に、われわれは、まず最初に国家資本主義に到達し、そのあとで社会主義に到達するほうがよいだろうということを、すでにその当時ある程度認めていたのである。

この部分をとくに強調しなければならない。なぜなら、私の考えでは、ここから出発することによってはじめて、第一に、いまの経済政策がどんなものであるかを説明することができるし、第二に、共産主義インタナショナルにとっても非常に重要な実践的結論を、このことから引きだすことができるからである。私は、われわれがあらかじめできあがった退却計画をすでにもっていた、と言うつもりはない。そういうものはなかった。私の短い論戦文は、その当時けっして退却の計画ではなかった。一つの非常に重要な点、たとえば、国家資本主義にとって基本的な意義をも

っている商業の自由について、この論文はひとことも述べていない。それでも、退却についての一般的な、漠然とした考えは、すでにこれによってあたえられていた。われわれは、経済体制からみて昔も今も非常な後進国である国の立場からばかりでなく、共産主義インタナショナルと西ヨーロッパの先進的な諸国の立場からも、このことに注意をはらわなければならないと思う。たとえば、いまわれわれは綱領の作成に取り組んでいる。私個人としては、いまはすべての綱領を一般的に、いわば第一読会で討議するにとどめ、それを印刷することはするが、最終の決定はいますぐには、今年中にはくださないようにするのが、いちばんよいだろうと考えている。なぜか？　私がそう考えるのは、まず第一に、もちろん、われわれはまだすべての綱領をよく熟考してはいないからである。つぎに、われわれは、ありうべき退却と、この退却を安全におこなう問題とを、ほとんどまったく熟考したことがないからでもある。ところが、資本主義を打倒し、大きな困難のなかで社会主義を建設するといった根本的な変化が全世界に起こっているときに、われわれが無条件に注意をはらわなければならない問題は、まさにこれなのである。われわれは、直接に攻勢に転じ、しかも勝利を占める場合にどう行動するかを知らなければならないだけではない。革命のときには、これは、それほどむずかしいことでも、それほど重要なことでもなく、すくなくとも、最も決定的なことではない。革命のときには、敵が度を失うような時点がいつでもあるものである。そんなときに敵を攻撃すれば、やすやすと勝つことができる。だが、それはまだたいしたことではない。なぜなら、われわれの敵に十分なねばりがあれば、まえもって兵力を集める、等々することができるからである。そういうときには、敵がわれわれをそそのかして攻撃させ、ついで何年もまえの状態にわれわれを押しもどすことは、易々たるものである。だから、私は、退却の可能性にもそなえなければならないという考えは重要な意義をもっており、それも理論的な見地からもっているだけではない、と考えるのである。実践的な見地からしても、近い将来資本主義にたいして直接の攻勢に転じる準備をしているすべての党は、いまや退却をどのようにして保障するかについても、考えてみなければならない。わが国の革命の経験から生まれてくる他のすべての教訓といっしょに、この教訓を考慮するなら、それは、なんの害ももたらさないばかりか、おそらく多くの場合に利益をもたらすだろうと思う。

すでに一九一八年に、われわれが国家資本主義をありうべき退却路とみていたことを強調したので、つぎにわが新経済政策の結果に移ることにする。繰りかえして言うが、

当時は、それはまだきわめて漠然とした考えであった。しかし、一九二一年にわれわれが内戦の最も重要な段階を乗りきり、しかも勝利をもって乗りきったあとで、われわれはソヴェト・ロシアの大きな——思うに、最も大きな——国内的な政治的危機に突きあたった。この国内的危機は、農民の大部分の不満を表面化したばかりでなく、労働者の不満をも表面化した。それは、ソヴェト・ロシアの歴史上、農民の大きな大衆が意識的にではなく、本能的、気分的にわれわれに反対した最初の機会——そして願わくば最後の機会であってほしいが——であった。この独特な、もちろんわれわれにとって非常に不愉快な状態は、なにから生じたのであろうか？　その原因は、われわれが自分の経済攻勢であまり遠くまで前進しすぎ、十分な基地を確保しなかったことにあり、当時われわれがまだ意識的に定式化することはできなかったが、まもなく、数週間後にはわれわれもまた認めたこと、つまり、純社会主義的な形態、純社会主義的な分配に直接に移行するのは、われわれの力にあまることであり、もしわれわれが退却をおこなって、もっと容易な任務にとどめることができなければ、われわれは破滅するおそれがあるということを、大衆が感じとったことにある。危機は、一九二一年の二月に始まったと思われる。すでにその年の春に、われわれは新経済政策に移行することを、一致して決定していた——これについては、われわれのあいだに大きな意見の不一致はなかった。一年半たった一九二二年末の現在、われわれはもういくつかの比較をおこなうことができる。いったい、なにが起こったのか？　われわれは、ここ一年半あまりをどうすごしたか？　結果はどうか？　この退却は、われわれに利益をもたらしたか？　それはほんとうにわれわれを救ったのか？　それとも、結果はまだはっきりしていないのか？　これが、私の自問している主要な問題である。私は、この主要な問題は、すべての共産党にとっても第一級の意義をもっていると考える。というのは、答えが否定的なものとなれば、われわれはみな破滅の運命におちいるだろうからである。私の考えでは、われわれはみな、この問題に安んじて肯定的な答えをあたえることができると思う。それは、過ぎさった一年半はわれわれがこの試験に及第したことを断定的に、絶対的に証明しているという意味である。

つぎにこのことを証明してみよう。そのためには、わが国の経済のすべての構成部分を簡単に列挙しなければならない。

なによりもまず、わが財政制度と高名なロシア・ルーブリについて調べてみよう。私は、ロシア・ルーブリの量がいま一〇〇〇兆をこえていることからだけでも、これを高

名なものと見てよいと思っている。（笑声）これは相当なものだ。これは天文学的数字である。私は、この数字がなにを意味しているかということすら、ここにいる諸君がだれでも知っているとはかぎらないと、確信する。（全員の笑い）だが、われわれは、この数字を、しかも経済学の見地からみて、法外に重要だとは考えていない。なぜなら、ゼロは消去することができるからである。（笑声）われわれは、経済的見地からみてやはりまったく重要でないこの技術で、すでになにほどかを達成している。今後、事態がすすんでゆくうちにわれわれはこの技術でさらにはるかに多くのことをなしとげるものと、私は確信している。ほんとうに重要なことは、ルーブリを安定させるという問題である。この問題にわれわれは取り組んでおり、われわれの優秀な分子が取り組んでいる。われわれは、この任務に決定的な意義を認めている。われわれが長期にわたって、ついで永久に、ルーブリの安定に成功するなら、つまり、われわれは勝ったことになる。そうなれば、すべてこういう天文学的な数字――これらすべての一兆や一〇〇〇兆はなんでもない。そうなれば、われわれはわが経済を強固な基盤のうえにすえ、強固な基盤のうえでさらに発展させることができるであろう。この問題について、私は、かなり重要で決定的な事実を諸君にあげてみせることができると思う。一九二一年には、紙幣ルーブリの相場の安定期は、三ヵ月とつづかなかった。本年、一九二二年はまだ終わってはいないが、安定期は五ヵ月以上つづいている。これでもう十分だと思う。もちろん、われわれが将来この任務を完全に解決するだろうという科学的証明を、諸君がわれわれに求めるのなら、これでは不十分である。しかし、私の考えでは、これをことごとく完全に証明することは、まったく不可能である。昨年わが新経済政策を始めてから今日までのあいだに、われわれがすでに前進することを学びとったということは、上述の資料が証明している。われわれがそれを学びとったとすれば、なにか特別ばかなことをやりさえしなければ、今後ともこの道にそっていっそうの成果をおさめることを学ぶだろうと、私は確信する。だが、最も重要なことは、商業である。つまり、われわれに欠かせない商品取引である。戦争状態（というのは、諸君もご承知のように、ヴラヂヴォストークはほんの数週間まえに奪還したばかりであるから）にあったにもかかわらず、またやっといまわが経済活動を完全に系統的に始めることができるようになったにもかかわらず、二ヵ年のうちに商業問題をかたづけたのであるから、――また、とにかく、紙幣ルーブリの安定期を三ヵ月から五ヵ月にのばすところまでこぎつけたのであるから、これに満足してもよかろうと、

あえて言ってよいと思う。なにしろわれわれは孤立しているのだからである。われわれは、なんの借款も受けなかったしいまも受けていない。自分がどこへすすんでいるのかいまだにわからないほどに、自国の資本主義国家のどれ一つとして、われわれを助けたものはなかった。これらの国家は、ヴェルサイユ講和によって、彼ら自身なにがどうなっているのかさっぱり見当がつかないような財政体系をつくりだした。これらの大きな資本主義国家でさえこういうふうにやりくっているのであるから、遅れた、無教育なわれわれは、自分たちが最も重要なものをつかんだことに、つまりループリ安定の条件をつかんだことに、満足してもよいと思う。このことを証明しているのは、理論的な分析などではなく、実践である。実践は、私の考えでは、この世のあらゆる理論的討論よりも重要である。われわれがここで決定的な成果をあげたこと、つまり、ループリ安定の方向に経済を推進しはじめていることは、実践が示している。このことは、商業にとって、自由な商品取引にとって、農民と膨大な小生産者大衆にとって、最も大きな意義をもっている。

つぎに、われわれの社会的目標に移ることにしよう。最も肝心なもの、それは、もちろん、農民である。一九二一年に、農民の大部分がまさしく不満をもっていたことは、疑いない。つぎに飢饉があった。そしてこれは、農民にとっては最も苦しい試練を意味していた。「それ見たことか、これが社会主義経済の結果なのだ」と、その当時、国外の敵がこぞって叫びたてたことは、まったく当然である。飢饉が生じたのは実際には内戦の恐るべき結果であったことについて、彼らがだまりとおしたことも、もちろん、まったく当然である。一九一八年にわれわれにたいする攻撃を開始した地主と資本家はみな、飢饉が社会主義経済の結果でもあるかのように見せかけた。飢饉は、ほんとうに大きな、ゆゆしい不幸であり、われわれのすべての組織活動と革命的活動を瓦解させてしまうおそれのある不幸であった。

そこで、質問しよう。われわれがこの前代未聞の思いがけない災厄をなめて、新経済政策を実施し、農民に商業の自由をあたえたあとの現在、事態はどういうふうになっているであろうか、と。答えははっきりしており、だれにも明瞭である。すなわち、農民は一年のあいだに飢饉をかたづけたばかりでなく、われわれがいまではもう数億プードを手に入れたほど大量の食糧税もおさめ、しかもそれにはほとんどなんの強制手段も行使されなかった。以前、一九二一年まで、いわばロシアの一般的現象であった農民暴動は、ほとんどまったくなくなった。農民は現状に満足して

いる。われわれは、安んじてこう断言できる。われわれは、これらの証明はなにかの統計的な証明よりも重要だと考えている。わが国で農民が決定的な要因であることは、だれも疑う者はない。この農民はいま、彼らの側からのわれわれにたいする反対運動を、われわれが懸念するにあたらないような状態にある。われわれは、十分に意識して、誇張なしに、そう言う。こうした状態はすでに達成されている。農民は、わが権力の活動のある側面に不満であるかもしれない。彼らは苦情を申し立てるかもしれない。もちろん、そういうことはありうるし、避けられない。なぜなら、われわれの国家機構とわれわれの国家経済はまだあまりにも悪いので、それを防ぐことができないからである。だが、とにかく、われわれにたいする全農民の重大な不満は、まったくなくなった。こうしたことが一年のあいだに達成されたのである。私は、これだけでも非常に大きな業績だと思う。

つぎに軽工業に移ることにしよう。工業では、重工業と軽工業をぜひ区別しなければならない。この二つは違った状態にあるからである。軽工業について言えば、ここには全般的な高揚が見られる、と安んじて言うことができる。こまかいことには立ちいらないことにしよう。統計数字をあげることは、私の仕事ではない。だが、この一般的印象は、事実にもとづいたものであり、私は、この印象の基礎には不確実なものや不正確なものはなにもない、と保証することができる。わが国の軽工業は全般的に高揚しており、それにともなって、ペトログラードでもモスクワでも労働者の状態ははっきり改善された。このことは、他の地区では、両市ほどには見られない。なぜなら、そこでは重工業が優勢だからである。だから、これを一般化して論じてはならない。それでも、繰りかえして言うが、軽工業は無条件に高揚の途にあり、ペトログラードとモスクワの労働者の状態が改善されていることは、疑いない。この両市では、一九二一年の春には労働者のあいだに不満があった。いまはそれがまったくない。われわれは、労働者の状態と気分を日ごとに注視しているので、この問題で思いちがいをすることはない。

第三の問題は、重工業についてである。ここでは状態は依然として困難であると、言わなければならない。一九二一－一九二二年には、この状態にある転換が生じた。だから、近い将来情勢は好転するものと期待することができる。これに必要な資金の一部はすでに集まっている。資本主義国では、重工業の状態を改善するには何億という借款を必要とし、それがなければ改善は不可能であろう。資本主義諸国の経済史が証明しているところでは、後進国では、ド

ルまたは金ルーブリであたえられる数億の長期借款だけが、重工業振興の資金となりうるであろう。われわれはこういう借款を受けなかった。われわれは、これまでなんの借款も受けていない。いま利権その他について書かれていることは、ほとんど紙きれにほかならない。最近、われわれはこのことについて、とくにまたアーカート利権(三三)について、たくさん書きたてた。しかし、私には、われわれの利権政策は非常によいものだと思われる。だが、それにもかかわらず、われわれはまだ利益のあがる利権事業をもっていない。このことを忘れないようにお願いしたい。したがって、重工業の状態は、遅れたわが国にとっては、ほんとうにきわめて困難な問題である。なぜなら、われわれは富裕な国の借款をあてにすることができなかったからである。それにもかかわらず、われわれは、すでにめだった改善を見ており、さらに、われわれの商業活動がすでにいくらかの資本をもたらしたのを見ている。なるほど、いまのところきわめてわずかで、二〇〇〇万金ルーブリをすこしこえるだけである。いずれにせよ、土台はすえられている。わが商業はわれわれに資金をあたえ、われわれはそれを重工業の振興に利用することができる。現在、わが重工業は、いずれにせよ、まだきわめて困難な状態にある。しかし、われわれがすでになにがしかを貯蓄することができるという事情は決定的なものだと、私は考えている。われわれは、今後も貯蓄するだろう。このことは、しばしば住民を犠牲にしてなされているが、われわれは、いまはやはり節約しなければならない。われわれはいま、わが国家予算を削減し、わが国家機構を縮小しようとつとめている。わが国家機構については、あとでなおすこしばかり述べよう。いずれにせよ、わが国家機構を縮小し、できるかぎり節約しなければならない。われわれは、万事について、学校についてさえ節約している。そうでなければならない。なぜなら、重工業を救わなければ、重工業を復興させなければ、どんな工業も建設できないし、工業がなければ、一般に独立国として滅びることを、われわれは知っているからである。われわれはそれをよく知っている。

ロシアを救うものは、農民経済における豊作だけではない。――それだけではまだ足りない。農民に消費物資を供給する軽工業の順調な状態だけでもない。――それでもまだ足りない。われわれにはまた重工業が必要である。ところが、重工業の状態をよくするには、幾年もの活動が必要である。

重工業は国家の補助金を必要とする。国家の補助金を工面できなければ、文明国家としてのわれわれは――社会主義国家としてはもとより――滅びてしまう。そこで、この

点でわれわれは断固たる措置をとった。われわれは、重工業を自立させるために必要な資金を蓄積しはじめた。なるほど、いままでにわれわれの獲得した金額は二〇〇〇万金ループリそこそこであるが、とにかくこの金額が現にある。その使途は、もっぱらわが重工業を振興することにある。

お約束したとおり、私は、わが国民経済の最も主要な諸要素をだいたい簡単に述べたつもりであるが、すべてこれらのことから、新経済政策がいまではすでにプラスをもたらしているという結論をくだすことができると思う。もういまでは、われわれが国家として商業をいとなみ、農業と工業のしっかりした地歩を確保し、前進することができるという証拠がある。実践活動がそれを証明した。私は、これだけでいまのところわれわれにとって十分だと思う。われわれは、もっと多くのことを学ばなければならない。われわれは、もっと学ぶ必要があることを理解した。われわれは、五年間権力を維持している。しかも、この五ヵ年をつうじてわれわれは戦争状態にあった。したがって、われわれは成功をおさめたわけである。

それは当然である。なぜなら、農民がわれわれの味方だったからである。農民がわれわれにあたえた支持以上の支持を、われわれにあたえることはむずかしい。農民は、この世のなかでいちばん憎い地主が白衛派の後楯となっていることを悟った。だからこそ、農民はあらゆる熱情をかたむけ、最も献身的にわれわれを支持したのである。農民がわれわれを白衛派から守ってくれるようにすることは、困難ではなかった。以前には戦争をきらっていた農民が、白衛派にたいする戦争のため、地主にたいする内戦のために、できるかぎりのことをした。それにもかかわらず、これではまだ十分でなかった。なぜなら、本来ここで問題になっていたのは、権力が地主の手に残るか、それとも農民の手に残るかということだけだったからである。われわれには、これだけでは不十分であった。農民は、われわれが労働者のために権力を奪取したこと、この権力によって社会主義的秩序をつくりだすのを目的としていることを、理解している。だから、われわれには、社会主義経済を経済的に準備することがなによりも重要であった。われわれは、それを直線的な道で準備することはできなかった。われわれは、回り道をしてそうせざるをえなかった。わが国でわれわれが打ち立てた国家資本主義は、独特な国家資本主義である。それは、国家資本主義の普通の概念には合致しない。われわれはすべての拠点をにぎっている。われわれは土地をにぎっている。土地は国家のものである。これはきわめて重要なことである。ところが、われわれの敵は、それがなんの意味もないことのように見せかけている。それはまちが

いである。土地が国家のものだという事情は、非常に重要であり、経済的に大きな実践的意義をもっている。われわれはこれをなしとげた。われわれの今後の全活動も、もっぱらこの枠のなかで発展するにちがいないと、言わねばならない。われわれはすでにわが農民を満足させ、工業を活気づかせ、商業を活気づかせた。すでに述べたように、プロレタリア国家が、土地だけでなく、工業の最も重要な部分をもすべてその手ににぎっているという点で、わが国家資本主義は、文字どおりに解された国家資本主義とは違っている。まず第一に、われわれは中小工業のある部分を賃貸しに出したが、そのほかの部分は全部われわれの手に残っている。商業についていえば、われわれが合弁会社の設立につとめていること、そういう会社、すなわちその資本の一部が私的資本家に、しかも外国の資本家に属し、残りの部分がわれわれに属している会社を、われわれがすでに設立していることを、かさねて強調しておきたい。第一に、われわれはこのようにして商業の仕方を学んでいるが、これがわれわれにとって必要なのである。第二に、必要と認める場合には、われわれはいつでもそういう会社を解散することができる。だから、いわばなんの危険もおかしてはいないのである。われわれは、私的資本家から学んでおり、どうしたら前進することができるか、どんな誤りをわれわれがおかしているかを、注意ぶかく研究している。この話はこれだけにしてよいと思う。

なおいくつかのこまかな点にふれたい。われわれは、おびただしくばかげたことをやってきたし、これからもやるだろうということは、疑いがない。だれも、このことについて、私よりもよく判断し、私よりもはっきりと見ることのできる者はない。(笑声)なぜ、われわれはばかげたことをやるのか? そのわけは、はっきりしている。第一に、われわれは遅れた国である。第二に、わが国の教育はきわめて貧弱である。第三に、われわれは外部から援助を受けていない。どの文明国家もわれわれを助けてくれてはいない。それどころか、みな、われわれとたたかっている。第四に、われわれの国家機構のせいである。われわれは古い国家機構を受けついだ。これはわれわれの不幸であった。国家の職員は、非常にしばしばわれわれに反対の活動をしている。われわれが一九一七年に権力を奪取したのち、国家の職員がわれわれにたいしてサボタージュをおこなうというありさまであった。当時、われわれはひどくおそれをなして、「どうか、われわれのところへ帰ってきてくれ」とたのんだ。そこで彼らはみな帰ってきたが、これはわれわれの不幸であった。いまわが国には膨大な職員大衆がいるが、彼らをほんとうに指図するだけの教養のある人物が

いない。われわれが国家権力をにぎっているここ上部では、機構はどうにかはたらいているのに、下部では、職員が勝手に切りまわし、しかも非常にしばしばわれわれの施策に反対の活動をするというふうな切りまわし方をしている——こうしたことが、実際にしばしば起こっている。上部には、何人か知らないが、とにかく、私の考えでは、わずか数千人、最大限で数万人の味方がいる。しかし、下部には、ツァーリとブルジョア社会から受けついだ数十万の古い官吏がおり、いくぶんは故意に、いくぶんは無意識に、われわれに反対の活動をしている。ここでは、短い期間にはどうしようもない。それは、疑う余地がない。ここでは、多年のあいだ活動し、それによって機構を改善し、是正し、新しい人々を引きいれなければならない。われわれは、かなり速い、おそらく速すぎるテンポで、それをやっている。ソヴェト学校と、労働者予備学校が創設され、数十万の青年が学んでおり、おそらく速すぎるくらいのテンポで学んでいる。だが、ともかく、仕事は始まっているのである。この仕事は成果をあげるだろうと思う。あまりあわてすぎないように活動すれば、数年たてば、わが機構を根本的に変えることのできる多数の青年がわが国にいるようになろう。

われわれは、おびただしくばかげたことをやってきた、と私は述べた。だが、この点では、われわれの敵についても、やはりすこしばかり述べなければならない。われわれの敵がわれわれをとがめ、ボリシェヴィキがおびただしくばかげたことをやったことは、レーニン自身でさえ認めているではないかと言うなら、それにはこう答えたい、——そのとおりだ、だが、よろしいか、それでもわれわれのばかさかげんは、君たちのものとは全然違った種類のものである、と。われわれは、学びはじめたばかりであるが、大いに系統的に学んでいるので、よい成果をあげるものと、われわれは確信している。しかし、われわれの敵、すなわち資本家と第二インタナショナルの英雄たちがわれわれのやったばかげたことを強調するなら、私は、比較のためにここでロシアのある有名な作家のことばを引用させていただこう。そのことばをいくらか言いかえると、こんなぐあいになる。ボリシェヴィキがばかげたことをやるとすれば、それは「二二が五」と言うたぐいである。ところが、ボリシェヴィキの敵、つまり資本家と第二インタナショナルの英雄たちがばかげたことをやるときは、「二二が一本のステアリン蠟燭」ということになる。[二三]これを証明することは、むずかしくない。たとえば、アメリカ、イギリス、フランス、日本がコルチャックと結んだ条約をとってみたまえ。お尋ねするが、世界にこれらの国以上に文化のすすん

だ、強力な国があるだろうか？　しかも、結果はどうであったたか？　これらの国は、勘定もせず、よく考えもせず、観察もしないで、コルチャックに援助を約束した。これは、私の考えでは、人間の常識では理解することさえむずかしい大失敗であった。

別の、もっと身近で、もっと重要な実例、ヴェルサイユ講和をとってみよう。お尋ねするが、「栄光につつまれた」諸「大」国は、ここでなにをやったか？　いま彼らは、この混沌とたわごとからの活路を、どうやって見つけることができるのだろうか？　資本主義諸国家、資本主義世界、第二インタナショナルがいっしょになってやっている愚行にくらべれば、われわれの愚行はまだなんでもないと、繰りかえし言っても、誇張にはならないと思う。だから、世界革命の展望――私が簡単にふれなければならないテーマ――は有利である、と私は考える。そして、ある特定の条件がそなわれば、展望はもっとよくなると思う。これらの条件について、いくらか述べてみたい。

一九二一年の第三回大会で、われわれは、共産諸党の組織構成とその活動の方法および内容にかんする一つの決議を採択した。この決議はすばらしいものである。だが、それはほとんど徹頭徹尾ロシア的である。つまり、すべてがロシアの条件からとられている。これは、決議のよい面であるが、また悪い面でもある。悪いというのは、これを読みとおすことができる外国人はほとんど一人もいないと、確信するからである。――私は、この話をするまえに、もう一度あの決議を読みかえしてみた。第一に、それは長すぎる。それには、五〇あるいはそれ以上の項目がある。外国人は、普通こんなものを読みとおすことができない。第二に、たとえそれを読みとおしたにしても、それがロシア的すぎるために、外国人はだれもそれを理解しないであろう。それがロシア語で書かれているからでなく――それは、あらゆる国語にりっぱに翻訳されている――、それが徹頭徹尾ロシア精神につらぬかれているからである。第三に、例外としてだれか外国人がそれを理解したところで、彼はそれを実行することはできないであろう。これが決議の第三の欠陥である。私は、大会にやってきた代議員の何人かと会談したが、大会のひらかれているあいだに、私自身は大会に参加しなくとも――残念ながら、私は参加することができない――、いろいろな国の多数の代議員とくわしく話し合ってみたいと思っている。私は、われわれがこの決議で大きな誤りをおかしたという印象、つまり、われわれが自分で今後の成功への道を断ってしまったという印象をうけた。すでに述べたように、決議はみごとに書かれており、私は、その五〇あるいはそれ以上の全項目に同意する。

だが、われわれは、わがロシアの経験を外国人にどう紹介したらよいかを理解しなかった。決議に言われていることはみな、死文にとどまっている。しかし、これを理解しなければ、われわれはさらに前進することができない。われわれ全体にとって、ロシアの同志にとっても、外国の同志にとっても、最も重要なことは、ロシア革命から五年たったいま、学習しなければならないことだと思う。われわれはやっといま、学ぶ機会をえたところである。この機会がどれだけ長くつづくか、私にはわからない。資本主義列強がわれわれに静かに学ぶ機会をどれだけ長くあたえてくれるか、私にはわからない。だが、軍事活動から、戦争から解放されている各瞬間を、われわれは学ぶために、しかも初歩から学ぶために利用しなければならない。

ロシアの党全体とすべての層は、その知識欲によってこのことを証明している。学ぼうとするこの意欲は、学習また学習ということがいまわれわれにとって最も重要な任務であることを、示している。しかし、外国の同志たちも学ばなければならない。われわれが学ばなければならない——すなわち、読み、書き、読んだものを理解することを学ばなければならない（われわれにはまだそうすることが必要である）——のとは違った意味で、学ばなければならない。それはプロレタリア文化を学ぶことなのか、それともブルジョア文化を学ぶことなのか、ということで論争がおこなわれている。この問題は未解決のままにしておく。いずれにせよ、疑う余地のないことは、われわれの場合には、なによりもまず読み、書き、読んだものを理解することを学ばなければならないことである。外国人には、これは必要でない。彼らに必要なものは、もっと高度なものである。なによりもまずこれにはいるのは、われわれが共産党の組織構成について書いたこと、そして外国の同志たちが読みもしなければ理解もしないで署名したことを、彼らもまた理解することである。これが、彼らの第一の課題とならなければならない。あの決議を実行に移す必要がある。それは、一夜のうちにできることではない。そういうことは絶対にできない。決議は、ロシア的すぎる。それは、ロシアの経験を反映している。だから、外国人にはまったくわかりにくい。外国人は、それを聖像として部屋の隅に安置し、それにお祈りすることで満足するわけにはいかない。そんなことではなにも達成できない。外国人は、ロシアの経験の一部を自分のものにしなければならない。どうやってそれがなされるか、私にはわからない。たとえば、イタリアのファシストが、イタリア人[三九]はまだ十分に啓蒙されておらず、彼らの国はまだ黒百人組をまぬかれているわけではないことを、イタリア人に明らかにするなら、おそらく、

彼らはそれによってわれわれを大いに助けることになろう。おそらく、これは非常な利益になるであろう。われわれロシア人も、この決議の原則を外国人に説明する道をさがさなければならない。そうしなければ、外国人はこの決議を絶対に実行できないだろう。この点で、われわれはロシアの同志たちばかりでなく、外国の同志たちにむかっても、いま始まろうとしているこの時期に最も重要なことは学習である、と言わなければならないと、私は確信する。われわれは一般的な意味で学びつつある。外国人は、革命運動の組織、構成、方法、内容をほんとうにつかむために、特殊な意味で学ばなければならない。それがなされるならば、世界革命の展望は、有望だというだけでなく、すばらしいものになるだろうと、私は確信する。(さかんな、鳴りやまない拍手。「われらの同志レーニン万歳!」という喚声が新たな、さかんな喝采を呼びおこす)

『プラウダ』第二五八号、一九二二年一一月一五日
全集、第五版、第四五巻、二七八—二九四ページ所収
邦訳全集、第三三巻、四三四—四四九ページ所収

二　共産主義インタナショナルの綱領の問題にかんするコミンテルン第四回大会の決議案(二〇)

一九二二年一一月二〇日、五中央委員(レーニン、トロツキー、ジノヴィエフ、ラデック、ブハーリン)の会議で採択された提案

一　すべての綱領を、細部にわたった仕上げと研究のために、コミンテルン執行委員会、または執行委員会によって任命された委員会に付託する。

コミンテルン執行委員会は、同委員会に提出される綱領草案をすべてごく短期間のうちに公表する義務を負う。

二　いまなお自分の一国的綱領をもたない諸国の党は、ただちにそういう綱領の起草に着手し、それを、次期大会で最終的な承認をうけるために、次期大会のおそくも二ヵ月まえまでに執行委員会に提出しなければならないことを、大会は確認する。

三　一国的綱領では、過渡的要求のためにたたかう必要があることを、きわめて明確に、きっぱりと示すと同時に、

そういう過渡的要求が場所と時との具体的な条件に依存していることについて、適当な留保を設けなければならない。

四　この種のすべての過渡的または部分的要求のための理論的基礎を、一般綱領のなかで明確に示さなければならない。そのさい、コミンテルンは、部分的要求を綱領にふくめるのは日和見主義だと主張しようとする試みをも、部分的要求によって基本的な革命的任務をあいまいにし、またすりかえようとするあらゆる試みをも、ともに断固として非難することを、第四回大会は声明する。

五　一般綱領では、たとえばイギリスとインド、などのように、経済構造の根本的な差異にもとづく、諸国の党の過渡的要求の基本的な歴史的諸類型を、明瞭に示さなければならない。

一九六五年に『レーニン全集』第五版、第五四巻にはじめて発表
同書、三四七―三四八ページ所収
邦訳全集、第四二巻、六〇〇―六〇一ページ所収

ヴェ・イ・レーニンの最後の手紙と論文(一三一)

一九二二年一二月二三日—一九二三年三月二日

I

大会への手紙(一三二)

今度の大会でわれわれの政治体制にいくらかの変更をくわえることを、ぜひとも勧告したい。

私が最も重要だと考える論点を、諸君にお知らせしようと思う。

私がまっさきにあげるのは、中央委員の人数を数十人にふやすことである。いや一〇〇人でもよい。こういう改革をおこなわなければ、事態がわれわれにとって完全に順調にすすまない場合には（完全に順調にすすむことを、あてにするわけにはいかない）、わが中央委員会は大きな危険におびやかされるだろうと思われる。

つぎに、私は、一定の条件つきでゴスプラン(一三三)の諸決定に立法的な性格をあたえ、こうして、この点である程度、また一定の条件つきで、同志トロツキーの意見をいれるよう、大会の配慮をわずらわしたいと思う。

はじめの件、すなわち中央委員を増員する件についていえば、私は、中央委員会の権威を高めるためにも、われわれの機構を改善する真剣な活動をおこなうためにも、さらに中央委員の小部分のあいだの争いが党の運命全体にとってあまりにも度はずれな意義をもってくるのを防ぐためにも、そうすることが必要だと考える。

わが党は、五〇人ないし一〇〇人の中央委員を出してくれるように労働者階級に要求する権利があるし、労働者階級に法外な努力をさせないでも出してもらえると思う。

こういう改革をやれば、わが党の強固さはいちじるしく高まり、敵意をもった諸国のあいだで党が闘争するのが容易になるであろう。私の意見では、この闘争は今後数年のうちにいちじるしく激しくなる可能性があり、またそうなるにちがいない。こういう措置をとれば、わが党の安定性は千倍も強まるだろうと思う。

レーニン

二二年一二月二三日

エム・ヴェこれを筆記

II

覚え書のつづき

二二年一二月二四日

さきに中央委員会の安定性と言ったのは、分裂を防止する措置——およそそういう措置がとれるかぎりで——をさしたものであった。というのは、『ルースカヤ・ムィスリ』[143]誌の白衛派が（たぶん、エス・エル・オリデンブルグであったと思うが）、第一に、ソヴェト・ロシア相手の彼らの一六勝負で、わが党の分裂をあてにし、第二に、この分裂をもたらすものとして、党内にきわめて重大な意見の相違が起こるのをあてにしたのは、もちろん、正しかったからである。

わが党は二つの階級に基礎をおいているので、党の不安定状態は起こりうるし、もしこの二つの階級のあいだに協定がなりたちえないものとすれば、党の没落は避けられない。その場合には、なにかと措置を講じたり、総じてわが中央委員会の安定性について論議したりしても、むだである。その場合には、どんな措置も分裂を防ぐ力はないであろう。だが、そういうことが起こるのは、はるかに遠い将来のことだろうし、またあまりありそうもないと思うので、それについて論じるにはおよばないであろう。

私がいま念頭においているのは、近い将来の分裂を防ぐ保障としての安定性のことであって、ここでは純然たる人的な事情をいくつか検討してみようと思う。

私は、この見地からみた安定性の問題で基本的なものは、スターリンやトロツキーのような中央委員であると考える。私の見るところでは、分裂の危険の大半は、彼らの間柄からきている。この分裂は避けようと思えば避けられるだろうし、私の意見では、中央委員の数を五〇人ないし一〇〇人にふやすことが、とりわけ、それを避けるのに役だつにちがいない。

同志スターリンは、党書記長となってから、広大な権力をその手に集中したが、彼がつねに十分慎重にこの権力を行使できるかどうか、私には確信がない。他方、同志トロツキーについては、彼が[144]交通人民委員部の問題について中央委員会と闘争したことがすでに証明したように、そのめだった点は、すぐれた才能だけではない。個人的には、彼は、おそらく現在の中央委員中で最も有能であろうが、しかしまた、度はずれて自己を過信し、物ごとの純行政的な側面に度はずれて熱中するところがある。

現在の中央委員会のこの二人のすぐれた指導者のもつこ

ういう二つの資質は、ふとしたことから分裂を引きおこすことになりかねない。わが党がそれを防ぐ措置を講じなければ、思いがけなく分裂が起こるかもしれない。

これ以上ほかの中央委員の個人的な資質を特徴づけることはやめにしよう。ただ注意しておきたいのは、ジノヴィエフとカーメネフの十月のエピソード[四]は、もちろん、偶然のものではなかったが、そのことで個人的に彼らを責めてならないのは、非ボリシェヴィズムの点でトロツキーを責めてならないのと同じだ、ということである。

若い中央委員のうちでは、ブハーリンとピャタコーフについてすこし述べたい。私の考えでは、彼らは最もすぐれた人材（いちばん若手のうちでは）であるが、彼らについては次の点を考慮する必要があると思う。すなわち、ブハーリンは、党のきわめて貴重な、きわめてすぐれた理論家であるだけでなく、正当にも全党の人気者と見なされているが、彼の理論的見解を完全にマルクス主義的だと見なすことには、非常に大きな疑問をいだかないわけにはいかない。というのは、彼にはスコラ学風のところがあるからである（彼はかつて弁証法を学んだことがなく、それをけっして十分に理解しなかったと、私は思う）。

一二月二五日。つぎに、ピャタコーフは、疑いもなくすぐれた意志力とすぐれた才能をもった人物であるが、行政活動と物ごとの行政的な側面に熱中しすぎるので、重大な政治問題では彼をたよりにすることはできない。

もちろん、私の批判はいずれも、この二人のすぐれた献身的な働き手が、自分の知識を補い、自分の一面性をあらためるおりがなかった場合を仮定して、その現状について述べたにすぎない。

レーニン

二二年一二月二五日

エム・ヴェこれを筆記

一九二二年一二月二四日付の手紙への追記

スターリンは粗暴すぎる。そして、この欠点は、われわれ共産主義者のあいだやわれわれ相互の交際では十分がまんできるものであるが、書記長の職務にあってはがまんできないものとなる。だから、スターリンをこの地位からはずして、ほかの点はともかく、ただ一つの点では同志スターリンにまさっている別の人物、すなわち、もっと忍耐づよく、もっと誠実で、もっと丁寧で、同志にたいしてもっと思いやりがあり、彼ほど気まぐれでない、等々の人物を、

この地位に任命する方法をよく考えてみるよう、同志諸君に提案する。この事情は、とるにたりない、些細なことのように思えるかもしれない。しかし、分裂を防ぐ見地からすれば、また、まえに書いたスターリンとトロツキーの間柄の見地からすれば、これは瑣末なことではないと思う。あるいは、瑣末事だとしても、決定的な意義をもつようになりかねないような瑣末事だと思う。

レーニン

エリ・エフこれを筆記
一九二三年一月四日

三

覚え書のつづき
一九二二年一二月二六日

中央委員の人数を五〇人または一〇〇人にふやすことは、私の見るところでは、二重の目的、いや三重の目的にさえ役だつにちがいない。中央委員が多ければ、それだけ多くの人が中央委員会の活動で訓練されることになり、また、なにか慎重を欠いたために分裂が起こる危険がそれだけ少なくなるであろう。多数の労働者を中央委員会にいれることは、まったくなっていないわが国の機構を労働者たちが改善する助けとなるであろう。わが国のこの機構は、実質上旧体制から受けついだものである。というのは、こんなに短い期間に、とりわけ戦争や飢饉などのさなかに、それを改造することは、まったく不可能だったからである。だから、うす笑いをうかべながら、あるいはそれみたことかとばかりにわれわれの機構の欠陥を指摘してくださる「批評家」には、この連中は現代の革命の条件を全然理解していないのだと、われわれは平静に答えることができる。五年のあいだに機構を十分に改造することは、総じて不可能であり、とりわけわが国の革命がおこなわれてきた条件のもとでは、なおさら不可能である。われわれが五年のあいだに新しい型の国家、労働者がブルジョアジーに反対して農民の先頭に立ってすすむ国家をつくりだしただけで十分であり、しかも、敵意をもった国際的環境のなかでこういうことをなしとげたのは、巨大な事業である。しかし、このことを認めながらも、われわれが実質上ツァーリとブルジョアジーとから古い機構を引きついだこと、そして平和がやってきて飢えないだけの最小限の必要物が保障された今日では、機構の改善にすべての活動をむけなければならないことに、われわれはけっして目を閉じてはならないのである。

私は問題を次のように考えている。中央委員会にはいっ

た何十人かの労働者は、ほかのだれよりもりっぱに、われわれの機構の点検や改善や改造の仕事にあたることができる。この職務は、はじめ労農監督部に属していたのであるが、同部にはこの職務を果たす力がないことがわかったので、一定の条件でこれらの中央委員の「付属物」または助手として同部をつかうほかはない。中央委員会にはいる労働者は、私の意見では、長期間ソヴェト機関で勤務してきた労働者（私の手紙のこの部分では、労働者というなかにいつでも農民をふくめて考えている）以外の者のなかから主として選ばなければならない。というのは、そういう労働者には、すでにある種の伝統とある種の先入見とができあがっているものだが、まさにそういうものとたたかうことが望ましいからである。

労働者出身の中央委員としては、わが国でこの五年間にソヴェトの職員に昇進した層よりも低い地位にあって、平の労働者農民にいっそう身近く、しかも、直接にも間接にも搾取者の部類にはいらないような労働者を、おもにくわえなければならない。私は、こういう労働者が中央委員会のすべての会議、政治局のすべての会議に出席し、中央委員会のすべての文書を読むなら、彼らは、ソヴェト体制の献身的な支持者——第一に、中央委員会そのものに安定性をあたえる能力があり、第二に、機構を革新し改善するためにほんとうに働く能力のある支持者——の中核となることができるだろうと思う。

レーニン

エリ・エフこれを筆記

二二年一二月二六日

一九五六年に雑誌『コムニスト』第九号にはじめて発表
全集、第五版、第四五巻、三四三―三四八ページ所収
邦訳全集、第三六巻、七〇一―七〇七ページ所収

Ⅳ

覚え書のつづき
一九二二年一二月二七日

ゴスプランに立法機能をあたえることについて

この考えは、たしか同志トロツキーがずっとまえに提出したものだと思う。そんなふうにすると、われわれの立法機関の体系に根本的にちぐはぐなものをもちこむことになると思ったので、私はこの考えに反対した。しかし、この問題を注意ぶかく検討してみると、そこにはじつは健全な考えがふくまれていることがわかる。すなわち、ゴスプランは、有識者、専門家、科学者、技術者の集合体として、実質上、いろいろな問題を正しく判断する資料をいちばん大量にもっているにもかかわらず、われわれの立法機関からいくらかかけはなれた存在となっていること、これである。

しかし、これまでわれわれは、ゴスプランは批判的検討を経た材料を国家に提出すべきであり、国務は国家機関が決定すべきであるという立場をもとにしていた。現在の状態は、国務が異常に複雑になって、ゴスプランの委員の専門的鑑定を必要とする問題とそういう鑑定を必要としない問題とをかわるがわる解決しなければならなかったり、それどころか、ゴスプランの専門的鑑定を必要とするいくつかの事項とそういう鑑定を必要としない事項とが入りまじっている案件を解決しなければならない場合がひっきりなしに起こっているが、私は、こういう現状では、いまやゴスプランの権限を拡大する方向に一歩すすめるべきだと考える。

この一歩を私は次のように考えている。ゴスプランの決定は、ソヴェト機関の普通の手続ではくつがえせないことにし、その決定を変更するには特別の手続を必要とすることにする。たとえば、問題を全ロシア中央執行委員会の会議にもちこむとか、特別の指令にもとづいて決定変更の問題の準備をおこなわせ、そのさい特別の規則にしたがって、このゴスプランの決定を廃止すべきかどうかを検討するための報告書を作成させるとか、ゴスプランの決定変更のための特別の期限をさだめるとか、等々の手続を要するものとする。

私は、この点では同志トロツキーの希望に応じてもよいし、また応じなければならないと考えるが、われわれの政

治的指導者中の特別の一人物、または最高国民経済会議議長、等々をゴスプランの議長に任命するという点では、そうは考えない。この点では、いまのところ個人的な問題と原則問題とがあまりに密接にからみあっているように思われる。いまゴスプランの議長同志クルジジャノフスキーと副議長同志ピャタコーフとについて耳にするいろいろな攻撃、すなわち、一方はおとなしすぎて、自主性がなく、無定見だという非難が聞かれ、一方では粗野すぎて、軍曹式で、しっかりした学問的素養が足りないなどという非難が聞かれるというように、二重の方向でおこなわれている攻撃――この攻撃は、問題の二つの側面を表現しながら、それを極端に誇張したもので、実際にゴスプランでわれわれが必要としているのは、一つはピャタコーフ、もう一つはクルジジャノフスキーを見本とすることのできる二つの型の性格を、たくみに組み合わせることだと、私は考える。

私は、ゴスプランを率いる人は、一方では、ほかならぬ技術あるいは農学の部門で科学的教養をもっているとともに、技術または農学の分野で数十年にわたる実践活動の大きな経験をつんだ人でなければならないと思う。このような人物は、行政官的な素質よりも、広い経験と人々を引きつける能力の持主でなければならないと、私は考える。

レーニン

二二年一二月二七日

エム・ヴェこれを筆記

V

ゴスプランの諸決定の立法的性格についての手紙のつづき

二二年一二月二八日

私は、国務の方向に決定的な影響をおよぼすことのできるわれわれの同志の一部が、行政官的な側面を誇大に見ていることに気がついた。こういう側面は、もちろん、時と場所によっては必要なものであるが、科学的な側面や、広範な現実の把握や、人を引きつける能力などと混同してはならない。

どの国家機関でもそうだが、とくにゴスプランでは、この二つの資質を組み合わせることが必要である。だから、同志クルジジャノフスキーが、ゴスプランにピャタコーフの協力を求め、彼と仕事の打ち合わせをしたと、私に話したとき、私はそれに同意をあたえながらも、内心いくらかの疑念を残す一方、ここで政府要人の二つの型が組み合わせられるだろうという期待をときおりいだいたのであった。この期待がみたされたかどうか、それについてはいましば

らく待って、もうすこし長く実地の経験を見なければならない。しかし、原則としては、いろいろな性格や型（人間や資質の）をこのように組み合わせることが国家機関の正常な運用のために絶対に必要だということは、疑いをいれないことだと思う。この場合に「行政手腕」を誇大に評価することは、およそあらゆる誇張がそうであるように、有害だと思う。国家機関の指導者は、人々を引きつける能力を高度にもちあわせていなければならないし、また人々の活動を点検するのに必要な、しっかりした科学・技術の知識を十分に身につけていなければならない。これは、基本的なことである。これなしには、活動は正しいものとはなりえない。他方では、国家機関の指導者が行政の能力をもち、またこの仕事でりっぱな助手をひとりないし数人もっていることが、非常にたいせつである。この二つの資質を一身にかねそなえた人物はまず見つかりそうもないし、おそらくその必要もないであろう。

レーニン

エリ・エフこれを筆記
二二年一二月二八日

VI

ゴスプランについての覚え書のつづき
一九二二年一二月二九日

わが国のゴスプランは、見たところ、あらゆる面で専門家の委員会へと発展しつつあるようである。こういう機関を率いる人は、技術の方面で大きな経験をつみ、全面的な科学的教養のある人物でなければならない。ここでは、行政力は、本質上副次的なものでなければならない。ゴスプランがある程度の独立性と自主性をもつことは、この科学機関の権威という見地から見てぜひとも必要であるが、そのための条件は、ただ一つ、この機関の働き手が誠実であって、われわれの経済的および社会的建設計画を実行に移すために誠実に努力することである。

もちろん、この最後にあげた資質は、いまのところ例外的にしか見あたらない。なぜなら、当然のことながら、ゴスプランは学者で構成されているが、学者の圧倒的多数がブルジョア的見解とブルジョア的先入見にそまっていることは、避けられないからである。この側面から学者を点検する仕事は、ゴスプランの幹部会を構成できるような数人の人物の任務とすべきであって、この人たちは共産党員からなり、全活動をつうじて、ブルジョア学者がどれほど献身的か、彼らがブルジョア的先入見を捨てたかどうか、さらに彼らがしだいに社会主義の見地に移っているかどうか

を、日々に点検しなければならない。こういう学問上の点検と純行政上の活動とを同時におこなうこの二重の活動が、わが共和国のゴスプランの指導者の理想となるべきであろう。

レーニン

エム・ヴェこれを筆記
二二年一二月二九日

ゴスプランのおこなう仕事を分けて別々に委託するのが合理的だろうか、それともその反対に、ゴスプランの管轄に属する問題の総体を解決できるような、常任の専門家グループをいくつもつくることに努力すべきではあるまいか？　私は、あとのほうが合理的だし、個別的な臨時の緊急課題の数は減らすように努力すべきだと思う。

レーニン

二二年一二月二九日
エム・ヴェこれを筆記

一九五六年に雑誌『コムニスト』第九号にはじめて発表
全集、第五版、第四五巻、三四九—三五三ページ所収
邦訳全集、第三六巻、七〇八—七一二ページ所収

VII

覚え書のつづき
一九二二年一二月二九日

（中央委員の増員にかんする節へ）

私の意見では、中央委員の人数をふやすさいには、われわれのろくでなしの機構の点検と改善にも——おそらく、主としてこれに——たずさわらなければならない。このためには、われわれは高度に熟練した専門家の助力をえなければならないが、これらの専門家を提供することは、労農監督部の任務でなければならない。

十分な知識をもったこれらの点検専門家と、これらの新しい中央委員とをどう組み合わせるか——この課題は実践的に解決しなければならない。

私には、労農監督部は、（それが発展してきた結果、またそれが発展したことにわれわれがとまどっていた結果）けっきょく今日見るようなものになったのだと思われる。

すなわち、特別の人民委員部でなくなって、中央委員たちの特殊の機能に変わってゆく過渡状態、ありとあらゆる事柄を監査する機関でなくなって、人数は少ないが第一級の監査員の集合体に変わってゆく過渡状態がそれである。これらの監査員には高給を支払わなければならない（このことは、なにごとも支払いずくの現代にあっては、また監査員たちがあからさまに、よりよい給料を支払う機関に勤めるような事情のもとでは、とくに必要である）。

中央委員が適当に増員され、その中央委員たちが、このような高度に熟練した専門家や労農監督部各部門の高い権威をもった部員の援助をうけながら、年々国家行政の課程を修了してゆくなら、われわれがこんなにも長いあいだ解決できなかったこの任務をうまく解決できるようになるだろうと、私は考える。

つまり中央委員の人数を約一〇〇人とし、中央委員の指示にしたがって監査をおこなうその助手の数、すなわち労農監督部員の人数を、四〇〇―五〇〇人以内とする。

レーニン

二二年一二月二九日

エム・ヴェこれを筆記

一九五六年に雑誌『コムニスト』第九号にはじめて発表

全集、第五版、第四五巻、三五四―三五五ページ所収

邦訳全集、第三六巻、七一三―七一四ページ所収

覚え書のつづき
一九二二年一二月三〇日

民族問題または「自治化」の問題によせて(一四七)

私は、悪名高い自治化の問題——公式にはソヴェト社会主義諸共和国の連邦の問題とよばれているようであるが——に十分精力的に、また十分するどく介入しなかった点で、ロシアの労働者にたいして大きな罪をおかしたようである。

この問題が起こったその夏には、私は病気中であった。ついで、秋には、私は、自分の健康が回復して一〇月と一二月の総会(一四八)でこの問題に介入できるだろうということに、度はずれな期待をかけていた。ところが、私は一〇月の総会(この問題のためにひらかれた)にも一二月の総会にも出席できなかった。こうして、この問題は私の手をほとんどまったくすどおりしてしまった。

私にやれたのは、同志ジェルジンスキーと話し合うことだけだった。彼は、カフカーズからやってきて、グルジアでこの問題がどういう状態にあるかを、私に話してくれた。私はまた、同志ジノヴィエフとも二ことばかりことばをかわして、この問題についての私の懸念を彼に述べることもできた。グルジア事件「調査」のために中央委員会が派遣した調査委員会の長である同志ジェルジンスキーから私の聞いたことから、私はこのうえなく大きな懸念をいだかざるをえなかった。同志ジェルジンスキーが私に告げたように、オルジョニキッゼが腕力にうったえるというゆきすぎをやるところまで事態がすすんだとすれば、われわれがどんな泥沼にはまりこんだかは想像にかたくない。明らかに、この「自治化」の企ては根本的にまちがっており、時宜をえないものであった。

機構の統一が必要だったのだ、と言う者がある。こういう主張はどこから出てきたのか? 私の日誌のまえのほうのある号ですでに指摘しておいたように、われわれがツァーリズムから借りてきて、ほんのすこしソヴェトの香油を塗っただけの、あのほかならぬロシアの機構から出てきたものではないのか。

われわれが自分のものとして、自分の機構のことは保障する、と言えるようになるまでは、こういう措置をとるの

を待つべきであったことは、疑いをいれない。ところで、現在では、われわれは、正直なところ、その反対のことを言わなければならないのである。すなわち、われわれが自分の機構とよんでいるものは、実際には、われわれとは徹頭徹尾無縁なものであり、ブルジョア的なものとツァーリズム的なもののごたまぜであって、他国から援助もうけず、おもに軍事的な「仕事」と飢えとのたたかいにたずさわってきたこの五年間には、それをつくりかえることはまったく不可能だったのだ、と。

こういう事情のもとでは、われわれが自分の言いわけにもちだしている「連邦からの脱退の自由」が、典型的なロシア官僚のような、まことにロシア的な人間、大ロシア的排外主義者、実質上卑劣漢で暴圧者である者の攻撃からロシア国内の異民族を守る力のない、一片の紙きれになってしまうことは、まったく当然である。この排外主義的な大ロシア人のやくざものの大海のなかでは、わずかなパーセントしか占めないソヴェトの労働者とソヴェト化された労働者とが、牛乳のなかに落ちたハエのように溺れてしまうことは、疑いをいれない。

この措置の弁明として、民族心理や民族教育に直接にたずさわる人民委員部が独立に設けられたではないか、と言う者がある。しかし、ここでの問題は、はたしてこれらの人民委員部を完全に独立なものにすることができるかどうかということであり、また第二の問題は、真にロシア的なデルジモルダ〔一五〕どもからほんとうに異民族を守る措置をわれわれが十分な心づかいでとったかどうか、ということである。私の考えでは、われわれはそういう措置をとろうと思えばとれたし、またとるべきであったにもかかわらず、とらなかったのである。

私は、この場合、スターリンの性急なやり方と行政官的熱中が、さらに評判の「社会民族主義者」にたいする彼の憎しみが、致命的な役割を演じたと思う。総じて政治では、憎しみは、通常、最悪の役割を果たすものである。

私はまた、これらの「社会民族主義者」の「犯罪」事件を調査するためカフカーズに行った同志ジェルジンスキーもやはり、この点ではきっすいのロシア人かたぎを人いちばい発揮しただけではないかと（よく知られていることだが、異民族の出身者でロシア人化した者こそ、きっすいのロシア人かたぎの点でつねに度をすごすものである）、そして彼の調査委員会の公平ぶりは、オルジョニキッゼの「腕力沙汰」で十分特徴づけられるのではないかと、懸念している。どんな挑発、それどころかどんな侮辱があったからといって、ロシア人のこのような腕力沙汰の言いわけ

になるものではけっしてなく、同志ジェルジンスキーは、この腕力沙汰にたいして軽々しい態度をとった点で、とりかえしのつかない罪をおかしたものだと、私は考える。

カフカーズの他のすべての市民にとって、オルジョニキッゼは権力者であった。オルジョニキッゼには、彼やジェルジンスキーが口実にしているような激昂に駆られる権利はなかった。その反対に、オルジョニキッゼには、行動を自制する義務があった。ところが、普通の市民には、まして「政治」犯の被告には、だれにもそういう自制した行動をとる義務はないのである。ところで、実際のところ、社会民族主義者は、政治犯として告発された市民ではなかったか。また、告発の事情全体からみて、この告発はそういうものと特徴づけるほかなかったではないか。

ここにはすでに重要な原則問題がある。それは、国際主義をどう理解するか、という問題である。[一五]

レーニン

二二年一二月三〇日

エム・ヴェこれを筆記

覚え書のつづき

一九二二年一二月三一日

民族問題または「自治化」の問題によせて（つづき）

私はすでに、民族問題を論じたいろいろな著作のなかで、民族主義一般の問題を抽象的に提起してもなんの役にも立たない、と書いてきた。抑圧民族の民族主義と被抑圧民族の民族主義、大民族の民族主義と小民族の民族主義とを区別する必要がある。

このあとのほうの民族主義にたいして、われわれ大民族に属する者は、歴史的実践のうちで、ほとんどつねに数かぎりない暴行の罪をおかしている、それどころか――自分では気づかずに、数かぎりない暴行や侮辱をくわえているものである。わが国ではどんなに異民族をばかにしているか、ポーランド人をよぶのに「ポリャーチシカ」としか言わず、タタール人のことは「公爵（クニャージ）」、ウクライナ人のことは「ホホル」、グルジア人その他のカフカーズの異民族のことは「カプカーズ人」といつも嘲弄していること、これについての私のヴォルガ時代の記憶を呼びおこすだけで十分である。

だから、抑圧民族、すなわち、いわゆる「強大」民族

(その暴行にかけて強大なだけなのだが、デルジモルダ式に強大なだけなのだが)にとっての国際主義とは、諸民族の形式的平等を守ることだけでなく、生活のうちに実際におこなわれている不平等にたいする抑圧民族、大民族側のつぐないとなるような不平等を、彼らがしのぶことでなければならない。このことを理解しなかった者は、民族問題にたいする真にプロレタリア的な態度を理解しなかった者、そのじつ小ブルジョア的見地にとどまっている者であって、したがって、たえずブルジョア的見地に転落せざるをえないのである。

プロレタリアにとってはなにが重要か？　プロレタリアにとって重要なばかりか、ぜひとも必要なことは、プロレタリア的階級闘争にたいする異民族の最大限の信頼を確保することである。このためにはなにが必要か？　このためには、歴史上の過去に異民族が「強大」民族の政府のために味わったあの不信、疑惑、侮辱を、異民族にたいする自分の態度により、自分の譲歩によって、なんとかしてつぐなうことが必要である。

ボリシェヴィキに、共産主義者に、これ以上、またくわしく、この点を説明するにはおよばないと思う。グルジア民族にかんする当面の場合は、問題にたいする真にプロレタリア的な態度が、われわれに特別に慎重で、用心ぶかく、譲歩的であることを要求している典型的な事例であると思う。問題のこの側面を不注意に扱い、「社会民族主義」という非難を不注意に投げつけるグルジア人(ところが、彼自身がほんとうの、真の「社会民族主義者」であるばかりか、粗暴な大ロシア人的デルジモルダなのだ)は、そのじつプロレタリア的階級連帯の利益をそこなう者である。なぜなら、民族的不公正ほど、プロレタリア的階級連帯の発展と強固さを阻害するものはなく、また、平等感とこの平等の侵害――たとえ不注意からの侵害にせよ、たとえ冗談のつもりでなされた侵害にせよ――ほど、自分の同志であるプロレタリアによってこの平等が侵害されることほど、「侮辱された」民族の人々が敏感に感じるものはないからである。そこで、この場合には、少数民族にたいする譲歩とおだやかさの点でゆきすぎるほうが、ゆきたりないよりはましである。だから、この場合には、われわれが民族問題にたいしてけっして形式的な態度をとらず、抑圧(または大)民族にたいする被抑圧(または小)民族のプロレタリアの態度にかならず見られる違いをつねに考慮にいれることが、プロレタリア的連帯の、したがってまたプロレタリア的階級闘争の、根本的利益からみて必要なのである。

エム・ヴェこれを筆記

二二年一二月三一日

覚え書のつづき

一九二二年一二月三一日

では、現状においてとるべき実際的措置はどういうものであろうか？

第一に、社会主義諸共和国の連邦を維持し、強化すべきである。この措置については疑問の余地はない。この措置は、世界ブルジョアジーとたたかうため、彼らの陰謀を防ぐために、われわれに必要であり、また世界の共産主義的プロレタリアートにも必要である。

第二に、外交機構の面で社会主義諸共和国の連合を維持することが必要である。ついでにいえば、この機構はわが国の国家機構のうちでは例外的なものである。われわれは、ツァーリズムの旧職員のなかのいくらかでも有力な人間は、この機構に一人も入れなかった。ここでは、いくらかでも権威のある機関はすべて、共産主義者で構成された。だから、この機構は、試験ずみの共産主義的機構という名称をすでにかちとっている（こうあえて言うことができる）。そこでは、ほかの人民委員部がやむをえずそれでまにあわせている機構にくらべて、ツァーリズム的、ブルジョア的小ブルジョア的な旧職員ははるかに徹底的に掃きだされている。

第三に、見せしめのために同志オルジョニキッゼを処罰し（私は個人的には彼の友人のひとりであり、国外の亡命地でいっしょに活動したことがあるだけに、こういうことを言うのは、非常に残念である）、またジェルジンスキーの調査委員会の資料を全部追審するか、調査しなおす必要がある。これは、そのなかに疑いもなくふくまれている大量のまちがいとかたよった判断を訂正するためである。このまぎれもない大ロシア民族主義的カンパニア全体の政治的責任は、もちろん、スターリンとジェルジンスキーにとらせなければならない。

第四に、わが連邦に所属する各民族共和国で民族語を使用することについて厳格なうえにも厳格な規則を設け、この規則の遵守をとくに綿密に点検しなければならない。わが国の現在の機構のもとでは、鉄道業務の統一とか税制の統一とかを口実にして、きっすいのロシア的なゆきすぎが大量に生じることは疑いない。このゆきすぎとたたかうためには、こういう闘争に取り組む人々の特別の誠実さはいうまでもなく、特別な発明の才が必要である。この場合、詳細な法典が必要となるであろうが、そういう法典をいくぶんでもうまくつくれるのは、当の共和国に住む民族の人人だけである。そのさい、こうした活動全体の結果として

次のソヴェト大会でまえの状態に復帰することは、すなわち、ソヴェト社会主義諸共和国の連邦は軍事上および外交上でだけ維持するようにして、その他すべての点については各国人民委員部の完全な自主性を復活することはありえないと、あらかじめ断言することは、けっして許されない。

人民委員部が分散されて、モスクワとその他の中心地とでそれらの活動に不一致が生じるにしても、党の権威が十分慎重かつ公平に行使されるなら、党の権威によってその不一致を十分中和させることができることを、念頭におかなければならない。諸民族〔共和国〕の機構とロシアの機構とが統合されていないために、わが国家がこうむるかもしれない損害は、われわればかりか、さらにインタナショナル全体が、近い将来われわれにつづいて歴史の前面に登場しようとしているアジア幾億の諸民族がこうむるであろう損害にくらべれば、はかりしれないほど小さく、無限に小さい。もし東洋がこのように登場してくる前夜に、また東洋のめざめが始まっているそのときに、われわれが自国内の異民族にたいしてすこしでも粗暴で不公正にふるまったため、東洋でのわれわれの権威をそこなうようなことがあれば、それは許しがたい日和見主義であろう。資本主義世界を守護している西欧の帝国主義者を向こうにまわして結束する必要があるということ――この点については疑問はありえないし、私がこれらの措置を無条件で是認することはいうまでもない――と、たとえ些細なことについてであろうとわれわれ自身が被抑圧民族にたいして帝国主義的な態度におちいり、その結果、われわれの原則的な誠実さと、帝国主義にたいする闘争の原則的な擁護とをまったくだいなしにすることとは、まったく違った事柄である。だが、世界史上の明日は、まさに、いまや呼びさまされた帝国主義抑圧下の諸民族が最後的にめざめる日、彼らの解放をめざす断固たる、長い苦しい戦闘が始まる日であろう。

レーニン

二二年一二月三一日

エム・ヴェこれを筆記

一九五六年に雑誌『コムニスト』第九号にはじめて発表
全集、第五版、第四五巻、三五六―三六二ページ所収
邦訳全集、第三六巻、七一五―七二二ページ所収

協同組合について

一

わが国では、協同組合に十分注意をはらっていないように思われる。いまわが国では、十月革命以来、ネップ（新経済政策）にかかわりなく（それどころか、この点では、ほかならぬネップのおかげで、と言わなければならない）、協同組合がまったくなみなみならぬ重要な意義をもつようになっているが、おそらく、だれもがこのことを理解しているとは言えないであろう。古い協同組合活動家の描いた夢には、空想がたくさんふくまれている。その夢は、滑稽なほど空想的なことがめずらしくない。だが、それはどういう点で空想的なのか？ 搾取者の支配を打倒するための労働者階級の政治闘争の基本的、根本的な意義を、人々が理解していない点でである。いまでは、わが国では、この支配は打倒されている。いまでは、古い協同組合活動家の夢のなかで空想的であったもの、ロマンティックでさえあったもの、卑俗でさえあったものの多くが、ごくあたりまえの現実となっている。

じっさい、わが国で国家権力が労働者階級の手ににぎられた以上、すべての生産手段がこの国家権力のものとなった以上、われわれに残された任務は、まさしく、住民を協同組合に組織することだけである。住民が最大限に協同組合に組織されるならば、以前には、階級闘争や政治権力獲得のための闘争、その他が必要だと正当にも確信していた人々から当然にあざけられ、冷笑され、軽蔑されていたその社会主義が、ひとりでにその目標を達成する。ところが、ロシアの協同組合化がいまやわれわれにとってどんなに大きな、はかりしれない意義をもつようになったかを、かならずしもすべての同志がはっきり理解しているわけではない。ネップを採用したことで、われわれは商人としての農民に、私的商業の原則に、譲歩した。まさにその結果（普通考えられているのとは反対に）、協同組合化が巨大な意義をもつにいたったのである。じつを言えば、ネップの支配のもとでは、ロシアの住民を十分に広く、深く協同組合に組織することが、われわれの必要とするもののすべてでな

のである。というのは、私的利益、私的商業の利益と、国家によるこの利益の監督および統制とをどの程度に結合すべきか、私的利益をどの程度に公共の利益に従属させるべきかは、以前にはじつに多くの社会主義者のつまずきの石となったが、われわれはいまやこの度合いを見いだしたからである。じっさい、すべての大規模な生産手段を国家が支配していること、国家権力がプロレタリアートの手ににぎられていること、このプロレタリアートと幾百万の小農民および零細農民とが同盟を結んでいること、農民にたいする指導権がこのプロレタリアートに確保されていること、等々——これらは、われわれが以前に小商人的なものとして鼻であしらっていた協同組合、またある面ではいまネップのもとでもやはり鼻であしらって当然な協同組合から、もっぱら協同組合だけから、完全な社会主義社会を建設するのに必要なすべてのものではないだろうか？　これはまだ社会主義社会の建設ではない。しかし、これこそ、この建設のために必要で十分なすべてのものである。

まさにこの事情こそ、わが国の多くの実践活動家が過小評価しているものである。わが国の人々は、この協同組合が、第一には、原則的な点で（生産手段の所有が国家の手にあるということ）、第二には、できるだけ簡単で、容易で、農民にとってとりかかりやすい方法で新しい秩序に移行するという見地からみて、なみなみならぬ重要な意義をもっていることを理解せずに、協同組合を軽視している。

だが、これこそが、やはり肝心なことなのである。社会主義を建設するための各種の労働者団体について空想をたくましくすることと、あらゆる小農民がこの建設に参加できるようなやり方でこの社会主義を実際に建設するのを学びとることとは、違ったことである。これこそ、われわれがいま到達している段階である。だが、この段階に到達していながら、われわれがそれを法外にわずかしか利用していないことは、疑いをいれない。

われわれがネップに移るさいに度をすごしたのは、自由な商工業という原則を重視しすぎた点にあるのではない。ネップに移るさいにわれわれが度をすごしたのは、協同組合について考えるのを忘れた点であり、いまでも協同組合を過小評価している点であり、またさきに述べた二つの観点からみた協同組合の大きな意義をはやくも忘れはじめた点である。

さて、この「協同組合」原則にもとづいて、実際にいますぐなにをすることができるか、またしなければならないかを、ここで少々読者と話し合ってみたいと思う。この「協同組合」原則の社会主義的な意義がだれにもはっきりするようなやり方で、この原則をいますぐ発展させはじめ

るには、どういう手段でそれを始めたらよいのか、また始めなければならないのか？

政治的には、協同組合が一般に、またつねに一定の特典をうけるだけでなく、純然たる財産上の特典（銀行利子率などの点で）をもうけるようにしなければならない。われわれは、重工業等々さえもふくめて私的企業にわれわれが貸し付ける額を、たとえわずかでも上まわる額の国家資金を、協同組合に貸し付けるべきである。

どんな社会制度も、特定の階級から財政的な支持をうける場合に、はじめて成立するものである。「自由な」資本主義を生みだすのに、何億、何十億ルーブリという金がかかったことは、言わないことにしよう。いまやわれわれは、現在われわれがなみはずれた支持をあたえなければならない社会制度が協同組合制度であることを認識して、それを実行に移さなければならない。しかし、協同組合制度を支持するというのは、ほんとうの意味での支持でなければならない。すなわち、この支持ということばを、協同組合の取引ならなんでも支持することだというふうに理解したのでは、不十分である。――この支持ということばは、実際の住民大衆が実際に参加するような協同組合取引を支持することだ、というふうに理解しなくてはならない。協同組合取引に参加する農民に報奨をあたえることは、無条件に正しい形態であるが、その場合、この参加を点検して、それが自覚的な参加か、また質的に高い参加かどうかを点検することが、問題の核心である。協同組合活動家が農村に出かけていって、そこに協同組合の売店をひらいても、厳密にいえば、住民はそれに参加したことにけっしてならないが、それでも住民は、自分自身の利益にひかれて、いそいでこれに参加しようとするだろう。

この問題には、別の側面もある。すべての人をひとりのこらず協同組合取引に参加させ、それも受動的にではなく、積極的に参加させるために、われわれがまだしなければならないことは、「開化した」（なによりもまず読み書きのできる）ヨーロッパ人の目から見れば、ごくわずかなことである。じつを言えば、われわれがまだしのこしていることは、次のこと「だけ」である。すなわち、わが国の住民が、協同組合にひとりのこらず参加することがどんなに有利であるかを理解して、こういう参加を軌道にのせるほどに、彼らを「開化」させることである。これ「だけ」である。いまのところ、われわれが社会主義に移行するには、これ以外にたいした工夫はなにもいらない。けれども、これ「だけ」のことをやりとげるためには、完全な変革が、人民大衆全体の文化的発展の一時代が、必要である。だから、われわれの準則とすべきものは、理屈を言うのはできるだ

け少なくし、気どった文句はできるだけ少なくするということである。この点で、ネップは、ごく普通の農民の水準に合っていて、農民になにも高度なものを要求しないという点で、ひとつの進歩である。しかし、ネップをつうじて全住民をひとりのこらず協同組合に参加させるためには、一歴史時代が必要である。うまくいけば、われわれは、一〇年か二〇年でこの時代をとおりすぎることができるだろう。それでも、それは特別な一歴史時代であろう。そして、こういう歴史時代をとおらなければ、全住民がひとりのこらず読み書きできるようにならなければ、十分な分別がなければ、また、住民に本を読む習慣を十分に身につけさせなければ、また、このための物質的な裏づけがなければ、たとえば不作や飢饉などにたいしてある程度保障されていなければ、――こういうことがなければ、われわれは、自分の目的を達することはできないのである。いま肝心なことは、われわれがすでに発揮し、しかも十二分に発揮してとは、われわれがすでに発揮し、しかも十二分に発揮して完全な成功をおさめた、あの革命的大胆さ、革命的熱情と、(私はこう言ってもよいとさえ思っているが) 分別あり、読み書きできる商人となる能力――りっぱな協同組合活動家としてまったく十分な能力――とを、結合するすべを知ることである。商人となる能力と私が言うのは、教養ある商人となる能力という意味である。商売さえすれば商人になる能力をもったことになると考えているロシア人、端的に言って農民は、このことをおぼえておくがよい。それはまったくまちがっている。商売をやっていることと、教養ある商人となる能力をもつこととでは、まだ非常な隔りがある。いまはアジア的に商売をやっているが、商人となる能力をもつには、ヨーロッパ的に商売しなければならない。そうなるには、一時代が必要である。

話を終わることにしよう。経済、財政、金融上の一連の特典を協同組合にあたえなければならない。これが、住民組織化の新しい原則をわが社会主義国家が支持する仕方でなければならない。だが、これではまだ、任務はおおまかに提起されただけである。なぜなら、これだけでは、まだこの任務の全内容が明確にされておらず、くわしく実践的に述べられていないからである。すなわち、協同組合の設立にたいしてわれわれのあたえる「報奨」の形態(とその交付の条件)、協同組合にたいして十分な援助となるような報奨の形態、開化した協同組合活動家をつくりだす手段となるような報奨の形態を、見いだすことができなければならない。ところで、生産手段の社会的所有がおこなわれ、プロレタリアートがブルジョアジーにたいして階級的勝利をおさめているところでの、開化した協同組合活動家の制度とは、社会主義制度にほかならない。

一九二三年一月四日

二

新経済政策について書くとき、私はいつも、一九一八年に私が書いた国家資本主義にかんする論文を引用したものである。(三三) このことは、一部の若い同志たちに何度も疑念をおこさせた。しかし、彼らの疑念は、主として抽象的な政治問題にむけられていた。

生産手段が労働者階級のもので、この労働者階級が国家権力をにぎっているような制度を、国家資本主義とよぶべきではない、と彼らには思われた。しかし、彼らは、私が「国家資本主義」という名称をつかったのは、次のような目的のためであったことに気がつかなかった。第一に、それは、われわれの現在の立場と、いわゆる左翼共産主義者にたいする論戦で私がとった立場との歴史的関連を明らかにするためであった。すでにその当時にも、私は、国家資本主義がわが国の現在の経済よりも高度なことを証明しようとした。私にとっては、普通の国家資本主義と、読者に新経済政策の手ほどきをしたときに私が述べた、あの普通とは違った、まったく異常でさえある国家資本主義との継承関係を明らかにすることが、重要だったのである。第二に、私にとっては、いつでも実践的な目的が重要であったが、われわれの新経済政策の実践的な目的は、利権事業を成立させることであった。わが国の条件のもとでは、利権事業は、疑いもなく、純粋な型の国家資本主義となったであろう。私は、国家資本主義についての考察を、こういうふうに提起したのである。

しかし、この問題には、国家資本主義か、あるいはすくなくとも国家資本主義との対比を、われわれが必要とするであろうような、もうひとつの側面がある。それは、協同組合の問題である。

資本主義国家のもとでの協同組合が、集団的な資本主義的施設であることは、疑いをいれない。また、わが国の現在の経済的現実のもとで、われわれが私的資本主義的企業——とはいえ、ほかならぬ公共の土地のうえに建てられ、労働者階級の手ににぎられた国家権力のほかならぬ統制のもとにある私的資本主義的企業——と、徹底的に社会主義的な型の企業(生産手段も、企業の建っている土地も、企業全体も、国家のものであるような)とを結合するとき、そこに、さらに第三の型の企業の問題が起こってくることも、疑いをいれない。それは、以前には、原則的意義の見地からみて独自性をもたなかった企業、つまり協同組合企業の問題である。私的資本主義のもとでは、協同組合企業

と資本主義的企業との違いは、集団的企業と私的企業との違いである。国家資本主義のもとでは、協同組合企業は、第一には私的企業である点で、第二には集団的企業である点で、国家資本主義的企業とは異なっている。われわれの現行の制度のもとでは、協同組合企業は、集団的企業である点で私的資本主義的企業とは異なっているが、もしその建てられている土地や生産手段が国家すなわち労働者階級のものであるなら、その協同組合企業は、社会主義的企業とは異なるところがない。

わが国では、協同組合について論じる場合、まさにこの事情が十分に考慮されていない。わが国では、わが国家制度の特質のおかげで、協同組合はまったく特別な意義をもつようになっているが、そのことが忘れられている。利権事業――ついでにいえば、これは、わが国ではあまりめだった発展をとげなかった――を別にとりだせば、協同組合は、わが国の条件のもとでは、ほとんどつねに社会主義と完全に一致する。

私の考えを説明しよう。ロバート・オーエン以来の古い協同組合活動家の計画の空想性は、どういう点にあるのか？　それは、彼らが階級闘争、労働者階級による政治権力の獲得、搾取階級の支配の打倒の問題というような基本的な問題を考慮しないで、社会主義による現代社会の平和的改造を夢みていた点にある。だからこそ、われわれがこの「協同組合的」社会主義をまったくの空想と考えるのは、住民を協同組合に組織するだけで階級敵を階級協力者に変え、階級戦争を階級平和（いわゆる国内平和）に変えることができるという夢に、ロマンティックなもの、それどころか卑俗なものさえ見いだすのは、正当なのである。

現代の基本的任務の見地からみて、われわれが正しかったことは、疑いない。なぜなら、国家の政治権力の獲得をめざす階級闘争によらなければ、社会主義は実現できないからである。

だが、国家権力がすでに労働者階級の手ににぎられ、搾取者の政治権力が打ち倒され、すべての生産手段（労働者国家が自発的に、一時的に、条件つきで、利権として搾取者に貸し出しているものを除いて）が労働者階級の手にある現在、事態はどう変化したかを見てもらいたい。

いまでは、協同組合の成長そのものが（さきにあげた「わずかな」例外はあるが）、われわれにとって社会主義の成長と同じ意味をもっている、と言ってさしつかえない。それと同時に、社会主義についてのわれわれの見地全体が根本的に変化したことを、われわれは認めないわけにはいかない。この根本的変化とは、以前にはわれわれは政治闘争、革命、権力の獲得、等々に重点をおいていたし、また

おかなければならなかったが、いまではこの重点が移動して、平和な、組織的な、「文化的」活動におかれるようになった、ということである。国際関係さえなかったなら、国際的規模でわれわれの地位を守るためにたたかう必要さえなかったなら、私は、われわれにとって重点は文化的な仕事に移りつつある、と言うのをはばからない。だが、この問題を別とすれば、国内の経済関係に限ってみれば、いまではわれわれの活動の重点は、実際に文化的な仕事に帰着する。

われわれは、一時代をなす二つの主要な任務に当面している。第一には、まえの時代からわれわれがそのまま受けついだわれわれのろくでもない機構をつくりかえるという任務である。この点では、われわれは、闘争の五年間に重大な改造をおこなう余裕はなかったし、また余裕があるはずもなかった。われわれの第二の任務は、農民のための文化活動である。そして、農民のあいだでのこの文化活動の経済的目的は、まさに協同組合を組織することにある。全農民が協同組合に組織されれば、われわれはすでに社会主義の基盤にしっかりと足を踏まえたことになるであろう。だが、全農民を協同組合に組織するというこの条件は、農民（まさに大多数者である農民）の高い文化水準を前提するので、完全な文化革命なしには、全農民をこのように協同組合に組織することは不可能である。

われわれはあまり文化的でない国に社会主義を植えつけるという無分別な事業を企てていると、再三われわれの敵に言われた。しかし、われわれが理論（あらゆる衒学者の理論）によって予定されたものとは違った一端から始めたという点で、またわが国では政治的および社会的な変革が文化の変革、文化革命に先行したという点で、彼らはまちがっていた。にもかかわらず、われわれはいまやこの文化革命に直面しているのである。

この文化革命さえおこなえば、われわれがわが国を完全に社会主義的な国とするのに十分である。だが、われわれにとってこの文化革命は、純文化的な困難（なぜなら、われわれは文盲だから）も、物質的な困難（なぜなら、文化的になるためには、物質的生産手段のある程度の発展が必要であり、ある程度の物質的基盤が必要だから）もふくめて、はかりしれない困難をあらわしているのである。

一九二三年一月六日

『プラウダ』第一一五号および一一六号、一九二三年五月二六日および二七日にはじめて発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四五巻、三六九―三七七ページ所収
邦訳全集、第三三巻、四八七―四九五ページ所収

量よりも質を

われわれの国家機構を改善する問題では、労農監督部は量を追いもとめるべきではなく、また事を急いでもならない、と私は考える。これまでわれわれには、われわれの国家機構の質について考えたり気をくばったりする暇があまりなかっただけに、とくに真剣にこの問題を準備し、真に現代の水準に達した人材、すなわち西ヨーロッパの最もすぐれた模範にひけをとらないような人材を労農監督部に集中するために配慮することが、当をえたものであろう。もちろん、社会主義共和国としては、この条件はあまりにもつつましいものである。だが、最初の五年間の経験から、われわれの頭には、不信と懐疑がかなりたたきこまれている。たとえば、「プロレタリア」文化についてあまりにも多くのことを、あまりにも軽々しくしゃべりたてる人々には、われわれは思わず知らず不信と懐疑をいだきがちである。われわれは、手はじめには、ほんとうのブルジョア文化で十分であろう。手はじめには、われわれは、前ブルジョア的文化のとくに札つきの型、すなわち官僚文化、農奴制文化、等々なしにやってゆくようにすべきであろう。文化の問題では、性急とがむしゃらは、なによりも有害である。このことを、わが国の多くの若い文筆家や共産主義者は、よくよく胸にきざみつけておくべきであろう。

そこで、国家機構の問題でも、いまやわれわれは、これまでの経験から、もっとゆっくりやったほうがよいという結論を引きださなければならない。

われわれの国家機構の状態は、見ぐるしいと言わないまでも、はなはだ情けないものであるから、われわれは、この欠陥が、くつがえされはしたが根絶されてはいない過去に、もはや遠く過ぎさった文化段階とまではなっていない過去に、根ざすものであることを心にとどめて、どうやってその欠陥とたたかうかを、はじめによくよく考えめぐらさなければならない。私がここでほかならぬ文化の問題を提出するのは、こうした事柄では、文化のなかに、日常生活のなかに、慣習のなかにはいりこんだものだけを、達成されたものと考えなければならないからである。だが、わが国では、社会制度のすぐれた点がつきつめて考えぬかれておらず、理解されておらず、感じとられておらず、大急

ぎでとりあげられていて、点検されておらず、ためされておらず、経験によって確かめられておらず、定着させられていない、等々と言ってさしつかえない。革命期には、そして五年間にわれわれをツァーリズムからソヴェト制度にみちびいた、あのめまぐるしく急速な発展のもとでは、もちろん、これ以外ではありようがなかった。

間にあううちに考えなおさなければならない。あわただしい急前進や、あらゆるほらふき、等々にたいして、有益な不信の念をやしなうことが必要である。われわれが毎時宣言し、毎分実行し、ついで、それは薄弱で浅薄で勘ちがいだと毎秒証明しているような前進の歩みを点検することを、考えめぐらさなければならない。ここでは、急ぐことがなによりも有害であろう。われわれはとにかくなにかを知っているとか、社会主義的、ソヴェト的等々という名称でよばれるのに真に値する真に新しい機構を建設するための諸要素を、われわれはいくぶんでも大量にもっているとかということをあてにするのは、なによりも有害であろう。

いや、そのような機構、いやその諸要素さえ、わが国にはおかしいほど少ないのだ。だから、これをつくりだすためには時間を惜しむべきではなく、何年も何年も何年もそれに費やす必要があるのだということを、われわれはおぼえていなければならない。

わが国には、この機構をつくりだすためのどのような要素があるだろうか？　二つしかない。第一には、社会主義のための闘争に熱中している労働者である。この要素は十分な教育をうけていない。彼らは、われわれにもっとよい機構をあたえたいと思っているのだが、どうすればそうできるかがわからずにいる。彼らは、それをやることができない。彼らは、これまでのところそれに必要なだけの発達をとげておらず、それに必要な文化を身につけていない。だが、そのために必要なのは、ほかならぬ文化なのである。ここでは、高びしゃだとか、むりおしだとかのやり方では、また機敏だとか、精力的だとか、総じてなにかの優秀な人間的素質によっては、なにも達成できない。第二には、知識、教育をもつ分子であるが、彼らは、わが国では、他のすべての国々にくらべておかしいほど少ない。

この点で、われわれがまだこれらの知識を熱心さ、性急さ、等々で代用させようとあまりにもしがちである（あるいは、代用させうると考えがちである）ことを、忘れてはならない。

われわれの国家機構を刷新するために、われわれがぜひとも自分の任務としなければならないのは、一にも学習、二にも学習、三にも学習であり、ついで、われわれの学問が死んだ文字や流行の空文句に終わっていないかどうか

（ざっくばらんに言って、わが国ではそうしたものに終わっている場合がとくに多い）、科学が真に血となり肉となり、完全に、ほんとうに日常生活の構成要素となっているかどうかを、点検することである。一言でいえば、われわれが提出しなければならない要求は、西ヨーロッパのブルジョアジーが提出しているような要求ではなくて、社会主義国へと発展することを自分の任務としている国が提出するのにふさわしく、適切な要求でなければならない。

以上に述べたことから出てくる結論は、われわれは労農監督部を、われわれの機構を改善するための道具として、真に模範的な機関にしなければならない、ということである。

労農監督部が必要な水準に達することができるためには、七度測って一度裁て、という準則を守ることが必要である。

そのためには、できるだけ慎重に、考えぬいたうえで、事をよくわきまえたうえで、わが国の社会制度のなかの真にすぐれたものを、新しい人民委員部の創設のために用いなければならない。

そのためには、われわれの社会制度のなかの最もすぐれた分子、すなわち、第一に、先進的労働者、第二に、どんなことばも額面どおりにはとらず、良心に反したことはひとことも言わない人間だと保証できるような、真に啓蒙された分子が、どんな困難をも告白することをはばからず、真剣にとりあげた目標を達成するためにはどんな闘争も恐れないことが必要である。

われわれは、すでに五年間もわれわれの国家機構の改善にあくせくしてきたが、それはまさにあくせくしただけであって、五年かかって立証されたことといえば、やってきたことは役にたたないか、無益でさえあるか、あるいは有害でさえあるということだけであった。あくせくしていたところから、われわれはあたかも仕事をしているかのように見えてはいたが、実際には、それはわれわれの機関やわれわれの頭脳にごみを詰めこんだのだった。

いまや、ついに事態をあらためるべき時である。

量よりも質を、ということを、準則としなければならない。しっかりした人材がえられる見込みがまったくないのにあわてて事をはこぶよりは、二年か、それどころか三年の時をかけるほうがよいということを、準則としなければならない。

この準則をしっかりと守って、それをわれわれの現実に適用するのがむずかしいことを、私は知っている。わが国では、これと反対の準則が何千というぬけ穴をくぐって道を切りひらくだろうことを、私は知っている。巨人的な抵抗をしなければならないこと、ものすごいがんばりを発揮

しなければならないこと、すくなくともはじめの何年かは、この面での活動がまったくむくいられないことを、私は知っている。だが、それにもかかわらず、このような活動によってのみわれわれは自分の目標を達成できること、また、この目標を達成することによってのみわれわれは、ソヴェト的、社会主義的、その他等々の名称に真に値する共和国をつくりだすであろうことを、私は確信している。

おそらく、第一の論文(三)に例としてあげた数字は少なすぎる、と考えた読者も多いだろう。そんな数字では足りないということを証明するための計算なら、いくらでもあげることができるだろうと、私は確信している。だが、私は、真に模範的な質のために、という一事を、そういういっさいの計算に優先させなければならないと思う。

われわれがわれわれの国家機構の改善の仕事にしっかりと、まったく真剣にたずさわるべき時が、そして性急さがこの仕事にとってのおそらくいちばん有害な特徴になろうとしている時が、いまこそついにわれわれの国家機構にやってきたと、私は考える。だから、私は、これらの数字をもっとふやすことを、大いにいましめたいのである。それどころか、私の見るところでは、ここでは数字についてとくにひかえめにしなければならない。率直に言おう。いまのところ、労農監督部はかけらほどの権威ももっていない。わが労農監督部の諸機関ほどまずい仕方で組織されている機関はなく、現在の条件のもとではこの人民委員部にはなにも期待できないことは、だれでも知っている。もしわれわれが、次のような機関、すなわち、第一には、模範的でなければならず、第二には、すべての人に無条件的な信頼をおこさせなければならず、第三には、中央統制委員会のような上級機関の活動をわれわれが実際にその名にふさわしいものとしたことを万人に証明しなければならない、そういう機関を数年のあいだにつくりあげることを、ほんとうに自分の目標にしようと思うなら、われわれは、さきほど言ったことをしっかりと記憶にとどめておかなければならない。私の考えでは、職員数の一般的な基準はのこらず、いますぐ、決定的に廃止すべきである。労農監督部の職員は、まったく特別に選択し、かならず最も厳格な試験にもとづいて選抜するのでなければならない。じっさい、いいかげんな仕事をして、またもやなんの信頼もおこさせないような人民委員部、その発言がこれっぽちの権威ももたないような人民委員部をつくったところで、なんの役に立とうか？ 私は、そんなふうにならないようにすることが、われわれがいま意図しているような種類の改造での、われわれのおもな任務であると思う。

われわれが中央統制委員に任命する労働者は、共産党員

として非の打ちどころのない人々でなければならないし、私は、彼らに仕事の仕方と任務を教えるためには、今後長いあいだ彼らにはたらきかける必要があると思う。さらに、この仕事の助手として、一定の人数の書記団がなければならない。これらの書記については、彼らを任命するまえに、三重の審査を要求すべきであろう。最後に、われわれが例外としてただちに労農監督部の職員の地位につける公務員は、次の条件をみたすものでなければならない。

第一に、彼らは、何人かの共産党員の推薦をうけたものでなければならない。

第二に、彼らは、われわれの国家機構にかんする知識の試験に合格しなければならない。

第三に、彼らは、われわれの国家機構の問題にかんする理論の基礎知識、行政学や事務処理などの基礎知識の試験に合格しなければならない。

第四に、彼らは、この機構全体の活動についてわれわれが保証をあたえることができるよう、中央統制委員および自己の書記局と一致して活動しなければならない。

私は、こうした要求が法外に厳格な条件を前提するものであることを知っているし、労農監督部の「実践家」の大多数が、そんな要求は実行不可能だときめつけるか、あざ笑うのではないかと、大いにあやぶんでいる。しかし、私は、労農監督部の現在の指導者またはその関係者のだれかれに、労農監督部のような人民委員部は実際になんのために必要かを、良心にしたがって言うことができるかと、たずねてみたい。この質問は彼らが正しい度合を知る助けになるであろうと、私は考える。労農監督部のような見こみのない仕事のことで、これまでわが国でさんざんおこなわれてきたのと同じような改組をいま一度やるのはむだごとであるのか、それとも、ゆっくりと、困難な、普通とは違った方法で、再三再四の点検を欠かすことなく、真に模範的なもの、その官位や肩書きのためだけでなしに、真に万人に尊敬の念を起こさせることのできるものをつくりだすことを、真に自分の任務とするか、どちらかである。

もし耐えぬくだけの覚悟がなく、この仕事に何年かをかける気がないなら、全然これに手をつけないほうがよい。

私の考えでは、高級労働専門学校等々の方面でわれわれがすでにつくりだしているいろいろな施設のうちから、最小限の数を選び、仕事が十分に本腰をいれて組織されているかどうかを点検し、それが真に現代科学の水準に則して、われわれに現代科学の成果をすべてもたらすような仕方でのみ、その活動をつづけるべきである。そうすれば、何年かのうちに、自分のなすべきことをすることのできる機関、——すなわち、労働者階級、ロシア共産党、わが共和国の

全住民大衆の信頼をえて、系統的に、たゆみなくわれわれの国家機構の改善のためにはたらくことのできる機関がもてるだろうと期待するのは、空想的ではないであろう。

そのための準備活動は、いますぐ始めることができよう。もし労農監督人民委員部がこの改造案に同意するなら、同部は、ただちに準備的な措置を始め、急がずに、またすでに一度やったことをやりなおすのをこばまずに、それらの措置を完全になしとげるまで、系統的に活動することができるであろう。

この場合、およそ中途半端な解決はすべて、このうえなく有害であろう。労農監督部の職員にかんしての、およそこれと違った考慮にもとづく基準はすべて、実質上、古い官僚的考慮や、古い偏見や、すでに非難されて一般の嘲笑の的となっている考え、等々にもとづいたものであろう。

実質上、ここでの問題は次のようになっている。

いまやわれわれは、国家建設の事業で真剣になにかを学びとったことを(五年のうちにはなにかを学びとっていいはずである)実証するか、それとも、われわれがまだそこまで成熟していないことを実証するか、どちらかである。あとの場合なら、この事業にとりかかってもむだである。

私は、われわれのもっている人材からみて、せめて一つの人民委員部を系統的に、新規に建設できるだけのものを、われわれはすでに学びとっていると想定しても、思いあがりではないと思う。もっとも、この一つの人民委員部は、われわれの国家機構全体の規範となるべきものであるが。

一般に労働の組織、とくに行政活動の組織にかんする教科書を二冊かそれ以上編集するためのコンクールを、いますぐ発表すべきである。すでにわれわれがもちあわせているエルマンスキーの本を、その基礎にしてもよいだろう。もっとも、ついでにいえば、エルマンスキーは、メンシェヴィズムにはっきり共鳴している点がめだっていて、ソヴェト権力にふさわしい教科書を編集するには不適当である。それから、ケルジェンツェフの最近の本を基礎にしてもよい[83]。最後に、ほかにも、部分的な問題についての現存の参考書で、なにかの役に立つものがあるかもしれない。

文献の収集とこの問題の研究のために、素養のある誠実な人間を何人か、ドイツかイギリスに派遣すべきである。イギリスをあげたのは、アメリカやカナダへの派遣が不可能な場合を考えてのことである。

労農監督部職員の候補者ならびに中央統制委員の候補者の試験要綱の原案作成のための委員会を任命すべきである。

これらの活動やこれに類する活動は、もちろん、人民委員をも、労農監督部参与会をも、中央統制委員会幹部会をも、わずらわすことはないであろう。

これと平行して、中央統制委員の職務への候補者をさがす準備委員会を任命すべきである。いまでは、あらゆる官庁の経験ある職員のうちからも、またわがソヴェト諸学校の学生のうちからも、候補者を必要数以上に見つけられるだろうと思う。まえもってあれこれの部類を除外するのは、正しくあるまい。この機関では、多くの資質を組み合わせること、さまざまな長所を組み合わせることにつとめるべきであるから、その構成は、おそらく、多様なものとする道を選ぶべきであろう。だから、この点では、しばらくのあいだ候補者名簿作成の仕事にたずさわらなければならないであろう。たとえば、新しい人民委員部を一つの型にしたがって、たとえば官吏タイプの人間だけで構成したり、扇動家タイプの人間を除外したり、あるいは、社交性に長けている者や、この種の活動家にとってあまりなじみのない層のなかにはいってゆく能力の点ですぐれている者を除外したりするのは、なによりも望ましくないことであろう。

＊＊＊

私の案をアカデミー型の諸施設とくらべてみれば、私の考えがいちばんよく言いあらわされると思う。中央統制委員は、その幹部会の指導のもとに、政治局のあらゆる文書記録を検査するために系統的に活動しなければならないであろう。それとともに、彼らは、ごく小さい、部分的な国家機関から最高の国家機関にいたるまでのわれわれの諸機関の事務処理を点検するための個別的な活動に、自分の時間を正しく割りふらなければならないであろう。最後に、理論の研究、つまり、彼らがたずさわろうとしている活動の組織にかんする理論の研究と、古い同志なり、高等労働組織専門学校の教師なりの指導のもとでの実習が、彼らの仕事の一部となるであろう。

だが、彼らはこの種のアカデミーふうの活動だけにとどめることにはけっしてならないと思う。この種の活動とならんで、彼らは、ぺてん師とは言わないまでもぺてん師に類する連中をとっつかまえる訓練や、私が自分の企図や動きなどをつつみかくす特別な術策の工夫とよぶことをはばからない活動のための訓練を、つまなければならない。

このような提案は、西ヨーロッパの機関でなら、前代未聞の憤激や義憤の感情等々を呼びおこすであろうが、われわれはまだそんなまねをしでかすほど官僚化してはいないだろうと、私は思っている。わが国ではまだ、だれかがとっつかまえられるかもしれないという考えに腹を立てるほどに、ネップは尊敬をかちえてはいない。わが国では、ソヴェト共和国がまださきごろ建設されたばかりで、ありとあらゆるがらくたが山のように積もっているので、いくつ

かの術策を用い、ときにはかなりに遠い源まで、またかなりの回り道をして探査の手をのばせば、このがらくたのなかに掘出し物があるかもしれないという考えに腹を立てようとは、ほとんどだれひとり思いつく者はいないであろうし、またもし思いつく者がいれば、そのような人間をわれわれはみな心から嘲笑するだろうと、確信してよい。

フランス人が pruderie〔猫かぶり〕とよび、われわれが笑うべき気取りとか、笑うべきもったいぶりとかとよんでさしつかえない性質、すなわち、ソヴェト官僚も党官僚もふくめて、われわれの官僚全体にとってはなはだ好都合なこの性質を、われわれの新しい労農監督部が捨てさるものと、希望したい。ついでにいっておけば、われわれのところでは、官僚は、ソヴェト機関だけでなく、党機関にもいる。

私はさきほど、われわれは高等労働組織専門学校等々で学ぶうえにも学ばなければならないと書いたが、それはけっして、私がこの「学習」を多少とも学校ふうのものと理解しているとか、もっぱら学校ふうの学習についての考えを述べるにとどめたとかいう意味ではない。真の革命家なら、ここで私が「学習」ということばに、なにか冗談まじりの策略、なにかの術策、なにかの詭計、あるいはそれに類したものをふくめて解するのをこばんでいるなどという疑いを、私にかける者はだれもいないだろうと思う。西ヨーロッパのお上品な、まじめな国家では、こういう考えを聞いたらまったくおぞけをふるうことだろうし、ちゃんとした官吏のだれひとり、こういう考えを討議にかけることさえ承知する者はいないだろうことを、私は知っている。だが私は、われわれはまだそれほどまでに官僚化してはいないだろうし、われわれのところでこういう考えを討議しても、それは興を添えるだけだろうと思っている。

じっさい、なぜ愉快なことと有益なことを組み合わせてはいけないのか？　笑うべきもの、有害なもの、なかば笑うべきもの、なかば有害なもの等々の現場をおさえるために、冗談めいた策略や冗談まじりの策略を、なぜ用いてはいけないのか？

私の考えでは、こういう考えを取りあげて検討するならば、わが労農監督部はすくなからずうるところがあるだろうし、また、わが中央統制委員会や労農監督部のその同僚がおさめたいくつかのいちばんみごとな勝利の事例のリストは、わが未来の「労農監督部員」や「中央統制委員」が、お上品で四角ばった教科書に記載するにはかならずしも適しないような場所であげた功業によって、すくなからず豊富にされるであろう。

＊
＊＊

どうすれば党機関とソヴェト機関を結合することができるのか？　そこには、なにか許しえないものがありはしないか？

私は、この質問を自分の名で提出するわけではない。われわれのところでは官僚はソヴェト機関だけでなく、党機関にもいる、と述べたさいに、私が暗示しておいた連中の代理として、これを提出するのである。

じっさい、事業の利益がそれを要求しているとしたら、ソヴェト機関と党機関とを結合してなぜいけないのか？外務人民委員部のような人民委員部では、この種の結合が非常な利益をもたらしており、また当初から実行されてきたことに、全然気がつかなかった者が、はたしているだろうか？　外国の諸大国の「手」にこたえて、言ってみれば彼らの策略――もっと品の悪いことばをつかわないとすれば――を防ぐために、われわれの側で打つべき「手」についての大小数多くの問題が、政治局で党的見地から審議されてはいないか？　ソヴェト的なものと党的なものとをこのように柔軟に結合することは、われわれの政策の異常な力の源泉ではないだろうか？　私の考えでは、われわれの対外政策のなかでその正しさが実証され、根をおろし、すでに慣習となっており、この分野でなんの疑問もおこさなくなっているものは、われわれの国家機構全体にとってもすくなくとも同じくらいに適切であろう（それどころか、はるかにいっそう適切であろうと思う）。なぜといって、労農監督部はわれわれの国家機構全体の問題にたずさわるものであって、その活動は、すこしの例外もなくありとあらゆる国家機関に、地方機関にも、中央機関にも、商業機関にも、純行政機関にも、教育施設にも、文書保管施設にも、演劇施設その他にも――一言でいえば、いささかの例外もなくすべての機関に、関係するはずだからである。

このように広範な範囲にわたっており、そのうえさらに非常に柔軟な活動形態を必要とする機関について、なぜ、党統制機関とソヴェト統制機関との独特な融合を認めてはならないのか？

私には、この点にどんな障害も見いだせない。それどころか、私は、このような結合こそ順調な活動のただ一つの保障であると思う。この点についての疑念はすべて、われわれの国家機構の最も埃りっぽい片隅から生まれてくるのであって、これにたいしては、もっぱら嘲笑でこたえるべきだと思う。

**

もう一つの疑念は、教育活動と職務上の活動とを結合することが適当か、ということである。私には、適当なばかりか、そうしなければならないと思われる。一般的に言って、われわれは、西ヨーロッパの国家制度にたいしては革命的な態度をとっているにもかかわらず、これらの国家の多くの有害きわまる、滑稽きわまる偏見に、すでに感染してしまっている。いくぶんは、わが親愛な官僚諸君が、このような偏見を利用すれば何度か火事場泥棒がやれるだろうという思惑から、故意にわれわれにそういう偏見を感染させたのである。彼らはこれを利用してさんざん火事場泥棒をはたらいたので、この火事場泥棒がどんなに大がかりにやられたかに気づかなかった者は、われわれのうちのまったくの盲だけである。

社会的、経済的、政治的諸関係のすべての分野では、われわれは「おそろしく」革命的である。だが、上司への服従や、事務処理の形式や手続を守る面では、最もかびくさい因襲がわれわれの「革命性」にとってかわることがしばしばである。この点で、前方への大飛躍と、ごく些細な変化をもきらう驚くべき小心さとが社会生活のなかで結合しているという、きわめて興味ある現象がしばしば見られる。

それも当然である。なぜなら、最も大胆な前進がなされたのは、はるか昔から理論の領分となっていた分野においてであり、おもに、それどころか、ほとんどもっぱら理論的に開発されてきた分野においてだったからである。ロシア人はわが家のなかで、いとわしい官僚的現実の憂さばらしを、異常に大胆な理論構成に求めた。そこで、この異常に大胆な理論構成は、わが国では異常に一面的な性格をもつようになった。わが国では、一般的構成における理論的大胆さが、なにかごく些細な官庁的改革にたいする驚くべき小心さと同居していた。ある種の最大の世界的な土地革命が、他の国々では聞いたこともないほどの大胆さで展開されたが、その一方で、第十義的な官庁的改革をやるだけの想像力が足りなかった。一般的問題に適用されてあのように「輝かしい」成果をあげたその同じ一般的命題を、この改革に適用するだけの想像力が足りなかった、あるいはそうするだけの忍耐力が足りなかった。

だからこそ、われわれの今日の日常生活は、むこうみずな大胆さの特徴と、ごく些細な変化にたいする臆病な考えとを、驚くばかりに結び合わせている。

私は、およそ真に偉大な革命で、こういうふうでなかったものは一つもなかったと思う。なぜなら、真に偉大な革命は、古いものと、古いものを仕上げようとする志向と、

新しい――ぜひとも、古いものの一片だに残さないほどに新しい――ものを求めるきわめて抽象的な志向とのあいだの矛盾から生まれてくるものだからである。

この革命が急激であればあるほど、幾多のこのような矛盾が維持される期間は、それだけ長くつづくであろう。

＊＊

現在、われわれの生活の一般的特徴は次のようなものである。われわれは、資本主義的工業を破壊し、中世的諸制度や、地主的土地所有を徹底的に破壊することにつとめ、この基盤のうえに、プロレタリアートの革命的活動の結果を信頼するところから彼らのあとに従う小農民と零細農民をつくりだした。しかし、われわれがこの信頼にたよって、より発展した国々で社会主義革命が勝利するまでもちこたえるのは、たやすいことではない。なぜなら、小農民と零細農民は、とくにネップのもとでは、経済的必然性によって、労働生産性のごく低い水準にとどまるからである。そのうえ、国際情勢もまた、現在ロシアを後退させており、現在のわが国の国民労働の生産性を、全体として戦前よりもはるかに低いものにしている。西ヨーロッパの資本主義諸国は、なかばは意識的に、なかばはおのずから、われわれを後退させるため、ロシアの内戦の諸要素を利用してこの国をできるだけ荒廃させるために、できるだけのことをした。帝国主義戦争のまさにこうした結末こそ、きわめて有利だと考えられたことは、いうまでもない。ロシアの革命的制度をくつがえすことはできなくても、とにかく、この制度が社会主義に発展するのをじゃましよう――これらの国はおおよそこんなふうに考えたし、また彼らの見地からすれば、そうしか考えようがなかったのである。けっきょく、彼らは、彼らの任務をなかば解決することができた。彼らは、革命によってつくりだされた新しい制度をくつがえすことはできなかったが、この制度が、社会主義者の予言の正しさを証明するような前進――すなわち、非常な速さで生産力を発展させ、相合して社会主義を構成すべき諸条件をすべて発展させ、社会主義が巨大な力をひそめていること、いまや人類は異常に輝かしい展望をひらく新しい発展段階に移行したことを、万人にたいしてはっきりと、まざまざと証明する可能性を社会主義者にあたえるような前進――を、ただちになしとげることを許さなかった。

いまや国際関係の次のような体系ができあがっている。ヨーロッパでは、一つの国家が戦勝諸国家によって奴隷化されている。――それはドイツである。つぎに、いくつかの国家、しかも西欧の最も古い諸国家は、勝利のおかげで、またこの勝利を利用して、自国の被抑圧諸階級にいくつか

のささやかな譲歩――それでもやはり、それらの譲歩は、それらの国家の内部の革命運動を遅らせ、ある種の「社会平和」めいたものをつくりだしている――をおこなうことができる状態にある。

それと同時に、幾多の国々、東洋、インド、中国その他が、ほかならぬ最近の帝国主義戦争の結果、これまでの軌道から最後的にほうりだされた。これらの国の発展は、最後的に、一般ヨーロッパ的な資本主義的基準にそった方向をとった。これらの国では、一般ヨーロッパ的な発酵が始まった。そして、世界資本主義全体の危機にみちびかずにおかない発展にこれらの国が引きいれられたことは、いまや全世界の人々の目に明らかである。

こうして、われわれは現在次のような問題に当面している。すなわち、われわれの小農民的および零細農民的生産のもとで、今日の荒廃した状態のもとで、われわれははたして西ヨーロッパの資本主義諸国が社会主義への発展をなしとげるまでもちこたえることができるか、という問題である。だが、これらの国は、以前にわれわれが予想していたような仕方でその発展をなしとげつつあるのではない。これらの国は、そこで社会主義が均等に「成熟する」という仕方でその発展をなしとげつつあるのではなく、一部の国家が他の諸国家を搾取するという道によって、また、帝国主義戦争での戦敗国のうちの筆頭の国の搾取と、東洋全体の搾取とが結びつくという道によって、その発展をなしとげつつある。他方、東洋は、まさにこの最初の帝国主義戦争の結果として最後的に革命運動にはいりこみ、世界の革命運動の全般的な渦のなかに最後的に引きこまれた。

このような事態は、わが国にどのような戦術を指定しているであろうか？　明らかに、次のような戦術である。われわれの労働者権力を維持し、わが小農民と零細農民をこの権力の権威と指導に服させておくために、われわれは最大限の慎重さを発揮しなければならない。いまではすでに全世界が、世界社会主義革命を生みださずにはおかないような運動に移行しつつあること、これはわれわれにとってプラスの面である。他方、帝国主義者が全世界を二つの陣営に分裂させることに成功していること、これはわれわれにとってマイナスの面である。そのうえ、この分裂は、真に先進的、文化的な資本主義的発展をとげた国であるドイツの再起がいまやきわめて困難になっているという事情によって、いっそう複雑にされている。いわゆる西洋の資本主義諸国のすべてが、ドイツを食いものにし、その再起をはばんでいる。他方では、人間としてのどん底まで追いつめられた数億の被搾取勤労住民の住む全東洋は、それよりもはるかに小さい西ヨーロッパ諸国のどの一国の物理的、

物質的、軍事的な力とも全然くらべものにならないような物質的、物質的な力しかもたない状態におかれている。

われわれは、これらの帝国主義国家とのきたるべき衝突をまぬかれることができるだろうか？　西洋のさかえている帝国主義諸国家と、東洋のさかえている帝国主義諸国家とのあいだの内的矛盾と衝突が、第一回目と同じように、ふたたびわれわれに猶予をあたえてくれることを、われわれは望めるだろうか？　第一回目のときには、ロシアの反革命派の支持を目的とした西洋の反革命派の遠征は、西洋と東洋の反革命派の陣営、東洋の搾取者と西洋の搾取者の陣営、日本とアメリカの陣営の内部の矛盾のために挫折したのであった。

この問題には、次のように答えるべきだと思われる。すなわち、この場合、解決はあまりにも多くの事情にかかっているが、全体としての闘争の結末は、地球人口の大多数が、結局は資本主義そのものによって闘争へと訓練され、教育されるということにもとづいてのみ、予見することができる、と。

闘争の結末は、結局のところ、ロシア、インド、中国等が人口の大多数を占めていることにかかっている。ところが、まさにこの人口の多数者が、近年、異常な速さで自己の解放のための闘争に引きいれられつつあり、したがって、この意味で、世界的闘争の最後の決着がどうなるかについては、いささかの疑問もありえない。この意味で、社会主義の最後の勝利は、完全にまた無条件に保障されている。

だが、われわれの関心をひくのは、社会主義の最後の勝利が不可避だという、このことではない。われわれの関心をひくのは、西ヨーロッパの反革命的諸国家のためにわれわれが押しつぶされるのを防ぐために、われわれロシア共産党、われわれロシアのソヴェト権力がとらなければならない戦術である。反革命的な帝国主義的西洋と、革命的な民族主義的東洋とのあいだ、世界の最も文明的な諸国家と、東洋ふうに遅れてはいるが多数者をなしている諸国家とのあいだに、次の軍事的衝突が起こるまで、われわれの存立を確保するためには、この多数者はみずからを文明化することに成功しなければならない。われわれにとっても、直接に社会主義に移行するには、そのための政治的前提こそそなわっているとはいえ、やはり文明が不足している。われわれが救われるためには、われわれは次のような戦術を守るべきであり、あるいは次のような政策を採用すべきである。

われわれは、労働者が農民にたいする指導権を保持し、農民からよせられる信頼を維持し、徹底的な節約によって、

むだというむだをわが国の社会関係から跡かたもなく追放するような国家を建設することに、つとめなければならない。

われわれは、われわれの国家機構にできるかぎりの節約をさせなければならない。われわれは、帝政ロシアから、その官僚主義的＝資本主義的機構から引きついでわれわれの国家機構におびただしく残っているむだごとを、国家機構から跡かたもなく追放しなければならない。

そうすると、農民的な狭さの世界になりはしないだろうか？

そうはならない。もしわれわれが労働者階級の手に農民にたいする指導権を確保するならば、われわれは、わが国の経済をできるかぎり、徹底的に節約するという手段で、どんなにわずかな貯蓄もことごとく、われわれの機械制大工業を発展させ、電化、水圧泥炭採取を発展させ、ヴォルホフストロイ(一四〇)その他を建設しとげる目的にあてられるようにすることができるであろう。

ここに、ここにだけ、われわれの希望があるであろう。そのときにはじめて、われわれは、比喩的に言って一つの馬から別の馬に乗りかえることができるであろう。すなわち、農民的、百姓的な貧窮の馬から、荒廃した農民国向きの節約の馬から、プロレタリアートが自分のために探しもとめておりまた探しもとめざるをえない馬に、すなわち機械制大工業、電化、ヴォルホフストロイ、等々の馬に、乗りかえることができるであろう。

私は、われわれの活動、われわれの政策、われわれの戦術、われわれの戦略の全体的計画を、こういうふうに、改組された労農監督部の任務と結びつけて考えているのである。われわれが労農監督部を特別に高い地位にすえ、中央委員会の権限をもった首脳部をこれにあたえる、等々のことによって、労農監督部に特別の配慮、特別の注意をはらうことが正当である理由は、私の考えでは、まさにここにある。

これが正当である理由は、われわれの機構を徹底的に粛清することによってはじめて、この機構のなかで絶対に必要でないものはすべて徹底的に縮小することによってはじめて、われわれはきっともちこたえることができるであろう、という点にある。しかも、われわれは、小農民的な国の水準、この全般的な狭さの水準でもちこたえるのではなく、機械制大工業への前進をめざしてたえず高まってゆく水準で、もちこたえることができるであろう。

わが労農監督部のために私が夢みているのは、まさにこのような高い任務である。私が同部のために、最も権威ある党最高機関と「普通の」人民委員部とを融合させようと

計画しているのは、まさにこのためである。

一九二三年三月二日

『プラウダ』第四九号、一九二三年三月四日
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第四五巻、三八九―四〇六ページ所収
邦訳全集、第三三巻、五〇八―五二四ページ所収

事項注

（一）**共産主義（第三）インタナショナル**（略称、コミンテルン）——一九一九年三月に創立され、一九四三年六月まで存続した共産諸党の国際連合体。それは、第二インタナショナルの指導者たちの裏切りによって断ち切られた労働者の国際的連絡を回復し、また各国に共産党を創立し強化するうえに大きな役割を果たした。一九二〇年から一九二二年にかけて、その援助のもとに多くの国に共産党が創立された。

共産主義インタナショナルは、解散までに七回の大会と一三回の執行委員会総会または拡大総会をひらいた。

一九四三年に共産主義インタナショナル執行委員会幹部会は、各国共産党の同意をえて共産主義インタナショナルの解散の決定を採択した。それが解散されたのは、情勢が変化して、単一の中央部から国際共産主義運動を指導することができなくなったからである。共産主義インタナショナルの歴史的意義は、それが各国労働者の結びつきを回復強化し、第一次世界大戦後の新しい情勢のもとで労働運動の理論的諸問題を研究し、共産主義思想の宣伝扇動の一般原則を確立し、日和見主義による俗流化と歪曲からマルクス＝レーニン主義の学説を守りぬいたことにある。こうして、若い各国共産党が大衆的な労働者党に転化する条件がつくりだされた。

共産主義インタナショナル第二回大会——コミンテルンの綱領、戦術、組織上の基礎をすえた大会で、一九二〇年七月一九日から八月七日までひらかれた。大会はペトログラードで開会され、ついでモスクワに会場を移した。大会の討議には、三七ヵ国の共産党や労働者組織を代表する二〇〇名以上の代議員が参加した。

レーニンは大会の初日に、国際情勢とコミンテルンの基本的任務について報告した。レーニンはそれ以後の会議で、共産党の役割について演説し、民族問題と植民地問題について報告をおこない、議会主義その他の問題について演説し、大会の大部分の委員会の作業に積極的に参加した。

レーニンの『共産主義内の「左翼主義」小児病』の思想が、大会の諸決定の基礎とされた。レーニンの書いた『共産主義インタナショナル第二回大会の基本的任務についてのテーゼ』が、大会の第一議題についての決議として可決された。大会で審議された根本問題のひとつは、プロレタリア革命における共産党の役割、党と労働者階級との関係の問題であった。大会は、決議『プロレタリア革命における共産党の役割について』のなかで、共産党は労働者階級の解放の主要な武器であると指摘した。民族・植民地問題と農業問題についてのレーニンのテーゼは、大会の決議として可決された。

大会は、レーニンの作成した共産主義インタナショナルへの加入条件を採択したが、このことは、資本主義諸国の労働運動内に新しい型の党を創設し強化するうえで大きな意義をもっていた。

コミンテルン第二回大会は、国際共産主義運動の発展に大きな役割を果たした。

（二）**汎イスラム主義**——すべての回教（イスラム教）民族の統合を説く宗教的・政治的イデオロギー。一九世紀末に東洋諸国の搾取階級のあいだに広く普及し、「全正統派のカリフ（教主）」としてのトルコ皇帝に全世界の回教徒を服属させるために、トルコによって利用された。回教諸民族の支配階級は、汎イスラム主義の助けを

かりて地歩を強化し、東洋諸民族の勤労者の革命運動を圧殺しようとした。二

(三) ブレスト・リトフスク条約——ソヴェト・ロシアと、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、トルコ、ブルガリアとのあいだに結ばれた講和条約で、一九一八年三月三日にブレスト・リトフスクで調印された。この条約によって、ポーランド、バルト海沿岸地方のほとんど全部、ベロルシアの一部が、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの支配下におかれることになった。ウクライナも、ソヴェト・ロシアから分離されて、ドイツの従属国にされた。カルス、バトゥーム、アルダガンの三市がトルコによって奪われた。一九一八年八月、ドイツはソヴェト・ロシアに追加条約と金融協定を押しつけ、さらに略奪的な要求をもちだした。

ブレスト講和は、その締結に反対するトロツキーおよび「左翼共産主義者」との重大な党内闘争をつうじて、とくにレーニンの異常な努力によってはじめてかちとられたものであった。ブレスト講和の締結は、当時の困難な国内的・対外的条件のもとで、若いソヴェト権力がやむなくされた政治的妥協であった。それは、ソヴェト国家に息つぎの期間をあたえ、古い軍隊を復員して新しい赤軍を建設し、社会主義建設を開始し、国内の反革命派、干渉軍とたたかう力をたくわえることを可能にした。一九一八年の十一月革命でドイツの君主制が倒れたのち、全ロシア中央執行委員会は一一月一三日に同条約を破棄した。三

(四) 第二インタナショナル——一八八九年にパリの創立大会で設立された社会主義諸政党の国際連合体。一八九五年までエンゲルスの指導をうけ、マルクス主義を基礎とするプロレタリア組織として発展した。それはマルクス主義を普及させ、労働者階級の力を結集し、各国の労働者政党のあいだに連絡を確立した。この時期に、ヨーロッパ諸国の社会主義政党は大きな政治勢力となった。

エンゲルスの死後、第二インタナショナルの指導権は日和見主義者の手に移った。第二インタナショナルの幹部であった日和見主義者は、「労働貴族」の利益を代表して、ブルジョアジーの影響を国際労働運動のなかにもちこんだ。彼らは、資本主義制度の基礎に手をふれない改良のための闘争だけに、労働者階級を向かわせた。

第一次世界大戦が始まるとともに、社会主義諸政党の圧倒的多数の指導者は、公然と自国のブルジョアジーの側にはしり、第二インタナショナルは事実上崩壊した。戦時中、第二インタナショナルの諸党のなかには三つの潮流ができあがった。すなわち、右翼の公然たる社会排外主義者（プレハーノフ、シャイデマン、レンナー、ヴァンデルヴェルデ）、「中央派」（カウツキー、トロツキー、マルトフ、ヴィクトル・アードラー）、一貫した反戦の立場をとっていたボリシェヴィキ党を中心とする国際主義派の三つである。リープクネヒトを先頭とするドイツの左派、ブルガリアのテスニャキなどが、ボリシェヴィキに同調した。ボリシェヴィキは、共産主義（第三）インタナショナルの創設をめざして断固たる闘争をおこなった。

戦後、右翼社会民主主義者は、労働者階級のいっそうの革命化を阻止しようとして、第二インタナショナルの復活にとりかかった。一九一九年、ベルンでひらかれた社会民主主義諸党の会議で第二インタナショナルは復活され、一九二三年には、中央派のいわゆる第二半インタナショナル（注一五を参照）がこれに合流した。戦後の第二インタナショナルは、プロレタリア革命にたいする闘争、なによりも社会主義の国ソ連邦にたいする闘争を主要な目的とした。四

(五) 校正刷でレーニンは、「二と三を一つにすること」として、

両項目を括弧でくくっている。なお、カーンは回教国の君主、ムラーは回教の聖職者。一五

（六）『農業問題についてのテーゼ原案』は、共産主義インタナショナル執行委員会のテーゼとしてコミンテルン第二回大会に提出され、農業問題についての決議の基礎として採択され、決議案起草委員会に回付された。起草委員会はレーニンの指導のもとに作業をすすめ、テーゼ原案に一連の修正をくわえた。テーゼは八月四日に大会で採択された。一七

（七）　ユ・マルフレフスキーの論文『農業問題と世界革命』をさす。この論文は『コムニスチーチェスキー・インテルナツィオナール』一九二〇年七月二〇日付、第一二号に掲載された。一七

（八）　ドイツの「独立派」——一九一七年四月にゴータの創立大会で結成されたドイツ独立社会民主党をさす。「独立派」は中央派的言辞にかくれて、社会排外主義者との統一を説き、階級闘争を放棄する立場に転落した。党の主要部分をなしていたのは、カウツキー派の国会グループ「社会民主主義有志団」であった。

一九二〇年一〇月のハレ党大会で分裂が起こり、一二月には「独立派」のかなりの部分がドイツ共産党と合同した。右派は別の党を結成し、従来の名を採用して、一九二二年まで存続していた。

イギリスの「独立派」——一八九三年に「新労働組合」の指導者たちが創立した改良主義的なイギリス独立労働党をさす。キア・ハーディ、ラムゼイ・マクドナルドがその指導者。独立労働党は、主として議会的闘争形態や自由党との議会取引に注意をはらった。

ロンゲ派——ジャン・ロンゲを指導者とするフランス社会党内の中央派的潮流。第一次世界大戦中、ロンゲ派は社会排外主義者にたいして妥協政策をとった。十月革命後、ロンゲ派は、口先ではプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を支持すると称しながら、実際にはそれに反対しつづけた。一九二〇年一二月、ロンゲ派は公然たる改良主義者とともに脱党し、いわゆる第二半インタナショナルに加盟した。二五

（九）『共産主義インタナショナルへの加入条件』——コミンテルン第二回大会のためにレーニンの書いたテーゼ『共産主義インタナショナルへの加入条件』は、はじめ一九条からなっていたが、レーニンは一九二〇年七月二五日に新たに追加の第二〇条を書いて、大会の小委員会に提出した（本書、三三ページを参照）。大会は、多少の修正をくわえて、二一条からなる加入条件を採択した。二七

（一〇）　共産主義インタナショナル（コミンテルン）第一回大会——一九一九年三月二—六日にモスクワでひらかれた。

大会には、三〇ヵ国の共産主義者と左派社会主義者の政党、グループ、団体から五二名の代議員が出席し、そのうち三四名は議決権をもつ代議員、一八名は評議権をもつ代議員であった。

レーニンが開会の辞を述べた。各地の報告につづいて、共産主義インタナショナルの政綱が審議され、採択された。大会の主要な議題は、ブルジョア民主主義とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の問題であった。レーニンは、一九一九年三月四日、この問題について報告し、大会は全員一致でレーニンのテーゼを承認した。同じ日、大会は共産主義（第三）インタナショナル創立の決定を採択した。コミンテルン第一回大会は、全世界のプロレタリアへの宣言、その他一連の決議と決定を採択し、二つの指導機関——執行委員会と、その互選による五名からなるビューロー——を設置することを決定した。二七

（一一）　一九一九年三月二一日、ハンガリーにソヴェト共和国が宣言された。ハンガリーの社会主義革命は比較的平和的におこなわれた。革命運動を鎮圧する力もなく、対外的な難局をきりぬける力も

なかったハンガリー・ブルジョアジーは、権力を右派社会民主主義者に引き渡すことにきめた。しかし、共産主義者との同盟を求める一般社会民主党員の要求が非常に強かったので、社会民主党の指導部は、逮捕されていた共産党の指導者たちに共同で政府を組織することを申し入れた。社会民主党の指導者は、ソヴェト政府の組織、ブルジョアジーの武装解除、赤軍と民兵の創設、地主の土地の没収、工業の国有化、ソヴェト・ロシアとの同盟の締結など、共産主義者の提出した条件を受けいれざるをえなかった。同時に、両党が合同してハンガリー社会党を結成する協定も調印された。両党の合同のさいに誤りがおかされ、それがのちに禍因を残した。日和見主義的分子を除かずに、機械的な合体によって合同がおこなわれた。

革命政府は赤軍の創設を決定し、工業企業、交通機関、銀行の国有化についての布告を公布し、外国貿易の独占を布告し、労働者の賃金を平均二五%引き上げ、八時間労働日を実施した。しかし、四月二日に可決された農地改革法によると、面積一〇〇ホルド（五七ヘクタール）以上の領地はすべて没収され、大規模な国営農場とされるが、事実上は同じ管理者の手に残されることになっていた。ソヴェト権力の手から土地を受け取れると思っていた貧農は、期待を裏切られた。このことは、プロレタリアートと農民の強固な同盟の確立を妨げ、ハンガリーのソヴェト権力を弱めた。

一九一九年八月一日、外国の干渉軍と国内の反革命派によってソヴェト権力は打倒された。[六]

（二）黄色労働組合のアムステルダム・インタナショナル（国際労働組合連盟）——一九一九年七月二六日から八月二日までアムステルダムにひらかれた一四ヵ国の改良主義的労働組合の会議で創立された。同インタナショナルは、イギリスとフランスの反動的労働組合指導者によって牛耳られ、その全活動は、第二インタナショナルの日和見主義諸党の政策と結びついていた。それは、プロレタリアートとブルジョアジーの協調を主張し、労働者階級の革命的な闘争形態を排撃し、帝国主義諸政府の反ソ政策を支持した。アムステルダム・インタナショナルの指導者たちは、左翼労働組合を加盟労働組合連合から除名し、赤色労働組合インタナショナルの側からなされた資本攻勢、戦争の危険、反動、ファシズムに反対する共同闘争の提案や、世界の労働組合の統一にかんする提案をすべて拒否した。

アムステルダム・インタナショナルは、第二次世界大戦中にその活動を停止した。[三]

（三）当時準備中であった赤色労働組合インタナショナルをさす。赤色労働組合インタナショナル（プロフィンテルン）——一九二一年に創立され、各国の革命的な全国労働組合連合、個々の組合、および改良主義的労働組合内の少数派運動や反対派運動の組織を結集していた。それは、帝国主義と改良主義に反対して労働者の利益のために精力的に活動し、また国際労働組合運動の統一の樹立をめざしてたたかった。プロフィンテルンは、産業別労働組合の原則を実現し、植民地半植民地諸国に労働組合運動を組織し、アナルコ・サンディカリズム的傾向を克服するうえで功績があった。一九三八年はじめ、労働者統一戦線の実現を促進するために自発的に解散した。[三]

（四）全集、第三一巻、一七六—一九三ページを参照。[三四]

（五）「第二半インタナショナル」（正式の名称は「社会主義政党国際連合」）——革命的大衆におされて第二インタナショナルを脱退した中央派的な社会主義政党・政派によって、一九二一年二月に

ウィーンの会議で創立された国際組織。第二半インタナショナルの指導者たちは、口さきでは第二インタナショナルを批判しながら、実際にはプロレタリア運動のあらゆる重要問題について労働者階級のなかで日和見主義的な分裂政策をすすめ、共産主義者の労働者大衆におよぼす影響の増大を阻止することにつとめた。

一九二三年五月、第二インタナショナルと第二半インタナショナルは合同して、いわゆる社会主義労働者インタナショナルをつくった。四二

(一六)　ウィルソンの「一四ヵ条」――アメリカ大統領ウィルソンが、ソヴェト・ロシアの講和提議に対抗して提出した、対ドイツ講和条約と戦後国際関係の形成をめざす要求。そのおもなねらいは、アメリカ独占資本にとって有利な関係を設定し、イギリスの制海権を弱めることにあった。一九一八年にドイツはこれを交渉の基礎とすることを承認したが、他の国々は同意しなかった。四二

(一七)　「ギルド」社会主義――第一次世界大戦の前後に発生したイギリス労働組合内の改良主義的潮流。国家の階級性を否定し、階級闘争ぬきで搾取から解放されるという幻想を労働者のあいだにふりまき、現在の労働組合をもとにして特殊な生産者団体「ギルド」をつくり、ギルド連合体に産業経営をゆだねることを説いた。こうした方法によって、社会主義社会を徐々につくりだそうというのであった。二〇年代に、「ギルド社会主義」は労働者階級のあいだですっかり影響力をなくした。五〇

(一八)　民族・植民地問題委員会――コミンテルン第二回大会でつくられたもの。委員会の作業を指導したのは、レーニンであった。委員会は民族問題と植民地問題についてのレーニンのテーゼを審議した。このテーゼは、七月二六日に大会の審議にかけられた。そのほか、M・N・ロイから提出された補足テーゼも、民族・植民地問題委員会と大会の全体会議で審議された。五三

(一九)　イギリス社会党――一九一一年に社会民主党とその他の社会主義グループとが合同して、マンチェスターで創立された。社会党は、マルクス主義の精神で扇動をおこない、「日和見主義的な党ではなく、実際に自由主義者から独立している」(レーニン)党であった。イギリス社会党は十月革命を歓迎した。同党の党員は、外国の武力干渉からソヴェト・ロシアを守るイギリス勤労者の運動で大きな役割を果たした。イギリス社会党は、共産主義統一グループとともに、イギリス共産党の結成に主要な役割を果たした。一九二〇年にひらかれた第一回合同大会で、社会党地方組織の圧倒的多数が共産党にくわわった。五三

(二〇)　ジンゴイズム――侵略的、帝国主義的な政策を説く好戦的排外主義。露土戦争(一八七七―七八年)当時に流行したイギリスの対露強硬政策をうたった俗歌に出てくる by jingo という掛け声から。五三

(二一)　バーゼル宣言――一九一二年一一月二四―二五日にバーゼルでひらかれた国際社会主義者臨時大会で採択された『戦争にかんする宣言』のこと。宣言は、せまりくる帝国主義世界戦争の脅威について諸国民に警告し、この戦争の略奪的目的をあばき、各国の労働者に、平和のために断固たたかい「資本主義的帝国主義にプロレタリアートの国際連帯を対置する」よう呼びかけていた。バーゼル宣言は、帝国主義戦争が起こったなら社会主義者は戦争によって生じた政治的・経済的危機を利用して社会主義革命のためにたたかうべきだという、シュトゥットガルト大会(一九〇七年)の決議中のレーニンによって定式化された一項をふくんでいた。五三

（三二） 憲法制定議会——一九一七年のロシアの二月革命で成立したブルジョア的臨時政府は、一九一七年三月二（一五）日の宣言で、憲法制定議会を招集することを明らかにした。しかし、臨時政府は憲法制定議会の選挙を二回にわたって延期し、結局、一一月一二（二五）日におこなうことにきめた。

選挙は、十月革命の勝利後に、予定どおり一九一七年一一月一二（二五）日におこなわれた。選挙は、十月革命前に作成された名簿により、臨時政府の承認した規則によって実施され、しかも人民の大部分がまだ社会主義革命の意義を理解するひまのない状況のもとで実施された。これにつけこんだエス・エル右派は、首都や工業中心地から遠く離れた県や地方で、過半数の票を獲得することができた。憲法制定議会は、ソヴェト政府によって招集され、一九一八年一月五（一八）日にペトログラードでひらかれた。憲法制定議会の反革命的多数派は、全ロシア中央執行委員会から提出された『勤労被搾取人民の権利の宣言』を否決し、ソヴェト権力の承認を拒否した。全ロシア中央執行委員会の布告により、一月六（一九）日、ブルジョア的な憲法制定議会は解散された。五七

（三三） サンディカリスト（アナルコ―サンディカリスト）——サンディカリズムは、労働組合運動内の小ブルジョア的・日和見主義的潮流で、イデオロギー的に無政府主義の影響下にあった。一九世紀末に生まれ、二〇世紀はじめにフランス、イタリア、スペイン、スイスおよびラテン・アメリカ諸国で最も発展した。

サンディカリストは、労働者の政治闘争の必要、労働者階級の独自の政党の必要、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を否認していた。彼らの考えでは、労働者階級の最高の組織形態は労働組合で、労働者階級の利益に合致する唯一の闘争は経済闘争なのである。彼らの推奨する闘争方法は、経済的ボイコット、サボタージュ、ストライキである。サンディカリストは、プロレタリアートが国家権力を掌握しないでも、経済的ゼネストによって、労働組合が生産手段を収奪し、新しい社会を建設することができると主張した。五七

（三四） イギリス共産党の労働党への加入の問題は、コミンテルン第二回大会の閉会前日（八月六日）の最後の会議でコミンテルンの基本的任務についてのレーニンのテーゼが審議されたさいに解決された。レーニンの発言のあとで、大会は共産党の労働党への加入を、賛成五八、反対二四、棄権二で可決した。しかし、労働党はイギリス共産党を自分の組織内に受けいれることを拒否した。

（三五） イギリス労働党——議会内に労働者の代表団をつくる目的で、労働組合、社会主義団体およびグループの合同体（「労働者代表委員会」）として、一九〇〇年に創立された。委員会は一九〇六年に労働党と改称された。労働党は、労働者からなる政党として発足した（その後、小ブルジョア分子が大量に入党した）が、イデオロギーと戦術の点では日和見主義的な組織である。党の創立以来、幹部はブルジョアジーとの階級協調の政策をとっている。第一次世界大戦では、指導者（アーサー・ヘンダソンなど）は社会排外主義の立場をとって、入閣した。彼らの積極的な支持のもとに、一連の反労働者法（国の軍事化などについての法律）が可決された。五九

（三六） 『ザ・コール』（『呼びかけ』）——イギリス社会党の機関紙。同党の国際主義的な左翼によって一九一六年二月にロンドンで創刊され、一九二〇年七月まで発行されていた。六三

（三七） 職場世話役委員会（Shop Stewards Committees）——第一次大戦中にイギリスの一連の産業部門に広く普及した労働者の選出した代表組織。協調主義的労働組合が「国内平和」の政策をと

り、ストライキ闘争を拒否していたのに反し、この委員会は、労働者大衆の利益と要求を守り、労働者のストライキを指導し、反戦宣伝をおこなった。職場世話役は工場委員会、地区委員会、市委員会に統合されていた。一九一六年には、職場世話役委員会と労働者委員会の全国組織が結成された。

外国の武力干渉の時期に、職場世話役委員会はソヴェト・ロシア支持の積極的な行動をとった。ウィリアム・ギャラチャー、ハリ・ポリット、アーサー・マクマナスその他の活動家は、イギリス共産党に入党した。六四

(二七)『オーストリアの共産主義者への手紙』は、オーストリア共産党が国会選挙のボイコットを決定したのに関連して書かれた。一九二〇年九月一日に招集された同党全国協議会は、国会選挙に参加する決定を採択した。党は、労働者階級の革命的統一というスローガンをかかげて選挙戦にのぞんだ。六五

(二八) ロシア共産青年同盟第三回全ロシア大会――一九二〇年一〇月二―一〇日にモスクワでひらかれ、約六〇〇名の代議員が出席した。議題は、(一) 共和国の軍事情勢と経済情勢、(二) 共産主義青年インタナショナル、(三) ロシア共産青年同盟中央委員会の活動報告、(四) 青年の社会主義的教育、(五) 民兵軍と青年の体育、(六) 青年同盟の綱領、(七) 青年同盟の規約、(八) 青年同盟中央委員会の選挙であった。レーニンは一〇月二日の午後の第一回会議で演説した。

青年同盟第三回大会は、レーニンの指示にもとづいて、綱領で次のように強調した。「ロシア共産青年同盟の基本的任務は、理論上の啓蒙と勤労大衆の生活、労働、闘争および建設への積極的な参加とを堅く結びつけて、勤労青年を共産主義的に教育することにある。ロシア共産青年同盟のあらゆる分野での実際活動全体は、社会主義経済の精力的で有能な建設者、ソヴェト共和国の防衛者、新しい社会の組織者を育成する共産主義的青年教育の任務に従属させられなければならない」。六六

(二九) 一九一八年一一月にドイツ帝国主義が崩壊したのち、イギリス、フランス、アメリカ合衆国、日本等の協商国帝国主義者は、ソヴェト共和国にたいする公然たる軍事干渉を開始した。それと同時に、帝国主義者は、エス・エルとメンシェヴィキを積極的な手先として、国内の反革命派への援助を強化した。シベリアでは、一九一八年一一月にイギリスの干渉軍が提督コルチャックを「最高統治者」に押し立てた。コルチャックは、すべての反ソヴェト勢力を糾合し、富農の支持に依拠してシベリアで地歩を固め、またウラルとその工業を手中におさめた。南部では、協商国は、デニーキン将軍を総指揮官として、ドン・カザック軍と白衛派の志願軍を統合させ、これに装備や弾薬を供給し、軍事顧問を派遣した。

一九一九年三月、ソヴェト国家の軍事情勢はきわめて緊張したものとなった。コルチャック軍は、東部戦線でソヴェト軍の前線を突破し、ヴォルガに向かって進出した。南部ではデニーキン軍がドンバスの一部を奪取し、ソヴェトの国はその石炭基地を失った。五月にはユデーニチ将軍がペトログラードめざして攻勢を開始した。協商国によって編成されたポーランド軍が、リトアニアとベロルシアに侵入した。北方からも、バルト海沿岸地方でも、干渉軍と白衛軍が攻撃してきた。反革命の全兵力が攻勢に転じたのである。

干渉と内戦の開始以来、ロシア共産党、労働者階級、人民大衆は、レーニンの指導のもとに、全力をふりむけて内外の敵と戦い、社会主義祖国の防衛にあたった。この目的のために国の工業と全資源が

動員された。二万人をこえる共産党員、三〇〇〇人以上の共産青年同盟員、六万人以上の労働組合員が戦線に派遣された。労働者階級は、党中央委員会の呼びかけにこたえて、大衆的な労働英雄主義を発揮した。銃後の労働者のこの英雄的労働のおかげで、赤軍にすべての必要物資、まず第一に兵器弾薬が保障された。赤軍は東部で反攻に転じ、一九一九年の夏までに主要な危険としてのコルチャック軍の脅威は解消させられた。（八二）

（三〇）『プラウダ』の一九二〇年一〇月七日付、第二二三号所載のテキストでは、「すべての青年」のかわりに「一二歳以上の人々」となっている。（八三）

（三一）一九二〇年一〇月五日から一二日までモスクワでひらかれたプロレトクリト第一回全ロシア大会に関連して書かれたもの。レーニンの直接の指示にしたがって、大会の共産党代議員団は、中央でも地方でもプロレトクリトを教育人民委員部の機関に従属させるという組織決議案を採択するよう提案し、この決議案は、プロレトクリト大会で全員一致で採択された。大会後、プロレトクリトの一部指導者は、この決議に不同意を表明しはじめ、その意味をゆがめてプロレトクリトの一般会員に伝え、党中央委員会が芸術創作の分野で労働者の自主活動を制限し、プロレトクリトの組織を一掃しようとしていると見せかけようとした。

プロレトクリト——一九一七年九月に独立の労働者団体として生まれ、十月革命後もその「独立性」を固執してプロレタリア国家に対立した。プロレトクリト派は、事実上過去の文化遺産の意義を否定し、大衆的な文化啓蒙活動の任務と一線を画し、実生活から遊離して「実験室のやり方」で独特な「プロレタリア文化」をつくりだそうとした。プロレトクリトの主要な思想的代表者ア・ボグダーノフは、口さきではマルクス主義を認めていたが、実際には主観的観念論、マッハ主義の哲学を説いていた。プロレトクリトの組織は一九一九年に最大の発展をとげ、二〇年代のはじめから衰退にむかい、一九三二年には消滅した。（八四）

（三二）『イズヴェスチヤ』——『ペトログラード労働者・兵士代表ソヴェト通報』として、一九一七年二月二八日（三月一三日）に発刊された日刊新聞。第一回全ロシア・ソヴェト大会で労働者・兵士代表ソヴェト中央執行委員会が成立してからは、その機関紙となった。第二回全ロシア・ソヴェト大会後、同紙はソヴェト権力の公式の機関紙となった。（八四）

（三三）県および郡国民教育部政治教育委員全ロシア会議——一九二〇年一一月二—八日にモスクワでひらかれた。会議には二八三名の代議員が出席した。会議の中心議題は、共和国政治教育本部の設立にともなう諸問題であった。食糧カンパニアと政治教育活動、国内経済生活の復興にともなう生産宣伝、文盲の一掃、その他の問題も、会議の議題になった。

政治教育本部は、政治教育・扇動宣伝活動全体を統合し、成人の大衆的共産主義教育（文盲撲滅、学校、クラブ、図書館、読書室）と党教育（共産主義高等専門学校、党学校）を指導していた。その責任者はクルプスカヤであった。一九三〇年六月、政治教育本部は改組されて教育人民委員部の大衆活動部となった。（八六）

（三四）エス・エル（社会革命党）——一九〇一年末から一九〇二年はじめにかけて、さまざまなナロードニキ的グループおよびサークルの合同によって成立した小ブルジョア政党。エス・エルの見解は、ナロードニキ主義の思想と修正主義の思想との折衷的混合物であった。

ボリシェヴィキ党は、エス・エルが社会主義者の仮面をかぶろうとするのを暴露し、農民にたいする影響力をめぐって彼らとねばりづよくたたかい、個人的テロルという彼らの戦術が労働運動に有害なことを明らかにした。第一次世界大戦中、エス・エルの大多数は社会排外主義の立場をとった。二月革命ののち、エス・エルはカデットおよびメンシェヴィキとともに、ブルジョア的臨時政府の主要な支柱となった。

十月革命後、エス・エル党の左派は、一九一七年一一月末に、独立の左派エス・エルの党を結成した。左派エス・エルは農民のあいだに影響力を維持しようとして、ソヴェト権力を形式的に承認し、ボリシェヴィキと協定を結んだが、まもなくソヴェト権力にたいする闘争を始めた。外国の武力干渉と内戦の時期には、エス・エルは反革命的破壊活動をおこなった。内戦が終わってから、エス・エルは国内でも亡命地でも、ソヴェト国家にたいする敵対活動をつづけた。八九

(三三)『労働組合について、現在の情勢について、同志トロツキーの誤りについて』——一九二〇年一二月三〇日ボリショイ劇場でレーニンがおこなったこの演説は、社会主義建設のもとにおける労働組合の役割と任務についての討論に関連して、レーニンが党活動家のまえでおこなった最初の演説であった。

この討論と党の方針に反対する闘争の音頭をとったのは、トロツキーで、他の反党グループ「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」、「緩衝派」、がこれに追随した。はじめにトロツキーは、一一月三日、第五回労働組合全ロシア会議の共産党グループ会議で、労働組合内に民主主義の原則を発展させることをめざす党の方針に反対する演説をおこなって、「戦時共産主義のねじをしめあげよ」と呼びかけた。意見の相違の要点は、「大衆に近づき、大衆を把握し、大衆と結びつく方法の問題」についての不一致にあり、実質上、労働組合の役割の問題の範囲をこえて、ロシアにおけるプロレタリア執権(ディクタツーラ)の運命にかかわるものであった。党グループ内に生まれた意見の相違は、党中央委員会総会の審議に移された。しかし、一二月二四日にトロツキーは、労働組合運動の活動家および第八回全ロシア・ソヴェト大会代議員の会議で演説し、また一二月二五日には、自分のテーゼを小冊子として発行したが、これによって討論は拡大し、中央委員会の外部にひろがった。

レーニンは、この討論は経済的崩壊や飢えとたたかうという緊急の経済的任務から党勢力の注意をそらすものだと考えたので、全党的討論の開始に反対した。しかし、反対派がその分派活動を開始したとき、レーニンは彼らにたいする断固たる闘争をおこない、反党グループの中心勢力であるトロツキー派に主要な打撃をくわえた。あいついでおこなったいくつかの演説や、論文『党の危機』(全集、第三二巻、三一—四二ページ)、『ふたたび労働組合について、現在の情勢について、同志トロツキーと同志ブハーリンの誤りについて』において、レーニンは、党内闘争の真の意味を明らかにし、党の統一を破壊する反対派の行動の分派的性格を暴露し、彼らが押しつけた討論の有害さを示した。それと同時に、レーニンは、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の体系のなかでの労働組合の役割、社会主義建設のもとでのその任務と活動方法について、いくつかのきわめて重要な原則的命題を提出し、発展させた。

労働組合についての討論は二ヵ月余を要した。討論の過程で、圧倒的多数の党組織はレーニンを中心に団結し、反対派は完全な敗北をこうむった。討論の総括は、一九二一年三月の第一〇回党大会で

おこなわれた。九六

（三六）　一九二〇年七—八月の共産主義インタナショナル第二回大会で採択された『プロレタリア革命における共産党の役割について』の決議をさす。その第五項には次のように述べられている。「共産主義インタナショナルは、プロレタリアートが自己の独自の政党をもたずにその革命を遂行できるかのようにいう見解を、断固として排撃する。すべての階級闘争は政治闘争である。この闘争は不可避的に内乱に転化するが、この闘争の目標は政治権力の獲得にある。だが、政治権力は、なんらかの政党によらなければ、これを奪取し、組織し、指導することはできない。」九七

（三七）　ここでレーニンが言っているのは、ロシア共産党（ボ）第九回大会の決議『経済建設の当面の任務について』と『労働組合とその組織の問題について』のことである。

ロシア共産党（ボ）第九回大会——一九二〇年三月二九日から四月五日までモスクワでひらかれた。大会の議題は、（一）中央委員会の報告、（二）経済建設の当面の任務、（三）労働組合運動、（四）組織問題、（五）コミンテルンの任務、（六）協同組合にたいする態度、（七）民兵制度への移行、（八）中央委員の選挙などであった。

この大会での大きな問題は、経済建設の問題であった。大会は、経済復興の最も重要な条件は、単一経済計画を極力実行に移すことであるとし、そのために運輸、食糧、肥料、工業の分野での当面の課題をさだめた。とくに大きな注意が払われたのは、単一経済計画のなかで最も大きな地位を占める全国民経済の電化の問題であった。

大会はまた、熟練労働者の動員、労働義務制の導入、経済の軍事化、経済上の課題遂行のための勤労軍としての軍隊の使用をさだめた党中央委員会のテーゼを承認した。経済目的のために軍隊を使用することは、当時の情勢からみてやむをえない一時的措置であった。トロツキーは、勤労軍こそ国民経済のために労働力を確保する唯一最良の手段であるとし、平和な経済建設に軍隊式の方法をもちこむことを主張した。しかし、大会は、軍隊を勤労軍として使用するのは、軍本来の任務の遂行を妨げない範囲内でのみ認められることを強調して、トロツキーの提案を否決した。

大会では、経済建設に労働組合の全活動をふりむける見地から、労働組合の問題が大いに論じられた。大会は、その決定のなかで、労働組合の役割、労働組合と国家および党との相互関係、労働組合にたいする党の指導の形態と方法、経済建設への労働組合の参加の形態を明確に規定した。大会は、労働組合の「独立性」を主張し、労働組合を党とソヴェト権力に対立させようとしたアナルコ・サンディカリスト分子（シリャプニコフ、ロゾフスキー、トムスキー、ルトヴィーノフ）に徹底的な打撃をくわえた。

この大会は、党の注意を経済的荒廃の克服、国民経済復興の課題の実践的解決にむけた点で大きな意義をもつ大会であった。九八

（三八）　スモーリヌィ——ペテルブルグにあった貴族女学校の建物。一九一七年八—九月のコルニーロフ反乱が鎮圧されたのち、ボリシェヴィキ党中央委員会がここにおかれた。一〇月には、レーニンはここから武装蜂起を指導した。一九一八年三月にモスクワに首都が移されるまで、ソヴェト政府と党中央諸機関の事務所がここにおかれた。九九

（三九）　第八回全ロシア・ソヴェト大会をさす。

第八回全ロシア・ソヴェト大会——一九二〇年一二月二二—二九日にモスクワでひらかれた。大会には二五三七名の代議員が出席した。大会は、外国干渉軍と国内の反革命勢力にたいする戦争が勝利

に終わり、経済戦線が「最も主要な、最も基本的なものとして」現われた時期にひらかれた。議題は、全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の活動についての報告、ロシアの電化についての報告、工業および運輸の復興についての報告、農業生産の発展と農民経営にたいする援助についての報告、ソヴェト機関の活動改善および官僚主義との闘争についての報告であった。

　全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の活動についてのレーニンの報告にもとづいて、大会は、政府の活動を承認する決議を圧倒的多数で採択した。反ソ宣言をもちだした小ブルジョア政党の代表たちがその決議案を押しとおそうとする試みは、大会の代議員から一斉に反撃された。大会は、レーニンの発意と指示で作成された国土電化計画（ゴエルロ計画）を採択した。これはソヴェト国家の最初の国民経済長期計画であって、レーニンはこれを「第二の党綱領」と呼んだ。大会はまた、農民経営強化発展法案、全ソヴェト機関の改善および改組についての決定、新しい労働国防会議条例を採択し、労働赤旗勲章を制定した。一〇一

（四〇）彼の演説のこの箇所について、レーニンは、論文『党の危機』のなかで、次のような補足をおこなっている。

「一二月三〇日の討論について述べる場合、私はもう一つの私の誤りを訂正しなければならない。私は次のように言った。『わが国の国家は、実際には、労働者国家ではなくて、労働者・農民国家である』と。同志ブハーリンはすぐさま『どんな国家だって？』と叫んだ。そして、私は彼への答えとして、そのとき閉会したばかりの第八回ソヴェト大会を引合いにだした。いま、討論の報告を読んでみて、私は自分がまちがっていて、同志ブハーリンが正しかったことがわかった。私は次のように言うべきであった。『労働者国家とは抽象である。だが、実際にわれわれがもっているのは、第一に、労働者人口ではなく農民人口が国内で優勢であるという特殊性をもった労働者国家であり、第二に、官僚主義的にゆがめられている労働者国家である』と。私の演説の全文を読む気のある読者は、このように訂正しても、私の論証の道すじも私の結論もすこしも変わらないことが、おわかりであろう。」（全集、第三二巻、三六—三七ページ）一〇一

（四一）『共産主義のABC』の筆者は、ブハーリンとプレオブラジェンスキーであった。一〇一

（四二）一九二〇年九月のロシア共産党（ボ）第九回全国協議会で採択された決議『党建設の当面の任務について』をさす。

　ロシア共産党（ボ）第九回全国協議会——一九二〇年九月二二—二五日にモスクワでひらかれた。協議会の議題は、（一）ポーランド共産主義者代表の報告、（二）中央委員会の政治報告、（三）中央委員会の組織報告、（四）党建設の当面の任務、（五）党史研究委員会の報告、（六）コミンテルン第二回大会についての報告であった。

　協議会の最も重要な問題は、党建設の当面の任務にかんする問題であった。協議会に先だち、九月はじめ中央委員会は全党組織に通達を出して、当時一連の党組織に不健全な現象が見られること、すなわちソヴェト機関や経済機関で指導的地位を占めている党員のなかに、官僚主義とたたかおうとせず、自分の地位を悪用する者がいて、党組織や労働者大衆から遊離する傾向があることを指摘した。党の地方組織はそれぞれ集会をひらいてこの通達を討議し、代議員をつうじて協議会にこの欠陥の是正策を提案していた。協議会で党建設の任務を審議するにあたって、反党グループ「民主主義的中央集権派」は、サプローノフを報告者に立てて、党規律の問題や、ソ

ヴェトと労働組合における共産党の指導的役割について、党中央に反対の意見を述べた。協議会は、「民主主義的中央集権派」に断固たる反撃をくわえ、『党建設の当面の任務について』の決議を採択し、そのなかで、党内民主主義の展開、党の統一と党規律の強化、ソヴェト機関や経済機関における官僚主義との闘争、新入党員の共産主義教育の強化についての一連の具体的な措置を定めた。全集、第四二巻、二七〇—二七八ページを参照。一〇四

(四三) 七人組と八人組——党中央委員会一一月総会および一二月総会における決議案への投票の配分をさす。一一月総会は、労働組合問題を審議したのち、レーニンのテーゼを八対四で採択し、トロツキーのテーゼを七対八で否決した。一二月総会では、水運従業員とツェクトランの紛争についての労働組合問題委員会の報告を聴取したのち、ブハーリンの決議案を八対七で採択した。

「緩衝派」——一九二〇—一九二一年の労働組合問題の討論のときに生まれた分派のひとつで、グループの指導者は、エヌ・イ・ブハーリン、イェ・ア・プレオブラジェンスキー、エリ・ペ・セレブリャコーフ、その他であった。この派は、トロツキー主義とレーニン主義を和解させ、二つの政綱の衝突を緩和する「緩衝器」の役割を果たそうとして、「緩衝派」と自称したが、実質的にはトロツキー派を擁護し、レーニンと党の政策とにたいする彼らの闘争を助けた。まもなくブハーリン派はトロツキー派と公然と連合した。一〇五

(四四) 国防会議(労農国防会議)——前線と銃後における技術活動全体——軍隊の組織の補充、前線への糧食・被服・軍需品の補給、この目的のための国の全資源の動員——を指導するために、一九一八年一一月三〇日に全ロシア中央執行委員会によって設置された。すでに九月二日の全ロシア中央執行委員会令で、国防会議の議長にはレーニンが任命された。一九二〇年四月はじめ、国防会議は労農国防会議に改組され、一九三六年末まで存続した。一〇六

(四五) 最高国民経済会議——社会主義的国民経済の計画化と運営をおこなう最初のプロレタリア的機関。一九一七年一二月五(一八)日に公布された布告で、人民委員会議のもとに設置された。最高国民経済会議の任務は国民経済と国家財政を計画的に組織することであった。革命の初期における最高国民経済会議の実際活動のプログラムとなったのは、レーニンの『銀行国有の実施とこれに関連する必要な措置にかんする布告案』(全集、第二六巻、四〇一—四〇四ページ)であった。ソヴェト経済の発展にともない、最高国民経済会議の活動の作業量、機能および性格は、社会主義建設の新しい課題におうじて変化した。一〇六

(四六) レーニンの提唱で、全ロシア労働組合中央評議会に付属してつくられた生産宣伝ロシア・ビューローのこと。

一九二〇年末に内戦でのソヴェト政府の軍事的勝利が決定されたことに関連して、活動の重点を軍事から経済建設の分野に移す必要が生じた。生産宣伝は、労働者農民大衆のあいだにこの転換を呼びおこすためのものであって、生産の分野での仕事を正しく組織し、大衆に管理の訓練をあたえ、大衆のあいだから有能な組織者、行政官、発明家を登用し、技術教育を組織し、模範企業の経験を普及する、などを内容としていた。レーニン『生産宣伝についてのテーゼ(下書き)』、全集、第三一巻、四〇六—四〇八ページを参照。一〇八

(四七) 同志規律裁判所——生産規律を向上させる目的で、一九一九年一一月一四日付の人民委員会議令で設置されたもので、各地の労働組合のもとに、工場管理部の代表一名、労働組合の代表一名、企業の従業員総会の選出代表一名で構成された。同志規律裁判所は、

規律違反者にたいして、六ヵ月未満の期間で労働組合の役職の選挙権と被選挙権の剝奪、一ヵ月未満の期間で地位の降等などの処罰を科することができ、また頑強な規律服従拒否者を解雇することもできた。一〇九

(四八) 第九回党大会で採択された『労働組合とその組織の問題にかんする決議』の第二節(一)に、次のように述べられている。「政治は経済の最も集中的な表現であり、またその概括および完成である。したがって、労働者階級の経済組織としての労働組合を、その政治組織としてのソヴェトに対立させて考えることは、総じて愚かなことであり、マルクス主義から、ブルジョア的偏見、とくにブルジョア組合主義的偏見への偏向である。」一一〇

(四九) レーニン『第八回全ロシア・ソヴェト大会。人民委員会議の活動についての報告』、全集、第三一巻、五〇四―五〇七ページを参照。一一〇

(五〇) **グラヴポリトプーチ(交通人民委員部総政治部)**――党中央委員会の直接指導のもとに活動する臨時の政治機関として一九一九年二月に設置され、一九二〇年一月に交通人民委員部総政治部に改組された。グラヴポリトプーチが設置されたのは、内戦による運輸の全面的崩壊を阻止するための緊急措置をとり、運輸労働者のあいだでの党活動、政治活動の指導を強化し、鉄道従業員組合を強固にし、これを運輸のいっそうの発展の道具に変えるためであった。グラヴポリトプーチの応急的な活動方法は、運輸を崩壊から救うことを可能にする一方、官僚主義を強化し、大衆から遊離する傾向、労働組合内での民主的な活動方法を拒否する傾向をも生みだした。一九二〇年一二月七日付の党中央委員会総会の決定によって、グラヴポリトプーチは、廃止された。一一三

(五一) **ツェクトラン(鉄道・水運従業員合同労働組合中央委員会)**――一九二〇年九月に創立された。ツェクトランは、運輸の復興のために大きな活動を果したが、その後、組合員大衆から遊離した官僚的機関に変質してしまった。ツェクトランの指導部をにぎったトロツキー派がさかんに植えつけた官僚主義、行政命令一点ばりの方法、任命主義は、労働者を党に反抗させ、運輸従業員の隊列を分裂させた。一九二〇年一一月八日と一二月七日にひらかれた党中央委員会総会は、ツェクトランを他の労働組合と同一の権利にもとづいて全ロシア労働組合中央評議会の活動の一般的体系のなかに編入することを決定し、また組合内民主主義を拡大する方向でその活動方法を変更すべきことを、ツェクトランに勧告した。一九二一年三月に招集された第一回運輸労働者全ロシア大会は、トロツキー派をツェクトランの指導部から追放して、新しい活動方法をさだめた。一一三

(五二) 一九二〇年一一月の党中央委員会総会の労働組合問題についての決議の第五項からの引用。一一三

(五三) **グラヴポリトヴォード(交通人民委員部水運政治部)**――一九二〇年四月に交通人民委員部中央政治局の一部門として設置され、同年一二月に廃止された。一一三

(五四) **労働組合問題委員会**――一九二〇年一一月八―九日の中央委員会総会で、労働組合の諸問題を詳細に検討するために、ジノヴィエフ、トムスキー、トロツキー、ルズタークおよびルィコフの五名からなる労働組合問題委員会が選出され、第五回労働組合会議の党グループから、アンドレーエフ、シリャプニコフ、ロゾフスキー、ルトヴィーノフがこれにくわえられた。しかし、トロツキーはこの委員会への参加を拒否した。一一三

（三五）水運従業員との決裂――一九二〇年七月にツェクヴォード（水運従業員中央委員会）の党グループ・ビューローは、ポリトヴォードの官僚主義的ひきまわしに反対する申入れを党中央委員会におこなった。一二月はじめにひらかれたツェクトランの会議で、水運従業員は一連の要求を提出したが、トロツキーの影響のもとにあった会議多数派は、この要求の審議を拒否して、水運従業員を「同職組合精神」におかされているといって非難した。そこで、水運従業員の代表は会議を退席した。鉄道従業員の一部も水運従業員を支持して、政治部の解散と組合民主主義への移行を要求したので、大きな分裂が起こるおそれが生じた。この問題は一二月七日の中央委員会総会で審議された。総会では、ブハーリンの決議案が八対七で採択されたが、これは中途半端なものであったから、紛争を解決することはできなかった。一二四

（三六）第五回労働組合全ロシア会議――一九二〇年一一月二―六日にモスクワでひらかれた。平和な社会主義建設の任務におうじて、労働組合の活動を改善し、その組織および活動の民主主義的原則を展開するという問題が提起された。一一月三日の共産党グループ会議で、トロツキーが新しい活動方法への移行に反対した。彼は、労働組合の即時の国家機関化を要求し、労働組合のなかで指揮命令の軍事的方法を適用することを主張した。党内討論の口火をきったトロツキーの演説は、党代議員の反撃をうけた。労働組合の生産上の任務について報告したのはルズタークであった。会議は彼の提出したテーゼを採択したが、このテーゼは、生産の発展における労働組合の役割を高め、その活動における民主主義の原則を拡大し、党による労働組合運動の指導を強化する必要を示したものであった。一二五

（三七）労働組合経済部――一九二〇年の第三回労働組合全ロシア大会の決定で設置された機関。経済部の任務は、労働者の賃率の決定と報奨、生産および管理の問題の決定への参加、経済計画や生産計画の作成への参加、労働の組織、食糧人民委員部の配給機関や労働者配給委員会への参加、などであった。一二六

（三八）『ふたたび労働組合について、現在の情勢について、同志トロツキーと同志ブハーリンの誤りについて』――この小冊子を、レーニンは一九二一年一月二一日か二二日に休養先のゴールキで書きはじめた。労作は一月二五日にできあがり、一月二六日の深夜、労働組合の役割と任務についての討論に参加するため地方に出かけてゆく中央委員たちに配布された。一三〇

（三九）「ペトログラード組織の発言」というのは、一九二一年一月三日にひらかれたペトログラード党組織の活動者会議で採択された『党へのアピール』のこと。このアピールは、レーニンの政綱を擁護するジノヴィエフの報告と、「緩衝派」のブハーリンの副報告とを聴取したのち、圧倒的多数で可決されたもので、トロツキーの政綱小冊子について次のように述べていた。「同志トロツキーのグループは共産主義の学校としての労働組合の機能を忘れている。同志トロツキーと彼のグループは、労働組合を上からゆすぶり、事実上、労働組合をあやうく破壊するところまでいっている。せいぜいよくいって、労働組合問題における同志トロツキーの立場は、レーニンの正しい表現によれば、『労働組合の官僚主義的引きまわし』である。」ペトログラード組織のアピールは、一月一九日にモスクワ党委員会ビューローの会議で討議され、会議は一四対一三でトロツキーの決議を採択した。レーニンが「モスクワ委員会の反駁」と言っているのはこの決議のことで、それは、ペトログラードのアピ

ールに不同意を表明し、中央委員会に、この問題についての必要な討論資料の全部を全党に提供するよう要求したものであった。一三〇

(六〇)『ペトログラーツカヤ・プラウダ』——一九一八年四月二日に創刊された日刊新聞。はじめはロシア共産党中央委員会およびペトログラード委員会の機関紙であったが、同年六月から中央委員会、北部地方・ペトログラード市委員会の機関紙となり、のちにペトログラード県および市委員会機関紙に変わった。一九二四年一月に『レニングラーツカヤ・プラウダ』と改称された。一三〇

(六一)『プラウダ』——ソ連邦共産党中央委員会機関紙。はじめボリシェヴィキの最初の日刊新聞として、一九一二年五月五日にペテルブルグで創刊され、一九一八年三月以降モスクワで発行されている。一三〇

(六二)本書、九六ページを参照。一三〇

(六三)本書、九六—九八ページを参照。一三五

(六四)『労働組合の役割と任務の問題にかんするロシア共産党第一〇回大会決定草案』(「一〇人の政綱」)——一連の中央委員および中央委員会付属労働組合問題委員会委員のグループによってつくられ、一九二一年一月一四日に発表されたもので、反党諸グループの政綱に対抗するレーニンの政綱であった。この文書では、内戦の終結と平和な社会主義建設への移行にともない国の当面した新しい任務におうじて、労働組合の役割が規定されていた。労働組合に管理の学校、経営の学校という役割があたえられた。その主要な機能は、国家の統治に参加し、ソヴェト機関と経済機関のために幹部を養成し、労働規律の確立のためにたたかうことであった。教育と説得の方法、組合内での民主主義の原則の広範な展開が、労働組合の活動の基礎となるべきであると規定されていた。「一〇人の政綱」は、労働組合問題の討論中に大多数の地方党組織から支持され、第一〇回党大会で採択された労働組合の役割と任務についての決定の基礎とされた。一三九

(六五)一九二〇年五月三日付のヴェ・イ・ゾフの指令は、『マリインスキー州水運管理部通報』の第五号に発表された。それには次のように書かれていた。「こうして、水運の生活に決定的な転換がおこなわれる。手工業性、委員会ざた、非組織性、無機能の状態は、今後はなくなって、水運事業は国家事業となる。それは、しかるべき全権をもった政府委員によって統率される。技術問題や行政問題に容喙する委員会、労働組合、選出代表たちの権能は廃止される。」この指令は、トロツキー派のツェクトラン指導部が植えつけた露骨な行政処理の方法と官僚主義の見本であった。一三〇

(六六)本書、一一五—一一八ページ、および全集、第三一巻、三六ページを参照。一三三

(六七)本書、一〇六—一〇八ページを参照。一三七

(六八)労農監督部(略称ラブクリン)——ソヴェト機関、経済機関、企業の監督方法の指導、事務処理の改善をつかさどる人民委員部。一九一八年一月に国家監督人民委員部として設置され、一九二〇年二月に労働者統制機関を合併して労農監督部となった。一四八

(六九)第二回鉱山労働者全ロシア大会——一九二一年一月二五日から二月一日までひらかれた。この大会に先だち(一月二二—二四日に)、共産党グループ会議が四回ひらかれた。レーニンは、一月二三日のグループ会議で労働組合の役割と任務について報告し、一月二四日の会議で報告の結語を述べた(全集、第三二巻、四三—五四、五五—六〇ページを参照)。レーニンの擁護する政綱には一三七名が、シリャプニコフのテーゼには六一名が、トロツキーのテー

ぜには八名が、それぞれ賛成票を投じた。一五三

（七〇）一九二〇年一二月二四日の労働組合活動家および第八回ロシア・ソヴェト大会代議員の合同会議でトロツキーがおこなった「生産における労働組合の任務について」の報告からの引用。この演説は、労働組合問題をめぐる党内の公開討論の口火を切ったものであった。一五四

（七一）「労働者反対派」――ア・ゲ・シリャプニコフ、エス・ペ・メドヴェーデフ、ア・エム・コロンタイ、イ・イ・クトゥーゾフ、ユ・ハ・ルトヴィーノフ、その他からなる分派。一九二〇年九月の第九回党全国協議会にはじめて登場し、一一月には分派闘争にのりだし、党モスクワ県会議で独自の会議をひらいた。一九二〇―一九二一年の労働組合討論の過程で最終的に形成された。その見解は、党内のアナルコ・サンディカリズム的偏向を示すもので、第一〇回党大会の直前に発行されたコロンタイの小冊子『労働者反対派』のなかに最も完全に述べられていた。反対派は、産業別労働組合に統合された「生産者の全ロシア大会」に全国民経済の管理をゆだね、これらの産業別労働組合が全国民経済の管理にあたる中央機関を選出するよう提案した。反対派は、各労働組合だけがすべての国民経済管理機関を選出し、しかも組合の推薦候補を党機関やソヴェト機関は忌避しえないようにすることを要求した。これらの要求は、社会主義建設における党の指導的役割、主要な武器としてのプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）を否定することを意味していた。「労働者反対派」は、労働組合をソヴェト国家と共産党に対立させ、党ではなく労働組合が労働者階級の最高の組織形態であると考えていた。党内問題についての「労働者反対派」の政綱は、「党員大衆からの遊離」とか、「プロレタリアートの創造力の軽視」とか、「党の上層部の変質」とかいう非難を、党指導部にくわえていた。

第一〇回党大会は、「労働者反対派」の見解に大打撃をくわえた。大会は、レーニンから提出された『わが党内のサンディカリズム的および無政府主義的偏向について』の決議のなかで、「労働者反対派」の思想を宣伝することは、共産党に所属することとあいいれないと認めた（本書、一六六ページを参照）。しかし、シリャプニコフとメドヴェーデフを先頭とする反対派の一部は、非合法の分派組織を温存して反党宣伝をつづけた。一九二二年二月、彼らは党非難を内容とする『二二名の声明』をコミンテルン執行委員会に送った。『二二名の声明』を研究したコミンテルン執行委員会は、このグループの活動をきびしく非難した。第一一回党大会は、『二二名の声明』を審査する特別委員会を設けた。委員会の報告にもとづいて、大会は決議を採択し、「労働者反対派」の指導者（シリャプニコフ、メドヴェーデフ、コロンタイ）の反党行為を非難し、彼らが分派活動を再開するなら党から除名する、と警告した。一五五

（七二）第一〇回党大会――一九二一年三月八―一六日にモスクワでひらかれ、七三万二五二一名の党員を代表する議決権をもつ代議員六九四名、評議権をもつ代議員二九六名が出席した。大会の議題は、（一）中央委員会の活動報告、（二）統制委員会の報告、（三）労働組合と国の経済生活におけるその役割、（四）資本主義に包囲された社会主義共和国、外国貿易、利権、その他、（五）食糧業務、食糧の割当徴発、食糧税について、燃料危機の問題、（六）党建設の諸問題、（七）民族問題における党の当面の任務、（八）軍の改編と民警の問題、（九）政治教育と党の扇動・宣伝活動、（一〇）ロシア共産党のコミンテルン派遣代表の報告とその当面の任務、（一一）ロシア共産党の国際労働組合会議派遣代表の報告、（一二）中央委

員会、統制委員会、審査委員会の選挙。レーニンは開会の辞と閉会の辞を述べ、中央委員会の政治活動、割当徴発を現物税に代えること、党の統一とアナルコ－サンディカリズム的偏向、労働組合、燃料問題について報告した。レーニンはまた、大会の重要決議の草案を起草した。中央委員会の活動についての報告と、食糧の割当徴発を現物税に代えることについての報告とのなかで、レーニンは、理論と政策の両面から、ネップ（新経済政策）に移行する必要を基礎づけた。レーニンの報告にもとづいて、大会は、食糧の割当徴発を現物税に代えること、また戦時共産主義から新経済政策に移行することについての諸決定を採択した。

大会は党の統一の問題に特別の注意をはらい、レーニンの提案にもとづいて決議『党の統一について』が、採択された。大会は決議『党建設の諸問題について』のなかで、党内民主主義を拡大し、きわめて広範な民主主義にもとづいて党活動を改善する措置をさだめた。大会の議事で重要な地位を占めていたのは、経済建設に果たす労働組合の役割の問題であった。大会は、労働組合問題の討論を総括して、トロツキー派、ブハーリン派、「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」、その他のグループの見解を非難し、圧倒的多数でレーニンの政綱を承認した。この政綱では、共産主義の学校としての労働組合の役割が規定され、労働組合民主主義を拡大する措置が提起されていた。大会は、民族問題についての決定のなかで、かつての被抑圧民族の事実上の不平等を完全に一掃し、彼らを社会主義建設に積極的に参加させるという任務をかかげた。大会は、民族問題における反党的な偏向――大国的排外主義と地方的民族主義――を非難した。大会はレーニンをはじめとする二五名の中央委員を選出した。一六〇

（七三）　モスクワの党会議――一九二〇年一一月二〇―二二日にひらかれたモスクワ県党会議のこと。この会議は、労働組合論争のただなかでひらかれ、反対派諸グループからモスクワ党委員会の活動にたいして激しい批判がくわえられた。会議のあいだに、「労働者反対派」、イグナートフ派は自派の同調者だけの私的な会議をたびたびもち、モスクワ党委員会の決議案に対抗して、両派の共同決議案を提出したが、一六三票対一一五票で破れた。モスクワ党委員会の選挙については、イグナートフ派、「労働者反対派」は別個の会議で候補者をきめ、「民主主義的中央集権派」とも手を結んだが、このブロックの候補者名簿は一二四票、党政治局の推薦による候補者名簿は一五四票を得た。

ハリコフの党会議――一九二〇年一一月にハリコフでひらかれた第五回全ウクライナ党会議。この会議では、三一六名の代議員中二三名、すなわち七％が「労働者反対派」の政綱に賛成投票した。一六〇

（七四）　「民主主義的中央集権派」――エム・エス・ボグスラフスキー、ア・ゼ・カーメンスキー、ヴェ・エヌ・マクシモフスキー、エヌ・オシンスキー（ヴェ・ヴェ・オボレンスキー）、テ・ヴェ・サプローノフ、ヴェ・エム・スミルノーフ、その他からなる反対派。第八回党大会ではじめて姿をあらわした。第九回党大会では、同派は経済建設の問題と組織問題とについて自派の副報告者を立てた。一九二〇―一九二一年の労働組合問題の討論中、この派は分派的な政綱を発表した。第一〇回党大会では、同派のマクシモフスキーが副報告者となった。「民主主義的中央集権派」は、ソヴェトおよび労働組合における党の指導的役割を否定し、企業指導の単独責任制と個人責任制に反対し、組織問題についてのレーニンの原則に反対し、分派とグループの自由を要求した。この派は党員大衆のあいだに影

響力をもっていなかった。

一九二三年、「民主主義的中央集権派」は崩壊し、その指導者たちはトロッキー反対派とブロックを結んだ。一六〇

(七五) クロンシタットの暴動――白衛派、エス・エル、メンシェヴィキ、無政府主義者、帝国主義諸国の手先が一九二一年二月二八日にクロンシタットでおこした反革命的暴動をさす。そこには、階級敵の新戦術が現われていた。彼らは、「共産党員ぬきのソヴェト」というスローガンで、資本主義復活の意図をごまかそうと試みた。反革命派の意図は、ソヴェトの指導から共産党員を遠ざけ、ブルジョアジーの独裁を打ち立て、資本主義制度を復活させることであった。三月一八日、反乱は完全に一掃された。一六〇

(七六) 本書、一六三―一六六ページを参照。一六三

(七七) 決議の第七項は、大会の決定により、その当時は公表されず、一九二四年一月の第一三回党協議会で公表され、同協議会の通報に発表された。一六三

(七八) ここで「要素」、また「自然発生性」と訳した原語 стихия(スチヒーヤ)は、元来は「元素」「四大」「自然力」の意であるが、転じて「自然発生性」、または「自然発生性を特徴とする社会集団」(つまり、盲目的に行動し、組織や指揮に服しない階層)の意に用いられる。あとにあげた意味の場合、適当な邦語がないので、英仏独の各国語訳(element)にならい、かりに「要素」としたが、右の意味であることをおことわりしておく。一六三

(七九) 本書、一六三ページを参照。一六七

(八〇) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起原』、全集、第二一巻、一七二ページを参照。一六七

(八一) ドイツ共産主義労働者党――一九一九年のハイデルベルク大会でドイツ共産党から除名された小ブルジョア的、アナルコ・サンディカリスト的な「左派」が一九二〇年四月に結成した党。一九二〇年一一月、ドイツの全共産主義勢力の統一を助け、同党内のすぐれたプロレタリア分子をむかえいれるために、準加盟組織の資格で一時コミンテルンに加入を認められた。しかし、コミンテルン執行委員会は、ドイツ統一共産党をドイツの唯一の完全な権利をもつ支部と考えていた。共産主義労働者党のコミンテルン加入のさい、同党は統一共産党と合同し、統一共産党のすべての行動を支持すること、という条件が、同党の代表に示され、またコミンテルン第三回大会は、同党が二―三ヵ月以内に大会を招集して合同問題を解決すべきことを決定した。共産主義労働者党の指導部は第三回大会の決定を実行せず、分裂活動をつづけたので、コミンテルン執行委員会はやむなく同党と手を切った。その後、共産主義労働者党は、労働者階級のなかに支柱をもたずドイツの労働者階級に敵対する、とるにたりないセクトになってしまった。一六九

(八二) これは、一九二〇年八月四日にコミンテルン第二回大会で採択された農業問題についての決議をさしている。一七〇

(八三) レーニンは、労作『食糧税について』の執筆を一九二一年三月末に始め、四月二一日に終えた。これは、五月上旬、単行の小冊子として発行され、まもなく雑誌『クラースナヤ・ノーフィ』(『赤い処女地』)第一号に掲載され、ついで多くの都市で再版され、中央や地方の新聞雑誌に転載された。小冊子は、一九二一年中にドイツ語、英語、フランス語に翻訳された。

党中央委員会は特別決定によって、勤労者に新経済政策の本質と意義を説明するためにレーニンの小冊子を利用するよう、党のあらゆる委員会に命じた。一七四

(八四)　本選集、第八巻、二八三—三〇九ページを参照。一七四

(八五)　ヒュドラ——ギリシア語で「水蛇」の意。しかし、とくにギリシア神話の英雄ヘラクレスに退治された不死の怪物、レルネの九頭のヒュドラをさす。一七六

(八六)　『ノーヴァヤ・ジーズニ』(『新生活』)と『フペリョード』(『前進』)——ともに一九一七—一九一八年に出ていたメンシェヴィキの日刊新聞で、反革命的活動のかどでソヴェト権力によって閉鎖された。一八〇

(八七)　マルクス『ゴータ綱領批判』、マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、二一ページを参照。一八〇

(八八)　本選集、第七巻、三〇一—三〇二ページを参照。一八〇

(八九)　ここにふれられているマルクスのことばについては、エンゲルス『フランスとドイツの農民問題』、全集、第二二巻、四九九ページを参照。一八一

(九〇)　箱のなかの男——チェーホフの同名の短篇小説中の人物。新しいものを恐れて、生活から離れている硬直した人物。一八三

(九一)　プーシキンの詩『英雄』のなかのことば。一九二

(九二)　オブローモフ——ゴンチャロフの同名の小説の主人公。ものぐさで、停滞的で、惰性にはまりこんだ人物の形象。一九三

(九三)　ロシア電化国家委員会で立案されたロシア共和国電化計画をさす。一九三

(九四)　ロシア共産党(ボ)第八回大会——一九一九年三月一八日から二三日までモスクワでひらかれた。大会には、三一万三七六六名の党員を代表する議決権をもった代議員三〇一名、評議権をもった代議員一〇二名が参加した。大会の議題は、中央委員会の報告、党綱領、共産主義インタナショナルの創立、軍事情勢と軍事政策、農村における活動、組織問題、中央委員会の選挙、などであった。

レーニンは開会と閉会の辞を述べ、中央委員会の報告、党綱領についての報告、農村における活動についての報告をおこない、軍事問題について演説した。

大会の中心問題は新しい党綱領の審議と採択であった。新しい綱領草案は、第七回党大会で選出されたレーニンを長とする綱領起草委員会が起草した。綱領草案の主要な部分は、すべてレーニンが書いた(全集、第二九巻、八五—一二六ページを参照)。新しい綱領は、資本主義から社会主義への全過渡期における党の諸任務を規定していた。中農にたいする態度の問題は、大会の最も重要な問題のひとつであった。中農がソヴェト権力の側に転換しはじめた一九一八年秋、レーニンは、この転換を確保し、中農の中立化から、貧農に依拠して富農とたたかい、プロレタリアートの指導的役割を保持しながら中農との強固な同盟に移る必要がある、と指摘した。第八回党大会は、この政策を承認した。

大会は、組織問題についての決議のなかで、プロレタリアートの執権(ディクタトゥーラ)のもとでの党の指導的役割を否定したサプローノフ＝オシンスキー一派に反撃をくわえた。党建設についての決定では、労働者農民以外の分子の入党条件を厳格にし、党の社会構成を悪化させないようにする必要が強調された。一九一九年五月一日までに全党員の再登録をおこなうことが決定された。

第八回党大会は、国内の少数民族地域での共産党の結成に関連して、連合制的党組織の原則を拒否し、単一の中央集権的な共産党の必要を認め、各民族ソヴェト共和国の党中央委員会が地方委員会の権限をもって、ロシア共産党(ボ)中央委員会に下属することを決定した。

大会は、共産主義インタナショナルの創立を歓迎し、その政綱に全面的に同意した。一九四

(九五) 県経済会議――労働国防会議の地方機関で、第八回全ロシア・ソヴェト大会(一九二〇年一二月)の決定『地方経済管理機関について』にもとづいて設置された。県経済会議が県執行委員会に付設されたのは、最高国民経済会議、農業、食糧、労働、財務の各人民委員部の地方機関の活動を調整するためであった。県経済会議の長は、県執行委員会議長であった。一九七

(九六) クスターリ――市場めあての家内生産に従事している農民出身の手工業者のこと。通常は農業からまだ分化していない。一九七

(九七) コルニーロフ反乱――一九一七年八月に起こったブルジョア・地主の反革命的反乱。反乱の先頭に立ったのは、ツァーリの将軍で最高総司令官のコルニーロフであった。陰謀者一味のねらいは、ペトログラードを占領し、ボリシェヴィキ党を粉砕し、ソヴェトを解散させ、国内に軍事独裁を打ち立て、帝政の復活を準備することにあった。臨時政府の首相ケーレンスキーも陰謀に参加したが、反乱が始まると、自分がコルニーロフもろとも一掃されることを恐れて、彼と手を切り、彼を臨時政府にたいする反乱者と宣告した。

反乱は八月二五日(九月七日)に開始された。コルニーロフは第三騎兵軍団をペトログラードに進撃させた。しかし、反乱は、ボリシェヴィキ党に指導される労働者、農民によって鎮圧された。大衆の圧力に押されて、臨時政府はやむなく、コルニーロフ一味を逮捕して、反乱のかどで裁判にかける命令を出した。一九九

(九八) カデット(立憲民主党)――ロシアの自由主義的=君主主義的ブルジョアジーの主要な政党。一九〇五年一〇月に創立された。十月革命が勝利したのち、カデットは、ソヴェト権力のあいいれない敵となり、あらゆる反革命的武装行動と干渉軍の軍事行動に参加した。干渉軍と白衛軍が撃破されたのち、カデットの党員たちは亡命したが、その反ソ・反革命活動をやめなかった。二〇一

(九九) エリ・マルトフの創刊した亡命メンシェヴィキの雑誌『ソツィアリスチーチェスキー・ヴェーストニク』(『社会民主主義時報』)をさす。一九二一年から、はじめベルリンで、のちパリで発行されていた。二〇三

(一〇〇) ナルキッソス――ギリシア神話のなかの美少年。水面に移った自分の姿に見とれ、それに恋し、望みの達せられないまま命を失って、同名の花、すなわち水仙に化した。うぬぼれの典型とされる。二〇三

(一〇一) 本書、一七七ページを参照。二〇四

(一〇二) 共産主義インタナショナル第三回大会――一九二一年六月二二日―七月一二日にモスクワでひらかれ、五二ヵ国、一〇三団体の代議員六〇五名(議決権をもつ者二九一名、評議権をもつ者三一四名)が参加した。大会は世界経済恐慌の問題、共産主義インタナショナルの新しい任務の問題を審議した。またコミンテルン執行委員会の活動報告、ドイツ共産主義労働者党についての報告、イタリア問題、共産主義インタナショナルの戦術、国際赤色労働組合評議会と共産主義インタナショナルとの関係、アムステルダム・インタナショナルにたいする闘争、ロシア共産党(ボ)の戦術、共産主義インタナショナルと共産主義青年運動、婦人運動、ドイツ統一共産党、その他の問題が審議された。

レーニンは大会の準備と開催の全活動を指導し、大会の名誉議長に選ばれた。大会の主要な決定は、すべてレーニンの直接の参加のもとに作成された。レーニンは大会の席上でロシア共産党(ボ)の

戦術について報告し、共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説をおこない、イタリア問題について演説し、また大会のいろいろな小委員会、コミンテルン執行委員会拡大会議、大会代議員の会議で演説した。大会前と大会中、レーニンは各国の代表団と会見し、各国共産党の内部事情について話し合った。

第三回大会は、若い各国共産党の成立と発展に大きな役割を果たした。大会の主要な注意は、世界共産主義運動の新しい発展条件におうじてコミンテルンの戦術を立て、その組織をつくりあげることに集中された。レーニンは、中央派の危険にたいする闘争とともに、「左翼」教条主義、えせ革命的な極左的空文句およびセクト主義との闘争にも多大の注意をはらった。

第三回大会は、各国共産党の戦術の基礎をきずいた大会、大衆をプロレタリアートの側に獲得し、労働者階級の統一を打ち立て、統一戦線の戦術を実際に実行する任務をかかげた大会であった。大会の諸決定の重点は、「防衛戦であれ攻撃戦であれ、新しい、ますます決定的な戦闘の準備を、いっそう慎重に、いっそう堅実にととのえることと」であった（全集、第三二巻、五六一ページ）。

ロシア共産党の戦術についてのレーニンの報告は、大会で、アナルコ・サンディカリズム的な動揺分子の反対に出あった。彼らは、ネップがソヴェト・ロシアに資本主義を復活させ、世界革命の発展を阻止すると述べた。大会はこれらの見解を否認し、レーニンのテーゼと、ロシア共産党（ボ）の政策を全面的に承認する決議とを採択した。二〇九

（一〇三） 一九一九年四月一三日、パンジャーブ州の工業中心地アムリツァルでひらかれた、植民地主義者のテロルに抗議する大衆集会が、イギリス軍の発砲をうけた。その結果、約一〇〇〇人が殺され、約二〇〇〇人が負傷した。アムリツァルの殺戮に抗議して、パンジャーブ州に人民蜂起が起こり、騒擾はインドの他の地方にも波及した。パンジャーブ州の蜂起はイギリス軍によって残虐に鎮圧された。二一〇

（一〇四） 第八回全ロシア電気技術者大会――一九二一年一〇月一日から九日までモスクワでひらかれ、ロシアの一〇二の都市の代議員八九三名と来賓四七五名が参加した。そのなかには科学者、経営担当者、専門家、電気工業企業の多数の労働者代表がいた。大会は、ロシア共和国の総合電化計画、国内各地の電化、農村への電力供給、金属工業の課題、石油産業の電化にともなう同産業の向上、電気技術の知識の普及、その他の問題について、多くの報告を聴き、決議を採択した。電気技術者大会の勧告は、ゴエルロ計画を具体化するさいにも、その実施過程でも、考慮された。二一四

（一〇五） 『ポスレードニエ・ノーヴォスチ』（『最近のニュース』）――白系亡命者の日刊新聞で、カデットの機関紙。一九二〇年四月から一九四〇年七月まで、パリで発行されていた。ペ・エヌ・ミリュコーフが編集者であった。二一六

（一〇六） マルクス＝エンゲルス二三巻選集、第一七巻、二九八―三〇〇ページを参照。二一六

（一〇七） 『コムニスチーチェスキー・トルード』（『共産主義的労働』）――党モスクワ委員会とモスクワ・ソヴェトの日刊機関紙。一九二〇年三月一八日に創刊され、一九二二年二月七日からは『ラボーチャヤ・モスクワ』と改称し、現在は『モスコーフスカヤ・プラウダ』という名で発行されている。二一六

（一〇八） ロシア代表団がコミンテルン第三回大会に提出した戦術についてのテーゼ草案にたいして修正提案を出した、ドイツ、オー

ストリア、イタリア三国の代表団をさす。三二七

（二〇九） コミンテルン第三回大会で採択された『戦術についてのテーゼ』の当該箇所のテキストは、次のとおりである。

「それ」（戦術問題）「は、労働者階級の多数者を共産主義の原理の味方に獲得する手段と、共産主義の実現のための闘争にプロレタリアートの社会的に決定的な部分を組織する手段とに関係している。」三二八

（二一〇） 「公開状」――一九二一年一月八日の新聞『ローテ・ファーネ』（『赤旗』）に掲載された、ドイツ社会党、ドイツ独立社会民主党、ドイツ共産主義労働者党、すべての労働組合組織にあてた『ドイツ統一共産党中央委員会の公開状』をさす。この公開状のなかで統一共産党は、反動の強化と勤労者の権利にたいする資本の攻勢とに対抗する共同闘争を、すべての労働者、労働組合組織、社会主義組織に呼びかけている。『公開状』を討議した労働者の諸集会は、断固として統一戦線を支持した。ドイツの社会主義政党および労働組合の指導機関は、ドイツ統一共産党の呼びかけを無視するか、あるいはこれを拒否した。『公開状』にたいしていちじるしく否定的な態度をとったのは、ドイツ共産主義労働者党であった。

ドイツ統一共産党――一九二〇年一二月、ドイツ共産党と独立社会民主党の多数派党員との合同大会で結成された。この合同は、一九二〇年一〇月のハレ大会で独立社会民主党が分裂し、多数派が中央派的（カウツキー主義的）な党と手を切って共産主義インタナショナルの側に移った結果おこなわれた。一九二一年八月にイェーナ市でひらかれた次の大会で、党はふたたびドイツ共産党という旧名を採用した。三二九

（二一一） コミンテルンの『戦術についてのテーゼ』の当該箇所には、チェコスロヴァキアについて次のように述べている。「チェコスロヴァキアでは、共産主義者は、政治的に組織された労働者の多数者を味方につけることに成功した。」三二九

（二一二） 「攻勢理論」――一九二〇年一二月にドイツ共産党とドイツ独立社会民主党左派との合同大会でとなえられたもの。その核心は、革命的行動に必要な客観的条件がそなわっているかどうか、広範な勤労大衆が共産党を支持しているかどうかにかかわらず、党は攻勢戦術をとるべきだという点にあった。「攻勢理論」の支持者は、ハンガリー、チェコスロヴァキア、イタリア、オーストリア、フランスの「左派」のなかにもあった。コミンテルン第三回大会の席上で、「攻勢理論」の支持者は、この理論を共産主義インタナショナルの戦術についての諸決定の基礎にすえようとした。レーニンは、大会での発言のなかでこの理論の誤りと冒険性を明らかにした。大会は、労働者階級の多数者を辛抱づよく教育し、共産主義運動の味方に獲得するというレーニンの提案を承認した。三三〇

（二一三） 一九二一年三月のドイツにおけるプロレタリアートの武装行動をさす。

ドイツのブルジョアジーは、共産主義者の影響力が大衆のあいだで増大するのにおびえて、プロレタリアートの革命的前衛を挑発して、時機尚早で無準備の武装行動をおこさせ、労働者階級の革命的組織を粉砕することにした。三月一六日、プロイセン警保局長で社会民主党員のヘルジングは、ストライキを呼びかけている刑事犯人を取り締まるという口実で、警官隊を中部ドイツの諸企業に導入する命令をくだした。官憲の挑発行為は労働者の憤激をまねき、警官隊との衝突が始まった。ドイツ統一共産党中央委員会の左翼多数派は、いわゆる「攻勢理論」にもとづいて、労働者を時機尚早の蜂起

へ、すすませた。三月一七日、同党中央委員会は、「プロレタリアートは応戦すべきだ」という決定をくだし、中部ドイツの労働者を応援するためのゼネストをドイツのプロレタリアートに呼びかけた。しかし、労働者階級の大部分は行動の準備ができていなかったので、戦闘に参加しなかった。行動が武装闘争になったのは、中部ドイツに限られていた。三月行動は鎮圧され、共産党と労働者階級は大打撃をうけた。社会民主主義者と改良主義的組合幹部の分裂政策も、蜂起失敗の最大の原因のひとつであった。三三

(一四) 一九二一年三月の中部ドイツにおける労働者の武装蜂起の敗北後、統一共産党指導部内の右翼分子レーヴィがこの闘争に中傷的な非難をくわえたことをさす。三三

(一五) 一九二一年四―六月のイギリス鉱山労働者のストライキをさす。このストライキは、労働者の賃金を大幅に切りさげようとする炭鉱主への回答であった。一〇〇万人以上がストライキに参加し、鉱山労働組合のゼネストになった。炭鉱夫連盟は連帯ストに参加するよう運輸労働組合、鉄道従業員組合の執行委員会に提案したが、後者の改良主義的幹部は鉱山労働者を支援しなかった。彼らは政府や炭鉱主と舞台裏で交渉して、妥協とスト破りにつとめた。三ヵ月の闘争ののち、鉱山労働者は就業せざるをえなかった。三五

(一六) アウゲイアスの畜舎――ギリシア神話によると、エリスの国王アウゲイアスの畜舎には三〇〇〇頭の牛がおり、畜舎は三〇年のあいだ掃除されずに放置されていたが、英雄ヘラクレスが二つの河の河水をそそぎこんで一日でこれを掃除した。「アウゲイアスの畜舎」とは、非常な汚穢、または極端な無秩序のこと。三六

(一七) ロシア語では、「平和」も「世界」も「ミール」という同じ語であるが、旧正字法では綴りが異なっていたため、こう言ったもの。三三

(一八) A・ベーベルにあてたエンゲルスの一八七五年三月一八―二八日付の手紙、および一八八四年一二月一一―一二日付の手紙、全集、第一九巻、四ページおよび二三巻選集、第一七巻、二九九ページを参照。三五

(一九) エンゲルス『亡命者文献。二、ブランキ派コミューン亡命者の綱領』、全集、第一八巻、五二七ページを参照。三七

(二〇) 本選集、第八巻、二八〇―二八一ページを参照。三八

(二一) 一九二二年一月一九日、第二半インタナショナルの指導者が提唱した、三つのインタナショナル(第二、第二半、第三)の会議をさす。これらの指導者は、コミンテルンがブルジョアジーの攻撃にたいする労働者統一戦線のために活発にたたかい、また労働者大衆が行動の統一を要求していたため、ヨーロッパの経済状態と反動の攻撃にたいする労働者大衆の行動の問題を検討するために、一九二二年の春にこの国際会議を招集することを、コミンテルン執行委員会に提案せざるをえなかったのである。四三

(二二) コミンテルン執行委員会第一回拡大総会――一九二二年二月二一日―三月四日、モスクワでひらかれ、三六ヵ国から一〇五名の代表が参加した。総会の中心問題は、統一戦線戦術の問題であった。それ以外に、各国支部の状態についての報告があった。総会は、戦争と戦争の危険に反対する闘争についてのテーゼ、新経済政策についてのテーゼ、統一戦線戦術についての決定、三つのインタナショナルの会議へのコミンテルンの参加についての決議その他を採択した。

レーニンは、病気のため総会に出席しなかったが、総会の準備に積極的にくわわり、三つのインタナショナルの会議でのコミンテル

ソ代表団の戦術を作成した。この手紙でなされたレーニンの提案を基礎としたロシア共産党のこの問題についての決議案は、三月四日に拡大総会で採択された。二四四

(二三) この手紙は、三つのインタナショナルの会議へのコミンテルン代表団にたいするコミンテルン執行委員会の指令の原案としてジノヴィエフが書き、一九二二年三月一四日にレーニンに送って意見を求めた草案についての意見を述べたものである。レーニンの提案にしたがって修正補足された指令は、党政治局で承認され、三月一七日、コミンテルン執行委員会で全員一致で採択された。二四六

(二四) 三つのインタナショナルの会議は、一九二二年四月二日から五日までベルリンでひらかれた。会議では第二、第二半インタナショナルの代表とコミンテルン代表とのあいだに激しい闘争がおこなわれた。後者は、労働組合その他の労働者団体をくわえて世界大会を招集し、資本の攻勢、反動、新しい帝国主義戦争の準備にたいする闘争、ソヴェト・ロシア復興への援助、ヴェルサイユ条約と破壊された地方の復興の諸問題を審議するよう提案した。第二インタナショナルの代表は、第二半インタナショナル代表の事実上の支持をうけて、コミンテルンの代表に受諾できない条件を押しつけようとした。グルジアをソヴェト国家から分離すること、労働者の大衆組織内に共産党細胞をつくるのを中止すること、政治犯を釈放すること、がそれであった。コミンテルン代表団(ブハーリン、ラデック、ツェトキーン)は、これらの要求を拒否したが、ソヴェト権力はエス・エル右派のソヴェト権力転覆活動事件に死刑を適用しないこと、第二、第二半インタナショナルの代表を裁判に列席させること、という条件には同意した。レーニンは、代表団のこの譲歩を、論文『われわれは高い代価を払いすぎた』(本書、二五八—二六二ページを参照)のなかで批判している。

会議では共同宣言が採択され、そのなかでは具体的な問題で共同行動をとる可能性が認められていた。宣言は、ジェノヴァ会議のさいに大衆的デモンストレーションをおこなうよう、すべての勤労者に呼びかけて、八時間労働日、失業反対、資本の攻勢にたいするプロレタリアートの闘争、ロシア革命の擁護、ロシアの飢饉にたいする救援、ソヴェト・ロシアとの政治経済関係の復活、国際的および国内的プロレタリア統一戦線の復活のための闘争スローガンをかかげるように要請していた。会議は、世界大会の早急な招集の必要を認め、大会の準備のために九名からなる組織委員会(各組織から三名ずつ)をつくった。しかし第二、第二半インタナショナルの改良主義的指導部は、労働者階級の統一のための闘争をサボタージュし、ぶちこわした。一九二二年五月二一日、両インタナショナルの一連の所属政党によって、共産主義者を除いた世界大会をハーグに招集するという決定が採択された。その結果、一九二二年五月二三日、ベルリンでの九人委員会の会議で、コミンテルン代表は同委員会からの脱退を声明した。

ここで問題になっているコミンテルン執行委員会幹部会の決定草案は次のようなものである。「(一)すべての国際的な共産主義新聞紙上でメンシェヴィキとエス・エル反対カンパニアを強めること。(二)反対者の弱点の一つひとつを攻撃して、ベルリン会議の資料の系統的な利用に着手すること。(三)九人委員会はさしあたり共同アピールを出さないこと。(四)四月二〇日のデモンストレーションのさいには扇動を遠慮せず、反対者を批判すること。(五)個個の支部は具体的条件におうじて行動すること。(六)ベルリン会議の結果の批准の問題が検討されるまでは、代表団はどんな新しい

措置も延期すること。」二四七

（一二五）　オットー・バウアーの著書『ソヴェト・ロシアの「新方針」』、ウィーン、一九二一年、をさす。二四七

（一二六）　三つのインタナショナルのベルリン会議の声明によれば、前記の組織委員会（九人委員会）では、多数決は認められず、決定は全員一致でおこなわれることになっていた。二四七

（一二七）　第一一回党大会をひかえて発行されるはずであった雑誌『マルクス主義の旗のもとに』第三号のために書かれたもの。

『マルクス主義の旗のもとに』——哲学および社会＝経済月刊誌。戦闘的唯物論と無神論を宣伝し、「学位をもった坊主主義の従僕」とたたかうために創刊され、一九二二年一月から一九四四年六月まで、モスクワで発行されていた（一九三三―一九三五年は月二回）。二四九

（一二八）　ナロードニキ（人民主義者）——一八六〇年代ロシアに生まれ、地主の抑圧および農奴制の遺物にたいする農民の抗議を反映した社会的潮流。ナロードニキは、資本主義的発展の法則性が理解できないで、人類社会をいっそう発展させるうえでプロレタリアートの果たす革命的役割を否認した。彼らは、農民共同体を社会主義の萌芽と見なし、農民を主要な革命勢力と見なした。ナロードニキ主義は、農民国に典型的なユートピア社会主義の一変種であった。

一八七〇年代のはじめに、ナロードニキのあいだにバクーニン、ラヴローフおよびミハイロフスキーの観念論的折衷主義理論がひろまった。彼らは、歴史における人民大衆の役割を過小評価し、少数の「批判的に思考する個人」が人類社会の発展を規定するという見解をとった。ここからしてまた、ナロードニキのあいだに無政府主義的な傾向が生まれた。その後、ナロードニキは、ツァーリズムと妥協する自由主義的コースをたどり、一八八〇年代以後は民主主義的な革命運動の発展を妨げるようになった。

「人民社会党」（エヌ・エス）——一九〇六年に社会革命党（エス・エル）右派から分離した小ブルジョア的な勤労人民社会党のこと。エヌ・エスはカデットとのブロックを主張した。第一次世界大戦中は、「人民社会党」は社会排外主義の立場をとった。二月革命後は、その代表者を入閣させて、ブルジョア臨時政府の活動を積極的に支持した。十月革命後、エヌ・エスは反革命の陰謀と武力行動にくわわった。二四九

（一二九）　エンゲルス『亡命者文献。二、ブランキ派コミューン亡命者の綱領』、全集、第一八巻、五二五ページを参照。二五一

（一三〇）　この箇所には、はじめ次のような文章がはいっていた。「最近、私は、たまたまアプトン・シンクレアの『宗教の収益性』という本を読んだ。この作家の問題の取り上げ方や取り扱い方に欠点があることは、疑いをいれない。しかし、この本は、生きいきと書かれ、多くの具体的な事実や対比をのせているので、貴重である——」二五三

（一三一）　サルトィコーフ＝シチェドリーンの作品『ある町の歴史』からとったことば。二五五

（一三二）　『エコノミスト』——ソヴェト権力に敵意をもつ技術者や旧企業所有者がつくっていたロシア技術協会の産業経済部の雑誌。一九二一年一二月から一九二二年六月まで、ペトログラードで発行されていた。

雑誌の第一号をレーニンに送ったのは、同誌の編集者デ・ア・ルトーヒンであった。二五五

（一三三）　四七名の社会革命党員の裁判——一九二二年六月から八

月にかけて、モスクワで四七名のエス・エル右派指導者の裁判がおこなわれた。彼らは、ロシア共産党の指導的活動家ヴォロダルスキーおよびウリツキーを殺害し、レーニンその他の政府要人の暗殺を計画し、外国、とくにフランスの帝国主義者の支持をうけて、ソヴェト権力転覆のためのさまざまな破壊活動、テロル行為、スパイ活動に従事したかどで起訴されたのであった。この裁判に関連して、資本主義諸国のブルジョア機関、ことに亡命したメンシェヴィキやエス・エル、また第二インタナショナル、第二半インタナショナルの指導者たちは、猛烈な反ソ宣伝を展開し、ソヴェト政府にたいして抗議や被告の助命要請をおこなった。八月七日、最高裁判所は、ゴーズ、ドンスコイ、ゲルシテイン等一五人に死刑を、他の一七人に二年から一〇年の有期刑を言い渡し、二人を無罪とし、残りの者についてはその悔悛の情にかんがみて免訴するよう、全ロシア執行委員会幹部会に申請した。八月九日、幹部会は、判決を確認するとともに、エス・エル党がそのテロル・破壊・スパイ活動をやめることを条件として、暫定的に死刑の執行を停止すること、また申請のあった免訴の処置を承認することを布告した。三六

(三四) アイルランドの蜂起――アイルランドでは、十月革命の影響で一九一八年以後に民族解放運動が新しく高揚しはじめた。イギリス政府はこれに弾圧をもってこたえたが、やがて民族革命運動の抑圧の不可能なことを見てとって、アイルランドの民族主義政党シンフェイン党の右翼と取引し、一九二一年一二月に協定を結んだ。この協定によって、アイルランド南部は、自治領の権限をあたえられて「アイルランド自由共和国」となったが、北アイルランドは引きつづきイギリス王国の構成部分にとどまった。この右翼とイギリス帝国主義者との結託に、シンフェイン党の共和主義的左翼は反対し、アイルランドは内戦状態となった。しかし、彼らは労働者農民大衆を運動に引きいれることをせず、運動は、一九二三年春に共和派指導部が軍事行動の停止を宣言したことで終りを告げた。

南アフリカの労働者の蜂起――一九二二年三月に、トランスヴァールの都市ヨハネスブルグ、ベノニ、ブランパンで労働者の蜂起が起こった。スマッツ将軍を首相とする反動政府は、タンクや飛行機までうごかして、蜂起を弾圧した。蜂起は三月一四日には鎮圧され、一万人以上が逮捕され、数千人の労働者が軍事裁判にかけられた。若い南アフリカ共産党は積極的に蜂起に参加し、数多くの共産主義者が犠牲となって死んだ。三六

(三五) 共産主義インタナショナル第四回大会――一九二二年一一月五日から一二月五日まで、はじめペトログラードで、ついでモスクワでおこなわれた。大会には五八ヵ国の共産党、イタリア社会党、アイスランド労働党、モンゴル人民革命党の代表が参加し、共産主義青年インタナショナル、プロフィンテルン、国際婦人書記局、アメリカの黒人組織、国際労働者救援会の代表も参加した。大会は、コミンテルン執行委員会の活動報告を審議し、またロシア革命の五ヵ年と世界革命の展望、資本の攻勢、コミンテルンの綱領、労働組合内での共産主義者の任務の問題、東洋問題、農業問題、その他を審議した。

ロシア共産党(ボ)の代表団ビューローを主宰したレーニンは、ロシア代表団の全活動を指導し、大会の重要な諸決定の作成に積極的に参加した。レーニンは、報告『ロシア革命の五ヵ年と世界革命の展望』を、一一月一三日の朝の会議でドイツ語でおこなった。

大会は、統一戦線についてのテーゼを採択し、共産主義インタナショナルの戦術についてのテーゼ、労働組合運動内の共産主義者の

任務についてのテーゼ、東洋問題についてのテーゼを承認し、ロシアにおける社会主義革命についての決議、共産主義青年インタナショナルについての決議、その他を採択した。ロシア問題についての決議では、ソヴェト・ロシアは依然として世界プロレタリアートにとって歴史的な革命的経験の最も豊かな宝庫であると強調され、社会主義建設をめざす政策として新経済政策が高く評価された。大会は、「ソヴェト・ロシアから手を引け！　ソヴェト・ロシアを法的に承認せよ！　ソヴェト・ロシアの経済復興を強力に援助せよ！」というスローガンのもとにソヴェト・ロシアを支持するよう、世界各国の勤労者に呼びかけた。大会とその各委員会で採択された諸決定は、各国の党内で右翼日和見主義とセクト主義、教条主義の誤りが克服され、コミンテルンの各支部が新しい型のマルクス＝レーニン主義党に成長するのをうながした。二六三

（一三六）『「左翼的」幼稚さと小ブルジョア性について』、本選集、第八巻、二九二ページを参照。二六三

（一三七）アーカート利権——十月革命まではアジア・ロシア合同会社社長で、ロシア国内の大鉱山企業（クィシトィム、リッデル、タナルィク、エキバストゥーズ）の所有者であったイギリスの工業家、金融業者L・アーカートに有用鉱物の開発・採掘の利権を供与することについての交渉をさす。一九二二年九月九日、外国貿易人民委員、クラーシンは、アーカートとの暫定利権契約に調印した。この契約によると、ウラルとシベリア（クィシトィム、タナルィク、リッデル、エキバストゥーズの各地）にあるアジア・ロシア合同会社の旧企業が、利権として九九年間（契約調印後四〇年たてばソヴェト政府はすべての利権企業を期限前に買いとる権利をもつという条件で）アーカートに供与されることになっていた。また契約の条件によると、ソヴェト側は利権契約者の企業の復旧のために物質的援助をあたえなければならず、その額は、利権契約者が旧所有企業にうけた損失の調査にもとづいて査定されることになっていた。

レーニンは、クラーシンの調印した契約を知って、これはまぎれもなくソヴェト国家にとって不利だと考え、その承認に反対した。一〇月五日の党中央委員会総会と一〇月六日の人民委員会議は、アーカートとの契約を拒否する決定を採択した。

利権は供与されなかった。二七〇

（一三八）「二、二が一本のステアリン蠟燭」という言いまわしは、トゥルゲーネフの小説『ルーヂン』に出てくる人物ピガーソフのことば。二七三

（一三九）黒百人組——極反動の暴力団体（ロシア国民同盟、大天使ミカエル会議）がこうよばれていた。一九〇五年に結成され、そのなかではルンペン・プロレタリア、小商人、小手工業者の出身者が多かった。大地主、大商人に指導され、官憲の支持をえて、解放運動の弾圧や、ユダヤ人の虐殺、革命家の暗殺などの暴力行為をはたらいた。二七五

（一四〇）コミンテルン第四回大会の議題には、コミンテルンの綱領の問題があった。提出された綱領草案としては、ブハーリンが作成して彼の名で提出したもの、ブルガリアとドイツの共産党の草案、『イタリア共産党行動綱領』草案があった。草案の審議のさい活発な討論をひきおこしたのは、過渡的要求、部分的要求の問題であった。ブハーリンは、最も一般的な過渡的および部分的な要求をコミンテルン綱領のなかで理論的に基礎づけることに反対し、これらの命題をふくめることを主張する者を日和見主義者として非難した。ロシア共産党

（ボ）代表団は、大会が決定を提出するまえに、代表団の内部で問題を審議する可能性をあたえてくれるよう、大会議長団に要請した。この要請は認められた。

一九二二年一一月二〇日、ロシア共産党（ボ）代表団ビューロー会議がひらかれた。この会議でレーニンの提案が大会決議の草案として作成された。提案の第四、第五項は、ほとんどことばどおりレーニンの口述したものである。三〇六

（四一）一九二二年一二月一六日、レーニンはひどい発作におそわれた。翌日、彼の病状はいちだんと悪化し、右手と右足がきかなくなった。レーニンは自分の危険な病状を自覚して、一連の覚え書を口述して、そのなかで、ロシアにおける社会主義建設の道、党とその強化の措置、世界革命運動の展望など彼が「最も重要」と見なす考えや意見を述べることにした。

レーニンの強い要求により、医師は毎日五分ないし一〇分間だけ口述することを許可した。その後、レーニンの病状は快方にむかい、日に三〇分ないし四〇分間口述することを許されるようになった。レーニンは、病状がふたたび急激に悪化した三月六日まで、覚え書を口述して書きとらせ、第一二回党大会にそなえて準備した。このあいだに、彼はいくつかの長い手紙と五つの論文（『日記の数ページ』、『協同組合について』、『わが革命について（エヌ・スハーノフの記録について）』、『われわれは労農監督部をどう改組すべきか（第一二回党大会への提案）』、『量よりも質を』）を書きとらせた。

党内問題についての手紙は、そのときには公表されなかったが、五つの論文は当時の『プラウダ』に掲載された。レーニンの最後の論文や手紙に述べられた指示は、第一二回党大会、第一三回党協議会および第一三回党大会の諸決定の基礎とされた。三〇八

（四二）『大会への手紙』は、レーニンが一九二二年一二月二三―二六日に口述して書きとらせた覚え書、一二月二九日に書きとらせたもの（『中央委員の増員にかんする節へ』）、一九二三年一月四日に書きとらせたもの（『一九二二年一二月二四日付の手紙への追記』）をふくむ。

レーニンは、この手紙を自分の死後に党の定期大会に知らせる必要があると考えていた。レーニンの希望にしたがって、手紙は、一九二四年五月二三―三一日にひらかれた第一三回党大会の代議員たちに公開された。第一三回党大会は、当面この手紙を公表しないことに全員一致で決定した。それは大会にあてられたもので、出版を目的としたものではなかったからである。

レーニンのこれらの手紙は、ソ連邦共産党中央委員会の決定にもとづいて、第二〇回党大会の代議員たちに知らされ、そのあとで党の各組織に送られた。ついで一九五六年に雑誌『コムニスト』第九号に発表され、同時に単行の小冊子として出版された。三〇八

（四三）ゴスプラン（国家計画委員会の略称）――ソヴェト国家の科学的計画経済機関。全国家的な長期計画および短期計画を立案し、その遂行の点検にあたる。一九二一年二月二二日に設置された。三〇八

（四四）『ルースカヤ・ムィスリ』（『ロシアの思想』）――ペ・ベ・ストルーヴェの編集で一九二二年にプラハで発行された白衛派の雑誌。同誌の政治評論家は、レーニンの手紙にあげられているエス・エフ・オリデンブルグではなく、エス・エス・オリデンブルグであった。三〇九

（四五）本書所収『労働組合について、現在の情勢について、同志トロツキーの誤りについて』、および『ふたたび労働組合につい

て、現在の情勢について、同志トロツキーと同志ブハーリンの誤りについて』を参照。二九九

（一四六）　一九一七年一〇月一〇（二三）日と一六（二九）日の党中央委員会の会議で、ジノヴィエフとカーメネフがとった降伏主義的な行動をさす。彼らは、武装蜂起の即時準備についてのレーニンの決議案に反対し、またそれに反対票を投じた。ついでカーメネフは、自分とジノヴィエフの連名で、ボリシェヴィキが蜂起を準備していること、自分らが蜂起を冒険と見なしていることを、メンシェヴィキの新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』に声明し、こうして党の計画をケーレンスキーにもらしてしまった。レーニンは、『同志への手紙』、『ボリシェヴィキ党員への手紙』、『ロシア社会民主労働党（ボ）中央委員会への手紙』のなかで、このふるまいを前代未聞のストライキ破りとよんで非難し、カーメネフとジノヴィエフを党から除名することを要求した（全集、第二六巻、一九四―二一八、二一九―二二三、二二七―二三二ページを参照）。三〇〇

（一四七）　『民族問題または「自治化」の問題によせて』は、ソ連邦の結成に関連して書かれ、ソヴェト諸民族の相互関係の問題を論じたもの。

レーニンがこの手紙を書くにいたった直接の動機は、グルジア共産党内の紛争――オルジョニキッゼを先頭とするロシア共産党(ボ)ザカフカーズ地方委員会とムヂヴァニ派との紛争であった。ザカフカーズ地方委員会（以前のロシア共産党（ボ）中央委員会カフカーズ・ビューロー）は、原則的には正しい政策をとり、ザカフカーズ地方諸共和国の結束強化に努力し、ムヂヴァニ派の根本的にまちがった立場に反対していた。ムヂヴァニ派は、ザカフカーズ諸共和国の経済的・政治的統合を事実上はばみ、グルジアの分立状態を実質的に温存しようとし、そうすることによってブルジョア民族主義とグルジアのメンシェヴィキを助けていた。グルジアの共産主義者は、その大会、協議会、党活動家集会で、ムヂヴァニ派のこの立場を民族主義への偏向と、正しく評価した。同時にまた、オルジョニキッゼも重大な誤りをおかした。彼は、グルジアで党の民族政策をすすめるうえで十分な弾力性や慎重さを欠き、一部の措置の実施にさいして行政的処理や性急さの誤りをおかし、グルジア共産党中央委員会の意見や権利をかならずしも考慮しなかった。オルジョニキッゼはムヂヴァニ派にたいしても十分な忍耐心を示さなかった。あげくのはてには、オルジョニキッゼがムヂヴァニ派のひとりに侮辱されて、彼をなぐりつけるまでになった。

レーニンは、『民族問題または「自治化」の問題によせて』のなかで、オルジョニキッゼのふるまいを非難した。レーニンは、党中央委員会からグルジアへ派遣されたジェルジンスキー調査団が「グルジア紛争」の調査において十分公平でなかったと考えた。レーニンは、スターリンが諸共和国の統合にさいして重大な誤りをおかしたことを念頭において、この事件全体の政治的責任をまず第一に党中央委員会書記長としてのスターリンに負わせている。レーニンは、ザカフカーズ連邦の問題とソ連邦結成の問題にたいするムヂヴァニ派の立場を原則的にまちがったものとみていた。しかし、当時は大国的排外主義が主要な危険だと考え、またそれとたたかうことが、なによりも以前の支配民族の共産主義者の任務だと考えて、レーニンは、「グルジア問題」でのスターリン、ジェルジンスキー、オルジョニキッゼの誤りに注意を集中した。

レーニンは『民族問題または「自治化」の問題によせて』のなかで、党の民族政策の最も重要な諸問題を解明した。レーニンはこの

手紙を指針と見なし、これを重視し、のちにこれを論文として発表するつもりであった。しかし、病気が悪化したので、この手紙を最終的に仕上げることはできなかった。一九二三年四月一六日、エリ・ア・フォチエヴァはこのレーニンの手紙を党政治局に送った。第一二回党大会の席上、この手紙は代議員に公開された。レーニンの指示にしたがい、大会の民族問題についての決定草案には、一連の重要な変更と補足がくわえられた。二六八

（二四八）　一九二二年一〇月と一二月にひらかれたロシア共産党（ボ）中央委員会総会をさす。両総会の議題はソ連邦結成の諸問題であった。二六八

（二四九）　デルジモルダ——ゴーゴリの戯曲『検察官』の登場人物で、粗暴な警官。二六九

（二五〇）　覚え書には、このあとに、「われわれの同志たちはこの重要な原則問題を十分理解していないと思う」という一句が抹消されている。二九〇

（二五一）　『「左翼的」幼稚さと小ブルジョア性について』、本選集、第八巻、二八三—三〇九ページを参照。二九八

（二五二）　論文『われわれは労農監督部をどう改組すべきか』（全集、第三三巻、五〇二—五〇七ページを参照）をさす。そこでは、労農監督部の職員数を三〇〇名ないし四〇〇名に減らすことが提案されている。三〇四

（二五三）　オ・ア・エルマンスキー『労働および生産の科学的組織とテイラー・システム』、ペ・エム・ケルジェンツェフ『組織の原理』（いずれも一九二三年に国立出版所から発行）をさす。三〇六

（二五四）　ヴォルホフストロイ——ヴォルホフ水力発電所のこと。一九二六年末に落成した。三一四

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アインシュタイン、アルベルト（一八七九―一九五五）――ドイツの著名な物理学者、数学者。「相対性理論」の創始者。

アーカート、レスリ（一八七四―一九三三）――イギリスの実業家、革命前のロシアで活動した。膨大な土地、森林、地下資源を所有していた「アジア・ロシア合同会社」の社長。ソヴェト政府と利権交渉をおこなったが、不調に終わった。

アードラー、フリードリヒ（一八七九―一九六〇）――オーストリア社会民主党員、同党書記。のち第二半インタナショナルの創立に参加。

アドラツキー、ヴェ・ヴェ（一八七八―一九四五）――一九〇四年以来のボリシェヴィキ、著名なマルクス主義宣伝家。一九二〇年以後マルクス＝レーニン研究所副所長、ついでマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所長。

アルチョーム（**セルゲーエフ、エフ・ア**）（一八八三―一九二一）――一九〇一年入党。十月革命後ウクライナ共産党中央委員。一九二〇―一九二一年ロシア共産党モスクワ委員会書記、ついで全ロシア鉱山労働組合中央委員会議長。

イヴァノーヴィチ、スト　↓ポルトゥゲイス、エス・イ

イシチェンコ、ア・ゲ（一八九五生）――一九一七年入党。一九一九―二七年（中断あり）、水運従業員組合中央委員会議長。積極的なトロツキー派として一九二七年除名。

ヴァリク――メンシェヴィキ。クロンシタット暴動のさいのいわゆる臨時革命委員会の一員。暴動の鎮圧後外国に逃亡した。

ヴィッペル、エル・ユ（一八五九―一九五四）――ロシアの著名な歴史家、モスクワ大学教授。アカデミー会員。

ウィルソン、ウッドロー（一八五六―一九二四）――アメリカ大統領（一九一三―一九二〇）。民主党首。第一次大戦中、「一四ヵ条」の講和条約を発表し、国際連盟の組織案を起草した。

ヴォローヂチェヴァ、エム・ア（**エム・ヴェ**）――レーニンの秘書。

ヴランゲリ、ペ・エヌ（一八七六―一九二八）――帝政ロシアの将軍。十月革命後反革命義勇軍を組織。一九二〇年デニーキンのあとをついで白衛軍総司令官となり、クリミアを拠点として攻勢に出たが、赤軍の反撃により敗北、一九二〇年一一月国外に逃亡。

エム・ヴェ　↓ヴォローヂチェヴァ、エム・ア。

エリ・エフ　↓フォチエヴァ、エリ・ア。

エルマンスキー、ア（**コーガン、オ・ア**）（一八六六―一九四一）――メンシェヴィキ、解党派。一九一七年には国際派メンシェヴィキ。一九二一年にメンシェヴィキ党から脱党し、モスクワで学術活動に従事した。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇―一八九五）

オーエン、ロバート（一七七一―一八五八）――イギリスの偉大なユートピア社会主義者。

オシンスキー、エヌ（**オボレンスキー、ヴェ・ヴェ**）（一八八七―一九三八）――一九〇七年入党。十月革命後、最高国民経済会議議長。一九一八年に「左翼共産主義者」の政綱起草者のひとり。一九二〇―二一年には「民主主義的中央集権派」、ついでトロツキー反対派に参加。

オリデンブルグ、エス・エフ——ロシアの著名な東洋学者。一九二二年当時は科学アカデミー常任書記の職にあった。

オルジョニキッゼ、ゲ・カ（一八八六—一九三七）——一九〇三年以来の党員、ボリシェヴィキ。一九二一—一九二六年は中央委員会ザカフカーズ地方ビューロー議長、ついで党中央統制委員会議長。のち最高国民経済会議議長、ゴスプラン議長、重工業人民委員を歴任した。一九三〇年に党中央委員会政治局員。

オルランド、ヴィットリオ（一八六〇—一九五二）——イタリアの首相兼外相、パリ講和会議へのイタリア首席代表。

カヴェニャク、ルイ-ウジェーヌ（一八〇二—一八五七）——フランスの将軍、反動政治家。一八四八年の二月革命後、アルジェリア総督、ついで陸相。同年六月に軍事独裁の先頭に立ち、パリ労働者の六月蜂起を苛酷に鎮圧した。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八）——第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家、日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

カーメネフ（ローゼンフェリド）、エリ・べ（ユーリー）（一八八三—一九三六）——一九〇一年からボリシェヴィキ党員。第七回（四月）全国協議会で党中央委員。二月革命後、社会主義革命をめざす党のレーニン的方針に反対。十月革命後、人民委員会議副議長、党中央委員会政治局員。のちトロツキー＝ジノヴィエフ反党ブロックの指導者、党から除名された。

カリーニン、エム・イ（一八七五—一九四六）——ボリシェヴィキ。十月革命後、ペトログラード市長。一九一九年全ロシア中央執行委員会議長。第八回党大会以後党中央委員、一九二六年から政治局員。

カレーリン、ヴェ・ア（一八九一—一九三八）——左派エス・エル党の組織者、指導者のひとり。一九一七年一二月—一九一八年三月に財務人民委員。一九一八年にブレスト講和条約代表団のひとり。講和条約の調印に関連して人民委員会から脱退した。一九一八年七月の左派エス・エルの反乱の組織者のひとり。反乱鎮圧後、国外に亡命。

キセリョーフ、ア・エス（一八七九—一九三八）——一八九八年以来の党員。二月革命後、ボリシェヴィキ党イヴァノヴォ-ヴォズネセンスク市委員。一九一八年に最高国民経済会議幹部会員。第一〇回党大会では「労働者反対派」に属した。第一二回党大会で党中央委員。

ギャラチャー、ウィリアム（一八八一—一九六五）——イギリス共産党の指導者のひとり。一九三五—一九五〇年には国会議員、一九四三—一九五六年には党執行委員会議長、一九五六年以後党総裁。

クウェルチ、トマス（一八八六—一九五四）——イギリス社会党左派、のち共産党中央委員。晩年に離党した。

クラーシン、エリ・べ（一八七〇—一九二六）——ボリシェヴィキ。再三党中央委員。一時フペリョード派。十月革命後、最高国民経済会議幹部会員、商工人民委員、交通人民委員、外国貿易人民委員、パリおよびロンドン駐在大使など外交活動に従事。

クルジジャノフスキー、ゲ・エム（一八七二—一九五九）——古くからの党員、ボリシェヴィキ。一九二〇年にロシア電化委員会（ゴエルロ）を主宰。一九二一—一九三〇年、ゴスプランを指導。のち党中央委員、科学アカデミー副総裁。

クレスチンスキー、エヌ・エヌ（一八八三—一九三八）——一九〇三年入党。ブレスト講和時には「左翼共産主義者」。一九一八—

一九二一年財務人民委員。労働組合論争ではトロツキー＝ブハーリンの政綱を支持。のち外交官として活動。一九三三年除名。

クレマンソー、ジョルジュ・バンジャマン（一八四一―一九二九）――フランス急進党首。一九〇六―一九〇九年首相。第一次大戦中は猛烈な排外主義者。一九一七年にふたたび首相、対ソ武力干渉の組織者。

ゲー、ア・ユ（一九一九死）――無政府主義者、十月革命後はソヴェト権力の支持者、全ロシア・ソヴェト中央執行委員。

ケインズ、ジョン・M（一八八三―一九四六）――イギリスの経済学者、ケインズ学派の創始者。パリ講和会議のイギリス代表団の一員。

ケルジェンツェフ、ペ・エム（一八八一―一九四〇）――一九〇四年以来のボリシェヴィキ、党および国家活動家、歴史家、政論家。のち共産主義アカデミー幹部会副議長。

ケーレンスキー、ア・エフ（一八八一―一九七〇）――エス・エル党の指導者、第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、臨時政府の閣僚、ついで首相兼最高総司令官。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、一九一八年に国外へ亡命。

コズロフスキー、ア――帝政軍の将軍、クロンシタット暴動の主謀者の一人。暴動の鎮圧後国外に逃亡した。

コルチャック、ア・ヴェ（一八七五―一九二〇）――ロシアの海軍提督、反革命家。一九一八年一一月オムスクで反ソ武力闘争を開始、一九一九年末赤軍に粉砕され、銃殺された。

コルニーロフ、エリ・ゲ（一八七〇―一九一八）――帝政軍の将軍、帝政派。一九一七年七―八月、ロシア軍最高司令官、反革命的反乱の先頭に立った。反乱の鎮圧後、逮捕されたが、ドン地方に逃亡し、白衛派「義勇軍」を組織した。戦死した。

ゴンパーズ、サミュエル（一八五〇―一九二四）――アメリカ労働総同盟の創立者、労資協調論者。第一次大戦中は主戦論者。戦後、パリ講和会議の活動に参加。ソヴェト・ロシア孤立化の政策を支持した。

サーヴィンコフ、ベ・エヌ（ロープシン）（一八七九―一九二五）――エス・エル党の指導者。第一次大戦中は社会排外主義者。二月革命後、陸軍次官、ついでペトログラード軍事総督。十月革命後は一連の反革命的反乱の組織者。のち逮捕され、獄中で自殺。

サルトィコーフ－シチェドリーン、エム・イエ（一八二六―一八八九）――ロシアの大風刺作家。

ジェルジンスキー、エフ・エ（一八七七―一九二六）――一八九五年以来の党活動家、ポーランド＝リトアニア社会民主党の組織者の一人。第四回党大会以来ロシア社会民主労働党中央委員。十月革命後、反革命取締非常委員会議長、内務人民委員。一九二四年以後最高国民経済会議議長。一九二四年に党中央委員会政治局員候補、組織局員。

ジノヴィエフ、ゲ・イエ（一八八三―一九三七）――ボリシェヴィキ。第一次大戦中は国際主義者。一九一七年一〇月には武装蜂起に反対した。十月革命後は党、ソヴェトおよびコミンテルンの指導的活動にあたった。のちカーメネフ、ついでトロツキーと反党ブロックを結び、党から除名された。

シチェドリーン　↓サルトィコーフ－シチェドリーン、エム・イエ

シャイデマン、フィリップ（一八六五―一九三三）――ドイツ社会民主党の日和見主義的極右派の指導者。第一次大戦中は猛烈な社会排外主義者。一九一八年の一一月革命のさいのスパルタクス団員

虐殺の張本人。一九一九年に首相。

シリャプニコフ、ア・ゲ（一八八五―一九三七）――一九〇一年入党、ボリシェヴィキ。二月革命後、ペトログラード市党委員。ペトログラード・ソヴェト執行委員。十月革命後、労働人民委員。労働組合論争では「労働者反対派」で、一九三三年除名。

スターリン（ジュガシヴィーリ）、イ・ヴェ（一八七九―一九五三）――ロシアおよび国際革命運動、ソ連邦共産党およびソヴェト国家の最も著名な活動家のひとり。一八九八年以来の党員、一九一二年に中央委員。十月革命後、民族人民委員、一九一九年から一九二二年まで労農監督部人民委員を兼ねた。一九二二年以後は党書記長。

スーヒ、アウグスティン――ドイツのアナルコ-サンディカリスト。コミンテルン第二回大会に出席したが、のち反共的な立場に移った。

セラーティ、ジャチント・メノッティ（一八七二―一九二六）――イタリア労働運動の著名な活動家、社会党の指導者。第一次大戦中は国際主義者。ツィンメルヴァルト、キーンタールの両会議に参加。のちイタリア共産党内で積極的に活動。

セレブリャコーフ、エリ・ペ（一八八八―一九三七）――一九〇五年入党。十月革命後中央委員会書記。労働組合論争ではトロツキーを支持。一九二三年からトロツキー反対派の積極分子。のち除名。

ソスノフスキー、エリ・エス（一八八六―一九三七）――一九〇四年入党。労働組合論争ではトロツキーを支持。一九二七年トロツキー反対派の積極分子として除名。

ゾフ、ヴェ・イ（一八八九―一九四〇）――金属工出身、一九一三年入党。内戦で活躍。一九二〇年水運政治部員。一九二四年海軍長官。一九二七年以降交通、水運関係の要職を歴任。

ソローキン、ペ・ア（一八八九生）――エス・エル、社会学者、ペトログラード大学私講師。一九二二年に反革命活動のかどで国外に追放。

孫逸仙（孫文）（一八六六―一九二五）――中国の偉大な革命的民主主義者。

ダン（グールヴィチ）、エフ・イ（一八七一―一九四七）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は祖国防衛派。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員、第一次中央執行委員会幹部会員。十月革命後、ソヴェト権力とたたかい、国外に追放された。

チェルヌィシェフスキー、エヌ・ゲ（一八二八―一八八九）――ロシアの革命的民主主義者、ユートピア社会主義者。一八五〇―六〇年代の革命運動の指導者。一八六二年に逮捕、流刑に処され、赦免直後に死んだ。

チェルノーフ、ヴェ・エム（一八七六―一九五二）――エス・エル党の指導者で理論家。一九一七年にブルジョア臨時政府の農相、地主の土地を占拠した農民にたいして苛酷な弾圧政策をとった。十月革命後、反ソ反乱の組織者。

チミリャーゼフ、ア・カ（一八八〇―一九五五）――ロシアの著名な物理学者、数学者。アカデミー会員。

ディーツゲン、オイゲン（一八六二―一九三〇）――ヨーゼフ・ディーツゲンの息子。「プロレタリア的自然一元論」なるものによって、マルクス主義を補足しようと試みた。

ディーツゲン、ヨーゼフ（一八二八―一八八八）――ドイツの労働者出身の哲学者、社会主義者。独自に弁証法的唯物論の立場に到達した。

デニーキン、ア・イ（一八七二―一九四七）――ロシアの将軍。一九一八年に反ソ武力闘争を開始し、北カフカーズとウクライナを

占領したが、翌年三月赤軍に撃破されて、国外へ逃亡。

テラチーニ、ウンベルト（一八九五生）――イタリア共産党の創立者のひとり、コミンテルン執行委員。一九二六―一九四三年にはファシストの牢獄と流刑地にあった。イタリア共産党中央委員。

トゥラーティ、フィリッポ（一八五八―一九三二）――イタリア社会党の改良主義的右派の指導者。第一次大戦中は中央派。十月革命に敵意を示した。

トマ、アルベール（一八七八―一九三二）――フランスの政治家、社会改良主義者。第一次大戦中は社会排外主義者、ブルジョア政府の軍需相。二月革命後、ロシアに来て戦争継続を扇動した。

トマス、ジェームズ・ヘンリ（一八七四―一九四九）――イギリス労働党員、労働組合会議議長、下院議員。のち植民相、国璽尚書、自治領相。一九三一年、挙国内閣に留任するため労働党を脱党。

トムスキー、エム・ペ（一八八〇―一九三六）――ボリシェヴィキ。反動期には解党派、召還派、トロツキー派にたいして妥協的態度をとった。十月革命後、要職を歴任。一九二八年にブハーリン、ルィコフとともに党内の右翼日和見主義的偏向の指導者。

ドレーフス、アルトゥル（一八六五―一九三五）――ドイツの学者、初期キリスト教史の分野での反動的な歴史家。

トロツキー（ブロンシテイン）、エリ・デ（一八七九―一九四〇）――メンシェヴィキ。第一次大戦中は中央派。二月革命後、第六回党大会でボリシェヴィキ党に入党。つねに党の一般方針に反対する分派闘争をおこない、一九二七年に党から除名された。

ナポレオン一世（ボナパルト、ナポレオン）（一七六九―一八二一）――フランス皇帝（在位一八〇四―一八一四、一八一五）。

ナポレオン三世（ボナパルト、ルイ）（一八〇八―一八七三）――フランス皇帝（在位一八五二―一八七〇）。一世の甥。

ノスケ、グスタフ（一八六八―一九四六）――ドイツ社会民主党右派、ドイツ労働運動の裏切者。一九一九年一月にカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの虐殺を組織した張本人のひとり。

バウアー、オットー（一八八二―一九三八）――オーストリア社会民主党および第二インタナショナルの指導者。いわゆる「オーストリア・マルクス主義」の代表者。

パンクハースト、シルヴィア（一八八二―一九六〇）――イギリス労働運動の婦人活動家。極左的な社会主義労働連盟の組織者のひとり、機関紙『ワーカーズ・ドレッドノート』の編集者。一九二一年にイギリス共産党に加入したが、まもなく党規律への服従をこばんで除名され、ソ連邦と共産党を攻撃した。

ピャタコーフ、ゲ・エリ（一八九〇―一九三七）――一九一〇年以来の党員。一九一五―一九一七年には、民族問題その他で反レーニン的立場をとった。一九二七年にトロツキストとして党から除名された。

ヒルキット、モリス（一八六九―一九三三）――アメリカの社会主義者、日和見主義者、第二インタナショナルの国際社会主義ビューローの一員。

ピルスツキ、ユゼフ（一八六七―一九三五）――ポーランドの反動政治家、軍人、ポーランド社会党創立者のひとり。第一次大戦後ポーランド大統領、反ソ軍事行動を組織。一九二六年クーデタによりファシスト独裁を樹立、一九三四年にヒトラー・ドイツと同盟。

ヒルファディング、ルードルフ（一八七七―一九四一）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの理論家、日和見主義者、経済学者。第一次大戦中は中央派。

フォチエヴァ、エリ・ア（エリ・エフ）（一八八一生）――一九〇四年入党。一九一八年以後人民委員会議および労働国防会議の書記で、同時にレーニンの秘書であった。

ブハーリン、エヌ・イ（一八八八―一九三八）――ボリシェヴィキ。第六回党大会で中央委員、十月革命後、党中央委員会政治局員、『プラウダ』編集者、コミンテルン執行委員。のち反党活動のために党から除名された。

ブラウン、M・J　↓ブロンスキー、エム・ゲ

プレオブラジェンスキー、イエ・ア（一八八六―一九三七）――一九〇三年入党。一九一八年「左翼共産主義者」。労働組合論争ではトロツキーを支持した。一九二三年からトロツキー反対派の積極分子、のち除名。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六―一九一八）――ロシアおよび国際労働運動のすぐれた活動家、ロシア最初のマルクス主義宣伝家。メンシェヴィキ。第一次大戦中は社会排外主義者。

ブロンスキー、エム・ゲ（ブラウン、M・S）（一八八二―一九四一）――ポーランド＝リトアニア社会民主党員、のちボリシェヴィキ。十月革命後、オーストリア駐在ソヴェト公使。のち共産主義アカデミー会員。

ヘーゲル、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ（一七七〇―一八三一）――ドイツの大哲学者、客観的観念論者。弁証法を深く研究し、全面的に仕上げた。

ペトリューラ、エス・ヴェ（一八七七―一九二六）――ウクライナのブルジョア民族主義者。一九一七年に中央ラーダの陸相。翌年崩壊した中央ラーダを、ドイツ占領軍の援助をえて再興した。一九一九年末ポーランドと軍事同盟を結び、ウクライナを攻撃した。ウクライナにソヴェト権力が復活したのち亡命。パリで暗殺された。

ペトロフスキー、ゲ・イ（一八七八―一九五八）――ボリシェヴィキ、第四国会議員。一九一四年議員団の裁判でシベリアに流刑。十月革命後ロシア共和国内務人民委員などの要職を歴任。再三党中央委員。

ベーベル、アウグスト（一八四〇―一九一三）――ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。

ヘルツ、マックス（一八八九―一九三三）――ドイツの左翼共産主義者。無政府主義的傾向のために一九二〇年に共産党から除名された。一九二一年三月の武装闘争に参加し、終身懲役に処された。獄中で共産党に再入党し、一九二九年に釈放され、その後ソ連邦で活動した。

ヘンペル――コミンテルン第三回大会に出席したドイツ共産主義労働者党の代表のひとり。

ボガエフスキー、エム・ペ（一八八一―一九一八）――ドンの反革命的カザークの指導者。一九一七年六月以後カレーヂン将軍のドン軍アタマン（頭領）の補佐官。一九一八年四月に銃殺された。

ボルディガ、アマデーオ（一八九九生）――一九二一年にイタリア共産党の創立に参加した、一九二六年まで党指導諸機関のメンバー。左翼セクト主義者、コミンテルンの統一戦線戦術に反対し、一九三〇年に除名された。

ポルトゥゲイス、エス・イ（イヴァノーヴィチ、スト）――メンシェヴィキ、解党派、世界大戦中は社会排外主義者。十月革命後、国の南部でソヴェト権力とたたかい、ついで亡命して、反ソ中傷に従事した。

マイスキー、イ・エム（一八八四生）――メンシェヴィキ。一九一八年に反革命的シベリア政府の一員。メンシェヴィキと絶縁して、一九二一年に共産党に入党した。一九四三―一九四六年に外務人民委員代理。一九四六年以後はアカデミー会員。

マクドナルド、ジェームズ・ラムゼイ（一八六六―一九三七）――イギリスの政治家、労働党首、日和見主義者。第一次大戦の後期には帝国主義ブルジョアジーを公然と支持した。のち再三首相。

マクレイン、ジョン（一八七九―一九二三）――イギリス労働運動の著名な活動家。第一次大戦中、国際主義の立場をとった。一九一六年、社会党指導部員。晩年は政治活動から離れた。

マフノ、エヌ・イ（一八八四―一九三四）――ウクライナでソヴェト権力とたたかった反革命的な富農的無政府主義部隊の指揮者。一九二一年春に撃破され、外国に逃亡した。

マリング、ヘンリク（一八八三―一九四二）――オランダの社会民主主義者、ついでオランダ領ジャヴァおよびオランダ共産党員、一九二一―一九二三年にコミンテルン執行委員会極東・中国部議長。一九二七年に反対派に参加して脱党した。一九二九年にトロツキー主義的な「革命的社会党」を創立した。

マルクス、カール（一八一八―一八八三）

マルトフ、エリ（ツェーデルバウム、ユ・オ）（一八七三―一九二三）――メンシェヴィキの指導者。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキのグループを指導。十月革命後はソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命。

マルフレフスキー、ユリアン（一八六六―一九二五）――ポーランド＝リトアニア社会民主党の創立者、指導者のひとり。一九〇九年からドイツ社会民主党内で活動。第一次大戦中「スパルタクス団」の結成に参加。のちドイツ共産党中央委員。

ミリュコーフ、ペ・エヌ（一八五九―一九四三）――カデット党首、ロシア帝国主義ブルジョアジーの代弁者。二月革命後、第一次臨時政府の外相。十月革命後、外国の対ソ武力干渉の組織者。

ミリューチン、ヴェ・ペ（一八八四―一九三八）――はじめメンシェヴィキ、のちボリシェヴィキ。十月革命後、農業人民委員、一九一八―一九二一年に最高国民経済会議副議長。

モディリアーニ、ヴィットーリオ・エマヌエーレ（一八七二―一九四七）――古くからのイタリア社会党員、改良主義者。第一次大戦中は中央派、ツィンメルヴァルト左派に反対した。

モロトフ（スクリャービン）、ヴェ・エム（一八九〇生）――一九〇六年以来のボリシェヴィキ。第一〇回党大会で中央委員、大会後に中央委員会書記、一九二六年に党中央委員会政治局員、ついで幹部会員。一九三〇―一九四一年に人民委員会議議長。一九三九年に外務人民委員（のち外相）となった。一九五七年に分派活動の理由で要職を剝奪された。

ユデーニチ、エヌ・エヌ（一八六二―一九三三）――帝政軍の将軍。十月革命後、反革命的な「北西政府」の閣員、白衛派北西軍総司令官。一九一九年に赤軍に敗れて、エストニアに、ついでイギリスに亡命した。

ラデック、カール（一八八五―一九三九）――一九〇〇年代のはじめからガリチア、ポーランドおよびドイツの社会民主主義運動に参加。第一次大戦中、国際主義の立場をとったが、中央派への動揺を示した。一九一七年からボリシェヴィキ党員、コミンテルンで活動した。のち反党活動のために除名された。

ラピンスキー、ペ・エリ（一八七九―一九三七）――ポーランド

の共産主義者。一九二〇年にソ連邦外務人民委員部に勤務、一九三〇年以後科学活動と政論活動に従事した。

リープクネヒト、カール（一八七一―一九一九）――第一次大戦中、ドイツ国会で軍事予算に反対した唯一の議員。一九一五年にスパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに斃れた。

リャザーノフ（ゴリデンダッハ）、**デ・ベ**（一八七〇―一九三八）――メンシェヴィキ、第一次大戦中は中央派。一九一七年にボリシェヴィキ党に入党。ブレスト講和および労働組合論争のさいには反党的立場をとった。一九二一年以後、マルクス＝エンゲルス研究所長。一九三一年に反党活動のかどで除名された。

ルイコフ、ア・イ（一八八一―一九三九）――ボリシェヴィキ。反動期には解党派、召還派、トロツキー派にたいして妥協的立場をとった。十月革命後、内務人民委員、最高国民経済会議議長、労働国防会議議長、ソ連邦人民委員会議議長、党中央委員会政治局員を歴任したが、党のレーニン的政策に再三反対した。一九二八年に党内の右翼日和見主義的偏向の指導者、一九三七年に除名された。

ルクセンブルク、ローザ（一八七一―一九一九）――ポーランド生まれの婦人革命家、経済学者、ドイツ社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者、スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに斃れた。

ルズターク、ヤ・エ（一八八七―一九三六）――一九〇五年から革命運動に参加した。十月革命後、全ロシア労働組合中央評議会幹部会員、最高国民経済会議幹部会員。一九二〇年に党中央委員、運輸労働組合中央委員会議長。のち交通人民委員、その他を歴任した。

ルトヴィーノフ、ユ・ハ（一八八七―一九二四）――一九〇四年に入党。十月革命後、労働組合活動にしたがい、金属労働組合中央委員、全ロシア労働組合中央評議会幹部会員。労働組合論争では「労働者反対派」の積極分子。

レーヴィ、パウル（一八八三―一九三〇）――ドイツ社会民主党員、弁護士。ドイツ共産党創立大会で党中央委員。一九二一年に中央委員会を脱退、党規律違反のかどで除名された。のち社会民主党に復帰した。

レンナー、カール（一八七〇―一九五〇）――オーストリア社会民主党の修正主義の代表者。一九一九―一九二〇年に首相兼外相。一九三一―一九三三年に国民議会議長。第二次大戦後に大統領。

ロイ、マナベンドラ・ナト（一八九二―一九四八）――インドの政治家。一時共産党に加盟、一九二二年にコミンテルン執行委員候補、一九二四年に執行委員。のち脱党した。一九四〇年以後、急進民主主義的な人民党を主宰した。

ロイド・ジョージ、デーヴィッド（一八六三―一九四五）――イギリスの政治家、自由党首。一九一六―一九二二年に首相。十月革命後、対ソ武力干渉および封鎖の唱道者で組織者。

ロシコーフ、エヌ・ア（一八六八―一九二七）――歴史家、政論家。しばらくボリシェヴィキ。反動期には解党派の思想的指導者のひとり。十月革命に反対した。

ロゾフスキー、エヌ・ア（一八七八―一九五二）――一九〇一年に入党。二月革命後、労働組合中央評議会書記。一九二一―一九三七年にプロフィンテルン書記長。ついで外務人民委員（のち外相）代理。

ロンゲ、ジャン（一八七六―一九三八）――フランス社会党および第二インタナショナルの活動家、カール・マルクスの孫。第一次大戦中、中央派的＝平和主義的立場をとった。

レーニン10巻選集　(10)

1971年10月16日第1刷発行
1980年11月 6日第13刷発行

定価 1200円

訳　者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者　平　智　亨

発行所　株式会社　大　月　書　店

印刷 三晃印刷
製本 関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話 (813) 4651 振替東京 3-16387